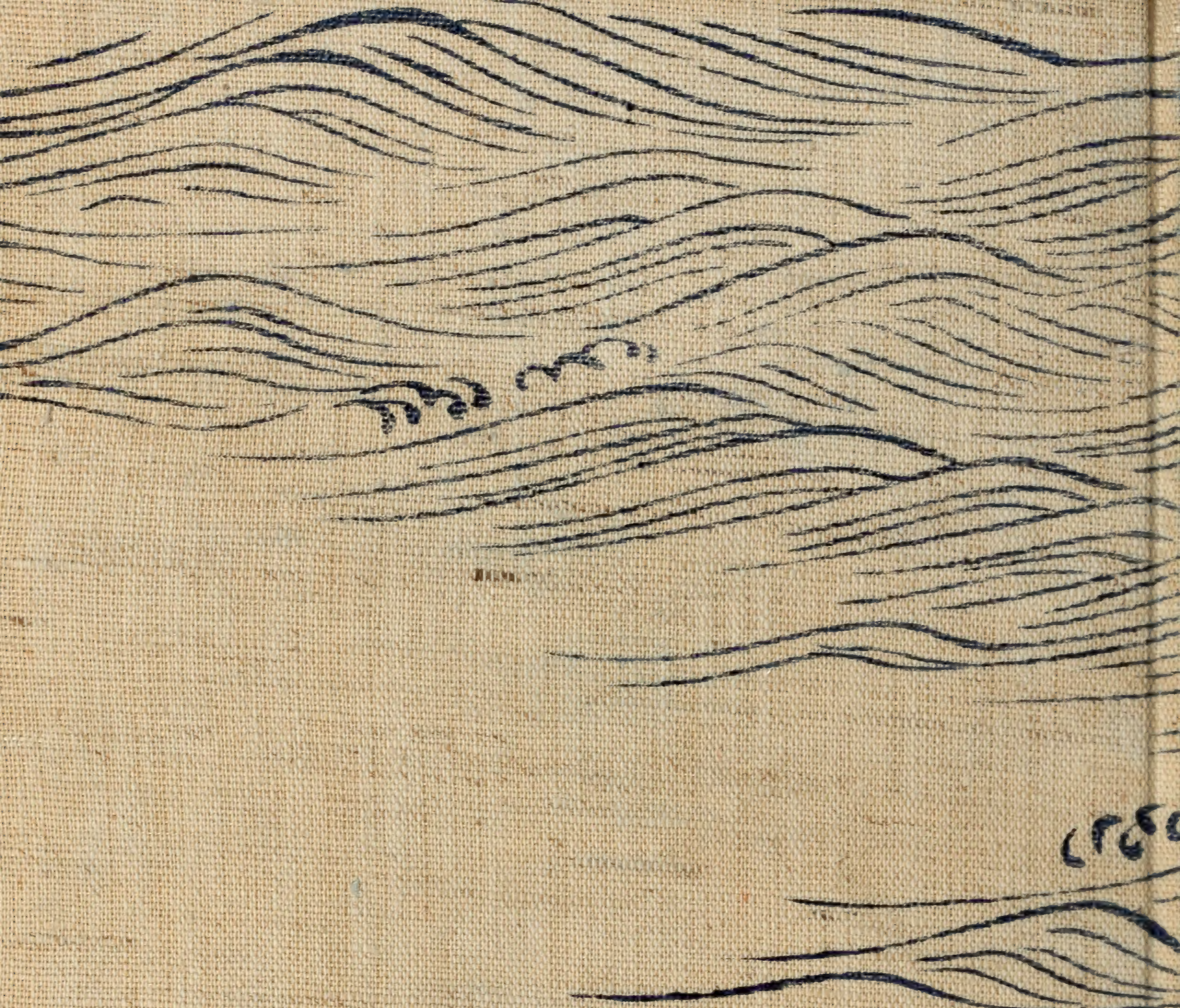
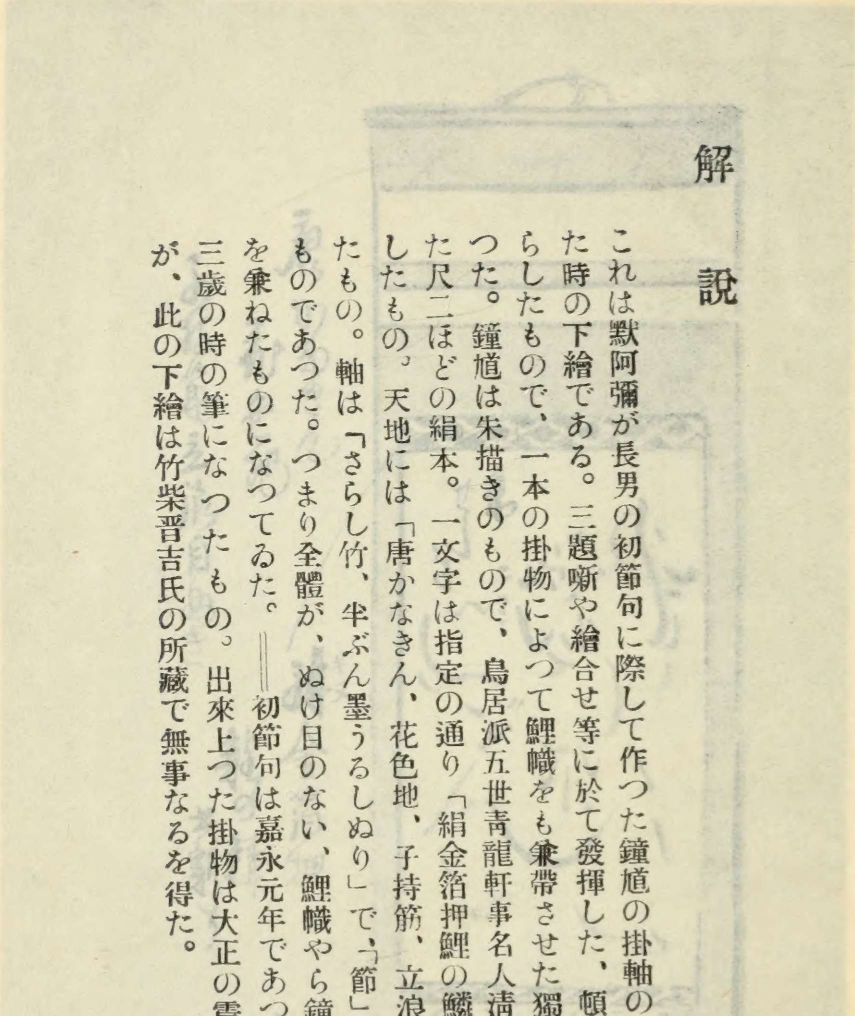


黙阿弥全集

第廿四卷



解説

これは默阿彌が長男の初節句に際して作つた鍾馗の掛軸の、表裝を誂へた時の下繪である。三題噺や繪合せ等に於て發揮した、頓才的趣向を凝らしたもので、一本の掛物によつて鯉幟をも兼帶させた獨特のものであつた。鍾馗は朱描きのもので、鳥居派五世青龍軒事名人清滿の筆になつた尺二ほどの絹本。一文字は指定の通り「絹金箔押鯉の鱗を書割り」にしたもの。天地には「唐かなきん、花色地、子持筋、立浪白ぬき」にしたもの。軸は「さらし竹、半ぶん墨うるしぬり」で「節」を端へ見せたものであつた。つまり全體が、ぬけ目のない、鯉幟やら鍾馗の置物などを兼ねたものになつてゐた。――初節句は嘉永元年であつたから、三十三歳の時の筆になつたもの。出來上つた掛物は大正の震火に燒亡したが、此の下繪は竹柴晋吉氏の所藏で無事なるを得た。



（峯 彭



尾 民 絹

〔郎十關世七〕 〔郎四

高橋お傳 (落合芳幾筆)







おでん (五世菊五郎)　吉太郎 (先代左團次)　輿兵衛 (中村宗十郎)　お絹 (岩井半四郎)　民尾 (九世團十郎)

河竹糸女補修
河竹繁俊校訂編纂

默阿彌全集

第廿四卷

東京 春陽堂刊行

默阿彌全集　第二十四卷目次

挿絵目次

御存の一番目　桃川如燕氏得意讀物

御存の百猫傳

御最員様も勝てといふ謎に下さる菊一文字母は殊更水垢離取り祈りし甲斐も情なや思はぬ負に一文字の二階ではかなくあの世の旅死出の山駕籠追駈けて婆娑の別れの果し合力士も名譽の柔術者伊場先生の仲裁に遺恨を流す牛ヶ淵其角力より妾同志角ぐむ蘆の中となり呪咀調伏の疑ひ受け花も散行くお卷が自殺哀れを悼む奥方へ讀む書置も伯父姪に涙に咽ぶ重左衛門手飼の猫も恩を知り部屋方お仲に乘移り恨みを返す復讐の噂も高き火の見番吾助に金故殺されしお道に與兵衛お光が愁傷袖に時雨の冬場所を兩大關が引くと聞き頼みに來る千右衛門師匠と友の義理合に死ぬと覺悟の土俵際歸參の使者に駈込み女房返事に困る喜三郎難儀を見兼て爲右衛門が誓ひを破つて出勤なし丸く納める鐘供養に鳶の喧嘩もはな〴〵敷譽れを残す金剛傳

調度夏季鳴見絞

右松瀧相撲浴衣

「有馬猫騒動」は明治十三年五月、猿若座に書きおろされた。作者六十五歳の時である。扉の語りの中にも明記されてゐる通り、桃川如燕が得意の讀物とした小野川雷電等の力士物語を含む猫騒動の講談「百猫傳」に據つた作である。『鏡山』を取り入れたやうな趣向もあるが、作中で最も好評であつたのは、お仲の猫の狂ひであつた。此の役は今の片岡仁左衞門（當時の片岡我當）の演じた所のもので、非常の喝采を博し、同優が東京に於て認められるに至つた當り藝と言はれてゐる。

書きおろしの時の役割は中村宗十郎（伊場甚三郎）、片岡我童（小野川喜三郎、高雄重左衞門）、片岡我當（召使お仲、淺間の太守筑後守、水木主水、高雄の忰宗三郎）、岩井半四郎（お卷）、坂東家橘（雷電爲右衞門）、市川新十郎（鷲ヶ濱音右衞門、牧野數馬）、片岡市藏（小野川母お淺、火の見番鳴澤吾助）、岩井紫若（淺間の奥方操）、岩井松之助（淺間の妾お志賀、金五郎後家お道）、坂東三津三（與兵衞女房おみつ、奥女中竹浦）、中村歌玉（一文字千右衞門）、中村銀之助（小野川弟子花菱音藏、奥女中岩浪）等であつた。

挿繪にしたのは稿下當時歌舞伎新報に載せられたもので、一つは鳥居清種一つは落合芳幾の筆である。

大正十五年十一月上旬　　校訂者




奉納
鈎鐘
雷電

有松染相撲浴衣（有馬猫騒動――七幕）

序幕

業平橋下屋敷の場
小梅村植木屋の場

〔役名――高雄重左衛門、淺間の太守、門番佐平治、蜆賣與吉、家主、米屋、八百屋與三郎。淺間の奥方操の前、植木屋の母、植木屋娘お卷、愛妾おしが、奥女中、百姓、近習、獅子舞等。〕

（淺間家物見下の場）――本舞臺三間の間屋根附きの物見窓、此の下石垣、上手冠木門潜り附き、前へ石橋を掛け裾通り一面溝際の地がすり、諸所へ土止めの捨石、下の方忍び返しのある黒塀、此上寄りに梅の梢見越しの松、日覆より同じく釣枝、總て淺間家下屋敷物見下の體。爰に○△□◎の獅子舞四人立掛り、上手に佐平治、袴着流し一本差し、門番にて立掛り居る、此の見得獅子の囃子にて幕明く。

四人　へい、お目出たうございます〱。（ト口々に禮をいふ、鳥追の合方になり、）

佐平　御苦勞々々、先達て七草の祝儀に參つた時より、今日はまた別段に面白いとて、お奥にても御機嫌に叶ひ、お取次ぎをいたして此の門番も鼻が高いといふものだ、いや御苦勞々々。

○　それは有難いことでございまする、此の御近所は私共の大事な廻り場でございますから、

□　外の獅子より凝りまして、太鼓打ちより笛吹きすり鉦、
△　みんな人を選びまして、腕ッこきばかり、すぐつて參りました。
◎　どうぞ相變らず御贔屓になすつて下さいまし。
○　さうして今日は、どなたかお客さまでござりますか。
佐平　今日はお上屋敷から奥樣が、早咲きの梅を御覽なされにお出でなさつたのだ、手前達もよい時に參り合せ、仕合せな事であつた。
□　それではお物見内は、女中衆ばかりでござりましたか。
佐平　奥樣とお妾さま、その外お附きの腰元衆、女ばかりで御見物だ。
△　初手からさうと知つたなら、もそつと當て込んで踊らうもの、惜しいことをした。
佐平　役者か力士なら知らぬこと、獅子舞に女が惚れるものか。
◎　さうおつしやいますが、こんなひよつとこにも思ひつく馬鹿があります。
佐平　手前達に惚れて見ろ、後が怖いわ。
四人　へえゝ、なぜでござります。
佐平　はて、しいゝ喰つた報いと言ふではないか。

○　もゝんじいぢやァあるめえし、はゝゝゝゝ。

□　いゝぶた言いふ間に早く廻つて、

△　また兩國の湊屋へ行き、

◎　熱燗で友喰ひとやらかさう。

四人　へい、有難うござりました。（ト獅子舞太鼓を叩き、上手へはひる。）

佐平　外道でもひよつとこでも面の入らねえ面をして、女中衆を當て込まうとは押の強い獅子舞だ。（ト雪おろしになり、雪降つて來る。）この二三日時ならぬ南が吹いたが、たうとう雪になつた、去年から暖かでさつぱり雪が降らなんだが、今夜はしつかり積りさうだ。どれ内職を片附けて、暮れぬうち風呂屋へ參るといたさう。

ト門の潛りへはひる、通り神樂鞠唄になり、花道より與吉納戸の鯉口、跣足にて蜆の荷をかつぎ、

與吉　蜆よウ〳〵。

ト呼びながら出て來る、跡より双紙を提げた手習歸りの子役二人一、二、竹の先きへ草鞋を引つかけ持ち出て花道にて、蜆の籠へ入れる。

おい、汚ねえからよしねえ。

一　手前が跣足だから、遣らうと思つて持つて來たのだ。
與吉　そんな汚ない草鞋が穿けるものか
二　生ぎゝな事を言はずと、籠へ入れて家へ持つて行きねえ。
與吉　入らねえからよしねえよ。蜆よウ〳〵。（ト舞臺へ來ろ、兩人からかひながら來て）
一　そんな大きな聲をしても、こんな小ほけな蜆は、誰も買やあしねえ。
與吉　おめえに買つてくれろと言やあしねえから、大きにお世話だ、蜆よウ〳〵。
二　いくらどなつても手前の蜆は、口を明いてみんな死つて居るから賣れるものか。
與吉　お前達が人のあげた凧を見て居るやうに、口なんぞ明いて居るものか、これは昨日取つた蜆だ、何でこれが惡いものか。
一　何だ、昨日取つた蜆だ、いつの昨日取つたのだ。
二　暮れに取つた蜆を、誰にか貰つて來たのだらう。
與吉　貰つて來て賣る奴があるものか、からかはずと早く家へ歸んねえ。
一　歸りたけりやあ一人で歸らあ。
二　手前こそ賣れねえから早く歸れ。

與吉　なに、賣れねえ事があるものか。
一　あがつた蜆が、
兩人　賣れるものか。（ト籠を蹴る。）
與吉　何をしやあがある。（ト突き飛ばす。）
兩人　この小僧め。
ト兩人して與吉を打ち、蜆の籠を引つくりかへす。與吉天秤棒を振上げるを、兩人して引つたくり又打つ、爰へ以前の佐平治、傘をさし手拭を持ち出來り、此體を見て兩人を留め、
佐平　こりや〳〵なぜ大きななりをして、小さな者をいぢめる、さつさと行かぬか。
一　をぢさん、おいらいぢめやあしねえよ。
二　そいつが二人にからかつたのだ。
佐平　噓をいへ、知つて居るぞ。
兩人　いえ、噓ぢやねえや。
佐平　えゝ口答へをすると屋敷へ留め置き、親を呼び引き渡すぞ。（ト是れにて兩人恐れて下手へはひる。）
一　こんな蜆を買ふ奴はねえから、

二　門番にでも遣つてしまへ。
佐平　何だと。
兩人　馬鹿やい。（ト與吉を突き倒し、逸散に花道へ逃げてはひる。）
佐平　うぬ悪戯餓鬼め、覺えて居ろ、忌々しい奴だ。（ト言ひながら與吉を介抱する、與吉こぼれた蜆を籠へ入れる。此内始終雪おろし。）可愛さうに、何處も怪我はせぬか。
與吉　をぢさん有難う、何處も怪我はしません。
佐平　そりやあよかつた。
與吉　をぢさん、蜆を買つてくんねえか。
佐平　さつき豆腐を買つたから今度買つて遣らう、何處から商ひに來るか知らぬが、大層雪が降つて來たから早く家へ歸るがいゝ。
與吉　歸りたくツても此蜆を、賣つてしまはなければ家へ歸られねえから、をぢさん少し買つてくんねえな。
佐平　はゝあ、外で遊んで居て、賣らずに歸ることがあるので、家で嚴しくすると見えるな。
與吉　なに、家で叱りやあしねえ。

佐平　それにまた、なぜ家へ歸られぬのだ。
與吉　此蜆を賣らなければ、おつかあにおまんまが喰はされねえ。
佐平　此蜆をみんな賣つた所が大した錢にもなるまいに、それを當てにするとはよく／＼困る事と見えるが、さうして手めえのお袋はどうしたのだ。
與吉　おつかあは眼を煩つて寐て居るから何にも出來やあしねえ、あんねえは女で商ひに出られず、それでおいらが蜆を賣つちやあお米を買つて、おまんまを喰はせるのだ、四文でも八文でもいゝから、をぢさん買つてくんねえな。
佐平　おれは今風呂へ行きがけだから蜆を買つても仕方ねえ、然しこんな小僧に商ひをさせるとは、可愛さうな事だな。
ト雪おろし、合方きつぱりとなり、門の潛りより一奥女中のこしらへにて傘をさし、下駄ばきにて出來り、
一　佐平治どの、其蜆賣をお庭へ通すやうにと、奥さまからの御意でござりますゆゑ、御門内へお通し下さりませ。
佐平　これは御苦勞さまでござります、扨はお物見からお目に留つたと見えまする。これ小僧、手めえ

は仕合せ者だ、奥さまのお召しだから、あなたと一緒にお庭へ參れ。
與吉　奥さまのお召しだつて蜆を喰やあしめえ、をばさん爰で買つてくんねえか。
一　その蜆はみんな買つて遣りますから、早う一緒に參りやいなう。
與吉　ぢやあをばさん、是れをみんな買つてくんなさるか。
一　おいなう。
與吉　そりやあ有難い、ぢやあ安く負けておかう。
佐平　これ失禮な事申さずと、あなたと一緒に行くがいゝ。
一　さあ、斯う來や。（ト案内する、與吉荷をかつぎ、）
與吉　しゞめよく。（ト大きく言ふ。）
佐平　これ、呼ぶには。（ト傘の雪を落すが道具替りの知せ、）　及ばぬわえ。
　ト一、先きに案内する。此の模様通り神樂、鞠唄にて、此の道具廻る。

（御殿庭先きの場）――本舞臺四間通し中足の二重、本緣附本庇、上手一間床の間、續いて三尺の違ひ棚地袋戸棚、正面銀襖、平舞臺上下屋根附の土塀、諸所に梅の立木、日覆より同じく釣枝、四ツ目垣

下草露よけのあしらひ、雪見燈籠蹲ひの手水鉢、總て淺間家御殿庭先きの體、此道具惣體学持、花道にも雪布を敷詰め、二重眞中、奥方操御前丸髷奥方のこしらへにて裀の上に住ひ、傍に蒔繪の脇息、鼻紙臺、菓子を盛りし高坏、下手におしが好みの鬘姿のこしらへ、二の奥女中その外四人腰元にて並びよく控へ居る。此の模様琴入りの合方、雪おろしにて道具留る。

奥方　早春とはいひながら、去年の暖氣に早咲きの梅の盛りと聞きしゆゑ、薫りを慕うて參りしに、思ひ設けぬ雪降りで、又一入の興をまし、よい樂みをしたわいなう。

しが　日頃御風雅な奥さまゆゑ、此お寒さもお厭ひなく、ならせられしもこのやうに、御意に叶うて私共もお嬉しう存じまする。

二　御上屋敷のお庭先きもお見事にはござりますれど、此のお下屋敷はお靜かゆゑ。

腰一　長閑な日には鶯が、梅が香慕ふ笹鳴きに、心春めくこのお庭、

腰二　今日はとり分け初雪に、花と見紛ふ樹々の枝、

腰三　かたい蕾も白雪の、積りて笑ふやうに見え、

腰四　ほんに見事なこの眺め、お供いたした私共も。お嬉しう、

五人　存じまする。（ト奥方思入あつて、）

奥方　思はぬ眺めに忘れしが、今物見下へ參りし子供、これへ呼べと申附けしに、いまだ連れて參らぬか。

しが　ほんに左樣でござります。それ、どなたぞ今一應。

二　畏りました。（ト立ちかける、此時下手にて、）

一　その子供は私が、只今それへ召連れますでござります。（ト合方きつぱりとなり、下手より以前の一、與吉をつれて出來り、二重下手へ控へ、）はツ、仰せ附けられました蜆賣を、召連れましてござります る。

奥方　おゝ大儀々々。（ト此内與吉平舞臺下手に立掛り居て、皆々を見渡し、美しいといふ思入あつて、）

與吉　やあ綺麗だなあ、こんなに大勢ゐやあみんな買はざあ足りめえ。おいをばさん、安く負けるから蜆をみんな買つてくんねえ。

一　あゝこれ奥さまの御前ゆゑ、そのやうな失禮な事を申しては濟まん。

二　只今言うて遣はせば、暫くそれに控へ居や。

與吉　たんと積らねえうち賣つてしまひたいから、をばさん買つてくんねえな。

ト一、二、默つて居ろといふ思入、此うち奥方與吉を見て、

奥方　いかに子供と言ひながら、此寒さにめげもせず、可愛らしいものぢやなあ。
しが　奥さまの御前も憚らず、買うてくれいとはしをらしい、ほんに子供といふものは、罪のないもの
　　でござりまする。
奥方　そんならあれが擔うたる器の中にあるは、蜆と申すものかや。
一　御意にござりまする、此業平橋の邊りにて多く取れまする蜆ゆゑ、業平蜆と申しまする。
二　あなた方には御存じなけれど、町方などでは好みまして、
腰一　此蜆をお汁の實にいたして用ひまするその時は、
腰二　寒中には寒さを凌ぎ、また暑中には暑さを避け、
腰三　價低き品なれど、餘程高味な貝ゆゑに、
腰四　かやうに雪の降る折には、よく下々で求めまする。
奥方　此の雪中を厭ひもせず、幼き身にて商ふとは、ても感心なものぢやなあ。
しが　未だ年端もゆかぬものに、商ひをさせますとは、不便な事にござりまする。
奥方　いづくの者か問うて見たし。用人を是れへ呼びや。
一二　畏りました。（ト此時奥にて、）

重左　あいやお出でに及ばぬ、只今それへ。

ト誂への合方になり、奥より高雄重左衛門少し更けたるこしらへ、上下大小にて出來り、よき所へ住ふ。

奥方　おゝ早速によく參つた、そちや次に居やつたか。

重左　思はざる此霽ゆゑ、御歸邸までに雨具の用意仕らんと、係りの者へ催促しましてお次まで參りし所、御召しの御意を承はり、取敢へず出ましたが、何か御用でござりまするか。

奥方　そちを呼んだは此者の。それ、言うて聞かしやいなう。（ト一へこなし、）

一　お召し遊ばしましたは斯樣でござりまする、只今お物見を蜆々と呼んで參りましたあの子供がお目に留り、可愛さうぢやと御意遊ばし、かれの身許をあなたから、尋ねて見よとのおつしやり附にござりまする。（ト此うち重左衛門與吉を見て、）

重左　これは奥さまには、異なものがお目に留りましてござりまする、何さま未だ幼きに蜆を擔ひ賣歩くは、定めし親は貧窮ならんが、感心な奴でござりまする。

しが　身裝も薄き其上に、素跣足で笠も冠らず、

奥方　いかにも不便な子供ぢやが、其方委しう尋ねて見や。

重左　委細畏つてござりまする」（ト此うち與吉伸をして、）

與吉　おいまだか、早く買つてくんねえか。（ト重左衞門前へ出て思入）

重左　おゝ只今求めて遣はすが、して其方はいづくのものなるぞ、いやさ、われが家はどこだ。

與吉　おれの家は此先きの小梅村だ。

重左　むゝ左樣か、して、兩親はあるかなきか。

與吉　漁師はあるかねえか、蜆ばかり賣つて居るから、おらあ知らねえ。

重左　分らぬ奴ぢや、親仁やお袋はあるかどうぢや」

與吉　今門のをぢさんにも話したが、ちやんは疾に死んでしまひ、それからおつかあが目が惡くなつて何にも出來ねえから、あんねえが藥を煎じたりおまんまを炊いたりおつかあの世話をするので、此頃は鼻緒を縫ふことも出來なくゝ、お錢がちつとも取れねえから、おれが毎日蜆を賣つて、それでおまんまを喰べるのだ、それだからおれが是れをみんな賣つて歸らねえとお米を買ふのに困るから、おいをばさん、蜆を買つてくんねえ。（ト此うち雪強く降つて來る）おゝ大變降つて來た、遲くなるとおつかあやあんねえが氣を揉むから、をばさんがいやなら、をぢさんお前早く買つてくれねえか、あゝ寒い〳〵。（ト顫えながら言ふ、皆々可愛さうにといふ思入あつて）

重左　むゝすりや先きに父が相果て、跡に殘る母なるものは眼病ゆゑに身動きならず、そちの姉が朝暮の世話をいたすゆゑ其日に困るを、其方が日々蜆を賣り歩きその價にて親子三人其日を送ると申すか。何と奥さま、世にはさま〴〵な者もあるものではござりませぬか。

奥方　親孝行は下々に多くあると申せしが、眼前見しは此の幼子、いかなる者の子か知らねど、聞くも哀れな今の話し、貴賤の隔てはあるとても親子の情は同じこと、定めて母は此者を不便に思ふであらうわいなう。

しが　せめて眼病でもござりませねば、姉とやらがとも〴〵に手助けにならうもの、僅かな價の蜆を賣り、それで三度を過すとは、嘸不自由な事でござりませう。

一　此子を見るに附けましても、親に甘へる御家來のお子供衆にはよいお手本。

二　見ぬ唐土の孝子にも、勝るも劣らぬ親孝心。

腰一　雪を厭はで掘り得たる、竹の子にはあらで蜆賣り。

腰三　賤しい其身も奥さまの、計らずお目に留るといふは、

腰三　天の惠みと孝行の徳と申すものでござりませう。

腰四　是れを思へば主親へ、忠孝盡さにやなりませぬ。（ト奥方思入あつて重左衛門に向ひ）

奥方　餘り不便なものゆゑ、目錄を取らせてたも。
重内　はゝ、結構なる思召し、委細畏つてござりまする。
奥方　そんなら其方、よきやうに。
重左　計らひまするでござりまする。（ト奥へはひる。與吉これを見て居て、）
與吉　やつと買つてくれると見える。おいをぢさん、買ふなら桶か擂鉢を持つて來てくんねえ。
一　あれ、又そのやうな事を。
奥方　あいや必ず叱らぬがよい、見るから正直さうな生れゆゑ、飾らぬ詞もまた一興。幸ひ是れをあの者に遣はしや。（ト前にある菓子を高坏のまゝ押し遣る。）
しがても有難い思召し。それ、早う是れを。（ト一へ渡す、同人受取つてこちらへ來り、）
一　これわが身は仕合せな事ぢや、奥さまより此やうな結構なものを下されまするぞ、有難く頂戴しや。（ト前へ出す、與吉見てびつくりなし、）
與吉　やあ、そりやお菓子かえ、おらあ玩具かと思つた。ぢやあをばさん、是れをみんなくれるのか。
一　そちに取らせいと御意遊ばすゆゑ、お禮を申し上げて喰べたがよい。
與吉　いゝや、こりや家へ歸つて、おつかあとあんねえに喰べさせて、それからおいらも喰べます。を

ばさん有難う、嬉しいなあ〳〵。（ト悦ぶ。）

奥方　取らせし菓子を持つて歸り母や姉へ先きに與へ、跡にて賞翫いたすとは下賤にしては見上げた心。

一　實に此子の孝心には、感心いたしまして、

皆々　ござりまする。

ト爰へ奥より重左衞門金包みをこしらへ、目錄を盆へのせ持ち出て奥方に見せる、奥方取らせいとい
ふ思入、重左衞門與吉に向ひ、

重左　こりや蜆賣、これへ參れ〳〵。

與吉　をぢさん、蜆をみんな買つてくれるのか。

重左　いや、是れは蜆の價ではないぞ、有難く頂戴いたせ。（ト與吉に遣る、取つて見て、）

與吉　こりやあ何だえ。

重左　それは其方の親孝心を御賞美遊ばし、奥さまより下し置かるゝお惠みなれば、少しも早く家へ歸り母に見せて悦ばせよ、返す〴〵も其方は、仕合せな者ぢやなう。

與吉　それぢやあ伯母さんは、おいらのおつかあを知つて居るのかえ。

重左　何のそちなどの母を御存じあらう筈はなけれど、手前が親孝行ぢやに依つて下さるのだ、お禮を

申して早く歸れ。

與吉　そんなら此お金を、あの伯母さんがくれたのか、大きに有難うございます。おつかアやあんねえが嘸悦ぶだらう、それぢや蜆は爰へ置いて行かう。(ト蜆をみんな庭へあける。)

重左　はて、それを置いて行くには及ばぬ。

與吉　でも只貰つては濟まないもの。

奥方　心が濟まぬと言やるなら、其儘置かして遣はしやいなう。

しが　それ、御門まで案内を。

一　畏りました。

與吉　をばさん、送つておくれ。

一　さあ一緒におぢや。

與吉　それは有難う。(ト奥方の前へ手を突き、)伯母さん、大きに有難う。(ト辭儀をして明き籠を擔ぎ、)蜆よウ〳〵、やア蜆はもうなかツたけ。

一　何を言やるぞいなう。

ト一先きに、與吉金包みと菓子箱を持ち、下手へはひる。皆々これを見送り、

奥方　此細な惠みを子心に、悦び勇み歸りしが、ても、感心な孝子ぢやなあ。
しが　嗚母親や姉とやらが、お目錄を見ましたら、悦ぶ事でござりませう。
二　よい、御功德を、
五八　遊ばしました。（ト重左衛門思入あつて、）
重左　顏形と申し後附きまで何處となく我が姉に、いや何處となく剽輕な小僧でござつた、はゝゝゝ。
（ト言ひ紛らし、不審の思入あつて、氣を替へ、）然し折角のお輿を大きに妨げました、いつそ是より
御座所を替へ、
しが　お茶屋へお越し遊ばして、積りし雪の築山より、田野の景色を、
二　御覽遊ばしませ。
奥方　久方振りにて琴など調べ、今日は終日樂しまうわいなう。
しが　左樣なれば、奥さまには、
重左　先づお越し、（ト上下の肩を引くが道具替りの知せ、）
皆々　遊ばされませう。（ト奥方立上る、皆々辭儀をなす。此の模樣六段の合方にて、此の道具廻る。）

（小梅村貧家の場）━━本舞臺三間世話屋體、上の方一間反故張り障子屋體、一間の押入、内に古びたる佛壇、正面反故張り障子、續いて破れたる鼠壁、一ッ竈に鍋をかけ、いつもの所藁屋根竹簀の門口小梅村植木屋金五郎と記せし古き表札、下手に雪の積りし杉の生垣、松の立木、ずつと下手破れたる下見の張物にて見切り、總て小梅村貧家の體。爰にお卷好みの鬘世話娘のなり、焚火鉢にて藥を煎じ△○の百姓二人煙草を喫んで居る。四ッ竹の合方、雪おろしにて道具留る。

お卷　今藥を煎じかけてお湯を冷しましたゆゑ、あげませぬが堪忍して下さんせ。

△　何の構はつしやるな、こなたの處では茶を煮ぬから、わしらの方で茶を進ぜますぞや。

お卷　また伯父さん達が、わしを欺さうと思うて。

○　いや、欺すのではないけれど、新井村の藥師さまへお參りに行つたから。（ト竹筒に入れし茶を出し）これをお袋にいたゞかしてくれ。

お卷　これは御親切に有難うござんす、嘸かゝさんが悦ぶことでござりませう。

△　そのお袋の眼病で二人の子供が困ると思ひ、斯うして村で世話をするも、親孝行なそちや與吉が可愛さうでならぬからだ。

お卷　この四五日は暖かいので逆せ上るせゐか鬱陶しがり、與吉もわたしも困りましたが、爰から近い

石置場の多田の薬師さまへ御願を掛け、毎日跣足參りをいたしました其の御利益で昨夜から、大きに痛みが去りましてござりまする。

○　それはよかつた、痛みが去ればお袋もちつとは樂になるだらう、先達てから催した此雪が降つてしまへば、病も追々よからうから、よく看病をしてやらつしやれ。

お卷　有難うござりまする。

△　眼には眞珠が一番の藥だといふ事だが、安い金では買はれぬ品と、東法寺さまがわしへの話し。

○　現在直る藥があつても、貧乏人では其眞珠を買ふ事が出來ぬから、信心するより外はない。

お卷　新井村までは行かれぬけれど、せめて少しは見えるやうにと、お茶を斷つて朝夕に家で拜んで居りまする。

△　如在もあるまいが、隨分大事にしてやらつしやれ。

○　ときに、たんと積らぬうち歸りませう。

お卷　まあよろしいではござりませぬか。

△　新井へ行つた歸りゆゑ、

○　また出直して話しに來ませう。

お卷　伯母さんに、よろしくいつて下され。

兩人　あい〳〵。（ト兩人相合傘にて下手へはひる、跡お卷思入あつて）

お卷　今の話しの眞珠とやらをかゝさんに飲ませたいが、與吉が少しの蜆を賣り、それで親子二人がやう〳〵暮す世帶ゆゑ、眞珠どころか買藥の僅かな代に追はれるので、家主や米屋さんのお借りさへも返されぬが、こりや竹町の伯父さんに、相談せねばならぬわいなあ。

ト思案のこなし、此時藥土瓶吹きこぼれるゆゑ、あわてゝ蓋を取りにかゝる。四ツ竹になり、花道より與三郎やつしなり、股引尻端折り下駄がけ、素人書きに八百與と記せし古き番傘をさし、大根を提げて出來り花道へ留り、

與三　以前は可なりな家中の娘も、兄貴が死んだ其跡は後家で子供を育てるので、貧すりや純子の腹合せ、帶も着物も賣つてしまひ、困る中で眼を煩ひ嘸じれつたい事であらう。どれ、尋ねて遣りませうか。（ト此内お卷藥をはかり、丁度よいといふ思入、與三郎舞臺へ來り）はい、御免なさい。

お卷　どなたでござります。

與三　姉さんは、どうだな。（ト門口を明ける。）

お卷　こりやあ竹町の伯父さん、よく此雪にお出でなさんしたなあ。

與三　よい大根があつたから暖まるやうに、ふろふきにでもしたらよからうと思つて持つて來た。
お卷　それは何より有難うござりまする、かゝさんが大好きでござんすから、聞かしたら悦びませう。
　　　トこちらへ片附ける、與三郎よき所へ住ひ、
與三　さうして、姉さんの眼はどうだな。
お卷　昨夜から少しは痛みが去りまして、今すや〳〵と寢て居ります。
與三　おゝさうか、何にしても長いので困つたものだ、與吉が見えぬが何處へ行つた。
お卷　雪の降らぬ間に蜆を賣りに出ましたが、此樣に降つて參りましたから、早く家へ歸ればよいに、いつもより歸りのおそいは、遊んでゞも居る事でござりませう。
與三　子供は雪でもめげぬから、大方道で遊んで居るに違ひない。何にしろ年も行かぬに商ひに行くは感心なものだ。（トお卷思入あつて、）
お卷　伯父さん、わたしやお前に少しお賴み申したい事がござります。
與三　大そう改まつて出たが、何をおれに賴みたいのだ。
お卷　外の事でもござりませぬが、お世話をなすつて下さりませぬか。
與三　なに、世話をしろ、ふむ、そりやあ何の世話を。（ト合方きつぱりとなり、）

お卷　御存じのことを繰返し申すやうではござりまするが、とゝさんが亡くなつてから引續いてかゝさんの長の眼病、せめて與吉がわたし位の年になつて居りましたら仲間の衆へお頼み申し、仕事は出來ずとも手傳ひをさせて貰うて、稗蒔や小鉢ぐらゐを御緣日に賣りに出せど、それも子供で出來ぬゆゑ、出入り先きは人に讓り四五本あつた楓も松も道具を添へて賣つてしまひ、今では今戶の鉢一ッ內にないので植木屋の、影も形も何處へやら、なけなしの着物も質に入れ、まだ其外に去年から諸方へお借りも出來て居れば、所詮蜆を賣つたくらゐで暮しの出來やう筈はなし、就いては母の眼病には眞珠を飮ませば忽ちに、治ると人にきゝますゆゑ、わたしの身をば吉原へ賣つてお金の才覺して、かゝさんの眼を直したうござりますから、どうぞ伯父さんわたしの身の世話をなされて下さりませ。（ト思入にていふ、與三郎感心の思入あつて、）

與三　春になつて諸式が上り、なか／＼與吉の商ひで親子三人暮らされぬは、そりやあ尤もの事だが、今そなたの居ぬ時にはお袋の世話の仕手があるまい、其身を賣つて高い眞珠を飮ませて遣りたいと思ふのは、親孝行な事ではあるが、どうも此世話はおれには出來ぬ、惡い事ばかりはあるまいから、運の來る時節を待つて、よくお袋の世話をして遣るがいゝ。

お卷　時節を待てと言はしやんしても、どうでも此身を賣りませねば、お家主を始め米屋薪屋、かゝさ

んに着せてある蒲團を買つた損料屋、此勘定をいたしませねば、爰に居る事はなりませぬ。

與三　成程着て居る蒲團に錢が出ちやあ苦しからう、おれが以前のやうなれば三人とも引取つてこんな苦勞はさせまいが、引續いての不仕合せに賣殘りの大根人參それを送るが精一杯、心に任せぬおれが身の上。

お卷　伯父さんとても有りあまるお家でもなければ、此上に世帶のお世話をお賴み申す譯にも行かねば、此身を賣るお世話をなされて下さりませ。

與三　それだと言つて現在の、伯父がおぬしを女郎にしては病人に對して濟まぬ譯だ、若し借金を催促に來たなら、おれが行つて言譯するから、そんな料簡は出さぬがよい。

お卷　長い間店賃をお家主へあげぬゆゑ、もう言譯はきゝますまい。

與三　たしか爰の家主は、因業だといふ事ゆゑ。

お卷　店を明けろと言ひませう。

與三　それは何より恐れるが、

お卷　よもや今日は此の雪ゆゑ、

與三　誰も催促に來やあしますまい。

ト雪おろし鞨唄になり、花道より家主ふけたる家主のこしらへ、米屋下駄がけ、相合傘にて出來り花道にて、

家主 米屋さん、お前はよつぽど貸し込んだのか。

米屋 なに、大した事はありませんが、大晦日に百も入れぬから、今日は居催促と出掛けました。

家主 とても金は出來まいから、今日は店を明けさせる積りだ。

米屋 明店になつては、居催促も無駄か知らぬ。

家主 何にしても、こなたの傘へ入れて行つて下さい。

米屋 家主が傘へ同居は、厳しい始末だ。(ト兩人舞臺へ來り門口を明け。)

家主 はい、御免なさい。(トお卷兩人を見て困る思入。)おゝ店請さん、丁度よい所へ來て居なすつた。

與三 これはお家主さま、まだ當年はお目に掛りませぬが、先づ明けましてお目出たうござります。

家主 あい〳〵。

お卷 お家主さんも米屋さんも、此雪にようお出でなされました。

家主 餘りようは來ませぬが、おまき貴樣は嘘をいふ女ぢやなう。大晦日に何と言つた、たとへの三十日と違ふからせめて半分でも入金したいが、明日までと賴むから一晩の事と我慢して元日一日待つ

て居れど、一日は夢見たやうな茫然した言譯に三ヶ日をぶん流し、六日年越しが來てもそれなりけり梨も礫も七草過ぎ、さあ松が取れゝば家賃は取らずには居ぬから、今日は是非とも納めなさい。

米屋　芝居でしても掛取りにはいつものがれぬ米屋、もう厄拂ひの催促の古びたことゝ言はれるから、今年は新規新米に何にも言はぬ其代り、二朱づゝ送つた米と挽割り、勘定しめて一兩二歩、西の海ぢやないけれど、さらりと拂つてくんなさい。

お卷　お二人さまにも段々と延び〳〵になりまして、濟まぬ事でござりますゆゑ、伯父ともとつくり相談して二三日の其内には、きつとお返し申しませうと、只今申譯に上がる所でござりました。

與三　御存じの通り稼ぎ人が死にまして不都合な所へ、このお袋が長の病氣で一枚づゝ賣喰ひにいたす程ゆゑ、つい延引になりましたが、今度はきつと私が御受合ひ申しますれば、もう少々御面倒を御覽なされて下さりませ。

家主　いや〳〵もう何と言はつしやつても、小僧が蜆を賣る位で、とても溜つた店賃を納めることは出來まいから、店を明けて貰ひませう。

米屋　家のない人に米代を貸してはおかれぬ、出來ずば今日は歸らぬから、さう思つてくんなさい。

ト大きく言ふ、上手屋體のうちにて、

お道　お巻〳〵。（ト呼ぶ、合方きつぱりとなり、お巻立つて上手の屋體を明ける、更けたる母親眼病のこしらへお巻に介抱されながら出來り、眞中へ住ひ、）今お家主さんや米屋さんのお聲に目が覺め承はれば、一々御尤もではございまするが、此通りの病人ゆゑ店を明けろとおつしやつても行き所もない親子三人、また命を繫ぐ米の代を上げませんでは濟みませぬが、今店受が申す通り二三日の內には相違なくお返し申せば、もう一度お待ちなされて下さりませ。

ト切なき思入にて言ふ、お巻介抱する。

家主　一年からも溜つた店賃、二三日は扨置いてもう一日も待てぬから、たつた今店を明けさつしやい行き所がないといつても其爲の店請人、幸ひ爰へ來て居れば直に引取つて行きなされ、屋財家財は貸の抵當に、此の家主が引取つて遣るから、有難いと思ふがいゝ。

米屋　さうさへすれば引取つた家財の內から米代も、幾らかわしも取れるから、いつまでぐづ〳〵して居るよりお家主さんの詞につき、たつた今店を明け、着のみ着の儘で出て行くがいゝ。

家主　それともお巻は年頃ゆゑ、女郎に賣つても才覺しようといふなら、店子にある判人を呼んで、今でも直に話してやらう。

お巻　その事もたつた今。

與三　あゝ、これ。

お巻　さあ、たつた今と言はしやんしては、どうも都合は出來ませねば。

米屋　出來るも出來ぬもいふには及ばぬ、今大家さまが世話をする判人と相談して、其身を賣つて借りを返すが上分別といふものだ。

お道　これを勤めに出しましては、私の世話の仕手がござりませぬ。

家主　そんなら直に店を明けて、店請人が引取んなさい。

與三　でも、只今卽答には。

米屋　それぢやあ勘定しなさるか。

三人　さあそれは。

家主　引取つて行きなさるか。

三人　さあ、

米屋　勘定するか。

家主　店を明けるか。

三人　さあ、
兩人　さあ、
皆々　さあ〳〵。
家主　どつちともたつた今。
米屋　返事をしなさい。（トきつといふ、爰へ下手より以前の與吉荷を擔ぎ歸り來て、直に内へはひり、）
與吉　おつかァ歸つたよ。（ト此内三人當惑の思入あつて、）
お道　與吉今戻つたか。
與吉　あい。これは大家さんも米屋さんもようお出でなされました。（ト言へども默つて居る、）おつかァが借りを返されねえから、怒つて居るのだな、伯父さんお出でなさい。
與三　この大雪に、よう精を出すなう。
お卷　今日はいつもより遲いではないか。
與吉　遲いかはりにおつかァやあんねえに、悅ばせる事がある。
お道　なに、悅ばせることがあるとは、
お卷　どういふ事ぢや。

家主　金でも拾つたのか。
米屋
與吉　なあに、拾つたのぢやねえが、今日おいらが業平橋のお屋敷へ呼込まれて、お金とこんな綺麗なお菓子を貰つて來た。（ト以前の目錄と包みし菓子を見せる、お道探り見て、）
お道　業平橋のお屋敷は、淺間樣のお下屋敷であらうの。
與吉　何でも綺麗な着物を着た女が大勢居たよ。（ト與三郎目錄の上書を見て、）
與三　淺間奥としてあるが、さつき家の前を淺間樣の奥さまがお通りなされたが、それではお下屋敷へいらつしやつたのだらう。
お卷　今し方隣りの家でお物見に女中衆が大勢おいでなさると、噂をして居ましたわいなあ。
お道　お庭の梅がよいといふ話しを聞きましたから、
與三　梅見にでもお出でなされたのだらう。
家主　何にしろ、此の小僧が金を貰つて來たとは耳より。
米屋　幾ら貰つたか知らぬが、それを入金にこつちへ寄越せ。
與吉　極りで慾張つた伯父さんだ。
家主　貸したものを取るに、何で慾張つたことがあるものか、こんなに店賃を貸して置く、よい家主が

お道　あげぬとは申しませぬが有難い賜、せめて一日神棚へ供へて置きたうござりますれば、明日まで待つて下さりませ。
米屋　因業だと思ふか知らぬが、貸して置いたはこつちの情だ。さあお袋、その金を寄越しなさい。あるものか。
家主　いや〳〵一寸も待たれぬから、寄越さずば店を明けて店請人に於て引取れ。
與三　成程、因業な大家だ。
家主　どうしたと。
與三　いえなに、成程印形は大家さんの店請狀へ押しました。
家主　知れたことさ。（ト是れにてお道包みを開き探り見て）
お道　左樣ならお二人さんへ、少々宛入金をいたしておきませう。（ト此内兩人のぞき見て）
米屋　何だ其紙包みの中に、金子五兩と書いてあれば、少々と言はないで一兩二分そつくり拂ひなさい
家主　五兩あるなら店賃も、溜めておかずと二兩二分、去年の分だ寄越すがいゝ。
お道　それでも是れを四兩出しては、薪屋さんと損料屋へ、上げます金がござりませぬ。
家主　あいつらは因業ゆゑ、もつと引つ掛けて置くがいゝ。

お巻　それではどうも濟みませぬ。
米屋　ある時に取りに來た、是れが所謂生業冥利だ。
與三　それではせめて半金宛も、
家主　いや五兩の金を見たからは、二兩二分そつくり取らねば置かぬぞ。
米屋　一兩二分みんな拂へば、明日から又米を送つて遣るから。
家主　きれいに爰で、
兩人　濟ましなさい。（ト是れにて是非なく）
お道　左樣なら、どうも是非はござりませぬ、お持ちなされて下さりませ。
ト四兩出す、兩人受取るを見て、
與吉　たうとうあんなに取つてしまつた。
家主　先づ是れで去年までの滯りは濟んだ、今に請取りを遣りませう。
米屋　拂ひが濟んだら外で買はずに、又さういつて來るがいゝ。（ト門口に出る。）
與三　現金な人達だ、
家主　現金に取たても、

米屋　置買ひになる米と店賃、

家主　相合傘で歸ると仕よう。

兩人　はい、左樣なら。（ト雪おろし合方にて、兩人花道へはひる。後に皆々思入あつて、）

お卷　お借り申しては濟まぬけれど、あんまり邪險ではござりませぬか。

お道　いや／＼思ひがけない五兩ゆゑ、ないと思へば返した方が、樂になるので一安心。

與三　因業言つて取り立てる人もあるのに、五兩といふ金をお惠み下さるとは。

お卷　ほんに淚のこぼれるほど、

お道　有難うてならぬわいなう。（ト菓子と一兩を頂き思入あつて、）これ與吉、どうして是れをお貰ひ申して來やつた。

お卷　譯を話して、

兩人　聞かしやいなう。（ト替つた合方になり、）

與吉　お屋敷の門の伯父さんに買つてくれろと言つて居ると、伯母さんが來て庭へ連れて行き、家の事を聞いたから、おつかあとあんねえの話しをしたら親孝行だと言つて、綺麗な伯母さんが其お金とお菓子をくれたから、蜆をみんな置いて來たよ。

與三　綺麗な伯母さんといふのは、奥様の事だらう、思ひがけないお惠み受けたも、親孝行を天道さまが感應なしての此の仕合せ。

お道　その淺間様の奥さまは、此はゝが若い折、お抱守りをした姫さまに違ひない。

與三　それでは、こなたが産れた屋敷の松江様か。

お道　時折り二人の子供等へ話して聞かした事もあれど、若氣の至りの心得違ひで、勘當うけて町家の住ひ、終には斯ういふ身になつたも親に背いたみんな罰、後悔なして朝夕に、お詫びをいたすそれゆゑか、與吉が思はぬお惠み受け今日の難儀をのがれたは、不孝な親に孝行な是れも子供の皆お蔭。奥さま、此の御恩は、死んでも忘れはいたしませぬ、えゝ有難うござりまする。

　　ト件の菓子と金を頂き、屋敷の方を拜む心にて辭儀をする。

お巻　捨つる神あれば助ける神と、日頃親子が信心する觀音様や藥師様の、皆御利益でござりませう。

與三　何でも貧乏人は信心が肝腎だから、よく神佛を拜むがいゝ、その佛で思ひ出したが、死んだ兄貴の話しに聞いたが、お前の弟は淺間の屋敷に立派に勤めてござるさうだが、其後便りはしなさらぬか。

お道　弟はお上のお覺えよく高雄重左衛門というて御用人を勤めて居ますが、親に背きしわたしゆゑ何

で便りをしませうぞ。

與三　現在眞身のこなたゆゑ、年限立てばお屋敷へ出入りぐらゐはさせたとて、よさゝうなものだが、情合のない人ではないか。

お道　そりやあ眞身の姉ぢやもの、不義さへせねば弟も見て居ることではあるまいに。物堅い氣性ゆゑお上へ對して濟まぬというて、度々詫びをしたけれど聞き屆けてくれぬゆゑ、今は他人も同じ事當てにしては濟みませぬ。

與三　成程侍は、義理の堅いものだなあ。（ト此内お卷は藥土瓶をあたゝめ思入あつて、）

お卷　お屋敷といへば、今日の難儀をのがれたお禮に、餘所ながらお物見下で奥樣へ、お禮を申して參りませう。

與三　成程それも尤もだが、生憎今日のこの大雪。

與吉　あんねえ、おいらが行つて來ようか。

お卷　お前はわたしが行つて來る間に、煎じてある此藥を、かゝさんに上げておくれ。

與吉　あい〳〵。

與三　雪も厭はず餘所ながら、禮に行くとは感心なことだ。

お卷　毎日多田の藥師さまへ、目のお願ひにお參り申せば、通り道ゆゑお物見へお禮をいうて藥師さまへお參り申して參りませう。(ト裾を端折り、絲立を引つ掛ける。)

お道　わしの此日が惡いので、餘計な苦勞をさすわいなう。

お卷　あゝこれ、かゝさん、其やうな事言はしやんせずと、さつき貰うた新井村の藥師さまのお茶湯で度々洗うたがようござんす。

與吉　あんねえ是れか。(ト以前の竹筒を出す。)

お卷　それをかゝさんに上げておくれ。

與三　そんならお卷御苦勞ながら。

お道　怪我せぬやうに、早く行つて。

お卷　直ぐ戻つて來るわいなあ。

ト是れを合方雪おろしになり、お卷菅笠を冠り早足に花道へはひる。是れを與三郎見送り、

與三　こんなに雪の降る日には、世間の娘は双六か歌がるたでも取つて遊んで居やうに、春になつても暮の姿でみつともないとも思はず、跣足參りをするといふは、珍らしい娘だなあ。

お道　もうあれも年頃ゆゑ、餘所の娘が髮を結へば嘸結ひたからうと思ひますが、そんな素振りも出さ

ぬだけ、猶々不便でなりませぬわいなう。（ト言ひながら件の菓子を出し）與吉が貰うて來た此の菓子、一つ上らぬか。

與三　こりやあ見事だ、われ〳〵風情の喰べられぬ結構なお菓子だから、一つ貰つて土産にしませう。

ト一つ取つて紙に包み、袂へ入れる。

與吉　此の大根は伯父さんのか。

與三　それはお袋に持つて來たのだ。

お道　いつも〳〵、お氣の毒でござります。

與三　何前菜物は有合せゆゑ、禮をいふには及びませぬ。どれ、わしもお暇してまた明日尋ねませう。

ト煙管をしまひ、

お道　思ひがけない取込みで、お構ひ申しもいたしませぬ。

與三　何の他人ではあるまいし。

與吉　伯父さん歸るのか、大變に降つて來たぜ。

與三　是れぢやあ明日も荷がなからう。（ト門口へ出掛ける。）

お道　どうぞお内へ、よう言うて下され。

與三　あい〳〵、それぢや姉さん、冷えぬやうにしなさい。

ト雪おろしにて與三郎花道へはひる、與吉こちらへ來り、

與吉　おつかア、寒いからあすこへ行つて寢ないか。

お道　お卷がお禮に行つて居るに、寢ては濟まぬが、雪の寒さをこらへたせるか、どうも肩が張つてならぬ。

與吉　それぢやおいらが叩いて上げよう。

お道　それでは二ツ三ツ叩いて貰ひませう。（ト此內藥土瓶を見て、）

與吉　おつかア藥が出來て居るが、其お菓子を口直しに、今のうち飮まないか。

お道　ほんに人の來たので、まだ藥を飮まなんだ、爰へ持つて來てくりや。

與吉　あい〳〵。（ト藥茶碗へくんで盆に乘せ、）まだあついよ。（トお袋の前へ出す。）

お道　どれ〳〵、（ト茶碗を下へ置くを道具替りの知せ、）さましませう。

ト與吉お袋の肩を叩く、此の模樣、雪おろし四ツ竹にて、此道具廻る。

（前の門前の場）＝本舞臺眞中物見下の書割、上の方業平橋の袂を出し、傍に柳の立木、日覆より同じく釣枝、橋の正面川岸の遠見、下手晝心に冠木門、總て以前の道具を橫に見たる雪持ちの誂へ、平

舞臺へ雪布を敷き、よき所へ捨石を据ゑ、雪おろし床の迭りにて道具留る。と床の淨瑠璃になり、

〽降りしきる雪に向ふも見えわかぬ、母の眼やみを助けんと、藥師參りの徒跣足、かゝる孝子はまた一人、ありやなしやと業平の橋の袂へ兩袖の、雪打ち拂ひ歩み來て。

ト此内上手より以前のお卷橋の上へ出來り、物見を伸び上り見ようとして雪風に吹かれる思入、トゞ雪を拂ひながら、こちらへ來て四邊へ思入あつて、

お卷　晝間といへど此雪に人通りのないお物見下、爰からせめて奥さまへ今日のお禮をさうぢや〳〵。

〽稀な往來と雪の中、お卷は厭はず座を占めて。

ト　お卷笠を取り、雪の中へ手を突き物見へ向ひ、

奥さまへ申し上げます、親子のものを不便に思召してお惠み下され、其お蔭にて思はずも今日の難儀をのがれました、お禮は申し盡されねど、是れから申し上げまする。

〽物見に向ひ伏拜めば、凍る惣身は冷えこゞえ、顫え居るとも白壁の門番雪掻き携へ出で。

ト　お卷物見へ向ひ手を合せ雪に凍え居る、爰へ滑りより以前の佐五平、雪かきを持ち出來り、

佐平　あゝ寒い〳〵、奥さまのお流れを頂戴した勢ひに、せめて御門の前だけなりと、溝へ掻き落して置かう。

ヽ冠りし手拭も半染の、片側かゝんと孝女に目を附け、

ト佐五平手拭を冠り、雪を搔かうとしてお卷を見咎め、

こりや〱、そこに何をして居るのだ、雪に凍えて歩けぬとでもいふのか。

お卷　いえ、左樣ではござりませぬ。

佐平　なに、左樣でない。（トよく〱見て、）身なりは惡いがいゝ女だ、門番だから關兵衞氣取りで聞いて遣らう。ついぞ見馴れぬ女だが、此淺間の門外へはいつの間に何處から來た。

お卷　私は最前お菓子とお金をお貰ひ申しました、蜆賣りの姉でござりまする。

佐平　おゝさうか、其また姉が何しに來た。

お卷　お金の手詰に親子の者が路頭に迷ふを弟が、お貰ひ申しました金子にて、助かりました其お禮にお物見まで私が上りましてござりまする。

ヽ寒さ怺へて話すうち、重左衞門は聞き耳立て。

ト此以前潛りより以前の重左衞門長合羽傘をさし足駄にて出かゝり、此體を聞きこちらへ來り、

重左　スリヤ、先刻參りし小梅村の、蜆賣が姉なるとか。

ト佐五平重左衞門を見てびつくりなし、頰冠りを取り手拭を落す。

佐平　何時の間にお出でなされましたか、心附きませんで失禮をいたしました。してあなたはどちらへお出でなされまする。

重左　奥樣の御用にて、兩國邊まで參らうと、只今出門せし所ぢや。

佐平　左樣でござりましたか。さあ〳〵娘、いつまでも爰に居ては惡いから、早く家へ歸るがいゝ。

お卷　はい〳〵。（ト下手へ行く、重左衞門思入あつて、）

重左　こりや、待て〳〵。

お卷　はい。（ト下に居る。）

重左　只今承はれば、父は先年相果てしと申したが左樣か。

お卷　三年跡になくなりまして、今ではみちと申す母と二人、かすかに暮して居りまする。

〽尋ぬる尾に附き物語れば、高雄は猶も摺寄つて、（ト重左衞門若しやといふ思入あつて、）

重左　すりや、そちが母はみちと申すか。

お卷　はい、先程弟がお貰ひ申しました、お菓子を母は押し頂き、昔の御恩を思ひ出し、淚に暮れて居りました。

重左　ふむ、昔の恩と言やるのは、何ぞ仔細のあることか、包まず身共に言うて聞かせよ。

お卷　何をお隱し申しませう、私の母は元淺間さまの御家中にて、高雄市之進さまの實の娘でございまする。（ト是れを聞き重左衞門びつくりなし、）

重左　扨は高雄市之進が、母は娘でありしか。

佐平　それではもしや、あなた樣の。

重左　あゝこりや、それなる娘が素性の話し憚る事もあらうから、其方は門內へはひれ。

佐平　はい、それでは爰だけ雪をはいて參りませう。

重左　跡でよいから、早く參れ。

佐平　へい〳〵、畏りました。

〽跡へ心を搔きかけの雪を殘して入る影を見送る高雄重左衞門、四邊見廻しまゆひそめ。

ト佐平次跡へ心の殘る思入にて潜りへはひろ、重左衞門落ちゝる手拭にて雪を拂ひ、腰をかけ思入あつて、

重左　只今聞けばそちが母は、高雄の娘と申したが、如何なる譯で小梅村に逼塞いたし居ることか、最早憚る者はない、是れにて詳しく話して聞かせよ。

〽いとも優しき言の葉に、お卷は嬉しく手を支へ。（トお卷思入あつて、）

お卷　御親切のお尋ねゆゑ、身の素性を旦那さま、お聞きなされて下さりませ。（ト床の合方になり、）母の若い其折は御隱居さまのお附にて、お下屋敷に居ります時分、今日これへ入らせられました奥樣はまだお姫さまにて、お抱き守りをいたしましたと申すこと、其頃のお出入りにて植木屋金五郎と申す者と母は不義をいたしまして、終に親の勘當受け、其後金五郎の妻となり、儲けましたは私と蜆賣りに參りました弟與吉、常々其身の恥を隱さず女子は親の教をば守らねばならぬもの、此母などは教へを背き不義をせしゆゑ此の難儀。

〽夫に別れ杖もなく、目病に今は親の罰。

どうぞそなたはおとなしう人樣に褒められるやう、身を全うしてくれと、後悔いたして度々異見、今日も今日とて家主や米屋が嚴しい催促に、店を明けねばならぬかと泣きの涙の其所へお惠み下さる金子にて危ふい難儀を助かりましたが、どつと寢て居る眼病の母に此身や弟が一荷の蜆を賣りましたとて、どうまあ今日が過されませう、今の貧苦も身の銹と悔まぬ日とてはござりませぬ。

〽涙ながらに長々と、聞く重左衞門は目をしばたゝき。

ト此うちお卷思入にていふ、重左衞門も思入あつて、

重左　いかに薄命なればとて、高雄市之進が娘ともいはれし身にて餘りの零落、悔むは近頃愚なれども

其身を全うなされたら、今此悲しみはあるまいに、心柄とは言ひながら勘當受けて家出なし、かゝすかに暮す其内に順道なれど夫に別れ、其身は重きいたつきに二人の子供を養ひ兼ね、其日に迫るは無理ならねど、饑を凌ぐ飯米の價も送らず剩へ家主に店を明け渡せと言はれるやうになられしとは、今日までも知らざりしが、疾くにも聞かば現在、いやさ、現在身内が聞かれたら、其悲しみは如何ばかり、他人の身共が聞いてすら、思はず落涙いたせしぞ。

〽明けて言はねど塞がる胸、張裂く思ひぞ道理なる、それと知らねば泣く目を拭ひ。

ト重左衞門愁ひのこなし、お卷思入あつて、

お卷　今お話し申した母の長の眼病も眞珠とやらを用ふれば、直ると申す事ゆゑに、この身を賣つてと存じまして、父の弟伯父さまに相談いたしましたが、私が居らぬ其時は母の世話をするものがなく、それゆゑ直る藥はあれど求める事もなりませず、悲しい中にも私が多田の藥師さまへお願ひ申し、跣足參りをいたしました、其の御利益で昨夜から、少しは痛みが去りましたが、所詮眞珠を飲ませずば直るまいかと存じまして、心細うてなりませぬ。

ト此せりふのうち、重左衞門思入あつて、懷中より十兩紙に包み、

重左　そちが孝心厚きゆゑ、此の金子をば遣はすから、眞珠を求めて母親にどうか飲まして、いやさ、

飲まして早く全快させよ。（ト出す、お巻受取り押し頂き、）

お巻　どなたさまかは存じませぬが、御親切なる此のお恵み有難う存じまする。さうして、あなた様のお名前は。

重左　さあ其の名前は。（ト詰る思入。）

お巻　母に申して悦ばせたうござりまする、仰せなされて下さりませ。

〽両手を雪につく／＼と、顔打ち守れば重左衛門、様子見せじと身を背け。

トお巻手をつき、重左衛門を見上げる。重左衛門脇を向き、

重左　名を申すには及ばぬから、同藩の者ぢやと申せ。

お巻　さうおつしやる面差が、どうやら母によう似ておいでなされますが、もしやあなたは伯父さまの、重左衛門さまではござりませぬか。

重左　いや／＼、身共は其重左衛門ではない、必ず粗相申すまいぞ。

お巻　そんならどうぞ、あなたのお名前を。

重左　さあ、それは。

お巻　おつしやりませぬは、伯父さまか。

重左　さあ。
お巻　お名乘りなされて下さりませ。
〽すがり歎けば尤と、思ふ心を押し鎭め。
トお卷重左衞門にすがる、重左衞門も思入あつて氣を替へ、
重左　伯父ではなけれど其方親子が、身の薄命を不便に思ひ、同家中の誼にて金子を惠み遣はせしぞ。
お巻　最前からの御樣子といひ、どうも伯父さまと思はれまする。
重左　はて、以前の誼に思はずも斯く落涙に及びしが、伯父でなければ疑念を晴らし、たんと雪の積らぬうち早く宅へ歸るがよい。
お巻　左樣なれば、此の金子を、お貰ひ申して參りまする。
重左　今門番に申す通り、身は奧樣の御用もあれば。
お巻　お名殘り惜しくも此儘に。
重左　歸つて母に眞珠を與へよ。
お巻　有難う存じまする。
〽是非もなく〳〵立ち上れば、若しやほんの伯父樣かと見返り〳〵行き惱む、心あはれと喰

しばり、血筋の涙恩愛の、別れ兼ねたる其の折柄、淺間が太守筑後守、僅かな供も忍ぶ身の、面を笠に隱れ簑。

ト雪おろし烈しく、お卷身支度をなし下手へ行き、伯父に逢ひたいといふ思入、重左衞門これが姉の娘かと愁ひのこなし、双方よろしくあつて、トヾお卷跡へ戻り重左衞門に縋り、重左衞門傘をさしかけ別れを惜しむ、知らせなしに道具半廻りになり、前に續きし屋敷の塀、内より雪持の樹木を見せ、文句の切れ目誂への合方にて花道より淺間の太守、半纒股引大小鷹匠の出立ち、塗笠、菅笠、草鞋、同じこしらへと見える四人の近習、跡より又一人一本差し、赤合羽饅頭笠、瓢を提げ供をなし、總て忍びの雪見のこしらへにて出來り、花道に留り思入あつて、

太守　常は格別此雪に人跡絶えし業平橋、左右の岸へ吹き上げる風に柳の絲竹は、誰が家なるか、音もさえて、おも白妙の銀世界。

近一　向ふに見ゆるは御下屋敷、樹木も多き其中に一際目立つ花の兄。

二　梅の魁、われ後れじと打笑みて、

三　今日のお供に思はずも、

四　寒さ忘れて須田村を、跡に宮戸の川續き、

供　筑波おろしに吹きさらされ、縮みあがると思つたに瓢のお供が取持ちで、顔も身體も赤合羽、

太守　天も美祿の肴にと、降り積む雪のこの景色。はて、風情ある、

皆々　眺めぢやなあ。

ト右の合方にて四邊を眺めながら舞臺へ來る、此時道具元へ戻ると、重左衞門太守を見てびつくりなし、足駄を脱ぎ土下座をなし、

重左　思ひがけなき我君にと、此雪中を厭はせたまはず、輕々しくもお徒歩にて、お越し遊ばせしは恐れながら、心得ませぬ儀にござりまする。

太守　其不審は尤もぢやが、心配いたす儀ではない、今日思はぬ大雪に隅田の景色を一覧したく、俄に思ひ立つたゆゑ、僅な近習を召連れて、忍びの歩行に心の儘、よき慰みをいたせしぞ。

重左　左樣にござりましたか、拙者はまた何事やらんと、心痛いたし居りましたが、そはよき御保養を遊ばしました。（ト四人に向ひ、）各方にも忍びのお供、殊更雪中御苦勞に存じまする。

一　その御挨拶痛み入る。我々どもゝ我君諸共、

二　土手傳ひに三圍、牛島、

三　秋葉、白鬚、梅若塚、

四　關屋、庵崎、待乳の風景、

吾助　殘る方なく御遊覽にて、此の吾助まで今日は、よき正月をいたしまして、

一　我々鬱氣を、

四人　散じてござる。

重左　何さまそれはお羨しい事でござる、それに附けて折よくも、今日奥樣にも早咲の梅を御見物に入らせられし所、俄の雪にて御茶屋にて、田野に積る雪景色を御覽遊ばしてござりまする。

〽申し上ぐれば打笑みたまひ。（ト太守悦ばしき思入にて、）

太守　それは幸ひの事であつた、然らば予もそれへ參つて一覽なさん。

重左　さぞ御途中お寒ういらせられましたでござりませう、御殿へ御入り遊ばしまして、御休息遊ばしませ。

太守　おゝ、左樣いたさう。

一　お供方は跡よりして、

二　是れへ參る事なれば、

三　夕陽まで御ゆるりと、

四　おくつろぎ遊ばしませ。

太守　さあ、皆も參れ。

〽笠取りのけて菅笠の、破れし姿に目を附けたまひ。

ト此うちお巻下手に潜み居る、太守立ちかゝり是れを見て、

こりや重左衛門、あの者は何ぢや。

〽重左衛門とのお詞に、扨は伯父かと思はずも見上ぐる顔は笑み含む、春告草の風情なり。

トお巻重左衛門と聞いて、扨は伯父かと嬉しき思入にて、顔を上げる、太守思はずお巻の顔を見て、

よき女だといふ思入、供の吾助も見て、

吾助　是れは頗るの女だが、裝と器量は雲泥萬里、はて美しいものだなあ。

トぢつと見惚れる、重左衛門思入あつて、

重左　あの者は當所小梅村に居りまする、孝女にござりまする。

太守　して、あの者を孝女とは。

重左　母なる者は眼病にて打臥し居るを全癒させんと、多田の藥師へ日參いたし、此の雪中も厭はず跣足參りをいたしまする。

太守　それは近頃不便なことぢや。こりや乙女、これへ進め〳〵。
お巻　恐れ多うございまする。
太守　苦しうない、是れへ参れ。
一　我君のお許しなれば、
二　遠慮いたさず、
四人　これへ進め。
お巻　はツ。
　　〽はツと答へも口の内、歯の根もあはず顫へ出で。（トお巻恐る〳〵前へ出る、太守思入あつて、）
太守　して、小梅村にて其方は、何者の娘なるぞ。
お巻　はツ。（ト言ひ兼ねるを、）
三　御尋ねなれば身の素性、
四　直き〳〵御前へ、
四人　申し上げい。
お巻　はツ、父は元植木屋にございましたが、三年跡に相果てまして、只今にては母と私、年端も行か

ぬ弟が僅かな稼ぎをいたしまして、細き煙りを立てます者にござります。

太守　はて、不便な者ぢやなう。（ト お卷に見惚れる思入。）

お卷　勿體ない其仰せ、有難う存じまする。

太守　かゝる孝女を埋れ木にいたして置くは不便千萬。これ重左衞門、當人さへ承知なれば、奧へ申して召抱へ遣はせ。

重左　はッ、そりや此者をお召し遊ばすとな。

太守　重左衞門、其方よきに計らひ遣はせ。

重左　はッ。（ト 重左衞門迷惑の思入、供の吾助お卷へ氣のある思入にて氣を替へ、）

吾助　左樣なら御前樣には此の娘を、お屋敷へお召抱へ遊ばしまするとか、惜しいものだな。

四人　なに、惜しいものとは。

吾助　いえなに、斯うして置くは惜しいものでござりまする。

〽長居させじと降出す、雪を此の場のしほとなし。（ト 雪颪烈しくなり、重左衞門思入あつて、）

重左　こりや其方は、きつう降らぬうち、お暇申して早う參れ。

お卷　はい、左樣なれば御殿樣、御機嫌よろしう。

太守　おゝ、やがて重左衞門より、申し入るゝぞ。

お卷　有難う存じまする。

〽一禮述べて絲立と笠を小脇に甲斐々々しく、藥師をさして。

ト此うち重左衞門は、重左衞門と言はれる度にぎつくり思入あつて、お卷に早く行けといふ思入、お卷みな〳〵へ會釋なし、逸散に花道へはひる。是れを太守見送る、吾助もお卷に見惚れ、うか〳〵と跡を附いて行くゆゑ、太守目障りになる思入あつて、

太守　こりや、目障りな、退いて居れ。（トきつといふ、吾助心附き、）

吾助　はツ。（ト是非なく控へる、雪おろし本釣鐘、太守花道を見送り、ぢつとなる。）

重左　我君々々。（ト大きく言ふ。）

太守　おゝ。（ト心附き重左衞門傘を開く、双方見合せ木の頭、）感心な者ぢやなう。

ト向ふへ思入、重左衞門、太守へ傘をさしかける。吾助も向ふへこなし。皆々立ちかゝる、此の模樣雪おろし、本釣鐘の送りにてよろしく、

ひやうし　幕

二幕目

淺間家奥庭花見の場
卅間堀小野川内の場

〔役名 ―― 小野川喜三郎、水木主水、淺間の太守、雷電弟子雷獣小吉、雷電爲右衞門、小野川弟子花菱。部屋方お仲、お淺、奥女中岩浪、同小濱、同朝霧、同霧島、淺間の奥方操、愛妾お巻、同おしが、奥女中二人、腰元三人等。〕

（奥庭花見の場）―― 本舞臺上手へ寄せて三間中足の二重、本緣附大和葺の庇、正面上の方一間の床の間、此下地袋違ひ棚、此次銀地の襖、軒口へ櫻餅と記せし行燈をかけ、二重の下手畫心に櫻の盛りを見たる奥庭の遠見、ずつと下の方に葭簀張りの出茶屋、軒口へ木の芽でんがくと記せし掛行燈、諸所に櫻の立木、日覆より同じく釣枝、舞臺前上下に山吹の盛りを見せ、總て淺間屋敷の奥庭を向島の土手に見立てし模樣よろしく、爰に諸士四人、町人體のこしらへにて床几へ腰を掛け、酒樽の口より茶碗へ酒をつぎ、酒盛りをして居る、下手茶屋の内に奥女中呉竹、赤前垂れ襷をかけて手拭を冠り、土の長火鉢にて田樂を燒いて居る、此の見得流行唄にて幕明く。

一　いやなに各々、御庭内の泉水を隅田川の流れと見て、浪の音のあしらひなどは、行届いたもので

ござる。

二　左様々々又御庭内の離れの亭を、長命寺の櫻餅と見せたる趣向は、とんと山本の座敷のやうでござる。

三　いや其上奥女中呉竹どのが、女川の下女のこしらへになり、田樂の木の芽燒は恐れ入つたる思ひ附き。

四　幸ひ是れには酒ばかり、肴とてもござらぬゆゑ、おでんを一箱燒いて貰ひ、賞翫いたして見たうござる。

呉竹　お誂へさへござりますれば、幾箱でも幾上げまする。

一　それは千萬忝けない、先づ兎も角も試みに、一箱燒いて貰ひたい。

呉竹　畏りましてござりまする。

二　何は格別、今日は奥お表と打交り、遠慮入らずの無禮講、

三　相なるべくは美くしい、お妾さまでも是れへござつて、

四　酒の相手でもしてくれたら、我々どもの喜見城、

一　たぼのお酌が、

四人　ほしいものぢやて。（ト呉竹向ふを見て、）

呉竹　噂をすれば影とやら、あれ〳〵向ふへお妾の、おしがさまが女中を連れ、是れへお出でなされまする。」

一　何さま是れへ、

四人　見えるわ〳〵。

ト流行唄きつばりとなり、花道よりおしが、愛妾好みのこしらへ、雪踏にて日傘をさし、是れへ奥女中岩浪、小濱、朝霧、霧島の四人雪踏ばき日傘をさし、花見の心にて出來り、花道に留り、

しが　咲き揃ふお庭の花を居ながらに、隅田の眺めを見渡せば、上野飛鳥も及びなき八重九重の花盛り、

岩浪　ほんに木の芽の田樂は、其御趣向もよし簀茶屋、

小濱　梅のお茶屋も忽ちに、三日見ぬ間の櫻餅、

朝霧　長命寺とは四ツ目屋に、どうやら縁も在原の、

霧島　男戀しに目移りは、かのもこのもの都鳥、

しが　ても風情ある此の眺め、

岩浪　先づ〳〵あれへ、

四人　お越し遊ばしませ。
しが　そんなら皆さん。
四人　おしがさま。
しが　さあ、参りませう。
　　　ト右の唄にて皆々舞臺へ來る、此内諸士四人は田樂にて酒盛りなしてゐる、吳竹前へ出て、
吳竹　これは皆さんお揃ひで、よういらつしやいましてござります。
しが　吳竹さまには今日のお役目、御苦勞に存じまする。
岩浪　先づ〳〵これへ、
四人　掛けませうわいなあ。（ト皆々床几へ掛ける、諸士四人おしがに見とれるこなしあつて、）
一　いやなにおしがさま、今日は無禮講にて、男女打交りの儀でござれば、
二　幸ひこれに持合す、御酒を一獻差上げたし、
三　是れぞ所謂花の中の、思ひざしと申すものゆゑ、
四　御迷惑でもござらうが、是非ともお過し下されませ。
しが　これは〳〵何れもさま、折角の思召しゆゑ頂きたうはござりまするが、御酒は一向不調法ゆゑ、

　　其儀は御免下さりませ。

岩浪　その名代にわたしらが、

小濱　大きな物で何杯でも、

朝霧　重ねて頂戴いたしまして、

霧島　誰でもはぢはかゝせませぬ。

一　いや、こなた衆ならこつちから、願ひ下げにいたさうわい。

岩浪　いえ／＼さうはなりますまい、是非ともお相手、

四人　いたしませう。

二　どうして／＼高い酒を、化物のやうなこなた衆に、たゞ飲ましてたまるものか。

小濱　ても憎らしい、その惡口、

朝霧　斯う言ひ出したら腕づくでも、

霧島　飲まねば蟲が承知しませぬ。

三　それは面倒、逃げるといたさう。

四人　いえ／＼、めつたに逃がしませぬ。

四　さて〳〵うるさい、放さつしやい。
　　ト奥女中四人留めるを振切り、諸士四人酒樽を持つて上手へ逃げてはひる。
岩浪　ても憎らしい、
四人　人達ぢやわいなあ。（ト床几へかける。）
呉竹　おしがさまには今日は、お先供でござりまするか。
しが　さあお供には當りませねど、奥様へお願ひ申し、今日の御趣向を拜見に參りました。
呉竹　すりや、お供ではござりませぬか。
岩浪　それと申すも先達て、我君様のお目に留り、小梅村から御當家へ上つた奴が幅をするゆゑ、
小濱　聞けばあの子は下賤の産れ、その日に困る植木屋の惣領娘と申すこと、
朝霧　しかも早春我君様が、葛飾村のお下屋敷へ梅見にお出で遊ばした時、
霧島　お目に留つてお邸へ、お呼出しになりし上、夜毎日毎の御寵愛、
岩浪　お首尾のよいを笠に着て、
小濱　我君様へ讒言なし、
朝霧　あなたの小股をすくはうとは、

霧島　憎い奴ではござりませぬか。（ト是れにておしがも妬ましきこなしあつて氣を替へ、）

しが　さあそれも此身が不束ゆゑと、わが身で我が身を恨むより、外に仕儀はござりませぬが、悔しいなどゝは思ひませぬ。（トよろしく思入。）

呉竹　どれ、わたくしは今のうち、お豆腐を取つて參りませう。

ト岡持を提げ下手へはひる。跡皆々四邊へ思入あつて、

岩浪　いやもウしおしがさま、あなたの方では悔しくないと、おあきらめなされますれど、めつたに油斷はなりませぬ。

小濱　その譯と申しまするは、あの新參のお卷めが我君樣をそゝのかし、始終はおのれが奧方にならうといふ惡企み。

朝霧　それゆゑあなたや奧方さまの、あること無いこと我君樣へ、讒言をしてお首尾を損ね、

霧島　自滅をさせる心とは、疾から知つた私共、餘り齒痒く存じまするゆゑあなたへお知らせ、

四人　申しまする。

しが　さあ悋氣は女子の愼みゆゑ、決して色には出しませぬが、お情うけし我君樣を、新參者に寢取られるを快いとは思ひませぬ。

岩浪 それゆゑどうぞお巻めを、
小濱 しくじらせたう、
四人 ござりまする。
しが あゝこれ、壁に耳ある世の譬、めつたな事は言はれませぬ。（ト此時東西の揚幕にて、）
呼び お入り。
しが お二方様のお入りとあれば、
岩浪 一統お出迎ひ、
皆々 いたしませう。

ト是れより出の鳴物になり、花道より太守、剃立鬘、羽織袴一本差し、殿のこしらへにて出ろ、跡より小野川好みの鬘羽織着流し、一本差しにて太守の刀を持ちて附添ひ、其跡より花菱の角力、着流し一本差しにて出ろ、是れへ諸士四人附いて出ろ、是れと一時に東の揚幕より操の奥方襠なりにて先に立ち、跡よりお巻愛妾襠なりにて附添ひ、其跡より〇の奥女中、腰元三人同じ腰元のなりにて出來り、双方花道へ留ろ、是れにて舞臺眞中におしが、左右に奥女中下に居て、双方を出迎へ、

しが 我君さまを始めとして、奥方さまにはお早いお入り、

岩浪　一統お出迎ひ、
皆々　いたしてござりまする。
太守　春は皆花にや心通ふらんと、古歌に詠ぜし言の葉も、實に理や我ながら心うつろふ花の中、
奥方　盛りまばゆき櫻木の梢を見てはわらはまで、興に入るさの日を惜しみ歸るさ忘るゝ花のもと、
小野　その夜櫻の篝火に、お池へうつる築山を隅田の流れになぞらへば、右と左りに富士筑波、
お巻　並ぶも顏へ緋櫻の文珠さくらや普賢像、その花びらも八重一重、
花菱　けふ九重の都にも勝る雲井の緋櫻は、御武運開く花天井、
○　見上ぐる空も宵月に、梢を漏るゝ薄ざくら、
一　夜目にもそれと白綾に、錦織りなす絲櫻、
△　霞む朧に鐘の音を、算へて歎つ姥ざくら、
二　老木も若く粧うて、小町櫻のうるはしく、
□　うせぬ色香に墨染の、さくらも時を違へぬは、
三　悟り兼ねたる遲櫻、
◎　淺黄櫻も水色に、

唄　張り落つる瀧さくら
太守　はて、面白き、
皆々　眺めぢやなあ。（ト双方よろしくこなし、）
しが　何は格別お座敷へ、
岩浪　先づ／＼お通り、
舞臺
皆々　遊ばしませう。
　ト有鳴物にて双方舞臺へ來り、太守奥方は二重へ上りよろしく仕ふ、お卷おしがへ會釋して下に居るゆゑ、奥方思入あつて、
奥方　我君樣のお氣に入り、二人とも是れへ來やいなう。
お卷　でも古參なるおしがどのへ。
太守　はて、兩人共に是れへ參れ。
しが　いえ、私はお供の外ゆゑ。
奥方　いえ、わらはの傍へ來やいなう。
お卷　左樣なればおしがさま。

しが　先づ〳〵おさきへあなたから。

お卷　失禮御免下さりませ。

トお卷は太守の傍、おしがは奥方の傍へ住ふ、上手の床几へ諸士四人掛け、下手の床几へ女中八人並びよくかける、小野川花菱前へ出て、

小野　殿樣へ申し上げます、花曇りにて今朝程は餘ほど雨氣を催しましたが、思ひの外なる快晴と相成り、

花菱　御當家樣の御威勢の如く、此頃になきよい日和、

小野　恐悅申し、

兩人　上げまする。

太守　予もそれゆゑに祝着いたす、また今日は無禮講ゆゑ、上下を論ぜず遠慮なく、酒宴の興を添へるがよいぞ。（ト奥方前へ出て、）

奥方　恐れながら御前さま、ちとお願ひがござりまする。

太守　なに、改めて願ひとは。（ト誂への合方になり、）

奥方　餘の儀ではござりませぬが、ついぞ是れまで私は相撲の勝負と申すものを見ました事はござりま

せねば、幸ひこれへお召寄せの小野川花菱の兩人へ、相撲の勝負を仰せ付けられ、女子たりとも遠慮なく見物が出來ますするやうお願ひ申しまする」

太守 それはいとより易きこと、只今二人へ申し附けん。（ト花菱是れを聞きびつくりせしこなしにて）

花菱 あいや殿樣のお詞も待たずいたして、差出でまするは恐入つたる事ながら、どうして〳〵小野川關と、此の花菱が立合へませう。弟子は師匠の半分にも至り兼ねると世の諺、其の儀は御免下さりませ。

太守 いや〳〵假令弟子と師匠の段違ひはあらうとも、座興を添ゆるなぐさみに見物いたす取組ゆゑ、辭退いたさず勝負いたせ。

奧方 師匠へ對し假染にも、立向つては濟まぬとは。

お卷 恩を讐にて返すこゝろ。

しがても感心なものぢやなあ。（ト皆々よろしく思入）

太守 然らば小野川、そちばかりで一人土俵を踏んで見せい。

小野 委細承知いたしました、それなら花菱太刀持ちしやれ。

吳竹 小野川關の土俵入りは

岩浪　話に聞いて居ましたが、
△　見物いたすは今日が初めて。
小濱　こりやよい見物で、
女中八人　ござります。
○　然らば兩人、
近習四人　支度をしやれ。
小野　さらば御覽に入れませうか。

ト是れより下座の櫓太鼓になり、小野川羽織を脫ぎ刀を花菱に渡す、同人刀持の思入にて附添ひ出る小野川は舞臺眞中にて四股を踏み、上俵入りの型をして見せる事よろしくあつて、

奥方　ても土俵入りと申すものは、凜々しいものでござります。
まあ、こんなものでござりまする。
太守　本行なれば素肌にて、化粧廻しは橫綱にて行司が立合ひ、それは〳〵餘程凜々しいものである。
お卷　とてもの事に取組の、模樣を見たうござりますれば、
しが　花菱どのとどなたでも、お立合ひをなされまして、

呉竹　模様をお見せ、
女中　下さりませ。
花菱　いやもう師匠と取るのは禁物なれど、御家來衆の其うちで、どなたぞお相手におなりなされば、
　決して否やとは申しませぬ。
太守　然らばわれと思はんものは、それへ出て取つて見やれ。
近一　我君の御諚なれど、劍術柔術と事替り、
二　相撲の術はわれ〳〵共、一向不得手の事なれば、
三　取組みましても拍子抜け、投げられまするは必定ゆゑ、
四　此儀ばかりは只管に、御容赦願ひ、
四人　上げまする。
岩浪　皆さん方がおいやなら、
小濱　奥さまよりの仰せゆゑ、
朝霧　私共四人にて、
霧島　相手が仕度うございます。

花菱　いやこなた衆は女ゆゑ、相撲の相手にはなりませぬ。
太守　それぞ却て興ある取組、常と替つて今日は無禮講の事なれば、男女たりとも遠慮はない、はや
　はや支度してよからう、
岩浪　左樣なれば御免を蒙り、
小濱　支度にかゝるで、
四人　ござりませう。
花菱　とはいへ、女中を相手には。
小野　はて折角の御所望ゆゑ、辭退は恐れ支度をしやれ。
花菱　さて〳〵これは迷惑だ。
太守　勝負を見ながら一獻汲まん、酒肴をこれへ持つて參れ。
腰元
四人　畏つてござりまする。
　　ト女形四人奧へはひる。奧女中四人、襷鉢卷をして、霧島前へ出て、
霧島　一番弱手のわたしから、試みに掛らうわいなあ。
花菱　たれかれなしに、掛つた〳〵。

ト眞中へ出る、霧島四股を踏み、小野川の眞似なして、よいしよと花菱へ組附き、兩人ちよつと立廻る、是れより櫓太鼓になり、霧島可笑味の立廻りあつて花菱見事に投げる、朝霧前へ出て、

朝霧　所をわしが。

岩浪　今度は一緒に、

ト取附くをよろしく立廻つて投げられる、是れにて岩浪、小濱顏見合せ兩人一度に出て、

小濱　二人がゝりで。

ト左右より組附く。花菱これを相手によろしく立廻つて、トヾ見事に投げる、此内奥より腰元四人酒肴を運び、皆々酒盛りよろしくあつて、

一　流石は師匠の小野川が、

二　秘藏にいたす弟子だけあつて、

三　年に似合はぬ功者な取り口、

四　誠に感心、

四人　いたしてござる。

奥方　わらはも初めて見物いたし、

お卷　此頃にないよい慰み、

しが　面白いことで、

女　皆々　ござりました。

太守　こりや花菱、近う參れ。

花菱　はッ。（ト二重の緣先へ出る。）

太守　褒美の杯遣はすぞ。

花菱　有難く頂戴いたしまする。（トおしが酌なして花菱は杯を戴いて飲む、奥女中四人體の痛むこなし。）

岩浪　角力にしては尋常に、

小濱　花菱どのゆゑ侮つて、

朝霧　おくれを取るとは忌々しい。

霧島　いたいお世話になりました。

奥方　そのお杯は小野川へもお遣し遊ばしませ。

太守　いや、喜三郎へは杯の外に、讓り遣はしたき物がある。

奥方　して其品と申しまするは。

太守　これなるしがを小野川の、妻に譲つて遣はしたい。
小野　えゝ。（トびつくりこなし、合方きつぱりとなり。）
しが
太守　先頃よりして樣子を見るに、是れなるしがは小野川に思ひを焦す樣子ゆゑ、添はして遣りたき予が情、幸ひなるかな喜三郎未だ無妻と聞き及べば、媒介なして遣はす、兩人とも受けいたせ。
ト是れにておしがはツと差しうつ向き居る、小野川思入あつて、
小野　いやもう無骨者なる私へ御寵愛のお妾さまを、女房にお譲り下さりますとは身に餘つたる其仰せ直にもお受けをいたしたいが、角力を止めますそれまでは、女房は持たぬと母親に誓つた詞もござりますれば、此儀ばかりはお殿樣、どうもお受けがいたされませぬ。
太守　むゝ、すりや承引がいたされぬとか。
一　いや流石は小野川喜三郎、力士は斯くこそ有りたきものぢや。
二　女房を持てば力が拔け、必ず出世の障りになれば、
三　年寄株になるまでは、持たずに居るが其身の爲、
四　若し御不川のお妾さまなれば、我々四人の其うちへ、
一　おすべり頂戴、

四人　いたしたし。

太守　いやそち達には遣はされぬ、しがは常々喜三郎へ心を通はす樣子ゆゑ、媒介なさんと存ぜしが、承引せねばそれまでぢや、予も仲立は止めにいたす。（ト此内おしが思入あつて氣を替へ）

しが　誰が左樣なよしなき事を申し觸らしてござりますか、我君樣のお情を蒙りまする身をもつて、何ゆゑ餘人を慕ひませう、是れもやつぱり朋輩の。（トお卷へこなしあつて）大方嫉みでござりませう。

ト此時ばた／＼になり、下手より指金の猫逃げて出る、跡より縫ひぐるみの犬追ひかけ出て來る、猫は二重へかけ上り、肴の入りし皿の中へ飛び込む。女形皆々びつくりして飛びのく。此うち花菱件の犬を下手へ追ひ散らす、猫はその足にて太守の肩へかけ上るゆゑ、太守振拂つて猫を押へ附ける、奥女中四人この體を見て、

岩浪　やゝ、こりや我君の御紋附を、

小濱　肴のつゆに汚れし足にて、

朝霧　踏み荒したる憎き猫、

霧島　こりや此儘にはなりますまい。

太守　それ喜三郎、打ち殺せ。（ト二重より下へ投り出す。）

小野　はッ。（ト立掛る、猫は舞臺にうづくまり居る、お巻この體を見て思入あつて、）

お巻　あゝもし小野川どの、先づお待ち下さりませ。

小野　御前樣の仰せ附を、何ゆゑお止めなされまするか。

お巻　お止め申すは其猫が、餘り不便と存じますゆゑ。

小野　何と言はるゝ。（ト合方きつぱりとなり。）

お巻　我君樣の御紋服を汚しましたは、重ね／＼の不調法ではござりますれど、見境のなき畜生の悲しさゆゑに犬に追はれ、酒宴のお席も憚りなく、踏み荒したる粗相の罪、畜生ながらあの樣に惡い事をいたせしと、逃げもいたさずひれ伏して、お詫びをいたす有樣は不便の至りにござりますゆゑ、命をお助け下されますやう、お慈悲をお願ひ申上げまする。

ト思入にて言ふ、太守ちつとこなし、奥方も思入あつて、

奥方　成程巻が言やる通り、さも哀れげに身を潛め頭を垂れて居りまするは、口は利かねど我君樣へお詫びをいたす樣子ゆゑ、何卒お慈悲を持ちまして、命をお助け遊ばすやう。

吳竹　私共もとも／＼に、

△　お願ひ、

腰元　申上げまする。（ト辭儀をなす。太守思入あつて、）
太守　助け憎い奴なれど、卷を始め女共が、命乞をいたすとれば、猫めが罪は許し遣はす。
お卷　すりや、お聞き濟み下さりますとな。
○　一統有難く、
腰元　存じまする。
小野　それといふもお卷の方が、取做しゆゑに助かるのだ、命冥加な畜生だわえ。
ト是れにて猫は二重へ上り、お卷の傍へ行き禮をいふこなし、お卷其儘猫の頭を撫で、
お卷　それ、御前樣や奧さまへ、お禮を申上げるがよい。（ト頭を下げさせ、又こちらへ向ひ、）皆樣、有難う存じまする。（ト腰元皆々へ禮をさせ、）お禮が濟めば此後とも、必ず粗相をいたすまいぞ。
ト放して遣る、猫は二重の下手へはひる。
岩浪　何と皆さん、お聞き遊ばしましたか、只一言のお聲がゝりで、猫の命が助かりますとは、御意に入りは違つたもの。
小濱　此御樣子では何事も、お覺えのよいお卷さまの、願ひはお叶へなされませうから。
朝霧　跡方もない濡衣を、言ひ掛けられても誠となり、

しが　あゝもし其やうな事をおつしやると、當り障りが出來ますゆゑ、ちとおたしなみなされませ。

二階四人　それでもあんまり。（ト言ふたを冠せて、）

しが　御前で詞が過ぎまするぞ。（ト態ときつといふ。）

四人　はあゝい。（ト餘儀なく控へる。）

花菱　善惡ともに物の命を、助けまするはお慈悲の御沙汰、必ず惡しくは報いますまい。

一　然し猫めを小野川が、捻り殺した其上では、

二　我々共が死骸を引取り、

三　おしやます鍋でもいたさうと、

四　樂しみ居つたに惜しいことだ。

太守　いや惜しいと申せば昨年の、上覽相撲に小野川は大力無双の谷風と、立合ひの折勝負を殘し、分けとなりて別れしは、今において惜しい事ぢや。

小野　それと申すも谷風が、此小野川を立てる氣で勝負を殘してくれた樣子、なか〳〵以て谷風には遠く及ばぬ　私ゆゑ、勝たうなどゝは思ひませぬ。

太守　いや谷風には及ばずとも、今度の場所には雷電を、投げて貰はにや相ならぬ。

小野　そりや、何故でござりまする。（ト合方替つて、）

太守　そちもかねて存ぜし如く、昨年の春深川の富が岡境内にて、相撲興行ありし折、我が抱へたる陣幕を彼れが得手たる閂にて手強く締めて腕を折り、それゆゑ後の物議をかもし再び土俵を踏むことならず、あたら盛りの力士ながら相撲を引きしは遺憾の至り、此の鬱憤を晴らすのは其方ならで外になし、何卒今度の立合に彼れを見事に土俵に埋め、予が遺恨をも晴らしてくれよ。

ト是れにて小野川是非なきこなしにて、

小野　そりやもうお頼みござりませずとも、土俵へ上れば敵味方、負ける心はござりませぬ。

花菱　それに附けても明日の顔觸れ、早く樣子が聞きたいものだ。

ト爰へ奥より袴なりの近習一人、取組附を持ち出來り、

近習　はッ、明日の相撲割が只今御出入りの勸進元より、届きましてござります。（ト太守の前へ出す。）

太守　それ待兼ねた、是れへ持て。こりや明日の顏觸れは、いよ〳〵そちと雷電ぢや。

奥方　すりや、お噂のござりました、

お卷　大事の勝負も明日と、

しが　定まりましてござりまするか。

小野　力づくでは雷電に、及ばぬ所もござりまするが、
花菱　そこは魂膽工夫を凝らし、四十八手を盡しなば、
一　勝つのは我々、
諸士四人　請合ひ申す。
岩浪　女子が見られるものならば、
小濱　明日の相撲は、
腰元皆々　見たいもの。
呉竹　勝ちし噂を聞きまするを、
○　樂しみにして、
腰元　居りまする。（ト太守有合ふ差添を手に取りあげ、）
太守　こりや小野川、首尾よく勝利を得るやうに、我が差添を遣はすぞ。
小野　すりや殿樣の御差料を、拜領仰せ附けられますとな。
太守　おゝ勝利の噂を聞く一文字、延喜を祝して遣はすぞ。
小野　はゝはッ、有難く頂戴仕りまする。（ト刀を取って押し頂き、）

花菱　お刀拜領する上は、

小野　どう魂膽をしてなりとも、

奥方　明日の相撲は、

お巻　勝利となるやう、

しが　共々祈つて居りまする。

太守　そちも信心。（トおしがの方を見て、につたり笑ふが道具替りの知らせ、）いたしてやりやれ。

ト是れにておしが心附き、はツと思入、小野川は刀を押し戴く、此の模樣賑かなる合方にて此道具廻る。

（小野川内の場）――本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の障子屋體、いつも所門口、此外正面三尺の路地口、其外一間の板塀、前に用水桶などよろしく、二重の正面上の方一間中仕切りのある障戸の戸棚、眞中暖簾口、下手一面腰張りの壁、進上のビラなど張つてあり、總て三十間堀小野川内の體、爰に〇△の取りてき二人、尻端折りにて地取りの稽古をして居る、此の模樣誂への鳴物にて道具留る。

弟子二人　よいしよ〳〵。

ト よろしく取組みゐる、奥よりお淺白髮鬘、やつしなりの母親にて出來り、

お淺 こりや二人とも靜にせぬか、地取りの稽古がしたいなら、裏の庭の稽古場へ行つて、仕ようとはしをらいで家の中での取組合、騷々しくてならぬわいの。

ト 合方になり、二重へよろしく住ふ、是れにて取りてき兩人下に居て、

○ 家の中で地取りなんぞをやらかす氣はござりませぬが、鬼の臍めがわしの事を團子山だとぬかすから、つい取組む氣になりやした。

△ 初日が出てから今日で七日、轉げ續けでござりますから、團子山だと申しましたのだ、それがいやなら芋蟲になれ。

○ えゝ又そんな事を言やあがるか。（ト立ち掛るを留めて、）

お淺 これはしたり又かいなう、何であらうと負け續けに負けたのが其身の誤り、悔しく思はゞ身にしみて、稽古でもして置くがよい、腹を立てるのがいたらぬのぢや。

△ それに違ひはござりませぬ。

○ どうか明日の取組には、わしが負けても親方さんに、勝を取らして上げたいものだ。

△ 相手は當時力强の、雷電關では親方さんも、魂膽せずばなりますまい。

お淺　わしも今方顔觸れの、知らせを聞いて明日の相撲に悴が不覺を取らねばよいと、心配して居ますわいなう。

○　どれ今のうち米を磨いで、明日の仕掛けをして置かうか。

△　おれも水でも汲むべいか。

お淺　また裏へ出て、喧嘩をせまいぞ。

兩人　あい〳〵。（ト暖簾口へはひる、お淺思入あつて、）

お淺　人を遣へばつかはると、馬のやうな弟子共を追ひ遣ふのがわたしの心配、殊に明日の顔觸れはついぞ是れまでどの場所でも寐た事のない雷電どのと、初めて顔を合せる悴、どうか勝たせて遣りたいと、思へば是れも一つの心配、あゝ苦勞の絶えぬことぢやなあ。

トやはり櫓太鼓米山の唄になり、花道より雷電、好みの鬘羽織着流し一本差しにて、雷獸の取りてき一人、風呂敷包みの脇差を持ち供をして出來り、花道にて、

雷獸　もしお關取、中を明けて見ませぬが立派さうな此の脇差、何處で貰つてござりました。

雷電　いや其脇差はお出入り屋敷の、松江樣の御前にて拜領をした戻りがけ、われに逢うたを幸ひ、刀持を言ひ附けたのぢや。

雷獸　そんなら是れは松江樣で拜領なされましたか、そりやあよい事をなされました。

雷電　兎かういふうちもう向ふは、仲のよい小野川の住居、どれ、ちよつと音信ようか。

ト右の鳴物にて舞臺門口へ來り、

雷獸　あい、賴みます〳〵、

お淺　どなたぢや、此方へはひらつしやりませ。（ト雷電門口を明け、）

雷電　おゝ、お袋それにござんしたか。

お淺　こりやどなたかと思つたら、雷電關でござりまするか、さあ〳〵こちらへ通らつしやりませ。

雷電　そんならお袋許さつしやい、われも此方へはひつて居い。

雷獸　あい〳〵。（ト雷獸附いて內へはひる、雷電上手へ住ふ、お淺奧へ向ひ、）

お淺　これ、關取へお茶を上げぬか。（ト呼ぶ。）

雷電　いや〳〵、必ず構はつしやるな。（ト合方替つて、）さうしてこちの小野川どんは、何處ぞへ出掛けさつしやつたか。

お淺　さあ聞いて下されませ、お出入り屋敷の淺間樣に、今日何やらお催しがあつて、場所から歸ると其儘に伜も呼ばれて行きましたが、興行中ゆゑ用もあり、もう程なく歸る時分、折角お出での事

なれば、待つて居てやつて下さりませ。

雷電　わしも今日はお抱への松江様からお召しにより、場所から直と出かけて行き、馳走になつて戻りがけ、明日の場所にて逢はれますが、其前方に相談して置きたい事がありますゆゑ、留守とあるなら歸りを待ち、小野川どんに逢ふとしませう。

お淺　どうぞさうして下さりませ。いやもう言はゞ生業身敵とて、西と東に立別れ關と關とになつた時は互ひに心を隔て合ひ、睦じからぬことなるに、どういふ事にかこなさんと悴は大の仲好しにて兄弟同様近しくするは、是れも何ぞの因縁かと、嬉しう思うて居ますのぢや。

雷電　さあ其仲好しの間柄も、明日は餘儀ない顔觸れに、こちの息子の小野川どんと土俵の上で晴れ勝負、それゆゑ實は出て來ました。

お淺　わしも今方その知らせを、聞いて一倍苦勞が増し、いつそどちらか病氣をして、取らぬ方がよからうと悴に相談する積り。

雷電　さあ其作病が出來ぬといふは、互ひに恩ある出入り屋敷を、控へて居る力士ゆゑ、どちらが虚病で逃げようとも屋敷の恥になることなれば、引くに引かれぬ明日の場所。

お淺　すりやそれゆゑに、引くに引かれず、こなたは困つてござるか。

雷電　いやもう、勝てばこつちの内へ氣の毒、負ければ屋敷の恥となり、こんな困つた事はない。

雷獸　いつそ明日は引分け、預りにして濟ませたなら、波風立たずでよさゝうだ。

お淺　餘所のお弟子を遣うては濟まぬ譯ぢやが雷獸どの、茶の支度でもするやうに、奧の弟子を呼んで下さい。

雷獸　あい〳〵、承知いたしやした。

ト雷獸暖簾口へはひる、是れと一時に櫓太鼓、米山節になり、花道より以前の小野川先きに花菱作の差添を風呂敷に包みしを持ち、供をして出來り、

花菱　もしお關取、この差添を殿樣から、拜領仰せ附けられたをお袋さんに話しましたら、嘸お悦びでございませう。

小野　さあそこどこはいゝやうなれど、雷電どのとの立合を話したならお袋が、また案じるであらうと思ふと、いゝとばかりも言はれぬ譯だ。

花菱　そりやあ案じることはない。雷電關を遠慮なく土俵で投げるも家業づく、跡で詫びたら濟みませう。

小野　いや、さううまく行けばよいが、どうかこつちが危なさうだ。

花菱　えゝ、弱いことを言はつしやるな。
小野　どりや、お袋を悦ばせようか。
ト右の鳴物にて、兩人舞臺へ來る、此うち舞臺は以前の取りてき二人出で、雷電の處へ煙草盆など出す事よろしくあつて奥へはひる。花菱駈け拔け門口を明け、
花菱　お袋さん、關取が戻らつしやりました。
お淺　なに、悴が歸りしとや。
小野　はい、今戻りましてござりまする。（ト兩人内へはひる、雷電此體を見て）
雷電　小野川關、大分戻りが早うごんした。
小野　こりやあ雷電關には、來てござつたか。
雷電　こなたの歸りを、待つて居ました。
小野　やれ〳〵、それは忝ない。（トよろしく住ふ、花菱前へ出て）
花菱　雷電關、ようお出でなされました。
雷電　花菱も一緒でごんしたか。
花菱　關取、用はござりませぬか。

小野　用はないから、休息しやれ。

花菱　そんなら雷電關、お話しなされませ。（ト辭儀をして花菱暖簾口へはひる、是れより合方替つて、）

雷電　扨小野川關、こなたと明日の顏觸につき、今日は出入りの屋敷へ呼ばれ、殿樣の御前にて明日の相撲は是非とも勝を取れとの仰せ附にて。（ト件の脇差を出し、）これ此通り殿樣から長船新左郎勝住の鍛へた脇差までも貰つたゆゑ、負けるまでも力を盡し取らねばならぬ晴れの場所、然し勝負は時の運、首尾よく勝つか後れを取り、こなたに負けるか知らねども、何處がどこまでわしの氣は勝つ氣で取らねばならぬゆゑ、こなたに念を押しに來ました。

小野　日頃兄弟同樣仲よくして居る誼を思ひ、わざ／＼と其事を斷りに來て下さつた、わしも今日はお抱への屋敷へ呼ばれて居る處へ、明日のこなたと顏觸が今方知れて此通り、（ト以前の差添を風呂敷より出し、）菊一文字の差添まで、思ひがけなく拜領して、是非とも明日の立合には勝つてくれと賴まれたれば、假令不斷は兄弟同樣魚と水とのこなたでも、投げねばならぬ晴れの場所、負ける心は微塵もない、まあ何事も天運任せに、明日の勝負をつけようから、こなたも其氣で居て下さい。

ト　お淺これを聞き思入あつて、

お淺　そんなら互ひにお抱への殿樣よりしてお刀を、拜領して賴まれたれば、負ける譯にはならぬとな、
雷電　そりやもう相撲の習ひゆゑ、是非ない事ではあるけれど、どちらが負けてもお屋敷をしくじる大事の晴れ相撲、困つた事が出來ましたなう。
小野　そりやはや、わしは親もなく兄弟もない一本立ち、假令屋敷をしくじるとも左のみ難儀はせぬ氣ゆゑ、勝を讓つて遣りたいが、年來御恩に預かつた屋敷の恥ゆゑ負けられず。
お淺　またわしとても年取つた親の苦勞を思ふゆゑ、相撲稼業も折あらば止める心で居るけれど、屋敷の恥を考へては、是れも負けるに負けられず。
雷電　これを思へば世の中に、義理と恩とに搦まれる、男の中の男ほど、辛い悲しいものはなく。
小野　何の因果で相撲には、
お淺　產れて來たか世を巡る、
雷電　片輪車の齒も軋み、
小野　ひくにひかれぬ羽目となり、
お淺　力づくにて苦しむとは、
　　　あるに甲斐ない、

三人　身の上ぢやなあ。（ト三人よろしく思入あつて、）

小野　まあそれはそれ、これはこれ、こなたと一杯飲まうから、今日はゆつくりして下さい。

雷電　いや折角の志しだが、名に負ふ相手は賣出しの手取りと名うての小野川どん、わしも工夫をしたいから、今日は此まゝ歸るとしよう。

小野　いや其の魂膽はこなたより、わしの方では又一倍、工夫を凝らさにや勝たれぬ相撲、そんなら酒は見合せよう。

お淺　とはいへ、折角ござつたに、あんまり愛想がないではないか。

雷電　またその內ゆつくりと、馳走になりに來るとしよう。

小野　それでは是れで雷電關。

雷電　お袋、いかいお邪魔をしました。（ト立ち上る、お淺奥へ向ひ、）

お淺　それ、關取がお歸りぢやぞや。（ト呼ぶ、暖簾口より以前の雷獣出來り、）

雷獣　お關取、どうぞ悅んで下せえまし。

雷電　なに悅べとは、どういふ譯だ。

雷獣　今裏で地取りをして、鬼の臍を投げて來ました。

小野　えゝ、またあいつめが負け居つたか。（ト心に掛るこなし、）

雷電　はて、矢先のいゝ。（ト思入あつて氣を替へ、）いやさ、屋敷の拜領忘れまいぞ。

ト雷獣件の脇差を持ち、兩人門口へ出る。

小野　そんなら雷電どの。

雷電　小野川どん、明日逢ひませう。

ト櫓太鼓、米山節になり、雷獣附いて雷電花道へはひる。こゝへ奥より以前の花菱出來り、

花菱　もし關取、わしやあ急に用があつて行つて來たい所があれば、明日の朝まで暇を下さい。

小野　ついぞ是れまで内を明けぬ、女嫌ひの花菱が、暇をくれとは珍らしい。

お淺　附合ならば是非もないが、明日の相撲で喜三郎も、苦勞のおほい其矢先き、今夜は内に居たがよい。

花菱　いえ、その明日の勝負につき、是れから目黒の不動樣へ百度を踏みに行きますから、どうぞ朝まで暇を下さい。

小野　いやさう聞いては猶のこと、餘計な苦勞はさせたくない。無駄な心配よしにしやれ。

お淺　殊にかれこれもう夕暮れ、夜道をかけては物騒ゆゑ、まあ〳〵止めにしたがよい。

花菱　いえ〳〵夜道を歩きますは、何とも思はぬこつちの稼業、是非とも行つて參ります。
小野　いや、無駄だからよせといふに。
花菱　なに、無駄な事がありませう。（ト立ち上つて門口の方へ行く。）
お淺　そんならどうでも、行きやるとか。
花菱　師匠の爲ゆゑ、行つて來ます。（ト留めるお淺を振切り花菱逸散に花道へはひる。小野川思入あつて）
小野　いや師匠思ひの奴だなあ。（ト合方になり、）あの花菱が氣を揉むのも尤もなりと思ふのは、四十八手の其内を鐵砲突きと門を封じる程の爲右衛門に、勝つのは容易なことでなく、今の先き鬼の臍が向ふの弟子に投げられたと、聞くも氣になる身の辻占。
お淺　親の慾目と言ひたいが、陣幕どのすら門でてんぼうにしたあの雷電、十のものなら四分六分、こなたが負けと思はにやならぬ。
小野　その陣幕は淺間家の、同じ抱への相撲ゆゑ、それが遺恨で殿樣から言ひつかつたる明日の場所
お淺　所詮こなたの自力では、勝たれぬ相撲と思ふゆゑ、神の力を借りてなと、
小野　勝たねばならぬ魂膽も、
お淺　今宵一夜の工夫もの。

小野　どうで命は捨てものに、

お淺　や。

小野　いや捨て身にならにやあ。（ト腕組なするが道具替りの知せ、）勝たれませぬ。

　　　トぢつと思入、お淺は案じるこなしよろしく、米山の合方、時の鐘にて此の道具廻る。

（淺間家奥庭の場）＝＝本舞臺三間の間常足の三重、草土手の蹴込み、上下櫻の林の書割り、うしろ奥庭の書割り、舞臺前に山吹の下草、日覆より櫻の釣枝、總て淺間家奥座敷の體、此道具後に居所にて替る誂へ、二重眞中に毛氈を敷き以前のお卷住ひ、傍に蒔繪の組硯を置き、短冊と筆を持ち考へ居る、此の見得風の音にて道具納まる。と鳴物打ちあげ、誂への獨吟になる。

〽樂しみの種に苦をする接木とて、筆に言はする言の葉も、合はぬてにはの朝ざくら。

　　　ト此うちお卷短冊を書きかけ、四邊へこなしあつて、

お卷　お歌會のお催しに我君樣より花といふ御題たまはり、銘々に讀み列ねたる腰折も此身は拙き歌の道、心痛むる其うちに、お上を始め皆樣には、いつの間にやらお立ちになり、此身一人が取殘され下の句ばかりは出來たれど、まだ上の句のうかまぬは、ても殘念な事ぢやわいなあ。

〽しをるゝ中を吹風か、花の心を知りもせで誘ふ胡蝶のもろ翅、かはす情を慕ひ來る年も若木のちご櫻。

ト此うちドロ〳〵のやうなる風の音をあしらひ、花道よき所へ主水若衆鬘紫の振袖袴なり一本ざしにて扇をつかひ、すつぽんにて出る、左右より指金の蝶二羽出て舞ふ、主水これにて戯むれ扇の振りあつて、トゞ舞臺へ來る、お卷これに心附かず歌の上の句を考へ居るこなし、此體を見て思入あつて、

主水　見てのみと人な恨みそ花の爲。

お卷　折らぬ情を土産にぞせん。（ト認めかけし短册をよみ、）是れで首尾せし一首の歌。

主水　連續いたしてござりませうな。（トこれにてお卷びつくりして後を見返り。）

お卷　ついに見馴れぬお若衆樣、どうして是れへ入らつしやりました。

主水　拙者は此程國表より當地へ出府いたしたる水木主水と申す者、好む道ゆゑ思はずも、歌のてにはをお助け申し失禮の段お許し下され。

お卷　てもお情あるお志し、是れで安心いたしました。

〽雲井に咲きし山櫻、霞の間よりほのかにも、見染めし色の初ざくら。

ト兩人よろしく氣味合のこなしにて、お卷短册を認め、嬉しきこなし、主水も思入あつて、

主水　その短册を拙者めに、拜見させては下さらぬか。

お卷　拙なき筆にござりますれば、お恥かしうござります。

主水　そこを是非とも、拜見したい。

お卷　お笑ひなされて下さりまするな。

〽盡きぬながめは九重の、都ゆかしき八重櫻。（ト主水短册を見る事あつて。）

主水　はて、見事なる此の手跡。これは拙者が申し受けたい。

お卷　いえ〳〵餘り拙いゆゑ、こちらへお返し下さりませ。

主水　いや〳〵、是非とも所望いたす。

お卷　どうぞお返し下さりませ。

〽引く手あまたと知りながら、せめて一夜は逢坂の闇路を忍ぶ家ざくら、

ト此うちお卷短册を取らうとするを、主水遣るまいと爭ふこなしあつて、トゞ主水は件の短册を懷へ入れる。お卷心得ぬこなしにて、

何につけても心得ぬは、猥りに男の入ることならぬ此の奥庭へ、あなたはどうしてお入りなされ

ましたこ

主水　掟嚴しき此の庭へ參りましたも最前の、お禮を申さう爲めばかり。

お卷　なに、最前のお禮とは。

主水　危ふい命を助かりし、此身は誠の人間ならず、假に姿は粧へども。（ト跡を言ひ兼ねて居る。）

お卷　それでは若しや。（トぞつとせしこなし。）

〽花のとぼその寂しさに、月の影さへおそ櫻。（ト此内主水ちよつと猫の狂ひの振りあつて。）

主水　我君樣のお怒りにて、果敢なく命を取らるゝ所、お情厚きお詞にて九死をのがれ一生を、得ましたあの節の。

お卷　さては最前小野川どのに。

主水　もはやお暇申しまする。

〽風に散りゆく花のしら雪。

ト風の音烈しく、主水下手のすつぼんにて消える。是れと一時に二重の下手より六枚折の屏風を引出しお卷の體を消す、獨吟の上げドロ〳〵になり、知せに附き此の道具居所にて替る。

（お卷の方部屋の場）——本舞臺常足の二重上下杉戸の出はひり、正面上の方一間の床の間その次地袋違ひ棚、下の方一面銀地の襖、總てお卷の方部屋の體、ドロ〳〵にて道具納まる。と以前の蝶二羽出で、あちこちと舞ひながら屛風の内へはひろ、よき程に屛風を取除ける、内に以前のお卷褥の上に住ひ、傍に朱塗りの丸行燈を照し、机に凭れ居て目を覺し四邊へ思入あつて、

お卷　今のは夢であつたかいなあ。（ト本釣鐘誂への合方になり、）お歌合せの催しにお花のお題を頂戴なし下の句のみは出來たれど、その上の句が出來ぬゆゑ、案じて睡るそのうちに、思ひも寄らぬ今の夢、五臟の疲れといひながら、現に聞きし上の句は、ても面白い口ずさみ、丁度その儘下の句へ（ト机の上を見て、）やゝ、こりや下の句を認めし、あの短册が見えぬのは、もしや風にて吹き去りしか、合點のゆかぬ事ではある。

ト四邊を捜し居る、爰へ下手の杉戸を明け、お仲島田蔓部屋方のこしらへにて、件の短册と猫を抱き出來り、

お仲　その短册は私が、拾ひましてござりまする。

お卷　こなたはお仲、それをどうして。

お仲　お廣敷から歸りがけ、お部屋の口へ參りまするると、これなる猫がお廊下であなたのお書きなされ

ました、此の短册をながめましては、遊び狂うて居りましたゆゑ、其まゝ持參いたしました。

ト短册を出す。お卷手に取りお仲の抱へて居る猫を見て、

お卷　おゝ其猫はお庭にて、最前わしが助けし猫。

お仲　なに、猫をお助けなされしとは。（ト合點のゆかぬこなし、）

お卷　それといひこれといひ、猫は化けると聞くからは。

お仲　えゝ。（トびつくりして猫をはなす、猫は其儘お卷の傍へ來り、うづくまり居る。）

お卷　ても可愛らしい。（ト猫を抱き上げるを道具替りの知せ、）猫ぢやわいなあ。

トよろしくこなし、お仲は氣味わるきこなし、此の模樣風の音、合方にて道具廻る。

（お淺水垢離の場）――本舞臺上手へ寄せて、二間中足の二重本緣附、二重の上手正面一間の置床、これに野見の宿禰の畫像を飾り、前の三方へ造酒德利を供へ、榊立などよろしく、下の方一間出はひりの襖、左右の褄障子を建切りあり、二重の下手建仁寺垣、よき所に櫻の立木四ツ目垣の隔て、いつもの所より上へ寄せて枝折戸の庭口、此外正面庇附きの勝手口腰障子二枚建てあり、此前よき所に屋根附の車井戸、三方とも駒寄せ、總て小野川住居庭口の體。二重に以前の小野川寢卷なりに着替へ、床

へ蠟燭を照し、畫像を拜み居る。此の見得時の鐘床の送りにて道具留る。

〽更け渡る夜も曉に誓ひてし、神の力をかりの世の、うたてき業も小野川が、祈誓を籠る一間のうち、四邊見廻し聲ひそめ。（ト此うち小野川よろしくあつて合方になり、）

小野　今鳴つたのは增上寺の曉近き八ツの鐘、明日の延喜に寢ることを嫌つて宵から起き通し、祖神の畫像と差向ひくどくも勝利をお願ひ申せば、無理な祈願も義理詰めで大方聞いて下さるだらう。どれ今の間に一休み、目にも樂をばさせておかうか。

〽吹きこむ風の緣先も障子建て切り入りにける、座敷の樣子こなたには、それと見濟まし母親が勝手口より忍び出で、かぼそき腕に車井の重き釣瓶を汲み上げて、浴びる行衣の白出立水垢離取つて一心に、祈る物音小野川が、不審に思ひ立ち出でゝ、

ト此うち小野川神前の燈明を吹き消し、正面の障子を立切る、よき程に下手の勝手口より以前のお淺白の單物一枚になり、四邊を窺ひながら出で下手の井戸水にて水を浴び神を念じるこなしよろしく、よき程に上手緣端の障子を明け、以前の小野川出て思入あつて、

はて心得ぬ、誰か井戸にて水を浴び水行をする樣子だが、師匠思ひの花菱が目黑へ行つた歸りがけ、水垢離でも取つて居るか。

〽差足なして庭へ下り、枝折の内に窺ふとも、知らぬ一心母親が、又も釣瓶を汲みあげて、
浴びる水氣はしたゝれど、五體は朽ちて皺枯れ聲。

ト此うち小野川庭下駄をはき、二重より下りて枝折の内に窺ひ居る、お淺立ち上り水を浴びることよろしくあつて、

お淺　南無や大聖不動尊わが一命を贄に捧げて立つる此の大願、明日の悴の晴相撲、勝利を得させたびたまへ、奇妙頂禮々々。

〽聲きゝすまし打驚き、（ト小野川枝折を明け、）

小野　これ母ぢや人、待たつしやい。

お淺　や、こなたは悴、妨げすな。

〽又も立寄る井戸端に、母をいたはり押し止め、（トお淺釣瓶の水を汲まうとするを留めて、）

小野　まあ〳〵お袋待つて下さい、わしに勝利を得させんと命を忘れて神をせがみ、水行までして下さるとは、そりや有難い事ながら、假令相撲に勝つたとて、こなたの命のない時は、是れまで世上で小野川が親孝行といはれたも、勝負に勝ちたいばつかりに母に命を捨てさせしと、却て人に謗られなば、此の小野川が盡したる孝行さへも水の泡、こなたも段々取る年に餘計な苦勞をさせま

いと思ふ甲斐なき此の水行、どうぞお袋聞きわけて、思ひ止つて下さりませ。

ト此うち小野川お淺を抱き止め、枝折の内へ入れ戸を建切ることよろしく、お淺思入あつて、

お淺　えゝ情ないこりや悴、命に替る此行を、なぜ見のがしてはくれぬのぢや。

小野　なに、お命に替るとは、（ト床の合方になり、）

お淺　そなたにそれと明かしなば、日頃優しい心ゆゑ、留めるであらうと思ふゆゑ、夜更けを待つて裏口からそつと脱け出し老先きのない體ゆゑ、せめてそなたの役に立ち、死ぬのが此身の本望と入らぬ命を神さまへ、お上げ申して長の年、孝行にして此母を養ふ禮をする心。

〽無理を合點で神さまへ、すがる願ひの釣瓶繩。

長い命も定業ゆゑ、水を千ばい浴びたとて、死ぬる時節の來ぬうちは死なれるものでない、そなたが明日の勝負を待ち、いよ／＼勝と聞く時は心嬉しく自害して死なうと覺悟して居たに、大事な行を妨げられ、是れでは望みが叶ふまい、なぜ見ぬ顔してこの母に、手柄をさしてくれぬぞやい。

〽死ねぬを恨み、老の身の咽せる涙を汲み取つて、（ト小野川お淺を介抱しながら、）

小野　えゝ、わッけもない其のお覺悟、いかに手柄が仕度いとて、天にも地にもかけ替のない、たつた

一人の母親を殺して何といたしませう。又水垢離を取らつしやつて、神へ誓ひを立てたとて、きつと勝負に勝たれると極まつたものでもござりませぬ、神の力を借りるのは、人の習ひといひながら、押附け業に神さまをば、せがむはよしない凡夫の慾、わしが今まで床の間の神へ願つて置いたれば、多分は明日の勝負も望みが叶ふでござりませうから、風でも引かぬ其のうちに、まあまあ内へはひらつしやりませ。

お淺　いや／＼命を贄にお願ひ申して神さまへ、誓ひを立てし上からは、どうぞ見ぬ顔してくりやれ。

小野　いえ／＼めつたにお前さまを、殺す譯にはなりませぬ。

お淺　それでは神へ嘘になり明日の勝利が叶はぬが、お抱へ角力の遺恨といひ、日頃確執の御兩家なるに御恩も深きお屋敷へ、そなたは不忠をする心か。

小野　いえ／＼、左樣ぢやござりませねど。

お淺　そんなら母を殺してたも。

小野　どうして左樣な。

お淺　留めるはやつぱり、不忠をするか。

小野　全く以て、

お淺　母を殺すか。
小野　さあ、それは。
お淺　さあ、
小野　さあ、
兩人　さあ〳〵〳〵。
お淺　これ、弟子でさへも夜道をかけ、水垢離取りに行く程の、信義をそちは無にするか。
〽言ひ詰められて小野川も、とかう返答のなき折柄。
ト此前方下手より以前の花菱、大きな護摩札を斜に背負ひ、神酒の入りし竹筒を提げ出來り、枝折の外にて窺ひゐて、
花菱　いえ、その命を捨てるには及びませぬから、御安心なされませ。
〽ずつとはひれば此方は見て、
小野　おゝ、いゝ所へ歸つてくれた。
お淺　さうして死ぬに及ばぬとは。（ト下座の合方になり、）
花菱　さあ其心配に及びませぬのは、さつきあれから道を急ぎ、目黑へ行つて瀧を浴び、水垢離取つ

て百度を踏み、十分願ひを上げし上護摩を焚いて貰ひし所、思ふ通りに火勢もよく、是れでは勝利に疑ひなしと、悦び嬉しさ限りなく、一目散に立ち歸つて來ましたから、餘計な御苦勞なされますには、及びませぬかと思ひます。

お淺　とはいへあらたかな神さまへ、僞り言うては濟まぬゆゑ。

小野　はて命を捨てゝ心願を、叶へてくれとはこつちの勝手、人を助ける神さまが人の命を貰ひまして何の爲に悦びませう、それとも命を捨てたなら、願ひを叶へてやらうといふ、あらたかな告げでもござりましたか。

お淺　さあ、さういふ譯ではないけれども。

小野　なけれどもなら母ぢや人、死ぬのは止めて下さりませ。

〽胸の曇りもやう〳〵と、晴れし知らせの太鼓の音。

ト此とまり、花道の揚幕にて太鼓を打ちおろす、皆々思入あつて、

筑波北風が吹くかして、今朝は手に取る太鼓の音、

お淺　風の模樣で聞きはぐる、七ツの鐘もいつか過ぎ、

花菱　最早明けるに間もなければ、

小野　地取りの稽古にかゝらうか。

花菱　その前方に一寸一揉み。(ト花菱鉢巻をして小野川に組附く、小野川思入あつて、)

小野　いや、そんな事ぢやあまだゆかぬぞ。

ト腰を捻る。是れにて花菱たぢ〳〵となり肌を脱ぐ、小野川も上手にて肌を脱ぎ、双方きつと見得、これより櫓太鼓烈しくなり、兩人相撲の立廻りよろしく、此うちお淺件の護摩札を床の間へ飾り、竹筒の神酒を三方の上の徳利へあげる事などよろしく、此うち兩人は立廻り、トゞ小野川花菱を投げる、花菱起上り、

花菱　關取どうぞこんな工合に、雷電關を投げて下さい。

小野　貴樣の蔭で野郎どもへ、揉んでやらずも體が極つた。

お淺　幸ひ神へ供へし神酒、これを開いて場所入りしや。

花菱　どうぞ不動の神力にて。

小野　投げるは覺えの。(ト握り拳にて腕を叩くを木の頭、)腕にあるわえ。

ト三人引つばりよろしく、櫓太鼓、鶏笛にて、

ひやうし　幕

三幕目

回向院相撲小屋の場
横網一文字住居の場
東兩國青柳二階の場
九段牛ヶ淵喧嘩の場

〔役名〕――小野川喜三郎、雷電爲右衛門、世話人一文字、同弟子花菱、諸士四人、弟子角力四人、札賣り二人、駕籠舁四人、伊場甚三郎。小野川の母お淺、青柳の女中二人、下女お竹、仕出し大勢等。〕

〔回向院相撲場の場〕――本舞臺後ろ一面相撲小屋表掛りの張物、眞中に鼠木戸の入口、上手に無緣供養の角塔婆、下の方出茶屋屋臺の上に當り家と記せし煙草盆を大分積みあり、日覆より松の釣枝、總て回向院境内相撲場の體、爰に□△勸進元の仕着せ着流し、尻端折り草履がけ、札賣りのこしらへにて立ち掛り、仕出し四人木戸の内へはひらうとするを留めて居る、此の見得櫓太鼓に双盤を冠せて幕明く。ト皆々捨ゼリフあつて仕出しは木戸の内、札賣りは上手へはひる。

□　もし皆さん、中へおはひりなされましても、爪も立たない大入りゆゑ、見る所はござりません。

△　一分づゝお出しなさりやあ、いゝ御場所へ案内しますが、お四人さまで一兩おはずみなさい。

一　どうして〳〵こちとらは、十日の相撲を十二日見るのだ。
二　土間や棧敷を買つて見ては、先祖の前へ言譯がない。
三　どうせ小野川と雷電だから、入りのあるのは當り前だ。
四　立見が出來ずば階子へ登つて、ごまかして見る積りだ。
□　棧敷の階子に登るのは、年寄衆から澁が出て、
△　今日は立見のお馴染方が、みんな割へはひりましたぜ。
一　いや〳〵今に押されて來りやあ、割も立見もごつちや交ぜだ。
二　今日の相撲を、樂をして見ようとは料簡違ひ、
三　今に結びの取組となりやあ、好きな所へ飛び込んで、
四　腕づくで見るこちとらだ、さあ〳〵早くはひらう〳〵。
皆々　それがいゝ〳〵。（ト仕出し四人正面の木戸の内へはひる。）
□　いや、あんな亂暴な客に逢つちやあ、こちとらはおしまひだ。
△　門へ出張つて今のうち、いゝ客をつかまへよう。
□　それがいゝ〳〵。

ト両人上手へはひる、後にて呼出の聲など聞えることよろしくあつて、花道より前幕の小野川着流し羽織一本差しにて、取りてき二人附添ひ出來り、跡より伊場甚三郎羽織袴大小雪踏にて呼びかけながら出來り花道にて、

伊場　こりや〳〵小野川、待つてくりやれ〳〵。（ト是れにて小野川振り返り。）

小野　どなたかと思ひましたら伊場の先生でござりますするか、大分今日は御ゆつくりでござりましたな。

伊場　さればいてくりやれ、今日は餘儀なき用向きがあつて參られぬ所であつたが、昨日から評判のこなたと雷電の顔觸は何事を置いても見ねばならぬと、用事を濟ませ出て參つた。

小野　それは御贔屓に思召してよく御見物にござりました、わしも昨日は中入前に役目を濟ませて逢間家へ呼ばれて參つて居る所へ、今日の顔觸が參りまして、どう魂膽をしたものかと心配をして居りますわえ。

伊場　いや〳〵今日の顔觸は、十のものなら九分九厘こなたに團扇が上つて居るのぢや。

小野　まあ何にせえ、向ふへござりませ。

伊場　然らば小野川、先きへ行きやれ。

小野　いえ、それでは失禮でござりまする。

伊場　はて、今日はこなたは金箱ぢや。（ト小野川先きに伊場附いて皆々舞臺へ來り、）

小野　まだ雷電と立合ふまでは、餘程間もござりますから、是れへお掛けなされませ。

伊場　然らば一服いたして參らう。（ト兩人床几へ腰をかける。）

小野　こりやあ野郎ども、煙草盆に火がないぞ。

○　はい／＼畏りました。（ト下手の出茶屋の内より煙草盆を持つて來る、一人は茶を汲み出來り、）

△　お茶をお上りなされませ。（ト伊場へ出す。）

伊場　こりやあ茶見世の亭主の名代ぢやな。

○　茶屋の亭主も今日は目のまはる程忙がしいので、夢中になつて居りまする。

△　それぢやあ關取、先きへ行つて、いゝ時分に迎ひに來ませう。

小野　木戸前へ來て居りまするると、年寄衆へ屆けてくりやれ。

兩人　承知しました。

ト取りてき二人木戸の内へはひる。此内始終うしろにて西組の聲聞える事よろしく、伊場思入あつて、

伊場　定めて最早土俵入りも疾に濟んだであらうのに、小野川には今場所入りかな。

小野　いえ場所入りは濟みましたが、案じる事がござりまして、今日は家からお袋を同道して參りまして、一文字の親方の所へ預けて置いてござりますゆゑ、土俵入りを濟ませまして、今機嫌きゝに行つて參りました。

伊場　扨は母御も今日の相撲を案じて出張つて來られしか、斯くいふ手前も御身とは同じ屋敷へ出入り仲間、殊更昨年深川富ケ岡の相撲にて、同じ抱への陣幕が雷電の爲に腕を折られ、淺間家一藩遺恨のある今日の顏觸ゆゑ、理を非に曲げても雷電を投げて貰はにやあ相成らぬと、日頃信ずる弓矢神へ參詣いたして參つたのぢや。

小野　殿樣はじめあなた樣まで、それ程にまでに私に力を入れて下さりますれば、多分は勝つでござりませうが、名に負ふ相手は谷風にも勝る力の雷電關、殊に勝負は時のはずみ、どういふ事で私が負けまいともいはれませねば、今から氣になつて立ち後れでもせねばよいと、心を痛めて居りますわえ。

伊場　いや／＼決して案じまい、いつの場所でも一日も砂を摑まぬこなたといひ、淺間の屋敷は申すに及ばず市中一般今日の相撲は、こなたのものと噂をすれば、數萬の人氣の勢ひでも、勝たれぬと

いふ事はあるまい。

小野　どうぞいたして今日の勝負に勝つて殿樣はじめ、御家中にも悦ばせ、またお袋にも一安心、いたさせたうござりまする。

伊場　いや御身は常から母親に、孝養盡す惠みでも、きつと勝つに違ひない。

小野　その孝行も相撲ゆゑ、思はぬ苦勞を掛けますわえ。

伊場　いや假令苦勞を仕ようとも、天下の力士と名を揚げる悴が立派な相撲になれば、母御の身に取り如何ばかりか。

小野　廣い肩身が害となり、敵を求むる此世渡り。

伊場　それも稼業の身敵と。

小野　常の入魂も土俵では、

伊場　鬼の心の睨み合。

小野　どうぞ首尾よく勝ちたいものぢや。（ト此時木戶口より以前の取りてき〇出來り）

〇　もウし關取、もう二三番になりましたから、樂屋へお出でなさりませ。

伊場　然らば中へ同道いたさう。

小野　さうしてあなたの、お棧敷は。

伊場　屋敷の棧敷へ附込む積りだ。

○　そんなら早く、お二人さま。

小野　どりや御同道を。（ト體の塵を拂ふが道具替りの知せ、）いたしませうか。

ト此引ばり、櫓太鼓にて道具廻る。

（一文字内の場）＝本舞臺一面の平舞臺、上の方折廻し腰張りの壁、下の方書心に二階の窓な内より見たる心にて、一面に半障子を建切り、裾通り腰張りの小壁、正面上の方一間の床の間、此次一間地袋違ひ棚、下手一間押入戸棚、日覆より欄間をおろし、下手よき所に階子の上り口、總て横綱相撲の宅二階の體、爰に前幕のお淺の母親立ちかゝり居るを、下女一人留めて居る、前に煙草盆茶菓子など並べあり、此の見得常の合方へかすめて、櫓太鼓を冠せ道具留る。

お淺　ちよつと回向院へお參りに行つて來ますから、どうぞ遣つて下さりませ。

下女　いえ／＼小野川關がお出でになるまで、あなたを何處へも遣つてくれるなと、くれ／＼のお頼みゆゑ、お出し申すことはなりませぬ。

お淺　女は法度の相撲場へ母がはひりでもするかと思ひ、さう言ひ置いたのでもありませうが、決して中へははひりませぬ、どうぞ遣つて下さりませ。
下女　いえ〳〵あなたを手放して、お出し申しては濟みませぬ。
お淺　そんなら外へは出まいから、手水に下へ遣つて下さい。
下女　いえ〳〵下へは遣られませぬ。
お淺　えゝ、わつけもない女中さんぢや、爰で手水ができませうか。
下女　いえお丸を持つて參りますから、爰でなされて下さりませ。
お淺　えゝ、病人ではあるまいし。
　ト留めるを聞かず、下手へ行かうとする、爰へ階子の口より一文字、着流しばつち尻端折り、銀鎖の煙草入を提げ、相撲世話掛りのこしらへにて出來り、此體を見て、
一文　これお袋、こなたは何處へござるのだ。
お淺　はい、手水に下へ參りまする。
一文　いや手水ではござるまい、こなたは地内の相撲場へ、様子を聞きに行くのだらう。
お淺　いえ〳〵、さうぢやござりませぬ。

一文　はて地内で樣子を聞くよりも、障子を明ければ鼻の先き、爰から近い相撲場ゆゑ、二階で樣子を聞かつしやれ。

ト下手の半障子を明け拂ふ、裏の向ふへ町家の屋根越しに相撲の櫓見える書割の遠見、

お淺　道理で太鼓が手に取るやうに、聞えますと思ひました。

一文　まあ／＼下に居さつしやれ。（ト是れにてお淺餘儀なく元の座へ住ふ。）これお竹、下に行つて居ろ。

下女　畏りました。（ト階子の口へはひる。跡合方になり、

一文　これお袋、喜三郎どんから聞きましたが、こなたが今日の頭觸を案じて昨夜水垢離を取り、神へ命を捧げるなど〻短氣な覺悟をしたさうだが年に似氣なき惡い料簡、とさ、こんな異見をするやうなまだ働きはなけれども、師匠の光りと御贔屓のお蔭を以て一文字の名前を繼いだお蔭にて、年寄仲間の頭數、年に二十日の本場所で暮らしを附けるやうになつたわしゆゑ、青い嘴でこんな異見もして見るが、神は非禮をうけずといへば、こなたが命を捨てたとて悴は勝と限りはせぬ、いはゞ勝負は時のはずみ今年勝つても又來年負けるは相撲の出來不出來、されば軍の兵書とやらにも一旦の勝は勝とせず始終の勝を善しとすると、桃川如燕の講釋で小耳にはさんだ事もあれば假令勝たうが負けようが、それは其日の廻り合せと心を大きく氣を揉まず、體を大事にして下さ

い、こなたが昨夜死なうなどゝ短氣な事を言つたゆゑ、可愛さうに小野川は場所へ行つて落附かず、案じてばかり居りますゆゑ、おれが樣子を見て來ると、仲間へ賴んで内へ歸り、こなたに異見しに來ました、必ず短氣な事をして、悴に苦勞を掛けなさんな。

ト思入にて言ふ、是れにてお淺こなしあつて、

お淺　悴をはじめあなたにまで、御苦勞かけては濟みませぬが、是れと申すもお出入りのお屋敷樣へ立てる義理、長の年月この母を大事に掛けてくれました悴の爲になることなら、假令命に替へましても、世間の人に小野川を褒めさせたいが親の慾、死ぬと覺悟を極めましたが、今のあなたの御異見で、短氣な事は止めますから、どうぞ悴にお逢ひなさらば安心するやうあなたから、傳言をして下さりませ。

一文　そんならわしの異見につき、こなたは短氣を止めさつしやるか。

お淺　悴が勝たうと負けようと、決して短氣は出しませぬから、安心して下さりませ。

一文　それでわしも安心しました、稼業半に脫けて來て體に長居は出來ませぬが、場所が打出し用濟み次第、内へ歸つてゆつくりと話しをするから、これお袋、退屈だらうが待つて下せえ。

お淺　思はぬ事にてあなたにまで、とんだ御苦勞掛けまする。

一文　然し手水に行くと言つたを、無理に引留め氣の毒だつた。

お淺　いえ、實は手水は出ませぬが、地内へ行く氣でござりました。

一文　大方そんな事だと思つた。

お淺　そんなら親方御免下さい。

一文　今に吉左右知らせまする。（ト合方になり、一文字階子の口へはひる。お淺跡を見送り、）

お淺　悴ばかりかこちらの内の親方にまで氣を揉ませ、こんな濟まない事はないが、昨夜誓ひし神樣へ嘘をついては濟まぬゆゑ、悴が勝と聞くときは、老先きのない此命捧げる心で居るけれど、今の異見を聞く上は、死ぬに死なれぬ身の切羽、とは云へ悴が負けたなら、何で身も世もあられうぞ、早う樣子が聞きたいものぢや。（ト此時下手後にて大勢の人聲して打出しの拍子木の音、櫓太鼓きこえるゆゑ、）やあ、あの太鼓はもう打出し、何れ勝負が附いたであらう、早く安否が聞きたいなう。

（ト下手の窓の處へ行き向ふを見て、氣の揉めるこなし。よき程に階子口より前幕の花菱出來り、）

花菱　もしお袋さん、必ずびつくりさつしやりまするな。

お淺　おゝ花菱、待兼ねましたッ、さうして勝負はどうぢや／＼。

花菱　話しはするがお袋さん、必ずびつくりさつしやりまするな。
お淺　はてわしも小野川喜三郎の母、何でびつくりしませうぞ。
花菱　十分勝と思つて居た、小野川關が負けました。
お淺　えゝゝゝゝ。(トびつくりしてどうとなる。)
花菱　さゝゝゝゝ、其びつくりをさせまい爲め、言はぬ先きから斷るのだ、勝負は時のはずみゆゑ、仕方がないとあきらめさつしやい。
お淺　そんならいよ/\、小野川が。
花菱　汚ない負けはさつしやらぬが、土俵を足で踏み切つて、向ふへ團扇が上りました。

ト是れにてお淺こなしあつて、

お淺　これ花菱、なぜ其時に後からそなたは聲を掛けぬのぢや、わしや悔しいわい、悔しいわいの。
花菱　いやそりやあ無理な愚癡といふもの、わしが聲を掛けずとも、小野川最屓の見物が、わい/\言つても追附かずたうとう負けにならしつたが、部屋へ引込み小野川關が負けたと聞くなら短氣な事を仕ようも知れぬ、早く知らせてあきらめさせ、內へ一緒に連れて歸れと言ひ附かつて參りました、短氣を止めてお袋さん、わしと一緒に歸らつしやい。(ト此內お淺思案のこなしあつて、)

お淺　いや小野川は負けたゆゑ、却てわしは落附きました。

花菱　なに、負けたゆゑ落附いたとは。

お淺　さあ忰が勝てば此の命捧げませうと神樣へ、誓ひしわしゆゑ小野川が、勝てば命を捨てるけれど負ければ神へ義理はない、是れで安心したわいなう。（ト愁ひを隱す思入にて言ふ。）

花菱　えゝ、そんならこなたは負けたゆゑ、却て安心さつしやるか。

お淺　おゝ、これで安心したわいなう。

花菱　こいつアとんだ當て違ひだ、さういふ譯なら關取に、早く聞かせて悦ばさう。

お淺　早くこの事知らせてたも。

花菱　どれ、關取に知らせて來ようか。（ト二階の口へはひる、お淺跡を見送り思入あつて、）

お淺　これ小野川許してたも、負けるといふも此母が神へよしなき祈誓を掛け、そなたに苦勞をさせしゆゑ、親に心が引かされて後れを取りしに相違ない。其の言譯は此場にて、人の來ぬ間に、さうぢや／＼。

ト懷中より剃刀を取出し、咽喉へ突立て苦しみ居る、早き合方になり、階子の口にて、

花菱　關取早くお上りなさい。（ト聲して花菱先きに以前の一文字小野川上つて來て、皆々此體を見て、）やゝ、

一文　安心したと言はしやつた。

一文　お淺どのには、此の自害。

小野　扨は母には血迷ひしか。

一文　心を慥に、

三人　持たつしやい。（ト皆々にて介抱する、是れにてお淺顏を上げ。）

お淺　いや、血迷ひはせぬわいなう。（ト竹笛入りの合方になり。）人を思へば思はるゝと、悴を案じて此母が入らぬ誓ひを立てしゆゑ、却てそれが害となり、親に心が引されて、そなたの力が撓みしと悟りしゆゑに此の自害、是れと知つたらなまなかに、神へ命を捧ぐると言はずに居たら案じもせず、今日の不覺は取るまいに、いはゞ贔屓の引倒し、終に是れまで場所入りに母を伴ひ本所まで來たことのない力士の身で、人の見る目も恥かしい派手な稼業を持ちながら、老しよぼたれた此母を自身に背負ひ町中を恥も厭はず本所まで、いたはりくれし孝行心、今に思へば面目ない、そればつかりでも此相撲もうそなたには勝たれぬとけちが附いたであらうのに、知らぬ凡夫のあさましさ、どうぞ情に親方さま悴が今日の不出來しは、此の母ゆゑとお屋敷へ申譯して下さりませ、厚い御異見聞入れず此家で死んでは跡々の御迷惑とは氣がつけど、再び世間の人樣に顏向け

ならぬ身の上に、死んで恥をば雪ぎます、親方さんへ是れ悴、よく言譯しておわいなう。

ト思入にていふ、是れにて小野川愁ひのこなしあつて、

小野　えゝ情ない母ぢや人、こなたを殺す程なればわしも千辛萬苦して、荒い稼業の其中で、今日まで辛抱しませぬわえ。

一文　親孝行と世の人に評判されし小野川も、母を變死で殺しては盡す心も水の泡、そこへ心が附かつしやらぬか。

花菱　斯ういふ事と知つたなら、昨夜目黑で護摩を上げ、勝たれぬ知らせであつたのを、明かして言へばよかつたに、繕つたのがわしが誤り。

お淺　そんなら昨夜不動樣の、お告げが疾くにあつたとか。

小野　さうして見れば是れも約束。

一文　はやまつた事をしてくれたな。

花菱　この言譯には、わしも諸共。（ト小野川の差して來た刀へ手を掛け死なうとするを留めて、）

小野　こりや待て花菱、母に變死をさせてすら、世間へ恥と思ふのに、貴樣が死んで何とする。

一文　相撲の勝負は時のはずみ、負けても勝つても一言の言分ないは稼業の掟。

小野　悔しまぎれに弟子までが、
一文　死んだと言つては、恥辱だわえ。
花菱　それだと言つて。
小野　えゝ、師匠の詞を、
一文　用ひぬか。（ト無理に刀をもぎ取る。）
花菱　そんなら死ぬにも死なれぬか、はあゝゝゝゝ。（ト男泣きに泣く、お淺苦痛のこなしにて。）
お淺　あゝ世の譬にもいふ通り、我が身つめッて人の痛さ、今といふ今思ひ知る、是れまで何處の相撲でも、負けた事なき伜ゆゑ、
小野　勝つた相撲は褒めそやされ、心嬉しく思へども、
一文　負けた荷擔人始めとして、身寄りの歎きは如何ばかり、
お淺　是れを思へば相撲には、孫子の代までせぬがよい。
小野　それを好んでなるといふは、
一文　是れも何その、
小野
一文　約束ぢやなあ。（トよろしく思入。）

お淺　これ倅、母が今際の遺言ゆゑ、今日からそなたは相撲を止め、外の稼業をしてたも、それが一つの頼みぢやわいなう」

花菱　是れといふのも雷電ゆゑ、さつき松江の侍衆と奢りに行つた先きは青柳、これから座敷へ押し掛けて。（ト立ち上るを留めて、）

小野　えゝ、又しても差出た料簡」

一文　亂暴しては、こつちの恥だぞ。

花菱　でも此儘に、濟ませては。

小野　はて、相撲の遺恨は相撲で返す。

お淺　えゝ、そんならやつぱり止めぬ氣か。（ト是れにて小野川心附いて氣を替へ、）

小野　いえ、相撲は向後。（ト涙を拂ふを道具替りの知せ、）止めにします。

ト是れを聞きお淺にっこりと笑ひ落入る。一文字花菱是れを介抱する。小野川は顔を背けて愁ひのこなし、此の模樣合方、寺鐘のちやん／＼にて、此の道具廻る。

（東兩國青柳二階の場）　本舞臺一面の平舞臺、上の方畫心に一間の床の間、此次三尺の地袋、

正面の左右障子建切り、眞中一面明け拂ひ、手摺の向ふへ西兩國の川岸を見たる川の遠見、下の方折廻し障子屋體、日覆より櫛形の欄間を卸し、總て東兩國青柳二階の體、爰に燭臺を照し、上手に雷電座蒲團の上に住ひ、左右に侍四人何れも羽織着流しにて、座蒲團の上に住ひ、銘々膳を控へ、□◎茶屋女のこしらへにて酌をして居る、○の取りてき手拍子を打ち唄をうたひ、△の取りてき踊つて居る、此の見得太鼓入りの相撲甚句にて幕明く。

○　相撲ぢや雷電男ぢや我童、程のよいのが市十郎。

△　ありや／＼ありやせ。（ト頻りに踊つて居るゆゑ）

雷電　これ野郎ども、下に居らぬか、御馳走酒に喰ひ醉ひ、そんなにぢたばた跳ねると、下の客が迷惑ぢや、立ち騷がずと下に居い。

△　おゝい。（ト餘儀なく下に居る。）

侍一　いや、其やうに呵るまい、今日の取組に首尾よく勝つてくれたれば、天井ぬけの騷ぎをしても、跡の始末は身共がいたす。

二　屋敷に於ても御前樣が、嘸今晩はお悅びにて上下隔てぬ無禮講、はては茶道のすてゝこ踊り、もう今頃は御酒宴最中。

三　我々どもは今晩は、そちを取持つ役目ゆゑ、是れより廓へ連れ参り、共に愉快をきめる心底。

四　藝者の参る其間、座敷が滅入つて興がない、拳でも打つて發散いたさう。

㊂　關取衆のお相撲甚句は、どうでも甚句の家元さんだけ、又格別でござりまするが、

「」　二階座敷でござりますから、お踊りなされまするると、下は亂擬氣大騷ぎ、

◎　二階の踊りの眞似をして、お燈明皿が踊りを踊り、

□　お神酒徳利が轉げ出し、地震のやうでござります。

一　いや、それは一段と面白い、

二　假令この家はこはれうとも、

三　我々どもが建てゝ遣はす、

四　羽目を外して騷げ〳〵。

△　さらばもう一つ踊りませう。（トまた立ち掛かるを留めて）

雷電　えゝこれ、騷々しいから。よせといふに。（ト頻りに鬱いで居るゆゑ、四人思ひ入あつて）

一　關取こなたはどうやら最前から、鬱いでばかり居る樣子。

二　何ぞ氣になる事でもあつて、酒の座敷が氣に入らぬか。

三　承はれば新橋に、藝者の情婦があるとやら、
四　これから參つて我々も、附合ふから浮かれてくりやれ。
◎　いえ、關取は柳橋でも、
〻　大層はやつて居りまする。
雷電　いえ、わしの鬱ぎますのは、そんな譯ではござりませぬ。
一　然らば何ゆゑ、
四人　鬱ぐのぢや。
雷電　さあ其譯と申しますのは、今日負けました小野川が、氣の毒でなりませぬゆゑ。
四人　何と申す。（ト替つた合方になり、）
雷電　考へますれば相撲ほど世に味氣ないものはなく、わしは勝負に勝ちましたゆゑ、皆樣に此やうに馳走になつて持て囃され、榮耀な眞似をして居りますが、是れに引替へ小野川は、お抱へ屋敷の出入りは止められ、たつた一人の母親には歎きをかけて不孝と呼ばれ、嘸や明日から場所へ出ても、肩身が狹いことであらうと、日頃兄弟同樣に親しくするだけ猶以て、思ひ遣られて胸が一杯酒も咽喉へは通りませぬわえ。

一　はゝゝゝゝ、これ〳〵關取何を申す、假令勝たうが負けやうが稼業づくなら是非ない譯ぢや。

二　それをいろ〳〵案じた日にやあ、相撲取にはなられぬ道理。

三　昨年歌舞伎でいたしたる、熊谷次郎のセリフにも、

四　戰場の儀は是非なしと、申すはやはり爰の事、大きな體に引きかへて、

一　さりとは心の、

四人　小さい男ぢや。

◎　關取衆の其中でも、小野川關と雷電關は、大の仲よしでございますゆゑ、

□　お鬱ぎなさるも御尤も、私共でさへ今日は小野川關はお氣の毒と、力を落して居ります。

○　わしら二人も中入前に、ずんでんころりと投げられたが、

△　定めて負けたと聞いたので、みんなも力を落したらう。

◎　いえ、お二人は毎日ゆゑ、

□　負けても左のみに思ひませぬ。

兩人　えゝ忌々しい事を言ふ。

一　何は格別酒をはやらせ、

二　藝者が參らば陽氣をつけ、
三　何れへなりと附合ふから、
四　今宵はゆつくり飲んでくりやれ。
雷電　いえ自由がましうございまするが、今宵は内へ歸り、休息いたしたうございますから、是れでお暇を下さりませ。
一　然らは廓へ參るのは、
二　却てそちには迷惑かな。
雷電　廓へお供いたしませうより、内へ戻つて休みますのが、此身の勝手でございますから、自由な事ぢやが此儘に、どうぞお暇を下さりませ。
三　それは近頃殘念なれど、
四　迷惑なれば隨意にしやれ。
〇　その代りに師匠の名代、
△　わしが座敷を持ち切ります。
一　いや、そち達では一と一ぢやて。

○　そりや何の事で、
兩人　ござりまする。
一　はて、二となると申すことぢや。
雷電　油蟲ゆゑ左樣でござりませう。
二　然らば急いで四つ谷まで、
三　いつもの駕籠を雇つてくりやれ。
□　畏りましてござりまする。（ト下手障子の內へはひる。）
四　然し今宵は、雨氣附き、
◎　降らねばよろしうござりまするが。（ト雷電後の手摺より空を見上げるこなしあつて、）
雷電　あゝ、此の雨空が昨夜にて、今日の勝負が延びたなら、
一　預かりにでも、
四人　いたす心か。
雷電　いえ、勝たねば御前へ。（ト立ち上るを道具替りの知せ。）濟みませぬわえ。
トよろしく思入。此の模樣騷ぎ唄にて、道具廻る。

（九段牛ヶ淵の場）――本臺舞常足の二重六枚飾り、草土手の蹴込み、後一面九段坂より城の外堀を見たる夜るの遠見、上の方に疊んである葭簀張りの出茶屋、柱に誂へあり、下の方に振りよき松の立木、日覆より同じく釣枝、諸所に腰を掛ける程の石を並べ、總て牛ヶ淵夜るの體、時の鐘、水の音にて道具留る。と花道より角力と記せし小田原提灯を提げし、勝負附の賣子一人出來り、

賣子　相撲勝負附け〳〵。（ト呼びながら舞臺へ來る、上手より○△の仕出し出來り舞臺にて行違ひ）

○　おい〳〵勝負附屋、雷電と小野川はどうであつた。

賣子　はい、雷電が勝ちになりました。

△　いよ〳〵それに違ひねえか。

賣子　へい、是れに出て居りますから、間違ひはござりません。（ト勝負附を出す。）

○　それさへ聞けば用がねえ、早く脇を賣るがいゝ。

賣子　それぢやあ買ふのぢやござりませんか。

△　小野川が負けりやあこつちも大怪我、誰が勝負附を買ふものか。

賣子　いや、惡い相手だ。

△○　どうしたと。

貴子　いや、苦情勝負附け〳〵。（ト呼びながら上手へはひる。）

○　いや成程苦情勝負附けだ、今日の勝負が狂つたので、江戸は勿論國々まで、どんなに怪我人があるか知れねえ。

△　先づ第一小野川とあの雷電は、淺間家と松江家の抱へ相撲、屋敷同士の悶着もどの位か知れやあしねえ。

○　それで分つた、雷電が四ッ谷に居るのは兩國へ通ふに不便と思つたが、出入屋敷へ近いからか。

△　毎日駕籠で通ふさうだが、並の駕籠では體がはひらず、京四ッの山駕籠をとんぼでかいて此坂を肩替り附きとは、どういふ譯だ。

△　はて松江樣の抱へだから、雲州〳〵と登るさうだ。

○　えゝ何を言ふのだ。（ト此時雨車になり）

△　やあ、こいつァばらついて來た。

○　降らねえ内に、早く行かう。

ト兩人下手へはひる。跡ばた〳〵になり、花道より以前の小野川、尻端折り一本差し、手拭を頰冠りにして走り出來り、直ぐに舞臺へ來り向ふを見送り、

小野　四天で擔ぐ山駕籠は、慥に雷電爲右衞門、爰に待ち受け、さうだ〳〵。

ト上手の出茶屋の蔭へはひる、此時花道の揚幕にて、

駕舁四人　えッさッさ〳〵。

ト聲して、雨車烈しく合方になり、花道より駕籠舁四人、誂への山駕籠を蜻蛉で擔ぎ出來り、直に舞臺へ來て、二重の眞中へ駕籠をおろし、

一　花時分の日和癖で、曇ッちやあ居たけれど、夜中のころまで持つだらうと、

二　雨具も持たずに出かけて來たが、夕立めいたこの降り方、

三　こつちやあ濡れても構はねえが、客を濡らしちやあ濟まぬ譯だ。

四　中坂の仲間へ行つて、雨具を借りて來ちやあどうだ。

一　おれが一走り行つて來よう。

二　御苦勞だがさうしてくれ。

一　關取、少し待つて下さい。

ト駕籠屋の一人上手へはひる。是れにて駕籠の垂れを内よりはねあげ、以前の雷電駕籠に乘つた儘顏を出す。

雷電　もう一息きで内へ行かうに、生憎なところで降り出した。

二　これは大方小野川關の、涙雨でござりませう。

雷電　この小野川に氣の毒ゆゑ、おれも明日から病氣をして、此の場所だけは引く積りだ。

二　いや關取に引かれましては、わつち等までが上つたりだ。

四　全體相手の小野川關が、あなたと五分に取らうといふのは、無理な仕事でござります。

二　さうとも〳〵、負けるは初手から知れたこと、何で氣の毒な事がござりませう。

雷電　いや〳〵そりやあ大きな間違ひ、わしと違つて小野川は、御最屓強い當時の賣出し、力づくでは知らぬこと、人氣のあるのは雷電も、羨しく思ふ程だ。

二　それも今度の取組で、脆くあなたに押し出され、

三　それで人氣もがらりと落ち、よもや明日からのめ〳〵と、

四　場所へ顔が、

三人　出されますまい。（ト此時上手出茶屋の蔭より、以前の小野川出で）

小野　おゝ明日から場所へ出られぬから、爰へ來るのを待つて居た。

ト前へ出る、駕籠舁三人小野川を見て、

二　やゝ、小野川殿か。

三人　こいつァ堪らぬ。（ト三人下手へにげてはひる。雷電駕籠より出で、）

雷電　思ひがけない小野川どん、そんならわしの來るのを待ち、こなたは爰に居さしつたか。

小野　いかにも爰に待つて居た、土俵の遺恨は土俵で返すが力士の習ひと知つては居れど、母の異見で今夜から相撲を止める喜三郎、死んだ佛へ追善に、こなたの命を貰ふから、爰で勝負をして下せえ。

ト是れを聞き雷電思入あつて、

雷電　死んだ佛へ追善とは、もしやこなたのお袋は。

小野　出入り屋敷へ言譯に、わしに代つて變死をした。

雷電　えゝゝゝ。（トびつくりなす、是れより誂への合方になり）

小野　負けた遺恨で小野川がこなたを爰で殺したと、世間の人に言はれては、男を磨く世渡りにも似合ぬ仕方と言はれるが、其勘辨のなりがたいは昨日淺間の御前から拜領をした此の差添、負けた時は一刀の切れ味見せて淺間家へ不興の詫びと二ツには、死んだ母への追善に手向ける心で鞘走る刃も古刀の菊一文字、どうで此身は親を捨て主に離れたふち頭、棒に振つたる一本立ち、今が命

の鍔際ゆゑ、日頃の誼雷電どの、爰で勝負をして下せえ。（ト是にて雷電も思入あつて、）

雷電　おゝ面白い、よく言つた、わしも不断の誼ゆゑ死んだ佛へ達引に器用に討たれて遣りたいが、それのならぬは殿様から、拝領なした此の長船、備前物ゆゑ切味も菊一文字に勝るとも劣らぬ希代の直焼刃、渡り合はねば屋敷から貰つて帯す甲斐もなく、元よりこつちは親もなく兄弟もなき一本立ち爰で不運に討たれるか、又はそつちを討ち果すか、二ツ一ツは持前の四十八手の魂膽より勝手違ひの晴勝負、仕切りを取るから仕掛けて見やれ。

小野　流石は雷電いゝ覺悟、われから先へ仕掛けて來い。

雷電　いゝや、われから仕掛けて來い。

小野　そんなら一緒に、

雷電　いざ、

小野　いざ、

兩人　いざ〳〵〳〵。

ト互ひに抜き合せ双方きつと見得、是れより雨車誂への鳴物になり、兩人切り結びの立合よろしくあつて、トゞ小野川の刀鍔元より折れる、是れにて雷電は刀を控へ立留り、

雷電　刃物が折れては相手にならぬ、何ぞ獲物を搜して來い。

小野　その猶豫忝ない、詞に任せこいつで行かう。（ト有合ふ駕籠の棒を拔き取る、雷電これを見て、）

雷電　そつちが棒で向かやあ、おれも今度は何ぞ手頃な。（トあたりへ思入あつて、）幸ひ茶見世のあの柱で。

ト上手の出茶屋の柱を拔き取る、是れにて茶屋こはれる、此時葭簀の蔭より以前の駕籠舁一人ころげ出て、

一　あゝ桑原々々、萬歳樂々々、命ばかりは助けて下さい。（ト手を合せて顫へ居る。）

小野　えゝ、邪魔な餓鬼めが、早く逃げろ。

一　そりやあ有難い、逃げます〳〵。

ト腰の拔けたるこなしにて、花道へはひる。此内雨車烈しくなり、跡雨人身支度なし、

雷電　あいつを助けてやつたれば、邪魔のはひらぬ其内に、

小野　丁度はげしく降りしきる、雨に往來の途絶えしは、

雷電　二人の爲にいゝ都合、

小野　今度は勝負を、

二人　附けねばならぬ。

ト是れより鳴物替つて、兩人よろしく立廻りあつてきつと留める、よき程にばた〳〵になり、花道より幕明きの伊場甚三郎、着流し大小尻端折り、上へ赤合羽を羽織饅頭笠をかざし、走り出來り、花道にて此體を見てびつくりし、直ぐ舞臺へ來り、兩人の中へ割つてはひり、

伊場　兩人とも、まあ待つた。

雷電　さういふあなたは、

小野　伊場の先生。

伊場　身共に喧嘩を預けてくりやれ。

雷電　いや、折角のお賴みだが、

小野　どうぞ見ぬ顏して下さい。

伊場　いゝや見ぬ顏はして居られぬ、待てと申さば兩人とも、先づ〳〵下に居てくりやれ。

ト双方を突き廻し、ちよつと立廻り柔術の手にて兩人の持ちし獲物を打ち落す。是れにて兩人は手の痺れるこなしにて下に居る、伊場有合ふ捨石へ腰を掛ける、これより替つた合方になり。

親孝行なる小野川が、大事の相撲に負けし上、母を先立て氣をいら立て、先刻家を出しと聞き心

も心ならざれば、若しや若氣の至りにて短慮な事を思ひ立ち、爲右衛門の宅へでも押しかけ果し合でもしはせぬかと、門弟共の他見を恐れ下郎の姿に身を窶し、四ツ谷を指して參る途中、只今馴染の駕籠屋に出逢ひ、樣子を聞けば案に違はず、相撲の遺恨で小野川と雷電どのゝ命の取り遣り、それぞ大事と馳せ附けしが、今一足後れなば必ず一人は命を失ひ、殘る一人は手負ひとなり、身共が苦心も水の泡、先づ何事も兩人とも、身共に勝負は預けてくりやれ。

雷電　そりやはや待てとおつしやれば、待つまいものでもござりませぬが、

小野　出入りは上げられ、親を失ひ、相撲場へも出られぬ小野川、

雷電　わしも討たれて遣りたけれど、屋敷へ對して負けられず、

小野　互ひに殿から拜領の、刀の手前が濟まざれば、

雷電　預ける譯には、

兩人　なりませぬ。

伊場　預ける譯にならぬと申すが、雷電小野川といふ美名に、疵を附けても意を通したいか。

兩人　何とおつしやる。

伊場　身不肖ながら柔術の指南いたして聊かの、弟子を預かる身柄ゆゑ、足らはぬ異見も聞いてくりや

れ。(ト合方になり、)そりやはや、小野川喜三郎には其身の一分立てんと思ひ、爲右衞門を討果し恥辱を雪ぐ心ならんが、それは大きな心得違ひ、今日までも世の人に男の中の男と呼ばれ力士の上に立ちし身が、貧腹立つて相手をあやめ、それで男と呼ばるゝか。また雷電もその如く、天下の力士と呼ばるゝ身が、人をあやめば明日より場所入りは相成るまい。さすれば僅か一年に兩度の場所を樂しみに今日妻子を養ひ居る、相撲掛りの多人數が、十日の相撲も打ちおほせず半で家業の途に放れ其困難は如何ばかり、それをおのれの宿意にのみ心を決して意を貫き、諸人の難儀を顧みず、あだに命を失ふは其身ばかりの恥ならず、代々傳はる小野川や雷電といふ名へ對し、此上もなき恥ならずや、但し掛りの一統へ迷惑かけても意を貫き、爰で命が失ひたいか。

兩人　さあ、それは、

伊場　よもや天下の力士なりと、世人に賞美をされる身で、左樣な所存はあるまいがな。

トきつと言ふ、是れにて兩人思入あつて、

雷電　いやもう跡先き見ずの料簡にて、身に降りかゝる喧嘩なら、いつでも來いと氣を逸らせ、勝負をする氣になりましたが。

小野　その御異見を聞いて見れば、皆一つとして此胸に、落ちぬ理窟はござりませぬ、諸人に難儀をさ

せましては濟まぬことゆゑ兩人とも、
雷電　此取り遣りは兩三日、
小野　あなたへお預け、
兩人　申しまする。
伊場　むゝ、それにて身共の信義も立ち、先づは安堵と申すもの。
電電　思へば互ひに昨日まで、魚と水との附合も、
小野　稼業づくとて命まで、取り合ふ心になるといふは、
伊場　屋敷同士の確執に、
雷電　拜領なした脇差の、
小野　折れしも却て幸ひか、
伊場　人の難儀も白刃と知らば、
雷電　こつちは納めて元の鞘。（ト落ちゐる脇差を取りあげ鞘へ納める、小野川は折れたる刃を取りあげ、手拭にて卷きながら、）納まる上は後ともいはず。
伊場　爰で笑つて貰ひたい。

雷電 とてもの事に、

兩人 先生から、

伊場 然らば身共が、はゝ。（ト笑ふのが木の頭）

三人 はゝゝゝゝ。（ト三人引ッぱりよろしく、誂の合方、時の鐘にて）

ひやうし 幕

四幕目

淺間家妾部屋の場
同於滿喜部屋の場
同奥御殿詮議の場
同通用門塀外の場

〔役名――高雄重左衛門、火の見番鳴島吾助。奥女中岩浪、同朝霧、同霧島、同小濱、奥方操御前、愛妾お巻、同しが、部屋方お仲、奥女中竹浦、同漣、腰元四人等。〕

（妾おしが部屋の場）――本舞臺一面の平舞臺、上寄りに一間の床の間、續いて地袋、違ひ棚、此下腰張りの壁、上下一面塗骨の障子屋體、下手の見切、丁子引の張物、簾を掛けし窓のある張物、總て淺間家妾おしが部屋の體、爰に奥女中岩浪、朝霧、霧島、小濱、白襟好みの着附、小葛籠の蓋へ入れ

し反物を深山出し見て居る、此の模様、長唄、調べの入りし鳴物にて幕明く。

岩浪　これは〳〵朝霧さま、毎度呉服屋のお取次を、お世話さまでござります。

朝霧　いえ〳〵、其の御挨拶には及びませぬ、私とても取ります品がござりますゆゑ、御一緒にお錠口より借りて参じました。

岩浪　此様なよい柄ばかり揃つて居つては、どれがどれやら目移りがいたして、目の毒でござります。

霧島　ほんに三田の山形屋は當時賣出しとは申しながら、新橋の松阪屋より、よい物がござります。

朝霧　その内にも此縞は、第一に幅があり、臀當をするやうな苦勞がなうて徳川向き。

小濱　縞といひ地合といひ、どこに一ツの言ひ分なけれど、たつた一とこ此先に、氣に入らぬとこがござります。（ト反物を岩浪へ出す、岩浪受取り小札を見て、）

岩浪　ほんに小濱さんのおつしやる通り、此直段ではお屋敷の火の見と一つでござります。

霧島　なに、火の見とおつしやりまするは。

岩浪　高過ぎるといふ事ぢやわいの。

霧島　ほんに隅へはおかれぬ岩浪さま。

岩浪　同じ取るにも柄のよい、持ちのよい地合のよい、色氣のよい寸尺のある、直段のひくいが先づ第

一

朝霧 儉約しても此頃は、御老女方より下々まで、好いた着物も着られぬ私共。

霧島 今度お上の御儉約に、御抱へ相撲の小野川初め、多くの者が皆お暇。

小濱 たゞお出入りの者までも屋敷へお入れなされねば、これから相撲を見る事ならず。

岩浪 此お暇になつたのも、あのお妾のお卷どのが殿樣へ密々に、智慧を附けしと申すこと、それも下世話のおのが田へ、水を引かうといふ企み。

朝霧 人の事を惡しざまに申し上げるも其の以前が、賤しい稼業の蜆賣りから成上りのお卷どの。

小濱 假令お爲になることでも、外の者ならお取上げに、ならぬは知れてあるけれど、

岩浪 御意に入りの口先きで、ついころ〳〵と殿樣を、言ひまかしたのでござんせう。

朝霧 おのれが相撲に勝たうといふは、

霧島 ても大それたお卷どの、

小濱 ほんに悔しう、

四人 ござんすわいな。（ト琴唄の合方になり、上手屋體より愛妾おしが、打掛姿好みの拵へにて出來り、）

しが 岩浪さんを始めとして、皆さん方にはお上のお噂、ちとお嗜みなされませ。

岩浪　これは〱おしがさま、あなたがお部屋に入らつしやるとも、私共は存じませず。
朝霧　思はずお上のお噂を、皆さん方といたしましたは、申譯なき事ながら。
霧島　これと申すもお跡よりお召しになりしお卷どのが、器量のよいのを鼻にかけ、
小濱　御殿一杯になさるのが、實に悔しう思ひますゆゑ、
岩浪　思はずお噂、
四人　いたしましたわいな。
しが　それと申すもわたしより器量すぐれしお卷どの、御意に叶うて殿樣が夜毎お通ひ遊ばすゆゑ、一い鼻にも出ます筈、それに引替へあるに甲斐なく、是非もなく〱斯うして居れど、それも此身が足らはぬゆゑ、悔むところはございませぬ。
岩浪　さあそればかりなら殿樣がお新らしもの好きと、私共もあきらめて居りまするが。
朝霧　お卷どのにはあなたの事を、
霧島　根もない事に枝葉を附け、
小濱　兎角あしざまに言ひなして、
岩浪　あなたを邪魔に、

四人　いたしまするる。

しが　なに、わたしを邪魔にしなさるとは。

岩浪　あなたは常の女子より一倍操正しく遊ばし、御悋氣らしき事もなく、只穏かを專一に御神妙になされますれど、今に寢耳に水といふ御身に拘はる大事をば、申しますでござりませう。

朝霧　誰が申せしか小野川に、あなたがお心のあることをお卷どのが存じて居れば、お泊りの夜に殿樣へ贔屓といふは表向き、その内心は小野川に心あつての事などゝ、申しましたと存じます。

霧島　相撲一同御暇になつたも大方此事かと推量いたしてござります、私共も花菱の顔が見られず殘念なれど、これらはほんの當座のこと、只お案じ申すのは、始終はあなたのお身の上。

小濱　顔に似合はぬ恐ろしいお卷どのゝ巧み事、それを夢にも御存じなくおいたはしく存じますゆゑ、申しにくい事ではあれど、御身のお爲と存じまして。

岩浪　包まず申し、

四人　上げますわいな。（ト四人焚き附ける、おしがぢつと思入あつて）

しが　女子は一に悋氣をば愼まねばならぬゆゑ、是れまでどのやうな噂を聞いても、決して悋氣がましい事は、いさゝか言うたことなけれど、此身に覺えもない事を殿樣へ申し上げ、それを越度に暇

をば出さゝうなどゝは恐ろしい、見掛けによらぬ巧み事、あゝ心の知れぬ事ぢやなあ。

トおしが悔しき思入。

岩浪　さあそれゆゑ四人の者共が、悔し涙の目を拭き〳〵、あなたへお知らせ申しまするも、

朝霧　お物入りを減じると、お爲ごかしを申しまして、

霧島　實はあなたを相撲取の、

小濱　跡からお暇を出す所存、

岩浪　誠においとしう、

四人　存じますわいな。(ト四人思入あつて泣く、おしがも思入あつて)

しが　よう言うて下さいました、かういふ巧みのある事を竊にお知らせ下さいました、是れといふのも日頃から朋輩仲のよいお方、他人のやうに思ひませぬ。(トおしが嬉しき思入)

岩浪　お爸どのが此頃は、横柄顔になつた上、又召使ひの仲までが、ろく〳〵物も言はぬゆゑ、

朝霧　どこぞで逢うたら皆さんと豫て示し合した通り、苛めてやらうぢやござんせぬか。

しが　それでは物に角が立つゆゑ、どうぞ穩便にして下さりませ。

霧島　いえ。あなたのお氣がよすぎるゆゑ、猶々向ふが圖に乘ります。

小濱　こちら四人で存分に、仕返しをして遣りまする。（ト岩浪思入あつて向ふを見て、）

岩浪　おゝ噂をすれば影とやら、お廊下を參りまするは、ありや仲ではござりませぬか。

朝霧　ほんに、仲でござります。

霧島　それでは爰に待伏せして。

小濱　仲が是れへ參りましたら、

岩浪　ちよつと耳を。（ト朝霧へ囁き、）手筈の通り、

朝霧　思ふ存分、

四人　來たら苛めてやりませう

ト誂への合方になり、花道よりお仲部屋方のこしらへにて、切子のふらそこを持ち出來り、花道にて、

お仲　おしがさまよりお節句にお貰ひ申せしお白酒の、お入物をお返し申しに、お廊下へ參りましたが又いつもの意地悪さんが、お部屋の口においでの樣子、こりやどうしたらよからうな。

ト此内四人お仲を見やり、

岩浪　仲はそこに何をして居やる。

朝霧　用があらば、遠慮なう、

霧島　早うこちらへ、

四人　來やいの。

お仲　はい／＼、只今上りますでござりまする。（トおど／＼しながら舞臺へ來り下手へ住ひ、）これは皆さま、よう入らつしやりました、眞平御免下さりませ。（トおしがへ思入あつて、）此程はお白酒を有難うござります、よろしくお禮を申し上げます。其節拜借いたしました御入物を、お返し申し上げまする。（ト件のふらそこを出す。）

しが　わざ／＼持つて來ないでも、次手の時でよいものを。

岩浪　いえ／＼あなたは御存じないゆゑ、さう思召すは無理ならねど、御殿で名代のあのお部屋。

朝霧　借り物は貰うた氣で、入物までも取上げ婆。

霧島　赤子の内から下者の手で育つたお巻どの。

小瀧　斯うして物を返すのは、萬に一つの稀なこと。

岩浪　早う其品おしがさまの、お傍へ持つて、

四人　行きやいの。（ト口々にいふ、お仲むつとせしこなしあつて氣を替へ、）

お仲　また者の私があなた方を差しおいて、それへ出ますのは失禮ゆゑ、憚りながら此品を、御取次ぎ

願ひまする。
霧島　その遠慮には及ばぬこと、
小濱　早うあれへ持つて行きや。
お仲　すりやお取次ぎ下さりませぬか。
岩浪　自身に持つて、
四人　行きやいの。
お仲　左樣なれば何れもさま、御免なされて下さりませ。

ト合方きつぱりとなり、お仲ふらそこを持ちおしがの側へ行かうとする、此時後より小濱唐突にお仲の襟を捉へ後へ引倒す、それにてばつたり前へのめり、此のはずみにふらそこ割れる、お仲はツと思入、皆々わざと驚きし體にて、

岩浪　や、こりや大切の、
四人　ふらそこを。（トお仲ふらそこを見て、）
お仲　やゝゝゝゝ。（トびつくりなし、小濱の側へ詰寄り、）もし小濱さま、あなたは何の遺恨があつて、皆さま方の此中で恥をおかゝせ遊ばしました。

岩浪　これ恥をかゝせしとは何の事ぢや、おのれの粗相でありながら、人に罪を着せようとは、ても押の強い奴ぢやの。（ト小濱立ち掛りお仲の頬を抓る、お仲悔しきこなしにて、）

お仲　それでも現在、あなたさまが。

小濱　まだ〳〵そんな言ひ掛けして、粗忽者め控へて居や。

お仲　はッ。（ト是非なく控へる、おしが思入あつて、）

しが　割れし器は再び元へ返らぬ事ゆゑ是非なけれど、それは當春お上より拜領なせし大事の品、お卷さまゆゑ一對の半を分けて差上げしが、粗相といへど其器を、微塵にされては殿樣へ申し譯がないわいの。（ト當惑の思入、岩浪思入あつて、）

岩浪　こりや一存ではござりますまい。これ仲や、お卷どのから此の器を、微塵にせいと言ひ附かつたか。

お仲　てもめつさうな、何しに左樣な。

岩浪　いや〳〵それに違ひない、是れが町家の住居なら、琉球表か薄縁の縁に躓くこともあれど、

朝霧　御殿の内は部屋々々まで、備後表を敷詰めて、躓く所のない疊。

霧島　御雛祭にお飾りなさる、一對揃ふふらそこを、態ところんで毀したは、

小濱　それといはゞ殿様と、おしがさまの仲を裂き、おのが氣儘に仕ようといふ、

岩浪　こりや惡だくみと、

四人　見えるわいな。

お仲　どういたしまして其樣な、めつさうな事いたしませう。是れは全くあなた方の、いえ、あなた方の入らつしやる前も臆せず又者の、身分で出ました粗忽より此粗相をいたしました、どうぞお許し下さりませ。（ト悔しきこなしにて詫びる。）

岩浪　いや／＼さうは脫けさせぬ、定めて主人の言附けで、一對揃ひし此器の中を放さう企みであらう。

朝霧　それを此の場で、

四人　言うてしまや。

お仲　いえ、なか／＼以て左樣な事を。

霧島　そんなら何ゆゑ微塵にしやつた。

お仲　それは全く粗相ゆゑ。

小濱　えゝ、言はして置けば勝手な言譯。

岩浪　皆さん、以後の見せしめに、

三人　合點でござんす。

岩浪　よくも斯樣な事をしたな。（ト岩浪お仲の襟上を取り引据える、三人有合ふ反物を取つて散々に打据ゑる、此内お仲打たれながら捨ゼリフにて詫びる、岩浪は疊へ摺附ける、此時ふらそこの缺けで切つたる心にて額に疵附く。）ほんに呆れた、

四人　女子ぢやわいな。（ト突き放す、お仲額の痛む思入にて、持紙にて押へ血汐の附きしに心附き、）

お仲　やゝこりや、ふらそこのかけで切つたか。（ト悔しき思入。）

岩浪　額の疵も自業自得、此の白酒の器を毀し、眞赤に顔のはぢ紅葉、ほんに笑止な。

四人　事わいなあ。

お仲　ちえゝ。

ト手出しのならぬといふこなし、此の以前お仲を打ち据る時、岩浪懷中より小さな袱紗包みを落す、此時朝霧氣の附きし思入にて、

朝霧　や、爰に落ち散る袱紗包み、こりやどなたのでござんす。

霧島　こりや大方仲のであらう。

朝霧　そんならそなたに返しますぞ。（ト投げて遣る、お仲不審の思入にて、）

お仲　いや、こりや私のではござりませぬ。
朝霧　なに、ない事があるものか、今打ち据えし其時に、
霧島　そちが落したに違ひない。
小濱　よう改めて見やいの。
お仲　いえ／＼覺えがござりませねば、此儘お返し申します。
岩浪　知らぬとあるなら、包みの中を、
朝霧　此場で明けて、
四人　見ませうわいな。
ト四人思入あつて、件の袱紗包みを開く、内に紙の人形へ針が澤山さしてあるを取出し、
岩浪　やゝ、こりや照る／＼坊主に似たる人形。
朝霧　數多の針のさしてあるは、
霧島　これは正しく恨みある、
小濱　人を呪ひし人形ならん。
岩浪　こりやたゞ事では、

四人　ございませぬ。（トおしがの前へ出す、おしが取りあげ、）
しが　何やら是れに記してあるは、志賀山や松の操も諸共に。（トちつと思入、四人もこなしあつて、）
岩浪　志賀山や松の操も、
四人　もろ共に。（トおしが人形の裏を返し、）
しが　吹きしほらする花の夜嵐。
岩浪　吹きしほらする、
四人　花の夜あらし。（トおしがちよつと考へる思入あつて、心附きしこなしにて、）
しが　こりや奥さまとわが身をば、調伏なさん正しく人形、
皆々　えゝゝゝゝ。（ト皆々態と驚く、誂への合方になり、おしが人形を見やり、）
しが　志賀山や松の操も諸共に。むゝ、志賀山や松の操と記せしは、言はずともわたしが名、松は奥方操さま。又この裏に記せしは吹きしほらする花の夜嵐、二人が名をば詠み込みしは、奥さま諸共此志賀を花によそへて夜嵐に、吹きしほらせて失ふ心、こりや調伏の三十一文字。これは正しく餘の人ならず、姉と思ひしお袋さま、此身はともあれ奥様を呪ふなどゝは勿體ない、言はうやうないお方ぢやなあ。

トおしが向ふへ思入あつて無念のこなし、四人はしめたといふ思入、

岩浪　人は見掛けに寄らぬもの、蟲も殺さぬ顏をして、

朝霧　お卷どのには大膽な、鬼にもまさる企み事、

霧島　今のお歌の心を聞き、

小濱　ほんに身の毛も彌立つほど、

岩浪　ても恐ろしい、

四人　心ぢやなあ。（トおしがも無念の思入にて）

しが　これ仲、それへ出や。

お仲　はあい。（トもぢ〳〵して居る）

しが　えゝそれへ、出やといふに。

お仲　はあゝ。（ト合方きつぱりとなり、お仲おづ〳〵前へ出る、おしが思入あつて）

しが　これ仲、そなたも此品所持して居れば委細の事は存じて居らう。そりや不束なわが身の邪魔されしも是非なけれど、勿體ない奥さまへ斯ういふことをしやつては、それでは道が立つまいがや。外でもあるか此場にて取り落せしは天の罰、包まず仔細を話して聞かしや。

お仲　それを誠と思召さば、あなたさまのお腹立ちは御尤もでござりまする、夢にも存ぜぬ其の人形、私共に置きましては、所持せし覺えはござりませぬ。

しが　さあ覺えがないと言やるとて、慥な證據はこの袱紗の端に記せし此の名前、これ是れを見や、淺間奥さまとあるは、のがれぬ證據の主人の名前、これでも知らぬと申し張るか。

お仲　ではござりますが、私は。

しが　それとも外に此の名前が。

岩浪　あるなら爰で、

四人　言うて聞かしや。

お仲　さあ、それは、

しが　知らぬと言やるか。

お仲　さあ、

しが　さあ、

皆々　さあ〳〵〳〵、

しが　そなたの主人であらうがの。

お仲　はあゝ。（ト泣伏す、四人につこり思入、おしがちつとなつて、）

しが　ても大それた女子ぢやの。かゝる企みのある事を露いさゝかも知らぬゆゑ、わたしは姉妹同樣に是れまで親しくいたせしに、あらうことか人形へ此のやうに針を打ち、誰白紙の裏表三十一文字の言の葉に、人を呪ひし恐ろしさ、それに附添ふ其方も定めて一つ心ならん、これでは逆らふ其爲に、拜領なせし一對の片々をそちが打ち割りしも、お上とわが身を引裂く心、さりとは見下げし人でなし、今に恨みを晴らして遣ると、立ち歸つて此趣きをそちより卷に言ひ傳へや、思へば思へば腹の立つ、えゝ悔しい〳〵わいの。（トおしが無念のこなし。）

お仲　私主人の言附けとあなたが思召しますは、御尤もでござりますが、全く存じませぬこと、主人が斯かる疑ひを受けまするも不束な、此私が不調法より、斯かる事になりましたが、これも誰ゆゑ皆さんゆゑ。

四人　や。

お仲　いえさあ、皆さま方へも私の粗相よりして此樣にお腹をお立て申さしまして、申譯もござりませぬが、どうぞ此場はこれぎりに、お見のがし下さりますやう、お願ひ申し上げまする。

しが　いや其詑言は器の詑び、この人形はそれでは濟まぬぞ。

お仲　えゝ。
しが　よも言譯はあるまいな。
お仲　はあゝ。（ト泣く）
しが　さあ斯樣な惡事を企むものは、恐ろしうて爰へは置けぬ、さあ早う此場を立ちやいの。
お仲　すりや、どうあつても。
しが　惡事露顯の逐一を、まさにそちより申し傳へや。
お仲　はゝい。
しが　さあ、立てと申さば、立たぬかいの。
　　トきつといふ、お仲是非なく立上り、下手へ行かうして額の疵の痛むこなしあつて、押へながら思はず手に附きし血汐を見て、
お仲　ても情ない。
四人　何と言やる。
お仲　さあ、參りまするでござりまする。
　　ト唄になり、無念のこなしあつて花道へはひる、おしがは悔しき思入、四人は花道を見送りこなしあ

つて、おしがの側へ寄り。

岩浪　おしがさま、嘸御本望で、

四人　ござりませうな。

しが　なに、本望とは。

岩浪　さあ憎しと思ふお爸どの、

朝霧　此人形を種として、

霧島　御上へ申し上げる時は、

小濱　言はずと知れし、

四人　長のお暇。（ト是れにておしが心得ぬ思入にて、）

しが　そんなら若しや、

岩浪　あゝし。

ト押へる。是れと一時におしが人形を袖で隠すを道具替りの知せ、岩浪おしがに囁く。皆々四邊へこなし、此模様所作の切にて道具廻る。

（お巻部屋の場。）＝本舞臺三間の間常足の二重、上手一間の床の間、三尺の地袋續いて銀地墨畫の襖上の方一間塗骨障子屋體、下の方一間の次の間、茶道具などよろしく並べ、平舞臺の下手前と同じ丁字引の張物にて見切り、揚幕へ杉戸をおろし、出はひりあり、總て前の廊下續きお巻部屋の體、二重に褥を敷き、此上にお巻部屋着好みのこしらへにて、誂への猫を抱き愛して居る、此見得しんみりとした合方にて道具留る。と合方彈流し、お巻思入あつて、

お巻　思ふこと一つ叶へば又一つと、今更言うて返らねど、我が伯父高雄重左衞門樣が忠義の爲のお頼みゆゑ、お上のお掛り減じる爲め竊に御前へ申し上げしを、お用ひあつて先達て御暇出でしお抱へ相撲、これとても小野川が夫の雷電に負けしゆゑ、御不興うけての事なれど、其の入譯を知らずしておしがさまへ附添ひし相撲最屓の女中方が、此身が御上へ勸めしやうに言觸しては苛められ、いつそお暇願ひ出て元の町家へ歸らうと、思へど厚きお情につい絆されて是非なく／＼、辛い月日を送るといふは、誠にこれが憂き世ぢやなあ。

トお巻ちつと思入、合方きつぱりとなり、花道より以前のお仲足早に出來り、花道にて後へ思入あつて、直に舞臺へ來り、

お仲　旦那さま、只今歸りましてござりまする。

お卷　見ればそなたは髮も亂れ顏の色も常ならず、定めし是れには譯があらう、まあこれへ來やいの。

お仲　はい、悔しい目に逢ひました。（ト此内お仲二重へ上りお卷の前へ出る。）

お卷　して、悔しいと言やるのは。

お仲　さあおしが樣のお部屋にて、此樣な目に逢ひましたわいな。（ト額の疵を見せる、お卷びつくりして）

お卷　おゝ、その疵はどうしやつたのぢや。

お仲　旦那さま、お聞きなされて下さりませ。（ト誂への合方になり、）あなたの御傳言申しながら、お白酒のふらそこをお返し申しに參りし所、折惡しくも意地惡の岩浪さまを始めとして、名代の四人がお出でゆゑ、はひり兼ねて居りましたを、そこへ來たのは仲ではないか、何を遠慮して居やる早うこれへ來やいのと、おつしやる詞は裏表、巧みの罠にかゝりまして裾を引かれてばつたり轉ぶ、はずみにふらそこを微塵になした其科にて、寄つてたかつて私を有合ふ吳服で打擲され、まだ其上に岩浪さまに疊へ顏を摺附けられ、あたりに落ち散るふらそこのかけで額へ疵をうけ、こりやもういつそと思ひましたが、又者の身の悲しさに手出しもならずすご／＼と、滴る血汐を押へまして、無念を怺へて歸りましたが、實に悔しうござります。

お卷　すりやこなたをば皆さんが、吳服物にて打擲せしとか、其のふらそこを損ぜしとて粗相とあれば

お仲　是非もないに、女子の面に疵を負はすは、餘りといへば蓮葉な仕方。（ト お仲泣伏す。）

お仲　まだそればかりぢやござりませぬ、轉びし時に私が取り落せしと言ひこしらへ、袱紗包みの其中より紙にて造りし人形出し、それに記せし歌をよみあなたさまが奥さまと、おしがさまを呪ひしと、根もなき事を言ひふらして焚き附けしゆゑ、おしがさまには以ての外のお腹立ち、申し譯をいたしましたがお聞き入れがござりませず、餘儀なく戻つて參りました、大方あれを證據となし御詮議がござりませうから、必ず御油斷遊ばしまするな。（トこれを聞きお卷びつくりなし、）

お卷　そりや恐れ多い、奥さまを人形をもつて呪ひしなどゝ、それを證據に四人の者が此身を罪に落さんとは、容易ならざる企み事、外に遺恨をうけるやうな更に覺えはなけれども、察する所贔屓いたす相撲にお暇出でしより起りしことゝ思はるゝ、思へば憎い仕方ぢやなあ。

ト悔しきこなし、お仲思入あつて、

お仲　旦那さまへ折入つてお願ひがござりますが、お聞きなされて下さりまするか。

お卷　なに、折入つて願ひと言やるは。

お仲　どうぞ只今お暇を、お願ひ申したうござりまする。

お卷　わたしに暇をくれいとは。

お仲　さあ只今お暇下さりますれば、是れより再び取つて返し、四人の衆へ仕返しが致したうございます。

お卷　それは惡い料簡ぢやぞ。

お仲　なに、惡いとおつしやりますするのは。（ト合方きつぱりとなり。）

お卷　さあ、惡いといふは、四人の衆は皆武家方より上りしお方、悲しいかなわしもそなたも町家よりして上りし身に、武藝の業を心得ねば、手出しをなさば此上に、如何なる憂き目に逢はうも知れぬ、なまじ恥をかゝうより、ぢつと怺へて居つたなら、天道誠を照したまへば、定めてお上のお調べにて、企みの主も知れるであらう、急かずと待つて居やいの。

お仲　御尤もではございますが、只今お暇下さりますれば決してあなたの御迷惑に、ならぬやうにいたしますから、どうぞお叶へ下さりませ。

お卷　して又暇を遣はさば、そちは何とする心ぢや。

お仲　はい、命を捨て四人の者へ、仕返しする氣でございまする。

お卷　すりや命を捨てゝも、仕返しを。

お仲　旦那さま、お許しなされて下さりませ。（ト辭儀をなし、つかつかと下の方へ行く。）

お卷　あゝこれ仲、まあ〳〵待ちや。

お仲　どうぞお留めなさらずに。

お卷　暇を遣さぬに、何でそちは行きやるのぢや。

お仲　さあ、それは。

お卷　わしの難儀を構はぬか。

お仲　さあ、それは。

お卷　どうでも行くか。

お仲　さあ、

お卷　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

お卷　行くのを思ひ止りやいの。（トきつといふ。）

お仲　はゝ。（ト是非なく元の所へ返り、）私は悔しうござりまする。（ト泣き伏す。）

お卷　嘸や悔しう思やらうが、不束ながら主人とせしわしが難儀になる事ゆゑ、無念を怺へて待つてくりや、それが此身に忠義ぢやわいの。

お仲　それ程までにおつしやいますを、もどきましては濟みませぬゆゑ、無念にはござりまするが、控へまするでござりまする。（トよろしく思入、此時下手より奥女中出來り、）

○　お卷さまへ申し上げます。

お卷　何御用でござりまする。

○　只今奥さまより、急お召しにござりまする。

お卷　なに、奥さまのお召しとな。

お仲　そんなら若しや。

お卷　あいや、此程お奥でお相手せし、伊勢物語のかるたであらうか、但しは琴の御所望なるか、只今直に上りますと、お傳へなされて下さりませ。

○　いえ〳〵直にお連れ申せと、御老女よりのおつしやり附け。

お卷　左樣なれば、直ぐに是れより。これ仲、呉服を持つて來や。

お仲　畏りました。

トお仲服臺のまゝ持つて來る、お卷よろしく着替へ、打掛を着て、手文庫より箱せこを出し、懷中なし、

お卷　こりや御待遠でござりました。

○　左樣なれば、お卷さま。

お卷　どれ、御同道いたしませう。

ト　お仲上草履を直し、お卷下手へ行きかける。以前の猫出でゝ立ち塞がるゆゑ、お仲案じるこなしあつて、

お仲　どうやら心に。

○　えゝ。（ト聞き咎めゝを冠せて、）

お卷　玉は部屋に待つて居や。

ト合方になり、猫を抱き上げお仲に氣を附けろといふ思入あつて猫を渡し、奥女中附いて下手へはひる。

お仲　どう考へ直しても此の胸の落附かぬは、今も今とてお出掛けを玉が慕ひ申せしは、猫は魔物に通を得て凶事をお知らせ申しはせぬか、斯ういふ時は何よりか神や佛のお力をお借り申すにしくはなし、幸ひ此間に赤羽根の辨天さまへお百度上げ、恙なきやう願ふが專一、どれ一走り行つて來ようわいの。（ト身支度をなし行かうとするを、又猫すがりながら鳴く、）またお前は留めるのかいな

旦那さまのお下りまでに、急いで參詣して來る程に、おとなしく待つてゐや。

ト猫に言ひきかせて行かうとする。此時下手より部屋方△出來り、

△　お仲どん、どこへ行くのぢやえ。

お仲　旦那さまの御用にて、ちよと前町まで行つて來る程に、お前こゝに居て下さんせぬか。

△　今は何も御用がないから、番をして上げようわいな。

お仲　そんならお前を賴んだぞえ。

△　あい／＼、承知しましたわいな。

お仲　どれ、行つて參りませうか。

ト早き合方にて、お仲逸散に花道へはひる。部屋方は猫を抱きじやらし居る。此模樣にて道具廻る。

(奧御殿御庭先の場)――本舞臺一面の平舞臺、正面打拔きに奧庭の書割り、裾通り緣側上下折廻し杉戸の出這入り、目覆より金地の大欄間をおろし、舞臺花道とも薄緣を敷詰め、揚幕際やはり杉戸の出這入り、總て奧御殿御庭先の體、本調子の合方にて道具留る。と上の杉戸より、お卷打掛なりにて出來り、

お卷　急お召しゆゑ取敢へず只今奥へ上りしに、奥さまには御出でもなく合點の行かぬ今のお使ひ、東御殿にいらせられると申すことゆゑ是れより上り、伺はうとは思へども、あゝ心ならざる事ぢやなあ。（ト合方きつぱりとなり、思案の思入にて舞臺より花道へかゝる、此時上手杉戸を明け、）

しが　お卷さま、暫くお待ち下さりませ。

お卷　え。（ト立ち留る、おしが前へ出る。跡より以前の奥女中四人附添ひ出で、）

しが　これへお出で下さりませ。

お卷　おしがさまでござりますか、失禮ではござりますが、奥さまのお召しゆゑ。

しが　左樣でもござりませうが、ちよつと是れまで。

お卷　でも、お奥のお召しゆゑ。（ト又行きかける。）

しが　はてまあお出で下さりませ。（ト是れにて餘儀なく立戻り、）

お卷　して私へ御用とは。

しが　ちと密々に私が、お話しがござりますゆゑ。

お卷　左樣なればお上より、引けます節にお話しを承はりますでござりまする。

しが　いえ、お上りなさるには及びませぬ、お迎ひが參りましたは、奥さまではござりませぬ。

お卷　でも、奥さまのお召しゆゑ。

しが　そりや奥さまではござりませぬ。

お卷　して又、どなたのお差圖にて

しが　そのお迎ひに上げたのは、此しがでござります。

お卷　えゝ。（トびつくりなす、おしがお卷の前へ詰寄り、）

しが　お卷さま、お前は見下げた事ぢやなあ。（ト誂への胡弓入りの合方になり、）犬猫でさへ三日飼へば其飼主の恩を忘れず、ましてや人の身の上では、恩を知らねば獸類にも劣りしことは利發なお前、申さずとも御存じならん、勝れし器量に殿樣の御意には入れど朋友の、又附合は別なものゆゑ、人がとやかう申すのも、蔭になり日向になりわたしが取成しするゆゑに、勤めにくいこともなく終には今のお前の勢ひ、恩を掛けるぢやなけれども少しは義理を思ひなば、こんな事は出來まいに、わたしは兎もあれ勿體ない奥さまを呪ふとは、獸類に劣るお卷どの。此の人形へ針を打ち此恩を受けし奥さまや、わたしをお前は殺す氣か、ても恐ろしい心ぢやなあ。

ト人形をお卷の前へ突き出す。お卷その手を捉へ、

お卷　そりやお情ないおしがさま、此身に覺えのない人形、樣子は最前召仕の仲より委しく承はりまし

たが、これは我が身に遺恨ある御方があつてこしらへ物、不束ながら勤め向き蔭日向なき私の心を日頃御存じにて、是れを證據にお疑ひは、口惜しうござりまする。

岩浪　ほんに盗人たけ〴〵しいと、よくもこんなに白々しく、

朝霧　蔭日向なく勤むると、口は立派におつしやれど、

霧島　斯ういふ證據が出た上は、只言譯では濟みませぬ。

小濱　知らぬ事なら知らぬといふ、證據を爰へお出しなされませ。

お卷　さあその證據は、

岩浪　證據は定めて、此針で、

朝霧　奥さま始めおしがさまを、

霧島　めつた無性に突き散らし、

小濱　呪ひましたといふより外、

岩浪　よも言譯は、

四人　ござんすまい。(ト皆々人形に指してある針を取り、お卷の膝を突くお卷双方を留めて、)

お卷　何の因果で此やうな、無實の難に逢ふことか、ても情ない事ぢやなあ。

岩浪　誰を恨むることもない、お前が企みをしたからだ。
朝霧　早く先非を後悔して白狀をして、
四人　おしまひなさんせ。
お卷　それぢやと申して、覺えがなければ。
霧島　そんなら覺えのないといふ、
小濱　證據を爰へ、
四人　出しなさんせ。
お卷　さあそれは。
岩浪　白狀なさんすか。
お卷　さあ、
岩浪　證據がありますか。
お卷　さあ、
四人　さあ、
皆々　さあ〳〵〳〵。

岩浪　きり〳〵白狀。
四人　しなさんせいなあ。(トきつといふ、お卷當惑の思入、此時上手にて、)
奥方　その詮議、暫く待ちや。
しが　あのお聲は、
四人　慥に奥樣。

ト誂への合方になり、上手より奥方操、打掛のこしらへ、跡より奥女中竹浦、漣、腰元四人附添ひ何れも腰元なりにて出來る。お卷を始めしが四人の奥女中はツと辭儀をする。奥方皆々は上手へ住ふ。

しが　人を呪ひし身の罪を、存じませぬと申しますゆゑ。
岩浪　此場で詮議いたしますを、
朝霧　待てとお止め、
四人　遊ばしますは。
竹浦　只今あれにてお聞き遊ばし、御詮議を御自身に、
漣　此場で遊ばしまするので、それでお止め、
腰元皆々　なされましたぞ。

岩浪　御自身に御詮議とは、ても折の悪い。

竹浦　何とおつしやる。

岩浪　いえ折よく爰へ奥さまが、

朝霧　計らず御出で遊ばしまして、

霧島　お直に御詮議なされたら、

小濱　白狀せずば、

四人　なりますまい。

奥方　調伏なせし證據と申す其人形に記しある三十一文字の詠歌を、それにて早く讀み上げや。

竹浦　畏りました。（ト合方になり、竹浦人形を取上げ、）志賀山や松の操も諸共に、吹きしほらする花の夜嵐。

奥方　して又、袱紗の名前と申すは。（ト竹浦袱紗を取上げ、端縫ひを見て、）

竹浦　淺間奥まきと記してござりまする。

奥方　これを證據と申すのぢやな。

四人　左樣にござりまする。

奥方 深く詮議するには及ばぬ、是れにてあらまし樣子が知れた。

しが 何とおつしやりまする。

奥方 わらはを呪ひし證據といふ、此の人形に記せし歌、志賀は櫻の名所松の操も諸共とあらはに名をば詠み込みし詞巧みの此の詠歌、これのみならばお卷をば疑ふまいものにもあらねど、これを包みし其袱紗に淺間奥まきと記せし端縫ひありしは他の仕業、人目に掛る其時は忽ち知れる此袱紗に包み置かん謂れなし、是れにて卷がなさゞる事は詞を待たず明らかなるぞ、却てこれを證據といふ是れを見出せし四人の者は。

四人 え。

奥方 てもあさはかなものぢやなあ、

ト奥方よろしく思入にていふ、奥女中四人顔見合せしくじりしといふ思入、お卷こなしあつて、

お卷 御慈悲深き奥さまのお情ゆゑに私の、受けし汚名は晴れたれど、斯かる事をば申し受けるは元より此身が足らはぬゆゑ。

しが 私とても同じこと、身の不束に此樣な、遂には恨みを受けますれば、

お卷 此場の御疑念晴れしを幸ひ、

しが　一先づ此身にお暇を、
お巻　どうぞお願ひ、
兩人　申し上げまする。（ト兩人よろしく思入、奥方こなしあつて、）
奥方　二人が願ひは叶はぬぞよ。
お巻　すりや私共が、
兩人　お願ひは。
奥方　さあ此の人形はそち達が、巧みでないといふ事は、足らはぬわらはも推量なせば、二人に暇は遣はさぬ、猶もこれより睦じう魚と水との交りなし、行末長う仕うるが何よりわらはへ忠義なり、誰が企みといふことも、深く問はねば此儘に、只何事も水となし、仲睦じうしてくりやいの。
竹浦　一度ならず奥さまの、お情厚き今のお詞、
漣　あだおろそかに思召さず、
腰○　此場のことはこれぎりに、
□　お心清き奥さまの、
△　御意に隨ひお二人とも、

◎ 仲睦じう遊ばすが、
竹浦 お上へ忠義で、
腰元皆々 ございまする。
お卷 御立腹も遊ばさず、お情深きそのお詞、
しが 心を改め此末とも、仲睦じう、
兩人 いたしまする。
奥方 おゝよく聞分けてたもつたぞ、それでこそ自らも共々嬉しう思ひまする。さあ此上は兩人とも勝手に部屋へ下りやいの。
しが
お卷 有難うございまする。
岩浪 左様なれば人形の、
朝霧 此場で御詮議、
四人 遊ばしませぬか。
奥方 さあそれはわらはが胸に納めて、やがてそち達四人の者も、
四人 や。

奥方　いやさ、四人も共々下りやいの。（トこれにて四人氣味の惡き思入）

岩浪　證據となりし人形を、

朝霧　私共へ、

四人　お預かりを。

奥方　此の人形は自らが、後日の詮議に預かり置くぞ。

岩浪　それではどうやら、

三人　あもし。（ト押へる。お卷おしが思入あつて、）

しが　左樣なれば、仰せにまかせ、

お卷　お先きへ御免を、

兩人　蒙りまする。

ト唄になり、おしが先に敵役の女中四人奥方へ辭儀をなし、お卷を尻目に掛けて上手へはひる。お卷跡へ殘り、愁ひの思入にて辭儀をなす。奥方も不便なる思入、唄になり、竹浦はじめ皆々へ辭儀をなして下手へはひる。奥方跡を見送り思入あつて、

奥方　これ竹浦、そなたは詰所へ參り、重左衞門に參るやう申し傳へてくりやいの。

竹浦　畏りましてござりまする。（ト合方にて竹浦下手杉戸へはひる。奥方人形を取り上げ、）

奥方　殿のお覺えよきを嫉みいたせし事と思はるゝが、斯かる人形こしらへてわらはとしがを呪ひしなど、不便や奄が無實の災難、是れに附けても人として斯樣な心は出すまじ、まして女子は猶更に奉公いたすものなどは、朋輩同士睦じく陰日向なく主に仕へ、親に孝行盡すのが人たるものゝ誠の道、返すぐ\もそち達もこれを手本に邪な心は必ず出すまいぞよ。

腰○　拜見してさへ身の毛も彌立つ、この人形の針の數、

□　積る惡事は末々まで、知れずに居らう筈なきに、

△　かゝる巧みをいたせしは、誰が仕業かは知らねども、

◎　これを敎へに私共も、

○　奥さまのお諭しを、

△　守りまするで、

五人　ござりまする。（ト爰へ下手より竹浦出て、）

竹浦　はツ、御召しによつて重左衞門、同道いたしてござりまする。

奥方　これへ通しや。

竹浦　はッ、重左衛門さま、これへお通り遊ばしませ。
重左　はッ。(ト誂への合方になり、下手より重左衛門纔上下無腰にて出來り、下手へ平伏する。)
奥方　竹浦漣兩人殘り、跡は暫く次へ立ちや。
腰元四人　はッ。(ト下手へはひる。)
奥方　重左衛門これへ。
重左　はッ。
竹浦　御意でござれば、お進み遊ばせ。
重左　はッ、御免下しおかれませう。(ト合方きつぱりとなり、よき所へ住ひ、)急お召しにより取り敢ず罷り出ましてござりまするが、して、御用の趣きは、何等の儀にござりますな。
奥方　火急に呼びしは外ならず、まきとしがとの間柄に計らず不和が起りしゆゑ、打捨て置かれず其方に、竊に相談いたしたいのぢや。
重左　むゝ、不束者ゆゑ妹まきに、不調法でもござりましたか。
奥方　いや決して左樣な譯ではない、仔細を篤と聞いてくりやれ。(ト合方になり、奥方竹浦に思入、竹浦心得、漣と兩人にて上下の杉戸を明け四邊へ心を配るこなし、奥方思入あつて、)重左衛門、それを見やれ。

重左　はツ。（ト件の人形を取り上げ見て、）此の人形に記しあるは、志賀山や松の操も諸共に、吹きしほらする花の夜嵐、心ありげなこの詠歌。

奥方　名木の志賀にしがを准へ、松の操とわが名を詠み込み、吹きしほらする夜嵐に二人を呪ひし此人形。

重左　して、此品は何者が企みし事でござりますな。

奥方　さあその本人は未だ知れねど、御殿の内に邪な惡事をたくらむ者あつて是れを證據にそなたの姪まきが斯かる巧みをせしと、心善からぬ者共が種々にまきを苛める所へ、折よくわらはが參り合せ、疑ひ受けし身の難儀は言ひ解いてはやつたれど、まきとしがとは妾同士、必ず此後兩人のなか不和を生じるは鏡にかけて見るが如し、それを如何にも案じるは同じ女子であるけれど、しがは人に負けぬ氣性、まきは內輪な產れゆゑ、一旦事は濟んだれど假にもわらはを呪ひしなどゝ言はれしことを苦に病みて、女子の狹い心より若しもの事でもある時は、如何にもあれが不便と思ひ、殊には左樣な取沙汰が世間へ知れゝば家の瑕瑾、そなたは姪のことなれば、かほどにわらはが思ふことを篤と當人に申し傳へ、心得違ひをいたさぬやう、よう言うてたもひなう。

（ト奥方よろしく思入にて言ふ、重左衞門有難き思入にて、

重左　冥加に餘るその仰せ、篤とまきに思召しを、申し聞かすでござりまする。
竹浦　ても有難き奥さまの、御慈悲深き今の仰せ、及ばずながら私共も。
漣　お巻さまへ此趣き、お傳へ申すでござりまする。（ト重左衛門思入あつて、）
重左　おしがどのと姪まきの中に不和を生ぜしは、拙者推量仕るに、過日老臣方の內意を受け、竊に巻より諷諫を賴みしことがござりましたが、多分はそれより遺恨をば、生ぜし事と存じられまする。
奥方　それは如何なる仔細にて。
重左　一通りお聞き下され。（ト合方きつぱりとなり、ぢり〳〵と前へ進み、）是れにござる女中衆は他聞を厭はぬ方々ゆゑ、心置きなく申し上げまするが、巻より上へ諷諫せし一儀と申すは別儀にあらず先達て老臣方が集會あつて評議の上、殿には相撲を好ませたまひ、小野川始め數多のお抱へ、これが爲に年々お物入り嵩みますれど、御慰みに相成ることゆゑ老臣方も其儘に、御機嫌を憚りて等閑に打過ぎしが、當時諸侯にお抱へ多くその相撲の勝負より、抱へ主の遺恨となり敵を設くること多く、既に當春雷電に小野川が負けしより遂に松江侯と御仲惡しく、御一家中に不和を生じそれのみならず、其時々に誰を恨み彼れを恨み互ひに吳越の思ひをなし、臣下騷立つ其時は遂に

は天下の大亂にならん事も計られず、將に一人貪戾なれば一國亂を起すの教へ、早く防ぐにしくはなしと、評議は一決いたせども老臣方より御諫言、表向きで申さうより當時殿の御意に入るお卷どのより諷諫なさば御採用あらんとて、拙者此儀をまきへ頼み、竊に申し上げさせしに、速に御承知あつて、小野川始め殘らず御暇、これ老臣の方々がお家を思ふ忠義の功、然る所おしがどの其外數多の女中衆が、殊の外なる相撲贔屓に、まきが諷諫せしゆゑと一途に思ひて恨みを含み斯かる無實の罪に落し、亡きものにせん企み事、淺慮なることでござる、まつた有難き思召しは篤とまきに申し聞けて、御奉公大切に勤めますやう申し諭すでござります。

トよろしく思入。奥方も思入あつて、

奥方　俄に相撲に暇出しは何か仔細のあることゝ、わらはも存じ居つたるが諸侯と不和にならんを厭ひ老臣どもの計らひなりしか。

竹浦　斯かる事とは知らずして、お卷さまのみお恨み申し、

漣　遺恨の種の人形に、人を呪ひしわる巧み、

竹浦　いつかは晴れて元々の、仲ようお勤め遊ばすやう、

漣　お頼み申すは、

兩人　重左衛門さま。

重左　その儀は必ずお案じあるな、何やう彼等が申さうとも逆らひさへいたさねば、柔よく剛を制すの譬へ、日ならず睨み合ふやうに、事平穏に相成りませう。

奥方　とはいへ素直なままにのみ、斟酌さすは不便なり、假にもわらはに譬へたる此人形に針をさし、思へば憎き門人の者、詮議いたして窮命させよ。

重左　はツ、仰せにはござりまするが、只今事を荒立てなば如何なる變を生ぜんも、計りがたなく存ずれば暫く御猶豫下さりませ。

奥方　ぢやと申せども、憎き奴ゆゑ、

重左　濁りし水も打捨て置けば、自然と清く澄む道理。

奥方　すりや此儘に、

竹浦
漣　御詮議は、

重左　拙者が胸に。（ト扇にて胸を叩くを道具替りの知せ）納めてござる。

トよろしく思入、奥方は安堵の思入、笛の入りし合方にて道具廻る。

（淺間家通用門の場）――本舞臺一面の平舞臺、眞中に赤き通用門、上の方潛り附き、双方とも締切り上下一面海鼠壁、日窓のある長屋の張物、此裾石垣溝の書割り、日覆より松の釣枝、總て淺間家通用門の體、木魚入り、すらやらかの唄へ、六ツの拍子木を冠せし鳴物にて道具留る。と右の鳴物にて、花道より火の見番吾助、袴大小のこしらへにて頰冠りをなし、酒に醉ひたるこなしにて出來り、

吾助　昔馴染ぐらゐ世の中に賴もしいものはねえ、同じ大津で育つたとて、今大關でばり〳〵する小野川關が昔を忘れず、行きせえすればよく來たと、おれに飲み代をくれるのは、實に嬉しい志しだ今日も非番で尋ねて行つたら一兩金をくれたゆゑ、赤羽根橋の釜の蓋で片足あけてちよつぴり遣つたが、つい一升が二升となり懷のいゝ所から彌太でもねえと鐵炮鍋、さいの味は忘れられねえ。おゝ忘れられねえといやあ、今爰へ山内の方から急いで來るは、おれが惚れて居るお卷さんの女中だが、所詮殿樣の喰物はおれが口へはむづかしいから、疾からあいつを喰ひてえと思つて居たに丁度幸ひ通用門へ來るは必定、一番こゝらへ網を張つて、あいつを獲物にしてえものだ。

トひよろ〳〵しながら舞臺へ來り、下手にしやがみ居る。やはり前の鳴物にて花道よりお仲、百度緡を三本持ち足早に出來り、

お仲　辨天さまで一心にお百度を上げて居るうち、切通しの六ツを打ち、まだ三本殘つてゐれど御門留

めを案じるゆゑ、殘りはお部屋で上げませうわいな。(ト舞臺へ來る、爰へ吾助出て、)

吾助　そこへ行くのは、お卷さまの女中衆ではないか。

お仲　はい、召使の仲でござります。

吾助　そいつは丁度いゝ所で逢つた。

お仲　どなたかは存じませぬが、御門を急ぎまするゆゑ、御免なされて下さりませ。

ト行かうとするを留めて、

吾助　いくらおめえが急いでも、今方六ッは打つたから、もう御門は締切りだ。

お仲　すりや御門止めになりましたか。

吾助　おれもやつぱり御門切れに實は弱つて居る所だが、おめえを道で見かけたゆゑ通用門の締切りも承知で爰に待つて居た。火の見番の鳴澤吾助だ。(ト手拭を取る、お仲見て、)

お仲　ほんにお前は吾助どの、どうぞ一緒に御門へ賴み。

吾助　いや御門はどうせもう明かねえ、その明かねえのを幸ひに、爰におれが待つて居たのは、疾から惚れたお仲どん、今夜は一番おれの思ひを、何と聞いちやあくれめえか。

トやはり酒に醉ひし體にて、お仲の手を取る。

お仲　いやらしい吾助どの、そんな事は知らぬわいなあ。

吾助　これさ、知らぬといふは情ねえ。（ト又手を取るを振拂ひ逃げようとするを、）待てといつたらまあ待ちねえ。（ト無理に引据えて、合方になり、）いくら表で騒いでも、捉嚴しい通用門、おめえもおれも勤めの身で時を違へた此身の科、所詮明けちやあくれねえから、よく似た話しにいつそのこと、爰を鹽冶のお屋敷と、是れから二人手に手を取りお輕もどきの落人で、山崎までは行かずとも戸塚の宿に身寄りがあるから、伴内兼ねた勘平の女房になつた料簡で道行氣取りで出掛けたら、ぶら／＼行つても東雲の東のしらむ時分には、吉田橋まで行かれようから、うんと言つて行く氣はないか。

　　　　トお仲に寄り添ふを、

お仲　えゝも、常談どころではない、ちとこつちに氣掛りな事があつて氣が急くゆゑ、どうぞ退いて下さんせ。

吾助　いや、色よい返事を聞くまでは、めつたに爰は退かれねえ。

お仲　えゝも、退いて下さんせといふに。（ト吾助を振拂ひつか／＼と門へ行き、）どうぞ明けて下さりませ。

吾助　はて、無駄だから、來いといふに。

トひよろ〳〵として引出す、是れをやはりすちやらかの鳴物になり、吾助始終生酔ひのこなしにてお仲を捉へようとする立廻りあつて、吾助を突き倒し門へ行つて叩く、吾助起き上つて又捉へる、立廻りよき程に門の潜りより、菖蒲革袴股立の足輕、弓張提灯六尺棒を持ち出來り。

足輕　えゝ御門前でかしましい、靜かにせぬか。

お仲　おゝ此間に早う。

吾助　どつこい、さうは。

ト三人でごつちやになり、弓張りを落し暗黒になる、此うちお仲つか〳〵と門の内へ走りはひる、吾助足輕をお仲と心得抱き附くを。

足輕　えゝ、無禮者めが、（ト六尺棒にて足を拂ひ、提灯を拾つて門の内へはひり、潜りをぴつしやりとしめる。）

吾助　あゝ痛え〳〵。（ト起上り四邊を見廻し、）女を逃した擧句の果、おれはやつぱり外へ居殘り、これぢやあ屋敷へ歸られねえが、此の辻占ぢやあ三田へ行つても、今夜は敵は。（トひよろ〳〵としてしやんと留るを道具替りの知せ、）とれねえわえ。

トやはりすちやらかの鳴物にて、吾助よろしく。此の道具廻る。

（お卷自害の場）――本舞臺元のお卷の部屋、小机の上へ香爐を置き、此前にお卷書置の封じをして居ろ、此の模樣床の淨りにて道具留る。

〽早川は暮れて山々の木の葉も散るか、ばら〳〵と板戸に當る雨音に、いとゞ寂しき長廊下緣短き行燈の消ゆる間近き死に支度。

ト此うちお卷書置を机の上へ載せ、四邊へ思入、床の合方にて、

お卷 一方ならぬ奥さまの御慈悲に無實はのがれしが、此後あれを根に持つて、又もや難儀を受けるは必定、それを思うてお暇を願へどお許しなき上は、死ぬより外に思案はなく、一部始終を書殘し今宵限りに死ぬ覺悟、嘸や跡にてお上を始め父母さまや伯父さまが、足らはぬものと私を思召すでござりませう、是れも定まる皆約束。

〽お許しなされて下さりませと、詫びる御殿も西の方、今朝御機嫌を伺ひに出しが此世のお別れかと、兩手を合せ伏し拜みはツとばかりに泣き伏せしが、四邊憚り聲ひそめ。

トお卷上の方を伏し拜み、はあと泣かうとして袖を口へ當て忍び泣きに泣いて氣を替へ、

今更いうて返らねど、邪魔なきうちに少しも早く。

〽かねて嗜む短刀を拔かんとなせし其ところへ。

ト傍にある短刀を取上げ、拔かうとする、爰へ以前の猫走り出てお卷の手へ縋る。

又じやれるのか、あゝ畜生ゆゑに今わしが死ぬも知らずに取り附いて、いつものやうにじやれるのか。とはいふものゝよう聞きや、そなたもわしが可愛がり、今までは飼主ぢやが、もう今日よりして此わしは。

〽そなたを養ふことならぬは、最前の御詮議にて、其場で科は晴れたれども。

武家奉公の行ひにて奥さまを呪ひしなどゝ、一旦汚名を受けたれば假令お許しになればとて、身の潔白を立てねばならぬ。

〽そなたも性ある獸なら、主のいふ事聞き分けて。

此後悪戯などをして、人に打たれぬやうにしや、又その上にこれまでに。

〽朝夕抱き片時も側を離さぬそちなれど、是れが別れか悲しやとわつとばかりに歎きしは、餘所の見る目も哀れなり、斯くては果てじと氣を取直し。

猶豫いたす所でない。少しも早く、さうぢや〳〵。

〽短刀取つて唱名の聲に又もや取附く猫。

此手に縋り止むるはそちもわしが死ぬを知つてか、恩を思うて止むるなら我が亡き後で其人に、

きつと恨みを。(ト思入あつて、)ようおとなしうしませうぞ。

〽言ひつゝ傍へ取りのくれば、獸ながらに愛着に、又もや飛びつき止むれば、時や過ぎんと首筋をしつかと押へ、膝へひッ敷き、咽喉へがばと突き立て、あッと苦しむ其所へ。

ト此内お卷手拭で口を結へ、短刀を取上げる、又猫其手に縋るをもう是れまでといふ思入あつて、我が膝へ猫を敷き、短刀を咽喉へ突き立てる。是れにて猫下手へ飛び出し、頻りに鳴き立てる。ばた〳〵になり、下手より以前の重左衞門走り出て來る、爰へ猫出で袴の裾を啣へ、引つ張る思入。

重左　はて心得ぬこの有樣、卷が飼ひ置くこの猫が、口はきかねど部屋の方へ袴を啣へて引ッ張るは、さながら我を導く樣子、こりやたゞ事ではあらざるわえ。

〽心ならずも猫に引かれ、お卷の姿を見てびつくり。

トつか〳〵と下手より二重へ上り、お卷の體を見てびつくりなし、

やゝ、こりやお卷には自殺なせしか。

お卷　無實の罪の言譯に自殺いたしてござりまする。

重左　えゝ早まつた事いたせしよな。

〽今一足早くばと、悔の八千度重左衞門、苦痛に弱るを介抱なす、折柄お仲が立ち歸り。

ト重左衞門お卷の短刀を拔き取り、介抱する、ばた〳〵になり、花道よりお仲走り出で來り、直に舞臺へ來て此體を見てびつくりなし、どうとなる。

お仲　やゝ、こりや旦那さまには、えゝゝゝゝ。

〽心も空に氣も顚倒。（トお卷の側へ行く。）

旦那さまお心慥にお持ち遊ばせ。あゝ斯うと知つたらお百度を、上げずにお側に居ようもの、あゝ殘念なことをいたしました。

〽手負ひに縋り遲かりしと、悔み歎けば重左衞門、同じ思ひに齒がみをなし。

重左　われも先刻奧さまから、斯かる事のなきうちに言ひ諭せよと仰せを蒙り、直に是れへ參りなば斯かる最期はさせまじきに、聊か表の御用ありて半時遲れしそれゆゑに、非業な最期させしかと思へば殘念至極なり。

お仲　斯ういふ事のないやうに、辨天さまへお百度を上げに參つたばつかりに、あなたにお命捨てさせました、聞えませぬは辨天さま、なぜに留めては下さりませぬ。

重左　その恨みは尤もなるが、幼き時より孝心深くかゝる素直な産れの者に、天の惠みのあらざるは是れぞ前世の約束ならん。

〽悔いて返らぬ事なりと、お仲を勵まし重左衞門、苦しむ手負ひをいたはりて、

ト重左衞門よろしく思入あつて、お卷を引き起し、

こりや卷、申し置く事あるならば、息あるうちに早く申せ。

〽言ふに苦しき息をつき。

お卷　委細はそれなる書置に認めあれば跡々にて、御覽なされて下さりませ。

〽机の方へ指させば、重左衞門は手早く取上げ。（ト重左衞門机の上の書置を取り。）

重左　すりや、此の書置に記しあるとか。（トお仲お卷に縋り。）

お仲　もし旦那さま、なぜ此樣な情ない、あなたは自殺をなされました。

お卷　わしが命を捨てたのは、疑ひ受けし身の言譯、これも誰ゆゑ四人の者ゆゑ。

お仲　嘸御無念にござりませう。

お卷　おゝ、悔しいわいなう。

お仲　そのお恨みは、きつとお晴らし申しまする。

お卷　晴らしてくれるか、忝けない。

〽いふ息さへも四苦八苦。

重左　最早その身の知死期と見ゆる。
お卷　これが此世の。（ト苦しき思入。）
お仲　はあゝ。（ト泣伏す。）
重左　これ、伯父が見えるか。（トお卷見えぬ思入あつて、）
お卷　もう見えませぬ。
〽いふが此世の別れにて、風に散り行くもみぢ葉の、朱に染みたる手を合せ、果敢なく息は絕えにける。
ト此うちお卷よろしく思入あつて、手を合せ前へばつたり倒れる。お仲縋り泣く、重左衞門も涙を拭ひ愁ひの思入、ばた／＼になり、下手より、以前の竹浦雪洞を持ち出來り下手にて、
竹浦　只今これへ奥さまが、入らせられまする。
重左　なに、奥さまが入らせられる。
竹浦　左樣にござりまする。
重左　血汐の穢れ恐れあり、此の亡骸を取り隱せ。
お仲　はッ、畏りました。

〽かたへの屏風建廻し、死骸を隱す其所へ、樣子如何にと腰元を、案内に奥方しづ〳〵とお卷が部屋へ入り來り。

トお仲下手にある六枚屏風を立廻しお卷を隱し、重左衞門お仲平舞臺へ下り手を突き居る、竹浦下手へ雪洞を上げて出迎ふ、下手より以前の奥方操の前先きに、腰元の○雪洞を持ち附添ひ出來り、直に上手へ通りよき所へ住ふ、重左衞門お仲はッと平伏する。奥方思入あつて、

奥方　重左衞門、卷は自殺をしはせぬか。

重左　はッ、恐れ入つたる其仰せ、御推察の通りまき事は、自殺いたしてござりまする。

竹浦　え、すりやお卷さまには、

漣　御自殺、

兩人　ありしか。（トおどろく、誂への合方になり、）

奥方　日頃の氣質に思ひ迫り、斯かる事があらうと思ひ、そなたに諭しを申し附けしが、參らぬ内に自殺なせしか。

重左　はッ、先刻仰せを蒙りまして直に申し諭さんと存ぜし折柄、松江侯より御使者御入來ありしゆゑ右のお受けをいたせし後、これへ參れば自殺の後、僅か半時の遲れにてあなたさまの御慈悲をば

奥方　無足になせし拙者が誤り、申し譯もございませぬ。

御使者受けせしとあれば遲刻せしとて是非もなし、僅か半時の遲れにて自害させしは殘念ながらこれも定まる約束ならん、殿にも此事聞し召さば嘸かしお悔み遊ばさん、召仕も多くあれど陰日向なくわらはに仕へ、人に勝れし志し、末頼もしく思ひしに、殘念な事いたせしぞ。

〽懐紙を顏へ當て、咽ぶ涙を拭ひたまへば、附添ふ二人も涙にくれ。

ト奥方鼻紙を顏へ當て、愁ひの思入。

竹浦　先刻無實の明り立ち、四人の者の企みなりと、事明かに知れたれば、

漣　か〻る自殺をなされずとも、よろしき事を殘念な、果敢ない事で、

兩人　ございました。

奥方　して重左衞門、其方は息あるうちに逢うたるか。

重左　はツ、未だ息ある其うちゆゑ、あなたさまの思召しを申し聞かしてございまする。

奥方　それぞ盡せぬ血筋の縁、僅かな事にて自らは、息あるうちに逢はぬが殘念、殘り惜しう思ふぞよ。

重左　はヽ有難き其仰せ、冥加至極にございます。（ト重左衞門辭儀をする、奥方お仲を見て）

奥方　あれに居るは召仕か。

竹浦　はッ、仰せの如く、仲と申す召仕にござりまする。

奥方　かね〴〵まきへ其方が忠義を盡すと申すこと、皆の者より聞いたるが、頼みに思ふ主に別れ、そちが愁傷察しやるぞ。

お仲　此身に餘る仰せを蒙り、恐れ入りましてござりまする。

重左　こりや〳〵、又者の身で奥さまへ御直のお受け、失禮なるぞ。

奥方　いや、斯かる折柄苦しうない。

お仲　有難う存じまする。

ト冥加に餘りひれ伏せば、奥方はうなづきたまひ。

奥方　して重左衞門、其方へまきは何ぞ申し置きしか。

重左　もはや苦痛に堪えかねて何も申しませぬが、かねて認め置きました拙者へ宛の書置を、渡しましてござりまする。

奥方　なに、書置がありしとか、息あるうちに逢はざれど、心ゆかしに讀み聞かせよ。

重左　仰せにはござりまするが、死する今際に認めし書置ゆゑに齟齬のみにて、お聞きに入れては恐れあり。

奥方 決して苦しうないほどに、是非ともこれにて讀み聞かせよ。
重左 ではござれども。
竹浦 御遠慮なされず、此場にて、
漣 疾く〳〵お讀み、
兩人 なされませ。
〽再度の仰せに是非なくも。
重左 然らば是れには、お聞きに入れん。
〽封押し切つて打見れば、文字も正しき健氣さに、浮む涙を呑み込みて、
ト重左衛門書置を開き見て、愁ひのこなしあつて、誂への竹笛入りの合方になり、
「一筆書殘しまゐらせさふらふ。月も盈れば虧くるといふ譬の如く、私事賤しき身をばお取立てにて殿様のお情蒙り、斯く結構な身となりしも奥様の御蔭ゆゑ、朝夕御恩を拜しまゐらせさふらふ、御上のお覺えよきを兎角に嫉む者あつて今日しもおしがどのゝ部屋にて、岩浪どの初め門人の衆かねて企みし事と見え、私召仕仲が粗相を打寄りて打擲なされ、其砌り懷中より仲が落せしと申し、我名を記せし袱紗包みの中より怪しき人形出し、奥様とおしがどのを此まきが呪ひしと無實の罪を

申し掛け候へども、此方覺えなき事ゆゑ申し譯いたし候處、誰一人聞くものなく如何はせんと存じ候折柄、奥樣の御慈悲にて其場は故なく相濟み候へども、又もや此後如何やうなる憂き名を受けんも計られず候儘、針の筵に在り候心地、これと申すも御上のお覺えよきを羨みての事に御座候、これを避け候には御暇願ひ候か死するより外これ無く候まゝ、再度お暇願ひ候へども御聞き濟み御座なく候ゆゑ、不忠不孝と存じ候へども自殺いたして相果てまゐらせ候。何卒伯父上より御上へお詫びなし下され、御取成し願ひ上げまゐらせ候、又里方の母へはあらはに御話し下されまじく候、私自殺と承はり候はゞ、忽ち持病差起り盲目となり候はゞ、先立つ不孝に又候や不孝を重ね候まゝ、跡にて御明し下され候やう御頼み申し候、猶弟與吉こと利發には候へども兎角惡戲いたし候、惡きものは伯父樣と常に申し居り候ゆゑ御叱り下され行末家名を立て候やう御世話願ひ上げまゐらせ候、又召仕仲ことは御奉公に出し砌りより厚く世話いたしくれ候ゆゑ、私妹同樣にお目をかけ下され、衣服の内より調法なる品記念に御遣はし下され度候、わけて不便なは飼猫玉こと、私なき後は何れへなりとも御遣はし下され候やう御頼み申し上げ候。返す〳〵も奥樣へ御恩も送らず先立ちまする不忠の御詫び、伯父上よりよしなに願ひ上げまゐらせ候。まだ〳〵申上度きこと海山御座候へども、涙に筆も走りかね心に思

ふ十が一つ、あら〳〵書きのこしまゐらせさふらふ」

〽ものゝふの身に泣くまじと、涙かくせど聲曇り、いとゞ哀れに讀み終れば、聞く奥方も腰元も、わけてお仲は正體なく人々袖を絞りける。

ト此うち重左衛門よろしく愁ひの思入にて讀む、奥方、お仲みな〳〵同じく涙を拭ひ愁ひの思入、

奥方　殿のお覺えよきを嫉み、心善からぬ者どもが無實の罪を負はせしゆゑ、盛りも待たで夜嵐に可惜花をば散らせしは、返す〴〵も殘念なるぞ。

重左　あなたの仰せを疾に申さば斯かる最期はさせまじきに、鶍となるも其身の不幸、母には知らせくれるなと申せど包む譯にも參らず、母へ打明け申しなば悴はあれど幼年ゆゑ、杖柱とも思ふ娘その歎きは如何ばかり、思へば不便な事でござる。

〽娘に准へて重左衛門悲歎の涙にくれければ、見る人々も共々に、袖に時雨の古川や、流れの末の赤羽根に水嵩まさる如くなり。（ト皆々よろしくあつて、）

〽奥方涙を拭ひたまひ、（ト奥方書置を取上げ見て、）

奥方　定めて心急かれたらうに、文字も亂れず美くしく、殘る方なき此の書置。

お仲　數なりませぬ私を、妹同樣目をかけてと、細々とのお書置、有難涙にくれまする。（ト傍に居る猫

に向ひ、）これ玉、そなたまでも旦那さまが、身の行末をお頼みなるぞ。（ト猫あたまを下げ居る、）

竹浦　心あつてか、ひれ伏して、

漣　どうやら涙をこぼす樣子。

奥方　息あるうちに逢はぬが殘念、せめて是れにて死顏に一目逢はしてくりやいの。

重左　有難き仰せながら、忌はしき姿をば御覽に入れるは恐れあり、亡き當人も耻入りませう、此儀は御免下さりませ。

奥方　卷が耻入ることならば、逢ふのは思ひ止るであらう。

重左　只此上は一遍の、御回向をなし下さらば、それが何より冥土へ土產。

奥方　さういふことなら詞に隨ひ、

お仲　冥加に餘る御厚情、

竹浦　千僧萬僧の供養より、

漣　遙かに勝る、

三人　善知識。

重左　これにて御回向、（ト香爐を載せし香盆を前へ出すを、木の頭、）なし下さりませう。

ト辭儀をなす、本釣鐘誂への合方にてよろしく、

ひやうし　幕

五幕目

長坂下於道内の場
淺間於卷部屋の場
同　長局廊下の場

〔役名――高雄重左衛門、鳴島音助、八百屋與兵衛、お卷弟與吉。奥女中岩浪、同朝霧、同霧島、同小濱、與兵衛妻お花、お卷母お道、部屋方お仲、奥女中竹浦、同漣等。〕

〔長坂下植木屋の場〕―本舞臺三間常足の二重、正面暖簾口、押入に佛檀の仕込み、下手腰張りの茶壁、竹格子の中窓、上の方一間掃出し窓のある障子屋體、下の方一間葺下しの下家丸太の捨柱、此向ふ建仁寺垣、前の植木棚へ鉢植を並べ、四ツ目垣の褄、いつもの所門口、是れへ續き低き四ツ目垣竹編の枝折、傍に榎の立木、これに烏大分群り居る、ずつと下手植込みの見切り、總て長坂下植木屋の體、二重に二枚折の屛風、此前に子役の手習机、下手に與吉半纏股引尻端折りにて腰へ花鋏をさし

鉢植をこしらへ居る、是れを合長屋二人立ちかゝり見て居る、此の見得稽古唄、烏笛にて幕明く。

○　太郎兵衛さん、この萬兩を買ひなさらぬか。

□　欲しい事は欲しいが、驚風の蟲に子供を取られ、物入り續きで居るから、無駄な植木は買はれませぬ。

與吉　伯父さん、代はいつでもいゝから、よけりやあ萬兩をお持ちなさい。

○　萬兩貸してくれるとは氣前のいゝ子だ。

□　借りた烏の三兩が氣になる所へ、萬兩の借りをふやすはどつとしない。

ト此うち烏頻りに啼くゆゑ、

○　烏金の氣になるより、旅烏でも來たかして、今朝から啼き續けで、耳やかましくつてなりはせぬ、しい〳〵。

□　こんなに烏がかあ〳〵啼くは、これも何ぞの知らせであるか、どうで碌な事ではあるまい、しいしい。

與吉　どれ、おいらが烏を追つて上げよう。（ト竹竿にて烏を追ふ、是れにて烏日覆へ引いて取る、）伯父さんみんな逃げてしまつた。

○　忌々しい鳥だ。此子が追つたら、あんな高い所へ逃げていつた。
□　金を借りて覺えがあるが、鳥は高いに極つたものだ。
與吉　それぢやあ伯父さん、是れを安く負けて上げよう。（ト小さな鉢植を出す。）
○　なあに常談だ、買ふのではない。（ト言ひながら取つて見て、）成程お前は年に似合はず、小鉢物をこしらへるのが、なか〳〵大人も跣足だ。
□　わしも好きで箱庭ぐらゐはこしらへるが、素人では行かぬものだ、今まで小梅に居なさる時分、植木屋でもして居なすつたか。
與吉　あい、おいらのちやんは植木屋で小鉢物を仕立てるから、見やう見眞似で植ゑますのさ。
○　それにしても、なか〳〵器用によく出來ます、感心なことだ。
□　さうしておつかあは、何處ぞへ行きなすつたか。
與吉　いえ、奥に仕事をして居るよ。
ト合方きつぱりとなり、奥よりお卷の母お道、盆へ茶碗と土瓶を乘せ是れを持ち出來り、
お道　お長屋の衆、よくお出でなされました、お茶を入れましたから、一つお上りなされませ。
○　それは何より御馳走、有難うござります。

□　今爰の前を通りかゝると、此子の植ゑて居るのを見て、好きな所からつい長居をしました。

お道　ろくな事も出來ませぬ、好きでござりますから、小商ひにさせて置きます。（ト此内兩人茶を飲み）

○　これは結構な茶だが、失禮ながら餘程いたしませうな。

お道　何程のお茶でござりまするか、娘から貰ひましてござりまする。

□　ほんにお前の娘御は、淺間樣のお屋敷へお妾に出てござるさうな、お屋敷から貰はつしやつては良い筈だ。

○　御大名の其内でも、御内福で派手なお屋敷だから、娘御は仕合せだ。

□　まだお目には掛らぬが、定めてよい御器量だらう。

○　それに爰から近いので、よい御都合といふものだ。

お道　久しく小梅に居りましたが、娘へ便りをいたしまするに道が遠うて不便ゆゑ、こちらへ越してまゐりました。

○　元植木屋をしなすつたさうだが、此の麻布邊も土目はよし、

□　此子が大きくなんなすつたら、立派な植木屋になんなさい。

お道　それを樂みにいたして居ります。

與吉　おつかあお湯をさして來ようか。

○　どうか最う一つ馳走して下さい。

□　これさ、何ぼ麻布でも餘り氣が知れぬではないか、最うお暇にしよう。

お道　まあ、よろしうございまする。

○　おゝさうであつた、今日はこなたの所の百ヶ日であつたの。

□　晩には茶など入れますから、百萬遍に來て下さい。

與吉　晩においらが行きませう。

□　雜司ヶ谷まで是れから行くが、こなたは何處へ行きなさる。

○　わしもそこまで用があるから、一緒にお暇しよう。

お道　もうお歸りでございまするか。

○　大きに馳走になりました。（ト門口へ出る。）

兩人　はい、左樣なら。

□　二人で斯うして出た所は、

○　葬ひの知せのやうだ、はゝゝゝゝ。

ト稽古唄になり、兩人花道へかゝる。花道より序幕の與兵衞、脚絆草履尻端折り、同じく妻お光、世話女房草履をはき、餅花と飴袋を提げ出來り、花道にて、

お光　もし、お道さんの家は、もう直きでござんすかえ。

與兵　慥か爰だといふ事だから、近所の人に聞いて見よう。（ト合長屋の兩人行逢ひ、）もし〳〵、少々ものが承はりたうござります、此頃本所の小梅から越して參つたものが、此の近所にござりますか。

○　此向ふの家も、小梅から此頃越して來なすつたが、名は何といひなさいます。

與兵　お道と申す女に與吉といふ子供がござります。

□　それぢやあ爰の家でござりまする。

お光　大きに有難うござりまする　（ト入替りお光を見て、）

○　夫婦連れで目黒だな。

□　よい女だが、人の女房ぢや詰らねえ。（ト○□は花道へはひる。與兵衞お光門口へ來て、）

與兵　はい御免なさい、お道さんの家はこちらかね。

與吉　はい、爰でござります。（ト門口を明け、）や八百屋の伯父さんか。

お光　さういふのは、與吉さんかえ。

與吉　おつかア、本所の伯父さんと伯母さんがお出でだよ。（ト此内お道出て來て、）

お道　これは遠方の所を、よく尋ねて來て下さいました、さあ〳〵爰へ來て下さいまし。

與兵　それぢやあ姉さん、御免なさい。

與吉　よく知れたねえ。

お光　直に知れたわいな。（ト兩人捨ゼリフにてよき所へ住ふ。）

與吉　おつかア此茶を上げようか。

お道　まだ出るかどうだか、まあそれをお上げ、今入れて來るから。

お光　お構ひなさいますな。（ト此内與吉兩人へ茶を出し辭儀をする、お光机を見て、）與吉さん、お手習ひをお始めかえ。

與吉　屋敷からお手本を書いて貰つて、毎朝習ひます。

與兵　大きくなつて不自由だから、精出して習ふがいゝ。

お道　好きでござりますから、自分用位は足るやうになりませう。

與兵　扨姉さん、此間から尋ねようと心では思つて居るが、つい忙しいのと遠いので、大きに遲くなりました、今日は朝からよい天氣に目黒へ參詣かた〴〵、こつちへ家見に參りました。

お道　それはよく心に掛けて來て下さいました、御夫婦共にお替りなく、此樣な嬉しい事はござりませぬ。
お光　其後は御無沙汰をいたしましたが、あなたもお達者でお嬉しうござりまする、久しう此邊へ參つた事もござんせぬが、小梅と違うてお家も廣く、よいお住ひでござりまするな。
お道　かういふ所へ參つたも娘が出世、二つにはお前方の御親切ゆゑ、實は此間からお禮旁々お家へもお尋ね申さうと心に思へど、留守居がなくつて、つい無沙汰なりました。
與兵　無沙汰はお互ひのことゆゑ、達者でさへ居なされば それが何よりよいといふもの、なあお光。
お光　ほんにさうでござんすとも。（ト餅花と節袋を出し、）遠方で何もお土産を持つて參りませぬが、是れは目黑へ參つたしるしに、與吉に上げませう。（ト出す、與吉取つて、）
與吉　やあ、よい物をおくれだ。（ト悅び、お道に見せる。）
お道　是れはよいお土産を、有難うござりまする。
與兵　何の、そんな詰らない物を、お禮で痛み入る譯だ。
與吉　伯父さん、伯母さん、有難うござります。おつかア奧へしまつて置くよ。
ト與吉これを持つて奧へはひる、與兵衞お道の樣子を見て、

與兵　見ればお前の眼病も、さつぱり治つたやうだね。

お道　藥師樣の御利益と、弟が惠んでくれた金で、得難い眞珠を用ひたので、忘れたやうに治りました。

與兵　それは何より仕合せなことだ。

お道　今困るのは持病の癪が、時々差込んでなりませぬ。

お光　それも時候が定まれば起る事もござんすまい、さうしてお爺さんはお替りはござりませぬか。

お道　あれも家に居つた時分は、兎角病身でござりましたが、お屋敷へ上つてから、めつきり丈夫になり、風さへ引かぬと申します。

與兵　一ツよくなつて來ると萬事さう行くものだ。それはさうと、いつぞや小梅で殿樣のお目に留つて上つたゆゑ、惡い譯はなけれど、お上のお首尾は何うでござります。

お道　殿樣はいふに及ばず、奥樣がお優しくお目を掛けて下さいますゆゑ、此上もない仕合せなれど、盈つれば虧くる譬の通り、お上の首尾がよいゆゑに朋輩衆の嫉みを受け、勤めにくいといふ事を文に書いてよこしますが、よければよいで是れも氣になり、苦勞の絶えぬ事でござります。

お光　それは御心配でござんせうが、一生上つて居る譯でなければ御辛抱さへなさんしたら、惡いやう

には遊ばしますまい、なあこちの人。

與兵　さうさ、どうでお上の受けがよいければ嫉みを受けるは當り前、假令朋輩衆が何といはうとも、お上の受けさへよければ勤まらぬことはあるまい。

お光　承はれば最う一人、お妾があるではござりませぬか。

お道　おしがさまといふのがありますが、其方はお卷と仲もよく、心の内は知れねども嫉む樣子はないとの事、したが、多くの女中のうちに四五人程惡いものがあるとやら、行つて見た事がないゆゑに案じられてなりませぬ。

與兵　お末奴に部屋方がゝゝえんと一口にはいふものゝ、さう惡い者ばかりもあるまいし、お卷も如在ない女ゆゑ、長く上つて居るうちには、勤めよくなるであらう。

お光　ほんに段々と馴れなさんしたら、お内に居るより却つて氣樂でござりませう。

お道　誰しも新參は辛いものゆゑ、わたしも以前の覺えがあれば、内で察して居りまする。

ト與兵衞思入あつて、

與兵　久しくあの子に逢はぬから、爰まで來た次手に一目逢つて行かうか。

お光　わたし達が行つても逢はれませうか。

お道　表向きは與兵衛さんが親になつて上つたれば、御錠口へ行つてさうおつしやれば、直に逢はして下さいます。
與兵　それでは爰から近いから、ちよつと行つて逢つて來ませう。
お光　もし遲くなつたら、今夜は泊めて下さいまし。
お道　以前と違つて別間もあれば、どうぞさうして下さんせ。
與兵　それぢやあ屋敷へ行つて來ませう。（ト兩人門口へ來て、）
お光　何も言傳はござんせぬか。
お道　折々便りをしますゆゑ、無事でさへ居れば、別に用はござりませぬ。
與兵　成程、近いからそれには便利だ。
お光　そんならお道さん、行つて來ます、
お道　泊る積りで御ゆるりと。
與兵　どれ逢つて來ませうか。（ト稽古唄になり、與兵衛先きにお光花道へはひる、與吉出て、）
與吉　おつかァ伯父さんは。
お道　今お卷に逢はうといふて、お屋敷へ行きなさんした。

與吉　それぢやあ歸りにお寄りかえ。
お道　遲くなれば泊る積りゆゑ、何はなくとも一口お酒を出したいが、何にしたものだらう。
與吉　おいらが何ぞ肴を見て來ようか。
お道　横町の魚屋に、何かあるか聞いて來てくりや。
與吉　あい／＼。（ト下手へはひる、又鳥來て啼く。）
お道　鳥影がさしたゆゑ誰ぞ來るかと思うたら、珍らしい二人の衆、それはよいがあの烏は氣になる啼きやうではあるわいな。
ト謎への合方になり、お道心にかゝる思入、花道より重左衞門羽織袴大小、紺看板の中間附添ひ出來り花道にて、
重左　不斷其方が使ひに參る、お卷どのゝ宿は何れぢや。
中間　はッ、向ふの家でござりまする。
重左　然らば、先きへ參つて案内いたせ。
中間　はッ。（ト駈拔け門口へ來て、）賴まう。（ト是れにてお道こちらへ來り、）
お道　いづれからお出でなされました。

中間　淺間家より御重役が、只今是れへお出でなされる。
お道　なに、御重役とおつしやりますは、どなた樣でござりまする。（ト此内重左衛門舞臺へ來り、）
重左　高雄重左衛門ぢや。（トお道びつくりして、）
お道　思ひがけない此所へ、どうしてそなたが。
重左　あいや用事あつて罷り越せば、許し召され。（ト內へはひり思入あつて、）こりや、其方は後刻追ひに參れ。
中間　はツ。（ト引返して花道へはひる。跡を見送り重左衛門よろしく住ひ、）
重左　扨姉上、久々にてお目に掛りまするが、御健勝にて恐悅に存じまする。
お道　そなたに姉と言はるゝも、面目ない我が身の上。（ト差しうつ向く、）
重左　これはしたり、最早二十歳打ち過ぎますれば、其の御斟酌には及びませぬ。
お道　實は眞身の姉弟ゆゑ、明け暮れ逢ひたう思うて居ました。
重左　手前も疾に御面談仕り度く存じ居れど、上を憚り今日まで、思はぬ御疎遠お許し下され。
お道　その逢はれぬも此姉が、心得違ひをいたせしゆゑ、
重左　それも月日に關守りなく、はや二昔の夢となり。

お道　今日が覺めたは年の德、
重左　然しあなたも御無事にて、
お道　こなたも堅固で、
重左　互ひに年を、
兩人　重ねました。（ト合方きつばりとなり、）
重左　見ればあなたお一人の御樣子、與吉は何れへ參りましたな。
お道　今ちよつと近邊まで、使ひに遣りました。
重左　左樣でござるか、姉といひ弟といひ、世間に稀な親孝行、あなたはお仕合せな事でござる。
お道　親の不孝に引替へて二人共親孝心、世の譬にもいふ通り子を持つて知る親の恩、二人の子供の孝心を見るに附けても跡先の考へもなく不孝なし、先非を悔めど兩親とも、疾に此世を過ぎ去れば是非なく朝夕お位牌へ、向うてお詫びをいたしまする。
重左　斯く御改心召さるれば、過ぎし不孝の罪は消え、草葉の蔭で兩親が嘸お悦びでござりませう。何にいたせ姉上には、よい子を持たれてお仕合せ、手前も世嗣を一人まうけ、先づは安堵いたしてござる。

お道　その噂も聞きましたが、今年は幾歳になりますか。
重左　最早十九歳になりまする。
お道　それは樂しみな事ぢやの。
重左　姉上には十代にてお卷をまうけられしゆゑ、親のやうには思はれませぬ、お早く子持になられましたな。
お道　それゆゑ知らぬ人達は末の妹と思ふよし、わしは心得違ひにて一度町家へ落ちたれど、娘は計らぬ幸ひにて、縫模樣を着るやうな立派な自分になつたのが亡き兩親への申譯、不束な身を御意に叶ひお上の御最屓蒙るは、一ッはお前の光りがあるゆゑ、どの位あれが身に肩身が廣い事か知れぬ。一言禮が言ひたうても逢ふ事ならぬ日蔭の身、わしは兎もあれ子供等の此末力となつて遣つて下されいの。
重左　切つても切れぬ眞身の伯父、必ず見捨てる事ではござらぬ。お氣遣ひなされますな。
お道　お卷も與吉もそなたといふ、歴然とした伯父があるので、仕合せな事ぢやわいなう。

ト悅ぶこなし、爰へ下手より與吉出來り、門口から重左衞門を見て、

與吉　いつか業平橋のお屋敷で、蜆を買つて下すつた伯父さん、よくお出でなさいました。

重左　おゝ與吉か、大層大きくなつたな。
お道　子供の育つは早いものでござるな。
與吉　おつかア魚屋へ行つて來たが、今日は不漁で何にもないから、煮染屋で芋か人參精進物にしたゞどうだえ。
お道　偶々來なさんした與兵衞さんに精進物でも上げられまい、それに青物渡世なれば、珍らしうはあるまいし、何にしたものであらうな。
與吉　それでも竹町の伯父さんの家は、お寺の前ゆゑ精進物の方がよからう。
ト　これを聞き重左衞門ぎつくり思入、お道も心にかゝるこなしにて、
お道　斯うして居てもあけ暮によければよいで苦勞になり、お卷が事のみ思ふゆゑか、此二三日は夢見が惡く心に掛つてならぬ所、精進物の、お寺の前のと、何心なくそなたは言へど、わしは氣になつてならぬわいの。さうしてお卷は、別に變る事はござりませぬか。
重左　おゝ、別に替ることはござらぬ。
お道　やれ〳〵嬉しや〳〵、昨夜あれが死んだ夢をあり〳〵明方見たゆゑに、もしやと案じて居る折柄、烏啼きが惡いゆゑ實は御晝の御膳さへ、胸に支へる程であつたが、替る事もないと聞き胸の痞が

下りました。（ト此内重左衛門切なき思入あつて、ほろりと涙をこぼす、お道見て心得ぬ思入、）わしの悦びに引替へて、お前は濟まぬ顔附に、ほろりと涙をこぼしたは、どうも合點の行かぬ事ではある。

重左 只今落涙いたせしは、姉上こなたがいとしいゆゑ。

お道 え、此わしがいとしいとは、そりや何で。

重左 さあ、お卷が死せし夢を見てさへ食事が咽喉へ通らぬ程では、人は老少不定ゆゑお歎きあるが思ひ遣られて、おいたはしうござります。（ト是れを聞きお道案じる思入にて、）

お道 それではお卷が、どうぞしましたか。

重左 計らず昨夜、いやさ、計らざる病にて、もし死去なさば何となさるゝ。

お道 そりや定業なら是非ないことゝ、あきらめいで何としませう。

重左 すりやお歎きはなされませぬか。

お道 はて、きつい念の入れやう、今は町家に暮すともとはそなたの姉なれば、言はいでも知れし武士の娘、何の未練に歎きませうぞ。

重左 お歎きなくばお話し申すが、昨夜お卷は、

お道 どうぞしましたか。

重左　相果てました。(ト思ひ切つていふ。)

お道
與吉　え〻。(トびつくりなし、)

お道　昨日まで病氣といふ、沙汰もないのに死去せしとは、それは誠でござりまするか。

重左　なに僞りを申しませうぞ。

お道　ふう、して〱病死でござりまするか、但しは變死でござりまするか、さあ其譯を聞かして下されい。

重左　何をか包まん、仔細あつて昨夜自殺いたしました。

お道　え〻〻〻。(トびつくりなし、うんと反りかへる、與吉驚いて、)

與吉　これおつかア、どうした、おつかアやアい〱。(ト介抱する、お道心附き、)

お道　あ〻もうよい〱、これ、何ゆゑお卷は自害しました。

重左　さ、驚かる〻は尤もなれど、心を鎭めて自殺せし仔細を篤と御聞き下され。(ト替つた合方になり、)姉上にも知らる〻如く、殿樣の御懇望にて奧樣も御承知の上、過日よりお妾になりし姪お卷、將來柔和の其上に親孝心を御賞美遊ばし、殿には格別寵愛厚く、家老方にも殊の外用ひらる〻それゆゑに、新參なれど古參の者も自然と手を突く程なりしが、彼れは少しも高ぶらず萬事内輪にい

たし居りしが、身に災難の來るは是非なく、元來殿様相撲をお好み遊ばされお抱へ數多あるゆゑそれが爲に年々の御物入り嵩むにつき我餘人ともに心痛なし評議區々の其折柄、此御異見は愛妾たるお卷をのけて外になしと、推擧されしは其身の不運、お家のお爲ゆゑ止むを得ず早速申し上ければ殿様には賢くも御採用遊ばされ、お抱への相撲一同お暇の御沙汰出でたれば、家老方は愁眉を開き實に御當家の礎ともいふべき妾なりと、猶も尊敬いたされしが、爰に一ツの難儀といふは、數多の女中の其内に相撲を好むものあつて、暇の出でし原因はお卷がよしなきさかしらなりと遺恨に思ひ、それよりは何がな恥辱を與へんと種々の妨げいたすゆゑ、女の狹き心から忍び難く一封の書置殘して自殺なしたり、お家の爲にせし事も却つて其身の害となり、不便な最期をいたさせました。

卜重左衞門愁ひの思入あつて、書置を出し見せる、お道もこなしあつて、

お道 お上通りの御首尾がよいので、御朋輩に嫉みをうけ、勤めにくいと度々の便りはあれど新參ゆゑ、其うちには居馴染んで御奉公が出來やうかと、捨て置いたが害となり、果敢ない最期をいたせしか、思ひ當るは明方に、あれが死んだ夢といひ、今朝から變な烏啼き、氣になる事を度々聞いたも、みんな斯うなる知らせであつたか、不便な事をしましたわいな。

ト書置を持ち泣き伏す。與吉これを介抱しながら、

與吉　それぢやァあんねえは死んだのか、はあゝ。（ト泣く、重左衞門涙を拭ひ思入あつて、）

重左　かゝる事も宿世の約束、今更歸らぬ事なれば、是れまでの縁と諦められよ。右の譯にて死去なせば上にも不便に思召され、金五十兩葬ひ料に下し置かるゝ、まつた金三十兩奥樣より下し置かるゝ、有難く頂戴あつて、跡懇に佛事供養いたされよ。

ト懷中より袱紗包みの金をお道の前へ出す。此以前長ゼリフの前に、花道より以前の與兵衞お光出來り、門口にて此話しを聞き愁ひの思入あつて、此時涙を拭ひ、

與兵　姉さん、

お光
兩人　今歸りました。（ト内へはひり下手に住ふ。）

お道　おゝ與兵衞どの歸られたか、娘は非業な死を遂げ、悲しい事になりましたわいな。

ト泣く、與兵衞も愁ひの思入あつて、

與兵　おゝ悲しいは御尤もでござる、只今屋敷へ行つた所、仔細あつて今日は對面叶はぬと仰せゆゑ、力なく〳〵すご〳〵と、歸る御門にて人の噂を立ち聞けば、昨夜自殺せしとの事にびつくりして立歸り、又も爰にて高雄樣のお話しを聞いて仔細も知れたが、可愛さうな事をしましたなあ。

お光　斯ういふ事のあるせゐか、此間からお巻さんに逢ひたうてならぬゆゑ、内を勸めて目黒から此麻布へ二人してお尋ね申しに參りましたも、こちの人には血筋ゆゑ導きとやらでござりませう、お道さんのお心をお察し申せば申すほど、涙の止め途がござりませぬ。

ト兩人愁ひのこなし、重左衞門思入あつて、

重左　宿になりたる與兵衞どのが參られたるは丁度幸ひ、今宵死骸を引き渡せば、是れより直に受取りに參られよ。

與兵　つい涙に暮れまして、御挨拶もいたしませぬが、御免下さりませ。

重左　いや〳〵斯かる中ゆゑ、其の挨拶には及ばぬこと。

與兵　それでは是れから早桶でも、直に誂へて參りませう。

重左　いや昨夜取片附けいたしたれば、其の心配には及び申さぬ。

お道　そんなら與兵衞どの、御苦勞ながらお屋敷へ、

お光　引取りに行かしやんすに、一人ではいけますまい。

重左　佛の供は屋敷にて、手當いたせば與兵衞どの、一人にて差支へござらぬ。

與兵　左樣なれば只今から、お供いたして參りませう。

與吉　伯父さん、おいらも一緒に參りませう。
重左　然らば身共と諸共に、
與吉　お供いたすでござりませう。
　ト與吉重左衞門の履物を直す、重左衞門門口へ來る、お道愁ひのこなしにて、
お道　少しも早う娘の顏を、
お光　見やしやんしたら淚の種と、
與兵　知れては居れど此世の別れ、
重左　香華を手向けてお待ちあれ。
　ト唄になり、重左衞門先きに與兵衞、與吉附いて花道へはひろ。跡にお道癪の差引む思入、お光見て、
お光　お道さん、どうぞしなさんしたかえ。
お道　餘りのことに胸先へ。（ト押へて居る。）
お光　痞への起るも御尤もでござります、何ぞ藥はござんせぬか。
お道　合藥があつたなれど、昨日殘らず飲んでしまひました。
お光　それは生憎でござんした、何處ぞにあらば、わたしが行つて買つて來ませう。

お道　雜式の生藥屋に癪治丸といふ丸藥があるから、それを一服買うて來て下され。
お光　それは造作もないことでござんす、ちよつと行つて買つて來ませう。
お道　然し勝手の知れぬ所ゆゑ。
お光　雜式は知つて居ますが、善福寺の近所でござりますか。
お道　善福寺より半町手前で立看板のある家ゆゑ、行けば直ぐに知れまする。
お光　それではちよつと行つて參りませう。
お道　折角ござつたお客をば、かういふ事に使ふのは、
お光　それも他人といふではなし、
お道　とはいふものゝお氣の毒で、
お光　親類仲に、その遠慮には及びませぬ。
お道　そんならどうぞ御苦勞ながら、
お光　どれ行つて參りませう。（ト早き合方にてお光花道へはひる、お道書置を見て涙にくれ、）
お道　一人と思へば氣の張るせゐか少しは癪も納まれば、心を籠めた娘が書置、讀んだ上にて佛前へ供へて置いて遣りませう。

ト佛檀へ灯を上げ、書置を口の内にて讀むことよろしく、時の鐘凄味やうの合方になり、花道より吾助、縞の袴大小にて出來り、花道にて思入あつて、

吾助　業平橋の下屋敷で初めて逢うた其時から、ぞつこん惚れた妾のお卷、どこぞで思ひを晴らさうと思ふ甲斐なく自害して、玉なしにしてしまうた。

お道　嘸やそなたも悔しからうが、死ぬ程のこと隱さずとわしに相談したならば、仕樣模樣もあらうものを。

吾助　然し惚れた女をば、上で寵愛して居られ、見て居るよりは寐覺めがいゝ。

お道　あんまりな思ひ切りやう、跡の歎きも知りながら、情ない此の覺悟。

吾助　話しを聞けばお上から、葬ひ金が五十兩、奧樣からも三十兩。

お道　お惠み受ける母の悲しさ、未來で推量しやいなう。

吾助　高雄さまが持つて行つたと、聞いて浮んだおれが惡心。

お道　とはいふものゝ、思へば不便な娘の身の上。

吾助　戀の叶はぬ意趣ばらしに。

お道　死骸の來るまで。

吾助　今夜忍んで、

お道　せめて回向を。

吾助　盜んで遣らう。

お道　さうぢや〳〵。

ト　お道書置を見ながら愁ひの思入、吾助金を盜まうといふこなし、双方よろしくあつて、吾助舞臺へ來て門口から窺ひ居る、お道佛檀へ線香を上げ、書置を供へ思入あつて、

今の間に暗うなつて、お光さんは知らぬ土地で嘸困つて居るであらう、氣の毒な事ぢやなあ。（ト言ひながら行燈と火打箱をよき所へ置き、件の金包みを取上げ押し戴き、）お上から下さつた葬ひ料の此のお金、是れで立派に跡々を弔うて遣りませう。（ト癪の痛むこなしにて、）今の書置が哀れと思ひ、あいたゝゝゝゝ、又強く差込んで來たか、こりや困つたものぢやなあ。

ト　癪を抑へる思入にて、件の金包みを佛檀へ供へる、是れを門口にて吾助見て、占めたといふ思入あつて、紺の手拭で頰冠りをなし、四邊を窺ひ刀を拔いてずいと內へはひる。お道すかし見て、

そこへお出でなされたは、どなたでござりまする。（ト言へども默つて居るゆゑ、）薄暗いので、どなたかお顏がさつぱり知れませぬ、どなたでござりまする。（ト言ひながら行燈を附けて出す、吾助お道

の鼻の先きへ刀を突き出す、びつくりして、)や、白刃を持つたこなさんは。
吾助　言はずと知れた泥坊さ。
お道　え丶丶丶。(ト合方きつぱりとなり、お道顫へながら、)折角お出でになりましたが、御覧の通りの女世帶、金子というてはござりませぬ。
吾助　いや無いとは言はさぬ、今日淺間の屋敷から八十兩といふ金のはひつた事を知つて來たのだ、それを爰へ出してしまへ。
お道　そんならそれを、え丶丶丶丶。
吾助　さあ聲を立てると一突きだぞ。(ト白刃を突き附ける、お道顫へ居る、)金の在所は門口から、ちらりと見たがあの佛檀。(トつか〳〵と行き、金包みを取るゆゑ、お道縋り留め、)
お道　まあ〳〵待つて下さりませ。見たとあるゆゑ申しますが、あれはお上から下された葬ひ料の大事のお金、是ればかりは渡されぬ。
吾助　おれが見込んだ八十兩、渡さぬ上は命がないぞ。
お道　假令命を取られても、是れをこなたに取られては、お上へ對し濟まぬわいの。
吾助　人の金ぢやァあるめえし、おめえが貰つた八十兩、それをおれが盜むのに、濟むも濟まぬも入る

ものか、

お道　そこをどうぞお慈悲にて。

吾助　えゝ、慈悲がありやあ人の金を、何で盗みに來るものか。

ト合方早めになり、金包みを持つて行かうとするを、お道留めながら。

お道　誰ぞ來て下さりませ、泥坊がはひつた〳〵。(ト言ふ口を吾助押へる、此時冠りし手拭落ちてお道振拂ひ顔を見て、)や、こなたはいつぞや家へ來た、慥かお屋敷の。

吾助　それ、知られたら。(ト一刀浴びせる、お道切られながら金包みを持つた手へ取り附き、)

お道　泥坊々々。

トいふゆゑ又口を押へる、此時吾助の小指を喰切る、是れに構はず吾助畳みかけて切倒す、お道苦しみ落入る、吾助刀の血糊を拭ひ鞘へ納め、金包みを懐中する、此時、花道にて人音するゆゑ、行燈を吹き消し、門口へ出る。爰へ花道よりお光薬包みを持ち出來り花道にて、

お光　僅かな道も知らぬ土地は、大層遠いやうに思はれるわいな。

ト此内吾助拔足して花道へ行き入替り、お光氣味の悪きこなしにて舞臺へ來る、吾助お光の顔を見て思入あつて、逸散に花道へはひる、お光門口へ來て、

お丶門口が明いてある。（ト內へはひりながら、）お道さん、嘸待遠でござんしたらう、日が暮れたので遲うなりました。（ト言へども答なきゆゑ、）手水にでも行きなさんしたか、もう暮れたのになぜ燈火を附けなさんせぬ、初めて上つたお家ゆゑ、樣子が知れぬので。（ト言ひながら死骸に躓き、）お丶爰に寐て居なさんしたか、それでは癪が差込んだかえ、これしつかりなさんせ、お道さん／＼（ト介抱して手に血糊が附くゆゑ透し見てびつくりなし、）や、こりやたゞ事ではござんせぬ。（ト又あちこち探るうち火打箱に躓き探り見て、幸ひといふ思入にて附木にて、行燈へ明りを附けびつくりなし、）やゝ、こりやお道さんには何者にか、こりや大變だ、斯うしては居られぬ。（ト門口へ出て、）お長屋のお方、ちよつと來て下さいまし、大變でござります／＼。

ト大きくいふ、ばた／＼にて下手より幕明きの合長屋二人○□出來り、

兩人　大變とは、何だ／＼。（ト內へはひり、此體を見て驚き、）
○　や、お袋どのが切られて居る、成程こりや大變だ。
□　何でもこりや泥坊の仕業に違ひない。
○　金でも內にありましたかな。
お光　はい、八十兩今日はひつた金がござります。

□　えゝ、八十兩今日はひつた。

○　それぢやあそれを盜みに來たのだ。

お光　生憎うちの人もまだ歸らず、こりや困つたものぢやなあ。

ト合方百萬遍の木魚になり、花道より與兵衞屋敷の弓張提灯を持ち、與吉泣きながら先きへ立ち、跡より中間二人白布で包みし箱を駕籠に乘せ、これを舁き出て、直に舞臺へ來る、此うちお光金を尋ね居る。

與兵　大きに御苦勞さまでございました。（ト門口を明け。）姉さん、今歸りました。

お光　おゝこちの人か、待つて居ました、大變な事が出來たわいな。

與兵　なに、大變とはどうしたのだ。

お光　お道さんが何者にか、殺されなさんしたわいな。

與兵
與吉　えゝゝゝ。（ト驚き直にこちらへ來て、死骸を見て愁ひのこなし。）

與兵　やれ〳〵、むごたらしく切られたなあ。

與吉　おつかあも死んだのか、わあゝゝゝ。（ト死骸へ縋り泣伏す。）

與兵　さうして手めえは、家に居なんだか。

お光　お卷さんの事を聞いて癪が起つてお困りゆゑ、合藥を雜式まで買ひに行つた僅かな間、こんな憂き目に逢はしやんしたわいなあ。

與兵　こりやてつきり盜人だが、さつきの金を取られはせぬか。

お光　其金がてつきり見えぬゆゑ、慥にそれを目當の樣子。

與兵　扨は樣子を知つた者に違ひない、何は差しおき中間衆、お世話ながら其佛を、

中間二人　承知しました。（ト駕籠より箱を出す。）

○　や、內に死人のある所へ。

□　外からも佛が來たか、はてな。（ト不審の思入、與兵衞中間に向ひ、）

與兵　御覽の通りの譯を、重左衞門樣へ申し上げて下さりませ。

△　畏りました、娘御といひお袋まで、やれ〳〵氣の毒な事だ。

◎　此趣きを高雄樣へ、早くお知らせ申して遣りませう。

ト中間駕籠をかつぎ逸散に花道へはひる、跡長屋の者手傳ひ箱をよき方へ直し、机を前へ据ゑ、佛壇の道具を飾り、お道の死骸を脇へ片附け、二枚折の屛風を立てる。

與吉　おつかあとあんねえが死んだから、おいらも一緒に死んで、地獄へでも極樂へでも三人一緒に行

きたいなあ。

お光 小さい時に父御に別れ、今又不意に母御や姉に、非業な死を遂げ別れては、心細いは此の與吉、孝行な子が何の因果で、斯ういふ憂き目を見ることか、可愛さうでならぬわいなあ。

　　トお光與吉をいたはり泣く。

與兵 これ與吉、子供心に母や姉と死なうといふは尤もだが、手めえの母は武家の胤、しかも伯父に歴然とした高雄樣が附いてござれば、後立にお願ひ申し、殺した者の敵を討ち此の位牌所を立てねばならぬ、年よりませた手めえゆゑ、分らぬ事はあるまいが、料簡違ひをしてはならぬぞ。

　　ト思入あつていふ、與吉しく／＼泣きながら、

與吉 それぢやあお屋敷の伯父さんが、おいらに敵を討たせてくれますか。

與兵 討たせて遣るから氣を丈夫に、時節の來るのを待つて居ろよ。

與吉 水天宮樣の御縁日に、赤羽根で見た金毘羅利生記、おれも坊太郎のやうに敵を討たう。

與兵 おゝさうだ／＼。必ず死なうなどゝいふ、惡い料簡を出してはいけぬぞ。

與吉 あい／＼。（トこれを聞き、合長屋の二人感心して、）

○ 縁日商ひに植木をかつぎ、行つて見た機關の、

□　坊太郎を思ひ出し、親の敵を討ちたいとは、感心な事ではないか。

與兵　こりや近所のお方と見え、御苦勞さまでござります。

○　どうしまして、一つ長屋の此の佐次兵衞、遠慮なくお遣ひなさい。

□　いや斯うして居るより家主から、長屋中を知らせて遣らう。

お光　それは有難うござりまする。（ト兩人門口へ出て、）

○　さつき言つたは、前表か。

□　たうとう知らせる役が當つた。（ト下手へはひる。）

與兵　今にも是れへ重左衞門さまが、お出でなさるに違ひないが、殺した者の手掛りが無いといふのは悔しい譯だ。

お光　何は兎もあれ佛さまへ、お燈りをあげたうござんす。

與兵　近所に蠟燭屋があるなら、おれが行つて買つて來よう。

與吉　お茶と蠟燭はお屋敷から、貰つたのが爰にあります。（ト蠟燭を出す。）

お光　そんならお茶と蠟燭を、

與兵　貰ふといふも前表だらう。（ト燭臺へ蠟燭をとばし死骸を見て、）むごい事をしたぢやあねえか。

お光　どうか敵を、取つて上げたうござんす。（ト此内死骸をよく〳〵見て、）

與兵　何か口の中にあるやうだ。（ト與吉燭臺を持ち立ち掛る、與兵衛は口をあけ喰ひ切りし小指を出して見て、）死骸の口に喰切つた小指があつたは、こりやあてつきり殺した奴の、

お光　指を喰切つたのでござんせう、さういふ證據が出たからは、

與兵　此譯を高雄樣へ、

お光　ちつとも早くお知らせ申し、

與吉　敵を討たせてお貰ひ申さう。

與兵　こりや手掛りに。（ト件の小指を紙に捻るを道具替りの知せ、）あり附いたわえ。

ト百萬遍の木魚、早き合方にてこの道具廻る。

（お卷部屋の場）――本舞臺前幕のお卷部屋の道具。小机に一輪活けの花立、香爐を載せてあり、傍に前幕の猫うづくまり居る、よき所へ短檠を出し、下手にお仲甲斐絹の風呂敷包みを置き、涙にくれて居る、竹浦、漣の奥女中香を盛つて居る、此見得沈んだる合方、時計の音にて道具留る。

お仲　お二人さまには、ようお出で下さりました、有難う存じまする。

竹浦　お巻どのとは一方ならず、お睦じういたしたゆゑ、果敢ない御最期なされしと承はつた其時は涙で胸が一杯にて、今日一日は高篠さまと、泣きあかして居りました。

漣　まだしも是れが御病氣にて、お果てなされた事なれば諦めやうもあるなれど、不慮の事ゆゑおいたはしく、せめて此世のお別れと亡きお姿を拜見せしが、未だ目先きに殘るやうで、

竹浦　お名殘り惜しう、

兩人　思ふわいなう。（ト愁ひのこなし。）

お仲　御親切さまな其お歎き、嘸や主人も未來へ參り、悅び居るでござりませう。

竹浦　日頃忠義なそなたゆゑ、長くお奧へ置きたけれど、御奉公の身に自儘もならず。

お仲　長々お世話さまになりましたが、主人が横死いたしますれば、私とても明日は宿へ下らにやなりませぬ。（ト兩人猫を見て、）

漣　玉を常々お巻さまがお可愛がりなされましたゆゑ、猫も悲しいと見えまして、机の前に蹲まり、

お仲　御回向でもして居る樣子、不便なものではござりませぬか。

竹浦　ほんに頭をうなだれて、可愛さうなものではある、此猫はそなたでも一緒に宿へ連れて行きやるか。

お仲　知らぬ所へ連れて參り、紛れさせるも不便なれば、お屋敷内へ此儘に置いて行きたうございます
が、お貰ひなされて下さりませぬか。
竹浦　貰うて遣りたいものなれど、お卷さまが祕藏の猫と人も知つて居るゆゑに、
漣　若しも意地の悪い人達の目に掛らば、この玉もどのやうな目に逢はうも知れず。
竹浦　それゆゑわが身が下る時、宿へ一緒に連れて行き、
漣　可愛がる所へ、
兩人　遣りやいなう。
お仲　御尤もなそのお詞、成程左樣いたすでござりませう。
竹浦　兎かういふうちお夜詰めの、最早刻限近ければ、
お仲　どうぞお引取り下さりませ。
漣　用事があるならわたし共に、遠慮なう言うたがよい。
お仲　何から何まで、有難う存じまする。
竹浦　嘸淋しいことで、
兩人　あらうわいなう。（ト思入あつて兩人下手へはひる、是れより床の淨瑠璃になり。）

〽跡はひつそと鳴る咽喉の、猫をお仲は恨めしげに、見る目も變る憂き事と、心も細き女氣の愚癡に迫りしかこち言。

ト此内お仲兩人の跡を見送り、件の猫を招き、四邊へ思入あつて床の合方になり、

お仲　今更いうても返らねど、わたしはあの折辨天樣へお參りに行つた留守ゆゑに、知らねば是非がなけれども、そなたは先頃御前にて既に命を取らるゝ所、旦那さまのお蔭にて危い所を免れたる御恩を思はゞ其時に、なぜお留め申さぬぞ、如何に畜生とはいひながら、そなたは恩を知らぬものぢやぞ。

〽恨みの涙はら／＼と三毛に掛れば身を顫はし頭を垂れてしをるゝ有樣、見るも哀れやなき跡の無念の小袖取り出し。

ト猫に向ひきつといふ、猫首を垂れうつ向く、お仲これを見て不便といふこなしにて、傍への甲斐絹の風呂敷包みより、血の附きし小袖を出し無念の思入にて、

血汐の附きし此のお小袖、見るに附けても思ひ出す旦那さまの無念の御最期、嘸御無念にござりませう。少しにても劍術の此身に覺えがあるならば、あの儘にはせぬけれど、何をいふにも町家の育ち、所詮及ばぬ事ゆゑにぢつと辛抱する苦しさ、そなたは悔しう思はぬか。

〽悔しの餘り引寄する、玉は血汐の小袖にまつはり。

トうつ向き居る猫を引寄せる、猫小袖を啣へじやれる、是れを見て、

猫は自由に飛び歩き魔物といはるゝ身をもつて、此意趣返す術はないか、恩を思はゞ一人でも喰附いてなぜ來ぬぞ、返す〴〵も恩知らずぢやなあ。

〽首玉取つて押附くれば、小手を潛り爪とぎなし、跡をも見ずに逃げ失せけり。

トお仲猫の首玉を取り、疊へ摺附け悔しき思入、猫はすり拔けてきつとなり一目散に廊下へ飛び出す、

お仲見送りこなしあつて、

常々旦那さまのお話しに犬にせよ猫にせよ、三日飼へば三年たつとも其飼主の恩を忘れず、顏を覺えて頭を垂るゝと承はりし事ありしが、今この仲が言ひしこと玉が耳に入つたるか、血相變へて飛び出せしは、いつぞや命をお助けありし、旦那さまの御恩を思ひ、意趣を返しに行きやつたか、それともわしが手荒うしたゆゑ、腹を立つて逃げ行きしか、物の言へぬ畜類は不便な事であるわいなあ。

〽問はず語りも主思ひ、心は同じ飼猫が瞬く暇に飛び返り、裾にまつはり身を顫はし。

トお仲心ならぬ思入、ばた〳〵になり、以前の猫、切られて出來りお仲に縋る、是れを見て、

やゝ玉が數ヶ所切られしは、扨は意趣を返しに行つて四人のものに切られしか、思へば憎い邪險の女、こりやどうしたらよからうなあ。

〽小袖片手に片息の猫を抱いて血の涙、くるしむ玉は其儘に、手足を縮めて息絶えたり。

トお仲は小袖を持つたる儘猫を抱き無念の思入、猫は飛びおり苦しみ落入る、お仲見て、

こりやもう、息は絶え果てしか、はあゝ。

〽はあとばかりに泣き伏せしが、死したる三毛は燈火と共に形は消え失せたり、不思議やさつと一吹の風にお仲はむつくと起き、

トお仲泣伏す、薄ドロ〳〵のやうな風の音になり、行燈の明り消える、猫お仲の背中へ飛上り、體の内へ消える仕掛よろしく、是れにてお仲すつくと立上り、思入あつて、

おゝそれよ、畜生ですら恩を忘れず其身を捨てるに、人として恩を報はぬ其時は、猫にも劣る人でなし、もう此上は我身も共に、叶はぬまでも主人の敵、命を捨てゝも四人の者に恨みを返さで置くべきか。

〽はつたと睨み忿怒の形相、さながら猛虎の勢ひなり、虎にはあらで三毛猫の、足跡慕ふ惡戯もの。

トお仲に猫の一念乗り移りし思入にてきつとなり、猫のこなし、此時廊下の口より奥女中小濱、雪洞を持ち先きに立ち、朝霧、霧島短刀を持ち猫を捜しに來たる心にて出來り、

小濱　今の猫はどこへ行つたか、わたしの顔へ飛び附いて此通り、ばらがきに引つ掻いたゆゑ殺さうと思つたが、何處へか逃してしまうて、悔しい事をいたしました。

朝霧　御覽遊ばせ私も出張つた庇をひつかゝれ、額がひり／＼いたします、何處の畜生か、何でも今晩見附け出し、殺さなければ臥せられませぬ。

霧島　私もなけなしの大事の鼻を喰ひかゝれ、忌々しくてなりませぬ、したが御覽遊ばせ、廊下に滴たる血汐では、此部屋へはひつたに違ひござりませぬ。（ト是れにて足許を見て）

小濱　おゝ、ほんにさうでござんす、察する所お巻どのが。

朝霧　祕藏にして居た三毛猫に違ひない。

霧島　そこらに居りませうから、御油斷なされますな。

〽三毛を尋ぬる三人の、聲にお仲は身を潛め、猫にひとしく窺ひ居る。

ト此うち薄ドロ／＼にて、お仲猫の思入にて三人を窺ふ、これにて心附かず三人あちこちを見廻し、お仲を見附け猫に見ゆる思入、

小濱　や、今の猫はあそこに居ります。

朝霧　今度はお逃し遊ばすな。

霧島　心得ました。

〽心得たりと三人とも、一度にはひればお仲は飛びつき、(ト三人つか〳〵とはひる。)

お仲　主人の恨み思ひ知れ。(ト三人に喰ひ附く、是れにて皆々心附き、)

小濱　や、そちは端女の、

朝霧　お仲なるか。

霧島　慮外ものめが。

三人　覺悟しや。

〽覺悟をしやと拔連れし白刃に切られぬ怪猫の、一念皮肉に分け入れば、飛行自在に荒出し。

ト始終薄ドロ〳〵にてちよつと立廻りきつと見得、是れより誂への鳴物になり、お仲立廻りのうち前髪亂れ、口のはたへ血紅を附け、猫の乘り移りし思入にて、三人を相手に立廻りよろしくあつて、ト三人共嚙み殺しきつと見得、

〽狂ひ狂うて。

ト お仲喰切りし首を啣へ、死骸の上にほつと思入、薄ドロ〳〵のやうな風の音にて、此の道具廻る。

「長局廊下の場」‖本舞臺一面廊下の遠見、よき所へ誂への櫺子窓、此下へ鐵網行燈を出し、上下杉戸の出入り、床の送りにて道具廻る。

〽板の間に草履の音も早絶えて、寢靜まりたる部屋々々の鼾に目覺め岩浪が、寢惚眼をこすり出で。

ト下手の杉戸より岩浪寢惚し思入、雪洞をつけ氣味の惡き思入にて出來り、

岩浪 今夜のやうに何かゞ耳に附いて、寢られない晩はありはしない。目が冴えるにつけ考へればお卷に自害をさせたのも、わたしを初め三人が、徒黨して苛めたゆゑ、もしや悔しがつて死に切れず幽靈にでもなつて出はせぬか、惡い事には十人並勝れたわたしも玉に瑕は、産れ附いての臆病者今夜は一人で寢られぬわいな。（ト此時薄き風の音になり、雪洞消えるゆゑ、）おや、怖い〳〵と思つた所へ、風も吹かぬにどうして消えたか、あの鐵網へ附けに行けばよいけれど、丁度お卷が部屋の側、あゝ何だかぞく〳〵と後が見らるゝやうで、氣味の惡い此の廊下、というて暗闇では猶步けず、思ひ切つて附けて來ませう。

〽顫へながらに鐵網の、蓋を明ければぱつたりと、消えて廊下は眞の闇。

トこは〳〵鐵網の側へゆき、灯を附けようとする、又鐵網消ゆるゆゑびつくりして、

さあ大變々々、こりや一寸も歩かれぬわいな。

〽鼻を摘むも見えわかぬ、耳に響きし切通しの、鐘は子の刻猫魔の障碍顯れ出づれば見てびつくり。

ト岩浪顫へ居る、本釣鐘薄きドロ〳〵のやうな風の音になり、櫺子をこはし大きな猫頭を出す、是れを見て岩浪は、

あれえ。（トびつくりして、逃げられぬ思入にて膝行り居る。）

〽すくむ五體にたら〳〵と冷汗流す濡鼠、飛びかゝらんと魔物の一念。

ト誂へ上下の合方になり、櫺子を破り以前のお仲飛び出し、猫の見得、岩浪鼠のこなしにて逃げようとする、お仲猫の思入にて岩浪に噛附く、これより猫と鼠のこなしよろしくあつて、鼠のやうにもてあそびになし、トヾお仲岩浪を喰殺し花道へ悠々と行く、始終薄ドロ〳〵なあしらひ、此時鐵網行燈自然と灯つく。合方きつぱりとなり、上手より以前の重左衞門、繼上下大小にて、雪洞を持ち出來り此體を見る、お仲恐れし思入にて花道へはひる、ドロ〳〵を打ち上げ、重左衞門跡を見送り思入あつ

て、

重左 只今あれへ逃げ行きしは。お卷が使ひし端女のお仲、用事あらざる此の廊下を深夜に及び通行なすは、何事なるか合點行かず、四邊を見れば四人の者算をみだせし此の死骸、仲が主人の恨を受け繼ぎ仇を返せしものなるか、是れに附けても心善からぬ四人の者が非業の最期。（ト岩浪の死骸を見て、）是れも惡事の報いなるか。（ト爰へ以前の切られし猫、岩浪の死骸の側へあらはれ、すつくと立ち、雪洞へ映りし心にて、）正しく怪猫。（ト重左衞門きつと見返るを、木の頭、）はてな。

〽怪しかりける。

ト猫ばばつたり倒れる、重左衞門これを見て、不審の思入、床の三重にてよろしく、

幕

六幕目

四ッ谷雷電内の場

卅間堀小野川内の場

淺間邸火見櫓の場

〔役名〕——小野川喜三郎、高雄宗三郎、雷電爲右衞門、鳴島吾助、三河屋小兵衞、力士一文字、同花菱

火消面肌勘次、同尺長佐七、家主、用人、力士轟、足輕六人、弟子角力、中間、行司木村庄之助。部屋方お仲、小兵衞娘おしが、下女等。」

（雷電内の場）――本舞臺三間の間常足の二重、向ふ暖簾口、上手鏡板の押入戸棚、下手茶壁、上の方一間障子屋體、下の方雷といふ字の腰障子、臺所口、いつもの所門口、總て四ッ谷傳馬町雷電内の體、爰に力士轟、弟子角力○△二人着流し、眞鍮の獅嚙火鉢の側で煙草を呑み居る、此見得角力甚句へ驛路の鈴を冠せて幕明く。

轟　又横町の尾張屋へ、紀州さまの衆でも來たか、さつきから藝者が上り、角力甚句で大騷ぎ。

○　あれを聞いては目の先きへ、酒や肴がちらついて、こつちも咽喉がぐび／＼する。

△　意地の汚ない事をいふな、今に場所が始まれば、毎日たらふく飲まれる酒だ。

轟　所が今度はどういふ譯だか、内の親方は場所を斷り出なさらないといふ事だから、たらふく酒は飲まれまい。

○　おれもちらりと噂を聞いたが、當時日の出の親方が、出ないといつても出さにやあ置くまい。

△　縺れた事なら人がはひり、濟むだらうとは思ふけれど、言ひ出した事は引かぬ親方。

轟　假令何と言はしつても板番附に名前がなければ、それだけ相撲に障るから、年寄衆が捨ては置かぬ

きつと出なさる事にならう。
○さうさへなれば供をして、今日は青柳明日は大のし、毎日酒が飲まれるわ。
△どうぞ早くいゝ話しを、聞いて安心したいものだ。
○それはさうと、手前はさつき何處へか行けと、親方に言附かつたのぢやあなかつたか。
△又ぶん流して叱られぬやうに、早く行つてくれればよい。
轟おゝ、さつぱり忘れてしまつた、今度出來る釣鐘の鑄物師の所へ行くのであつた。
○おれも昨日行つて見たが、大層立派によく出來た。
△鐘供養には親方が鐘を突くといふことだが、江戸中へ響き渡るだらう。
轟明日持込むといふ事だが、約束通り行くか行かぬか、おれが行つて聞いて來よう。
○早く行つて來るがいゝ、晩には祝ひの酒があるから。
△途中で飲んで詰らねえ、喧嘩をしてはいかねえぞ。
轟何で喧嘩などをするものだ。（ト門口へ出て、）どれ、行つて來ようか。（ト右の鳴物にて花道へはひろ
○おいら達も酒は好きだが、あんなに飲みたがる奴はない。
△あれでもきつと、片足あけ、醉つて歸るに違ひない。

○　飲むのは幾ら飲んでもいゝが、喧嘩をするには困りきる。
ト流行唄になり、花道より力士一文字千右衛門、羽織着流し一本差し、相撲のこしらへにて出來り
花道に留り、
一文　今日は年寄衆に頼まれ、場所の事で雷電に逢はねばならぬ用があつて、態々四ッ谷へ出て來たが、
どうぞ内に居てくれゝばよいが。（ト舞臺へ來り門口にて、）いや、親方は内に居るかな。
○　おゝどなたかと思つたら、横綱の親方さん、よく遠方までお出でなすつた。
△　親方は内に居ります、まあおはひりなされませ。
一文　内になら許さつしやれ。（ト合方にて一文字内へはひり、上手へ住ふ、○煙草盆を出し、）
○　まあ一服お上りなされませ。
△　お茶は今上げます。
一文　いや決して構うてくりやるな、奥に居るならおれが來たと、親方に言うてくれ。
○　あい、畏りました。（ト奥にて、）
雷電　いや知らせに及ばぬ、そこへ行くぞよ。（ト合方きつぱりとなり、奥より雷電爲右衛門着流し、相撲の
こしらへ、煙草盆と煙草入を提げ出來り、）こりや珍らしい一文字には、新宿からの歸りがけかな。

一文　そんな浮いた事ではない、場所の事でおぬしに逢ひたく、態々こつちへ出て來たのだ。

ト爲右衞門眞中へ住ひ、

雷電　江戸と違ひ山の手は、坂があるので草臥れたらう。

一文　麹町の旦那の所まで、駕籠で來たゆゑ草臥れなんだ。（ト雷電弟子に向ひ、）

雷電　今日は雇ひの婆さんが、寺參りに行つて留守だから、手前達は奥へいつて、茶の支度でもしてくりやれ。

○△　あい〳〵、合點でござります。（ト合方にて兩人奥へはひる。）

雷電　して一文字には何用で、おれが所へ出て來たのだ。

一文　今日來たのは外でもない。どういふ譯のあるかそこは知らぬが、年寄衆へ此の冬場所を休むといふ斷りが來た所から、年寄衆が寄合つて是は何か仔細があらう、それとも病氣で體が惡く取る事が出來ぬなら、土俵入りばかりでも顏を出して貰はねば、當時日の出の雷電が出ぬといふ評判がぱつと世間へ知れた日には、相撲の景氣に拘はれば。どういふ譯で休むのか、日頃懇意にする仲ゆゑ、出られぬ譯を聞いてくれと、年寄衆に頼まれて、譯をば聞きに今日來たのだ。

雷電　そりやあ大きに御苦勞だつた、ちよつとおぬしに其譯を話して置けばよかつたが、知つての通り

の口不調法それゆゑ話しをせなんだばかり、爰まで足を運ばせて氣の毒な事をした、何か仔細のあることゝ年寄衆は思ふであらうが、何もそんな譯ではない、相撲は勝負を爭ふものゆゑ時のはずみで命にも、拘はることが往々あれば、長くする事ではないと心附いたら後れが來て、再び相撲が取れぬから、それで場所を斷つたのだ。

一文　成程おぬしが言ふ通り長くする業ではないが、まだ老朽ちたといふではなし、今が相撲の取り盛り、殊には人に勝れた力を、持つて居ながら其樣な、後れたことをいふとは、一圓おれに合點が行かぬ。

雷電　人に勝れた大きな體で、なまじ力があるゆゑに、おれも相撲になつたれど、今度きつぱり止める氣で、日頃信ずる摩利支天へ此後力を出すまいと、力といふ字へ錠をおろせし額をあげた爲右衞門、二度と再び土俵へは、上らぬ心で斷つたのだ。

一文　たゞそればかりの事ではあるまい、何か仔細はあるだらうが、おぬしが一人出ぬ日には今もいふ景氣に障り、勸進元はいふに及ばず相撲仲間の出方の者、大きくいへば兩國の茶屋小屋までも違ふ譯、諸人の難儀になるゆゑに心床しに其譯を皆に話して聞かせたいから、おぬしが包む其譯をおれに話して聞かしてくれやれ。（ト是れにて雷電默入あつて、）

雷電「日頃兄弟同樣に心易くする仲ゆゑ、相撲を止める其譯を包まず話して聞かせよう。」(ト謎への合方になり、)

今度おれが相撲をば止める心になつたのは、然もこの春雨國で御見物が取組に、唾を呑んで待つ小野川雷電、知つての通りおぬし同樣心易くする仲ゆゑ、どうか双方勝負なく分けを取らうと魂膽したれど、つい小野川が踏み切つたを行司は名に負ふ庄之助、早くもそれに目をとめておれへ團扇が上つたので、氣の毒ながら負となり、水垢離取つて不動尊へ祈誓を掛けたお袋がこなたの二階で果敢ない自殺、手は下さねど此のおれが差殺したも同じこと、相撲を取らずばお袋にこんな最期をさせまいものと、祝ひの酒も咽喉へ通らず悄々歸る牛ケ淵、負けた遺恨に小野川が跡を追ひかけ果し合、共に命を捨てようと覺悟なした其所へ伊場先生がお出で下され、御仲裁のお詞に互ひに笑つてしまつたれど、相撲は土俵が戰場ゆゑ、又も此後相手をば投げ殺すまいものでもない、さもないうちに止めるのが上分別と思つたから、果敢なく死んだ小野川のお袋の爲め追善に、おれが菩提所淨土寺へ釣鐘を鑄て奉納なし、跡懇ろに弔うて是れから素人におれはなる氣だ。

一文 土俵の上では鬼にでも負けぬ力士の雷電だが、心が佛に小野川の老母が死んだを氣の毒に思つて盛りの相撲を止め、菩提の爲に釣鐘を奉納するとは奇特なこと、人は斯くこそ有りたいものだ。

して、淨土寺へ奉納する釣鐘は出來上つたか。

雷電　疾から神田へ誂へて今日までに出來上り、明日は寺へ持込む約束。幸ひ爰に十分一の畫圖があるから見てくりやれ。（ト煙草盆の引出しから釣鐘の畫圖を出して見せる。一文字見て、）

一文　成程これは立派なものだ。鐘の裾へ土俵を附けたは、末代までも雷電が納めたといふ證據になる、こりやあ何よりよい功徳だ。

雷電　草葉の陰でおれを恨み、行く所へも行けまいと思ふゆゑに鐘を納め、追善供養を懇にした事ならばお袋が、恨みも少しは晴れるであらう。

一文　そりやあ晴れる所ではない、どの位お袋が悦ぶ事か知れやあしない。その悦びに引替へて相撲掛りの一同歎き、春と違つて冬相撲は一年中の書入れに、待ちに待つたる本場所も、おぬしが出ねばはぜぬは必定、さすれば幕の仕舞も惡く、多くのものゝ難儀となるが、助ける爲にもう一度土俵へ上つてくれまいか。

雷電　事を分けたるおぬしの頼み、いやと言はれぬ所なれど、此後力を出すまいと誓ひを立てた上からはどうも場所へは出られない。

一文　すりや此やうに頼んでも、聞き入れてはくれぬか。

雷電　すけない事をいふやうだが、おれは死んだと思つてくりやれ。
一文　はて、是非もない事だなあ。
　　ト一文字當惑の思入、奥より以前の弟子、盆へ土瓶と茶碗をのせ持ち出來り。
○　大きに遲うなりました。
△　さあ、お茶一ッお上りなされませ。（ト茶臺で茶を出す。）
雷電　只茶を入れるばかりだのに、何を今までして居たのだ。
○　お話し半へお邪魔と存じ、
△　差控へて居りました。
一文　こりやなか／＼機轉者だ。（ト時の鐘、）や、あの鐘は。
○　ありや市ケ谷の八ッの鐘。
一文　八ッとあつては、斯うしては居られぬ。
雷電　直に是れから歸るなら、おれが駕籠に乘つて行きやれ。
一文　忝けないが、其の駕籠は、麹町に待たせて置いた。
雷電　それでは旦那の所まで。

○△　わしらがお送り申しませう。

一文　決してそれには及ばぬぞ。(ト立ちかゝる)

雷電　そんなら一文字。

一文　又出直して。(ト門口へ出て)頼みに來るぞよ。(ト唄になり、一文字思入あつて花道へはひる。)

雷電　兄弟分同樣に懇意な中の一文字、顏を立つて遣りたいをむげに斷るおれが切なさ、氣の毒だと思ふので、肩が大層張つて來た、少しばかり叩いてくれ。

△　あい／＼。

ト△雷電の肩を叩く、元の相撲甚句になり花道より以前の轟尻端折りにて、尺長、佐七淺黃半纏の法被足袋跣足、同役火消のこしらへ、是れを引き摺り出來る、面肌勘次同じ火消のこしらへにて留めながら出來り花道にて、

轟　さあ、おれと一緒に步びやあがれ。

佐七　おゝ、行かねえでどうするものだ、何處までもそびいて行け。

勘次　こいつァずぶ六醉つて居るから、おれに免じて料簡しねえ。

轟　わしやあ料簡します氣だが、こいつが料簡しねえから。

勘次　なに、料簡しねえ事があるものか、手めえが強情いふからだ。

轟　何を強情言ひました。

勘次　言はねえ事があるものか。

佐七　さあ、そびいて行け〳〵。

轟　えゝ、やかましいわい。

ト右の鳴物にて舞臺へ來り、佐七振拂つて打つてかゝる。勘次留める振りにて打たせようとする立廻り、此うち間違へて轟 勘次を打つ、

勘次　あいたゝゝゝゝ、うぬ仲人を打ちやあがつたな。

轟　ぶつたとて構ふものか。（ト是れにて內の弟子二人門口へ出て、双方を留める。）

○　あれ程さつき言つたのに、

△　又喧嘩をして來たのか。

轟　こいつらがおれに喧嘩を賣つたから、據なく買つたのだ。

○　えゝ、買はねえでいゝ事を。

佐七　褌かつぎに打たれちやあ、火消屋敷へ歸られねえ、さあ殺すともどうとも勝手にしてくれ。

勘次　これ静かにしろ、師匠におれが掛け合ふから、手めえが騒ぐにやあ及ばねえ。

佐七　それだつてこいつらに、打たれちやあ外聞が悪い。

勘次　何でもいゝから静かにしろ。（ト内へはひり、）もし關取、こりやあおめえの弟子かえ。

雷電　あい、わしが弟子だがどうしました。

勘次　喧嘩を留めにはひつたものへ無法無體に打つて掛り、おらアこいつに眉間をぶたれた。

雷電　それは不調法をしましたが、いつたいどうしましたのだ。

勘次　譯といふのは見附前の居酒屋で片足あげ、こいつと二人で飲んで居たところ、おめえの弟子が向ふに居るから詞をかけて猪口をさしたら、愛敬もなく突つ返したから、穢多や乞食といふぢやあなし、假令法被一枚でもお役を勤める十人火消、なぜ此の猪口が受けられねえと一つ言ひ二つ言ひ、遂に摑み合つたから、見ても居られず留めにはひつたおれの言ふことを聞かねえのみか、無理無體に打つたから、師匠とあるゆゑおめえの所へ譯を附けて貰ひに來たのだ。

轟　いえ／＼さうぢやあござりませぬ。相手にならぬがえんゆゑ、素知らぬ顔して居ましたが、褌かつぎと二人して言ひますから、つい小癪に障りまして、さした猪口を突つ返し喧嘩をいたしてござります。

勘次　相手同士は打ち合ふとも勝手に喧嘩をするがいゝが、見兼ねて留めにはひつたおれを、何で手前は打つたのだ。

轟　今もお前がわしの事を、強情だと言はつしやるから。

勘次　二人に怪我をさせめえと、おれが留めるを聞かねえから、強情だと言つたのだ。

轟　それだから打つたのだ。

佐七　兄貴は留めにはひつたのだ、喧嘩の相手はおれだから、さあもつと打てく。

勘次　やかましい、靜かにしろ。

佐七　大きな聲は生れ附き、靜かにはならねえから、打つとも殺すとも勝手にしろ。

勘次　これ手めえの出る所ぢやあねえ、おれに任せて默つて居ろ。

佐七　いゝや默つちやあ居られねえ。

勘次　えゝ、靜かにしろと言つたらしねえか。（ト態と佐七を突倒し雷電に向ひ、）これ關取、こりやあおめえが言附けで、わつちを打たしたのかえ。

雷電　何でおれが言附けで、お前方を打たせようぞ。

○　そりや又どういふ譯あつて、

△　言附けだと言はつしやるのだ。
勘次　明日赤坂の淨土寺へおめえが納める釣鐘を、火消屋敷の前を引くので、昨日渡りを附けに寄越した土産の酒が少ないから、返してやつたを遺恨に思ひ、それで大方打たしたのだらう。
雷電　成程昨日遣つた酒が少ないとやらいふ事ゆゑ、今日倍にして持たせて遣つた、それしきの事根に持つて弟子に言附け打たすやうな、そんな小さな心ぢやない。
勘次　いや〳〵それに違えねえ、根が信州の山猿でしみつたれだといふことは、相撲の噂に聞いて居る。
佐七　それを遺恨に思ふなら、褌かつぎに言附けず、自身でぶつて腹を癒ねえ。
勘次　ぶち殺されても相手が雷電、地獄へ行くのにいゝ土産だ。
佐七　さあ、打ち殺してくれ。
兩人　ぶち殺せ〳〵。（ト兩人眞中へ寢て暴れる、弟子三人立ちかゝり、）
轟　まだぐづ〳〵吐かしやあがるか、先刻持たして遣つた酒が、飲み足らねえでぐづるのか。
〇　喰つた酒の醒めるやう、三人寄つて筋骨を、
△　拔いて遣るから、
三人　覺悟しろ。

勘次　手めえ達に打たれるものか、目指す相手は雷電だ。
佐七　さあ二人をぶてぐ。(ト雷電に立ち掛る。)
雷電　えゝ、やかましい奴等だな。(ト雷電兩人の襟首を提へる。)
勘次
佐七　あいたゝゝゝ、息が止まるぐ。
轟　殺してくれと言つたから、息が止まりやあ、
三人　幸ひだらうに。
勘次　殺してくれと、
兩人　言つたは噓だ。
雷電　死にたくなくば、早く歸れ。(ト兩人を突き放す。兩人襟の痛む思入にて)
勘次　いや、恐ろしい。
兩人　力だな。(ト呆れる。)
雷電　この雷電は仔細あつて、力を神へ納めてしまひ、決して出しはいたさぬぞ。
勘次　え、是れで力を、
兩人　出さぬのか。

雷電　力を出せば二人とも、首を捻り切つてしまふぞ。

佐七　こいつはうつかり、

兩人　手出しは出來ねえ。

轟　ぐづ〳〵言やあ親方の、手を待たずとも三人で、其の首を、

三人　引ッこ拔くぞ。

勘次　首を拔かれてたまるものか。（ト門口へ出て思入あつて、）所詮二人ぢやあ叶はねえから、

佐七　今日は此儘歸つて遣るが、

勘次　鐘を引込む其時に、

佐七　意趣を返すから、

兩人　覺えて居ろ。

ト相撲甚句になり、力みながら花道へ行き、ほつと思入あつて、跡を見送り逸散に花道へ逃げてはひる。

轟　えゝ、口程にもねえ、

三人　奴等だな。

雷電　摩利支天へ誓ひを立て、力を出さぬ心だが、ついうつかりと出してならぬ。
轟　あいつらは爰を荒して歩く、
○　人のいやがる十人火消、
△　徒黨をなして、
二人　來やうも知れぬ。
雷電　何人押して來やうとも、高の知れたる端た野郎、もしも來たなら再び來ぬやう、懲らして遣るから捨てゝ置け。
二人　そんなら親方、
雷電　どれ、押して來るのを。（ト立ち上るを道具替りの知せ、）待たうかえ。

ト櫓太鼓の入りし流行唄になり、此の道具廻る。

（小野川内の場）――本舞臺總て小野川内の體、上手に家主羽織着流しにて佇み、下手に下女お竹茶碗を茶臺へのせ茶を出して居る、此の脇弟子二人、□の若衆鬘着流し取りてきのこしらへにて煙草を呑み居る、此の見得合方へ飴屋の摺鉦を冠せよろしく道具留る。

下女　これは大家さま、お出でなされませ。
家主　先程は志しの膳を下すつて忝けない。
下女　上ります物もござりませぬが、出來ましたから上げましてござります。
家主　いつもこなたの鹽梅だが、今日のけんちんはうまかつたが、誰か古い佛でもあつて、志しに出來たのか。
□　いえ、古いどころか極く新らしい、此の春死なれたお袋さんの、
◎　今日は命日でござりますから、それで茶飯が出來ましたのさ。
家主　ほんに今日は命日であつたな、まだ昨日今日のやうであつたが、もう百ケ日も疾うに過ぎ、月日の經つは早いものだ。
下女　して、大家さまには、何ぞ御用でござりまするか。
家主　おゝお觸があつて來ましたが、關取は内に居られぬかな。
□　親方はお袋さまの、お墓參りに參りましたが、
◎　何ぞ御用がござりますなら、おつしやり置いて下さりませ。
家主　いや、用といふは外でもない、人殺しのお觸が廻つた。（ト懷から觸書を出す。）

下女　え、人殺しとは氣味の惡い。

□　そりや何處に、

兩人　ござりました。

家主　こなた衆はまだ聞くまいが、當月二十日の晩の事だが、所は麻布永坂下で寡婦暮しのお道といふ女が、むごく殺されたが、詳しい話しを聞いた所、こゝの内の關取が以前お出入りの淺間さまへ娘が妾になつて居た所、どういふ譯か自害して弔ひ料にお屋敷から八十兩といふ金が、お道の所へ下すつたを知つてる者でもあることか、金を盜んで殺した樣子、聲でも立てるか其賊が押へる時に喰切つた死骸の口に小指があつて、それを證據に嚴しい詮議、此節小指に疵でもあると、人殺しだと言はれまする。

□　それは飛んだ事でござりました、其娘御はお妾で私共も親方の供をいたしてお屋敷へ、參つた折に見ましたが、

◎　十人並に晴れた器量、情人でもあつてか知れないが、自害をして死んだとは、惜しい事をいたしました

下女　其又親御が金ゆゑに、殺されるとはよく〳〵な、不仕合せな事でござりますな。

家主　一日違ひに親子共、刃にかゝつて死ぬといふは、みんな前世の約束事、然し殺した盗人も天の網で捕へられ、首を切られるに違ひない。

□　親方が歸りましたら、今おつしやつたお觸の趣き。

◎　さう申しますでござります。

家主　此觸書を置いて行くから、關取が歸られたら、讀んで見るやう言つて下さい。

ト觸書をそこへ置く。

□◎　畏りましてござりまする。

下女　もうお歸りでござりますか。

家主　これから番屋で、將棊をさすのだ。（ト合方にて下手へはひる。）

□　釣瓶錢の節句錢のと　名もない物に名を附けて、店子を責めて取つた錢を、

◎　自身番の賭將棊でみんな取られてしまふのは、これも今いふ天の罰だ。

ト誂への唄、相撲太鼓になり、花道より小野川喜三郎、着流し一本差し關取のこしらへ、花菱着流し弟子相撲のこしらへにて、小野川の羽織を肩へ掛け出來り、花道にて、

小野　今日はお袋の命日ゆゑ、寺參りに行つて來たが、墓掃除をしたくらゐ心持のよい事はない。

花菱　孑孑のわいた水を汲み替へ、枯れた樒を挿し替へれば、佛さまもさつぱりといゝ心持でござりませう。

小野　是れも遠いと怠るが、爰から近い築地ゆゑ、毎月缺かさず參られる。

花菱　外のものゝ百遍行くより、親方がお參りなされるがお悦び。

小野　此世にござる内と違ひ、お墓參りをするより外、親に孝行の仕樣がない。

花菱　ほんにさうでござりますな。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、花菱門口を明け）はい、お歸りでござります。

□◎　もうお歸りなされましたか。

下女　大層お早うござりました。（ト小野川内へはひり、上手へ住ふ、花菱小野川の雪踏を片附け下手へ住ひ、）

小野　留守に誰も來なんだかな。

下女　お齋坊さんが參りまして、御佛前へお經を上げ、今しがた大家さまがお出でなされました。

小野　何しにお出でなされたな。

花菱　大方井戸を直したとか、掃溜を繕つたとか、僅かな事を店子へ掛り割前取りに來たのであらう、あんな慾張つた人はないぞ。

□　いや／＼今日のは其樣な、割前を取りに來たのでなく、
◎　慾氣を放れた事でござつた。
花菱　これは珍らしい事であつた。
小野　して大家さんのお出での用は。
□　此間永坂下で、女を殺した者があつたが、死骸の口に殺した者の、
◎　小指が殘つてあつたので、それを證據に上での御詮議、其のお觸を持つてござらつしやりました。
下女　これをお目に掛けてくれと、置いておいでなされました。（ト以前の觸書を出す、小野川開き見て、）
小野　當二十日の夜、麻布永坂町喜兵衛店金五郎御家、道と申す者を殺害いたし、金八十兩盗み取つたる者これ有る處、道死骸口中に喰ぎりし小指殘り居り候へば、全く殺害いたし候者の小指と存ぜられ候間、右に附き小指これ無き者見當り候はゞ、早速自身番へ相屆け申すべく候。むゝ、此の話しは昨日聞いたが、お卷さまの葬ひ料八十兩の金を盗み、逃げ去つたは何者だか、然し小指の證據があつては、こりや直に知れるであらう。
花菱　何にしろこの人殺しは、金を見込んでした仕事、樣子を知つたものと見えます。
小野　捕へられたらあの人かと、いふやうな事であらう。

下女　それはさうとお前さん方は、けんどんの冷めぬうち、御膳をお上りなされませ。
二　今しがた蕎麥を喰ひ、腹は十分よいけれど、
◎　わしが好きなきがら茶飯に、納豆汁でも見のがせぬ。
□　こなたも一緒に喰はないか。（ト花菱へ思入。）
下女　いえ、花菱さんは親方さんと、
花菱　跡でゆつくり喰べませう。
□　こつちは先きへ、
◎　よばれませう。（ト合方にて□◎兩人下女附いて奥へはひる。小野川鰐書を見て、）
小野　心立てのよいお方であつたが、親子とも刃に掛り、非業な最期をなさるとは、あゝ氣の毒な事だやなあ。（ト時の鐘、床の淨瑠璃になり、）

〽冬の日の見る間にかゆる片側町、直なる道も鳴澤が曲る心に跡先へ心配りて門へ立寄り。

ト時の鐘、花道より鳴澤吾助、木綿袴大小にて出來り、

吾助　御門ぎれの詫言がやう／＼濟んで歸つた晩、八十兩の葬ひ金がはひつた話しを聞いたが因果、ふつと起つた惡心に塀を乘越え永坂へ、忍んで行つてお道を殺し、首尾よく金は盗んだが、疵持つ

足より手の指の、ないのでうか〳〵して居られぬ。
〽ト言ひつゝ門へ立寄つて、人の居るやと樣子を窺ひ。（ト吾助舞臺へ來り内を窺ひ。）
賴みます。

花菱 はい、どれからお出でなされました。おゝ、お屋敷の吾助さんか。

吾助 闇取は内にござるか。

小野 誰かと思うたら吾助どのか。

花菱 はい、内に居なさいます。

吾助 今日は非番ゆゑ、此間の御禮にちよつと參りました。

小野 さあ〳〵爰へござらつしやい。（ト合方になり吾助下手へ住ひ。）

吾助 以前屋敷の抱への時分は、非番の時は必ず酒を馳走になりに來たが、今では何だか來憎くなり、やうやく前の非番の日に尋ねて來たら以前に替らず、やれこれと言つて金までくれ、忝けないから今日はちよつと禮に來ました。

小野 何の禮などに及ぶものか、こなたも元は大津の產れ、隣同士で親達は親類同樣懇意にした、脫れぬ中のこなたとおれ、何の遠慮も入らぬから非番の折は以前のやうに、酒を飲みに來たがよい。

花菱　是れまで度々お出でゆゑ、お前さんがお出でがないと煩つてゞも居なさるかと親方が案じさつしやれば、變る事がないならば、以前のやうに來て下さりませ。

吾助　こなたまで同じやうにさう言つてくれるは忝ない、昔は一つ在所に育つて、うぬのわれのと言つた仲だが、心立てがよいゆゑに當時日の出の小野川關、誰知らぬ者もない名高い相撲になつたのも親孝行ゆゑ、天の惠みのそれに引替へ、此の吾助は生れだちから親不孝、餓鬼の時分奉公に出ても四月と尻が据らず、忘れもしない十五の春親仁の金を盗み出し、伊勢參りから江戸へ來て三河町の人宿に歩きをしながら人となり、先づ中間から段々と一文上りに登つても、首にもなられない火の見番、好きな酒さへ二合と飲まれず、樽でつけてるこつちの家へ、來ねばたらふく飲まれない。

小野　年中酒は新川から若い者の飲料に、樽で寄越して下さるゆゑ、飲み度い時は遠慮なく、何時でもよいから飲みに來なせえ。

吾助　そりやあ何より有難い、此の四五日は氣分が惡く、胸がつかへてならぬから、今日はこつちで一本生の酒を馳走にならうと思つて、赤羽根から出て來ました。

花菱　折角お出でなすつたが、樽の代り目で、まだ新川から參りませねば、近所で買つて上げませう。

吾助　いや〳〵、内が切れ目なら決して買ふには及びませぬ、今度馳走になりませう。

小野　それでは今日は上げぬから、歸りにこれで何處ぞへ行き、こなたの勝手に飲まつしやい。

ト小野川煙草盆の引出しから、金を出して紙に包み、吾助の前へ出す

吾助　産れ附いてのいつこくに可愛氣のないわしだから、斯うして酒でも買つてくれるは、お前より外ありやあしない、有難く貰ひます。

〽包み金を押し戴く、吾助の左の小指の疵、小野川早くも目を附けて、

ト吾助金包みを戴く、吾助が結へし左の小指へ小野川眼を附け、

小野　左りの小指は、どうしたのだ。

吾助　さあ、これは。（ト小指を隱す。）

小野　怪我でもしたのか。

吾助　さあ、此の小指は。（ト言ひ兼ねるを、）

花菱　吾助さんの事だから、まさか女へ心中に切つて遣つたといふでもあるまい。（ト吾助思入あつて、）

吾助　さう見くびつて下さるな、蓼喰ふ蟲も好き〳〵で、是れでも三田の三角に死ね死なうといふ女がある。

花菱　こりや酷い受けさせやうだが、何處を目當にお前に惚れるか。

吾助　そこはわしが口先で、どんな手強い女でも、ころりとさすが日頃の腕前。

花菱　實にそれぢやあ女殺しだ

吾助　や。ト吾助びつくりする。

小野　何をそんなにびつくりするのだ。

吾助　むゝ、此頃體が惡いので詰らぬ事にびつくりする。

花菱　おゝ女殺しで思ひ出したが、永坂下の人殺しも、小指がないといふ噂。

吾助　えゝ（ト思入。）

花菱　吾助さんも左りの小指が。（ト目を附ける。）

吾助　こりやあ心中に切つたのだ。

〽言ひ紛らせし顏色を、見て取り扱はと打ちうなづき。

ト吾助よろしく思入、小野川もこなしあつて、

小野　これ花菱、そちは奧の若い者に、今日はお袋の命日ゆゑ、どこへなりと勝手に行けと、裏から遊びに出してくれ。

花菱　あい／＼、女も遊ばしてやりませう。

小野　おゝ、そち一人奥へ殘り、誰も來ぬやう氣を附けてくれ。

花菱　合點でござります。

＼扨は彼れめが仕業かと、胸にうなづき花菱は、心殘して入りにける。

ト花菱吾助、よろしく思入あつて奥へはひる。

＼吾助は刀取り上げて、

吾助　どれ、日のたけぬうち歸りませう。（ト刀を提げて立ちかゝるを）

小野　吾助どの、ちよつと待たつしやい。

吾助　待てとは何ぞ、用でもあつてか。

小野　こなたに見せるものがある。

吾助　なに、見せるものとは。

＼心ならずも元の座へ住へば小野川四邊を見廻し、以前の觸書取出し、

ト吾助元の所へ住ふ、小野川觸書を出し、

小野　この書附を讀んで見やれ。

〽何心なく押し開き、讀下して打ち驚き、

吾助　すりや此邊まで人殺しの、早くも觸が廻つたか。

小野　其の町觸に記してある永坂下でお妾の、お卷どのゝ母御を殺し八十兩といふ金を、盗んだ者はお屋敷から、葬ひ料を下さつたを知つた者に違ひない。

吾助　むう。（トぎつくり思入、）

小野　大きな聲では言はれぬが、人の物は我が物と、まだ子供の時分から盗み心があつたゆゑ、おれはこなたの業だと思ふ。

吾助　どうしてそれを。

小野　死骸の口に小指があつて、それを證據に此邊までお觸の廻つた人殺し、所詮のがれぬ天の網、その身に掛らぬ其うちに覺悟を極めて名乘つて出やれ、さすれば罪も一等減じ、死罪の所が遠島になれば再び江戸へ歸れる時節があらうといふもの。

〽信義を盡す小野川が、異見に吾助も後悔なし。（ト吾助思入あつて、）

吾助　あゝ惡い事は出來ないものだ、誰知るまいと思つたが、天知る地知るで小野川どのに、さう知られたら隱しはせぬ、實はお卷に惚れ込んで口說いた事もあつたれど、叶はぬ戀の意趣晴らし、何

がなしてと思ふうち、お袋が自殺に葬ひ料、大した金を下すつたと聞いて色氣も慾氣と替り、空も時雨る冬の夜の永代下でお道を殺し、難なく手に入る八十兩も、濡手で泡の消え易く、たつた一晩三角で遊んだぎりで其あくる日、四角な賽の轉びが惡く、盗んだ金も皆取られ、やつぱり元の火の見番、あゝ惡い事は出來ないと先非を悔いて居た所、關取、お前の異見について、是れからわしは名乘つて出ませう。

小野　それぢやあ異見を聞いてくれるか。

吾助　身にしみ／＼と有難く、すつぱり改心いたしました。（トちつと思入）

小野　昔馴染といひながら、よくも異見を聞いてくれた、死骸の口にこなたの小指が殘つてあつたが天の罰、所詮のがれられぬから、名乘つて出るが上分別。

吾助　そこへおしも氣が附いて、自訴をする氣になりました。

〽先非を悔いて差しうつ向き、歎息なせば小野川が、不便と思ひ手箪笥より、金取り出し紙に包み、

ト吾助後悔せし思入、小野川地袋戸棚を明け、金を出し紙に包み、

小野　さう改心したならば、是れをこなたに進ぜるから、少しも早く行くがよい。

ト金包みを出す・吾助取りあげ、

吾助　これから名乘つて出るわしに、何で金を下さいました

小野　地獄の沙汰も金次第、その十兩は命の蔓、中へ土産にするがいゝ

吾助　眞身も及ばぬ心附け、有難涙がこぼれまする。

へ手拭顏に押し當て、聲を忍びて泣きければ、

ト吾助金包みを戴き、手拭を顏に當て泣く、小野川は心急く思入にて、

小野　斯ういふ内も壁に耳、お手が廻らぬ其うちに早く名乘つて出ぬ時は、こなたの命が助からぬぞ

吾助　それぢやお詞に隨つて、

小野　人の目棲にかゝらぬうち、

吾助　これから直に駈け込みませう。

小野　そんなら吾助。

吾助　關取。

小野　どうぞ再びこの江戸で、

吾助　逢はれる事が、あればよいが。

〽人を害せし悪心も、善に返りて悄々と、打萎れてぞ歸り行く、小野川跡を打見遣り、

ト此内吾助よろしく思入あつて、悄々と花道へはひる、小野川跡を見て、

小野　子供の折から手癖が悪く、親仁も困つたあの吾助、到頭人を殺す程な悪い心になつたのも、性は善なるものにして、改心なして自訴なす料簡、切られる命が助かるは、母の忌日に功徳をしたわい。

〽門の戸しめて元の座へ、住ふ折柄小野川が、門を日當に庄之助。

ト小野川元の所へ住ふ、淨瑠璃の切れ、流行唄の合方へ相撲の太鼓を冠せ、以前の一文字千右衛門出來り花道にて、

一文　今日雷電が相撲をば、止めるといふも小野川へ、義理を立てゝいふ事だが、又小野川も雷電へ義理を立て同じやうに、場所を休むと言はねばよいが。（ト右の鳴物にて舞臺へ來り、門口の戸を明け、

小野　誰かと思つたら一文字どん、今日はどこへ行つたのだ。

おゝ小野川、内に居たか。

一文　場所の事で雷電に逢はねばならぬ事があつて、四ッ谷まで行つて來たのだ。

小野　そりや遠方で、草臥れたらう。

一文　麴町から駕籠に乘り、今そこで下りたから、草臥れはせなんだ。

小野　して、雷電の所へ行つたのは、何の用で行つたのだ。

一文　さあ、行つた譯といふは。（ト合方になり、）此の冬場所から雷電が止めるといふので年寄衆が、此間から寄合つて、心に濟まぬことがあつてそれで出ぬのかどういふ譯か、日頃懇意な中合ゆゑ樣子を聞いてくれといふので、態々いつて聞いた所、此春こなたのお袋が果敢ない最期を遂げたのも、元の起りは雷電ゆゑ、追善供養に釣鐘を我が菩提所へ奉納なし、在所へ歸つて素人になるとよく／＼思ひ切つた樣子、再應おれが勸めて見たが、どうあつても聞かぬゆゑ、こなたに勸めて貰はうと、歸りがけに廻つて來たのだ。

小野　その話しを聞いたゆゑ、おれも相撲を止める氣だ。

一文　え、それではこなたも止める氣か。

小野　以前ならば抱へられた屋敷へ對して我儘に、止める事も出來ないが、抱へられた淺間家も此春暇になつたれば一本立ちの此の小野川、今は遠慮をする所なければ、おれも相撲を止めまする。

一文　そりや一本立ちのこなたゆゑ、誰に遠慮もいらぬけれど、今雷電と小野川が一度に場所を引いた日にやあ、此の冬場所が立ち兼ねやう、こなた衆二人で千人の相撲掛りの難儀になれば、どうか

小野　こなたが雷電を、すゝめて一緒に出てくれまいか。
兩虎爭ふ其時は必ず一虎死するといふ、世の譬にもいふ如く、相撲も兩虎爭ふ如く、引く軍配に取組めば、何れ一人は負けるは必定、それを知りつゝお袋が自害をしたは女の愚癡、自業自得で死んだのを、母へ濟まぬと義理を立て、供養の爲に釣鐘をわが菩提所へ奉納なし、今が盛りの相撲を止め、在所へ歸るとあるからは、その雷電へおれも亦義理を立つて相撲を止め、大津へ歸つて素人になる氣だ。

一文　成程こなたの料簡では雷電と共に相撲を止め、友達仲間の信義を盡し、五常の道を失はぬ天晴の事と褒めたいが、それでは師匠へ孝が立つまい。

小野　何と言はるゝ。（ト合方替つて、）

一文　此の冬場所はこなたの師匠粂川どのが勸進元、此前春の勸進元をした時雨が降り續き、十日の相撲を六十日日數の掛つた事があつて、其の借金がまだ拔けず、此の冬場所で埋めようと春からして粂川どのが、待ちに待つたる冬相撲、今賣出しの雷電とこなたが出ねば景氣に障り、必ず相撲ははひるまい、さうした日には借金に又借金をせずばなるまい、師匠の難儀になる事を、弟子がしては孝が立つまい。

小野　如何にもこなたの言ふ通り、師匠へ對して濟まぬけれど、我が母ゆゑに雷電も相撲を止めるとあるからは、どうも義理が濟まぬゆゑ。

一文　それではおぬしは雷電へ、義理さへ立てば恩になつた師匠へ義理は構はぬか。

小野　さあ、さういふ譯ではなけれども。

一文　譯でなくば雷電へは、わしが事譯言はうから、今度の相撲に出てくれぬか。

小野　さあ、それは。

一文　どうでも雷電へ義理を立てるか。

小野　さあ。

一文　師匠へ立てるか。

小野　さあ、

一文　さあ、

兩人　さあ〳〵〳〵。

一文　小野川返事は、どうぢやぞい。

〽義理と義理とに小野川が、返事に困る其所へ、淺間家よりして火急の使者、高雄が嫡子門

に立ち、

ト小野川ちつと返事に困る思入、花道より高雄宗三郎羽織袴大小にて、紺看板の中間附添ひ出來り、直に舞臺へ來り門口にて、

宗三　頼まう／＼。

小野　はい、どれからお出でなされました。

宗三　高雄重左衛門が悴宗三郎ぢや。（ト門口を明ける、小野川見て、）

小野　これは高雄さまの若旦那さま、ようお出でなされました。

宗三　見れば客來の様子。

小野　いえ、決して客ではござりませぬ。

一文　仲間の者にござりますれば、

小野　お心置きなく、先づ／＼これへ、

兩人　お通りなされて下さりませ。

宗三　然らば許しやれ。

ト禮儀正しく靜々と、上座へ通れば手をつかへ。

ト宗三郎會釋なして上座へ通り仕ふ。中間宗三郎の草履を持ち門口の外に控へ居る、小野川手をつかへ、

小野　久々お目通りをいたしませぬが、大旦那にはお替りはございませぬか。

宗三　仕合せと壯健にて、相替らず勤仕いたし居る。

小野　それは結構な事でございます。して、今日は何方へお出でなされましてございます。

宗三　其方に御用あつて、上意を蒙り參りしぞ。

小野　へい、私めに御用とは、何事でございまするな。（ト宗三郎こなしあつて、）

宗三　當三月故あつて其方始め、抱へ相撲一同へ暇遣はせし所、今般改めて其方を御召抱へに相成れば前々通り心得て、有難くお受けいたせ。

小野　はツ。

〽思ひ掛けなき君命に、小野川はツと當惑なし、とかう詞もあらざれば、花菱一間を駈け出でゝ、

ト小野川はツと當惑の思入にて、差しうつ向く。奥より花菱出來り、下手に手を突き、

花菱　若旦那さまいらつしやりませ、委細は奥にて承はりましたが、いよ〳〵師匠はお屋敷へ再びお召

しになりまするか。

宗三　今日上より御沙汰あつて、則ち父の名代にそれがし使者に參りしぞ。

花菱　再びお召しになるといふは、こんな有難い事はない。これ親方、なぜお受けをなさらぬのだ。

小野　今御答にお受けが出來ぬ。

花菱　いや願ひに願うた御歸參を、今お受けが出來ぬとは、どういふ譯でござりまする。

小野　われが知つた事ではない、口出しせずに控へて居ろ。

花菱　いえ、控へては居られませぬ、お袋さまの御最期も雷電めに負ける時は、直にお暇になると聞きそれを無念に自害なされた、其の御命日にお召しになるとは、此上もない追善、早くお受けをなされませ。

小野　まだ〳〵言ふか、出過ぎ者めが。（トきつといふ、花菱是非なく控へる、庄之助これを聞き兼ね、）

一文　これ小野川どの、花菱のいふのは尤も、なぜお受けをいたさぬのだ。

小野　有難うはござりますれど、此のお受けは出來ませぬ。

一文　なぜお受けが、

兩人　出來ぬのぢや。（ト合方きつぱりとなり、）

小野　さあ、この小野川をお抱へあるは上には相撲がお好きゆゑ、無益に御扶持を下されまするが、相撲を今日止めましたれば、此のお受けはいたし兼ねまする。

宗三　そりや何故に其方は、相撲を止めると申すのぢや。

小野　此の春場所で雷電に負けたを無念に我が母が、自害いたして死にましたを、我ゆゑ命を捨てさせたは濟まぬ事だと雷電が、菩提の爲めに釣鐘を鑄て寺へ納め、相撲を止めると申しますゆゑ、我が母ゆゑに雷電に場所を引かしては濟まぬ譯、此の義理合に私も止めます所存でござりまする。

宗三　成程一應承はれば尤もなる義理合ながら、今を盛りの小野川雷電、二人が止める事ならば江戸の相撲は衰微にならん、就いては今日お召抱へに御身が再勤いたすのを御待ちなさるゝ我が殿にも、嘸や本意なく思召されん、取りわけ父の名代に使者に參りしそれがしも御前へ申し上げ兼ぬれば、どうか心を取り直し、出勤いたす事にはならぬか。

〽物和らかに宗三郎が、諭す詞の尾に附いて。

一文　今高雄さまのおつしやる通り、二人が出ねば花がなく、必ず冬の相撲は出來ぬ。師匠へ孝を思ひなば、長くはいはぬもう一場所、出勤してはくれまいか。

花菱　親方お前がお抱へに、なれば冥土のお袋さまが、嘸お悦びなされませう、出勤なしてお屋敷へお

受けをなされて下さりませ、
宗三　返事をせぬは、不得心か。
小野　さあ、それは。
一文　師匠へ孝を立てぬ氣か。
小野　さあ。
花菱　得心してお受けをなさるか。
小野　さあ、
宗三　どうでも意地を立て拔くか。
小野　さあ、
三人　さあ、
四人　さあ〳〵〳〵。
宗三　小野川返事は如何なるぞ。
〽忠と孝との二道に、流石手取りの小野川も、四十八手の手を束ね、暫し返事もなかりしが。

ト三人詰寄る、小野川ぢつと思入あつて、

小野　この小野川が出る出ないは、相撲を止めると言ひ出せし雷電の身にある事ゆゑ、一應逢うた其上にて、此の御返事をいたしますから、明日までお待ち下さりませ。

宗三　今卽答にこの返事、ならぬとあれば是非もなし。

一文　元の起りの雷電に、逢はぬうちはと言ふも尤も。

宗三　如何にもこなたが申す通り、

一文　明日まで返事を、

宗三　相待ち申さん。

小野　すりやお聞き屆け下さりまするか、えゝ有難うござりまする。

〽胸に一物小野川が、兩手を突いて辭儀なせば、

宗三　然らば身共は立歸り、此の由主君へ申し上げん。

一文　私ことも粂川どのへ、委細の譯を申し傳へん。

花菱　どうぞ師匠の御返事を、お待ちなされて下さりませ。

宗三　承知いたした。（ト合方きつばりとなり、兩人門口へ出る。）

小野　左樣なれば、御前へよろしく。
宗三　おゝ、くどくも申すが忠孝二ッの、道を必ず忘れまいぞ。
小野　はッ。
一文　小野川さらば。
〽詞番ひて兩人は。（ト一文字門口をしめ、花道の方へ行きかけ）
手前は道に用事ござれば。
宗三　然らば是れにて、お別れ申さん。
〽別れてこそは立ち歸る。
ト宗三郎に中間附いて花道へはひる。一文字思入あつて下手へはひる。此うち小野川腕組みをなし思案の思入。
花菱　これ親方、お前は何でお屋敷へ、お召しのお受けをなされぬのだ。
小野　するもせぬも小野川の、胸にあるから默つて居やれ。
花菱　默つて居ろと言はしやつても、弟子は我が子も同じこと、案じられてならぬゆゑ。
小野　いらぬ事を案じずと、佛間に香が絕えたであらう、早く行つて上げてくれろ。

花菱　さあ、香も上げるが、お前の胸を。

小野　根問ひをするな、明日は知れるわ。（トきつといふ。）

〽鶴の一聲花菱は、是非も投げ首奥の闇へ、打萎れてぞ入る影を、篤と見遣りて太息をつき、

ト花菱是非なき思入にて奥へはひる。小野川立上り、跡見送りほつと思入、誂への合方になり、

小野　主人へ忠と師匠へ孝、忠孝二ツを立てる時は、我ゆゑ相撲を止めるといふ、懇意を結んだ雷電へ友達中の信義をば、失ふゆゑに明日までと、高雄さまと一文字へ今日の返事を延ばしたは。

〽今宵我身の命を捨て、忠孝信義を立つる所存。

思へば此春自殺せし、母の忌日と同じ日に、果敢ない最期遂げるのも皆前世からの因縁づく。

〽我身を悔いて小野川が、かこち涙の一時雨、頼む小蔭に足早き娘の跡を老の身の、杖に縋りてとほ〳〵と。

ト此うち小野川死なうといふ思入よろしく、よき程に花道より、おしが屋敷下りの姿のこしらへにて出來り、跡より三河屋小兵衛白髪鬘、羽織着流し更けたるこしらへ、杖を突き出來り花道にて、

小兵　これ〳〵娘、そなたのやうに急いでは、おれが追ッ附く事が出來ぬ。

しが　わたしが早いといふではない、お前の足が遅いのぢやわいな。

小兵　何の遲い事があるものか、早く顏を見ようと思うて芝居へ行く女子のやうに、天窓ばかり先きへ出るわ。

しが　それでは跡から參りますから、先きへお出でなされませ。

小兵　さう腹を立つには及ばぬ、さあ〳〵早く行つたがよい。

〽親子連立ちどつかりと、門に彳み差しのぞき。

ト此うち小野川に脇差を出し、死ぬ覺悟、兩人は舞臺へ來り思入あつて、

しが　もしとゝさん、爰でござんすかえ。

小兵　おゝ、關取の家は爰だ。

しが　わたしや何だかはづかしいわいな。

小兵　あゝ、小娘ではあるまいし。（ト門へ來て、）はい、御免なされませ。

〽音なふ聲に小野川は、死ぬる今際の邪魔ながら。

小野　はい、どちらからお出でなされましたな。

小兵　關取はお家でござりまするか。

小野　何の御用か、內に居ります。

小兵　左様なら、御免なされませ。

〽小腰かゞめて、（ト合方になり、内へはひり、）

小野　どなた様でございますか、これへお通りなされませ。（ト小兵衛下手に居て、）

小兵　私は露月町で古着渡世をいたしまする、三河屋小兵衛と申します者、お見知り置かれ下さりませう。

小野　お初にお目に掛りますが、私は小野川喜三郎にございります。

ト おしが門口より覗く、小兵衛思入あつて、

小兵　これ娘、逢ひたい〳〵と言つて居つたに、早う是れへ來るがよい。

しが　はい、お許しなされて下さりませ。

〽親の詞に差しうつ向き、會釋こぼして座に直る、顏を小野川見てびつくり。

ト おしがはづかしき思入にて内へはひり、下手へ住ふ。小野川顏を見てびつくり思入、

小野　や、思ひがけないお前さまは。（ト誂へなまめきし合方になり、）

しが　久しくお目に掛りませぬが、何時もながらお替りなく、お目出たうございりまする。

小野　當春殿の御機嫌損じ、わしを始め相撲一同皆お暇になりまして、お出入りさへも叶はぬゆゑ、御

殿の樣子も存じませぬが、お宿下りでござりますか。
しが　いえ、私も此間お暇が出ましたゆゑ、宿へ歸りましてござります。
小野　それではあなたはおしがさまの、親御さまでござりますか。
小兵　如何にもわしは此しがが、實の親仁でござります。
小野　して、今日お出でなされましたは、何ぞ御用でもござりましてか。
小兵　ちと闕取に折入つて、お願ひがござりますが、お聞きなされて下さりますか。
小野　お前さまには初めてなれど、お娘御にはお屋敷でお馴染ゆゑに、わしが聞かれる事なら聞きませう。（ト小兵衞嬉しき思入にて、）
小兵　これ娘、聞かれる事なら闕取が、聞いてやるとおつしやるが、嘸そなたは嬉しからう。
しが　誠に嬉しうござりまする。
〽いそ〳〵悅ぶ親と子が、心のうちのいぶかしく。（ト小野川心得ぬ思入にて、）
小野　して、お頼みとおつしやりますは。
小兵　さあ、其お頼みと申しますは、娘が事でござります
小野　え。（トびつくり思入、誂への合方になり、）

小兵　何をお隱し申しませう、これなる娘は十五の年淺間さまへお小姓に、上げて間もなく殿樣のお目に留つて奥さまが妾に上げろと達ての御所望、又わしが方へも奥向きの役人衆から強てのお賴みいやと言はれぬ年來のお出入りゆゑに十六の春から娘は妾となり、今年の秋まで勤めた所、同じ妾のお卷どのが不慮な最期をいたしてから、猫が祟りをなすなどゝあられぬ噂をいたすゆゑ、どうか娘を下げたいと思ふ所へ俄のお暇、やれ嬉しやと引取つて内へ置くうち年頃に、諸所方々から嫁にくれと言ひ込む口も兎や角と、返事をせぬは餘所外に、思ふ男があつての事と娘に迫つて樣子を聞けば、お屋敷に居る時分からお前に焦れて居つたれど、いはゞ主ある妾の身に長の年月色目にも見せず勤めて居りましたが、お暇の出た上からはどうか女房になられますやう、親の情でしてくれと涙ながらに娘が賴み、さういふ事なら直き〳〵に隱す事をば打ち明けて、言つたら望みも叶ふかと、昨夜娘と相談して、押しを強くも親子してお賴み申しに參りました。どうか關取この事を、お叶へなされて下さりませ。

〽言ひにくさうに父親が、額の汗を拭ひつゝ賴む涙を力草、娘も共々恥かしげに。

ト小兵衞よろしく思入にていふ、おしがも思入あつて、

しが　十五の年からお前をば思ひ初めしも月に雲、いなと言はれぬ殿樣の、御意に是非なく妾となり。

此身をお任せ申せしかど、いつぞや首尾よくお暇たまはり、お前の女房になりたいゆゑ、日頃信ずる神佛へお願ひ申せし甲斐あつて思ひ掛けないお暇に、家へ歸りしわたしが嬉しさ、定めてお氣には入るまいけれど、願ひを叶へて下さりませ。

〽今死する身と知らずして、思ひ入つたる親子の頼み、聞く小野川が身の迷惑。

トおしがよろしく思入、小野川じゆつなき思入にて、

小野　親子の衆のお頼みは何事かと存ぜしに、此むくつけな小野川を左程に思つて下さるは、男冥利に叶うたことゝ實に嬉しく思ひますが、相撲が女房を持つ時は必ず力の拔けるもの、それ故わしも年寄になるまで女房は持つまいと、心に錠をおろせしゆゑ、遂に一度小野川が女郎を買つたといふ噂のないのが何より慥かな證據、今言ふ通り女房は相撲を引かねば持たぬゆゑ、氣の毒ながら親子の衆、思ひ止つて下さりませ。

小兵　成程それも尤もなれど、是れ程までに思ふ娘、年寄になるそれまでは、名のみでよいから女房に娘を持つて下さるまいか。

しが　今とゝさんがおつしやる通り、たゞ女房になりさへすれば、假令是れから何十年、年寄になるそれまでは、妹の心で居りますから、どうぞ女房といふ名をば、私に附けて下さりませ。

〽割りなき頼みも小野川が、今宵限りの身の上に、不便と思へどすげなくも。

ト小野川切なき思入にて、

小野　假令名のみの女房でも、この小野川が持たれぬのは、死ぬる覺悟に。

兩人　え。

小野　いやさ、五十までは持つまいと、一旦覺悟した上に、お出入り屋敷のお妾ゆゑ以前の御恩を忘れねば、屋敷へ對して小野川が、どうも女房に持たれぬ義理。

しが　そんならどうでも私をば、たゞ名ばかりの女房でも、お前は持つて下さりませぬか。

小野　此春お庭で殿樣が御常談におつしやつたお詞あれば、お抱へ中なら御上へも此譯をお話し申し、女房に持つまいものでもないが、お暇の出た此の小野川、お話し申す譯にも行かず、以前の御恩を忘れたやうで、屋敷へ對して持たれぬから、思ひ切つて下さいませ。

〽言ふ顏ぢつと打ち見遣り。

しが　そりやつれないぞや、小野川どの。

〽まだお小姓の時分から、お前の女房になりたいゆゑ、ありとあらゆる神佛へ、御願をかけて待ちわびしに。

思ひきれとは、情ない。

＼強いばかりが相撲でもあるまいわいなと搔き口說き、はツとばかりに泣き伏せば、親は娘の胸のうち、不便と思へど氣を勵まし。

ト此うちおしがさはりの振りよろしくあつて泣伏す、小兵衞不便といふ思入。

小兵　いや小野川どのゝ言はるゝは、一つとして無理ならず。皆尤もな言分ゆゑ、所詮願ひは叶はぬから思ひ切つて家へ歸りや。

しが　いえ／＼、わたしや歸りませぬ。

小兵　定めて歸りともなからうが、女房に持つてくれぬからは、何時まで爰に居られるものだ。

しが　再び爰へ參られねば、どうぞとゝさんもう少し、爰へ置いて下さんせ。

小兵　えゝさりとては未練な奴、小野川どのがいやといふのは、一旦殿の妾となり慰みものになつた體、男を磨く關取ゆゑ、それで女房に持たぬのだ、我身を恥ぢて家へ歸り、妾を承知で貰うてくれる人の所へ行つたがよい。

小野　決してさういふ譯ではない、妾であらうが女郎であらうが、義理さへなければ厭ひはせぬ。

小兵　いや／＼それに相違ない、くよ／＼言つても仕方がない。（ト是れにておしが思入あつて、）

しが　さういふ事でござりますなら、思ひ切つて歸りませう。

小兵　そんならそちは、思ひ切るか。

しが　さあ、思ひ切る氣はなけれども、嫌はれたれば是非がない。

〽わつと泣くたび聲忍び、袂を顔に咽せ入れば、側の見る目もいたはしく。

トおしが袖を顔へ當てゝ泣く、小野川顔を背け居る、小兵衞思入あつて、

小兵　くどい事を申すやうだが、家を出ます其時に、願ひが叶はにや死にますと、娘が申して居りましたれば、此儘家へ歸りましたら思ひ迫つて死にませう、どうかお慈悲に娘の命、助けて遣つて下さりませぬか。

小野　さあ死ぬるとあるを見捨てるのは、情を知らぬやうなれど、つれなくわしが斷るも明日は直に知れる譯、餘儀ない義理ゆゑ許して下され。

小兵　何の詫びに及びませう。（ト思入）さあ、娘立ちや。

しが　あい。

〽あいとはいへど今更に、心殘りて立兼ねるを、無理に手を取り引立つれば、是非も涙に門へ出で。

ト此うちおしが心殘りに立兼ねるを小兵衛手を取り、無理に門口へ出る、小野川も不便だといふ思入、
おしがは見返りて、
もし、小野川さん。

小野　むゝ。(ト合方にて顏見合せ、思入あつて、)

しが　叶はぬことゝ思ひきれば、もう此世では。

小野　や。

しが　逢ひませぬぞ。(ト袖を啣へて泣く。)

小兵　おゝ、よく思ひ切つたなあ。

〽泣き入る娘をせり立てゝ、名殘り惜げに見返り〳〵、涙ながらに立ち歸る。

ト小兵衛おしがの手を取り花道へ行き、跡を見返り〳〵名殘りを惜しむ思入よろしくあつて花道へはひる。

〽跡に小野川茫然と、暫し二人が影見送り。

ト小野川門口より花道を見て思入あつて、床の合方になり、

小野　嘸や情を知らぬものと、わしを恨んでござらうが、返事のならぬは世の義理に、今日死ぬる身の

この小野川、明日は世間の口の端にかゝりや繋がる親子の衆も、是れゆゑ返事をせなんだかと、切ない心を察して下され、母の忌日に菩提の爲め、さつきの功徳に引替へて、よしない罪を作つたわい。（ト時の鐘、思入あつて、）邪魔のなきうち身の言譯、片時も早く、おゝさうだ。

〽諸肌脱いで一腰へ、手を掛けるのを一間より、窺ふ花菱飛んで出で、

ト小野川肌をぬぎ、脇差を拔きかける、此の以前後へ花菱窺ひゐて、小野川を留め、

花菱　これ親分、早まつて下さりますな。最前からの此場の樣子奧で聞いて居りましたが、なまじ口出ししましたら、叱られやうと存じまして、息を殺して居りましたが、死ぬとあつては叱られても是れは留めねばなりませぬ。

小野　おゝ師匠思ひのそなたゆゑ、留めてくれるは忝ないが、死なねば義理の立たぬ小野川、留めずと死んだ其跡で、この入譯を話してくれ。

花菱　いえ〳〵死ぬるを餘所に見て、どうまあ留めずに居られませう。

小野　そんならどうでも、そちは留めるか。

花菱　こればかりは叱られても、師匠の詞を背きます。

小野　さういふ事なら、是非がない。

〽留むる花菱突き倒せば、もんどり打つてころ〳〵、其間に一腰抜きかけるを、どつこいさうはと武者ぶりつき。

ト是れより床の合方へ、相撲の太鼓を冠せ、小野川花菱を突きのけろ、とゝ武者ぶりつき自然と相撲の立廻りになる仕組よろしくあつて、

〽斯かる所へ門口へ來かゝる雷電それと見て、止め兼ねたる小野川が、右手をしかと押へ附け。

ト此うち花道より以前の雷電、着流し一本ざし、羽織を肩へかけ出來り、門口にて此様子を窺ひ直に內へはひり、小野川の手を捉へ、

雷電　こりや小野川、早まるな。

小野　おゝ、思ひ掛けない雷電か。

雷電　仔細は跡で聞かうから、まあ此の刃物は納めてくれ。

小野　いや〳〵、これは納められぬ。

雷電　はて、怪我をせぬうち雷電に、此の刃物を預けてくりやれ。

〽無理に一腰もぎ取れば、花菱ほつと息をつき、

ト雷電小野川の白刄をもぎ取る、花菱はつと思入あつて、

花菱　危いところへ雷電關、よう來て留めて下さりました、わし一人で力及ばず、どうしようかと存じました。

雷電　おれが爰へ來たからは、もう案じるには及ばぬぞ。

花菱　えゝ、有難うござります。

雷電　こりや定めて譯のある事だらうが、何ゆゑあつて腹を切るのだ、心を鎭めて雷電に譯を話して聞かせてくりやれ。（ト誂への合方になり、）

小野　譯といふは外でもない、死んだわしがお袋へ、菩提の爲に釣鐘を寺へ納めて冬場所から、相撲を止めると聞いたゆゑ、それではおれも止めねばならぬとこなたへ義理に斷つたが、生憎今度は我が師匠粂川どのが勸進元、止めては師匠に濟むまいと一文字に言はれた所へ、かてゝ加へて屋敷から再勤せよと急なお召し、相撲へ出ればこなたへ濟まず、止めれば屋敷と師匠へ濟まず、どちらへどうといはれぬ義理に、死んで言譯する心。

雷電　おぬしの氣では義理を立て、死なうといふのは尤もだが、おれへの義理なら入らぬこと、死んだ母御の爲めばかりで相撲を止めるといふではない、土俵の上は生死の境、時のはずみで相手をば

投げ殺すまいものでもない、それを心に思つては怖氣が附いて取れぬから、それでおれは止めるのだ。決して義理は入らぬから、再勤なして淺間家へ抱へとなつて肩身廣く、粂川どのゝ力となるが是れまで受けた恩返し、死んで義理を立てようなどゝは、さりとは惡い料簡だ。

小野　師匠へ義理を立てろといふ、こなたの詞は忝けないが、師匠は內輪こなたは他人、內輪の義理は兎も角も他人へ義理を立てるが道、それゆゑ死なうと覺悟したのだ。

雷電　いや〳〵それは料簡違ひ、たとへていはゞ師匠は親、また友達は兄弟なり、その兄弟の雷電にいらぬ義理を立てずとも、親と崇めるおぬしが師匠、粂川どのへ年來の義理を立てるが道であらう。

小野　假令何とこなたが言つても、一旦死なうと覺悟したら、今更生きる心はない。

雷電　すりや、是れ程に譯をいつても。

小野　どうも死なねば、義理が立たぬ。

〽義を立て通す門口へ、小戻りなせし一文字が、內の樣子を窺ひて。

ト此內小野川雷電よろしく思入、よき程に下手より、以前の一文字出來り、

一文　いや雷電どの、暫く待つて下さりませ。（ト合方になり、內へはひる。）

雷電　誰かと思へば一文字どの。

一文　樣子は門で聞きましたが、この小野川が出る出ないは、こなたの心にあることだ。

雷電　なに、此の雷電が心にあるとは。

一文　恩ある師匠の冬場所へ相撲を止めて出ぬといふのも、又言譯に死ぬといふのも、こなたが相撲を止めるゆゑ。

雷電　何と言はつしやる。

一文　元の淺間へ抱へとなり師匠へ多年の恩返しを、この小野川にさせ度くば、こなたが再び出てくれれば丸く納まる土俵の上、どうか心を取直し、此の冬場所へ出てくれぬか。

雷電　そりや最前もいふ通り再び相撲は取るまいと、摩利支天へ額を上げ力を封じた上からは、誓ひを破つて場所へは出られぬ。

一文　こなたが出ねば義理ゆゑに、この小野川は死にますぞ。

雷電　むゝ。

一文　日頃兄弟同樣に懇意を結ぶ喜三郎に、義理ゆゑ腹を切らせる氣か。

雷電　何しにおれが。

小野　懇意を結ぶ小野川を、助ける心があるならば、もう一度出てくれぬか。

雷電　さあ、それは。

一文　むざんに命を捨てさすか。

雷電　さあ、それは。

小野　助けてくれるか。

雷電　さあ。

兩人　さあ〳〵。

小野　どうぞ出勤、

小野
一文　して下され。

〽のツぴきならぬ鎹に、天下無双の强力も、引くに引かれず思案を極め。

ト雷電じゆつなき思入あつて、

雷電　おゝ、得心した。

兩人　え。（ト思入。）

雷電　今雷電が相撲を止めるも、此春非業な死をされた母御の恨みを晴らす爲め、それが却つて徒となゝり今又爰で小野川にわれゆゑ命捨てさせては、猶々母御へ濟まぬ義理、一旦相撲は取るまいと誓

ひを掛けし摩利支天、よしや御罰を蒙るとも、此の儘見ては居られぬゆゑ、誓ひを破つて雷電が再び土俵へ上るであらう。」

小野　すりや、得心して出てくれるか。

兩人　えゝ、忝ない。

〽人々笑みの眉を開き、

一文　是れでわしが顔も立ち、粂川どのも安堵であらう。

花菱　お召し抱への淺間さまでも、嘸お悦びでござりませう。

小野　これにて歸參のお受けも出來れば、花菱そちはお屋敷の高雄樣へ此趣を、早くお知せ申してくれ。

花菱　畏つてござりまする。（ト門口へ出で、）善は急げ、ちつとも早く。

〽尻引ッからげ花菱は、逸足出して走り行く。

トばたばたにて、花菱尻端折り、逸散に花道へはひる。

小野　三方四方の納まりも、雷電どのが心一つ。

一文　よく得心して下された。

小野　こんな嬉しい事はない。

〽悦び勇む其所へ、物思ひげに以前の老人、悄々として入來り。

ト小野川庄ノ助兩人悦ぶ、此うち花道より、以前の小兵衛足早に出來り、

小兵　小野川どの、又參りました。

小野　最前ござつた小兵衛どの、何ぞ御用で。

小兵　ちとお話しがござりまして。

小野　如何なる事か存じませぬが、先刻はその許へお暇の身の小野川ゆゑ、すげない事を申しましたが、計らず今日淺間家へお抱へになりましたれば、おしがどのゝ志し高雄さまへお話し申し、上よりお許し受けまして、女房にお貰ひ申しませう。

小兵　思召しは忝けないが、最早それには及びませぬ。

小野　最早それには及ばぬとは、わしを思ひ切られしか。

小兵　いえ、思ひに迫つて娘には、自殺いたしてござりまする。（ト小兵衛泣く、小野川驚き、）

小野　やゝ、すりや娘御には自害して、果敢ない最期いたされしか。

雷電　委しい事は知らぬけれど、

一文　不慮な最期をさつしやつたとは、

雷電　はて、氣の毒な、

兩人　事だなあ。（ト小兵衛泪を拭ひ、）

小兵　最前家へ歸りまして俄に發狂せし樣子で、猫が恨みを返しに來たと取りとまらぬ事を申しまして、四邊に物でも見えますか、豫て所持なす短刀を拔いて四邊を切拂ひ、果ては我が手で咽喉を突き立て、非業な死をばいたしました。

小野　このお抱へがもう一日、早くば最期をさせまいもの。

小兵　これも此頃世間でいふ、猫の祟りでござりませう。

小野　猫の祟りか知らねども、果敢なき死をば遂げられて、こなたさまの御愁傷お察し申入りまする。

小兵　死ぬるも前世の約束ゆゑ、いたし方もござりませぬが、十五の年から思ひ初め、こなたの女房になりたいと思つた心の屆かぬのが、親の身にては不便でござる。

〽子故にまたも咽び入る、心を察し小野川が。

小野　御尤もなる其お歎き、おしがどのへ義理を立て一生女房を持ちませねば、未來の緣を樂しみに半座を分けて待たれよと、いうて返らぬ亡骸へおつしやいまして下さりませ。

小兵　あゝ忝けないお志し、娘の身には名僧の引導よりも勝つたお詞、早く聞かして遣りませう。

小野　此世の別れに、わしも同道いたしたけれど、今日お抱へになる幸先きゆゑ。
小兵　いや決してお出でには及ばぬから、娘へ手向に一遍の、回向をなされて下さりませ。
小野　おゝ、承知しました。
小兵　左樣なれば皆さま方。
雷電　知らぬものまで目に涙。
一文　斯かる歎きをさつしやるも、
小兵　これも子故でござります。

〽是非も涙にかき暮れて、暇乞さへそこ〳〵に、我家をさして立ち歸る。

ト時の鐘、小兵衞思入あつて花道へはひる。

〽跡に殘りし三人が、歎きを餘所に勇み立ち。（ト誂への派手な合方になり、）

一文　男は當つて碎けろと、此間から心配した止めるといつた雷電も、又小野川も元の如く、此の冬場所へ出勤すれば、
小野　久し振りでの勸進元、わしが師匠もこれで安堵、
雷電　よしない事で粂川どのから、年寄衆に心配かけたが、

一文　其代りにまた板番附へ、一旦止めると噂のあつた、
小野　この雷電や小野川の、
雷電　名前が出れば景氣も挫けず、
一文　相撲ははひるに疑ひなし。
小野　幸ひ歸參の悦び酒、
雷電　前祝ひに爰で、
三人　飲み合はうか。

〽西と東の雲晴れて、みんな身祝ふ其所へ、轟は迎ひ風。

ト三人悦ぶ思入、ばた／＼になり、花道より以前の轟出來り、門口にて、

轟　これ／＼親方、釣鐘の事で鳶の衆が、是非逢ひたいというて、家に待つてゞごんす。
雷電　これ、おれに物をいふ前に、小野川どのに挨拶せぬかい。
轟　おゝさうでごんした。關取、この間は。（ト言ひかける。）
小野　いや／＼その挨拶には及ばぬから、待つ人があるといふなら。
一文　わしは跡に用もあれば、又明日逢ひませう。

雷電　そんなら親方、道が遠いから、早く歸りなさい。

小野　今駕籠をいうて遣らう。

雷電　忝けないが、それには及ばぬ。（ト立ち上り門口へ來り、）

一文　そんなら、是れで、

小野　雷電どん、

三人　明日逢ひませう。

〽行きかけ見返り、打ちうなづき、

ト此うち雷電に轟附いて花道よき所へ行く、小野川思ひ出せしこなしあつて門口へ來り、

小野　あゝこれ、雷電どん、ちよつと待たんせ。

雷電　何ぞ用でごんすか。

小野　さあ、一文字が扱ひで、名前は出せど、こんたもわしも、

雷電　この冬場所が、一世一代、

一文　花を飾つて花々しく、

小野　譽れを後へ。（ト小野川門口の欄間へ手を掛け、雷電と顏見合せるを木の頭）殘しませうよ。

ト流行唄にてよろしく、

ひやうし　幕

ト幕外にて、雷電羽織の紐を結びかへ、轟にさあ行かうといふ思入、誂への唄、相撲太鼓になり、よろしく花道へはひる。跡賑やかなる鳴物にてつなぎ引返す。

(淺間家火の見下の場)——本舞臺眞中に誂への火の見櫓の裾、丸木の柱中程より上黑の板羽目、こはれる仕掛、內に階子あり、此後一面の黑塀、これへ供廻り順書の木札を掛け、總て淺間家火の見下の體。爰に足輕六人、菖蒲革の袴股立、白の襷鉢卷、突棒刺叉捩りを持ち立ち掛り居る、どん〳〵にて幕明く。

一　此下から床下へ隱れて居たるお端女お仲、自害をなされたお妾のお巻さまの猫が取り附き、

二　主人を苛めた女中衆を、四人まで喰ひ殺し、搦め捕らんとなすものを、引ッ搔いたり喰ひ附いたり。

三　それゆゑ近寄ること叶はず、誰しも命が惜しいから遠巻きにして追散せど、飛行自在の魔物ゆゑ、

四　飛道具なら知らぬこと、六尺棒や突棒刺叉、こんな物を振廻しても、所詮退ぢることは叶はぬ。

五　たゞわや／＼といふのみにて、先へ出るものあらざれば、
六　足輕仲間の手際では、所詮生捕る事は出來ぬわえ。（ト此時ドロ／＼になり、皆々びつくりして、）
一　そりや出た、逃げろ。
六人　喰ひ附かれるな。

トドロ／＼にて、皆々わや／＼と立ち騷ぐ。ばた／＼になり、花道より用人、野袴ぶつさき羽織、大小、襷、鉢卷、草鞋にて十手を持ち出來り、

用人　こりや／＼者共、靜かにいたせ。此度市中一般に當家に於て古猫の怪異ありと蛇足を添へ、種々の浮說を申し觸らせば、御家の瑕瑾打ち捨て置かれず、其方共へ召捕りを今日申し付けたれど、未だに搦め捕らざるは、役に立たざる者共なり、火の見櫓へ登りしは、最屈竟の場所なるぞ、疾く疾く登つて搦めとれ。
一　仰せではございますが、猫が其身に取り附いて、
二　飛行自在のおはしたお仲、
三　なか／＼以て我々の、
四　所詮力に及びませねば、

五　左様おつしやるあなた様が、
六　火の見へ登つて化猫を、搦め捕つて、
六人　下さりませ。
用人　いや／＼身共は差圖役、搦め捕るのは足輕の、其方共の役目なるぞ。
一　いえ／＼、何とおつしやつても、搦めることは、
六人　出來ませぬ。
用人　えゝ言ひ甲斐のない奴等だなあ。
　　　トばた／＼になり、花道より着流し一本差し、相撲のこしらへにて小野川出來り、
小野　暫く／＼、暫くお待ち下さりませ。
用人　誰かと思へば、そちは小野川、暫く待てと、
六人　止めしは。
小野　何れも方のお手に餘る、其の古猫の召捕りを、今日お目見得の小野川に、仰せ附けられ下さりませう。
用人　流石は力士で名譽の小野川、よくぞ願ひ出でたるぞ、望みに任せ其方へ召捕りの役申し附くるぞ。

小野　御家の瑕瑾になりますれば、櫓へ登つて小野川が、生捕りますでござりまする。

川人　猶豫いたさず、とく／＼召捕れ。

小野　畏つてござりまする。（ト大小の合方にて、小野川立ち上り、きつとなつて舞臺へ來る。）

用人　小野川どのが魁なら、

一　われ／＼どもゝ、

六人　諸共に、

小野　何れも方はお構ひなく、拙者へお任せ下さりませ。

用人　然らばそちへ、任すであらう。

小野　只今これにて生捕りますれば、暫時お開き下されませ。

用人　承知いたした、者共參れ。

六人　はツ。（トドン／＼にて、用人先きに六人附添ひ上手へはひる。）

小野　いで古猫を生捕りくれん。（ト尻を端折り、きつと見得、これより床の淨瑠璃になる。）

〽時しも冬の中空に、老女の粧ひ物凄き、月も雲間の薄闇がり、鐘の響きも木枯しの、風に交りてどろ／＼と、震動なすに異ならず、肌に貫く寒風にぞつと身の毛も立つ煙り、見上ぐ

る火の見の中段より顯はれ出でし猫の怪、お仲は髪を振亂し、柱に爪を磨ぎ立てゝ、物凄くも又恐ろしゝ。

ト此うち小野川は尻を端折り、身ごしらへして、きつと櫓の上を見上げる、ドロ〳〵にてよき所中段の羽目を毀し、黄色の煙りぱつと立つ、お仲猫のこしらへにて髪を振り亂し、短刀を逆手に持ち、櫓の門に片足踏みかけ下を見る、小野川は肌を脱ぎ、双方きつと見得、誂への鳴物になり、お仲平舞臺へ飛び下りる、小野川大手を廣げ生捕らうとする、お仲短刀を持つて突いてかゝるを身を躱し兩人立廻る、此うちお仲は始終猫の思入よろしくあつて、小野川お仲の襟上を取つて引き寄せる、お仲振りはなすことの出來ぬ思入。

小野　〽襟上取つて引き据ゑれば、年經る猫も大力に四足を藻掻くばかりなり。

一旦命を助けられし恩を忘れずお卷どのに、無實の言ひかけなせし者を、一々汝が害せしは、あつぱれなる忠義なれど、なぜ速かに立ち去らざりしぞ、淺間の屋敷に恨みある年經る猫の怪異ありと、尾に尾をつけて世上の噂、御家の瑕瑾になる事を汝は辨へ知らざるか、假令主人の仇にもせよ、多人數害せし上からは、最早命はあらざるぞ。

〽大地へ摺り附け突き放せば。

トお仲の襟上を取り、猫を懲らす思入にて大地へ摺り附け突き放す、お仲猫の思入にて小野川をきつ
と見上げ、

〽主人に無實の罪負はせし四人の者は害せしかど、今一人の吾助をも害せし上にて立ち去らんと、是れまでお仲の五體を借り、附けねらへども水天宮の、尊き守りを所持なし居るゆゑ妖魔の身にては近寄りがたく、あらぬ浮世の噂となり御家に瑕を附けたるは恐れ入つたる我が身の科、只今爰を立ち去りまする。（ト此うちお仲よろしく猫の思入）

悔悟いたさば速に、お仲が五體を立ち去るべし。

〽いふにお仲はかつぱと伏し、猫の一念立ち去れば、我に返りて顔を上げ、

トお仲かつぱと伏し、ドロ〳〵にて黄色の煙り立ち、お仲正氣になりし思入にて、

お仲　今日の今まで夢現、たゞ何事も朧にて辨へ知らねど恨みある、四人の者を害せし事を覺えある上は、申譯は此場にて。

〽持つたる懐劍取り直し、咽喉へがばと突き立つれば、（トお仲懐劍をのどへ突き立てる。）

小野　ほゝおあつぱれ、よく死せしぞ、多人數害せし上からは、所詮存命叶ひがたし。

お仲　これより冥土へ赴きて、亡き御主人へお仕へ申さん。

〽刃を抜けばがつくりと、果敢なく息は絶えにけり。

ト お仲刃を抜き、よろしく落入り、ばつたり倒るゝ。

小野 やあ〳〵何れも、猫の一念立ち去りて、お仲は人を害せし科に、自殺いたしてござりまするぞ。

ト 上手より、以前の人数出來り、

用人 惡猫退治なしたるは、流石は小野川、

六人 お手柄々々。

小野 猫の一念立去る上は、

用人 これにてお家の、

六人 噂も消え、

小野 はて、悦ばしき。（ト手を打つて、木の頭、）事だなあ。

ト 手を開き、土俵入りの見得よろしく、時の太鼓カケりを冠せ、

ひやうし 幕

ト 題目太鼓にてつなぎ、直ぐ引返す。

大詰　浄土寺鐘供養の場

〔役名――小野川喜三郎、雷電爲右衞門、鳴島吾助、力士花菱、與吉伯父與兵衞、役火消勘次、同佐七、力士轟、お卷弟與吉、火消、立廻り大勢、町人の仕出等。〕

(赤坂浄土寺門前の場)――本舞臺眞中常足の二重、石の蹴込み、同じく踏段、此の上屋根附きの寺の門、後鐵の手水鉢、石燈籠などの書割り、門の左右練塀、腰通り石垣、此前竹矢來、撞樓堂、普請小屋場といふ杭を立て、下の方鐘供養といふ高札、松の立木同じく釣枝、總て赤坂浄土寺、雷電菩提所門前の體、爰に町人の仕出し四人○△□◎立ち掛り居る。寺鐘にて幕明く。と鐃鉢の鳴物になり。

○　昨日當寺へ引込んだ、今度雷電が奉納する、釣鐘を見なすつたか。

△　鳶の者が大勢で家の前を引いて來たゆゑ、出て見ましたが大きなものだ。

□　鐘の裾の唐草といふ所へ土俵を彫つたは、よい思ひ附きでござります。

◎　今日鐘供養に餅を蒔き、雷電が施主ゆゑに、撞き初めをするといふことだ。

○　あの力で撞いたらば、どんな音がすることか。

△　左樣さ、其響きは、先づ山の手はいふに及ばず、本芝田町品川から、

□　東海道まで響くやうな、えらい音がするであらう。

◎ 何にしろ天氣がよいのに、待ちに待つたる鐘供養、

○ 四谷赤坂麹町、また青山から麻布かけ、

△ 夥だしい見物ゆゑ、こゝらあたりの喰物店、

□ 餅屋蕎麥屋は大仕合や、どこの家でも一ぱいだ。

◎ 定めて地内も込まうから、早く行つてよい場所で、

○ 押されぬやうに見物しませう。

三人 それがいゝ〳〵。

ト右の鳴物にて、四人門の内へはひる。花道より前幕の轟、尻端折りにて提灯の疊んだのを二張持つて出來る、跡より同じく前幕の勘次、佐七其他一、二、三、四の四人何れも淺黄の法被、白足袋、跣足にて出來り、花道にて、

勘次 やいそこへ行く褌かつぎ、待てといつたら待たねえか。

佐七 よく此間おら達を、拳をあけて打ちやあがつたな。

轟 さういふわいらは此間、見附前の居酒屋で、喧嘩を仕掛けたがえんだな。

勘次 そりやあ言はねえでも知れたことだ、年中法被一枚で、寒さも知らにやあ暑さも知らねえ、面肌

勘次といふのはおれだ。

佐七　毎日抱いてる睾丸火鉢の炭團の天窓ははるけれど、人に天窓をはられた事のねえのが自慢の尺長佐七。

勘次　どこでか意趣を返さうと、

佐七　此間から、

皆々　待つて居たのだ。

轟　さういふ事なら往來の、邪魔にならねえ向ふへ來い。

勘次　おゝ、行かねえで、

皆々　どうするものだ。（トわや〳〵本舞臺へ來り）

勘次　今日この寺へ釣鐘を、奉納すると聞いたゆゑ、煙でも出りやあ八丁内、

佐七　頭附きで飛んで來て、撞樓堂をたゝき毀し、けちを附ける氣で居たが、

一　定めて土地の頭でも、頼んで渡りによこすかと、

二　自惚ながら昨日まで、顏を揃へて待つて居たが、

三　それなり何の沙汰のねえのは、天下の力士を鼻にかけ、

四　こちとら風情は犬猫同然、取るに足らねえものと思つて、

勘次　それで渡りに、

六人　來ねえのか。

轟　火消屋敷へ此間酒を持たして遣つたからは、渡りを附けぬといふぢやあなし、ぐづ〳〵言はれる譯はねえ。

勘次　そりやあ爰へ釣鐘を、木遣りで持ち込む渡りの酒、

佐七　二人が打たれた挨拶に、面出しもせず繩張へ、

一　木遣りで鐘を引き込まれちやあ、

二　默つて見ちやあ居られねえ。

三　どうで相手は相撲ゆゑ、

四人　又打たれるを合點で、

勘次　喧嘩を買ひに、

六人　出て來たのだ。

轟　おゝ、賣りに來たなら買つてやらう、片ツ端から足腰の利かねえやうにして遣るぞ。

勘次　しやらツくせえ事を吐かしやあがるな。

佐七　えゝ、面倒だ、疊んでしまへ。

四人　合點だ。

ト流行唄になり、相撲太鼓を冠せ、六人打つてかゝろ、轟おしらひ兼ねろ立廻り、此内花道より前幕の小野川先きに、花菱供なしに出來り、花道にて此體を見て、

小野　向ふで喧嘩をして居るは、雷電が弟子轟だ、早く行つて留めてやれ。

花菱　合點でござります。（ト ばた〳〵にて本舞臺へ來て此中へ割つてはひり、六人を張倒し、）こいつらは何をするのだ。

轟　おゝ、さういふは花菱か、よい所へ來てくれた。

花菱　後にやあ親分が、控へて居るから案じるな。

勘次　なに、親分が後に居るとは。（ト此うち舞臺へ小野川來る、これを見てびつくりなし、）誰かと思へば小野川關、こいつァ相手が惡いわえ。

佐七　爰で喧嘩をするのは損だ、一先づ爰を引き揚げよう。

花菱　折角喧嘩を賣りに來たのに、わいらは賣らずに歸るのか。

勘次 後に來るから、

皆々 待つて居ろ。（トばた〳〵にて、皆々下手へ逃げてはひる。轟前へ出て、）

轟 親分大きに有難うござります。

小野 今日はそちの雷電が、おれが死んだお袋の菩提の爲に釣鐘を、奉納なして供養をするゆゑ、施主の仲間にはひりに來たのだ。

轟 關取がお出での趣き、早く師匠へ知らせませう。

小野 今行くというてくりやれ。

轟 畏りました。（ト轟辭儀をして門の內へはひる。）

小野 あの轟も氣が早く、よく喧嘩をする奴だな。

花菱 場所でも毎日喧嘩をしますが、不斷は猫を見たやうだが、飲むと虎になります。

小野 おゝ猫といへばお卷さまの、猫ゆゑ命を捨てたものが幾人あるか知れはせぬ、幸ひ今日の鐘供養にお卷さま親子の衆、又召仕へのお仲どの喰殺された四人の衆、取り分けあの世の緣を結んだ、おしがどのゝ後世の爲め、母の菩提の附施餓鬼に、殘らず供養をして貰はう。

花菱 それは何よりよい御功德、草葉の蔭で皆さまが、嘸悅ばつしやるでござりませう。

ト此時下手より、吾助着流し大小にて出來り、

吾助　關取、參詣をさつしやつたか。(ト小野川びつくりして、)

小野　や、さういふは吾助どの、まだそなたは行かねえのか。(ト誂への合方になり、兩人床几へ掛け、)

吾助　此間あれから直に、南の番所が月番ゆゑ駈け込まうと出掛けた所、數寄屋川岸で友達に出逢つた所から、娑婆の別れにちよつと一ぱい吉浦で飲んだ所から氣が變り、遊びに行かうと初音屋から駕籠で飛ばして品川の百足屋へ押上り、今日で三日居續けしておめえに貰つた十兩を三文殘らず遣つてしまひ、今ぢやあ命の蔓もなく、先づ駈け込むのは止めにした。(ト小野川呆れし思入にて、)

小野　よくもこなたはおれが前で、そんな事が言はれたことだ。

吾助　なぜ、こなたの前で言つては惡いか。

小野　いゝか惡いか胸に手を、とつくり置いて見るがいゝ。

吾助　僞り飾らず有體に、言つたはおれはいゝ積りだ。

小野　さりとは呆れたこなたの料簡、是れが身寄りといふではなし、同じ大津の里で産れ、一つ所で育つた義理で、是れまで幾らか貢いでやつたが、それは些細な金錢ゆゑ、決して恩には掛けないが、大きな聲では言はれないこなたがなした人殺し、小指のないが證據となれば所詮のがれぬ事ゆゑ

に、異見を加へて名乘つて出ろと、十兩蔓まで持たして遣つたは、こなたの親仁がもしあれが、命に掛る事があつたら見掛けてお賴み申すから、助けてくれと言はれたゆゑ、死罪になるを遠島で命を助けて遣らうと思ひ名乘つて出ろと勸めたに、それを用ひず十兩の金も酒興に遣ひ果し、見下げ果てた心ゆゑ、向後おれは構はぬから、こなたの勝手にしたがよい。

吾助　酒に罪を塗るではないが、つい一杯やつたので、娑婆の別れに品川へ遊びに行つたは惡かつた、然し酒も飮み女郞も買ひ、これで思ひ置く事なし、是れから直に名乘つて出るから、最う一遍十兩の蔓を貸してくんなせえ。

小野　おれが異見を用ひぬからは、最う十兩は扨おいて一把か二把の端た錢でも、こなたに蔓はやらぬから、名乘つて出るなら勝手に出やれ。

吾助　勝手に出ろといつたとて、一文なしの鳴澤吾助素手ぢやあ牢へ行かれない、身寄りでねえといふけれど一つ所で育ち合ひ、子供の折から兄弟同樣うぬのわれのと言つた中、是れが百と二百なら呉れられねえのも尤もだが、僅か十か二十の金、今日本の力士のうち一二といはるゝ小野川關、大きな形に似合はねえ、さりとは小さな根性だ。（ト花菱聞き兼ねて立ちかゝりて、）

花菱　やあ、言はして置けばいゝかと思つて、是れまでうぬはどの位世話になつたか知れないのに、恩

を知らぬ鳴澤吾助、師匠は勘辨強いから默つて聞いて居られるが、おれは聞いちやあ居られねえ、

吾助　え、喧しい靜かにしろ、手前達の知つた事ぢやあねえ。これ小野川、育ち合ひの誼もなく、僅か十兩の目腐れ金、出してくれねば人殺しで、どうで命のねえおれだ、とてもの事にこなたの手でおれを是れから突き出してくれ。（ト小野川へ體を突き附ける。）

小野　こなたが殺したお卷どのゝ母御に緣があるではなし、又科人を詮議する役でもなければ、おれが手でこなたを突き出す謂れがない。

吾助　小指のないのを目を附けて、永坂下の人殺しを見出したからは突き出して、こなたの手柄にして下せえ、さうしたならば草葉の蔭で、よく忰を殺してくれたと、死んだ親仁が悅ぶだらう。

花菱　よくもそんな戲言を。（ト花菱立ちかゝるを、小野川留めて、）

小野　これ、どうで命のない體、引かれものゝ小唄だから、耳に留めずに捨てゝおけ。

花菱　それだといつて。

小野　はて、空吹く風と思つて居やれ。

花菱　むゝ。（ト花菱とまる、吾助體を摺付け、）

吾助　さあ、突き出してくれ〳〵、おれを突き出して手柄にしろ。（ト體を突き附け、）えゝ張合ひのねえ

小野　野郎だなあ。（ト小野川を打たうとするを、身を躱して襟上を捉へきつとなり、）

吾助　親の頼みに悰へて居たが今は淺間の御家來分、大小御免の御抱へ相撲手向ひなせば命がないぞ。

小野　おゝ面白い殺してくれ、助けてくれと親仁が頼んだ小野川こなたに殺されたい、さあ殺せ／＼殺してくれ。（ト小野川へ體を打ち附ける、是れにて悰へ兼ねし思入にて、）

小野　もう料簡がならねえぞ。

ト立ち上つて首筋を持つて引附ける。ばた／＼になり、下手より與兵衞やつしなり一本ざし、子役の與吉同じくやつしなり、小脇差をさしつか／＼と出で、

與兵　あいや關取、暫くお待ち下さりませ。

小野　なに、待てと止められたのは、

與兵　小指のないのが噂となり屋敷を逐電なした吾助、慥にかれが仕業なりと高雄さまの仰せゆゑ行方を捜して居つたる所、いよ／＼敵に相違なければ、親の敵を此の與吉に討たせたうござりますから、私共へその吾助を、お貰ひ申したうござります。

小野　扨はお妾お卷さまの、弟御にてあつたるか。

與吉　どうぞ關取私に、敵を討たせて下さりませ。

小野　さういふ事ならお前方に、吾助をお渡し申しまする。
花菱　折よく爰で此衆に出逢ふものがれぬ天の網、はていゝ氣味であつたな。（ト吾助立上り、）
吾助　さては金ゆゑ殺したる、お道が悴であつたるか。
與吉　思はず敵に出逢うたは、亡き母樣の導きなるか。
與兵　及ばずながら助太刀に、差添ひ來たる伯父與兵衞。
與吉　さあ、尋常に勝負しや。
吾助　高の知れたる町人風情、敵呼はり及ばぬことだ。
小野　いや袖振り合ふも他生の緣、御出入り屋敷の因みもあれば、この小野川が警固いたせば、心丈夫に討たつしやい。
與兵　與吉　えゝ、有難うござります。
吾助　もう此上は是非に及ばぬ、如何にもいつぞや永坂下にてお道を殺して八十兩、盜み取つたは此の吾助、不便ながらも小悴め、返り討ちだぞ覺悟いたせ。
與兵　與吉　何を小癪な。（トこれにて兩人身ごしらへなし、一腰を持ち、）
兩人　いざ、

吾助 いざ、

三人 いざ〳〵。

ト白囃子になり、吾助刀を拔き兩人も拔合せ立廻りになり、このうち兩人危くなる。花菱番手桶の水を目潰しに吾助へかけ、たち〳〵となる、子役竹刀を、吾助たゞ一討ちと刀を振り上げる、兩人危く切られようとする処を、小野川後から引き倒す、吾助いらつて小野川へ切つて掛るを身を躱して刀を打落す、與兵衞吾助を切下げる。トゞ兩人して切り倒し、

與兵 天命思ひ、

兩人 知つたるか。

小野 ほゝお出來した、よく討つた、子供に稀な今の手のうち。

花菱 いやあつぱれな事だなあ。

與兵 これといふのも關取のお蔭、

兩人 有難うございまする。

小野 敵を討つたらちつとも早く、高雄さまへ申し上げるがいゝ。

與兵 左樣なれば、是れより直ぐに。

小野　さゝ、早く〳〵。

兩人　有難うござりまする。（ト下手へはひる、跡ばた〳〵、喧嘩々々と聲する、）

小野　はて、心得ぬあの物音、數多の人聲聞ゆるは、

花菱　正しくさつきのがえんの奴等が、喧嘩を仕掛けにうしやあがつたか。

小野　そいやあ斯うしちやあ居られねえ、花菱おれと一緒に來い。

花菱　合點でごんす。（ト兩人門の内へはひる、知せに附き此の道具廻る。）

（淨土寺鐘供養の場）――本舞臺上寄りに二間の撞樓堂、小高き石垣、正面石段、内に誂への土俵を鑄たる釣鐘、撞木附き、後に突く事あり、下の方大きな石の供養塔、左右屋根附白壁の土塀、後墓場入口の門、此の左右黒塀、よき所に松の立木、日覆より同じく釣枝、奉納釣鐘雷電爲右衞門といふ建札、總て赤坂淨土寺鐘供養の體、眞中に雷電、肌脱ぎ、尻端折り、一本差しにて石段へ踏みかけ、大手を廣げ居る、左右に勘次佐七を始め、人數十二人對の法被白足袋鍵を持ち立ち掛り居る、此の見得双盤入り賑かな鳴物にて道具留る。と皆々打つてかゝり、ちよつと立廻つてきつと見得。

雷電　こりやあわいらは、何とするのだ。

勘次　何とするとは知れたこと、弟子の喧嘩で此間、うぬに打たれた意趣返し、

佐七　今日淨土寺へ奉納の、鐘の供養の邪魔をして、腹を癒る氣で言合せ、

一　接待茶屋で火を焚いた、

二　煙りを目當に櫓から、

三　打ち出す太鼓の頭附け、

四　いつも喧嘩の魁に、

五　振り出す纏の向ふ見ず、

六　撞樓へ階子を突つ掛けて、

七　鐘をつかしてぶち毀し、

八　雷電われにけちを附け、

九　同役火消の腕を見せ、

十　ぶたれた意趣を、

皆々　返すのだ。

雷電　すりや此間轟が喧嘩をしたを遺恨に思ひ、今日二日目か三日目に火消屋敷の櫓から打ち出す太

鼓の頭附け、一番手から繰出して仕返しに來た二番取り、土俵を鑄たる釣鐘に四本柱の撞樓堂、丁度宗旨も西東、名乘りを上げに雷電が御贔屓願ふ幸先に、愛敬こぼす氣もないが、四ッに渡りも附いたのに、振込む纏の同役火消今突く鐘の腕試し、片ッ端から此もみに今息の根を止めてくれるぞ。

勘次　さういふわれが息の根を、止めてやるから、

皆々　覺悟しろ。

雷電　何を小癪な。

ト相撲太鼓の入りし賑かな鳴物になり、雷電皆々を相手に立廻りよろしくあつて、皆々上手へ逃げてはひる、ばた〳〵になり、花道より以前の小野川、肌脫ぎ尻端折り、短き竹梯子を持ち、同じく四人法被白足袋にて長鍵を持ち、立廻りながら出で、花道にてちよつと立廻つて舞臺へ來り、左右へ投げ退け、

小野　やゝ、こりや雷電には何れへ行きしか、

佐七　其雷電は叩きしめもう今頃は、

皆々　くたばつたらう。

小野　すりや强力も多勢に無勢、火消風情の手籠めになりしか。
佐七　小野川おのれも邪魔すれば、共に冥土の旅相撲、年の明荷に牛頭馬頭のから尻馬で、
皆々　送つてやるぞ。
小野　やあ大それたその戲言。わいら風情が何百人徒黨をなして來やうとも、廻しをしめて掛つたが數年地取りで鍛へた體、石より堅い力瘤一番うんと踏ん張つたら、五分でも跡へ引かぬ小野川、飛込む行司の仲人が水を入れゝば知らぬこと、誰が止めても止まりはしねえ、小さなりで大きな事をと、笑はゞ笑へ後楯は、八百八町の御贔屓さま、力を掛ければ千人力、片ツ端から地の中へ埋め込むから覺悟しろ。
佐七　それ、叩きしめろ。
皆々　合點だ。

ト相撲太鼓双盤入りの派手な鳴物になり、八人長纏にて打つて掛り、小野川梯子を遣ひ、八人を相手に立廻り、花菱これへ絡みをかし味の立廻りよろしく、トゞ小野川皆々を上手へ追ひ込む、花菱番手桶を持つて來て、柄杓で小野川に水を飲ませる、相撲太鼓、ばた／＼になり、上手より雷電普請場の杭を振つて、大勢を追つて出來り、ちよつと立廻つて、

小野　雷電か。

雷電　おゝ、小野川。

花菱　關取怪我はなかつたか。

雷電　鵜の毛で突いた程もない。

小野　邪魔する奴等は引受けた、おぬしは早く供養の鐘を。

雷電　おゝ忝ない、頼んだぞ。

勘次　いゝや鐘は、

皆々　突かせねえぞ。

小野　えゝ、しやらくせえ事を吐かしやあがるな。

雷電　いで、鐘の音を試さうか。

ト誂への合方へ寺の鳴物を冠せ、雷電は鐘樓へ上り鐘を突かうと綱を取る、これを勘次佐七邪魔をする、小野川は梯子で皆々を相手に立廻り、花菱は皆々の額へ本水を掛ける、雷電兩人を投げ退け鐘を突く、本釣鐘、小野川これを聞き。

小野　はて、音のよき。（ト梯子を突く、雷電は綱を引く、双方見合つて、木の頭）

雷電　響だなあ。

ト又跡を突く、小野川梯子にて、皆々を留める、引張りよろしく。本釣鐘カケリにて。

ひやうし　幕

故人一九が作意に倣ひ
夢中作左に買はれたる
役者氣取りの彌次喜太が
淨瑠璃も詞も白石噺に
思はぬ恥を柿の種
猿橋村を横這ひに
蟹が敵ご駄洒落の笑話

綴合新著膝栗毛

玆に輯めた『膝栗毛』は作者が別々に書いた二つの作を便宜上併錄したものである。作者も後年二作を『綴合新著膝栗毛』なる名題の下においたこともある。序幕においた「水口の磁石」の件は文久三年八月（作者四十八歳の時）市村座に書きおろしたもので、「竹春花虎溪三笑」といふ題で『新薄雪物語』の後段におかれてあつた。但しその時は二幕で、此の次に清元の淨瑠璃「露尾花野邊濡事」といふものゝある一幕があるのである。これは彌次喜太が姉様に化けた狐にたぶらかされる色模樣の場面で、到底輯錄するを許されないから割愛した。次の甲州街道の件は明治十三年一月（作者六十五歳の時）新富座に書きおろされたもので、『滑稽膝栗毛』なる名題であつた。扉の「語り」は後者のものである。何れも十返舍一九の『膝栗毛』に暗示を得たものであること言ふまでもない。『續々歌舞伎座年代記』には後者に關して「大切膝栗毛はまじめなる團十郎彌次郎兵衞にて滑稽百出に見物何れも腹筋をよらざるはなし」といふ記載がある。

役割は前者にあつては市川小團次（喜太八）、市川團藏（彌次郎兵衞）、尾上菊五郎（おしやみ）、市村家橘（おつん）、等。又後者にあつては市川團十郎（彌次郎兵衞）、市川左團次（喜太八）、中村宗十郎（素人淨瑠璃橫月實は糸田屋勘次郎）、岩井半四郎（勘次郎妾おむら）、中村仲藏（蟹屋作左衞門）、市川團右衞門（百姓澁右衞門）、澤村淸十郎（蟹屋娘おゑん）等であつた。

挿繪にしたのは繪番附の畫面である。

大正十五年十一月上旬

校訂者



道祖
佐平次
八平次



綴合新著膝栗毛（膝栗毛――三幕）

序幕

水口宿松原の場

〔役名――きたり喜太八、とちめんや彌次郎兵衛、百姓豐作。旅籠屋娘小町のおつん、在所婆おくろ、澁川柿右衛門、門弟井川栗藏、旅籠屋茂兵衛、百姓畔六、同佐十、同秋七、同田子七、茶屋の親仁、田舍瞽女おしやみ、宿屋下女おはゝ、在所女房おはた等。〕

（松原の場）――本舞臺三間向ふ在體の遠見、此前一面の松並木、日覆より同じく釣枝、下の方に葭簀張りの掛茶屋。よき所に床几二脚ほど並べ、爰に百姓畔六、佐十秋七、田子七、めい〱鋤鍬六尺棒などを持ち立ちかゝりゐる。茶屋の親仁茶を出してゐる。此の見得馬士唄にて幕明く。

茶屋　サア皆の衆や、茶でも飲んでゆつくりしてござるがよい。

畔六　そんなら御造作になつて、一休みして行かうか。

三人　それがいゝ〱。（ト四人床几へかけて、茶を飲んでゐる。）

茶屋　ときにお前方、鋤鍬を振擔げて、こりや何事でござるの。

畔六　されば聞かつしやれ、こなたも噂に聞いたらうが、此頃物騷で、このあたりへ追落しが出て、拔

身で人を嚇すとのこと。

秋七　ところが聞かつしやれ、お地頭は有難いもので、こんな噂がパッとすると、自然と所の衰微になれば、下々の難儀ぢやとあつて、ナウ五作よ。

作十　大庄屋樣からこちとらにおつしやるには、何でも胡散な奴と見るならば、委細かまはず引摺つて來いと有難い言附。

田子　又手向ひしたら打殺すとの事ゆゑに、鋤鍬持つて歩くのも、若し向ふから手出しをしたなら皆寄つて、逃げる積りぢやわいの。

二人　エヽ、何を言ふぞえ。

畔六　イヤおどけな〳〵、そのやうにお地頭でおつしやるも人の爲ではござらぬ。みんな銘々の身のためを思召しての事。

四人　ナント有難い事ではござらぬか。

茶屋　やれ〳〵、それは大きに御苦勞でござりまする。わしはそんな事とは知らず、又野荒しでもあつたかと思ひました。

秋七　何のまあ高が水呑百姓、年中庭子に雇はれて田畑持たぬ氣散じは身一つ、盜まれる氣遣ひはござ

らぬわいなう。

茶屋　さうぢやの。して見ると何かにつけて、貧乏人の方が氣樂であらう。

四人　とんと違ひなしぢや。

皆々　ハヽヽヽ。

ト右の合方にて、ばた〳〵になり、花道より旅籠屋の亭主茂兵衛、羽織尻端折りにて、うろ〳〵あたりを見廻しながら足早に出て、直に本舞臺へ來り、上の方へ行かうとするを皆々見て、

畔八　アヽコレ〳〵茂兵衛殿々々、そんなに慌てゝ、

皆々　何處へ行かしやるのだ。

ト茂兵衛皆々を見て、

茂兵　オヽ皆の衆にござつたか。あんまり腹が立つので氣が付かなんだ。

作十　ナニ腹が下つて氣が付かぬとは、誰かコロリで醫者へござるか。

皆々　道理で慌てると思ひました。

茂兵　アヽ延喜の惡い、それ處ではない。大變が起つたのだ。

皆々　大變とは、どんな事でござるの。

茂兵　サア、話したいにもあんまり駈けたので、息が切れてならぬ。モシお茶を一つ下されや。
茶屋　ハイ〳〵畏りました。（ト手早く茶を汲み持つて來て、）
茂兵　これは忝い。
　　ト茶碗を取つて一と口飲むと、茶に咽せて咳き入る、皆々立寄り捨ゼリフにて背中をさすり、いろ〳〵介抱する事あつて、
秋七　さうして茂兵衞殿、大變とは。
皆々　どんな事でござる。
茂兵　サア大變といふ譯は、おらが家の大事な什物を盗まれました。
茶屋　やれ氣の毒。何を盗まれさしやつたか知らぬが、その泥坊の手掛りでもござるかの。
茂兵　イヤ別に手掛りもないが、わしが鑑定では昨夜をかしな奴が泊つたが、てつきり其奴に違ひはない。
畔六　そりやてつきり護摩の灰であらう。さうして、盗まれたのは金でござるかの。
茂兵　金は金だが、磁石を盗まれました。

田子　あの事につきいつぞは聞かうと思つたが、いつたいあれは、

皆々　何の爲でござるの。

茂兵　あの磁石石はおらが家の客取でござる、といふ譯は、此の宿内にも多くの旅籠屋、何でも内へ客をやらぬといふので、家から出る宿引に鐵粉を持たせて、上り下りの旅人の頭へ矢鱈に振掛けさせると、妙なもので見世にある磁石石へ吸寄せられ、うか／＼とわしが家の客になるといふ趣向で、年來多くの客を取つて、店が繁昌した所、肝腎な物を盜まれては、明日から渡世が出來ませぬ。

茶屋　成程それで分つたことがありますわえ。朝いつでも爰を通る旅人が、昨夜は何んであんな家へうか／＼泊る氣になつたか知らぬと、小言を言つて通りましたが、みんな磁石石の業でござりますね。

吽六　さうでもなくつて誰が又、あんな家の穢い佛頂面な、おまけに旅籠が高く食物が惡いといふ、名代の家へ泊る人があるものか。

皆々　ほんに、それに違えはねえ。

茂兵　大きにお世話だ、うつちやつておかつしやい。

茶屋　イヤ常談ではない、客生業は相見互ひ、さういふ福の神を盗まれては、嘸お困りなさいませう。
茂兵　困るどころではない。わしが家の衰微になれば、どうかお前方も其の磁石石を持つてゐる者を見たら、捕へて下され。お禮はしつかり致しますぞえ。
畔六　そりや頼まれずとも、不斷心安いこなたの事。見付けたら捉へてやりませう。
茂兵　どうか何分頼みます。ドレ、わしはこゝらを搜して見よう。
秋七　おいら達も狼狽者を搜す次手に、一緒に尋ねてやらうではないか。
作十　成程それがよからう。そんなら茂兵衞殿、
皆々　一緒に搜して進ぜませう。
茂兵　さうして下されば、猶々わしが強みといふものぢや。
茶屋　わしも水を汲みに行く次手に見付けたら、助鐵砲に水でもかけてやらうわい。
皆々　サアござれ〳〵。

トやはり右の唄にて茂兵衞先に百姓四人、茶屋の亭主手桶を持ち皆々上手へはひる。後合方にて下手より彌次郎兵衞、旅なり一本差し、脚絆草鞋三度笠を持ち、後より喜太八同じく旅なり、肩へ振分の荷をかけ、三度笠を持ち出來り、兩人床几へ腰をかけ、

彌次　アヽいけ騷々しい。折角トロ／＼とやらかさうと思つたら、がや／＼言ふので少しも寐られやあしねえ。忌々しい奴だ。

喜太　そりやアさうと、今の話を聞いたか。

彌次　なに、今の話とは何だ。

喜太　ソレ磁石石の一件よ。

彌次　イヤあれには俺も感心した。成程今時の人は如在ねえ。磁石石で骨折らずに客を取る所は偉いがまだ一つ分らねえのは、世間に幾らもある磁石石を、外にねえものゝやうに捜して歩くのも氣が知れねえが、またあんな物を盗む奴もあんまりべらぼうだ。

喜太　オツト、さう言ふべからず。盗賊は俺だ。（ト懐より大きな磁石石を出して、）則ち其の品是れにあり。

彌次　手前も詰らねえ、旅籠屋でも始める氣か知らねえが、この長の道中を、そんな重い物を持つて歩いてどうする積りだ。

喜太　どうするとはお前にも似合はねえ。この長道中で素より少ねえ路銀だから、お互ひに懐中の怪しいので、さう／＼毎晩女郎も買へぬ、ところが俺の思付で、何でも構はず見當り次第、これと思

ふ女に鐵粉を振掛け、この磁石で吸寄せて、うまい事をしようといふ計略はどうだ。

ト是を聞き、彌次郎兵衞感心したるこなしにて手を打つ、

彌次　成程野夫にも功のもの。こりやアいゝ思付きだ、したり。

喜太　女の話にしたりといふのは辻占がいゝ。こりやァ彌次さん、きつと出來るぜ。

彌次　違えねえ。しかし蠑螈の黒燒の鹽梅に行けばいゝが、難しいものだ。

喜太　出來ねえ所が爰の通り、旅の恥は搔捨だ。

彌次　物は試しだ、やつて見るがいゝ。

喜太　どうぞいゝ女が來てくれゝばいゝが。（ト向ふを見て、）來たぞ〳〵。素敵なものが來た。しかも新造だ。

彌次　ナニ新造だ。氣がわるい。ドレ〳〵何處へ〳〵。（ト向ふをよく〳〵見て、）成程遠目ではつきり分らねえが、こりや素晴しい代物だ。

ト此内喜太八懷より磁石を出して頂き、又懷へ入れ。

喜太　先づ〳〵賣物には花を飾れだ。ちよつと水鏡を。オツト男振をつくつておかう。（ト掛茶屋の内を見廻し、）ホイ、茶屋の親仁め、水を汲みに行つて手桶がねえ。

ト又あたりを見廻し茶釜に目をつけ、うなづいて矢庭に茶釜の蓋を取り、上へ顔を出し、湯氣に吹かれたるこなし。

彌次　あつゝゝゝ。(ト茶釜の蓋を抛り出し、顔を押へる。彌次郎兵衞見て、)又莫迦をしやアがる。

ト彌次郎兵衞床几にかけ、笑ひながら煙草を呑んでゐる。喜太八は手拭にて顔を拭きゐる。やはり大阪離れての唄にて、花道より小町娘のおつん、綺麗なる田舍娘の拵へにて出來り直に舞臺へ來るを、喜太八懷より鐵粉を出し、ソッとおつんの後ろへ廻り天窓へかけてゐる。おつん上の方へ行かうとして後へ戻り、喜太八の傍へ來て床几へかける。

喜太　しめた。(ト大きくいふ。彌次郎兵衞びつくり飛退き、)

彌次　エヽびつくりさしやアがつた。(トおつん平氣な顔をしてゐるを見て、)このまあ娘は、今の聲にも驚きもせず、平氣な顔をしてゐるが、餘程蟲氣のない性得と見える。

つん　モシ旅人さん、お日和續きで、御道中なさるはお仕合せでござりますな。

喜太　イヤ仕合せとも〳〵、生れて始めての仕合せだ。(ト彌次郎兵衞へ向ひ小聲にて、)ナント彌次さん、奇妙ぢやアねえか。

彌次　實に驚き入つた。物には不思議もあるものだ。

　ト此内おつん彌次郎兵衞の體を見て、自分に何か言ふかと思ふこなしにて、

つん　御尤もでござります。秋とは申しながらまだ晝中はお暑うござります。それに私がこのやうにお側にゐたら、嘸あなたお暑うござりませう、

喜太　何の〳〵暑い所か、茶釜の湯氣より餘程溫い。サア〳〵遠慮なしにもつ〳〵とぐつと寄んなせえ。

　ト夢中になつておつんの方へ寄添ふ。おつん喜太八の顏を見てうなづき、

つん　私や小町娘と申しますわいなア。

喜太　ナニ小町娘、さうだらうよ。ナウ彌次さん。

彌次　人は無い名は附けねえ。此位な娘を此處いらへ置くのは惜しいものだ。

　ト兩人おつんの顏に見惚れてゐるこなし。

つん　オヤ〳〵馬のやうな。（ト喜太八の股をつねる。）

喜太　あいたゝゝゝ。

彌次　どうした〳〵、娘が馬のやうだと言つたが、どうしたのだ。

喜太　何だか知らねえが、おれの股を抓りやアがつた。エヽ畜生め。

ト天窓を押へる。おつんは指をひねりながら、

つん　モシあなたの股引に、こんな大きな蚤がをりましたぞえ。（ト出して見せる。）

喜太　それぢやあ今抓つたのは、蚤を取つてくれたのか、何の事だ。

彌次　成程蚤がたかつたから、畜生かな。

喜太　どうでもいゝ。此方は女が本ものだ。モシ姐さん、ちつとお前に話してえ事があるが、葭簀の陰へ一寸來なせえな。（トおつんの手を取り、立上らうとするを、）

彌次　コウ〱何だか身許も知れねえ女に掛り合ひをつけて、又飛んでもねえ目に逢はねえやうにしろよ。

喜太　ほんにさうだ、よく糺しての上の事にしよう。（ト又床几へかける。）ときに姐さん、お前の家は何處だえ。

つん　ハイ、日は短かうなりましたれど、その割には夜は延びませぬ。昨夜などもお客樣が混合つたので、まご〱致してをりましたら、直に七つでございました。大層更けましたところへ、ろくろく寢ぬので、今日は睡たうてなりませぬ。

喜太　睡たけりやア一緒に寢よう、どうもお前の所が分らねえ内は寢られねえ。

つん　宿屋程面白い生業はござりませぬ。乘合船のやうにいろ〳〵なお國の人が參りますわいなア。

喜太　さうして、お前の所はえ。

つん　そりや定宿の衆は大層ござりますが、先づ中でも澤山のは、京大阪や賀能登越中出羽奥州、蝦夷松前からも參りますが、どう致しましても、お江戸が一番多うござります。

喜太　それぢやア五畿内五箇國は殘らずお前の家だ。大概姐えも常談ものだぜ。

彌次　イヤ今言つたのは大方此子の出店の話だらう。さうして見ると餘程大きな宿屋だと見えるわえ。

つん　ハイ、有難い事でござりまする。

喜太　何が有難いのだ。

彌次　ナアニサ、そりやア今俺が大きな宿屋だらうと褒めたからだ。何にしろ此娘は口を利く處を見ると、餘程ませてゐるが、幾歳だ知らん。

喜太　モシ、お前は年は幾つだえ。

つん　私共は三百五十でござります。

兩人　エ。

つん　旅籠の高いので、お客樣へ實にお氣の毒でなりませぬ。

喜太　オイ〳〵常談も大概にしねえ。俺ア蒟蒻の値段を聞きやアしねえ、お前の年を聞くのだわな

つん　諸式の高いので、それでも引合ひませぬわいなア。

喜太　まだ言つてゐるか、分らねえぢやアねえか。

彌次　喜太公、何だか此娘はをかしいぜ。氣違ひぢやあねえか知らん。

喜太　何しろあんまり癪に障らア。一番眞劍に掛合つてやらう　ト躰裁なして片肌を脱ぎ、おつんに向ひ、

コウ人をあんまり江戸莫迦にしなさんな。お前達の生業で田舍者を取扱ふとは譯が違つて、江戸ツ子はさうは行かねえ。人を見損なやアがつたか、誰だと思ふ、神田の八丁堀で喜太八といふなア俺が事だ。

ト此内おつん喜太八の體を見て、少し怖くないしこなしにて手を仕へ、

つん　何とおつしやりまするか、お恥しいが私やこれでござんす。

ト懐ろより「つんぼ」と書きし木札を出し、喜太八に見せる。喜太八驚き、

喜太　オヤ聾か。アヽ惜しい、玉に瑕があるな

彌次　イヤ道理で分らねえ筈だ。喜太公、大きに御苦勞だつた。

喜太　忌々しい。それならそれと早く言やア、こんなに小腹を立ちはしねえものを、莫迦々々しい。

ト鉢卷を取り肌を入れる。

彌次　然しまあ可愛さうな譯だなア。こんな器量を持つてゐて聾とは何事だらう。嘸親達の身になつたらたまるめえ。

喜太　何の親達よりやア、もうかうなつちやア我慢が出來ねえ。サア聾でもいゝから俺と一緒に來てくんねえ。

ト言へどもおつんキヨロ〳〵してゐる。喜太八困りし思入にて心附き、

オイ〳〵、ちよつと見な〳〵。（ト指にて床几へ書いて見せる。）

つん　私ア手習をせぬから、讀めぬわいな。

喜太　オヽ〳〵おまけに明盲か。それにしても日陰の豆もはじける時分にははじけるといふから、大概分りさうなものだな。

トおつんへいろ〳〵仕方をして見せても分からぬこなしにて、キヨロ〳〵してゐる。喜太八持餘したるこなしにて、おつんの耳の側へ口を寄せ、

お前おれと一緒に行かうよオ。（ト大きくいふ。）

彌次　えゝ見つともねえ。娘に分るやうに言ふと、此の宿中へ聞えらア。

喜太　それだつて仕方がねえものを。

　　トおつん隙を窺つて、唄になり、ツイと上手へはひる。

彌次　喜太公、もう脈が上つたぜ。

喜太　いやおつんさんには恐入つた。

彌次　誠にはやお力落し。

喜太　エヽ忌々しい、どうかこの埋草をしにやアならねえわい。

　　ト兩人床几へ掛け、摺火打を出し煙草を呑みゐる。臼挽唄になり、上手より百姓豐作稻の束を背負ひ出來り、

豐作　ドレ一服して行くべえ。（ト下手茶屋へ向つて、）爺さん、茶を一杯くれねえか。

　　ト稻の束をよき所へ下し、床几へかけ煙草入を取り、穢い鐵の煙管を出して煙草をついで火入を搔廻し、

　　オイ火もないよ。（ト彌次郎兵衞を見て、）モシ火を一つお貸しなすつて下さいまし。

彌次　サア／＼、おつけなせい。

　　ト煙管を出し豐作吸付けようとすると、豐作の煙管差金にて飛び、喜太八の胸のあたりへぴつたり付

く。喜太八これを知らず、豊作びつくりして、

豊作　エヽ誰だ。悪い常談をするな。(ト立上りあたりを見廻し) サアノ\ねえぞノ\。御免なせえノ\ハヽア分かつた。昨夜の夢見に山の芋を喰つた夢を見たが、こりやアてつきり山の神の罰に違えねえ。イヤ爭はれねえものだ。御免なせえノ\。見えねえぞノ\。

トそこらを捜す。彌次郎兵衛も合點の行かぬ思入にて心附き、

彌次　アヽモシ、お前の煙管は金は何でござりますえ。

豊作　ハア お尋ねにあづかつて面目ねえが、雁首のひしやげた穢え鐵の煙管でござります。

彌次　ナニ、鐵だえ

豊作　左様でござります。

彌次　道理で。

豊作　エ。

彌次　イエなに。こウノ\喜太公々々、此おかたが鐵の煙管がないと言ひなさるから、爰にゐりやア俺ら達も掛り合だ。よく見てあげるがいゝ。

喜太　ナニ鐵の煙管がない。俺アそんな物は知らねえ

彌次　知らぬ事があるものか、悪いものを持つてゐるから、イヤなに悪い煙管だといひなさるから、無いと不自由なものだからな。ソレ／＼。（ト喜太八の胸を顎で知らせ）ナ、よく捜して上げるがいゝぢやァねえか。（ト是にて喜太八心附いて胸を見て、）

喜太　ムヽ成程分つた。（ト胸の煙管を取り）モシ、お前の煙管はこれぢやァありませぬかえ。

ト豊作煙管を取つて見て、

豊作　オヽこれぢや／＼、大きに有難うございまする。何處に落ちてありました。

喜太　エヽなに、直きにわしの足許に落ちてあつたのに、ちつとも心附かなんだ。

豊作　持つてるた煙管が、どうしてお前さんの側へ行きましたか知らぬ。

喜太　大方風で飛んだのでござらうよ。

豊作　ハヽヽ、わけもねえ事を言はつしやるな。（ト言ひながら彌次郎兵衛の側へ来り）どうかもう一つお貸しなすつて下さいまし。

彌次　サア、おつけなせえ。

ト兩人煙管を吸付けようとする。又煙管差金にて喜太八へ吸付く。

豊作　オヤ、又煙管がなくなつた。

彌次　お前もしつかり持つてゐればいゝに。コウ喜太八、また煙管が見えねえとよ。

喜太　アヽうるせえ。飛んだ厄介物だ。（ト煙管を取つて出す。豐作取つて、）

豐作　またお前さんの所にありましたか。どうも合點が行かねえ事だ。こんな詰らねえ煙管だけれど、これでもわしが父さんの代から持傳へた物だから、失すると仕方がねえ、佛樣へすみませぬ。

彌次　それぢやア海に千年山に千年といふ煙管だ。道理こそ喜太八を見込んだ筈だ。

喜太　蛇ぢやアあるめえし。

豐作　イヤ度々お前さんの御厄介になつて、お氣の毒だから、此度は落ちねえやうにしつかりと手へ結ひ付けておくべい。

ト稻を結へし繩を取り、煙管を手へしつかりと結び付ける。喜太八彌次郎兵衞これを見てをかしきこなし。

彌次　成程、こりやアいゝ思附きだ。

喜太　それなら大丈夫、落す氣遣ひなし。

ト言ひながら喜太八上の方へ來る。これにて豐作上の方へ體を引かれるこなしにて、バツタリ轉ぶ。喜太八彌次郎兵衞は脇の方を向いて笑ひを怺えるこなし、

豐作　エヽ酒も飮まぬにどうした事か。をかしな事もあるものだ。（トやう〳〵起上り。）それに爰らア狐の榮えた所だから、化されちやアならねえ。ドレ行きませう。（ト稻を背負ひ彌次郎兵衞に向ひ。）左樣なら、是にごゆるりとなさいまし。

彌次　もう行きなさるか。まあいゝぢやアないか、もうちつとお話しなせえ。

豐作　イヤ大分手間取れましたから、もうお別れ申しますべい。（ト喜太八に向ひ、お前樣、大きにお世話になりました。

喜太　いえ、どう致しまして。

豐作　飛んだ暇潰ししやした。

ト豐作よき所まで行く、喜太八件の磁石石を出す。是にて豐作行かれぬ思入にて、後へ戻つて來る。

彌次　オヤ、お前何しに來なすつたのだ。

豐作　何だか忘れものをしたやうだ。オヽ煙草の火を借りるのであつた。

彌次　アヽさうかえ。サア〳〵おつけなせえ〳〵。

ト煙草の火をつけ豐作行きかけるを、喜太八又磁石石を出す。是にて豐作戻つて來る。

又來なすつたか。度々御苦勞だね。

喜太　成程田舍の人は餘程まめだ。
豐作　エヽ何のこつた〳〵。ト吸殼をはたき煙管を筒へ差し、急ぎだのに莫迦々々しい。
　　ト麥搗唄になり豐作足早に花道へはひる。喜太八彌次郎兵衛顏見合せて笑ひ、
彌次　こりや旅の徒然、餘程保養になつていゝわえ。
喜太　どうだ彌次さん、いゝ物をちよろまかして來たの。
彌次　これからは毎日の樂しみだ。
喜太　今度は何が來るか知らぬ。（トやはり麥搗唄にて、）
彌次　オイ〳〵喜太八、今度は俺にちつと貸しねえ。
喜太　面白くもねえ。俺だといつて詰らねえぢやアねえか。今お前に貸してよ、どんないゝ代物が掛るめえものでもなからうぢやアねえか。さうした日にやア犬骨折つて鷹に取られるといふ仕事だらうぢやアねえか。さう手輕くは貸されねえよ。
彌次　そんな事を言はねえで、ちつとばかり貸しねえよ。
喜太　いけないよ。
彌次　そんなら、どうしても貸さねえか。

喜太　厭でごぜえす。（トこれにて彌次郎兵衞思入あつて改まり）

彌次　モシ、おまへとお目にかゝりたいね。

喜太　アノ俺にか。

彌次　さうさ、見殘した所が、外に人もゐねえから、先のお前さ。（トこれにて喜太八前へ出て）

喜太　來たが何ご用でもごぜえすか。

彌次　用がありやこそ呼んだのだ。一昨日の晩旅籠屋で貴樣に貸した一分と三百、今爰で貰はうか。

喜太　そりやアお前無理だらうぢやアねえか。此頃俺が懷が干上つてゐるのを知つてゐるぢやアねえか。

彌次　金がなけりやア其石を俺に貸しねえ。

喜太　それぢやあお前、友達甲斐がねえといふものだ。

彌次　友達でも兄弟でも錢金は他人さ。金を返すか石を貸すか、石とも金とも返事をさつせえ。

喜太　何もそんなに、四角張つて言ふにやア及ばねえぢやアねえか。

彌次　そんなら石を貸してくれるか。（トこれにて喜太八思入あつて、）

喜太　アヽ仕方がねえ、石貸さう。（ト大きくいふ。彌次郎兵衞びつくりして。）

彌次　アヽびつくりした。何だ、石を貸してくれるか。

喜太　あんまり貸したくもねえが、板挾みぢやア仕方がねえ。（ト彌次郎兵衞に石を渡す。）

彌次　此奴はありがたい山茶も出花、鬼も十八新造でも年増でもサアごんせい。いよ〳〵石は彌次郎兵衞でございい。

喜太　へエあんまり現金だ。そんなに嬉しがつても、もう女は山止めだ。

彌次　所を俺が威光で上玉を見付けるわ。すい、誰ぞ來よかし問ひたやと。

ト淨瑠璃を語る。喜太八腹の立つこなしあつて、

喜太　よしねえ〳〵、聞きたくもねえ。

ト彌次郎兵衞一人喜ぶ思入にやはり馬士唄になり、上手より宿屋下女お初、島田かづら前垂かけ、宿屋の下女の拵へにて出來り、

お初　今日は誠に旅人の少ない日だ。ちつとお客さんを引きたいものぢやが。（ト喜太八と彌次郎兵衞を見て、）モシ貴方はお泊りではござりませぬか。もしお泊りなさいますなら、私共は石部宿で「金よし」と申しますが、お座敷も綺麗な所がござりまする。それにお旅籠もなるたけ働きます。どうぞお泊りなすつて下さりませ。

トこのセリフの内いろ／＼思入あつて彌次郎兵衛お初の天窓へ鐵の粉を振かける。これにてお初段々彌次郎兵衛の側へ寄る、喜太八は氣を揉むこなし。

彌次　オヽ／＼姐え、俺ア早く泊りたくツてならねえ所だ　お前の家は石部の宿ぢやア評判だ。金よしといつちやア、此の道中を上り下りする者で、お前の家を知らなくつちやア旅雀の恥になる仕事だ。ナウ姐え。さうしてお前は幾歳だ。

お初　ハイ、十七になりますわいなア。（ト手を取つて引寄せる。）

彌次　ナンダ十七だ。娘盛りだなあ。今夜は泊るが、晩にやア俺が所へ來てくれるか。

お初　晩どころではございませぬ。今から私やお前の側を、離れる事は厭ぢやわいなア。

トお初彌次郎兵衛の側へ寄り、しなだれる。喜太八始終氣を揉みゐて、後ろより兩人の中へ割つてはひり、

喜太　コウ彌次さん、大概にして貰はうぢやアねえか。俺だつても木の股から生れやアしねえ。ちつとはおつな氣にもならうぢやアねえか。近しき仲にも禮儀ありだ。ちつとは遠慮してするがいゝだらうぢやアねえか。

彌次　オツト氣を揉むべからず。女の方からの据膳は、喰はぬは損ぢやばさらんださね。

喜太　おつウ落着いてゐるぜ。（ト お初の側へ來て、）こウ〳〵姐え〳〵、あの彌次郎兵衞といふ男は、ありやア瘡ッかきで、口が臭くッてたまらねえぜ。オヽ臭え〳〵。
お初　アイ私アその瘡と口の臭いのを、蟲が好くわいなア。
喜太　大概皮肉な事をいふぜ。そればかりぢやアねえ、夜寢ると齒軋りをする、寢汗をかく。おまけに寢言だ。どうだ厭ぢやアねえか。
お初　みんな私の好きな物ばかりぢやわいなア。
喜太　まだ〳〵腋臭があるぜ。
お初　オヤマア嬉しい。
喜太　イヤハヤ、呆れたものだ。
お初　エヽモじれつたい。

ト彌次郎兵衞にぴつたり寄添ふ。彌次郎兵衞お初の手を取り、

彌次　どうだ喜太八、これぢやア如何なる釋迦でも孔子でも、はら〳〵せざアなるめえぢやアねえか。サアこれから石部の泊りとしよう。サア早く行かう〳〵。

ト喜太八不承知の思入にて、

喜太　ヘエ面白くもねえ、莫迦な事を言ひねえよ。これから石部へ行きやア後へ歸るのだ。そんなべらぼうな事が出來るものか。（ト顔をそむける。）

彌次　手前も附合のねえ男だぜ。後へ歸ると言つたつて、いくら歸るものか。ちつとばかりの損だらうぢやアねえか。

喜太　ちつとばかりと言つたつて、俺ア一足でも損をするのは厭だよ。

彌次　さう附合のねえ事をいふなら、手前は先の宿へ行きねえ。俺は石部へ歸るから。

お初　モシ氣が急いてならぬから、あのお方は何處へでも勝手な所へやつて、お前一人來て下さんせいなア。

彌次　行かなくつてどうするものか。いゝか喜太八、俺ア一人で行くぜ、いゝかえ〳〵。

ト駄目を押して言ふ。喜太八ムツとして、

喜太　どうとも勝手にするがいゝ。

ト扇を出し、お初の天窓を煽ぐ。これにてお初の頭の鐵の粉落ちし思入にてびつくりして、

お初　オヽ、私や隣村へ用があつた。ドリヤ行きませうわいなア。

ト唄になり、お初ツイと下手へはひる。彌次郎兵衞うつとりとして呆れし思入にて、お初の後を見送

つて件の石を出し、

彌次　あれ程うまくトンノ＼拍子に、すつかり行つたのが、どうしたといふものだらう。あんまりけうけてれつぢやアねえか。

喜太　ナニ、けうな事があるものか。物の道理といふものだ。

彌次　何が道理だ。ちつとも道理な事はねえぢやアねえか。

喜太　所が大ありだよ。

彌次　何故々々。

喜太　ちつとも不思議な事はねえ。俺があの女の天窓を扇であほいだら、鐵粉が落ちてしまつたのだ。これぢやアツイと行かうぢやアねえか。

彌次　ナニ鐵粉を落した。忌々しい事をする男だぜ。しかし鐵粉が取れたといつても、ちつとは心の殘りさうなものだ。

喜太　大笑ひだ。鐵粉がねえ日にやア、誰が見向きもするものか。

彌次　そんなでもねえ筈だが。（ト一寸めける思入）アヽ、どう考へても癪に障らア。

ト石を抛り出す。喜太八取つて、

喜太　さらばこれから喜太八が、今のやうなドヂは組まぬ。一番頗るといふ代物を見付け當てねばならぬわえ。

ト喜太八しきりにあちこちを見廻してゐる。やはり麥搗唄になり、花道より在所娘おはた、裾を高く端折り上げ、藁草履を穿き出來り、花道よき所に留り人を待合してゐる心にて後を見返つてゐる。

喜太　オヽ來た〳〵。ちつと日向臭いが、田舎者にやア綺麗だ。此奴に一番振掛けてやらう。

ト又麥搗唄になり、花道より在所婆おくろ尻端折り、股引を上へまくり上げ、藁にて結へ、兩方の手に重箱の包みと藥罐を下げ出來る、おはた見て、

はた　小母さん遲いぢやアないか、そのやうにしてゐると、中の物が饐えてしまふわいなア。

くろ　腐つたら俺一人で喰ふから案じなさんな。

はた　エヽモ恥しい。私が持つからこゝへ出しなさんせ。

くろ　そりや有難え。（ト重箱の包みと藥罐をおはたに渡し、）お前が持つたら急いで行かう。

はた　オヤマア、呆れたものさ。

トやはり右の唄にて、おくろ先に立ち後よりおはた附いて舞臺へ來る。喜太八おはたの後へ寄り鐵粉を振掛ける、風の音になりおくろに吹き掛りしこなしにて、おくろ頭を振りながら喜太八に寄添ひべ

つたり腰をかける。おはたは構はず上手へはひる。喜太八おくろを見てびつくりなし、

喜太　オヤ、こりやア代物が違つた。

彌次　此奴ア大笑ひだ。然し貴公にはそれが本役だ。

喜太　常談ぢやアねえ。オイ〳〵婆さん、お前どうしたのだ。

くろ　俺アこなたに。

喜太　エ。

くろ　うツ惚れたア。（ト厭らしく袖にて顏を隱し、喜太八に寄添ふ。）

喜太　こりやア大變だ。（ト逃げようとする喜太八の袖をおくろしつかり捉へて、）

くろ　ア、これ待つた。そりやつれない胴慾といふものだ。（ト少し泣聲になつていふ、をかし味の合方になり。）今でこそこんな婆アになつたけれど、元私ア宿場女郎で、じんばりのおくろと言つちやア名代の客取り、廻しも多いその内に、丁度今年三十回忌に當る連合に馴染を重ね、請出されて來は來たが、親父殿には腎虚で死なれ、それから孀でゐるけれど、緣遠いのかして茶呑友達の口もなく、此年まで一人でゐたに、今爰へ來たらふら〳〵と、お前に惚れる氣になつたも、これも定まる惡緣とやら、善光寺樣の階段巡りした時せへせぬ懺悔話、こなたにするもよく〳〵に思へばこ

そ。そこの所を推量して、優しい言葉の一と口位、かけてくれてもいゝぢやアないか。

ト喜太八に縋つて泣く。喜太八持餘せしこなしにて、

喜太　ア、情ねえ。オイ〳〵彌次さん〳〵、見てゐる事はねえ。どうかしてくんねえよ。

彌次　どうしやうがあるものか。元よりおぬしが好きでした事だから、おぬしが始末をつけるがいゝ。

喜太　ナンノつけ俺が好むものか。若い方の女に一件を振掛けようと思つたのが、風が吹いたので此婆さんに掛つたからの間違ひだ。全く風のせゐだ。

ト此内おくろ泣いてゐて顏を上げ、

くろ　ほんに今のが戀風といふのかして、あれからお前がいとしくなつたも、矢張り出雲の神風で、二人が仲を結んだと思ひ諦め、コレ旅人、俺が思ひを晴らさしてくんなさい。

ト縋つてくどく。

喜太　實に思召しは有難えが、何を隱さう俺ア女は斷物だから、どうぞ堪忍してくんねえ。此通り拜んでゐる〳〵。（ト喜太八手を合して拜む、おくろ見て、）

くろ　何だ、手を合して拜んだり斷物をするとは、餘程こなた信心者と見えて頼もしい。そんなら俺猶猶好いゝ。

彌次　さうだ〳〵何でもおつかァ放しなさんな。どうして女は斷つどころか、女とせえ言やァ何でもかまはねえ。さういふ内にも此男は、婆さんが大好きだよ。

喜太　コレサ、詰らねえ事を言ひなさんな。

くろ　イヤさうだらう。若い女には向かない顏色だ。年寄は惡い事は言はぬものだ。うんといつて得心してくれさつしやい。

彌次　そりやァ得心にやァ違ひねえが、此男のくせで、女に掛ると先づちよつと拗ねて見るのが持前だから、その積りでお前も思ふさましつこくして、口を吸つてやるがよからう。

喜太　口を吸はれてたまるものか。生涯匂ひはぬけやァしねえ。（ト彌次郎兵衞思入あつて、）

彌次　拔けるか拔けぬか、おつかァちよつとやつて見ねえ。

くろ　ほんにさうだね。

ト喜太八にしがみつき、口を吸はうとする。

喜太　こりやァたまらぬ。どうするんだ〳〵。

ト喜太八振放さうとする、おくろ放すまいと兩人いろ〳〵あせり、トヾ喜太八おくろを突倒し、彌次郎兵衞の蔭へ隱れる。此時上手より以前のおはた出來り、おくろを見て抱き起し、

はた　お前まあどうしたのだえ、又お酒でも飲みはしないかえ。

くろ　酒を飲む錢があれば、あの男に小遣にやるわ。（ト又立掛るを、おはた留めながら、）

はた　これはしたり分らない。どうしたといふのだねえ。

くろ　どうすりやァ馬の子が出來らア。

ト行かうとするをおはた留めて、

はた　何をお言ひのだね、困るぢやァないか。

彌次　イヤモシおかみさん、こりやァ全體わしが連の男が惡いのでござります。どこの國にか見ず知らずの年寄をつかまへて、厭らしい事をいふものだから、そこで小母さんが腹を立つてあんな事をお言ひのだ。

ト此内喜太八前へ出て、床几にかけてゐる。

喜太　おい〳〵人聞の惡い事を言ひなさんな。厭らしい事はあの婆さんが言つたのだわな。

ト喜太八少し腹の立つ思入にて、

くろ　オヽ言つた。こなたに惚れたから言つた。それがどうした。

ト又立掛けるをおはた留める、おくろ留められながら地團太を踏んで騷ぐ。おはた困りしこなし、

はた　ホンに仕様がないね。形も何もじだらくにして。さうして頭が砂だらけでサ。

ト　おはたいろ／＼に藻掻きゐる、おくろを留めながらおくろの頭を手拭にて拂ふ。是にておくろ澄して手洟をかみ、

くろ　ドレ、野良へ行くべい。（トツイと上手へはひる。おはた呆れたる思入。）

はた　オヤマア、氣味の惡い。どうしたのだらう。

彌次　とんと狐が落ちたやうだ。

はた　困つた人ぢやわいな。

ト　行きかける、おはたの後ろより、喜太八鐵の粉を振掛けようとする、此の途端おはた振返るゆゑ、喜太八その手を隱す。おはた喜太八と顏見合せ、

ほゝゝゝ、大きにおやかましうござりました。

ト　言捨てゝ足早に上手へはひる。喜太八彌次郎兵衞顏見合せ、

喜太　イヤ、酷い目に逢はせやアがつた。

彌次　側に見てゐると、おぬしが眞劍に弱るのが、餘程面白かつた。

ト　三味線入り禪の勤めになり、花道より澁川柿右衞門、莫大なる大小を差し、小袴切草鞋にて武者修

行の拵へ、陣笠を冠り、鐵扇を持ち鷹揚に扇をあふぎながら出る。後より井川栗藏、小袴草鞋を穿き大小を差し、竹刀竹具足を擔ぎ、門弟にて附いて出來り、花道にて、

柿右　ナント栗藏、今日の他流試合、見たであらうな。

栗藏　拜見仕つてござる。百姓町人などへ師範を致し、片田舍の道場を預かる劍術遣ひなどゝ申す者は、先生と立合ひましては、猫に追はるゝ鼠同樣なものでござる。

柿右　いや〳〵身共と立合ひはあの通りなれど、あれでもなか〳〵の劍術者だ、見さつしやれ、さう無造作に勝負は成らぬ、先づ身共などは武道に於ては劍術槍術は言ふに及ばず、火術は元より無敵流の鎖鎌、水練はかの宇治川で馬を助けて渡つた重忠などものかは、身共もかく泰平の世なればこそ、埋れ木となつてをれど、血醒き世の中と相成れば、四海に武名を輝かし、衆人の眼を驚かせんもの、いまだ時到らぬと見えるわい。

栗藏　仰せの通り拙者なども、イデ鎌倉と申す時には、一と働き致したうござる。

柿右　其許の手筋は、身共見所もあれば、出精めされたがよくござる。

栗藏　ときに先生、そろ〳〵參らうではござらぬか。

柿右　左樣致さう。アヽ力が腕に充ちて、肩が張つてならぬわえ。（ト鐵扇をつかひながら）サア參らう

參らう。

ト矢張り右の鳴物にて、肩を怒らし大仰に扇をつかひながら舞臺へ來る。喜太八彌次郎兵衛薄氣味の惡き思入にて、柿右衛門をよける。柿右衛門もよける方へ附いて行く事二三度あつて、トヾ喜太八の持つてゐる石へ鐵扇ぴつたりと吸付く。これにて柿右衛門思入あつて、

柿右　ヤイ〳〵町人共、何を致す。こりや何か旅中の往來を妨げ致して、ハヽアわいらは物取りを致す奴か。

喜太　どう致しまして、なか〳〵左樣な者ではござりませぬ。

柿右　ヤイ、われにはこの大小が目に這入らぬか。不屆き者めが。

栗藏　ヤイ〳〵町人、われは先生を何と心得る、今天下に隱れのなき劍道の先生なるわ。

喜太　ヘヽイ〳〵、眞平御容赦なすつて下さりませ。

柿右　コレ、身共を誰だと思ふ。

喜太　どなた樣でござりますか、ついお見それ申しましてござりまする。

柿右　ナニ、身共を知らぬと申すか、面體は存ぜずとも、武名は天下に隱れなき澁井柿右衛門と申す者だ。身共が高名は存じをらうな。

栗藏　コレ御尊名は聞及んでゐるであらう。
喜太　どうか、お聞き申したやうでござりまする。
柿右　存じてをらう。知らぬとは申されまい。その昔鞍馬山にて僧正坊に術を得たりし御曹子はいざ知らず、宮本無三四、唐木政右衛門、又は關口彌太郎なんど、今の世にあればとて、この柿右衛門が相手に足らず、かく武者修行となつて諸國を廻るといへども、身共が右に立つものを知らず、所望とあらばそれがしが腕前の程見せてくれうか。
喜太　恐入りましてござりまする。
柿右　おのれがやうな素町人には刃物は無益、此の鐵扇にて打つ時は、五體は微塵粉になつてパッ〳〵と飛んでしまふぞよ。
喜太　全く悪氣ではござりませぬ。命ばかりはお助けなされて下さりませ。（ト逃げにかゝる。）
柿右　逃げるとて逃がさうか、憎い奴め。
ト鐵扇にて喜太八を喰はす。これにて喜太八石を投出し逸散に上手へ逃げてはひる、この内彌次郎兵衛手早く右の石の上へ菅笠を冠せるを、柿右衛門素知らぬ顔にて、
はゝ、參らうか。

ト扇づかひをしながら栗藏附いて上手へはひる。彌次郎兵衞ホッと思入あつて、件の石を取上げ、

彌次　此奴は餘程大笑ひだ。然し今の婆さんが喜太八の石へ吸付いたのは、餘程いゝ話だが、しかし彼奴も何處まで逃げやァがつたか。あの肚胸野郎も餘程怖かつたと見えるわえ。そりやァいゝが、今の間が俺の役德だ。これからは一人占めにやらかさにやァならねえ。そりやァさうと鐵紛を、喜太八が持つて逃げやァがつた。あれがねえ日にやァ石があつても寶の持ち腐れだ。どうかいゝ工風がありさうなものだなァ。

ト思案の思入。馬士唄になり、花道より瞽女おしやみ手拭を冠り、三味線を背負ひ、杖をつき出來る

これを彌次郎兵衞見て、

そりや來たぞ／＼、なんだ瞽女だな。瞽女にしちやァいゝ器量だ。さうして杖を突いてゐるが、目が見えるぜ。こりやァ譯なし／＼。イヤ譯なしはいゝが肝腎の鐵粉がねえ。エヽ忌々しい。寶の山に入りながら、此奴を逃すといふ事はねえ。

ト捨ゼリフにていろ／＼思入。此内おしやみは舞臺へ來り、上手へ行きかゝる。

オイ姐さん／＼。何ぞ一くさり遣つておくれ。

しや　ハイ／＼、有難うございます。何に致しませう。大工殺しでも鈴木主水でも、但しは新內、義太

彌次　夫、豐後節でも、河東でも。

彌次　豪氣に並べ立てるが、越後節の外にそんなにやれるのか、そいつア希代だ。何でもいゝから、ちつとばかりやつてくんねえ。

ト財布より鐵錢を廿四文程出しおしやみに渡す。おしやみ手へ取ると直に彌次郎兵衞の側へぴつたり寄る、彌次郎兵衞びつくりして、

オヤ此奴ア妙だ。一件の粉もねえのに、こりやア眞劍にござつたか。（ト思入あつて、）ハヽア分つた、今の鐵錢だな。

しやエ。

彌次　ナニサ、こりやァ儲け物だ。（ト兩人床几に腰をかけ、）ときにお前のやうないゝ器量でよ。今聞きやア本藝か前藝か知らねえが、隨分藝もある樣子だが、何でそんな眞似をしてゐるのだ。第一目が見えるぢやアねえか。

しや　恥しい事でござんすが、もうかうするからは他人のやうには思はぬほどに、何もかも申しまするが、私の身の上一通り聞いて下さんせいなア。

ト誂への合方になり、彌次郎兵衞の側へ段々寄る、彌次郎兵衞こなしあつて、

彌次　元私は江戸者でござんすわいなア。
しや　何だ江戸者だ。其奴ア話せるぜ、さうして江戸は何處だ。
彌次　ハイ、兩國邊にをりましたわいなア。
しや　そりやア粋な所にゐたものだが、さうして何をしてゐたのだ。
彌次　ハイ藝者をしてをりましたわいなア。
しや　何だ藝者上りか、其奴ア豪氣だ。それからどうした。
彌次　ハイ藝者生業始めから得心づくでかうなつて、
しや　それから〳〵。
彌次　今では野暮な女房氣も、座敷勤めで客さんの、機嫌を取るがをかしさに。
しや　ム丶〳〵、それから〳〵。
彌次　夫と定めた甚助が、色々な事を申しますゆゑ、あの甚助休み〳〵言はんせと、言うたが互ひの縺れ始め。
しや　ム丶、それから〳〵。
彌次　忘れもせぬ八月の十八日の雨上り、月は山へと朧染めの、浴衣一つで家出して、いつかは巡り大

阪から、京三界を駈廻り、身は三絃の糸よりも、心細い私が身の上、不便と思つて下さんせいなア。（ト愁ひのこなし。彌次郎兵衞思入あつて、）

彌次　それぢやアお前も餘程の苦勞人だ。これから隨分俺が相談相手になつてやるわ。

しや　それはまあ有難うござんす。何を申しまするにも、長の旅路の路用も盡き、泊り〳〵の旅籠屋でもそれで難儀をしますわいなア。

彌次　何だ、錢が無くつて難儀をするか。コウ姐え、面白くもねえ、そんな事は案じなさんな。錢金は湧き物だ。小遣ひ位はやりもするが、そんならいよ〳〵便り少え一人身かえ。

しや　それぢやによつて、何卒今から、

彌次　女房に持つてくれろといふのか。

しや　アイナア。（ト恥しさうに言ふ。）

彌次　エヽ可愛いゝ奴なう。（ト手を取つていろ〳〵思入。この内彌次郎兵衞財布より錢を出し、）サアこれを今日の小遣ひにするがいゝ。

しや　ハイ有難うござんす。（ト錢を取つて）アノ私やお前の女房になるからは、こんな草履も履いてはゐられず、駒下駄が買ひたうござんすわいなア。

彌次　何だ駒下駄が買ひてえ。サア／＼買はッし／＼。（ト又錢を出してやる。）

しや　あの黄揚の櫛が一枚ほしいわいなア。

彌次　何だ黄揚の櫛が欲しい。サア／＼買はッし／＼。（ト又錢を遣る。）

しや　さうして、前掛もなければならず。

彌次　おッと買はッし／＼。

トいろ／＼捨ゼリフにて、こんな事を言ひ／＼彌次郎兵衛財布の金も錢も殘らずおしやみにやる事あつて、

ときにかういふ譯になつたら、俺も瞽女をさせてもおけねえが、どういふ思付でこんな器量を持ちながら、瞽女なんぞしてゐるのだ。

しや　アイ、私やかう見えても片輪でござんすわいなア。

彌次　エヽ、何だ。片輪だ、どう／＼立つて見ねえ／＼。（トいろ／＼瞽女の體を見る事あつて。）どこも何ともねえぢやねえか。ハヽア扨は一件でも塞がりぢやアねえか。

しや　イエ／＼そんな事ではござんせぬわいなア。

彌次　そこでなけりやア先づ安心だ、どこに一つ言分はねえやうだが、どこが片輪だえ。

しや　その片輪といふのは、

彌次　片輪といふは。

しや　これぢやわいなア。

ト瞽女冠つてゐる手拭を取る。額に誂への大きなる瘤ある。彌次郎兵衞これを見て、

彌次　エヽヽヽ、これか。

トびつくりする。おしやみツイと立つ途端に床几ひつくり返り、彌次郎兵衞仰向けに倒れ、石を抛り出す。瞽女石を拾ひツイと上手へはひる。彌次郎兵衞腰を痛めし思入にて、

オヽ痛え〳〵。姐え起してくんねえ。腰の骨をすてきに打つた。オヽ痛え〳〵。(トあたりを見て、)ナンダ瞽女は行つてしまつたか。おまけに石も持つて行きやアがつた。オヽ錢も取られてしまひ擧句に女も玉なしだ。あんまり役が惡過ぎるわ。こゝらが膝栗毛の紋切形だ。瞽女の額に瘤もあるが、「吸ひつけた煙草にあらぬ磁石石、煙となつたる瞽女の行方」ア、面白くも何ともねえ。然しこれぢやア又合羽でも借りにやアならねえ。あの瘤がある段なら、錢も金も遣るのぢやアなかつたもの。取返してえにも何方へ行つたか行方は知れず。石は彼方へ持つて行かれる。これで俺が錢でもありやア、彼方へ吸寄せられるけれど、それも今ぢやアちやんころなし。何かいゝ鐵氣の

物がありさうなものだが。（ト色々思入）おッ、とあるノ\、是れだノ\。（ト腰に差したる脇差を拔き、）こりや鐵氣で、あの石へ吸寄せさせる。イヤ智慧も出れば出るものだ。

ト脇差を振廻しあちこちと駈廻る。此時バタ〳〵になり、幕明きの百姓出來り、

畔六　ソレ拔いたぞ〳〵。

作十　追剝だ〳〵。

皆々　打ちのめせ〳〵。

ト皆々鋤鍬六尺棒を持ち、彌次郎兵衞を追廻し、したゝかに打据ゑる、此時喜太八走り出て來り、此中へ割つてはひり。

喜太　コレ〳〵、そりやァ俺が連の者だ。どうするのだ〳〵。

畔六　エヽ、どうもかうもあるものか。

作十　おのれも追剝の同類だらう。

皆々　叩きのめせ〳〵。

ト又皆々にて喜太八彌次郎兵衞を追廻す、爰へバタ〳〵にて以前の旅籠屋の亭主茂兵衞出て來り、百姓四人は兩人を引据ゑてゐる。茂兵衞は兩人を見て。

茂兵　ヤア、おのれは昨夜泊つた奴だな。今此先で石を持つてゐる瞽女に逢つたから、此石を取返して來たわえ。

彌次　それは大きに有難うござります。（ト手を出す。）

茂兵　エヽおのれに遣るのではないわよ。コレ皆の衆、構ふことはない、見せしめの爲だ、叩き撲れ〳〵。

皆々　合點だ〳〵。

ト茂兵衞も共に百姓四人兩人を追廻し、散々に打つて皆々上手へはひる。爰へ以前の瞽女おしやみうろ〳〵として走り出來り、兩人に躓きそこへへいいたる。是れにて兩人少し起上り、

兩人　アヽ痛え〳〵。

喜太　彌次郎々々。

彌次　喜太八々々。

喜太　飛んだ目に逢ふものだ。

彌次　あんまり間拔けさが堪らねえ。

兩人　アヽ痛え〳〵。

しやア、痛い〳〵。

喜太　ナンダ痛えといふ女が一人殖えたぜ。
しや　ア、痛い〱。
彌次　ナンダ一人殖えた。（ト此時彌次郎兵衞おしやみの顏を見て、）ヤ、わりやア今の瞽女だな、どうして又此處へ來たのだ。
しや　アイサ、先刻お前の持つてゐた石を拾つて持つてゐたを、宿屋の亭主に見付けられ、散々打たれた其上で、金も錢も落してしまひ、何だかちつとも分らない、ア、痛い〱。
彌次　そりやアあんまり慾張り過ぎるから、起つた事だ。
喜太　それぢやア俺が武者修行に出逢つた後で、
彌次　あの石で此の瞽女を、
喜太　しめ損つたか。
兩人　オヽ痛え〱。
しや　私も痛い〱。
喜太　時に彌次さん、今迄道中をして來たが、こんな痛い目に逢つた事がねえ。
彌次　いくら悔んでも仕方がねえ。彌次喜太とも言はれる二人が、澁い面ばかりもしてゐられねえ。

喜太　オヽ笑ふ事をトンと忘れてしまつた。（ト立たうとして）ア痛たヽヽヽ。
彌次　さうだ〳〵、これから又行先も旅だ。旅の門出に一と笑ひ笑はうぢやァねえか。（トこれも立たうとして、）ア痛たヽヽヽ。
喜太　おい〳〵瞽女さん、お前ももう打た後ぢやァ仕方がねえ。俺達と一緒に笑ひねえ。
しや　それだといつて、痛くつて笑へないものを。
彌次　ナンダ笑へねえ。しみつたれな事を言ふぜ、我慢をして笑ひねえ。
しや　そんなら私も笑ふのかえ。
兩人　知れたことだ。サアいゝか。
しや　アイ今笑ひかけてる處だわね。
兩人　サア早くしねえ。
喜太　俺が先へ笑ふぜ、ハヽヽヽヽ。
彌次　ハヽヽヽヽ。
しや　ハヽヽヽ。（ト三人にて間拔に向ひ合ひ）
彌次　白癡の三人が打たれたる、

喜太　この腰の大惱み、
しや　それも堪忍、
彌次　これも堪忍、
三人　劣りはせぬと、
喜太　打笑ふ。

ト此セリフの内三人花道へ來る。喜太八ちよつと語る。おしやみ三味線を彈く。これを木の頭にてよろしく。

ひやうし　幕

喜太　何の事だ。
しや　ほんにまア、よい年をして三人共、
彌次　打殺されねえのが見付けもの、
喜太　殺されてどうなるものか、
彌次　泣き出さずに、

ト幕引付けろと三人こなしあつて。

兩人　やつてくれ。

兩人　〽磁石盜んで盜まれて、トヾの始末がこの姿、アイタヽヽヽヽアハヽヽヽヽ。

ト喜太八彌次郎兵衞唄ひ、おしやみ三味線を彈き、三人よろしく揚幕へはひる。

後　シヤギリ

二幕目

猪目宿在體の場
鳥澤宿棒鼻の場

【役名――とちめんや彌次郎兵衞、きたり喜太八、百姓澁右衞門、倅柿松、立場茶屋の亭主佐平次、髮結、百姓〇、△、蟹屋作右衞門、雲助〇△□◎。澁右衞門女房おたね、蟹屋娘おゑん、佐平次娘おやま。在鄉娘お粂、同お幸等。】

（猪の目宿の場）――本舞臺一面の平舞臺。眞中一間藁屋根のある竹簀戸の入口、左右一面に椿の生垣、此後ろ上の方後へ下げて茅葺屋根屋體の横を見せ、同じく下の方生垣の内より柿の大樹、垣越しの枝などよろしく、諸所に袋を冠せし大きなる柿十三生つてゐる事。ずつと下の方在體の片詩見。上の方植込の張物にて見切り、すべて甲州街道猪目在百姓家、表がゝりの體、舞臺上の方に澁右衞門女房お

たね、在鄕婦やつしなり、象股引尻折り襷がけにて手拭を冠り、クルリを持ち莚の上の稻を打つてゐる。此脇に忰柿太やつしなり藁草履にて同じく手拭を冠りクルリを打つてゐる。下の方に百姓〇△野良歸りの拵へにて床几へかけ、煙草を呑みゐる。此の見得在鄕唄、クルリの音にて幕あく。

たね　〽瀨戸の權兵衞が種かと聞けば、烏勘太がほつた種。（ト唄をうたひながらクルリを打つてゐる。）

百〇　お嬶も柿太もえらく精が出るが、十三夜が近いから、月見の晩にや遊ぶ氣ぢやな。

百△　月見といへば俺が家でも、毎年牡丹餅を拵へるから、砂糖の要害でもせずばなるめえ。

柿太　お前の家の牡丹餅は、去年も喰つたが旨くねえから、柿を喰ふ方が餘程旨い。

たね　エヽこの餓鬼は少いなりをして、憎まれ口は聞かねえものだ。

百〇　イヤ〳〵子供は正直だ。畑介の家の牡丹餅は砂糖屋の前を駈拔けた位で、鹽餡ともつかず小豆ともつかず、柿を喰ふ方が餘程ましだ。

百△　それぢやア今年は張込んで、砂糖をしこたま入れべい。國の名物とはいひながら、こつちの家の此柿は、まだ十四五ほど生つてゐるが、いつまで圍つて置く積りだ。

たね　ありやアお月樣へ上げるつもりで、やう〳〵十三殘してあるが、烏のやうな憎まれ者のこんな腕白な餓鬼があるので、餘計に心配をせねばならぬ。

百○　柿や葡萄は此國では、人に喰はせるのを何とも思はぬが、お月樣へ上げる圍ひの柿では、こりやア大事にする筈だ。

百△　柿でも定めて喰ひたからうが、數が十三と定つてゐるは、一つ取つても供物にならぬから、こりやア我慢をせずばなるまい。

柿太　柿なんぞは喰ひ飽きたから、俺ア喰ひたい事はねえ。

たね　さうしてお前方は、もうおしまひかえ。

百○　今日は朝からえら骨を折つたから、早仕舞にして歸るのだ。

たね　それにつけて家の爺さんも、もう歸りさうなものだ。

ト案じるこなし。是にて百姓△、百姓○の袖を引きちよつと囁く事あつて。

百△　イヤ、こつちの家の澁右衛門は、まだめつたにやア歸るめえ。

たね　ナニ滅多に歸らぬとは。

百○　ハテ、先刻野良で見かけたが、新田のお稻つ子と藪際でいちやついてゐたから、あれぢやアめつたに歸られめえ。

百△　さうぢや／＼、女の處置振りの鹽梅ぢやア、疾から出來てゐる樣子ゆゑ、庚申堂へでも引張り込

んだらう。

トこれにておたね氣の揉めるこなしにて、

たね　エヽいゝ年をした爺の癖に、あんな助平な人はありやアしねえ、又お稻ッ子もお稻ッ子だ、此間まで鼻をくッ垂らし、飴ん棒をしやぶつた餓鬼が、ぬしある爺をしやぶるとは、ほんに〳〵大それた、こりやあ打遣つてはおかれねえ。（トキッとなる。）

柿太　コレおつかア、案じなさんな。南瓜に目鼻をつけたやうな、父に女が惚れるものか。

百○　イヤ〳〵南瓜の當り年だから、惚れねえとは言はれない。

百△　それにお稻ッ子は男前にやあ惚れねえといふことだから、包みの大きいのに惚れたかも知れぬ。

たね　さう聞いては猶のこと、こりやかうしてはゐられぬわい。

柿太　ナニおつかア、案じなさんなよ。

百○　イヤ〳〵案じるは尤もだ。中飯でも持つて行きながら、よく見屆けて來るがいゝ。

百△　こつちは早く家へ歸つて、嚊の顏でも見るとしべい。

たね　よく親切に教へておくれだ。

百○△　ドレ〳〵、早く歸らう〳〵。（ト百姓兩人は下手へ、おたねは正面の竹簀戸の口へはひる。）

柿太　又おつかあと父さんの、燒餅喧嘩が始まるのか。いつもながら困つたものだ。

ト爰へおたね藥鑵と重箱を提げ出て、

たね　コレ〳〵柿松、助平爺がふざけてゐるのを、野良へ行つて見て來るから、家の番をしてゐろよ。

柿太　お前の提げてゐる藥鑵のやうに父の頭が煮立つて、喧嘩になると不可ねえから　重箱のやうな角張つた、強い事は言はねえがいゝ。

たね　エヽこの餓鬼は高慢臭い、父の頭の藥鑵よりこつちの胸が煮えくら返り、ちん〳〵でこらへられねえのだ。

柿太　それぢやア番をしてゐるから、留守番賃に錢をくんねえ。

たね　エヽよく錢々といふ餓鬼だ、錢はないから黍團子へ鹽でもつけて嚙つてゐろ。

柿太　エヽ鹽で團子が喰はれるものか。

たね　喰はれざア喰はずにゐろ。餓鬼のくせにたはけた奴だ。

トおたね足早に上手へはひる。柿太あたりへこなしあつて、

柿太　錢をくれないその代りに、柿を取つて喰つてやらう。

ト有合ふクルリを持ち下手の床几の上へ登り、柿を落す事よろしく、これにて枝の柿一時に六つ落ち

ゐゆゑ、柿太びつくりして、

サア、こりやア取らうと思つたら、こんなにたんと落ちてしまつた。

ト爰へ下手より子供三人、いづれも切繼なり藁草履にて出來り、この體を見て、

子○　ヤ、こりや柿松が自分の家の、

子△　大事な柿を落してしまつた。

子□　みんなにくれゝば默つてゐるが、

子○　くれねば家へ、

三人　言ッつけてやるぞ。

柿松　一つづゝ分けてやるから、父やお母あに默つてゐてくれ。

三人　合點だ〳〵。

ト子供四人件の柿を拾ひ取り、正面の簀戸口へはひる。後誂への合方になり、喜太八旅なりにて菅笠を肩にかけ、腹の減つたるこなしにて、木の枝を杖につき出來り花道にて、

喜太　アヽ苦しや〳〵。何が苦しいといつて、道中で腹が減つた程苦しい事はねえ。これといふのも立際に宿屋の女が横目を遣ひ、俺に給仕をしてくれたゆゑ、此奴アてつきり夏のおぼたで、ござつ

てゐるに違ひないと、いつも五膳か六膳食ふのを、見えばつたゆゑ二膳で濟ませ、小當りに當つてゐる內、連の彌次さんに置去りを喰ひ、横目で色目を遣つたと思つた女は藪睨み、こつちは飛んだ目違ひで、旅籠の拂ひをさせられたので、貫目の輕い財布をはたき、後を追目で急いでも、連の彌次さんは目にかゝらず、もう猫の目の樣子では、七つ近くでもあらうのに、まだ晝飯にもありつけぬわ。飛んだ餓じい目に逢ふものだ。

ト舞臺へ來り、こなしあつて、

せめての事、腹塞げに蕎麥を一杯喰はうにも勘定方の彌次さんが、路用をみんな持つてをれば、杖に離れた盲目同然、座頭轉がしの坂道で、餘計に腹を揉んだので、目が眩んで步かれぬ。どうかそこらに喰ひかけの、柿でも落ちてゐればいゝが。

トあたりを見廻し、下手のうしろの柿へ目をつけ、

イヤあるぞ〳〵。この喜太八が腹を減らし、既に飢ゑて死ぬところを、天も憫み給ひしか、扨も大きなあの柿の木。人の話に傳へ聞く、此の甲州では葡萄畑へ旅人がはひつて、腹一杯葡萄を盜んで喰はうとも、見ぬ顏をして見脫すさうだが、葡萄も柿も國の名物、一つや二つ盜むとも、さのみ咎める事もあるまい。こりやいゝ物が見當つたわえ。

ト これよりなかし味の合方になり。喜太八正面の簀戸口の内を覗き、こちらへ來り、

幸ひあたりに人もなし、爰に床几の出てゐるのは、これも矢張り天の與へ、イヤ有難い〳〵。

ト下手の床几へ上り、腹の減つたるこなしにて、木の枝を杖につき、これにて柿を一つ落すことよろしくあつて、直に柿を取上げ喰つて見て、

イヤこれは古今にうまい柿だ。傳へ聞く唐土の東方朔とやらいふ人は、桃を三つ盗んで喰ひ、三千年の齢を保ち、長生をした例もあれば、一つ盗むも十盗むも、盗む科は同じ事。せめて三つはお定まりに、さうだ〳〵。

ト又床几の上へ上り、柿を打落さうとする。爰へ正面の簀戸口より以前の柿松先に、子供三人附いて出て、此體を見て、

柿松　ヤア柿泥坊だ、ぶんなぐれ〳〵。

二人　合點だ〳〵。（ト棒切を持つて取卷くゆゑ、喜太八びつくりして床几より下り）

喜太　アヽコレ〳〵、盗人ではない旅人だ〳〵。

柿松　イヤ柿を盗んで喰つたからは、

四人　泥坊だ〳〵。

喜太　盗んだのではない、一つ落ちてゐたのを拾つたのだ。

四人　イヤ盗んだのだ／＼。（ト大きく言ふゆゑ、）

喜太　此奴はたまらぬ。（ト下手へ逃げてはひる。）

四人　泥坊々々。

ト喜太八を追掛けてはひる、バタ／＼になり、上手より百姓澁右衛門、農業、出でし拵へにて鎌を腰に差し、後より以前のおたね附いて出來り、

澁右　俺が言はねえ事ぢやアねえ。來ずともいゝのに野良なんぞへ家を空けて出て來るから、泥坊にはひられるのだ。

たね　それだからあの餓鬼に留守番をさせて置くに、遊びに出やアがつたに違ひない。

澁右　何にしろ盗人と聞いては、打捨つてはおかれぬ。

たね　何がなくなつたか見て來よう。（トおたねは簀戸口へはいる。此時下手にて、）

△　うしやアがれ／＼。

ト以前の百姓二人喜太八を引立て、出來り、後より子供四人附いて出る。澁右衛門この體を見て、

澁右　オヽ村の衆、よく泥坊を捕へて下すつた。

○　構ふことはねえ、簀卷にして、
△　谷底へ打込んでやるべい。
子供四人　それがいゝ〳〵。（ト皆々立ちかゝる。）
喜太　アヽコレ〳〵待つて下さい〳〵、大事な命を取られる程な、太い盗人ではござりませぬ。
澁右　コレ〳〵柿松、さうして何を盗まれたのだ。
柿松　あの枝に生つてゐた、柿を盗んで喰つたのだ。
澁右　そんなら月見にお月樣へ供へる積りで袋を冠せ、十三算へて圍つて置いた、柿を此奴が盜んだのか。（ト簀戸口よりおたね出て聞いてゐて、）
たね　アレ〳〵十三生つてゐたのが、六つしか殘つてゐぬのは、七つ此奴に盜まれたか。
喜太　イエ〳〵取つて喰つたはたつた一つ。後を取らうとする所を子供達に見付けられ、これがほんの恥ッかき、天窓をかき〳〵お詫びをします。どうぞ許して下さりませ。
澁右　イヤ一つであらうが七つであらうが、構への内にある柿を、斷りなしに取つて喰へば、柿盜人に違ひはない。ウヌどうするか見やァがれ。
たね　ほんに〳〵いけし太い、唯の柿でもある事か、お月樣へあげようと大事にかけて圍つた柿を、手

篭めに取つた柿泥坊。

百〇　こりやア四の五の言ふにやア及ばぬ、畑荒しも同然ゆゑ、

百△　棒しばりにして鍋墨を塗り、この村中を引廻し、

百〇　村境から、

兩人　追拂ひませう。

喜太　どうして〳〵、それでなくとも柿を盗んで喰ひますほどに、腹が減つて弱つてゐますに、そんな手荒い目に逢つては、忽ち干死んでしまひます。どうぞお慈悲ぢやお情に、この儘許して下さりませ。

澁右　イヤ〳〵、唯は許されぬ。こりやア村の衆の言ふ通り、棒しばりにして追拂ふとしよう。

皆々　それがいゝ〳〵。（ト立ちかゝるゆゑ）

喜太　コリヤもう、爰には。

ト逃げかゝるを、皆々にて押へ付けてゐる。爰へ下手より髪結政吉田舎廻りの髪結の拵へにて、鬢箱を下げ片襷をかけ、下駄がけにて出來り、此體を見て、

政吉　モシ〳〵皆さん、こりやアまあいつたいどうしたのでござります。

たね　政さん聞いておくれ、お月樣へ上げようと思つて、大事に圍つて置いた柿を、此の野郎が盜んだから、今棒しばりにして村中を引廻さうとする所さ。

政吉　其奴ア何にしろ太え野郎だ。棒しばり位で追拂つちやア後日の見せしめになりませんから、クリクリ坊主にして追拂つちやあどうでごぜえます。

喜太　何だ、坊主にすると。（トびつくりして天窓を押へる。）

瀧右　成程それがよかんべい。來合せたこそ幸ひだ。政さん、何分賴みます。

政吉　承知しました。サア野郎め、天窓を爰へ出しやアがれ。

喜太　これは又情ない。何を隱さう私には六十になる悴もあり、五つになるお袋もあります。坊主にされては江戸へ歸つて、男妾が勤まりませんから、坊主は堪忍しておくんなさい。

たね　アレ、うぬぼれたあんな事を言やアがる。

瀧右　人を莫迦にした圖太い奴だ。政さん、早く剃りこかして下せえ。

政吉　ハイ〱、モシ二人の衆、押へ付けて下せえ。

△○　合點だ〱。（ト喜太八を押へる。）

喜太　アヽコレ、誰ぞ助ける神はないか。助け舟〱。

ト押へつけられながら天窓を振つてゐる、誂への合方になり、花道より彌次郎兵衞、旅なり草鞋にて割掛の包みを肩へかけ、菅笠を持ち出來り、花道にて此體を見て、

彌次　あそこにゐるのは、喜太公のやうだ。（ト舞臺へ來り、）モシ〳〵皆さん、ちよつと待つておくんなさい。

ト喜太八彌次郎兵衞を見て、

喜太　オヽお前は彌次さん、助けて下さい〳〵。

澁右　それぢやア此奴の、

皆々　同類だな。

彌次　同類だと言ひなさるのは、扨は定りで不出來しでもしたと見えるが、さうしていつたい此男が何を不出來しを致しました。

澁右　オヽその不出來しは外でもない。此の十三夜にお月樣へ供へる積りで、私の家であれあの通り枝柹を十三圍つて置いたのを、斷りもなく此男が、七つ盜んで喰つたゆゑ。

たね　畑荒しの法に倣ひ、棒しばりにして村中を引廻した上追拂はうと、今相談が定つた所。

政吉　丁度私が來合はせて、それよりいつそ坊主にして、追拂ふのが後日の爲と、一同相談決着の上。

百○　畑荒しの見せしめに、

百△　今坊主にする、

皆々　所でござる。

彌次　イヤそれで樣子が分りました。それだから不斷から俺が言はねえ事ぢやァねえ。意地の穢えのも仕方がねえが、盜み喰ひばかりはよしてくれと、度々異見もしましたが、手癖の惡い生れ付に、夜這ひに行つて彈かれたり、撮み食ひをして事を壞すは、これまで幾度だか知れません。これが所謂江戸ッ子の面汚し、丁度身延へ參るのに、坊主になつてお山へ登れば、罪亡しにもなりませうから、クリ／＼坊主に剃つておやんなせえ。

喜太　オイ／＼彌次さん何を言ふのだ。人の落目を附込んで、常談も大概にしなせえ。かういふ難儀な目に遭ふのも、お前が俺を置去りにして、今朝宿屋を立つたゆゑだ。旅籠の拂ひで財布をはたき、ちやんころなしで腹を減らし、餓じい餘りに柿を一つ盜んで喰つたが誤りで、こんなひどい目にはあふけれど、何で不斷撮み喰ひだの盜み喰ひをするものか。人の難儀を救はうとはしねえで、あんまり誼甲斐のねえ人だ。

彌次　そりやァ貴樣が正直でゐるを、宿へ置去りにしたは俺が惡いが、出來もしねえ飯盛女をこぢつけ

て、だらけてゐるを一緒に見てゐるのが大儀だから、此方は一と足先へ立つたのだ。難儀をする
のは自業自得だ。

喜太　そりやアお互ひにあり内の事だ。お前だとて東海道で順禮の娘に這ひつけて、天井を踏抜いて佛檀の中へ落ちた事もあれば、宿屋の女にこみやふ位は大目に見てくれてもいゝ譯だ。

彌次　エヽ暗闇の恥を明るみへ出して、俺の棚下しまでしやアがれば、友達の誼もこれ限りだ。皆さん御勝手にお頼み申します。（ト立つて行かうとするゆゑ、喜太八袂を捉へ、）

喜太　コレサ彌次さん、何處へ行くのだ。今お前に見捨てられては、俺ら路頭に迷はにやならぬ。腹が立つならあやまるから、どうぞ不斷の誼甲斐に、爰の所を扱つて下さい。

彌次　それぢやア向後心を入替えて、ふざけた眞似はしねえといふのか。

喜太　もう／＼これに懲りて、止める／＼。

彌次　さう聞いて見れば見捨てるも不便だ。俺がいゝやうに扱つてやらう。（トこちらへ向ひ、）扨皆さん呆れ返つた此奴が不出來し、定めてお腹も立ちませうが、連の私にお免じなすつて、とも／＼お詫を致しますから、坊主にするのは止めにして、せめて片小鬢位で負けてやつて下さい。

喜太　ナンダ片小鬢だ。（トびつくりする。）

溢右　それでは仲裁の詞に免じて、片小鬢で負けてやらう。

政吉　ドレ〳〵、それぢやァ剃落さう。（ト立ちかゝる。）

喜太　アヽコレ〳〵待つて下さい。片小鬢にされるより、いつそ坊主が増といふもの。そんな扱ひならせずともの事だ。

彌次　せずともよけりやァ勝手にしろ。（ト又立つて行かうとするを、喜太八留めて、）

喜太　コレ〳〵彌次さん、おいらが悪い。一生涯恩に着るから、どうぞ眞劍に詫びて下さい。これ〳〵この通り頼む〳〵。（ト手を合せて拜む。）

彌次　イヤ〳〵それでも先様で坊主にしようと言出したからは、片小鬢でも落さずば、此奴ァ話が纏るめえ。

喜太　そこをお前の扱ひで、落さぬやうにして下さい。

彌次　それぢやァいつそ大負けに、あの衆達に負けて貰つて、糸鬢奴になつてはどうだ。

喜太　イヤ〳〵、奴もドッとしない。どうぞ無難に頼む〳〵。

彌次　奴が厭なら風變りにチャン〳〵坊主になる氣はねえか。

喜太　エヽ、そんな天窓は猶御免だ。

彌次　それが厭なら坊主頭で、ちよツと毛ばかり殘して見ねえ。
喜太　エヽ詫言をしてくれようとはしねえで、人の天窓だと思つて、いゝ加減にしなせえ。
　　　トメソ〳〵泣出す。子供四人此體を見て、
柿松　ヤア泥坊が泣出した。笑つてやれ〳〵。
子供四人　ワアイ〳〵。
　　　ト手を叩いて笑ふ。おたね前へ出て、
たね　モシ澁右衞門さん、面が憎いとは言ひながら、氣の毒さも氣の毒だから、坊主がはりに扱ひの金で負けてやる氣はないか。
澁右　イヤ俺も此村で人に知られた草分の百姓だ。慾に轉んで濟ませては、先祖へ對して濟まねえから坊主の替りに大負に、眉毛を落して濟ませてやらう。
彌次　イヤ眉毛で負けて下されば、こんな手輕い事はない。
喜太　それでもかつたい棒と間違ひはせぬか。
彌次　ハテどうで始終はかつたい筋だ。
喜太　エヽ延喜でもない、鶴龜〳〵。

政吉　それぢやァ眉毛で負けてやると、相談が定りましたか。
百〇　坊主にするのが眉毛で濟めば、
百△　こんな仕合せな事はない。
喜太　ならう事なら兩方共、細く半分殘して下さい。
彌次　エヽ未練な事は言はねえものだ。
　　ト此内髮結床几を眞中へ持ち出して、
政吉　サア〳〵、爰へ掛けなせえ。
喜太　アヽどうでも落さにやならぬのか。
　　ト澁々床几へかける。これにて髮結床几の上へ上り、喜太八の眉毛を剃り落す事よろしく、子供四人
　　これを見て、
子供　ヤア、なりん棒だ〳〵。（ト囃す。）
喜太　ナンだ、なりん棒だ。（ト首を動かす。）
政吉　コレサ動きなさんな。（ト押へつけて、トヾ眉毛を剃り落してしまふ。）
彌次　サア〳〵喜太公、眉毛が落ちたら、皆さんへお禮を申して出掛けよう。

喜太　柿が一つで眉毛が二本、これでみんなに禮を言ふのか。
彌次　ハテ、坊主になるより安いものだ。（トこれにて喜太八餘儀なく下にゐて）
喜太　これは皆さん、有難うござります。（ト手を突いて禮をいふ。）
溢右　此後隨分氣をつけさつせえ。
喜太　へイ〳〵、畏りました。
彌次　これは皆さん、おやかましうござりました。（ト兩人連立ち、上手へ行きかけ立留り）コウ喜太八、俺ア狂歌が一首浮んだ。
喜太　又下らねえ事だらう。
彌次　「しぶ〳〵と禮をいふのも柿の科、眉毛落され厭になりんぼ」とはどうだ。
喜太　エヽ、何を言ふのだ。
ト誂への合方にて兩人上手へはひる。此内柿松腹の痛むこなしにて腹を押へ、
柿松　アイタヽヽヽ。
皆々　コレ〳〵柿松、どうしたく〳〵。
柿松　何だか腹が痛くなつた。

たね　それぢやァ又留守の内に、水をがぶ〳〵飲んだのだらう。
柿松　イヤ、水なんぞは飲みやァしねえ。
澁右　何にしろ家へ入れて、藥でも飲ませてやれ。
政吉　丁度わつちが江戸から貰つた、爰に熊の膽を持つてゐますが、これを服ませてはどうでございます。

ト腹掛の隱しより藥包みを出しておたねへやる。

たね　それぢやァどうぞ少し下さい。
百〇　然し西瓜を喰つた後では、熊の膽は惡いといふから、
百△　よく喰物を聞いて見てから、服ませたがよかんべい。
澁右　コレ〳〵柿松、何ぞ喰つたものでもありやァしねえか。
柿松　アイ、たつた今。（ト言ひかけて心付き、）イヤ、何も喰やァしねえ。
政吉　柿でも喰つた仲間ぢやァねえか。（トこれを聞き、子供三人顏見合せ、）
三人　おいらぢやないよ〳〵。（ト三人共下手へ逃げてはひろ、澁右衞門思入あつて、）
澁右　喰つたら喰つたと言はねえと、藥に中つて直ぐに死ぬぞ。

柿松　先刻あすこの柿を喰つた。
皆々　ヤア〳〵。
澁右　それぢやァ手前が盗んだのか。
柿松　今の人が一つ喰ひ、後はおいらが三つ喰つて、後の三つは一つ宛友達にやつたのだ。
たね　それぢやァ柿を盗んだのは、
政吉　捕へて見れば我子なり。
百〇　此奴は飛んだ、
百△　間違ひだ。
澁右　エヽ、これといふのも燒餅で、手前が家を明けたからだ。
たね　イエ私より爺のくせに、新造狂ひをするのが惡い。
澁右　こりやァ男の働きだ。
たね　エヽ、莫迦爺いめ。大概にしろ。（ト澁右衛門へ武者振りつくゆゑ）
澁右　エヽ、何をしやァがる。（ト兩人摑み合ひになる。）
政吉　コレサ〳〵、なんぼ犬目の在だといつて、

百〇　夫婦喧嘩は、
百△　犬も喰はねえ。
柿松　おいらは柿は、もう喰はねえ。
澁右　こつちは嗅が、(トおたれを突放すが道具替りの知せ、)氣に喰はねえ。
トキツとなる。おたれ起上り、澁右衞門へかぶりつかうとするを、皆々にて留める。此の見得、在郷唄にて道具廻る。
(立場茶屋の場)……本舞臺一面常足の二重八枚飾り、山組の蹴込み、後ろ甲州の山を見せたる遠見、二重の上手に三間の間藁葺の立場茶屋、内上の方一間「酒肴めし」と記せし半障子を建切り、腰通り板羽目、後ろ二間の間落間の心にて、正面酒樽などの書割よろしく、下手よき所に松の立木。此脇に「甲州街道鳥澤驛」と記せし榜示杭。日覆より杉の釣枝。すべて棒鼻立場茶屋の體。こゝに床几を三脚ほど並べ、上手の床几に立場茶屋の亭主佐平次、着流し前垂がけにて腰をかけ煙草を吞んでゐる。下手の床几に茶屋娘おやま、友達娘のお桑、お幸、いづれもやつしなりにて腰をかけ、芝居の番附を擴げて見てゐる。此の見得、山おろし馬士唄にて、道具留る。
やま　この番附の樣子では、江戸の大芝居から團十郎や左團次といふよい役者が、甲府へ此度乘込んで

お桑　立派な芝居が始まると見える。

お桑　何でも此月の廿日過ぎには始まるといふ事ゆゑ、お父さんにねだつても、是非見に行かねばならぬわいなア。

お幸　おやまさんもその時は、是非一緒に行かしやんせ。かういふ芝居は江戸へ行かねば見られぬといふ評判ぢやぞえ。

やま　モシ父さん、此の芝居が始まつたらお桑さんやお幸さんと一緒にやつて下さんせ。

佐平　イヤ甲府まで行かずとも、爰から近い猿橋の鎭守樣のお祭りに、江戸役者を抱へ込んで、芝居をやる積りだから、それを行つて見るがいゝ。

やま　イエいつぞやも猿橋のお祭の時、芝居があつたが、甲府と違つて地芝居ゆゑ、江戸の役者は出ませぬわいなア。

お桑　ほんに名も知れぬ旅役者や素人達が打交り、つまらぬ芝居をするゆゑ、

お幸　鎭守祭の花芝居は、私や見たうはござんせぬ。それとも甲府へ行がけに打たせるのかも知れぬぞえ。

佐平　イヤ何でも今度の世話人は、猿橋で顏の賣れた、蠶屋の旦那が發起人で、搗米屋臼右衛門さんが

金主だから、甲府行きの役者を引留め、是非大芝居が出來るであらう。
やま　全く大きな芝居が出來れば、甲府へ行くより鼻の先、
お桑　どうぞ本當の歌舞伎役者の、
お幸　芝居が見たうござんすなア。
佐平　俺も芝居が好きだから、樂しみにして待つてゐるのだ。
やま　ほんにこんなに番附通りの、
お桑　役者がみんな出ましたら、
お幸　嘸大當りでござんせう。

ト皆々床几の上の番附を見てゐる。馬士唄キツパリとなり、花道より以前の彌次郎兵衛喜太八連立ち出來り、花道にて、

彌次　どうだ喜太公、腹は直つたか。
喜太　蕎麥を七八杯搔込んだので、やう〳〵人間の心持になつた。
彌次　向ふに見える鳥澤の棒鼻、大分娘が並んでゐるが、又だらけちやアいけねえぜ。
喜太　イヤもう女ぢやア懲り〳〵したが、さつきの宿が犬目といひ、爰が鳥澤で、この先が猿橋とはト

ント桃太郎のお供のやうだ。

彌次　これが夏なら谷川へ桃でも流れて來るだらうが、秋の末だから谷川へ柿でも流れて來るだらう。

喜太　イヤ、この柿ぢやァ懲り〳〵した。

彌次　何にしろ向ふで休まう。

ト兩人舞臺へ來る。此内花道より雲助〇△□◎そぼろの拵へにて、山駕籠を二挺擔ぎ出來り、花道にて四人囃き合ふことあつて、彌次郎兵衞喜太八の後について舞臺へ來り、下手へ駕籠をおろし前へ出て、

雲〇　モシ親方衆、どうで猿橋の歸り駕籠に、いくらでもいゝから乘つてやつてくんなせえ。

彌次　イヤ俺達は足が丈夫で、ついに旅をしても駕籠なんぞへ乘つた事のねえ男だ。駕籠はいらねえから外を聞いて見ねえ。

雲△　そんな事をおつしやらねえで、どうで今夜は猿橋へお泊りでござりませうから、乘つて行つておくんなせえ。

喜太　駕籠などには乘りたくねえといふのに、いくら勸めても無駄なことだ。（ト兩人床几へかける。）

佐平　これはいらつしやいまし。お茶を上げろよ。

やま　アイ〳〵。(ト茶を運ぶ事よろしく、喜太八茶碗を取りながら。)

喜太　此奴ア美しい。

彌次　又だらけるか。

喜太　どつこいしよ。(トシヤンとなる。)

やま　ごゆるりとお休みなされませ。

ト元の床几へかける。此内駕籠屋下手にてよろしくこなしあつて、

雲□　駕籠が厭だといふなら、酒手を貰へ〳〵。

雲◎　さうだ〳〵、あの手合を唯通しちやア、こちとらが飯が食へねえ。

雲○　モシ親方衆、それぢやア駕籠はよしますから、わつち共四人の頭へ、どうか一杯飲ましておくんなせえ。

彌次　一杯飲ませろとはおつな事をいふが、俺アこれまで旅をしてお前達に酒などをねだられた事は一度もねえ、茶でもよけりやア勝手に飲みなせえ。

トこれにて喜太八、半四郎の權八の思入にて、

喜太　中國筋よりはる〴〵と、暮れに及んで一人旅、若年者と侮つて、こりやア强ねだりを致すのぢや

な。（ト聲色を遣ふゆゑ、）

彌次　コレサ、キザな聲を出しなさんな。

雲△　そりやアこれまで旅をして、ねだられた事はねえかは知らぬが、親方衆から長え錢でもたまにやアねだつて貰はにやア、旨え酒が飲まれやせん。

雲□　何も百兩百貫くれと、大きな事は言ひませんから、四人の頭へ一杯づゝ。

雲◎　器用に飲ませておくんなせえ、仲間の者へは口を拭き、默つて通してあげますのだ。

雲○　モシ、たんとの事は、

四人　言やアしません。（トこれを聞き彌次郎兵衛思入あつて、）

彌次　ハテナ、是まで何處の旅籠屋でも、旦那々々と言はれて來たが、今日に限つて親方衆と呼ばれた上で、酒手までねだられるとは合點が行かねえ。

雲○　分らざア言つて聞かせやせう、今度甲府の龜屋の芝居へ、江戸から立派な立者衆が乘込みになり大芝居が始まるといふ評判は、二三日後から番附で賣込んである此の街道、いくらとぼけてゐなすつても、直ぐ素直にやア通されねえ。

彌次　それぢやアもしや俺達を、役者と間違へてゐるのぢやアねえか。

雲△　ハテいくら化けても正體が顯はれかゝつてゐるといふは、色の黑いに似合はねえ、厭に氣取つたそつちの親方、眉毛のねえのが何より證據だ。（トこれにて兩人心附き、）

彌次　ハヽア、それで樣子がガラリと分つた。連の男の眉毛のねえのは、猪目の在で柿を盜み。

トいひかけるを、喜太八袂を引き、言つて吳れるなと手を合せて賴むゆゑ、彌次郎兵衞氣をかへ、

イヤサ、是にやァちつと譯があつて、先刻眉毛を剃落されたが、役者と見たのはそつちの目違ひ。甲洲街道へ出掛けたは、今度が新規新法だが、こちとら二人は數年來、東海道から木曾街道を股にかけたる旅雀、道中筋で人に知られた江戸の神田の八丁堀、とちめん屋の彌次郎兵衞にきたり喜太八といふものだ。

雲□　そりやァ彌次郎兵衞でも喜太八でも、狂言ぢやァしなさるだらうが、その藝名は何某といふ立派な役者に違えはねえ。

雲◎　引眉毛をして護摩化して、爰まで無難に來なすつたも、後の立場で顏を洗ひ、眉毛の落ちたを忘れたのが、そつちの手拔といふものだ。

雲○　サア／＼器川に、

四人　酒手を下せえ。（ト是を聞き娘三人扨はといふこなしにて顏見合せ、）

やま　そんならこれが甲府へ行く、役者衆でござんしたか。
お桑　さう聞いて見れば、どこやらが役者のやうな所もあり。
お幸　色の黑いは道中で日にやけたのでござんせう。
ト是を聞き喜太八ゲッと役者の心持になりしこなしにて、
喜太　ハテ是非もなき此場の仕儀、包むとすれど穗に顯はれ、かく見出されし上からは、もう隱しても詮なき事、酒手をやつてしまはれよ。（トセリフのやうに氣取つて言ふゆゑ、）
彌次　エヽそんなに手前が氣取るもんだから、詰らねえ疑ひを受けるのだ。役者でもねえ俺達が、何で酒手を出されるものか。
喜太　イヤ濡れぬ先こそいとふ身も、役者と知れし上からは、僅かな酒手何厭はん。イザ〳〵出してしまはれよ。
ト後ろの女達へ聞かせるこなしにて、態と氣取つて言ふゆゑ、
彌次　エヽキザな眞似をしやアがるな。（ト腹の立つ思入。）
雲○　酒手をくれざア晃れねえまで。無理に貰はうとは言はねえから、どうするか覺えてゐろ。
雲△　さうだ〳〵。一人が正體を顯はしてゐるに、一人の野郎が白を切つて、とぼけやアがるだけ癪に

障らァ。

雲□　構ふことはねえ。これから行つて仲間の者を呼集め、猿橋の街道が頑張つてゐて貰つて見せる。

雲◎　一文惜しみの百損で、四人の天窓へ酒手位を惜しんで後悔しやァがるな。

雲○　サア〳〵、みんな一緒に來い。

ト駕籠を擔いで行きかける、此内始終佐平次は後ろの床几にかけ煙草を呑みながら聞いてゐて、此時出て、

佐平　オイ〳〵若い衆、ちよつと待つて下せえ。

雲○　佐平次さん、うつちやつて置いて下せえ。不斷世話になるこつちの店だから、脇へ行つて頑張るのだ。

佐平　ハテそこがお前方とも相談づくだ。マア〳〵下にゐて下せえ。（トよろしく留めて、）始終は後ろで聞きましたが、これから甲府へ通り一遍の親方衆なら、知らぬ顏をしてお前の邪魔はせぬが、知つての通り猿橋で、甲府行きの役者を抱へ、花芝居を打つもくろみゆゑ、丁度二人の親方衆が爰を通つてわしの店へ休まつしやつたはこれ幸ひ、蟹屋の旦那へお知らせ申して、今夜は是非とも猿橋の泊りを願つてトックリと、お頼み申す事もあれば、親方衆へ土地の者が無法な事を言つて

はならぬ。然し私も中へはひり、かうして口を利くからは、滿更素手でも歸すまいから、マアマア下にゐて下せえ。

雲○ 成程今度猿橋の祭について花芝居が、始まるといふ噂もあれば、

雲△ 蟹屋の旦那に睨まれては、稼業の出來ぬこちとらゆゑ、

雲□ 土地の芝居へ出てさへくれゝば、無法な事ァ言やァしません。

雲◎ それぢやァこなたに委せるから、いゝやうに捌いて下せえ。

佐平 ハテ、わしが萬端呑込んでゐます。（トこちらへ向ひ、）扨親方衆へお願ひがございますが、唯今お聞きの通りの譯で、是非七日程猿橋で御逗留を願ひませんではならぬ次第もございまするが、又御身分のお掛合もどの道御相談を致しますが、まづ差當るお扱ひは、一人前へ二百文づゝ、八百文のお酒手を四人へやつて下さいますれば、それで彼奴らに否應は、決して私が申させませぬ。

トこれにて彌次郎兵衞困る思入にて、

彌次 そりやァ御亭主の挨拶ゆゑ、出すまいものでもございませんが。

喜太 ハテ千兩取る役者の身分、些細な事だ、やつてしまはつしやい。

トやはり氣取つて言ふゆゑ、

彌次　エヽ手前は狐にでもつまゝれてゐるか、そんなに氣取つてどうするのだ。

喜太　ハテ役者と知れたら役者になつて、芝居を打つて行くつもりだ。

彌次　エヽ、莫迦肚胸も大概にしろ。

喜太　ハテサ、どうで甲府で待つてゐようが、かういふ時には肚胸を据ゑ、遣損つても旅の恥だ。イヤサ旅へ出たのは初めてだが、檜木舞臺を踏んだこちとら、何も案じる事はなしだ。

トよろしく呑込ませる。是にて彌次郎兵衞も是非なきこなしにて、

彌次　それぢやア肚胸でやつて見ようか。イヤサ甲府で待つてゐようとも、肚胸で四五日逗留して、どんなものだかやつて見よう。

佐平　それは早速の御得心、有難い事でござります。

雲○　さう又二人の親方衆が、早く承知をしてくれりやア、

雲△　こつちも酒手を貰はずに、蟹屋の家まで送るとしよう。

雲□　それがいゝ〳〵。

佐平　何は兎もあれ蟹屋の旦那へ、ちよつとお知らせ申したいものだ。

やま　父さん、私がみんなと一緒に、ちよつと行つて來ようわいなア。

お桑　ほんに蟹屋のおゑんさんに、早く知らせて上げたうござんす。

お幸　親方衆に素敵を見せに、一緒に連れて來ようわいなア。

喜太　娘ッ子なら幾人でも遠慮なしに連れて來なさい。

彌次　エヽ又女にだらけやァがるか。

喜太　イヤそのだらけたのが、過ちの功名となつて此の仕合せ。

彌次　然しこれから先の事が。

喜太　ハテマア、わしにお任せ下せえ。（トセリフのやうに言ふ。）

やま　それぢやァ父さん、行つて來るぞえ。

お桑
お幸　サア、ござんせいなア。

ト娘三人上手へはひる。これより彌次郎兵衛喜太八急に衣紋をつくり、役者の氣取りにて床几へ掛直し、

彌次　時に御亭主、御面倒ながら若い衆達にも飲ませたいから、ちよつと一ぱい出して下さい。

佐平　へイ／＼畏りましたが、親方衆のお口に合ふ、旨いお肴がござりませんで。

喜太　イヤ江戸と違つて旅へ出れば、肴好みは致しません。

彌次　柿さへ盗んで喰ふ位だ。

喜太　アコい。（ト言つてくれるなといふこなし。）

佐平　コウ若い衆、親方衆が一ぱいづゝ飲ませてやるとおつしやるから、お禮を言はつしやい〳〵。

雲〇　へい〳〵、それは御馳走樣。

四人　大きに有難うござります。

彌次　アイ〳〵。（ト大風にいふ。）

佐平　ドレ支度をしてまゐりませう。

ト佐平次は上手屋臺の内へはいる。後に彌次郎兵衛下手の駕籠屋へ氣兼のこなしにて、喜太八に向ひ、

彌次　コレ喜太八、手前安請合に請合つて、やり損つたらどうする積りだ。

喜太　何も彌次さん案じなさんな、高が甲州の山の中だ、何をしたつてかまふものか。

彌次　エヘン〳〵。（ト下手へこなし。）

喜太　イエサ、甲府で待つてゐようとも、後でどうともならうから、まあ落着いてゐるがいゝ。

彌次　さうして手前は江戸にゐて、ちつとは茶番でも、イヤサ、役者は役者、茶番は茶番だから、少しはやつた心得でもあるか。

喜太　ハテこれでも若衆の時分には、上野の坊さんに可愛がられて、先づ振事は田町の花柳、芝居は替り目に、イヤサ、芝居の替り目には幕の一張づゝも貰つたゆゑ、故人高島屋が養子に欲しがつた役者だ。

彌次　俺も成田屋の聲色位は。（ト下手を見て氣なかへ）イヤサ、成田屋が俺の聲色を遣ふのだと、専ら見物がいふ位だから、熊谷の物語位はどうかやつてのけられるだらう。

喜太　旨く行つたら丸儲け、やり損つたら夜逃げをして。

彌次　エヘン〳〵。

喜太　イエサ甲府でやかましく言つて來たら、夜逃げで江戸へ歸るまでだ。

ト駕籠屋四人これを聞きながら、

雲○　イエ甲府からやかましく言つて來て、御迷惑にでもなるやうなら。

雲△　そこはわつち共の生業柄、通し駕籠で江戸まで送り、

雲□　甲府の奴等に親方衆へ、指でも差させは致しませぬから、

雲◎　まあ山駕籠に乘つたと思つて、落着いてお出でなされませ。

彌次　イヤ、どうか首尾よくやりたいものだ。

ト爰へ蟹屋作左衞門羽織着流し、宿屋の亭主の拵へにて、草履を穿き、以前のおやま附いて出て來る。
駕籠屋四人此體を見て下手へ向ひ、

四人　佐平次さん〳〵。

雲〇　モシ佐平次さん、蟹屋の旦那がお出でなすつた。

ト呼ぶ。上手屋體の内より、佐平次膳の上へ德利と小皿の肴を載せしを兩方の手に持ち出て來り、

佐平　ハイ〳〵、これは旦那樣、唯今御挨拶を致します。コレおやま、親方衆へお酌をしてあげろ。

やま　アイ〳〵。

ト一膳の方を彌次郎兵衞喜太八の方へ持ち行き、佐平次一膳の方を下手へ持ち來り、

佐平　サア〳〵お前方もゆつくり飲まつしやい。

雲助
四人　ヘイ〳〵、これは有難うござります。

ト此内蟹屋作左衞門は眞中の床几へかける。佐平次こちらへ來り、

佐平　旦那樣、よくまあ早速お出でゞござりました。

作左　イヤ丁度今祭の事で、こつちの家へ相談に來るところ、途中で折よくおやま坊に逢つて、樣子はあらかた聞きましたが、その江戸役者とおつしやるは、あれにお出でのお二人樣かな。

佐平　左樣でございます。どうかお近附になつて上げて下さいまし。

作左　アイ〳〵、承知仕りました。（ト上手へ來り、合方になり）左樣ならあなた方が、今度江戸からお登りの親方衆でございますか。お初にお目にかゝりますが、私は此の猿橋で旅籠屋渡世を致しまする、蟹屋作左衛門と申す者でございます、以後は御別懇にお願ひ申しまする。

彌次　かねてお名前は江戸表で、聞及んでをりましたが、左樣ならお前さんが、猿橋の蟹屋さんでござりましたか。

喜太　お聞き申せば鎭守のお祭で、花芝居とやらをお催しの由、お目出たい事でございます。

作左　左樣でございます。定めてこちの主人からお話し申しましたでございませうが、鎭守の祭を幸ひに、妙願寺と申す寺の本堂が大破に及んでをりますのを、營繕致す心得で、奉加芝居を組立てましたが、何を申すも甲州の郡内領でございますから、これまで江戸の親方衆をお招き申した事もなく、手蔓のないのに困つてゐる内、今度甲府の龜屋座へ江戸の親方衆がござると聞き、幸ひ甲府へお登りがけに、是非七日程猿橋で御出勤を願ひませうと、待ちに待つてをりましたに、よくお立寄り下さいました。承れば御出勤の事もあらかた御承知のやうに聞及び、芝居をもくろむ私の面目、誠に有難い事でございます。

ト丁寧に禮をいふ。彌次郎兵衞わざと大風になり、

彌次　ハイ〳〵、何も金づくや慾得づくで出勤をする譯ではないが、爰の主人の氣性に惚れて、ほんの僅かな端金で出勤をして上げる積りだ。

喜太　定めて甲府の芝居では二人の行くのが遲れては、興行に差支へませうが、大金を取つて行く所へ行かずに、僅かな包み金で見物を呼んであげやせう。

作左　イエもうお達引強いは江戸の御氣性に限ります。その代り又奉加芝居が首尾よく繁昌致しますれば、お約束の外に何程でもお禮はきつと致します。

彌次　イヤ、さううまくいけばいゝが。

作左　エヽ。

彌次　何サ、うまくなくともお近附の爲、持合せましたから一献差上げます。（ト猪口を出す。）

作左　ヘイ〳〵、有難くお頂き申します。

やま　ドレ、お酌を致しませう。（ト酒盛よろしく、此内駕籠屋四人下手で酒を飲んでゐて、）

雲○　かう物事がうまく行くも、俺達四人が親方衆を、江戸の役者と見出したゆゑだ。

雲△　今度の芝居が始まつたら、蟹屋の旦那のお聲がゝりで、芝居を毎日見にやアならねえ。

作左　そりやア貴公達が言ふまでもない、俺も宿内への外聞だ。仕着せの一枚づゝもやる積りだ。
雲□　其奴ア何にしろ有難い。
雲◎　何分お頼み申します。
佐平　さうして、二人の親方衆は、定めて江戸で名の高いお役者衆でござりませうが、何とおつしやるお名前か、お聞かせなされて下さりませ。
彌次　サア、その名前は。（トモジ〳〵してゐるゆゑ。）
喜太　これが市川團十郎だ。
皆々　ヤア。（トびつくりする。彌次郎兵衛もびつくりせしこなしにて、）
彌次　何サ、市川團十郎の弟子で、市川雛十郎といふ役者だ。
作左　さうして、こちらのお前さんは。
喜太　わしは市川左團次の弟子で、市川不團次といふものだ。

　　　トこれを聞き、おやま懐中より以前の番附を出して見て、

やま　そんな名前は此の番附に、出てをりませんが、何故だらう。
彌次　エヽ。（トギツクリ思入あつて、氣をかへ、）何サ、そりやア景氣番附といつて、役者の乘込まぬ内出

るのだから、本當の事は出てはゐない。
喜太　さうとも〳〵。いよ〳〵本當の番附が出れば、私などは團十郎と肩を並べて太く出るのだ。
佐平　左樣ならお前さんは、立女形さんでございますか。
喜太　イヤ女形もすれば立役もして、何でも兼ねる重寶役者だ。
作左　さうしてこちらの親方は、何がお持役でございます。
彌次　わしやア荒事が持前で、江戸でも本物の團十郎と、度々舞臺で間違へられやす。
雲○　イヤ、さういふ役者が二人揃へば、
雲△　此奴ア鬼に金棒だ。
作左　それでは二人のお名前を、早速郡代へ書上げるとしませう。
ト爰へ上手より蠶屋娘おゑん、振袖なり、宿屋の娘の拵へにて、以前のお桑お幸と連立ち出て來り、上手にてこちらを見て、
ゑん　モシお桑さん、役者衆といふのは、あの二人でございますか。
お桑　ハイ、あの合羽を着た二人でございます。
ゑん　思つたよりは二人とも、色が黒いぢやございませぬか。

お幸　大方役者と知れぬやうに、汚してゐるのでござんせう、

トこれを聞き、彌次郎兵衞喜太八刷毛先を直し、衣紋を繕ひ厭味をする事よろしく、作左衞門上手を見て、

作左　オヽ娘、親方衆を見物に來たか。
彌次　扨は綺麗な娘さんは、こなたの家でござりますか。
作左　へイ不束ながら、私の一人娘でござります。
喜太　どうやら夏のおぼたのやうだ。
彌次　エヽ又柿でも盜みなさんな。
佐平　ナニ、柿を盜むとは。
彌次　イエナニ、柿の裃を甲府へ廻して惜しい事をした。
喜太　同じ柿でも團十郎畑は、澁いといふから澁柿だ。
彌次　エヽ餘計な事は言はねえものだ。
作左　何は兎もあれ宿許で又御相談もござりますから、直に御案内申しませう。
ゐん　人に役者と知られぬやうに、態と素人同樣に穢いなりをしてゐれど、今に大方立派ななりに着換

へるのでござんせう。
やま　早く舞臺へ出た所を、
お桑　見たいもので、
皆々　ござりまする。（ト是にて彌次郎兵衛喜太八氣の揉めるこなしにて）
彌次　これと知つたら湯へでもはひり、髪でも結つて置かうもの。
喜太　甲府へ荷物を先へ送り、着替のないので不見識だ。
佐平　イエ丁度幸ひ二挺の駕籠、あれでお乘込みをなさいまし。
作左　然し噂がぱつとしたら、見物人で通れゝばいゝが。
佐平　此前大谷門藏といふ、明石屋の弟子が來た時さへ、黑山のやうな人が出ました。
やま　イエあの時は誰一人、見に出たものはござんせぬ。
佐平　エヽやかましい、默つてゐろ。（トおゑん作左衛門の側へ來て）
ゑん　モシ父さん、大きにお世話な事なれど、あの顏へ白粉を塗つたら、白和へのやうになりませうわいなア。
作左　イヤ舞臺顏と素顏とは大そう違ふ役者もあれば、大方綺麗になるであらう。

お桑　何にしろ一人の役者が、眉毛がないのでをかしうござんす。

お幸　いつそ二人ともなければないで、そんなにをかしくはござんすまい。

ト噂をしてゐるを、喜太八是へ聞耳立てゝゐて、

喜太　オイ彌次さん〳〵。

彌次　エヘン〳〵。

喜太　イヤナニ成田屋の、お世話ながら眉毛を引いて下せえ。

彌次　矢立の墨でよければ、引いてやらう。

喜太　いゝとも〳〵、間に合せだ。

トこれにて喜太八彌次郎兵衛の前へ裏向きになる。彌次郎兵衛矢立の墨にて正面より喜太八に眉毛を引いてやる、此内作左衛門捨ゼリフにて駕籠にいひつけ、下手の駕籠を二挺舞臺よき所へ並べる。

雲○　支度がよくば、二人の親方。

雲△　サア〳〵、駕籠へお乗んなせえ。

ト彌次郎兵衛眉毛を引いてしまひ、

彌次　サア喜太公、イヤサ高島屋の、駕籠へ乗つて出かけよう。

喜太　顏を見られるのが難儀だなう。

　ト正面を向く。喜太八の眉毛妙に引いてあるゆゑ、女形皆々見て、

ゑん　オヤマアをかしな、

娘皆々　眉毛の引きやう。

作左　あれが大方市川流の、

佐平　太眉毛とでもいふのであらう。

喜太　まだ舞臺へも出ぬ内に、

彌次　大分人氣が、（ト兩人駕籠の中へはひるを、木の頭）寄つたやうだ。

　ト兩人は眞面目な顏をしてゐる。娘皆々指を差して笑ふ。作左衞門佐平次は娘達に笑ふなと目顏で叱る。この模樣、宿場騒ぎへ驛路の鈴をかぶせし鳴物にてよろしく

ひやうし幕

三幕目大切

猿橋旅店蟹屋の場

同奥座敷稽古の場

〔役名――とちめんや彌次郎兵衛、きたり喜太八、蟹屋作左衛門、糸田屋勘次郎、立場茶屋亭主佐平次、髪結政吉、蟹屋の若い者〇、△、駒橋倉右衛門、捕手、百姓盜右衛門。勘次郎姿おむら、蟹屋女房おかん、娘おゑん、佐平次娘おやま。後家おとら、蟹屋下女〇、△、□等。〕

(蟹屋の場)――本舞臺四間通し上手三間常足の二重。下手一間沓脱の落間、向ふ「蟹屋」と記せし紺暖簾口、こゝ上まひら棧の戸棚。棲は障子、下手折廻し板羽目、上の方庭口の冠木門、下の方一間丸の内に「御泊宿、猿橋蟹屋」と記し、裾通り海鼠壁、軒口に紋附の幕を張り、この左右に「御祭禮」と書きし高張提灯を立て、すべて甲州街道猿橋宿、旅籠屋店先の體。爰に旅籠屋の若い者〇、△竹箒にて掃除をしてゐる。二重に同じく下女〇、△、□煙草盆を掃除してゐる。此の見得聖天の囃子へ驛路の鈴を冠せ幕あく。

若〇 昨日家の旦那が連れて來た、江戸役者だといふあの二人は、役者らしくないぢやァねえか。

若△ 近在から出る身延詣りでも、もうちつと氣が利いてゐる、どう見直しても唯の旅人だ。

下〇 そこが役者の上手な所、旅をするものに、見掛から役者のやうに見えた日には、

下△ 網を張つて待つてゐる、若い衆達に酒手をねだられ、

下□ 容易な事では甲府まで、行かれる事ではござんすまい。

若○それにしても役者なら、不斷白粉を附けてゐるから、綺麗な所がありさうなものだ。
若△江戸から來ればまだ二日路、日に焦ける程の事もないのに、二人とも眞黑だ。
下○同じ色が黑くッても、役者衆の黑いのは、お前方とは違ひますよ。
下△どこか灰汁拔けてゐなさるから、黑くつても目に立たないね。
下□おむらさん、お前はどつちの役者がいゝえ。
下△私や大きな聲をする、不團次さんの方がいゝ。
下○どつちがどうとも言へないが、私やあの大きな目玉の、難十郎さんの方がよい。
若○イヤ役者位世の中に仕合せな者はない、江戸とはいへど宮地芝居か、菰張りのおでゝこ芝居。
若△大芝居なら稻荷町、馬の足にもなられねえあんな者をいゝの惡いのと、ほんに役者は仕合せ者だ。
若○較べものにすりやァ、勝るとも劣りはしねえこちとらだが、
若△ついに一度二人とも、女に惚れられた事がねえ。
下○そんな愚癡をお言ひでない。小助どんは知らないが、與助どんの情人のあるのは、
下△みんなが知つてをりますよ。
若△どうして色が出來るものか。何でも役者にならなやァ出來ねえ。

若〇 俺も今度鴇婆をするのを舞臺初めに役者になり、思入れ色をしにやアならねえ。

下〇 お前が鴇婆になるのは、何の狂言でござんすえ。

若〇 白石噺の二階の段、難十郎が惣六に、不闇次がおのぶだが、隨分骨が大きいから、おのぶよりおどぶの方だらう。

下〇 宮城野は誰でござんす。

若〇 女形は難しく、誰も勤める者がなく、絹屋の旦那の圍ひ者、おむらさんが宮城野だ。

若△ これが今度の一の景物。尤も岩井小扇といつて、踊の師匠をしてゐたから、これはうまいに違ひない。

下〇 それは見ものでござりませう。

若〇 物には障りのあるもので、その宮城野の淨瑠璃を俺が語つてやらうといつて、絹屋の旦那がチョボ語りだ。

若△ 可なり淨瑠璃も出來るけれど、もと謠を習つたので、時々謠と淨瑠璃と一緒になるので事壞しだ。

ト若い者〇向ふを見て、

若〇 ヤ、噂をすれば影とやら、絹屋の旦那がおむらさんと、連立つてお出でなすつた。

ト合方を聖天を冠せ、花道より糸田屋勘次郎、大きな髷の野郎かづら、羽織着流し、駒下駄田舍の物持の拵へ、勘次郎妾おむら、好みのかつら、羽織駒下駄囲ひ者の拵へにて出來り、花道にて、

勘次　蟹屋の主人が江戸役者を、二人抱へたといふ事だが、どんな役者を抱へたか、名さへ夢中作左衛門、どうでろくな者ではあるまい。

むら　男振りはどつとしないが、達者にしやべるといひますから、滿更な者でもありますまい。

勘次　お目見得が白石噺で宮城野のしてがなく、昔取つた杵柄におぬしに一幕助けてくれと、賴みに來たその上に、俺にチョボを語つてくれと、蟹屋の親仁がたつての賴み、それで出て來たが、名の知れた役者なら語つてやるまいものでもないが、デモ役者ならお斷りだ。

むら　信州あたりを稼いで歩く、田舍役者でありませんから、本當の事を知つてをりませう。

勘次　たゞ團十郎と左團次の弟子といふのが、そこが目當だ。

むら　どんな役者か、早く行つて見たうござります。

勘次　よくはなからうと思つてゐるが、若し又どんなよい男でも、決して惚れてはならないぞ。

むら　それは大丈夫でござります。假令どんな男でも、役者などに惚れますものか。凡そ世界中旦那位よい男はございません。

勘次 オヽ、俺もさう思つてゐる。(トこれにておむらちよつと舌を出す。)何で舌を出したのだ。
むら これは嘘を言はない證據、言へば直ぐに抜かれます。
勘次 成程しごく御尤もだ。(ト右の鳴物にて兩人舞臺へ來る。)
若○ これは絹屋の旦那樣、よういらつしやいました。
若△ 先づあれへお通り下さいまし。
勘次 絹屋の旦那は不斷の事、今日はチヨボで呼ばれたから、太夫さんとか師匠さんとか、藝人らしく呼んで下さい。
若○ これは粗相を致しました。左樣なれば竹本天狗太夫樣。
若△ お鼻を羽目へ打附けぬやう、あれへお通りなされませ。(トこれにて兩人二重へ上り)
下○ おむらさん、いらつしやりませ、あなたも、今日は御苦勞樣でございます。
下△ お相手になる江戸役者は、よい役者でございますから。
下□ 早くいらしつて御覽なされませ。
むら そんなら、褒めるやうな役者衆かえ。
下○ 先づ江戸畫で見ました團十郎と左團次に、どこか似てゐるやうでござります。

むら　そりやァ早く見たいものだね。

下△　樂屋へお連れ申しませう。

勘次　イヤ〳〵、おむらは一人はやられぬ。おれが一緒に連れて行く。

むら　お先へ參つては、惡うございますか。

勘次　ひよつと惚れるとならぬから。

むら　お前さんに見かへる男が、世界中にありますものか。

若○　イヤおむらさんは甲州街道三十六里の其内に、又と一人ない御器量、旦那も惡くはないけれど、

若△　先づ十人並の御器量だのに、何でこんなにおむらさんは惚れておいでなさるだらう。

むら　私が旦那に惚れてゐるのは、先づ第一に男がよく、第二にお金がたんとあつて、第三に義太夫が素人藝には惜しい淨瑠璃、これで惚れずにをられますものか。

若○　成程、これは御尤も。一に男、二にお金、第三に淨瑠璃、近所近邊の鍋釜が割れ。

若△　燒原を藥罐と申すか、砂利場を車と申さうか、餘程御美音でございます。

下○　旦那樣のお淨瑠璃は承はつてございますが、おむらさんのお狂言は、まだ拜見致しません。

勘次　俺が褒めるもをかしいが、おむらは江戸にゐた時分、岩井半四郎の門弟で、小扇といつた踊の師

匠、所作事でも狂言でも、何でも出來る器用者だが、人に見せぬは男除け、惚れ人を禁ずるその爲だ。

若○ 左程旦那が御心配の、

若△ おむらさんのお狂言を、

下○ 今日拜見致しますは、

下△ 有難い事で、

皆々 ござります。

むら なに、人樣に見せるやうな、そんな藝ではございませんよ。

トやはり右の鳴物にて、奥より前幕の蟹屋作左衞門出來り、

作左 これは新町の太夫さん、よくお早くお出で下さいました。

勘次 イヤ新町の太夫とは、流石は老功、有難い〳〵。

作左 イヤおむらさんも白石噺へ御出勤下さいまして、有難うございます。實にお前さんの宮城野と旦那の淨瑠璃を、宿中が一同待つてをりまする。

勘次 唯の淨瑠璃を語ると違つて、チヨボを語ると節が崩れ、太夫の身では迷惑だが、土地の祭りの寄

進芝居、年役のお前の頼みに、厭がるおむらを無理に勸め、下稽古に參りました。

作左　よくお出で下さいました。田舍廻りの役者と違ひ、名におふ江戸の歌舞伎役者、チョボ語りは旨市と初手は思つてをりましたが、土地の恥にもなりますから、素人ながら生業人が跣足で逃げる旦那ゆゑ、お頼み申してござります。

勘次　此間も江戸の寄席から幾何でも金を出すから、日數百日語つてくれろと、態々頼みに來たけれど文造が播磨を彈くので三絃が差支へ、氣の毒ながら斷つた。

作左　態々江戸から買ひに來るとは、旦那の藝が勝れてゐる故。かういふお方が土地にあるは、此猿橋ばかりでなく、甲州一體の見得でござります。（ト若い者〇、△小聲にて、）

若〇　チョボの錢を出すまいと、うま〳〵胡麻を摺るぢやないか。

若△　腹に毛のない狸親仁だ。

作左　何だと。

若△　イエ、他國にないと申しました。

むら　左程の藝の旦那をば、チョボにお頼みなさるからは、よい役者でありませうね。

作左　イヤよい掘出し物を致しました。皆樣方の御出金を私が預かつて、江戸へ參らうと思ふ所へ、昨

日測らず市川團十郎の弟子で市川雛十郎、又市川左團次の弟子で市川不團次といふ役者が、甲府の龜屋へ行く途中、常の旅人同様に化けてゐたれど眉毛がなく、駕籠舁き共に役者と見られ、強請られたのが縁となり、立場茶屋の佐平次が取持つてくれたので、江戸まで行かずにいゝ役者を二人まで抱へまして、手見せ旁々下稽古を私方で致しまする。

勘次　それはよいものを抱へられた。さういふ役者の手に入るも、人より大きい耳ッ朶、お前の徳といふものだ。然し田舍廻りの者と違ひ、給金が高からうね。

作左　隨分高うございますが、なに、十兩や二十兩値が高くても土地の恥、小佛きつて近郷から、皆見物に參りますから、役者が惡くてはいけませぬ。

むら　どんなよい役者だか、早く見たうございます。

ト此時暖簾口より喜太八顔を眞黒に塗り口を開いてバアと顔を見せる。おむらアレと勘次郎に縋る。勘次郎も驚く。喜太八は顔を後へ引く。

勘次　今の化物は、何だ。

作左　あれが下りの不團次でございます。

勘次　それではあれが、江戸役者か。

むら　私や黒ん坊かと思ひました。（ト喜太八暖簾口より出て手を突き、）
喜太　無調法者でござりまするが、御贔屓をお願ひ申します。
勘次　ア、お前が評判の不團次さんか。これでは惚れる氣遣ひなし。
若〇　旦那、御安心でござりますな。
勘次　何でそんなに眞黒に、お前は顔を塗んなすつたのだ。
喜太　僅か二日か三日なれど、旅の日で眞黒に焦けましてござりますから、黒砂糖を塗りました。
むら　それでは旅で日に焦けたのを、とらう爲にお塗りでしたか。
喜太　明日の初日に眞白な綺麗な顔を見せようと、昨夜から黒砂糖をしこたま塗つて置きました。
作左　下稽古を見物に、追ひ／＼お客がお出でだから、黒砂糖を早く落して、綺麗な顔を見せなさい。
喜太　それではちよつと今のうち、一と風呂はひつて置きませう。
伴左　コレおせんや、もう風呂はわいたらうな。
下〇　疾にわいてをりまする。
下△　サア親方、お出でなさいまし。
喜太　左樣なら、綺麗な顔で、（トおむらの前へ顔を出す。）

むら　エヽモ氣味の惡い。
喜太　後程お目にかゝりませう。（ト右の鳴物にて、下女○△喜太八奥へはひる。）
作左　太夫さんを下座敷の、六疊へお連れ申してくれ。
若○　畏りましてござりまする。チト狹うござりませうが、
若△　綺麗な所を取つて置きました。
勘次　それではこれから部屋へ行つて、二階をちよつと當つて置かう。
むら　御苦勞ながら、その座敷へ、
若○　御案内、
○△　致しませう。
勘次　ドレ、づぼう糖でも飲んでおかうか。
　ト宿場騷ぎの唄になり、勘次郎おむら若い者○△附いて奥へはひる。佐左衞門殘り、思入あつて、
作左　不斷仲間の者などが、俺が耳が大きいゆゑ、福者だ〳〵といふが、いくら耳が大きくても、兎で儲けた事はなし、當にならぬと思つてゐたが、昨日測らず佐平次から、大きな耳へ聞込んで、江戸役者を二人抱へ、百兩位は取られようと、思ひの外に二人とも、無給でよいとは安い役者、先

づ宿内へは一人前、三十兩づゝとしたところが、これが二人で六十兩、旅籠代から着類の損料、これを十兩と見積つて、七十兩は唯儲け。今度といふ今度こそ、大きい耳が役に立つた。
　ト佐左衛門耳を引張り、悦んでゐる。奥より女房おかん、着流しにて出來り、
かん　旦那、耳寄な事でござりますな。（ト作左衛門びつくりして、）
作左　誰かと思つたら女房、今の一人言を聞いてゐたか。
かん　うしろで聞いてをりました。
作左　こゝが金の儲け所だから、うつかり人に言つてはならぬぞ。
かん　七十兩儲かつたら、十兩位は私にも下さいますでござりませうね。
作左　惡い事を聞かれたから、仕方がない、五兩やらう。（ト奥より娘おゑん出來り、）
ゑん　お父さん、私にも五兩お金を下さいましな。
作左　そんなにパッパとやれるものか。
ゑん　それでもお母さんに、お上げぢやありませんか。
作左　お母にやるのは、勤めの禮だ。
かん　エヽモ、娘の前でそんな事を。（トおかん作左衛門を睨める。）まあ、五兩おやんなさいましな。

作左　娘にやるのは入佛事だ。（ト思入あつて、）それはさうと肝腎の、稽古をこれから初めるが、隣近所へさういつたかな。

かん　小助が觸れて歩きました。

作左　親類へもさう言つてやつたか。

ゑん　今朝早くさう申しました。

佐左　それでは殘る所はないか。

かん　まだお寺へ知らせませなんだ。

作左　それが一番先だのに。

ゑん　何時といつてやりませう。

作左　八つと思ふが、一時位は必らず遲くなるだらう。

かん　七つに出ますと言ひませうか。

作左　エヽ葬式ではあるまいし。

ゑん　それでも奥におこわが出來て。

作左　まだそんな事を言ふか。（ト耳を塞ぐを道具替りの知せ。）アヽ、鶴龜々々。

ト聖天、驛路の鈴にて、此の道具廻る。

（座敷の場）――本舞臺一面の平舞臺、上手一間の床の間、下手茶壁、上の方一間折廻し障子屋體、下の方障子の見切り、後へ下げて廊下の片遠見、正面田舍めいた進物のびら、市川難十郎市川不團次といふ席札、掛竿に派手な浴衣をかけ、よき所に女の鏡臺を二つ並べ、鏡をかけあり。すべて蟹屋座敷役者部屋の體。爰に彌次郎兵衞座蒲團の上へ住ひ、白石の書拔を讀んでゐる。眞鍮の獅嚙火鉢の傍に不團次、手拭で目を拭ひゐる。下手に庄屋羽織袴にて手をつき、後に百姓大勢控へゐる。此の見得前の鳴物にて道具留る。と庄屋慇懃に手を仕へ、

庄屋　へイ、私は當村の庄屋中窪助平と申す者、此度は不思議な御縁で、祭禮芝居へ御出勤下され、大慶至極にござります。

ト庄屋辭儀をする。皆々同じく眞似をする。

これまで年々田舍役者で興行を致しますゆゑ、兎角不評判でござりましたが、今年はそれに引代へて、江戸役者のお二人で、ずつと芝居に位がつき、近郷へ對しましても、肩身が廣うござります。一同御禮に出ますのでござりますが、却つてお邪魔と存じまして、組頭のみ連れて參りまし

た、私は庄屋中窪助平。

百一　當村の組頭山桐大助。

二　打栗加太右衛門。

三　笠野六郎兵衛。

四　三條升右衛門。

五　月野武藤太。

六　笹子藤兵衛。

庄屋　一同御禮を、

皆々　申上げます。

彌次　これは〳〵御丁寧に、

喜太　御禮で痛み入りまする。

庄屋　これからあなた方は、龜屋へお出でなされますか。

喜太　四五年後からお旦那に賴まれまして參ります。どうか甲府が始まりましたらお出でなすつて下さいまし。

庄屋　是非見物に上ります、それについて幟でも上げたいと存じてをります。
喜太　それは何より役者の晴れ、何分お頼み申します。
庄屋　今日は當家にてあなた方の、お手見せがございますと承り、樂しみに致して、
皆々　をりまする。
喜太　衣裳鬘を附けぬから、情合は薄うございますが、先づ江戸役者の腕前を、御覧なすつて下さいまし。
庄屋　それは一段な事でございます。（ト懐ろより扇を出し、）明日でよろしうございますが、何ぞお書き下さいまし。
喜太　ハイ／＼、畫賛でも致してあげませう。
庄屋　それは有難うございます。
百一　庄屋様、見物所が混みますから、
二　早く場所へ参りませう。
庄屋　オヽさうぢや／＼。人に場所を取られてはならぬ。左様なれば、親方衆。
喜太　マア、よいではございませぬか。

庄屋 後程お目に、

ト丁寧に辭儀をなし、下手へはひる。彌次郎兵衞は氣の毒なる思入にて、

皆々 かゝりませう。

彌次 コウ喜太公、今度は手前に降參した。こんな取扱ひに逢はうとは、實に俺ア思はなんだ。

喜太 何が幸ひになるものか。昨日柿を盗んで科で、猪目の宿で眉毛を落され、雲助どもに役者と見られ、爰の祭へ雇はれて、着つけもしねえ柔か物を貸してくれてこの持成、恐らく彌次喜太初まつてこんな事はありやしねえ。

彌次 先づ爰までは護摩化したが、これから先の白石噺、セリフ書は貰つたが、いくら讀んでも覺えられず、誠に俺ア胸痞だ。

喜太 ナニ苦にするに及ぶものか。高が甲州の山猿だ。龜屋の芝居を一代に見たか見ねえか知れねえ百姓、押を強くやんなせえ。

彌次 成程手前の言ふ通り、俺達二人を本當の役者と思つてゐるからは、何も知らねえに違えねえ。

喜太 これまで度々失策つたが、今度こそは大出來し、爰が彌次さん、色の仕時だ。

彌次 ほんに昨夜も爰の女が、湯殿で背中を洗ひながら、大層俺に持ちかけたが、大立者が宿屋の下女

をなんしたと言つては不見識だから、我慢をして寢てしまつた。

喜太　おいらも家の娘ッ子が附けつ廻しつするけれど、初日前ゆゑ辛抱して、芝居が濟んだら江戸土產に一緒に連れて逃げる積りだ。

彌次　そりやアお前本當の話か。

喜太　嘘の眞のと昨夜から、見に來る女が皆んな惚れて、實に俺ア殘念だ。

彌次　ナニ殘念だ。

喜太　早く役者になつたらば、東海道や木曾街道で、あんなに恥を掻くまいものを。

彌次　どうか俺も江戸土產に、びつくりするやうなよい女を、色にして歸りたいものだ。

喜太　彌次さん、びつくりするものがあるぜ〳〵。

彌次　どこにある〳〵。

喜太　先刻こつちの家へ來た、チョボを語る旦那の妾、元が踊りの師匠ゆゑ、宮城野を勤めるさうだが、牛四郎丸出しで、なか〳〵江戸にもありやアしねえ。

彌次　そんな事を言つて、擔がうと思つて。

喜太　決して嘘は吐かねえから、ちよつと行つて覗いて見ねえ。

彌次　其奴ア早く見てえものだ。

ト米山甚句の合方になり、下手廊下口よりおゑん先に、おむらを連れて出來り、下手障子をそつと明けて覗く。喜太八これを見て小聲にて、

喜太　彌次さん、今言つた女が覗きに來た。

彌次　ナニ、覗きに來た。（ト振返る途端に、おむらと顏を見合せゾツとして）成程、これはびつくりだ。

トおむら後へ顏を引いて、おゑんと囁きゐる。彌次郎兵衛急に髷を直し、衣紋を繕ひ、厭味の思入にてゐる。

喜太　何とか世辭を言ひなせえ。

彌次　俺ア女に逢ふと口が利けねえ。

ト眞面目に正面を向き、澄して煙草を呑みゐる。下手にて兩人覗きながら、

ゑん　あの目の大きいのが、難十郎でございます。

むら　師匠にどこか似てをりますね。

ゑん　もうちつと此方を向いてくれますと、ようございますね。（ト喜太八小聲にて）

喜太　彌次さん、もつと此方を向きなせえ。

ト彌次郎兵衞恥かしき思入にて、少し下手を向く。おむら見て、

むら　もう少し目が細かつたら、猶ようございませうね。

ト喜太八目を細くしろと彌次郎兵衞を突く。彌次郎兵衞目を細くする。

ゐん　あのまア、色目を遣ふ所がようございますね。

トこれにて彌次郎兵衞色目を遣ふ。

むら　口の中にピカ／＼と、光るものがございますが、あれは何でございませう。

ゐん　何でございましたか、氣が附きませなんだ。

むら　口を明いて見せますと、ようございますね。

ト喜太八彌次郎兵衞を突く。これにて彌次郎兵衞ア、と間拔に口を明く。これを見て、

好い男でございますねえ。

ト笑ひを袖でかくし、彌次郎兵衞を冷かして下手へはひる。

彌次　今よい男だと言つたのは、手前だらうか俺だらうか。

喜太　お前の顏を弄びにして、その擧句に言つたのだから、ありやアお前に違えねえ。

彌次　あのお圍ひを江戸土産に、連れて歸れば鼻が高い。

喜太 屹度出來るに違ひないから、今夜小當りに當つて見ねえ。
彌次 かういふ事がぶら下つては、もうセリフなどは覺えられねえ。
ト書拔を下へ打附ける。右の合方にて下手より前幕の佐平次風呂敷包みな持ち出來り、
佐平 今日は、まだお目にかゝりませぬ。
彌次 オヽ、これは立場の御亭主か。
喜太 昨日はお世話になりました。
佐平 誠に宿内の評判がよろしく、お世話を致した私も鼻が高うございます。
彌次 本當に評判がいゝかね。
佐平 いゝの何のと大評判でございます。昨日お二人の乘込で、宿中の女が夢中になり、今日はお二人のお噂ばかり、今に女客でしやうがございますまい。
喜太 それは何より嬉しいことだ。
佐平 私共の娘なども、夢中になつてをりまする。
彌次 イヤ外の者は兎も角も、お世話になつたお前の娘。
喜太 わしが色にして上げようか。

佐平　それは有難うございますが、まだその先に餘儀ない所から頼まれ口がございますから、それからお願ひ申しませう。

彌次　シテ頼まれ口といはれるのは。

佐平　當宿で五本の指へ折らるゝ内の、後家樣が大熱でござります。

彌次　後家樣は好もしいが、そりやァ幾歳位だえ。

佐平　ハイ、歳は三十六でございます。

喜太　脂の乘つた盛りだが、器量はいゝか惡いかね。

佐平　十人並勝れた方で、少し目尻が下つてをりますが、その代り又よい所が何處にかあるでござりませう。

彌次　何にしろ金持で三十六の後家樣とは、此上もない代物だが、そりやァわしに惚れたのかね。

佐平　イエ、不圓次さんでございます。

彌次　エヽ、それぢやァわしではないか。（ト本意なき思入。喜太八鼻を叩き、）

喜太　彌次さん、どんなものだね。

彌次　今年や南瓜の當り年だ。

喜太　何とでも言つて嫉みなせえ。
佐平　これは粗相でございますが、その後家様から遣はされました。
　　ト風呂敷包みより紙に包みし反物を出し、喜太八の前へ出す。
喜太　これは有難い〳〵。（ト包みを解き、）これは見事な郡内縞。彌次さん、後家様から郡内縞。（ト彌次郎兵衞の鼻の先へ出し見せびらかし、）皆様、後家様から郡内縞々々々。（ト見物へ見せる。）何にしろ後家様の顔を早く見たいものだ。
彌次　コレ〳〵喜太公、背中をひどく打つてくれ。
喜太　何ぞ腦に痞へたのか。
彌次　手前に女が惚れるなどゝは、こりやア夢に違えねえから、早く醒めてしまひたいのだ。
喜太　此方は夢でも醒したくない。早く連れて來て下さいまし。
佐平　唯今お連れ申します。
やま　お父さん、お連れ申してもよいかえ。
佐平　オヽよいとも〳〵。（ト下手障子の内にて後家おとら、）
とら　私や恥しいわいな。

喜太　九段目の小波のやうに、恥かしいとは嬉しい〳〵。

彌次　エ、側で見るのも、腹が立つ。（ト彌次郎兵衞立ちかゝるを留めて）

喜太　マアそんな事を言はねえで、顏を見て行つてくんねえ。

彌次　オヽ、顏などは、見たくもねえ。

やま　サア〳〵こちらへお出でなされませ。

ト誂へのなまめきしをかしみの合方になり、下手より前幕のおやま先に、後より後家おとら黑のお高祖頭巾派手な着附、前帶にて俯向き、羞かしき思入にて出來る。

喜太　モシ佐平次さん、今お話しのは、このお方かえ。

佐平　ハイ、左樣でございます。サアずつと此方へお出でなされませ。

とら　お許しなされませ。（ト前へ出る。）

彌次　成程なりの拵へは、年增盛りの後家樣だ。

喜太　彌次さん、氣が惡からうね。

彌次　何だか俺ア上氣せて來た。

佐平　イヤあなたもお上氣せなさいませう。頭巾をお取りなされませ。

とら　頭巾を取るのは羞しいけれど、
　　トおとら頭巾を取る。白髪かづらの婆ゆゑ、喜太八びつくりして、
喜太　ヤ、この婆さんが三十六か。
とら　私や若い時分から逆上性で白髪が多く、年より更けて見えますわいなア。
喜太　イヤ更けようが更けまいが、どけへ出しても六十がらみだ。
とら　アイ私や六十三でござんす。
彌次　それぢやア三十六といつたのは、逆に年を言つたのか。
とら　色戀に年はないから、そんな事を言つておくれでない。（ト厭らしきこなし。）
喜太　十人並に勝れた所か、百人並にも劣つた顏色、こんな婆さんはお斷りだ。
佐平　假令六十でも七十でも、女に惚れられるのは役者の名聞。
やま　そんな愛想盡しをおつしやいますな。
喜太　名聞でも證文でも、こればかりは御免だ。（トおとらムッとなし。）
とら　それぢやアあの不闌次さんは、私を厭だといふのかえ。
佐平　イエナニ、さういふ譯ではござりませぬが。

とら　厭といふならよしませう。あの人ばかり役者ぢやァない。今遣つた郡内縞を取返して下さい。

佐平　そりやァ破談になりますれば、返すに違ひござりませぬ。

喜太　オヽ返すとも〳〵。郡内位にや代へられぬ。（ト反物を佐平次の前へ突返す。）

とら　コレ佐平次さん、私も不團次に返されたこの反物を、此儘家へ持つては歸られない。この反物は改めて、難十郎さんへ上げて下さい。

佐平　ハイ〳〵畏りましてござります。左様なら改めて、難十郎さんへ御進物。

ト彌次郎兵衛の前へ出す。

彌次　思ひがけないこぼれ幸ひ。これは有難うございます。

ト彌次郎兵衛反物を頂く。おとら彌次郎兵衛の側へ來り、

とら　モシ難十郎さん、私の顏を立てゝ下さんせ。

彌次　ナニ顏を立てゝ下さいとは。

とら　不團次に嫌はれたから、お前の色になりたいのだよ。（ト厭らしき思入。）

彌次　やア。（トびつくりする。おとら顏を見て、）

とら　見れば見るほど厭味のない、私やしみ〴〵惚れたわいなア。（ト彌次郎兵衛にしなだれる。）

喜太　さつきから俺を羨み、色がしたいと言つてたから、嘸お前嬉しからう。
彌次　何でこれが嬉しいものだ。俺も眞平お斷りだ。（ト彌次郎兵衞逃げにかゝるを、おとら捉へて、）
とら　そりやつれないぞえ、難十郎さん。
ト おとら出鱈目に淨瑠璃のやうに節をつけて言ふ。
あの不團次に嫌はれて、今又お前に斷られ、此儘爰が歸られませうか。思ひは深い淵川へ、此身を捨てゝ死なねばならぬ。さうなる時は冥土から、ヒウドロ〳〵と化けて出て、お前の命を取らねば置かぬ。それがこはくば今爰で、色よい返事を聞かしてたべ。へどうぢや〳〵と寄り添へば、
ト 淨瑠璃のやうに語りながら、口說の振よろしくあつて、彌次郎兵衞困る思入にて、
彌次　コレ〳〵佐平次さん、どうかして下さい〳〵。
とら　これほど私が思ふのに、お前は矢張り、
彌次　誰がお前を好くものか。
とら　假令好かうが好くまいが、もうかうなつては離れぬ〳〵。
ト 彌次郎兵衞に縋り附くを、佐平次引放し、

佐平　モシ〳〵後家御樣、木折で行かぬが戀の道、まあ〳〵お靜かになされませ。

とら　イヤ〳〵靜かにせぬ〳〵。一人ならず二人にまで、嫌はれては顏が立たぬ

佐平　イエお顏の立つやうに致しますから、お座敷へお出でなされませ。

とら　イヤ〳〵、行くことは厭ぢや〳〵。

佐平　そんな事をおつしやらずと、まあお出でなされませ。

ト右の合方にて、佐平次おとらを引張つて下手へはひる。

彌次　今の婆さんは醉つてゐるのか、年にも耻ぢず色深く、ありやァ本氣の沙汰ぢやァあるめえ。

やま　あのお婆さんは猿橋で、誰知らないものもない、色氣違ひでございます。

彌次　お前の父も道化師だ。

喜太　飛んだ者を、連れて來たな。

ト合方にて奥より作左衞門先に、おかん風呂敷包みをかゝへ出來り、

作左　やう〳〵連中が揃ひましたから、先づ白石の二階の場から、下稽古を始めますから、廣間へお出で下さいまし。

彌次　役割はきまりましたか。

作左 ハイ、きまりましてござります、

ト懐ろから役人觸れを出し、

大略記してありますから、これを讀んで見て下さい。

ト彌次郎兵衛受取り開き見て、

彌次 それぢやアいよ／＼宮城野は、わしに少し北山時雨の、おかこさんでございますか。

喜太 其奴ア何よりおのぶが德だ。「兄弟手に手を取りかはし」といふ淨瑠璃の文句に合せ、あのおかこさんの細い手を、握るといふは役德だ。

かん そりやあ役德でもございませうが、旦那が大の燒餅燒、直に腹を立たれますから、あつさりとして下さりませ。

喜太 燒餅燒とは面白い。氣を揉ましてやりませう。

かん そんな事をなすつちやアいけませんよ。

作左 今度の芝居の一の金主、どうぞ腹を立てないやうに。

喜太 さういふ事なら、承知しました。

作左 扨不團次さんへお賴みは、下稽古とは言ひながら、江戸の役者を見たい／＼と、近在こぞつて來

ましたが、どうか女の着物を着て情合のうつるやうに、おのぶをやつて下さいまし。
喜太　そりやァ雑作もないことだが、振袖がありますか。
かん　今夜の所の間に合せに、内の娘が小さい時染めてやつた裾模様、少し小振りでございませうが、これを着て下さいまし。（ト風呂敷包より小さな田舎染の振袖を出す。）
喜太　娘ッ子の着物なら小振りでも我慢をしませう。しかし振袖ばかり着ても、島田の鬘がなくつては、おのぶらしく見えますまい。
作左　鬘は明日參りますが、今夜の所の間に合せに、
かん　それも私の思ひ附で、急拵へのこの鬘。
ト黒木綿の手拭へ同じく黒木綿で拵へた島田の縫付けてあるを出し、
ちよつと冠つて御覽じませ。（ト喜太八天窓へ冠つて見て、）
作左　こりやァよく似合ひました。
喜太　難公、どうだえ。
彌次　太神樂のおかめだ。
喜太　何でもいゝ。やッつけよう。　ト着物を脱ぎ繻絆一つになる。）ハックショ。

かん風邪をお引きなさいますな。

喜太 こりやァ女が、ハクシヨ。（ト又嚔をするを、道具替りの知せ。）噂をするのだ。

トシヤギリになり、みな〳〵宜しく此の道具廻る。

（舞臺の場） 本舞臺一面の平舞臺。向ふ床の間違ひ棚、此下大形の襖、上の方高足程の出語り臺萌黄唐草の幕をかけ、下の方同じく淨瑠璃臺。萌黄唐草の幕をかけ、すべて廣間な舞臺と見たる道具よろしく、右のシヤギリにて道具留る。と奥より以前の作左衛門、羽織袴にて出來り眞中へ住ひ、

作左 東西々々、高うはござりまするが、これより口上を申上げます。抑々此度の芝居といふは、山の神の御祭禮と、妙願寺の本堂建立、神佛共に隔てなく、御奉加を願ひます。扨唯今致します下稽古は、江戸役者市川雛十郎市川不團次御目見得と致して、碁太平記白石噺吉原の段を御覽に入れます。（ト懐より役觸れを出し、）役人替名、與茂作娘おのぶ市川不團次、新造宮里立場の娘おやま、同宮繁蟹屋の下女おひら、遣手お政蟹屋の下男小介、傾城宮城野圍ひ者おなら、大黒屋惣六市川雛十郎、淨瑠璃太夫竹本天狗太夫、同じく三味線――、常磐津小文字太夫、ワキ――。三味線常磐津文字兵衛――。いよ〳〵此所白石噺初まり、左樣に御覽下さりませう。

ト作左衛門不器用に拍子木を打ち、双方の唐草の幕を落す。上手淨瑠璃臺に糸田屋勘次郎羽織袴にて住ひ、後竹本連中、同じく袴羽織にて住ひ、下手淨瑠璃臺に常磐津連中住ひ、双方かけ合になる。

竹本 〽入相の鐘さへ早く暮れ果てゝ、廓の內は萬燈會。常 〽歌舞の菩薩の色競べ、分けて全盛宮城野が、部屋は上品奥二階。竹 〽簞笥長持鏡臺の、塵取までも綾錦袱紗なりける有様なり、

常 〽逢ふは別れとかねては知れど、今朝のきぬ〴〵いつより辛や、

ト奥より以前のおむら、派手な小袖を上へ羽おり、書拔を持ち、宮城野の思入にて出來り、

むら　ほんに浮世とはよう言うた。變つたものではあるわいなア。

ト此內出語り臺の上で、勘次郎おむらに見惚れてゐて、

勘次　ヨウ〳〵、こちの〳〵。

むら　モシ旦那、宮城野一人でする所は、私が知つてをりますから、おのぶの出からやつて下さいましな。

勘次　オヽ承知だ〳〵。(ト勘次郎獨りにて、)

〽新造二人が伴ひに、いやがるものを無理無體、突出されたる田舍の娘、あたりきよろ〳〵ついに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興ざめ顔に、

ト此內勘次郎の淨瑠璃ところ〴〵謠の節になり、三味線彈き困る思入。よき程に下手より喜太八黑木

綿の蹇、行丈短き田舍染の振袖、不器用なる拵へにて、おやまの下女○に引張られ出來り、喜太八キヨロ〳〵と突立つてゐるゆゑ、おむら見かねて、

むら　サアお前のセリフだよ。

喜太　何といふのだね。

むら　出たばかりで、セリフが言へないのかえ。

喜太　ちよつと胴忘れをしてしまつた。（ト作左衞門側へ來て、）

作左　コレ、お前がうまくやつてくれぬと、雇主の作左衞門、俺が村中へ言譯がない。よく考へて見さつしやい。

喜太　いくら考へても、ちつとも出ない。

作左　手水場へでもはひつてはどうだ。

喜太　穢い事を言ひなさんな。（ト奥より彌次郎兵衞書拔を持ち出來り、）

彌次　喜太公、セリフをつけてやらうか。

喜太　そりやア何より有難い。

彌次　爰が稽古だ。もう一遍謠から。イヤ出の義太夫からやつておくんなさい。

勘次　オット承知だ〳〵。〽あたりきよろ〳〵ついに見ぬ、錦の小より三つ蒲團、興ざめ顏に、

ト喜太八不器用な思入する。彌次郎兵衛後ろから書拔を持ちセリフをつける。

喜太　オヤ〳〵〳〵、オヤ〳〵〳〵、オヤ〳〵〳〵。

むら　後を早くおつけなさい。（ト彌次郎兵衛附ける思入。）

喜太　女郎サア、女郎サア達、人が寢そべつてゐる所を、用さアあるに來きよらいと。

彌次　來きよらいではない。來とらへだよ。

喜太　來らへだよ。

彌次　エヽ不器用な、だよは入らねえ。

喜太　だよは入らねえ。

彌次　何をいふのだ（ト彌次郎兵衛喜太八を抓る。）

喜太　アイタヽヽヽ。彌次さん、何故抓るのだ。

彌次　あんまり覺えが惡過ぎるもの。

喜太　急稽古だから、仕方がねえ。

彌次　こんな事をしてゐたら、何時までかゝるか知れはせぬ。もつと先へ飛んだらよからう。

喜太　オット合點。（ト尻をクルリと捲り前へ飛出す。）
むら　お前が飛ぶのではありませんよ。（ト作左衞門呆れし思入にて。）
作左　これ程覺えぬ位なら、もつと稽古をした上で人に見せたらよかつたに。近郷の衆へ外聞が惡い。
勘次　所詮これではいかないから、こりやかうしたらどうだらう。
喜太　そりやアようござりませう。
彌次　まだ何とも言ひなさりやアしないよ。
喜太　イヤ、出過ぎた奴だな。
むら　さうして旦那、どうなさいますのだ。
勘次　セリフはチョボで言ふとして、首振りにしたがよからう。
喜太　それなれば大丈夫、首を振るのは大得意。（ト喜太八張子の虎のやうな首を振り。）これが張子の虎の首の振りやうだ。
彌次　餘計な事をせずともいゝよ。
むら　肝腎の白石が、何處かへ行つてしまひました。
彌次　サア／＼、首振りでやつたり／＼。

トこれより竹本にて、

竹〽オヤ〳〵女郎サア達、人が寢そべつてゐる所を、用サアある來とらへと、二階サアぶち上げて、こりやまあ何たる所だ、どこもかも光り申して、お洒落の櫛サア見るやうに、塗りこべつた簞笥サア、その上に夜のものも金切つたもしやア。

トこれより勘次郎謠の節にて言ふ。

勘次　蒲團も蘇坊染の色のよさ、うんらア寢まつたらあくとの 胼サア引かゝつてうつ切れべい。おやつかな魂消申す。（トこの內喜太八首を振り、不器用な振よろしくある。）

常〽魂消申すとありければ、二人はをかしさおしかくし、

やま　さうして、お前の國はどこで、どうした事で江戸までお出でか。

下○　譯を話して聞かさんしたら、共々力にならうわいなア。

常〽嬲ると知らず、しく〳〵淚。（ト喜太八足を投出し子供の泣くやうに泣く。）

〽オヽ優しなお詞お言やり申す、私ら國サ奧州、父や母まに樣子あつて、別れ申してお江戸サアは、あら〳〵盛所だアと聞き、その上姉サア此の吉原で名高い女郎サアになつてゐさるとの話、尋ねて來るも海山、物語のある事、赤はらはたれ申さぬ。

ト此内喜太八出鱈目の當振り、

やま　聞けば聞くほど、をかしな話。

下○　そして今の赤はらとは、

〽常 あられもないと若い同士、壁も崩るゝ高笑ひ、知る人ぞ知る宮城野が、

むら　難波の蘆も伊勢の濱荻、所どころで替るものいひ。そのやうに笑はぬもの。

ト勘次郎又手を叩いて。

勘次　ヨウ〳〵こちの〳〵。

むら　今あの子の言うてゞあつた。

勘次　〽だゝアやがアまといふはな、爰でいふ父さん母さん、又赤はらと言うてぢやは、

むら　嘘を吐かぬといふ事ぢやわいな。（ト此内おむらよろしくこなし、）

やま　さつてもがをれ、よう御存じ。

下○　どうしてまあ、そのやうに、

むら　知つたも無理か、うき節に。

〽常 夜每日每に替る枕、心づくしの果は愚か、〽竹 奥のとろくのお客にも、馴れ馴染んだ身の

一德。

ト此內おむらよろしくこなし。勘次郎は淨瑠璃臺の上にて浮かれ、おむらのする通り我が身で眞似なする。彌次郎兵衞はおむらに見惚れて、うろ〳〵と前へ出て來る。作左衞門留めて、

作左　コレ、さうお前の出なさる所か。

彌次　どこだか出所を忘れたから、

作左　モシ太夫さん、もう惣六の出る所かね。

勘次　まだ〳〵餘程間がある。奥へ引込んでゐなけりやいけない。

彌次　それでは顔が見られない。

作左　ハテ、早いから引込みなさい。

ト彌次郎兵衞を無理に奥へ入れようとして突倒す。

彌次　アイタヽヽヽ。

作左　人中へ見つともねえ、何故褌を締めないのだ。

彌次　南無三、忘れた。（ト彌次郎兵衞前を押へて奥へ駈込む。）

むら　狂言半ばへ色々な混返しがはひるので、何を言ふのか忘れてしまつた。

勘次 忘れたら附けてやらう。〽奥のお客が喧しからう、お前方は先へ行きよいやうに言うて下さんせ。
〽早う〳〵といふ下から、遣手の政が例のしやぎり。〽奥のお客のお待兼ね、何話してゐさんすぞいなう。

ト此内若い者紺の手拭を鬘のやうに冠り、一人遣ひの人形振りよろしくあつて、

やま オヽ忙しない、今行くわいな。

下○ そんなら是から私らも。

〽常お客選みの榮耀も言はず、赤はらたれて氣に入つた、日柄頼もと口々に、いうて座敷へ行く振を、見やる宮城野おのぶの傍。

ト此内若い者、おやま、下女○奥へはひる、おむら思入あつて、

むら これそなお子、先刻にから話を聞けば、姉を尋ぬるお人さうなが、奥州はどこの生れ、何といふ所ぢやえ。

喜太 アイ、奥州は仙臺德平の膏藥。

むら 又そんな混返しをお言ひな

〽アイ、奥州は白坂在、逆井村といふ所サ。

むら　その逆井村に、與茂作といふお人があらうがな。
喜太　アイその與茂作は、俺がだゝアぶだぶ〳〵。
むら　そんなに長く言はないで、唯ゝアといふのだのに。
喜太　所が身延街道ゆゑ、法華宗を當込んだのだ。
むら　當込まずにやつておくんなさい。
喜太　アイ、その與茂作は俺がだゞアサ。
むら　そんならわしが　妹ぢやわいなう。
〽逢ひたかつたと諸共に。
モシ旦那、扉表具が飛びましたぜ。
勘次　オヽ　〽扉表具も壺井の守りも、長過ぎるゆゑ喰つてしまひ、
ト節なつけて言ひ、
〽逢ひたかつたと諸共に、〽嬉しなつかし縋り寄り、外に詞はなくばかり、
ト喜太八おむらに縋りつく。勘次郎これを見てびつくりなし、淨瑠璃臺より轉がり落ち、二人の中へ割つてはひり。

勘次　コレ〳〵、おむらにひつ附く事はならぬぞ。
喜太　これがわしの役徳だ。
勘次　何であらうと俺が妾、決して側へは寄せぬぞ〳〵。
むら　それでは旦那、狂言が出來ませぬ。
勘次　狂言が出來ても出來なくても何百兩といふ金を出して、親から貰つたそなた。女ならば知らぬ事男に手などは取らせぬぞ。
作左　そんな事をおつしやつては私が迷惑致します。假令側へ寄つたとて、こりや狂言でござりますから、御不承なすつて下さりませ。
勘次　イヤ〳〵決して不承は出來ませぬ。それが又迷惑なら、こなた宮城野をするがいゝ。
作左　私に出來ます位なら、おむらさんへ宮城野をお頼み申しは致しませぬ。
喜太　いつその事此の狂言は止しにしたらどうだらう。俺も餘程助かるが。
作左　内輪ばかりの事ならば、止しにしてもよいけれど、此近郷からこの如く見物にござつたのに、此儘止めては土地の恥、家名が蟹屋といひますが、横な事はいひませぬ、何でも彼でも白石噺をしなけりや男が立ちませぬ。

むら　それぢやァ私が後ろから、セリフを言つて教へますから、お前宮城野をなさいまし。

作左　もうかうなつたら仕方がない。お前が教へて下さるなら、てんぽの皮にやりませう。

勘次　おぬしが宮城野を教へるなら、俺がおのぶのセリフから科を後ろで教へてやらう。

喜太　此奴ァ型替りで面白いわえ。

ト作左衛門花色の手拭を姉さん冠りに冠り、おむら小袖を脱いで作左衛門へ着せる。作左衛門太夫座へ向ひ。

作左　サア／＼太夫さん、どこからでも言ひ初めて下さい。

〽あやも泣入る稚氣に、長の旅路の憂苦勞。〽常思ひ遣瀬も宮城野に、つゞくは末の、松山を、袖に浪越す涙なり。〽歎きの中にも姉は猶妹が背を撫下ろし、

ト此内おむら作左衛門の後ろより、宮城野の振をさせる。此時奥より作左衛門女房おかん出來り手を叩いて、

かん　ヨウ／＼、こちの／＼、うまいものでござります。

喜太　エヽ女房の目にはよく見える。

むら　オヽそのやうに思ふも尤も、しかしそなたは父母に長う添やつた身の果報、コレこの姉を見やい

なう。

〽常年貢に迫つて父様は水牢、その苦みを救はうばッかりに、コレこの廓へ身を賣つたを、思ひ返せば十二年。（ト作左衛門不器用な女の振り。）

かん　ヨウ〳〵。

トバタ〳〵になり、奥より蟹屋娘おゑん出て、おかんの前へハア、と泣伏す。皆々びつくりして立かゝり、

勘次　コリヤ娘御には、どうしたのだ。

むら　譯も言はずに泣伏して、

作左　何がそなたは、

かん　悲しいのぢや。

ゑん　これが泣かずにゐられませうか。

作左　ナニ、泣かずに、

皆々　ゐられぬとは。

ゑん　今あそこで聞いてゐれば、見物衆が口々に。

〽蟹屋の親仁は魔がさしたか、但しは氣でも違うたか、藥罐頭を振立てゝ、〽常顏に似合はぬ女形、日頃邪險な心ゆゑ、神の祟りに違ひない、〽よい業晒しと言はるゝを、側で聞いてる私が悲しさ、〽どうぞ止めて下さりませ。〽常お慈悲々々とひれ伏せば、

ト おゑんよろしく振りあつておかん腹を立て、

かん　エヽ言ふ人には言はして置きな、憚りながらこちの人のやうに、出來るならやつて見なさい。

作左　こりや見物のいふのも尤も。もうよい加減にして惣六の早く出る所にして下さい。

ゑん　そんなら、止めて下さりますか。

作左　オヽ止めるから、安心しろ。

ゑん　有難うござります。

勘次　魔が離れたら先へ飛んで。(ト勘次喜太八を遣ひながら、)オヽ珍らしき同胞ぢや、オヽおのれやれ、敵討たいで置かうか。

ト喜太八よろしくあつて、此時下手にて、

滋右　柿泥坊、うまいぞ。

喜太　エヽ。(トびつくりする。)

勘次　何をそんなにびつくりするのだ。

喜太　何だか急にぞく〳〵して。（ト喜太八震へ出す。）

〽さうぢや〳〵と妹が帶締直し、我身も共に小褄搔いしよげ身拵へ、立退かんとする所を、

トこれにて竹本連中を消す。

勘次　サア惣六の出だが、どうした〳〵。

喜太　扨は彌次公逃げたか知らぬ。（ト喜太八行かうとするを、）

作左　どつこい此方は逃がさぬぞ。（トバタ〳〵になり奧より彌次郎兵衛に若い者○、△佐平次附いて來り、）

彌次　どうした事か寒氣がして、わしはセリフが言へませぬ。（ト彌次郎兵衛震へゐる。）

喜太　彌次さん、お前も震へてか、俺もゾク〳〵してならぬ。

佐平　今迄何ともなかつたに、

若○　急にガタ〳〵震へ出し、

若△　セリフが少しも言へぬとは、

勘次　卒中病か知らないが、

むら　何だか怪しい二人の役者、

作左　こりやァ喰はせ者ぢやァないか。
彌次　イエ〳〵、喰はせ者ぢやァござりませぬ、市川雛十郎。
喜太　市川不出次といふ中立者でござります。（ト此時下手にて、）
澁右　エヽ嘘を吐け、柿泥坊め。
彌次
喜太　エヽ。（ト震へゐる。）
作左　コレ誰だか知らぬが、泥坊などゝ滅多な事を言はつしやるな。
澁右　イヤ、泥坊といつても大事ない。
　ト下手より、前幕の百姓澁右衛門、髪結政吉の兩人出來る。
彌次　ヤヽあなたは昨日の。
喜太　こいつはたまらぬ。（ト逃げにかゝるを、若い者〇△引捉へ、）
若〇　どつこい逃して、
〇△　なるものか。
かん　誰かと思へば、犬目の親類、
ゐん　澁右衛門さんでござりましたか。

作左　シテ柿泥坊と言はつしやるは。
澁右　昨日わしが所にある、柿を盜んだグレ旅人。こりやァ役者ではありませぬ。
佐平　それでも眉毛を剃つてゐたから。
政吉　それは柿を盜んだ科で、廻り髪結の私が、剃落してやりましたのだ。
佐平　眉毛のないので役者と思ひ、お世話をしたのが面目ない。（ト作左衞門口惜しき思入、）
作左　エヽ思へば〳〵忌々しい。いかに家名が蟹屋とて、挾み取らうと思つた金も、今となつては泡と消えたか。
かん　私も五兩損をしました。
作左　アヽ耳朶も當にはならぬ。
むら　何にしても此衆は、押しの強い人でござりますね。
勘次　いかに山家の者だとて、あんまい莫迦にした仕方。
作左　どうして腹を癒てくれう。
澁右　耳をそいでやんなせえ。
政吉　それより鼻を落すがいゝ。

ト この内彌次郎兵衛、喜太八耳を押へたり、鼻を押へたりして、

彌次 それは堪忍して下さい。役者の眞似をしたのは、この喜太八でござります。

喜太 イエ／＼さうではござりませぬ。此の狂言の筋立は、即ち作者の彌次郎兵衛、私ではござりませぬ。

作左 何と言つても二人は逃がさぬ。坊主にするから覺悟しろ。

彌次 それでは坊主に、

彌次喜太 されるのか。

政吉 昨日からの掛合、わしが剃つてやりませう。

勘次 しんみりとした獨吟といふ所だが、賑かに何ぞやつて下さりませ。

〽常旅の空、憂きを三筋の秋霞、梢の蔦も紅葉して、影も茜の猿橋に、猿が人眞似俳優の、縱さへ知らで横に行く、蟹屋で恥を柿の種、思はぬ風に落葉して、樹々の坊主のなりをかし。

ト此内彌次郎兵衛喜太八逃げようとするを、佐平次若い者○、△、政吉、一寸所作立模樣にて引捕へ此時奥より若者□剃刀を持つて出る、政吉取つて彌次郎兵衛喜太八を坊主にする、兩人天窓を撫で、見て、

彌次　こりやクリ／＼に、

喜太　剃りこくられたか。

ト兩人はアと泣く。バタ／＼になり、奥より以前の後家おとら、坊主天窓になり、

とら　コレ、お前ばかり坊主にはせぬ。私も一緒に剃りました。可愛がつて下さいまし。

ト彌次郎兵衛に縋る。

彌次　エヽ、此上に比丘までに、

喜太　これが二人の、

兩人　本役ぢやなア。

ト時の太鼓バタ／＼になり、下手より代官駒橋倉右衛門、ぶつさき羽織、袴、大小にて、黒四天の捕手四人引連來り、

代官　コリヤ、其方共は何故に、代官所へ屆けもなく、芝居めいた事をなせしぞ、何者が發頭人だ。

ト皆々恐れて下手に控へ、

作左　悪い年の年番に當りまして、私が發起人でござりまする。

代官　掛り合の者共は一人も動かさぬぞ。

皆々　ハア、。（ト平伏する。）
代官　シテ、これなる坊主は、
作左　役者と僞り私共を、欺きましてござりますゆゑ。
勘次　懲らしめのため兩人共、坊主に致して、
皆々　ござりまする。
代官　それは以ての外なるぞ。
皆々　エヽ。（ト皆々氣味惡き思入。）
代官　何故左樣な事あらば、代官所へ訴へて、上の仕置を受けぬのだ。其方共が勝手のまゝに罪を責めて坊主にしては、上を蔑にするも同然。仕置をなすべき奴なれど、格別の慈悲をもつて、女は一同罪を問はぬぞ。
女皆　ハツ。
代官　男は殘らず、坊主になすぞ。
男皆　ハア。（ト驚く。）
むら　左樣なれば、

女皆　私共は。

代官　オヽ、女はいゝ〳〵。

ト優しくいふ、これにておむら初め女形皆々奥へ逃げてはひる。

シテ先刻は、誰が剃つたぞ。

政吉　髪結職に私が、頼まれましてござります。

代官　然らば其方に申附けるぞ。

政吉　畏つてござりまする。

代官　ソレ、片ツ端から剃落せ。

政吉　ハツ。(ト捕手おとらが持つて出た剃刀を取上げ、)

捕手　爰に一挺剃刀のあつたは幸ひ、拙者もとも〳〵。

代官　オヽ其方も助力致せ。

トこれにて勘次郎作左衛門を捕手押へ、兩人立掛りて剃落し、後佐平次若い者〇、△皆坊主になし、

これにて一時の仕置は濟んだ。後日の沙汰を相待ちをれ。

ト早き時の太鼓になり、代官先に捕手附いて下手へはひる。後に皆々天窓を見て、

作左　ア丶いづれも、天窓が丸い〳〵。
勘次　赤もあれば青いもあり、
彌次　剃りも剃つたる坊主の數は、
喜太　お比丘を入れて丁度八人、
とら　玉轉がしには不足だが、
若○　今年も坊主の、
若△　丸々占めに、
彌次　先幸祝うて、
皆々　よい〳〵〳〵〳〵。

竹〽日の丸の御旗に四つの海なびく地球の圖もまるく、今は角張る角な氣も丸い心の附合に玉ころがしのごろ〳〵と、行きつ戻りつ鉢合せ、これも浮立つ春遊び、賑はしかりける。

ト皆々振りあつてよろしく

幕

膝栗毛（終り）

身代音頭の唱歌に諷ふ彼仲光が
古事に趣き似たる義賢が忘れ
紀念の駒王丸打か打たぬか
齋藤秩父互ひに覘ふこゝろの底
的は外さぬ忠義の魂適菅谷が
操の鏡は引き絞りたる月の武藏野

三張弓千種重藤

「二張弓千種重藤」（秩父重保身替り）は、明治十一年十月、作者六十三歳の時、新富座に書きおろされたもので、『延命院』の中幕として上演せられた。團十郎によつて演ぜられた新時代狂言として比較的初期に屬するものであるが、當時とあつてはあまりに特色的であつたが爲に、遂に「活歴」なる新熟語を胚胎せしめたくらゐであつた。此間の消息に就ては「續々歌舞伎年代記」に次の加く詳述せられてゐる。「中幕團十郎の白髪の實盛、服裝は在來りのものならず、立烏帽子水干、袴は大口といふ大造の好みなりき、此ごろ假名讀新聞の假名垣魯文團十郎の芝居を見て、活歴の新語をはじむ。こは活きたる歴史といふを詰めたる意にて、彼が扮する役は何れも其時代の服裝持物などを調べ、これを舞臺へ應用せしかば、さながら活きたる歴史を見るが如く思ふといふ語にて、今猶これを唱導するなり」と。

書きおろしの時の役割は市川團十郎（齋藤別當實盛）、中村宗十郎（秩父庄司重能）、尾上菊之助（秩父一子重保）、岩井小紫（重能妻菅谷）、市川小團次（榛澤藤三成政）、大谷門藏（入間太郎俊兼）等であつた。

挿繪にしたのは、稿下當時の繪番附である。

大正十五年十一月上旬

校　訂　者


秩父旅宿の場

二張弓千種重籐（秩父重保身換り――二幕）

上の巻

齋藤旅館の場
秩父屋敷の場

〔役名〕――齋藤實盛、秩父重能、同重保、榛澤六郎、武藏有國、入間太郎。飯盛山左衞門、關山兵太同弟武平、近習、軍卒、百姓等。〕

（齋藤旅館の場）――本舞臺上の方大きなる冠木門の出這入り、左右屋根附き、白壁の塀、門の脇に竹の埒を結び、青竹の先に齋藤別當實盛泊りといふ建札、上下樹木の張物にて見切り、後ろ淺黄幕、見越しの松、日覆より同じく釣枝、總て秩父ごほり庄門の體、こゝに軍卒一、二、三、四、五の五人酒を飲んでゐる。百姓〇□二人酌をしてゐる體にて、馬士唄へ時の太鼓を冠せ幕明く。

百〇　誠に何もございませぬので、お氣の毒樣でございます。

同□　こゝらは海が遠いゆゑ、魚と云つては鰻ばかり。

〇　その代り御酒は、鏡が拔いてございますから、

□　何本でも遠慮なく、たんと上つて下さりませ。

軍一　いや、わしらは皆酒好きゆゑ、酒さへあればなにも入らぬ。
二　定めてこれは地酒だらうが、灘にも勝る呑口。
三　六波羅を出たその日から、東海道の道中筋、
四　島田の宿がよかつたばかり、跡はのこらず水ッぽく、
五　旨味もなけりやあ匂ひもない、飲んでも醉はぬ手造り酒。
六　それゆゑ旅は下りだが、酒は天窓へ上るばかり。
一　こんないゝのは、
六人　初めて飲んだ。
○　さうおつしやつて下されば、何より有難うございますが、實は主人が酒好きゆゑ。
□　池田伊丹の酒とうじを、毎年雇つて造らせておきますから、地酒のやうではございません。
二　それぢやァ旨く、
六人　飲めるはずだ。然しこんな門中でお氣の毒でございますが。
同□　三百人からの御同勢故、なか〳〵内へは納まりませぬ。
二三　酒を飲むにやあ内より外が、却つて氣散じた。

四　こゝへ野宿はどつとしないが、晩にはどこへ寝かすつもりだ。

○　晩には在の百姓家へ、

□　おとまりでござりませう。

五　どうかおいら達六人は、お前方のはたらきで、

六　いゝ娘のある百姓家へ、割付けて貰ひたい。

○□　畏りましてござりまする。（ト此の内皆々酒を飲みゐる。）

○　ときに、最前から皆様へお聞申さうと存じましたが、今度齋藤別當様が、

□　多くの人數をおつれなされ、當地へお出でなされましたは、どういふ譯でござりますな。

一　委しい事は存ぜぬが、今度齋藤別當様が、此の秩父へござつたは。

二　外でもない當地の領主、秩父の庄司重能殿へ、何か仔細の筋があつて、

三　三百人の同勢で、はる〴〵遠い都から、

四　この秩父までござつたは、六波羅からの嚴命で、

五　なか〳〵容易なわけでなく、庄司殿の挨拶次第で、

六　ことによつたら一戰に、及ぶも知れぬといふ事だ。

○　いやな話でございますが、ほんまの事でございまするか、どうか、
□　戰にならぬ樣に、いたしたいものでございます。
三　イヤ氣遣ひするには及ばない、難波瀬の尾などゝいふ、
四　氣早な人では劍難だが、齋藤樣は勘辨強く、
五　諸人の難儀を思召せば、容易に戰はさつしやらぬ。
六　とはいふものゝ武士の意地、どういふ事の間違ひから、
四　戰になるまい、
四人　ものでもない。
百○　さう承はつては劍難至極、
□　夜もうつかり寢られませぬ。
三　ときに、うか／＼飲んでゐたが、
四　もう日暮れに近いから、
五　こゝらでさらりと切上げて、
六　晩の泊りでゆつくりやらう。

○△　まあ、よろしいではございませんか。

三　いや、あんまり長くやつて居て、

四　頭に小言を聞かぬうち、

兩人　左樣なれば、皆樣方、

三　泊りへ案内、

四人　して下され。

ト右の鳴物にて、四人上手へはひる。あと小鼓の合方になり、花道より武藏左衛門有國、あとより鮫ケ井兵太出來り、花道にて、

有國　此度六波羅より淸盛公の上意をうけ、齋藤別當實盛には、秩父の庄司重能に詮議なすべき事あつて、多人數率ゐて下られし、旅宿は莊官方なるか。

兵太　此の近邊には然るべき寺院もなければ、豪家と聞えある莊官飯盛山左衛門が宅を、旅館になされしよし。

有國　齋藤秩父それがしなど、同じ齋藤の住人なれば、近鄕に住む誼を以て、長途の勞れを慰むる體にもてなし齋藤が、心の底を窺はん。

兵太　幸ひ旅館の飯盛方に、拙者弟奉公いたせば、萬事を探るによき手蔓。

有國　汝の弟が奉公なすは、此の計略に最屈竟。

兵太　左樣なれば拙者めが。

有國　おゝ、案内せよ。

ト右の鳴物になり、舞臺へ來る。此の時門の内より小者武平、袴一本差しにて出來り、

武平　おゝ、それにござるは兄者人か。

兵太　おゝ、さういふそちは弟武平、逢ひたく思ひをつた所ぢや。

武平　なんぞ御用でござりますか。

兵太　そちに賴む用事がある。

有國　すりや、あの者が弟なるか。

兵太　はッ左樣にござります。こりや武平武藏樣ぢや、お目見得いたせ。(トこれにて武平平伏して、)

武平　未だお目見得いたしませぬが、武平と申す未熟者、いつぞはお禮を申し上げんと存じまするは、兄兵太一方ならぬお前樣の有難き御惠みを受けます由、緣につながる私まで有難存じまする。

有國　あまた家來のある中に、心利きたるものゆゑに、我が腹心といたしある、實に兵太は二なきもの

ぢや。

兵太 物數ならぬ拙者をば、斯くまでお用ひ下さるは、身に餘りたる儀でござります。

武平 して武藏樣は、いづれへ御旅宿でござります。

兵太 主人は大宮八幡の、別當方へ御着になり、それより此地へ御出張。

武平 これよりいづくに御着にござりますな。つかぬ儀を伺ひまするが、手前が主人を旅宿となされた齋藤實盛さまは、ちよつとお見受け申しますと、御老人の樣でござりますが、餘程のお年でござりまするか。

有國 いや實盛どのは御年より、至つて白髪多きゆゑ、老人とは見ゆれども、未だ四十を越せしばかり所謂男盛りなるわえ。

武平 さやうでござるか。

有國 して齋藤氏には、在宿なるか。

武平 夜前御着なされしより、奥座敷を居間となされ、容易に人を入れざれば委しき事はわかりませぬが、秩父殿のお屋敷へ、明朝お出でなさるよし、承つてござります。

有國 明朝上使に參るとか、秩父が返答次第にて、此の有國が案謀の成就いたすは近き内。(ト思入あつ

て」これといふのも兵太が手柄、六年以前義朝が弟帶刀先生義賢が滅亡なせしその砌、まだ三歳なる駒王丸乳母が預かり落ちのびて、秩父の庄司重能へ匿ひくれと頼みしところ、源氏に恩ある重能なれば、我子となして匿ひしを、誰知るものもあらざりしが、此程大宮へ駒王丸が武運長久乳母が祈るを兵太が聞き込み、我へ注進なせしゆゑ、竊に秩父が屋敷へ立越え、二人の忰があるを見屆け、都へ登り清盛公へ蛇足を添へて訴へたれば、打ち捨て置かれぬ一大事と、直ぐに齋藤別當へ詮議の嚴命下りたり、何故あつてそれがしへ詮議の仰せ下されぬかと、心得難く存ぜしに重盛公の内意の由、さなくば身共が勤むるを、他へ取られしは殘念至極。

兵太　さぞ御殘念にござりませう、元此の事を六波羅へ御注進なされしは、日頃の領分境にて爭論絶えぬ秩父の庄司、罪に落して彼が領地を、奪ひ取らんず御計策。

有國　猶又こゝに幸ひは上使に立ちし齋藤は、元は源氏の侍に同じ武藏の住人ゆゑ、もし重能と言ひ合せ、清盛公へ僞首を持參なさんも計られず、さる企みをなすに於ては重能ばかりか實盛まで罪に落して、領地を上より賜はる時は、則ち武藏一國の領主、我が青雲はこの掌にあり、左樣な取沙汰承れば早速我へ注進いたせ、褒美は望みに任するぞ。

兵太　委細承つてござります、其儀は我より當家の家來、武平が詮議をいたしなば、必ず密事をさぐ

り得ませう。

武平　かねて兄より伺ひをれば、もし秩父の使者でも來らば篤と仔細を承つて、早速お知らせ申しませう。

有國　汝等二人は有國が兩の腕とも思ふ故、我に力を添へてくりやれ。

兵太　事成就いたしなば、

武平　我々共も出世ゆゑ、

兩人　力をつくすでござりませう。

有國　我はこれより奥へ通り、長途の勞れを慰むる體にもてなし實盛の、虚實をとくと探り見ん。

兵太　然らば弟。

武平　御案内いたしませう。

トこの時飯盛山左衞門窺ひ居る。有國顏見合せぎつくりして、

有國　どりや齋藤に、（ト立上るを道具替りの知せ、）面會せうか。

ト思入、兵太武平囁き合ふ、この見得、唄にて道具まはる。

（飯盛屋敷の場）——本舞臺一面の平舞臺正面銀襖、上下杉戸の出這入り、一面に薄べりを敷き詰め總て飯盛屋敷の體、合方にて道具留る。と床の淨瑠璃になり。

〽名にしおふ月の武藏の果までも、武威は輝く平家の勢ひ、六波羅よりの嚴命に東へ下る齋藤が、旅館は土地に名も古く人も豪家と飯盛が、美をつくしたる奥座敷、しはぶきなして一間より立出る齋藤別當に、あるじは敬ひ手をつかへ。

トこの内奥より齋藤實盛、直垂一本差後より侍二人附添ひ出で上手へ住ふ、跡より飯盛山左衛門附いて出で、下手へ控へる。

實盛　六波羅よりの上意によつて、多人數引連れ下りし處、此の近傍に大寺なく、ほとんど旅館にさし支へ、餘儀なく當家へ賴みしに、昨夕より手厚きもてなし、主人の厚意謝し申すぞ。

山左　かく手狹き私方へお宿仰せ附け下され、後來までの家の面目、有難き事にござります。

實盛　我も當國豐島に住せば、かねて秩父の豪家なりと聞きしにまさる家の結構、作事の模樣、器物の好み、自づと知らるゝ主人の風韻、奥床しく存じ申すぞ。

山左　その仰せでは恐入ります、なか／＼以て邊土の住居、たゞ農事にのみ心を委ね、物の道理も辨へませねば、定めて萬事齟齬するのみ、お恥しう存じまする。

實盛　いや自然に備はる心の機轉、殊更以て農事にのみ心を委ねらるゝとは、其身ばかりか御國の爲め誠に以て感心いたす、多くは兎角驕奢に耽け、農事を忘るゝ者多きに、さすがは舊家の山左衞門人はかくこそありたきものぢや。

山左　返すぐ〳〵も過分の仰せ、有難うござります。

ト平伏する、實盛侍に向ひ、

實盛　先刻内意を申し付けしに、太郎は未だ歸らぬか。

侍〇　仰せの如く入間どのは、未だ歸宿いたしませぬ。

實盛　いや主人は定めて繁多ならん、構はず私用を辨じてよからう。

山左　いや、別に用事もござりませぬ。

〽折からこなたの一間より、奏者は立出で手をつかへ、

ト花道より奏者の侍出來り、

奏者　武藤左衞門有國樣、御面會いたしたいとあつて、御入來にござります。

實盛　何用なるか存ぜねど、入來とあらば面會せん。これへと申せ。

奏者　はツ。（ト引返してはひる。）

實盛　日頃疎遠の有國が、何用あつて參りしかっ　はて、心得ぬ。

山左　武藏樣がお出でとあれば、拙者は御免を蒙ります。

〽禮儀も厚く飯盛は、心殘して立つて行く。（ト一禮して下手へはひる。）

〽程なく入來る武藏左衞門有國、それと見るより目禮なし、

ト花道より有國、兵太、武平附き添ひ、出來り花道にて、

有國　齋藤氏には都より遙々遠き武藏まで、上使の御役目御苦勞千萬。

實盛　珍らしや有國殿、拙者は都在番に久々貴殿に御意得申さぬ、よくこそ御入來下された。まづ〳〵これまでお通り下され。

有國　お許し下され。

〽然らば御免と有國は、席を隔てゝ座を占むれば、

ト有國舞臺へ來て、下手へ住ふ、兵太、武平はずつと末座に控へる。

實盛　いや、それでは餘りはし近、これへ〳〵。

有國　いや和殿は上使の御役なれば、上座は失禮。狹くお尋ね申すべしと存じながらの延引、まづ和殿も堅固にて、拙者に於ても祝着いたす。

實盛　同國に住む誼とて、態々お尋ね御芳志の段忝う存ずる。

有國　此の度貴殿上使の御役、世上にては種々の取沙汰、誠はいかなる儀でござるな。

〽空々しくも問ひかくれば、齋藤心にうなづいて、

實盛　和殿御存じござらぬか。（ト有國の顔をじつと見る。有國思入あつて、）

有國　いや、一向に存じ申さぬ。

實盛　御存じなくばお話し申さん。六條判官爲義の二男帶刀先生義賢の遺子駒王丸、秩父の庄司重能が六年此の方かくまひしと、誰知るものもあらざりしに、何者なるか聞出し、清盛公へ進達せしゆゑ篤と詮議をなせし上、源家の胤は根を絶つて葉を枯らせよとの即ち嚴命、身不肖なるそれがし、小松殿より御内意を蒙り、罷り下つて候なり。

有國　すりや小松殿の上意により、駒王が首討たるゝか。

實盛　いかにも、重能がかくまひしに相違なくば。

有國　それは近頃御苦勞千萬、して駒王が面をば、和殿は知つてござるかな。

實盛　あいや、かつて存じ申さぬ。

有國　すりや、御存じはござらぬか。

兵太　差出ながら御上使が駒王丸の面をば御存じないその時は、それと悟つて秩父殿、若し僞首を渡されなば、貴殿はいかゞなされます。

有國　何樣そちが申す如く、左ある時には殿の越度、拙者面を存じてをれば、檢分いたして進ぜ申さう。

實盛　お心添は忝いが、假令面は見知らずとも、その場の機會でそれがし、駒王丸の眞僞は見分ける。なあに、眼のみ當にはいたし申さぬ。

有國　でもござらうが智者の一失、見落しなきとも申されぬ、隣鄉のよしみ有國が檢分いたすも和殿のお爲。

實盛　面を存ぜずこの役目、勤め得ざるものなれば、身共へ仰せこれあるまじ、決して檢分御賴み申さぬ。

有國　お賴みなくばそれがしとて、强ひてとは申しませぬ。源家へ心を寄する重能、いかなる企みをなさんも知れぬ。もし僞首でも渡す時に、和殿が面を存ぜずして受取られたら後日の瑕瑾、そこを存じて申したのだ。

實盛　御親切なるその一言、忝うはござれども、上意を蒙る上からは餘人に檢分いたされては後日の表が立ち申さぬ。もし騙られなば實盛が腹切るまで、必ず御配慮下さるな。

有國　切腹召さるお覺悟なら、最早身共は何も申さぬ。いや生得御身は片意地ゆゑ、さもあらんとは存ぜしが、隣鄕のよしみ御助力なさんと參りし有國、お用ひなければ是非がござらぬ。

兵太　詞をつくしおつしやるだけ、あなたの御損でござります。

〽いへど實盛默然と、答へなければ有國が、歸るよすがと打ちうなづき、

有國　益なきことにて御休息の、妨げいたし申してござる。

兵太　最早夕陽、片時も早く、

有國　いかさま、歸宿いたすであらう。

實盛　有國殿、御歸宿かな。

有國　首尾よく御役目お勤めなされい。

實盛　左樣なれば、有國殿、

有國　お暇いたす。

〽胸に一物有國が、詞のこして立歸る。

ト有國、兵太、武平案內してはひる。

〽跡見送りて實盛は、

實盛　有國が助役の所望、駒王殿の眞僞より、はかり難きは彼が胸中、ふむ。

へ思案を廻らす折からに、入間太郎は立歸り、

トよろしく思入、花道より入間太郎、郎黨の拵らへにて出來り、直に舞臺へ來て、

太郎　只今歸宿いたしてござります。

實盛　密使の役目大儀であるぞ。

太郎　仰せの趣き豫め、探り得ましてござります。

實盛　こりや其方共は次へ立て。

侍　はッ。

へはッとばかりに兩人の、立入る奥を見廻して、

ト二人は一禮して下手の杉戸の口へはひる。兩人上下を見廻し、合方になり、

太郎　傳手を求めて秩父が屋敷の横見軍八と申す者より、委しく探りましたるところ、太郎と申す秩父が實子と年齢同じ弟ありて、その名を次郎と申す由、察する所弟こそ駒王殿に相違なきかと、推察いたしてござります。

實盛　おゝよくぞなしたり、旣に今度の此の役目、經遠、兼康、有國なんど、平家恩顧の侍に仰せある

べき所をば、内府公より仰せ蒙りし此の實盛、若し身替りにて討られなば、數多勇士のもの笑ひ。

太郎　舊恩により秩父殿も匿はれしと存じまするが、かく御詮議のある上は、是非に及ばず駒王殿の、御首を討たねばなりますまい。

實盛　いかにも、上意をもどくに於ては、引率なせし三百の人數を以て重能諸共討取る手立。

太郎　家名を捨てゝもかくまふ程の、よもや所存はござりますまい。

實盛　首尾よく勤め果するか、又は勤め果せぬかは、たゞ重能が胸一つ。

太郎　其の御上使も早や明日、

實盛　事破るゝか、

太郎　をさまるか。

實盛　あすが治亂の、(トうなづき、)境ぢやなあ。

〽心は深き大海の底意しれざる。

ト實盛ちつと思入、此の以前下手より、武平窺ふを太郎はきつと見て、これにて襖をしめる。此の模樣三重にて、よろしく。

幕

下の巻

秩父重能苦衷の場
重能太郎赤心の場
齋藤實盛上使の場

〔役名――六波羅の上使齋藤別當實盛、武藏國の住人武藏左衛門有國、同秩父庄司重能、義賢の遺臣紀の新兵衛入道信治、秩父の家人榛澤藤三成忠、秩父の長男太郎重保、同二男次郎重正實は駒王丸。秩父の妻菅谷、齋藤の家從、秩父の家從、腰元等。〕

（秩父重能苦衷の場）――本舞臺四間常足の二重、向ふ上手床、壁、あと一間銀襖、上下同樣の襖、花道の揚幕杉戸の出入り、舞臺花道共に一面に薄べりを敷詰め、總て秩父庄司重能館の體、二重上手に駒王丸、袴にて机へ向ひ手習をしてゐる。この脇に腰元二人介添をして居る。平舞臺に太郎、袴にて、横見軍八郎黨の拵へ、是れを相手にして太郎は木長刀、軍八は木劍にて試合をしてゐる。此の見得、唄に白囃子を冠せたる鳴物にて幕明く。とちよつと立廻つて、

軍八　參つた〳〵、どうしても私は若樣には叶ひませぬ。

太郎　そりやその方が未熟故、出精いたして太刀打ちすれば、我に勝るは瞬くうち、餘事を捨てゝ稽古

いたせ。

軍八　畏つてござりまする。

腰一　太郎様には御幼少より、お手習ひがお嫌ひで、少しもお稽古遊ばさず、

三　お五つのお祝ひ後から、武藝にお凝り遊ばし、大人も及ばぬ御上達。

二　取分けてお長刀は御功者のお取廻し、軍八殿さへ及ばぬとは、恐れ入つてござりまする。

一　それには引替へ次郎様には、お五ッからお學問がお好きにて、片時も机をお離れなく、

二　御精をお出し遊ばすゆゑ、一家中の若殿ばらも、我を折つて居りますれば、

三　お二方共この様に、文武をお勵み遊ばすとは、末頼もしいことでござりまする。

駒王　人は手習學問を早くせねば文字も覺えず、物の道理も辨へぬと申す事、それで此の様に毎日出精いたすのも、成人の後我名を天下に擧げん爲め。

腰一　僅かお年は十二でも、御學問を遊ばすゆゑ、御發明なその仰せ。

二　それに引きかへ太郎様には、明けても暮れても武藝のお稽古、負けず劣らぬ御出精、

三　やがて御成人遊ばしたら、人に勝れてあつぱれの、御大将におなり遊ばされませう。

太郎　次郎は五つの歳から手習學問する故に、讀書の業は出來ようが、武士の家に生れては學問よりも

武藝が大事、すはや戰といふ時は、初陣なして功名をするが第一身の譽れ。
軍八　その時こそは私も御旗差になりまして、拾ひ首でもいたしませう。
駒王　兄上には武藝で功名すると仰せあれど、一騎打の合戰は言はゞ端武者のいたす業、先づ大將の役目と申すは、天下を治め人をなづけ、慈愛といふこと肝要ゆゑ、學問が專一でござります。
太郎　いや〳〵それは泰平無事のとき、かく亂れたる世の中では、武藝で無くては治まらぬ。
駒王　いや〳〵、それは思召しが違ひます、大將の一言に萬卒靡き隨ふは、武に勝りたる文の德。
太郎　いや〳〵、理非も分らぬ荒夷は、武威でなければ治まらぬ。
駒王　一途に左樣おつしやれど、あなたは文にくらき故。
太郎　なんと。（ト駒王机の上の本を出して見せて、）
駒王　此書物を御覽になれば、文でなければ治まらぬ道理は忽ち分ります。
太郎　學問せねば其の書物、讀むことが出來ぬ代り、天下を治むる此の長刀受けらるゝなら受けて見よ。
ト木長刀を持ち直して、立ちかゝる。
駒王　武道を學ばぬ私故、その長刀は請け兼ねますが、あなたも亦此の書物、お讀みなさることは出來ますまいがな。

太郎　おゝ書物は讀めぬが、武藝にかけては。（ト立掛る。）

腰一　あゝもし、お危うございます。

二三　まあ〳〵、お待ち遊ばしませ。

ト三人よろしく止める。此時奥より紀の新兵衛信治入道、坊主頭半素絹極く老人の拵へにて出來て、押止め、

紀の　又してもお二人には、お爭ひなされまするか、おはしたない事でござりまする。

太郎　いや〳〵、止めるな。

紀の　いえ〳〵、お止め申さねば相成りませぬ。（ト兩人を止め、合方きつぱりとなつて、）今お二方の御爭ひお次に於て伺ひましたが、どちらも一理あるお詞、然し大將にお成り遊ばすには、文武二道を兼ねませねば事の用には立ちませぬ。これからしてはお二人とも文を學び武を習ひ、双方互角にお成りなされ、父上樣のお力におなりなさるが御孝行、此後ともに文武の事で御爭ひは、御無用でござりまするぞ。

太郎　成程御坊の言ふ通り、書物の讀めぬは此の身の恥。

駒王　武士の身で武藝を知らぬも、此の身の恥。

紀の　むゝ、そこへお心が附きましたら、文武二道をお二方とも、これからお學びなさりませ。

駒王　兄上、失禮御免下され。（ト一禮すれば、）

太郎　おゝ自分も詞が過ぎたるぞ。（ト同じく一禮する。）

軍八　拙者は此程御當家へ、召抱へられたる新參者、委しい事は存じませぬが、次郎樣も當家の御實子でござりまするか。

紀の　いかにも太郎樣も次郎樣も、一腹一生の御實子でござる。

軍八　はてな、人の噂に承れば、次郎樣は三ツのお年に何方よりかお連れなされたと申すこと、誠の事ではござりませぬか。

紀の　誰がさやうな噂をいたした、怪しからぬ僞り言。

軍八　はゝア、左樣でござりまするか、承はつたる人の噂、僞り事かは存ぜぬが、一腹一生の御實子とはおつしやれど、お顏が少しも似てゐぬは。

紀の　えゝ。

軍八　どうも合點が參りませぬ。（ト此の時花道の揚幕にて、）

呼ビ　お歸り。（ト呼ぶ。）

太郎　父上のお歸りとな。

紀の　この趣きを、奥方へ。

腰元　畏りました。（ト立たんとする、奥にて、）

奥方　その知らせには及ばぬわいなう。

ト謡への合方にて、秩父の妻菅谷奥より出來る、

紀の　奥方、お聞き遊ばしましたか。

奥方　おゝ先刻からお待ち申せし我夫の御歸館、二人の和子たち、腰元共軍八も次へ立ちや。

皆々　はゝあ。

太郎　左樣なれば、母上樣。

駒王　私共は、

二人　奥の間へ。

ト奥方駒王を眺めて思入あつて、

奥方　あゝ今宵に迫りし御身の大事、いや、奥へ參つておとなしう、物靜かにしませうぞ。

兩人　畏りました。

軍八　いざまづ奧へ、

腰元三人　入らせられませう。

ト唄になり、太郎駒王腰元軍八奧へはひる。

奧方　御坊。

紀の　奧方。（トあたりへ思入あつて、）さぞ御心配にござりませう。

奧方　推察して下さりませ。

紀の　今宵齋藤別當實盛お使として參るとやら、如何なさるゝ御所存なるか、秩父殿の御心中、あなたはお聞きなされましたか。

奧方　さあ先刻も御尋ね申せしが、女童の知つた事ではないと仰せゆゑ、二言とお返し申さねど、案じられてならぬわいの。

紀の　私とてもその通り、お育て申せし若君なれば、心も心なりませぬ。

奧方　御坊の心の切なさも、推量して居りますわいなう。（ト床の淨瑠璃になり、）

〽日かげも西へ入相の、無常を告ぐる鐘の聲、胸にひゞきて重能が思案にくるゝ黄昏時、あとに附添ふ榛澤も、物思ひげに立ち歸る、それと見るより出迎へ。

ト花道にて、秩父の庄司重能ちよつと思入あつて、直に舞臺へ來る。

奥方　我夫には、只今御歸り、

兩人　遊ばしましたか。

重能　今日は住持が在院にて、世事の雜談に、思ひの外の長座をいたした。

榛澤　昨夜よりの御心勞を、存じませねば住持には、御取持の心にて、種々の浮世噺。

奥方　それはさぞ御迷惑を遊ばしたでござりませう。

紀の　まづ、おくろぎなされませい。

〽勞れを問ひつ慰むれば、四邊を窺ひ妻の菅谷聲をひそめて、

ト合方になり、奥方思入あつて、

奥方　今宵いよ／＼實盛殿、當家へ上使に參るとあれど、あなたは如何遊ばす思召しにござりまするな。

紀の　老ぼれたる拙者までが、我殿の御心底、お案じ申してござりまする。

重能　さればなり、故帶刀先生義賢殿の忘れ形見、竊に匿ひ置くと云ふ事、誰れ知るまじと思ひしに、武藏左衛門有國がどうしてそれを知つたるか、六波羅殿へ訴人なし、斯くも露顯の上からは隱すとても隱されず。

奥方　殊には上使を承つたる齋藤別當實盛お使に參る其時は、何とお請けを遊ばしますか。
榛澤　心得の爲め我々へ、
紀の　お明しなされて、
兩人　下さりませ。

〽問ひかけられて心の底意、打明かさんとせし折しも、樣子を窺ふ横見軍八、重能さこそと心にうなづき、

ト此の時下手杉戸の內より、軍八窺ひゐる、重能思入あつて、

重能　昨夜より此の重能、とつおいつ考へしが、これといふべき思案も出でず、上使の齋藤別當六波羅殿の嚴命により、帶刀先生義賢が一子首討つて渡せよと、申し渡せば是非に及ばず、御痛はしけれど駒王丸に、尋常の御生害お勸め申し、御首討つて差し出さずば相成りますまい。
奥方　すりや、若君の。
紀の　御しるしを、
兩人　えゝ。（トびつくりする。）

〽餘りの事に兩人は、呆れて詞なかりしが、榛澤更に小膝を進め、

ト此時軍八は杉戸をしめる。

榛澤　すりや我殿には駒王君の、御首を。

重能　討ち奉る所存ぢやわえ。

ト言ふに奥方詰め寄つて、

奥方　常に似合はぬ其のお詞、あなたばかりか私まで命の親の先生様へ、御恩返しに駒王君を兩人が命に代へましても、お助け申す豫ての覺悟、なぜ太郎をば御身替りに、義理をお立てなされませぬか。

重能　さあ丁度似合ひの年頃故、すはと言ふその時には御身替りと、覺悟は豫てしたれども、上使の役は齋藤別當、智勇勝れし兵なれば、たとひお顏を見知らずとも、何とて僞首受取らん、なまじ身代りの手立を仕損じ、太郎に犬死させせんより、駒王君の御首を討つより外に所存はない。

奥方　お詞もどくは如何なれど、僞りと知らるゝそれまでも、御身替りに忰の太郎を。

重能　いや、太郎は秩父の總領、むざと命は捨てさせられぬ。

奥方　すりや、どうあつても。

重能　くどい事を。あゝ昨夜よりして心勞に餘程氣鬱いたした。どれ、暫時の間まどろまうか。

〽いふは心の裏表、人に知らせじと立上り、

ト重能は下手に目をつけて立上り、

重能　浮世は夢の心地して、過ぎ行く年を數ふれば、

奥方　十年が間御養育、申せし甲斐も情なや、

榛澤　秋の夜長に引きかへて、

紀の　命短き今宵限り。

奥方　あすはお一人。

三人　冥土の旅、

重能　これも宿世の因縁ぢやなあ。

〽深き心の奥の間に、重能夫婦紀新坊、榛澤も附添ひて、共にしをれて入りにける。

ト皆々思入あつて、奥へはひる。

〽樣子窺ふ横見軍八、あたりじろ〳〵見廻して、

ト下手の襖の蔭より、軍八出で來りて、

軍八　さてこそ次郎は推量通り、義賢が忘れ形見の駒王であつたよな、かくと確かに聞きたる上は、齋

藤殿の郎黨たる入間太郎へ此の事を注進なし、過分の褒美に預からん、さうだ〳〵。

〽慾に眼も暗まぎれ、逸足早く急ぎ行く。（ト軍八思入あつて花道へはひる。）

〽紀の新兵衛入道は一と間をそつと立ち出でゝ、今宵限りの駒王丸、御身の上を打案じ、とやせん角と胸せまり、老の淚を押し拭ひ。（ト紀の新坊出來りて、）

紀の 賴み少なき浮世ぢやなあ。（ト合方になり、）秩父の庄司重能は譜代恩顧に非ざれど、誠ある侍、殊には此の義賢の心を存ずる武士なれば、駒王丸が身の行末賴めよとある殿のお詞、今際の御意を默止しかね、老ぼれの身に若君を抱き參らせ圍みを破り、杖を力にやう〳〵と、此武藏まで影添ひて賴み申した重能どの、二男と言ひなし十年もお傍に附き添ひお育て申した甲斐もなく、六波羅の使として齋藤別當實盛が參るに氣折れて重能が、御首討つて渡すとは、日頃に似合はぬ彼が所存。

秩父重保 〽情ない心底や、

若君討たれ給ひなば、皺腹切つて御供と所存は疾くに定むれど、冥土へ參つて先殿のお顏がなんと拜されよう、情ないは秩父どの、賴みの綱も切れ果てしか。

〽思はずはツと聲を上げ、老の恨みぞあはれなる。やゝあつて心を定め、

おゝそれよ、此上は是非に及ばぬ、實盛參らぬそのうちに一まづ此家を立退いて、いづれなりとも御身をかくし、尙御末を計るべし、七十に餘つたる老法師、起居も思ひのまゝならねど、忠義に凝つたる一念に賴みは神明佛陀の加護、少しも早う今宵の內に、さうぢや。

〽忠義一途にかひ〴〵しく、足踏みしめて奧の間へ、かけ行く後に榛澤藤三、それと聞くより押し止め、

ト紀の新坊奧へ行かんとするを、榛澤藤三出で、ちよつと止めて、

榛澤　入道殿、お待ちなされ。

紀の　藤三どのには、何故あつてお止めなさるゝな。

榛澤　駒王君を連れ出し、立退き去らんと言はるゝ故。

紀の　いかにも、御首打つとあるゆゑに駒王君の御供なし、當家を立退く紀の新坊、武士の情は相互ひ知らぬ顏してお通し下され。

榛澤　いゝや通さぬ、駒王丸を連れ出されては我殿の御難儀、藤三こゝにあるからは、通すこと罷りならぬ。

紀の　妨げなさずと通しめされ。

榛澤　いゝや、通さぬ。

紀の　通さぬならば是非に及ばぬ、力づくでも通つて見するぞ。

榛澤　見事御身が、

紀の　おんでもない事。

〽忠義に凝つたる勇士と勇士、やらじ行かんと爭ひたり。

ト紀の新坊奥へ行かうとする、榛澤よろしく止める、此の道具廻る。

(重能居間の場)――本舞臺常足の二重、三方に廻りの板縁つき、向ふ正面四枚の襖出這入り、その上手は張壁、此屋體の上手網代塀の見切り、板縁、下手の突當り褄戸の出入り、屋體の下手は生垣の張物、平舞臺は庭の心にて、小形の石燈籠を置き、立木よろしく、飛石あるべし、總て秩父庄司重能居間の體。壁ぎはに弓三張、靫等よろしく立て掛けてある。此中に重籐の弓一張あり、

〽はや黄昏にほど近く、哀れ身に知る夕まぐれ、燈運ぶ腰元も愁ひに沈み立つて行く、あとに重能太息をつき、

ト腰元共燭燈を持ち出で、上手へ置いてはひる。

重能　榮枯盛衰は世の習ひと言ひながら、源氏の棟梁左馬の頭殿、さしも時めき給ひしが平治の亂に信頼卿にかたらはれ、朝敵の身と相成つて源太の殿もとも〲に誅せられしに力なく、御一族の罪なき公達、草を分つて詮議なし根を絶ち葉を枯らさんと、入道相國の由なき御沙汰、況してや帶刀先生の殿には、其の前既に討たれさせ、朝敵にてもおはさぬに其の御子まで殺さんとは、かたがた以つて道理なし、此の重能は系圖こそ坂東の平氏なれども、源氏に隨從なせし家柄、平治の戰に宣旨を受け、平家の旗下にはつきたれど、忘れがたなく先生の殿のゆかりの落胤を、かくまつて養育いたすは恩に報ゆる武士の義理、天道も照覽あれ、平家に對して不忠にあらず、さりながら、太郎なくんば重能がいかに心を碎くとも、駒王君の御命助くる事はなりがたし、あゝ持つべきものは子供ぢやなあ。

〽我が子のあるを幸と、思へど胸もふさがるゝ襖押し明けしづ〲と、太郎はこなたへ手をつかへ。

ト重能思入よろしく、下手の襖より太郎出來り、

太郎　父上、召しましてござりまするか。

重能　おゝ、いかにも呼んだ、これへ參れ。

太郎　はあ――。

へはツと答へて父の前へ、見上げる顔をぢつと見て、
ト床の合方に笙を冠せ、太郎ずつと前へ出る。

重能　こりや太郎、御事生得武藝を好み、太刀打ち弓矢に心を委ね、學問とてはいたさねば、忠孝と申す事いまだ心得てはをるまいな。

太郎　はい、學問はいたさいでも、君へは忠義、親へは孝行いたす事、よう心得てをりまする。

重能　むゝその忠孝を心得をれば、あつぱれ武士の道は立つが、その忠孝につきこの父が、唯今そちに頼みがあるが、聞いてくれるか。

太郎　聞かいでなんといたしませう。

重能　頼みと言ふは外でもない、其方が命を此父に、くれいと言ふことぢやわい。

太郎　えゝ。（トびつくりする。）

重能　その驚きは尤もなるが、其方が一命擲つて駒王君の御身替りに相立ち、此の重能に忠義を立てさせてくれぬかと、折り入つての父の頼み。

太郎　して駒王君とおつしやりますは。

重能　譯を言はねば不審も道理、今までも深く包みし、そちが弟次郎と申すは我悴に非ず、誠は源氏の御大將帶刀先生義賢ぬしの公達、駒王丸。

太郎　えゝ。

重能　かね〴〵父が物語にて其概略は聞いたであらうが、先生の殿御出生の砌より我父故庄司重隆どの爲義君の仰せを受け御養育申上げ、恐多くもそれがしとは乳兄弟、其後それがし成長なし、大番を勤めし時、言ふに言はれぬ此の身の越度、それがしばかりか其方の母の菅谷まで、二人並べて素首を、既に召されんずる折先生の殿には、忝くも御乳母子の深き由縁を思召し、御身に替へての命乞ひ、危ふきその場を助かつて、所領もその儘安堵なせしは、全く以て先生の殿の御高恩、其殿の御忘れ形身御最期の折からそれがしへお預けあつたが駒王君、世間の聞えを憚つて我が次男と披露なし、十年程の御養育、然るに此度露顯に及び、六波羅殿の嚴しき御沙汰、齋藤別當實盛お使として參りし上は、延引ならぬ御身の上、その命を助けねば先生の殿へそれがしが忠義の苦心も水の泡、其方とても駒王君の御乳母子、父子主從二代の因み、第一にはそれがしが忠義、第二には其方が忠義、その外にはそれがしへの孝行見事盡すか、盡さば其方が剛氣と臆病、是非善悪のわかるゝ境、太郎忠義の爲め孝の爲め、命を捨つるを此場にて、得心いたして

くれいなう。

〽眞を明して身替りの覺悟を賴む重能が、顏つく〴〵と打ながめ、

太郎　はい、忠義が立つて孝行になりまする事ならば、我が命お上げ申しませう。

重能　えゝ、それでは命を捨てお身替りを、其方は承知をいたしてくれるか。

太郎　はい、いかにも承知でござりまする。

重能　我子ながら利發の太郎、駒王君の身替りに、一命捨てゝ重能に、忠義を立てさせくれるとは、世にも稀なる孝子の鑑、

〽ありがたいぞや忝なしと兩手を突いて褒めければ太郎はしとやかに、

太郎　君の爲めには御馬前で、討死なすは勇士の習ひ、

〽學問せねど忠孝は、とうより辨へをりまする。

死ぬるは武士の常ぢやもの、覺悟極めてをりまする。

〽淚一滴こぼさぬ健氣さ、泣かぬ心のいぢらしさ、見る父親はいとゞ猶、さし來る淚のみ込んで、

ト太郎よろしくあつて、重能も愁ひのこなし、

重能 死ぬるは武士の常なりと、覺悟せしとはあつぱれ武士、かゝる心と知らざる故、言ひ諭して聞入れずば、是非に及ばず引つくゝり、今宵齋藤の來りし上。

〽手づめとならば御身替りに、首を討たんと思ひしに、親恥しきそちが覺悟、ほゝ。

〽出かしたり。

はかなく一命捨つるとも源家へ對し一廉の大功、御馬前の討死より遙かに勝つた忠義者ぢやぞ。

〽淚に曇るうるみ聲、太郞は父に打向ひ、

太郞 命を捨つるも君の爲め、心殘りはなけれども、

〽ちひさい時から母さまの、一方ならぬおいつくしみ、成人なすを樂しみに思うてお出でなさるのに。

それに先立ちましたなら、さぞ母樣の、

〽と跡言ひさし、わつとばかりに泣き伏せば、重能も淚をこらへ兼ね、

重能 その歎きは母よりも、父が思ひはいかばかり。

ト壁に立掛けたる重籐の弓を取つて、

これ見よ、此の重籐は忝くも六條爲義君より、それがし元服の砌り賜はりたる御弓、其方が成人いたせし上、瀧口へも出仕なさば改めて相讓り、御弓御殿の弓始めに功名させんと思ひしに、其の樂しみも空賴み、引いて返らぬ梓弓、僅か十二歳ではかなくも、莟の花を散らすとは、胸も張りさく思ひぢやわい。

〽萬夫不當の重能も、親子のきづな恩愛の悲歎の淚はら〳〵はら、落ちて流るゝ荒川の、水も溢るゝばかりなり、太郎は淚押し拭ひ、

太郎 父上、お嘆きなされて下さりまするな、今宵首尾よう駒王丸の御身替りになる時は、假にも源氏の公達に、なつて死にまする身の果報、嬉しい事でござりまする。

重能 あゝ、我ながら不覺の淚、源氏の嫡子、先生殿の御嫡子たるは身の譽れ、健氣なそちの心に恥、もう〳〵泣かぬ泣きはせぬ。さりながら、最期の時も今一時、何ぞ言ひ置く事はなきか。

太郎 何も言ひ置くことなけれど、くれ〴〵も母上の御身の上、私が死んだならさぞお嘆きでござりませう、どうぞ御病氣でも出ぬやうに、お賴み申し上げまする。

〽お賴み申す父上と、手を合すればたまり得ず、菅谷は一間を走り出で、（ト奥より奥方出て）

奥方 斯くまで健氣な覺悟をば、いたしをるとは露知らず、案じてゐたは恥しい、年にませたる太郎の

詞、聞けば聞くほど不便がまし、なんとこらへてをられませう。

〽前後不覺に泣き伏せば、重能も目をしばたゝき、

重能　聞いたとあらば別に言はぬが、健氣な覺悟を褒めてやれ。

奧方　はアい。（ト泣いてゐる。）

重能　かゝる健氣な子を持つたは、果報か因果か、

奧方　子では七度泣くといふ、

重能　その諺も今の身に、

奧方　思ひぞ當る親子三人、

重能　世にもはかなき、

三人　身の上ぢや。

〽なア、親子手に手を取りかはし、今宵を待たぬかげろひの、盛り短かき。

ト奧方太郎の手を取つて泣く、重能も顏を背けて泣く、此の模樣よろしく、三重にて道具まはる。

（齋藤實盛上使の場）――本舞臺一面の平舞臺、向ふ正面九尺の壁、金地彩色の畫襖、諸所に燭臺を立

並べ、同じく金襖、舞臺花道とも一面に薄べりを敷詰め、三重にて此の道具止る。

〽世の中は淵瀬と替る飛鳥川、昨日の春の朝風に白旗さつと靡かせて源氏の梅の花散りて、今を盛りの平家の世、威勢に誇る六波羅の上使迎への廣書院、入來る上使は齋藤別當、出迎ふ秩父の重能が、式臺なして敬へば。

ト これへ中の舞を冠せ、花道より實盛、折烏帽子水干にて出來り、近習附添ひ侍二人附添ひ、これと一緒に奥より重能出來り、舞臺よき所へ住ひ一禮する、實盛は花道に止り、

實盛　六波羅の御諚を蒙り、長井の齋藤別當實盛、御使としてこれまで罷り下りたり。

重能　別當殿には遠路の上使、御苦勞千萬、見苦しくはござれども、お通り下され。

實盛　然らば、お許しめされ。

〽會釋をなしてしづ〳〵と、設けの席へ入り來れば、

ト 實盛ちよつと會釋して、平舞臺上手へ通る。

重能　其方共は次へ立て。

近習　はあ――。（ト下手へはひる。）

重能　貴殿も拙者も所領は同じ武藏なれど、都在所と隔たりて、心ながらも日頃の御疎遠、不本意にご

ざりまする。

〽と一禮なし。

何は兎もあれ六波羅殿の御諚、重能承りたうござりまする。

〽いふに實盛形を改め、

實盛　御諚の趣き重能篤と承はられよ、今を去る事六年以前源氏滅亡の砌り、帶刀先生が一子駒王と申すもの重能方へ匿ひおき、我子なりと披露して養育いたすと申す事、訴人あつて明白なり、義朝朝敵となりて相亡びぬる上からは、その餘類一族たるもの根を絶ち葉を枯らせよとある、入道殿の嚴しき御沙汰、嚴命脫るゝ所なし、疾く〳〵駒王が首討つて渡されよ。實盛御使者承はり、請取りに向うてござる。

〽述ぶれば重能謹んで、

重能　事露顯の上は包むに由なし、窮鳥懐に入る時は獵夫もこれを取らずとかや、況して東西知らざる三歳の兒、殊には帶刀先生義賢朝敵たるに非ざれば、重能介抱いたしてござるが、これとても其の昔好みあつての事ゆゑに敢て二心を懐くにあらず、然し御諚の上は是非に及ばず、駒王丸が首討つて、貴殿へお渡し申すでござらう。（ト實盛こなしあつて、）

實盛　扨は包みかくしても詮なしと相悟る和殿、只今駒王丸の首討つて渡さるゝか。

重能　いかにも、お渡し申すでござらう。

〽詞曇らぬ重能が、答へに實盛威儀を改め。（ト實盛思入あつて、）

實盛　御諚の趣き重能には畏り承はる、お使の實盛滿足いたす、萬一違背に及ばん其時は、重能討てと入道殿のきびしきお詞、左ある時には秩父のみかは武藏一國の騷亂と、都を出し時よりして竊に心を痛めしが、御邊のお答へ承はり、祝着でござる。

重能　武士の誼に匿ひたる駒王丸を討ち奉らんと、決心いたすも國の亂を恐るゝ故。

實盛　御邊にも知らるゝ如く、此の實盛も元は源氏に屬せし侍、平治の合戰治まりて後、今は平家に仕ふれど、御諚のお使辭退に由なく、斯く罷り下つて參りし上は、御邊にも心得て駒王丸の淸き御最期ある樣に、篤とお勸めあつてよからう。

重能　御芳志千萬忝うござる。然らば御最期をお勸め申し、介錯いたす其間、暫時御猶豫下されい。

〽立ち上らんとするところへ、有國一間を立ち出て、

ト兩人よろしく思入、下手より以前の有國出で來り、

有國　重能どの、先刻は失禮至極、御免下され。

重能　先刻お見舞ひ下されしが、未だお歸りなかりしか。

〽次席へ進みて會釋をなせば、重能さあらぬ體をなし。

有國　されば秩父どの、御邊には源氏の舊恩を忘れ難く、十年此方匿ひ置かれし駒王殿、入道殿の嚴命にて首を討たるゝ御心中、いかにも笑止千萬ゆゑ、落許を見屆け歸る所存。

重能　それは千萬忝し、これより篤と駒王殿へ事の仔細を申しのべ、介錯いたす所存でござる。

有國　それは幸ひ好い所へ參り合せた、駒王殿の首をば討たるゝに相違はきつとあるまいが、上使に立たれた實盛殿には駒王殿の面體を御存じなければ、僞首渡されても其の見分けは出來ますまい、同國のよしみ此の有國が目利をいたして進ぜ申さう。

〽言ふに實盛氣色をかへ。

實盛　なに、首級の檢分いたさんと言はるゝか。

有國　いかにも、貴殿が御存じないゆゑ、近郷に住む誼を以て。

實盛　六波羅の御諚といひ、小松どのゝ御内意をうけ、上使に立ちたる實盛が面前をも憚らず、檢分なさんなどゝは武士の作法を知らざる言條、駒王殿の面體を知らざる故に實盛が、御使不安とある程ならば、武藏の左衞門有國をば助役の御沙汰ある筈、その御沙汰をもこれなきに自儘の檢分い

たさんとは、上使へ對して無禮でござる。

〽無禮なるぞと實盛が、憎しと思ふ一言に、二言と返す詞なく、

有國 むゝ所領隣の誼を以て、目利をいたして進ぜるを、無禮とあらば是非に及ばぬ、思ひ止まり歸宅いたさう。

實盛 秩父どのには駒王丸へ、疾く／＼最期を勸められ、早く介錯いたされよ。

重能 委細承知仕る。

〽秩父は上使へ一禮なし、奥の一間に入りにける。跡見送りて有國は、

ト有國思入あつて、

有國 いや、くどいやうだが實盛殿、貴殿はお心正直故、餘人も左樣と思ふでござるが、計りがたきは人心、殊に平家に屬しながら、十年此の方源氏の血統駒王を、我子と披露し囲ひ置く秩父の庄司重能、なか／＼以て油斷がならず、貴殿がお見知りなきをつけこみ、僞首を必ず渡すに違ひなし、よつてそれがしへ檢分仰せ附けられい。推量通り重能が、もしも僞首渡しなば、逐一それを申立て仔細は斯く／＼かやうでござると、六波羅殿へ言上すれば、重能が所領沒收となるは案の定、さうなる時は秩父の一郡御恩賞に申し受け、貴殿と拙者が二つ分け、何とよい手段でござら

うがな。これさ實盛どの、斯ほどまでに事を分けたる談合に、一言半句の返答なきは駒王が首實驗、いよ〳〵身共に賴まぬか、但し檢分お賴みなさるか、如何でござる實盛殿。

〽言へど實盛嘲笑ひ。

實盛　何さま・武藏の左衞門有國と人に知られし智慧者の分別、實盛膽にこたへてござる、はゝゝゝ、それは格別この重能が、十年此方駒王を、匿ひ置くこと更に世間に知れざりしに、六波羅殿へ此の由を、訴人いたせし其の者は、誰でござるな。

有國　さあ、誰でござらかな。

實盛　御邊は元より平家の侍、源氏方の公達たる駒王丸の面體を見知つてゐる筈はなし、察する所其の訴人こそは、武藏の住人。

有國　やあ。

實盛　秩父の庄司重能を罪して、あはよくばこの實盛にも不興を受けさせ、武藏半國我がものになさんと企む一人の曲者。

有國　全く以て。

實盛　重能夫婦が我子と披露し、匿ひ置きしを聞き出せしは、必定御邊であらうがな。

有國　なにしに身共が。

實盛　然らば、如何いたして駒王丸を、御存じなるや。

有國　さ、それは。

實盛　横領なさん心底なるか。

有國　さあ。

實盛　さあ。

二人　さあ〳〵。

實盛　天眼通は得ざれども、重能それがし兩人が、越度を見出し所領を取上げ、横領なさんず御邊が心底、實盛とくより見拔いてござる、何と相違はござるまい。

〽銳き詞の五寸釘、胸に打たれてゐたゝまらず。

有國　左樣な御疑念ござるなら、身共はこれにてお暇申す。虛實知れざる首實檢、高見で見物いたし申さう。

〽口に毒ある有國が、月夜烏の羽を縮め、おのが塒へ歸り行く。

ト有國思入あつて、花道へはひる。

〽あとに殘りて實盛は、奧の樣子を打案じ、重能まこと駒王の御首を打つか、但し又、我兒を討つて故主への、忠義を立てるや、如何ぞと。（ト實盛奧へこなし、）

〽待つ間程なく一間より、重能首桶携へて、靜々と出來り。

ト下手より重能首桶をかゝへ出て來り、

重能　御上使、餘程の間御待兼ねにておはしつらん。

實盛　して、駒王丸の最期、介錯ありしか。（ト重能思入あつて、）

重能　源氏の大將故帶刀先生義賢の嫡子、駒王丸の首級六波羅殿の仰せに任せ、秩父の庄司重能討ち奉つてござる。いざ、御檢分下されい。

實盛　しかと、討たれしか。

重能　いかにも。

〽詞涼しく首桶の、蓋取りのくるこなたには、僞と言はゞ一とうちと息を凝らして窺うたり重能上使の面前へ作法を正して實檢と、首さし出すを、實盛はぢつと見て、

ト文句の通り實檢の事よろしく、この時上手の襖にて、奧方は懷劍新坊は脇差を持ち、下手よりは榛澤提刀にて窺ふことよろしく、實盛思入あつて、

實盛　はて爭はれぬ、面體の斯くまで似つるものなるか。
重能　似しとは誰に。
實盛　帶刀先生義賢ぬしに。
重能　えゝ。
實盛　面を鏡に寫せる如く。
重能　むゝ。
實盛　駒王丸に相違ござらぬ、六波羅殿の御上使長井の齋藤別當實盛、確と實檢いたした。
〽僞を眞と實盛が、實檢したる一言に人々ほつと太息をつき、顏見合はして詞なし。
トみな〳〵ほつと思入、實盛上下を見る、これにて上下の三人襖をたてる。
かくあらんと存ぜしが、計り難きは人心、如何あらんかと案ぜしに、誠に心を休めてござる。
重能　拙者も心を休めてござる。
實盛　駒王丸詮議のお使、難波妹尾を初めとして、平家に名ある譜代の侍承るべき筈なるに、外樣武士の實盛に相勤めよと小松殿の御沙汰、お使相濟む上からは歸洛いたして此旨を、小松殿へ申し上げると致すでござらう。

重能　十年の間駒王丸を、匿ひ置きたる重能が誤り、猶も御沙汰を相待ち申さん。

實盛　あいや、其儀に於ては、御邊の所領安堵の願ひ、實盛身に代へて御執成し致すでござらう。

重能　同國の誼とて、貴殿の御配慮忝う存じ申す。

〽それと言はねど身替りの一禮のぶる詞の端、こなたもそれと心に悟り、

ト双方思入あつて、

實盛　同じ武藏に住しながら都在番に取り紛れ、語らふ暇もなかりしが、承はれば御邊には御子息のおはすよし、當年何歳になられますな。

重能　當年十二歳に相成ります。

實盛　すりや、駒王どのと御子息とは、御同年でござるよな。

重能　いかにも。

實盛　幼稚に稀なる才智の方と、豫て噂に承はれば、御面會は願はれまいか。

〽慈悲心厚き實盛が、詞にいなと言ひ兼ねて、

重能　いかにも、お逢はせ申すでござらう。（ト奥へ向ひ、）誰かある、治郎をこれへ連れい。（ト奥にて）

奥方　はあ――。

〽答につれて奥方が、伴ひ出る駒王丸、紀の新兵衛榛澤も、附添ひ共に立ち出でゝ、

ト奥より奥方駒王丸を連れ、紀の新坊榛澤ついて出來り、

奥方　これは〳〵實盛樣には、遠路の所、

紀の　お使にお下り、

榛澤　御苦勞至極に、

三人　存じまする。

實盛　奥方には先つ頃、お目にかゝりし事ありしが、御子息には今日初めて。

重能　以後はお見知り下されい。

〽過しゆかりの源の其の公達と言はねども、實盛見るより床几を放れ、

實盛　實に栴檀は二葉より芳しく、蛇は寸にして牛を呑むのきざしあり、まだ十二歳の少人なれど、御器量備はる次郎君、末頼もしく存じ奉る。

〽暫し面を見詰めつゝ、昔を忍ぶ落涙に、駒王目早く見咎めて、

駒王　坂東武者で一二といふ、齋藤別當實盛は、鬼よりも強いお方ぢやと聞きつるに、何で落涙なされますな。

〽問はれて實盛涙を拭ひ、

實盛　今實盛が落涙せしは、十年以來ばかりなるも、過ぎ行き給ひし帶刀先生義賢の殿に、斯くまで似させてましますか、過ぎし昔の忍ばれて、思はぬ涙は御免下され。

〽親はなくとも子は育つ、世の諺はかくもがな、よく成人をなされしと、駒王丸の手を取つて涙に誠あらはせり。

實盛　同じ武藏の住人にて源氏に由縁結びし實盛、故先生の殿に面影の似たる、和殿の子息に對面をなし大慶至極にござる。

重能　忝きその仰せ、悦ばしう存じ申す。

實盛　これにつけても奥方には、長々お世話なされし駒王、今宵思はぬ御最期に、身に添ふ玉を失ふ悲しみ、御愁傷の程お察し申す。

奥方　お情厚きそのお詞、そも十二年がその間、お育て申せし駒王君。

紀の　まことに以て奥樣の、その御嘆きの御胸中はいかばかり、

棒澤　これと申すも武藏の左衛門、六波羅殿へ内々訴人いたせしゆゑ。

實盛　いかにも、この事訴人なしたるは、武藏の左衛門有國なれば、向後とても如何なる事を仕出さん

も計りがたし、それにつけてもこれなる御子息、定めて學問武藝をば御修業なされてござあらんが。

重能　生れ立ちより文字を好み、學問は志ざせども、武藝は未だ學びませぬ。

實盛　然らば木曾の山間の、中原權ノ頭兼任に御預けあつて然るべし、かれ兼任は八幡どのよりして、數代の間源氏に深き因みある信濃の大名、殊にこの實盛とは無二の友垣、兵法武藝の業に長け一廉の御後ろ見、それにまた住所は木曾の山中、世を忍ぶには最屈竟、必ず御子息お賴みなされ。

重能　忝きお心入れ、便りを以て早速に、預けまするといたすでござらう。

奥方　そんならこれより、

紀の　駒王君を。

實盛　あいや、其の駒王君は御最期あつて、實盛慥かに御首を受取り申して罷りあるぞ。いやなに、重能どの、御邊いよ〳〵御子息を、兼任へお預けなさると決心あらば、和殿へ進ぜんその爲めに、認め置きたる賴みの一通。（ト懷中より書狀を出し重能に渡す。）

重能　こりや、中原權の頭へ、

實盛　御子息賴む拙者の添狀。

奥方　何から何まで、
紀の　お禮は詞に、
二人　盡されませぬ。(ト實盛座を離れて、駒王に思入あつて、)
實盛　然らば若君、いや、秩父の御子息。
駒王　實盛どの。
重能　御使御苦勞。
實盛　お暇いたす。
〽互ひの心棧橋や、木曾の麻衣あさからぬ心も廣き武藏野に、やがて月日の駒迎へ、都をさして、(ト皆々引ばりよろしく、實盛花道へ行く、段切にて、)

幕外實盛首桶を持ち、思入あつて花道へはひる。跡シヤギリ。

幕

秩父重保身換り(終り)

柱建に飾る梶原の矢筈
三寶に書く小林の舞鶴



清元連中

法虎庵の虎御石
濤龍館の海水浴



長唄囃子連中

所作事『柱建の曾我』と『濤龍館』の淨瑠璃は、明治二十三年三月、作者七十三歳の時、新富座に書きおろされた。古風な曾我の對面と大磯濤龍館に於ける新時代の世話の曾我によそへた對面とを並べたもので、『箱根山曾我初夢』などゝ同形なものである。別に取りたてゝ記すほどの事はないが、大磯が海水浴場として開け始めた事がほのめかされてゐるし、現中村歌右衛門丈の中村福助時代の人氣を想見せしむるものが含まれてゐる。

書きおろしの時の役割は尾上菊五郎(梶原景高、たいこ持櫻川幸三)、中村芝翫(工藤祐經、茅場町の淺床)、市川左團次(朝比奈、請負師須藤一郎)、中村福助(俳優中村福助)、市川小團次(佐賀の弟五郎次)、坂東家橘(佐賀十太郎)、澤村源之助(新橋の藝妓おとら)、中村明石(濤龍館の娘おわか等)であつた。

挿繪にしたのは、稿下當時の繪番附である。

大正十五年十一月上旬

校訂者

所作事

[illegible]

[illegible]対面

清元連中

長唄囃子連中



柱建の曾我と濤龍館（二幕）●

上の巻　一臈職狩場棟上　富士假屋柱建の場

下の巻　名大磯湯場對面　大磯驛濤龍館の場

清元連中

長唄はやし連中

（役名）――工藤左衞門祐經、小林の朝比奈、梶原平次景高、請負師須藤一郎、幇間磯川幸三、村木屋佐賀十太郎、十太郎弟五郎吉、須藤の手代蒲田三郎平、同大木五藤治、漁師の忰岩吉、同浪松、同濱次、同磯松、同島吉、同網藏、理髪師淺床、中村福助、濤龍館の若い者二人。新橋藝者お虎、同小同小鶴、濤龍館の娘お仲、同女中二人等。）

（富士の裾野の場）――本舞臺一面の置舞臺、正面長唄の出囃子の雛段、紅白の段幕を設け、上の方竹矢來、富士の裾野假屋普請小屋場といふ杭、下の方同じく竹矢來、是へ笹龍膽の紋附きし紅白の幕を張り、上下に梅の立木、日覆より同じく釣枝、總て富士の裾野普請場の體よろしく、大拍子にて幕明く。と頭取羽織袴にて出て、名題、長唄、淨瑠璃の連名を讀み、口上あつてはひろ。と知せに附き正

面の段幕を切つて落す。爰に長唄、囃子連中居並び、直に唄になる。

〽泰平の御代は豐に新玉の春を迎ふる日の影も、去年に今年は增鏡、光り長閑に鎌倉の武德輝く時津風。

ト大拍子の入りし賑かなせり上げの鳴物になり、眞中に祐經、羽織着流し大小にて、三ツ扇五色の緒を下げし棟上御幣を持ち、上手に梶原、中肉隈取り羽織丸ぐけ大小にて棟上げの鏑矢を持ち下に居る、下手に朝比奈、猿隈厚綿の羽織、丸ぐけ大小にて棟上の雁股の矢を持ち下に居て此の見得にてせり上がる。

〽賴朝公は治世にも亂を忘れず卷狩の、御催ほしに富士が根へ、建つる假屋の惣奉行、一臈職の祐經と共に景高朝比奈が、天長地久壽ぎて、萬代祝ふ柱建、

ト三人振あつて、跡管絃になり、

祐經　一度西海に浪立つて、天下穩かならざりしも、平家の餘類討亡し、源氏一統の世となりしも、偏に君の御武德。

梶原　由井ケ濱より差昇る朝日の如き御威勢ゆゑ、凡そ日本六十餘州の大小名は、招かずして皆鎌倉へ馳せ集まり。

朝比　谷七郷を切開き、追々繁華な土地となり、下萬民の者共迄、恐れし戰の沙汰も無く、泰平謳ふ腹鼓。

祐經　今年皐月下旬の頃、富士の御狩の御催しに、身不肖ながら祐經が、上意を蒙むる惣奉行。

梶原　地割かた〴〵小林と參り合せし梶原も、けふが最上吉日とて、御領の假屋の柱建。

朝比　好き折柄に兩人とも一臈職と諸共に、番匠替りに矢を携へ、儀式の席へたつか弓。

祐經　最早故實の式終れば、是より先は打ちくつろぎ、假屋へ參つて一獻汲まん。

梶原　いや、それよりはこゝもとにて、誰憚らず大磯の、

朝比　色めく廓の話しでも、致すが何より氣の保養。

祐經　然らば仰せに從はん。

梶原　御得心なら時代を捨て、

朝比　世話に砕けて、

三人　話しませう。

〽規矩準繩の式終り、三つの扇の三人は、打ちくつろいで座を設け、

ト幣束を後見へ渡し、床几へ掛け、大拍子になり、

祐經　承はれば景清殿には、先達より大磯に久しく居續けありし由。
梶原　けぢ〳〵親仁がやかましいから、保養がてら大磯で、十日餘り遊びました。
朝比　源太殿は梅ヶ枝といふ、深い情人があるさうだが、景高殿も大磯に深い色がござらうな。
梶原　所が身共は兄貴と違ひ女の好かぬ無骨者、片時傍を放さぬは酒といふ情人ばかり。
祐經　情人と申せば大磯で、街道一と噂ある、虎が許へ曾我の養子祐成が參るさうぢやな。
朝比　兄ばかりでなく弟の時致も、化粧坂の少將の許へ通ひます。
祐經　彼等兄弟兩人は實父河津の三郎の、我を敵と狙ふ由、それは大きな心得違ひ。
朝比　心得違ひとは。
祐經　朝比奈殿は朋友ゆゑ、よく得心の行くやうに、譯を話して下されい。
朝比　して、其の譯と、
梶原朝比　言はれるは。
祐經　河津を討ちしはそれがしならず、股野の五郎景久なり。
梶原朝比　何と。
祐經　思ひぞ出づる其時は、安元二年神無月、

梶原　〽十日餘りの事なりしが、伊豆と相模の若殿ばら、赤澤山の晴角力、
股野は聞ゆる力强、二十一番勝に乘り、

朝比　廣言吐きしを憎しと、祐康土俵へ飛入つて、

祐經　股野を投げし河津がけ、あつぱれ力者と褒められて、勝ち誇つたる歸り足。
〽秋野のすりし狩衣に梅檀籐の弓携へ、竹笠さつと木がらしに裏を返して吹きそらし、月毛の駒に跨がりて、しん〴〵と歩ませたり。
すは祐康ごさんなれと。
〽椎の木三本小楯にとり、切つて放せばあやまたず、鞍の山形射けづツて、行縢の附際より前へすつぱと射通したり、流石の祐康たまり得ず、馬よりどうと落ちこちの露と消えたる赤澤山。
ト祐經扇を遣ひ、物語模様の振あつて、
河津を討つたは股野の五郎、よく兄弟にお傳へ下され。

朝比　ではござらうが世上の風聞、專ら所領の遺恨によつて。

祐經　其の疑ひを受けたるは、此の祐經が身の不運。（ト梶原景高引き取つて、）

梶原　いや曾我兄弟より景高が、敵を討ちたいことがある。

祐經　なに、景高殿が敵といふは。

梶原　股野が遺恨に思ふも道理、身共もひどく投げられた。

朝比　それは何處の角力にて。

梶原　いや角力ではない大磯の、廓で彼奴に投げられた。

ト梶原羽織を脱ぎ大小を取つて、

朝比　色男の景高殿が、投げられたとはどういふこんだ。

梶原　かういふ譯だ聞いて下せえ、色には結句連は邪魔と、源太もどきでたゞ一人。

〽急げば道も長縄手、嘸やお敵も松風と梢を落す寒さをば、忍ぶ目せきの笠被ぎ、

〽驛路の馬に飛乘つて、平塚の間に大磯へ、きつゝ馴染の舞鶴や、揚がる二階の見通しで、

幇間藝者に取卷かれ、酒よ肴と浮かれ立ち、隱し藝をと望まれまして、

ト梶原宜しく振あつて、桃色の手拭を吉原冠りになし、

〽伊豆と相模はつい其處なれど、逢ふに逢はれぬ波の上、飛んで行きたや浦千鳥、

ト田舍節の振あつて、

〽いざお床へと言ふを汐、新造仲居も引汐に蒲團の縞に唯一人、今か／＼と船底の枕の番に腹が立ち、歸る／＼といふ聲に、

ト梶原振あつて、朝比奈羽織を脫ぎ、大小を取り手拭を冠り女の惡身にて出で、

〽是も勤めと相方が、まあ／＼待つてと止むれば、〽いや／＼歸ると振拂ひ、〽行くをやらじと引止めて、〽止めて留まらぬ色の道、竹に雀や無けれども品能く留つてくんさるなら、有難茄子の初契り、〽そもや初會の其晩から、目引き袖引き朋輩に、なぶられるのが嬉しさに、二夜も三夜も引留めて、磯の波より此里にぱツと浮名の立ちし仲、なんでも今宵は歸さじと、力任せに引留めて、

ト是れ迄朝比奈女のこなしにて、梶原となかしみの振、こゝにて手拭をとり、朝比奈になり、梶原を引倒す、梶原起上り、引止めて見ろといふこなし、

〽引けや引け／＼、引くものはなに／＼、川岸から引出す大八車に、木挽が木を引く路次の鐵棒、磯邊の網引く、〽おツとまだある、藝者が三味ひく、猫がちよつかいで肴引く、まだも祭りの手古舞が、〽ヨイサ／＼、〽ヨイ、コレハノサ、〽ヨイサ、〽ヨイコレハノサ、〽ヨイヤナ、花車を引く、〽やう／＼留つて床へ入り、仲直りすりや明烏、阿呆らしいぢやな

いかいな。

ト梶原、朝比奈草摺引の模樣、をかしみの振よろしくあつて納まる。

〽浮かれ興じていつしかに富士に輝く夕日影、田子の浦邊にたなびきし、霞と共に連立ちて、假屋へこそは入りにけり。

ト此内祐經出て振、朝比奈は羽織を着、大小を差し、三人振あつて大拍子になり、祐經先に、梶原朝比奈上手へはひる、後ろ雛段へ段幕を掛けて跡へ引込み、道具居所替りになる。

(濤龍館玄關の場)――本舞臺上手の矢來を引いて取り、濤龍館といふ額の掛かりし玄關を押出す、正面日覆より中窓のある板羽目を下し、玄關へつなぎ龍の丸の紋附きし用水桶を出し、大磯海水浴濤龍館入口の道具になり、獅子の囃子にて納まる。と知らせに附き、下手矢來の張物を打返す。爰に清元連中居並び、直に淨瑠璃になる。

〽いにしへは海道一の遊君に駒で通ひし虎が許、其の大磯に汽車が出來、千里も一里駒下駄で、遊びがてらの寒湯治、

ト通り神樂になり、花道より材木屋佐賀屋十太郎、散髮羽織着流し帽子を冠り、駒下駄卷烟草を呑み

ながら出る。弟五郎吉同じ拵へ、續いて新橋藝妓お虎、同じく小蝶、同じく小鶴、餘所行きの拵へ肩掛駒下駄にて出來り、花道へ止り、

〽濤龍館に昨日から酒も杉田の醉ひ覺し、木咲の梅の綻びて薫りゆかしき藝妓連、今年は丁度寅年に、虎が石から木像の鴫立澤へそこはかと、ふるきを溫ね新しき海水浴へ歸り道

ト花道にて五人振あつて舞臺へ來る、玄關口より濤龍館の娘お仲、若い者二人着流しにて、女中二人前垂れ掛、いづれも駒下駄にて出來り、

お仲　これは皆樣、只今お歸りでござりましたか。

若者二人　先づ〳〵これへお掛けなされませ、今日はどちらへいらつしやいました。

十太　今年は寅年と言ふところで、虎が石が見度いと言ふから、蓮臺寺へ行きました。

五郎　それから向ふに見えるは高麗寺山といふ所だが、山へ登るは恐れるから、

お虎　鴫立澤へ行きまして、虎御前の木像や西行法師の像を見て、

小蝶　私共には分らないが、古い杖だの式紙だの、色々の物を見て來ました。

小鶴　珍らしいのはあそこの海で、取れるとかいふ筆草を、二三本貰ひました。

十太　筆草生ふる波間よりと、梅の春の文句にあるが、正物を見て形がわかつた。

お仲　虎が石から鴫立澤までは、餘程の道でござります。
女中　おひろひでいらつしやつては、嘸お草臥でござりませう。
十太　ところが虎が石まで、やつとのことで行つたのだから、直に車に乘つたのさ。
五郎　此の間寺島が古い戸を貰つたといふは、さつき通つた漁師町だな。
十太　其の話しを聞いてゐるから、此方もなにか掘出さうと、覗き込んで歩いたのさ。
小蝶　貴方がお搜しなさるのは、古い戸ぢやァありますまい。
小鶴　いゝ娘があらうかと、覗き込んだのでありませう。
五郎　こいつァすつかり當てられたね。
十太　寺島は探偵と間違へられたといふことだが。
五郎　娘を搜せば女衒だな。
十太　違えねえ。
若二人　娘をお搜しなされますなら、あの宿の德次郎といふ、按摩の內にいゝ娘がござります。
十太　もう一遍行つて見ようか。
お虎　行くならわたしやあ直歸ります。（トッンとする。）

十太　お前に歸られて詰るものか。
五郎　こつちは娘が目につかなんだが、面を冠つて子供が大勢騷いでゐたのは、ありやあ何だ。
若者　あれは道祖神のお祭りで、毎年一月十四日に太鼓をたゝいて踊ります。また左義長とやら申しまして、宿中の注連飾りを濱へ積んで焚きます。
小鶴　明りが海へうつりまして、誠に綺麗でございます。
女中　日が暮れましたから、お二階から焚くのを御覽なされませ。
お虎　それはいゝ所へ來合した、東京へ歸つてから、
小蝶　皆に話しを聞かせませう。
小鶴　早くそれを見度いねえ。
若者　噂をすれば影とやら、漁師の子供が參りました。（ト花道の揚幕にて、）
子供　目出てえ〳〵。

ト是なきつかけに宮神樂になり、花道より漁師の悴岩吉、同じく浪松、同じく濱松、同じく磯松、同じく島吉、同じく網藏、おの〳〵散髮奴、思ひ〳〵の鬘、木綿筒袖の長半纏、三尺、股引、素足、おかめ、ひよつとこ、外道、狐などの面を頭へ冠り、幣束、扇、笹など持出來り、花道にて六人振あつ

て、舞臺へ來り、

岩吉 賽の神のお祀りだ。

浪松 沖の方からどんどこどん、

濱松 福の神が舞込んだ。

磯松 早く錢をくれさんせえ。

六人 目出てえ〳〵。

十太 おゝ、いくらでも錢を遣るから。

五郎 なんぞ踊りを踊つて見せねえ。

網藏 錢をたんとくれさつしやるなら、

島吉 どんど踊りを、

六人 踊りますべい。

小蝶 どんな踊りか、

小鶴 早く見たいものだねえ。

お虎 然し爰ではお見世の邪魔。

十太　庭へ廻して貰はうか。
若者　それがよろしうござりまする。お前方は、裏口から、
岩吉　庭の方へ、
六人　廻りますべい。
〽濱の子供は庭口へ勇み進んで、
卜宮神樂を冠せ、子供は下手へ、外皆々は玄關へはひる、知らせにつき、此の道具居所替りになる。

（庭先の場）　本舞臺向ふ手摺付きの緣側、欄間に富士の畫の額を掛け、後ろ打拔き海上の遠見、上手に箱根を見せ、上の方斜に襖の出這入り、下の方淨瑠璃臺、この模樣よろしく道具納まる。と賑やかな合方になり、上手襖より以前の娘お仲、若い者二人女中案内して、十太郎皆々出來り、

十太　海水浴が流行るので、今ぢやあ諸所へ出來たけれど、名におふこゝは早稻田の殿樣、松本樣のお見立ゆゑ、第一空氣がいゝ上に。
五郎　今度の主人は如在なく、取扱ひが行屆くから、海水浴では何處よりも、濤龍館が繁昌だ。
お仲　有難いことに、お座敷のない程お客樣がござります。

十太　ときに、今呼んだ漁師の子供は、庭の方へ廻つてゐるか。
五郎　爰へ呼んでくんねえ。（ト下手にて。）
子供　みんな待つてゐました。（ト右の合方にて、岩吉先に六人出來る。）
五郎　爰にゐたとは、目出度い〳〵。
十太　なんぞ土地で流行る、目出度い踊りを見せてくんねえ。
岩吉　目出度い踊りは道ろく神の、今日の祀りの踊りだが、
浪松　みんな出たらめに踊るから、手も足も揃やあしねえ。
濱松　大漁祝ひに若い衆が、踊るのをやるべいか。
磯松　ありやあ東京から來た、師匠さんに習つたのだから、あれがいゝ。
島吉　ちつとは手足が揃ふから、お前たちに見られべい。
五郎　それを踊つて貰ひてえ、錢はいくらでも上げるから。
網藏　なに、錢は貰はなくつてえゝから、お前等も東京の踊りを踊つて、
六人　見せてくんねえ。
十太　おゝ踊るとも〳〵、お前達が踊りせえすりやあ。

五郎　跡で此方も踊つて見せよう。
岩吉　そいつァ有難い、さあ〳〵。
六人　踊れ〳〵。（ト手拭を冠り、濱唄模様になる。）
〽伊豆のえゝ伊豆の大島はけさ空晴れて、姿見せるになぜ顔見せぬ、磯の千鳥ちやなけれど、行きつ戻りつ戻りつ行きつ、思ふ女郎衆の格子先、さあさ乘込め〳〵。
岩吉　大漁祝ひだ。
四人　乘込め〳〵。（ト太鼓の鳴物にて、四人振あつて、）
五郎　よウ〳〵、面白かつた〳〵。古風な所が目出てえのだ。
十太　踊といへば此方の内の、お仲さんのを見度いものだ。
お仲　どういたして、私などが。
十太　いや〳〵、花柳の仕込だからきつと旨いに違ひない。
お虎　早く踊つてお見せなさいよ。
お仲　それではちよつと、お笑ひ草に。
〽東路の名に大磯の風景は、緑色こき小松原、見渡す限り白浪の岩に碎けて玉くしけ、箱根

の山や江の島を、弓手と馬手に澪越えて、霞む網引の歸り船。

ト お仲振あつて、六人藝者に向ひ、

浪松　さあ〳〵、お前等も東京の踊りを踊つて、

六人　見せさつせえ。

十太　約束だから三人で、ちよつと音頭を踊つてくんねえ。

お虎　こゝで音頭を、踊るのは。

三人　お目出度いねえ。（ト お虎小蝶小鶴前へ出て、）

〽誰が寮か、海を見晴す一構へ、垣根の梅の笑ひかけ、見返る庭に鶯の夜飼ひの聲のしをらしく、春とはいへどまだ冬に、運ぶ時雨の松風に通ふ庵の琴の音は、奥床しいぢやないかいな、ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイヤサ。

ト 三人振あつて納まる、此の時上手より理髪師淺床、道具を入れし鞄を下げ出て、

淺床　思ひ掛けねえ音頭を見たは、有難茄子の鴫焼だアもさ。

十太　や、誰かと思つたら、茅場町の淺床さんか。

五郎　お前も此方へ來てゐるのか。

淺床　茅場町の淺床も、春は福々でござりますのに、お得意の旦那方のお供をして、大磯へ寒湯治に參りましたも、實は欲と二人連れでござります。（ト下手へ來り住ふ。）

十太　そいつア丁度いゝところだ、明日顏を剃つてくんねえ。

淺床　畏りました。

お仲　淺さん、二階の一番のお客さまの所へ行つておくれか。

淺床　今行つて來ましたが、御祝儀をお貰ひ申したから、よろしくお禮を言つておくんなせえ。

十太　其の一番のお客といふのは、何者だ。

淺床　それ、お前さんも御存じの請負師の一老職、鯰髭をひねりながら、官員ぶつてる須藤さんさ。

五郎　須藤が此方へ來てゐるのか。

淺床　大木蒲田の二人を連れ、昨夜此方へ來なさいました。

十太　そいつアお虎は目出度からう。

お虎　なに、目出度いとはえ。

十太　須藤はお前の一客だから。

お虎　又そんな氣障を言つてさ。

十太　それでも座敷を引かせると、専ら世間で言つてゐるぜ。

お虎　誰がなんと言はうとも、私が生涯身を任すのは。

五郎　矢張り須藤か。

小蝶　えゝ、お前さん迄が同じやうに。（ト五郎吉をつねる。）

お虎　こりや默つてはゐられない。

小鶴　思入れ言つてお上げなさいよ。

淺床　留めにはわつちが這入るから、癡話喧嘩をなさいまし。

お虎　これ十さん、わしが心が知れないかねえ。（ト お虎十太郎をとらへ、口說きになる。）

〽それ忘れてか濱の屋で、始めて逢うた其時に胸に波うつ嬉しさも、磯の見る目を憚りて、〽よい汐時と待つ内に、文に眞砂の數々を送る追手の風受けて、〽沖より深い二人が仲、汐と眞水も知りながら、〽それをとやかう言はしやんすは、水臭ひではないかいな。

ト お虎十太郎を捕へ、口說きの振、小蝶は五郎吉にお前もさうだといふ思入、是へ淺床小鶴からみ、よろしく振あつて納まる。此の時上手にて、

須藤　鬱陶しい、障子を明けい。

八木
蒲田　畏つてござります。

十太　やゝあの聲は。

五郎　慥かに須藤。（ト立ちかゝるを、十太郎留めて。）

十太　あこれ。

〽隔ての襖押明けて、海を越え來る大鷲の、勢なして出來る。

ト管絃様の合方になり、上手襖をあけ、請負師須藤一郎、散髪、鯰ひげ、黑の羽織、着流し、白縮緬の兵兒帯、官員の拵へ、手代大木、蒲田、散髪、荒い絣の對の書生羽織、兵兒帯下役の拵へにて附添ひ出來る。

須藤　いや、誰かと思へば材木商の、佐賀の十太郎に五郎次か。

大木　一座はお虎に小蝶、小鶴。

蒲田　はて、全盛な遊びぢやな。

五郎　どなた様かと存じましたら、須藤様でござりますか。眞平御免。

十太
五郎　下さりませ。

須藤　佐賀には久しく逢はないが、暇あらば宅へござれ。

十太　いづれお伺ひ、
十太
五郎　申上げます。
須藤　お虎、おぬしもこゝへ參つてゐたか。
お虎　佐賀さんに誘はれて、三人は昨日からこゝへ參つて、
三人　をりまする。
須藤　手前も連れて參らうと、昨日口を掛けたれど、湯治に行つたと承つたが、扨はこゝへ參つたか。
十太　して須藤樣には御遊山に、是れへお出でなさいましたか。
須藤　豫ねて話に聞かれたらうが、某大臣が發起にて、貴顯方が打寄つて今般箱根の山中へ、一つの高樓が出來るにつき、其地割から建築迄、一切僕が依賴を受け惣奉行を勤めるのぢや。
十太　扨は是より箱根山へ、貴君はお出でなされますか。
須藤　如何にも是より參るのぢやが、ちよつと是へ立寄つて、一兩日逗留なすのぢや。
大木　大工は元より諸職人、一切旦那がお引受け、實に大した御普請だ。
蒲田　二人の衆も朝夕來て、お髭の塵を取つたらば、材木でも買つて遣らうこ。
大木　立寄らば大木の陰。

蒲田　長い物には巻かれろだ。
五郎　なんと。(ト立腹の思入。)
十太　これ。(ト留める、須藤は思入あつて、)
須藤　聞けば二人は此の須藤を、親の敵と言ふさうだな。
十太五郎　え。(ト思入。)
須藤　それは大きな料簡違ひ、思ひ出せば、おゝそれよ。(肥前節模様の合方になり、)安政二年神無月大地震のあつた時、諸家の普請を請負うたが、二人の親父が積り損なひ、自滅したのは自業自得、其の折跡へ積りを入れ、大きな儲けをした故に、僕を敵と言ふさうだが、そんな遺恨は水にながし、以前は同じ請負師、久し振にて打ちくつろぎ、今宵は目出度く一献汲まう。
大木　それは何より目出てえ事だ、みんなも目出度く祝ふがいゝ。
岩吉四人　目出てえ／＼。
淺床　此の目出度いは、いゝ壺だ。
須藤　申附けた酒宴の用意。
若者　畏りました。

〽返事も輕く酒道具、持ち出る鯛の鉢肴。
ト大きな鯛の鉢肴と猪口を入れし杯洗、燗德利を持ち出で眞中に置く。

須藤　大木蒲田是を見い、なんと見事な鯛ではないか。
女中　これはお遣ひ物でござります。
蒲田　誰がこれをよこしたのだ。
女中　成駒屋の福助さんが、旦那樣へお上げ申してくれと、お誂へでござりまする。
須藤　成駒屋の息子が來てゐるか。
お虎　福さんが來ておいでとは、それは何より、
三人　嬉しいね。
十太　お前達より皆さま方が、
五郎　さつきからお待兼ねだ。
須藤　早くこゝへ呼んでくれ。
女中　畏りました。(ト此の時下手にて、)
福助　只今それへあがりまする。

〽襖隔てゝ梅が香の、香りを運ぶ花活の、花の姿ぞ美しき、

ト此内上手襖を明け、福助地天窓、羽織着流しにて出來り、

福助　旦那樣、よく此方へいらつしやいました。

須藤　お前がゐるとは知らなんだ。さあ〳〵、是へ進んだ〳〵。

福助　佐賀さん、御免なされませ。

ト十太郎外皆々へ辭儀なして眞中に住ふ。

十太　福さん、お前は熱海の方へ行つたと、噂に聞いてゐたが、

五郎　いつ此方へ來なすつた。

福助　先日熱海から歸りましたが、久しく馴染の濤龍館ゆゑ、當分爰へ逗留をいたします。

お虎　あんばいは、

三人　ようござりますかえ。

福助　湯治が性に合ひましたのも、御贔屓樣のお蔭ゆゑ、實に有難うござります。もう此分では、追々

よろしうございます。

淺床　私がお受合ひ申しまする。

須藤　それは何より悦ばしい。
お虎　誠に嬉しうござります。
〽祝ふ折から東京より、使に幸三が駈附けて、
トばた〳〵になり、下手より幇間櫻川幸三、散髪黒の羽織着流し、紫の袱紗包みを持ち、下手へ來り、
幸三　旦那、お使に參りました。
須藤　おゝ櫻川幸三か、何ぞ急ぎの用でもあつてか。
幸三　あなたがお忘れなさいました、御普譜の畫圖面と、切手を持つてまゐりました。
大木
蒲田　それは大きに、御苦勞々々。
十太　そんなら、それが、
十太
五郎　畫圖面とな。
須藤　土木の方へ頼んでおいた、畫圖面が出來たのだ。
十太　して又切手とおつしやるのは。
須藤　箱根の離宮へ出入する、掟嚴しい門切手。

小蝶　御兄弟へ上げ度いから、それはお貰ひ申されませんか。
須藤　迂濶に是れは遣られない。ト袱紗包みを開けて見て）や、こりや畫圖面も切手も違つた。
幸三　なに、違ひましたとは。
須藤　鎌倉繪圖に嶋の寫眞だ。
幸三　出掛にあんまりそが／＼と、急いだ故に間違つたか、何にしろ見渡せば、みんな東京で知つたお顔、先づ佐賀の御兄弟に髭を剃るのが自慢の淺床、
須藤　藝妓がお虎に小蝶、小鶴、
淺床　旦那が須藤でお傍には、
大木　家老職の、
蒲田　大木蒲田、
福助　また私は曾我中村、
十太　蝶と千鳥に、
五郎　縁のある、
お虎　此の大磯の濤龍館、

幸三　こゝへ思はず落合ふとは、

須藤　はて珍らしい。（ト須藤鯛の鉢を取り、幸三子供の面を取つて、）

皆々　對面ぢやなあ。

幸三　いや、飛んだお茶番だ。

お虎　其のお茶番より福さん、久しぶりで、何ぞ短かい踊りを一つ、お見せなさんせいな。

福助　どういたしまして、まだ踊るどころぢやあございませぬ、やつと春から新富町へ出勤をするくらゐの事、こりやあ御見物をなすつた皆さんが、踊れないのは御存じでござります。

大木　成駒、こりやあ御尤もだ。ときに幸三さん、お前の來るのを待つてゐたのだ。どうぞ何れも樣へお引合せを。

幸三　おゝ承知だ〳〵、是れからお願ひ申してやらう。

トこれより皆々下にゐて、大木の名題に上つた引合せの口上あつて、

淺床　さあ〳〵、早く杯の酒と仕ようぢやござりませぬか。

須藤　然し、たゞ酒ばかりも興がない、杯をさしたらば、何でも肴に踊るはどうだ。

幸三　もし踊れないといふ者は、墨を塗るのも古いから、何ぞ一番新らしく、

淺床　眉毛を私が剃落しませう。
福助　私共は平氣だが、皆さん方はお困りだらう。
須藤　それは僕は眞平だ。眉毛が無くては勤めが出來ぬ。
淺床　それでは旦那ひげにしませう。
須藤　髭がなくては、官員めかぬが。
幸三　まあ、それとなすつて、早く杯をお差しなさいまし。
ト須藤大きな猪口を持つて、四方を見廻し、
須藤　大木蒲田、杯くれう。（ト兩人びつくりして、）
大木　お杯は嬉しいが、
蒲田　二人ともに踊りは出來ぬ。
淺床　出來ずば眉毛を、剃落さうか。
大木
蒲田　あゝ踊ります〳〵。（ト兩人前へ出て角力甚句になり。）
〽私ら二人は放れぬ仲よ、對の出立の神酒徳利、ありや〳〵〳〵さ。（ト不器用に踊る。）
幸三
淺床　よウ〳〵。（ト褒める、須藤思入あつて、）

須藤　佐賀の兄弟杯くれう。(ト五郎吉思入あつて、)

五郎　頂きますべえ〳〵。

十太　あこれ。(ト對面の見得、)

蒲田　さあ、杯受けて、踊つた〳〵。

ト十太郎五郎吉扇を持ち出て、一中節模樣にて、

〽思ひ出せば去年の秋、折能き時を江の島へ鎌倉かけて雪の下、賴朝公のおやしろや、大小名の屋敷跡、古蹟を廻り小動の、

ト此の內十太郎五郎吉扇を遣ひ振あつて、淺床わつて出て、

〽急げば早き曾我の里、河津が着たる狩衣の、秋野の錦美くしき、熱海の道の山々も、染める紅葉の赤澤山、

ト淺床の振へちよつと福助からみ、よろしく振あつて、又十太郎、五郎吉出て、

〽柏が峠の古を、思へば嘸や兄弟が、

ト五郎吉立掛るを、十太郎留め、淺床腰を抱き對面の模樣あつて、

〽無念を晴らす仇討の、しかも其夜は五月雨。(トお虎出て、)

〽濡れて嬉しき戀の闇、建てし屛風の富士の畫に、番ひ放れぬ蝶千鳥。
ト四人からんで對面模様の振よろしくあつて、
大木 蒲田 よウ〳〵うまいこと〳〵。
須藤 跡は幸三、杯くれう。（ト猪口を取る。）
幸三 それは有難うございます、ちよつと一杯頂戴いたしませう。
ト女中の酌で、幸三酒を飲む。
福助 幸三さんは仁和賀でも、評判のよい腕だから、替つた藝を見度いものだ。
須藤 さあ〳〵、早く遣つてくりやれ。
幸三 先づお笑ひ草に道祖祭りの、神樂の眞似をいたしませう。
〽子供の面を取敢へず、假に神樂の後ろ面、
ト子供の持つて居る外道の面と、後へお龜の面を冠り、外道の方へ頰冠りをして前へ出る。
〽道祖祭りの道六が、一ぱい機嫌のそゝりぶし、
詞〽兩親達の異見より、沖で身にしむ朝ならひ、
詞〽や、向ふに居るのは女房だが、又燒餅がうるせえな。

〽大方今夜も大磯の、きやつの所へ行つたであらう。

新内〽わたしが是程思ふのに、むごひつれない男づら、恥を掻かさにや腹がいぬ。

ト新内模様で、女の振あつて外道になり、

〽愚癡を云ふのも内心は、おれに女房が惚れてゐる故、

〽あゝ色男には、何がなる。

〽なに、色男とは誰が事、おこぜの様な顔をして、

〽おれが顔がおこぜなら、おのれは言はずと鰒のつら、

〽顔ばかりかおなか迄鰒のやうには誰がしたと、むしやぶりつけば、〽突倒し、〽腹立つならば出てうせう。

〽いえ／＼爰はわたしの内、こ糖三合入聟の、お前の方から出やしやんせ。

〽いや／＼出ない。

〽いや出ろと、〽打ツつ、〽叩きつ、〽する所へ、〽隣りの婆さまにとめられて、

〽果は笑ひの一踊り、

都々逸〽憎い／＼は可愛の裏よ、癡話も喧嘩も惚れた故、〽譯もなや。

ト此内幸三後ろ面よろしくあつて、

十太　ようく感服々々。

蒲田　さあく、跡は誰だなく。

ト十太郎お虎へ須藤にさせといふ思入、お虎猪口を取つて、

お虎　須藤さん、思ひざしの杯受けて下さんせ。（ト出す、須藤取つて）

須藤　思ひざしは嬉しいが、僕は踊りは踊らぬぞ。

淺床　それでは最初の約束通り、鯰髭を剃りませうか。

須藤　いやく、髭を剃られては、官員めかすことが出來ぬ。

お虎　それでは踊りを、

三人　踊りなさるか。

須藤　さあ、それは、

十太　但しは髭を、

十太
五郎　剃りませうか。

須藤　さあく。

幸三　髭か踊りか、だい／＼か。
十太　きわどい所で、洒落れなさるな。
須藤　あゝ、官員の看板だが仕方ない、剃つてくれ。
淺床　合點だ。

〽おゝ合點と淺床が、剃刀取つて惜しけなく、顏の眉毛を剃落し、

ト淺床鞄より剃刀を出し、須藤の附眉毛を剃落すを福助見て、

福助　淺さん、お前そゝツかしい、髭と眉毛と間違へたぜ。（ト淺床見て、）
淺床　や、こりや大變、眉毛を落した。
網藏　こいつはをかしい、笑へ／＼。
六人　はゝゝゝ。（ト須藤撫でゝ見て、）
須藤　やあ／＼、大事な眉毛を落されては、貴顯方の前へ出られぬ。憎い奴だ、坊主にしろ。
大木 蒲田　心得ました。
淺床　こいつはたまらぬ。

〽逃げにかゝるを子供らも、共に追ひかけ引倒し、大木蒲田が乘り掛り、坊主になせば刎起

きて、
ト是へ屋臺囃子を冠せ、淺床逃げるを、大木、蒲田、岩吉、浪松、濱松、礒松、島吉、網藏追ひ廻す
淺床、幸三を前へ突出す、是を間違へて押伏せる。蒲田剃刀を取つて剃掛る、仕掛にて青坊主になる
幸三刎起きて、

幸三 何でわつちを、坊主にしたのだ。

蒲田 やあ、淺床と間違へて、

大木 櫻川を坊主にしたか。

淺床 どれ、捕まらぬ其内に。(ト逃げにかゝるを。)

蒲田 うぬ、逃げるとて、

大木 逃がすものか。
ト淺床逃げるを、早き屋臺囃子になり、前の六人にて追掛け、引倒して押へつける。

幸三 坊主にされた意趣返し、くり〳〵坊主に剃つて遣らう。
ト幸三淺床の天窓を剃り、青坊主になり、

淺床 や、こりやおれも坊主にされた。

須藤　坊主大尽を幸に、六歌仙で古めかしいが、又新らしくみんなでかつぽれ〱。

淺床幸三　おゝさて、合點だ。（ト淺床幸三鉢卷尻はしよりにて、）

〽雨の暗いのに白刃が見える、あれは狩場の敵討、やれこの敵討、甘茶でかつぽれ、鹽茶でかつぽれ。（ト兩人振あつて、）

須藤　先づ是からは。

皆々　鹽湯で逢はう。（ト引張の見得、頭取出て、）

頭取　先づ今日は、是れぎり。

ト目出度く打出し

桂建の曾我と濤龍館（終り）

綴合於傳假名書

東京奇聞と夜叉譚の著述に其名高橋の傳記を綴る新狂言も上州博多の僞ひ帶ツイ合宿に解けかゝる草津の湯場の筒持せ直には行ぬ横濱の松の根岸の下道に佐藤が迫る強姦の夢は破れて野毛下のお種が悋氣に魚屋の二階住居も清五郎が厚き情に浪之助亡跡賴む非業の最期斯くとは知らで辨藏の謀に乘りし船の内危い難を市太郎に助けられしが緣となり氣も合乘に旅歩行路用が盡て富岡の小澤へ戀の言掛り與兵衛も舅伊右衛門や妻のお絹へ言譯も泣て脅され五十圓捨し我子の恩愛に行燈消して闇き身を厭ふ勘右衛門大介の恨みも晴てお村が嬉しさ又も別れに妹お梅が異見に讀みし曙新聞調度隣の明烏を假寢の床の丸竹で姉の敵と七藏を殺して立退くお傳が大膽惡事は千里竊盜の班の虎と言合せも邪正を照す直道糺兩氏の詮議に白狀なし御所刑受けし毒婦の讀本

『高橋お傳』は明治十二年五月、作者六十四歳の時、新富座に書きおろされた。前年の冬縛に就き十二年一月十一日斬罪に處せられた、毒婦高橋お傳を劇化したものであつた。作者の用意から高橋は玉橋、吉藏は七藏、市太郎は吉太郎などゝ、語呂を合せた假名にしてある。主として假名垣魯文の『高橋於傳夜叉物語』によつたものらしい。凝り性であつた菊五郎が、お傳の平生を研究して演じたのや小團次の扮した浪之助の癩病の寫生などが世評に上つた。大詰裁判所の場は特に演者も作者も大道具方等相携へて、東京裁判所の刑事法廷の傍聽に行き、その實況を模し、法官の出入りに際して扉の開閉の音まで工夫するなど、目新らしい舞臺裝置をしたのも大評判であつた。

書きおろしの時の役割は尾上菊五郎(玉橋お傳)、市川左團次(古着屋佐藤七藏、田川吉太郎)、市川團十郎(人足宿魚屋清五郎、裁判掛民尾諭)、中村宗十郎(絹商人小澤與兵衞、糺直道)、坂東家橘(裁判掛白邊明散)、岩井半四郎(七藏圍ひ者おたね、與兵衞女房おきぬ)、中村仲藏(百姓玉橋勘右衞門、小澤伊右衞門)、中村鶴藏(百姓玉橋大助、旅人宿大瀧三次郎)、市川小團次(玉橋浪之助)、市川團右衞門(野毛の辨藏)、岩井小紫(山本の女房お咲、下宿波川おなつ)、岩井しげ松(大瀧の女房おたけ)、尾上梅五郎(小澤甥佐太郎)、坂東喜知六(藪醫桑原雷庵)等であつた。

口繪にしたのは歌舞伎新報に載せられたもので、落合芳幾の筆であり、挿繪にしたのは作者筆の看板下繪右方の書き添は舊藏者松本韜阿の筆である。尙第四幕目は幕數の都合上出場にならなかつたといふ。

大正十五年十一月上旬

校訂者


書看板下画
河竹新七筆

綴合於傳假名書（高橋お傳——七幕）

序幕　　上州草津溫泉山本の場

〔役名——絹商人小澤與兵衞、古着屋佐藤七藏、百姓玉橋大助、玉橋浪之助、船頭野毛の獵藏、百姓畑屋麥藏、同田淵八十八、ごまの灰赤牛金太、同穴熊九郎藏、藥賣實はごまの灰三太、宿屋手代政吉。玉橋お傳、七藏圍ひ者お種、溫泉山本女房お咲、湯女おふぢ、同おせん等。〕

（草津溫泉の場）——本舞臺三間の間常足の二重、上寄り二間の本緣附き、眞中暖簾、上一間の戸棚、此の前に帳場格子、下手板羽目、續いて一間の落間、折廻し下足掛け、是に下足澤山に掛け軒口に定宿の掛札、眞誠講のフラフを出し、平舞臺の上山本と印せし海鼠壁の土塀、下手は庭入口に山本と筆太に記せし額を掛け、すべて上州草津溫泉宿の體、帳場の內に手代政吉、野郎かつら若い者の拵へにて帳面を附け、平舞臺に旅人四人、病人の旅なりにて二重へ腰を掛け、わらぢを脫いで居る、湯女おふぢ、おせん下女のなりにてすゝぎ盥を出し、世話をなし居る、驛路入追分節にて幕明く。

ふじ　お湯が熱くば、うめてさし上げます。

旅四　いや、丁度よい加減故、うめずとようござります。
放一　いかに湯治場とはいひながら、足を洗ふすゝぎまでが、溫泉とはえらいものだ。
旅二　是れから爰でみつちりと、湯治をしたことならば、元の體になるであらう。
政吉　貴方がたはお四人御一緒でござりますかな。
旅三　ハイ、四人連れで來ましたが、みんな病人でござりますから、よろしくお願ひ申します。
政吉　左樣ならちよつと帳面へ記しますから、お名前をおつしやつて下さいまし。
旅四　私は東京第八大區四小區の堀の内村、鍋屋の子分で橫藏と申します。
旅一　次は五大區十小區谷中笠森稻荷の門前で、土屋の團五郎といひます。
旅二　私は六大區七小區、本所吉田町の鵜の目鷹藏と申します。
旅三　斯うして見ると、東京の眞中は、わし一人だと見えるわえ。
せん　お連樣でござりますなら、御一緒におつけなされて下さいまし。
旅三　先づ第一大區十小區、新富町の仲の丁で、夜明しあるくと云ひます。
　ト政吉いち〱帳面へ附ける事あつて、ちよつと考へ、
政吉　モシ〱、あるくと申すお名前は、何だか變でござりますな。

旅三　それだからあるかないで、今夜こつちへ泊るのだ。
旅四　そんな常談を云はないで、早く名前を附けたがよい。
旅三　實の所は仲の丁へ出る、鍋燒うどんの甚太郎といひまする。（ト此の内四人足を洗ひ、）
政吉　皆樣はお長く御逗留なさいますかな。
旅三　是からせめて三周りも、みつちり湯治をします積りサ。
旅二　さうした事なら新富町や、吉田町で可愛がられた病氣の根も切れ、元の身體に仕上げたら、
旅一　生れ替つた料簡で、親や女房に安心させ、
旅四　一と身上拵へませう。
政吉　おせんどん、お四人樣は表二階の、四番がよからう。
せん　ハイ〳〵。
政吉　左樣ならあなた方は、先づお座敷へいらつしやいまし、何れお雜用や何やかやは、只今御相談を致しませう。
四人　よろしくお賴み申します。
せん　サア〳〵斯う入らつしやいまし。

ト追分節にて、おせん四人を案内して奥へはひろ。政吉おふぢ殘り、あたりを片附けながら、

政吉　時候が追々暖かになるので、大分お客が立込んで來たが、此の分では今年の夏も、しつかり實入りがありさうだわえ。

ふぢ　こちのお内へ來る前は、熱海の藤屋に居りましたが、伊豆も官員方がお湯治に入らつしやるので大分開けて參りました。

政吉　毎年どこも溫泉流行で、賑やかになつて來たが、此の草津は外と違ひ遊山湯治は十ヲに一ツ、先づ九ツは養生ばかりサ。

ふぢ　さういへば今のお客も、療毒連でござりますねえ。

政吉　生業とは云ふものゝ、あゝいふお客に來られると、實に健康を害すわえ。

トやはり追分節、花道より百姓玉橋大助、ふけたる百姓旅なりにて、跡より畑屋麥藏、田淵八十八、同じく百姓なり、菅笠を持ち出來り、

麥藏　モシ大助どの、やう／＼草津の溫泉場まで、漕ぎつけて來ましたぞや。

大助　一人旅は憂いものだが、斯うして三人連れで道中をして見ると、ほんにうか／＼步かれまする。

八十　是れから行つて此方の息子、浪之助殿に逢ふのが樂しみぢや。

麥藏　まア兎も角も向ふの内で、たづねて見ようぢやござらぬか。

兩人　それがようござる。（ト三人舞臺下手へ來て、）

大助　忰から郵便でよこした、湯宿の書附を持つて來ました。（懷中より名前書を出し、庭の額と引合せて見て、）山本重右衞門と書いてあれば、爰の内ぢや〳〵。

麥藏　なに爰ぢや、それはまアよかつたが、然しモウ一周りもたつた事故、モシ歸つた後ではないか、ちよつとわしが尋ねて見ませう。

ト麥藏門口へ來り、門を覗く、是を政吉おふぢ見やり。

ふぢ　是れは入らつしやいまし、大層お早いお着きでござりましたなア。

政吉　おふぢどん、おすゝぎを取つて上げて下さい。

麥藏　アヽモシ〳〵、まア待つて下さい。どのみち泊る事は泊るけれど、少し尋ねる人があつて、三人連れで來ましたのだ。

政吉　へヱヽ、さうしてお尋ねものは、賊でゞもございますか。

大助　イヱ〳〵さうではござらぬ、その尋ね者といふは、上州の利根郡下牧村の農民で、浪之助と申す者に、その連合で、お傳といふ夫婦者をさがしまする。

政吉　當年も大分混雑いたしますから、多勢樣のその内には、おいでかも知れませぬから、ちよつと宿帳を調べてさし上げませう。(ト政吉帳面をくり返し見る。)

ふぢ　まア兎も角もあなた方は、お御足をお洗ひなされては如何でございます。

大助　イヤ／＼モシ爰に居ないその時は、外を尋ねなければならぬ故、うかつに足は洗へない。なう一人の衆。

麥藏　ヲヽさうでござるとも、毎年參宮などに出かけても、得て宿引に勸められうつかり上る事がある。よい家を見定めなければ、宿にはどうも附かれぬものだ。

ふぢ　只今は昔と違ひまして、一新講や眞誠講の看板を掛けて置きます内は、決してそんな事はござりませぬ。

八十　御維新此の方浪花講の向うを張つて、一新講といふのが出來たが、今こなたの云ふ通り、あの看板なら安心だ。

大助　イヤ帳面の分らぬ内は、その安心はまだ出來ぬ。

ふぢ　政どん、まだ知れませぬか。

政吉　一週間のお客の口には、さういふお名前は知れぬから、一週間の口を見て居ますのだ。

ふぢ　そのお傳といふので思ひ出しましたが、モウかれこれ三週間程になる奥の隅の座敷のお客様は、慥かお傳さんとおつしやいました。（ト次帳面を見て、）

政吉　そんなら三週間の口を見よう。上州利根郡下牧村高橋浪之助同妻傳。慥に手前にお湯治でございまする。

大助　イヤそれは何より悦ばしい、それぢやアこちらへ厄介になりまする。

麥藏　姐さん、盥を貸して下さい。

八十　イヤ現金なものだ、アハヽヽヽ。

ト此の内おふぢ盥を出し、三人わらぢをぬぎ、足を洗ふ、政吉思入あつて、

政吉　お泊りに極りましたら、お三方のお名前をちよつと記しますでございますが、やはり同村のお方でございますか。

麥藏　察しの通りわし共は、下牧村の百姓で、是にござる大助殿はその浪之助殿の親父殿だ。

政吉　へヱ左様でございますか、それならお馴染のお方故、宿帳には及びませぬ。

ふぢ　お客様の御身分は大抵御様子で知れるものだが、浪之助様の親御様とは、少しも氣が附きませなんだわいな。

政吉　さうさ、是がほんの鳶が鷹だ。
大助　エ。
政吉　いえなに、鳶より近年はだるまが流行でござりまする。(ト此の内三人足を洗ひ二重へ上り、)
八十　そんなら浪之助殿の座敷へ、どうぞ案内して下さい。
政吉　へイ畏りました。お藤どん、御案内。
ふぢ　サアここちらへいらつしやいまし。(トやはり右の唄にて、おふぢ先に三人奥へはひる。)
政吉　人は見かけによらぬものだ、アノ浪之助様の親御さんが、今の人とは氣が附かなんだ。是を思ふと人の前で、うつかり噂は出來ぬものだ。

ト右の唄にて、奥より女房お咲宿屋女房の拵へにて、跡より以前のおせん附いて出て。

お咲　政どん、今のお三人はお連の衆でござんすかえ。
政吉　へイ左樣でございます。お内儀さん大分今夜はお泊りがたて込んでまゐりました。是れまで番附が附きました。(ト帳面を出す。お咲見て、)
お咲　大分お湯治のお客樣が此の頃はふえて來たが、明日は早立が大分ある故、お履物の間違はぬやうに調べておいて下さんせ。

政吉　へイ／＼、畏りました。

ト政吉は與兵衛の遺物へ札を附け釘へかける、お咲帳面を調べ居る。追分節になり、花道より金太旅なり商人の拵へにて風呂敷包みを脊負ひ、三太割がけ九郎藏細き天秤にて小さき荷物をかつぎ、何れも旅商人のなり、菅笠を冠り出來り。

金太　モシ三九郎さん、昨日から見るとまだ餘程日が高うおますが、今日は宵に商ひが出來たによつて泊りに附いてはどうでえすな。

三太　わしもさう思うて居た所、斯うして道中商ひをして歩くと、是非早い時もあり又遲い時もありますが、長旅の内には、こりや當りまへでござります。

九郎　それに今日立場で逢つた富岡の客人は、今夜湯治場泊りだといひましたが、お目に掛るかも知れませぬ。

金太　却つてお目に掛らぬ方がよい、どうはき違へたかわし達を、ごまの灰とでも思つたと見えて、えらく疑うて居さつしやつた樣子ぢやわえ。

三太　道理で、途中でまいてしまひなすつたが、イヤ長い旅をして居ると、こんな間違ひもよくあるね。

九郎　まア行つて、泊りに附きませうか。

二人　それがようござる。(ト三人舞臺へ來り門口へ來て、)

金太　ハイ、又當年もお世話になります。

政吉　是はいらつしやいまし、まづこちらへお掛けなされませ。

三太　イヤお上さん、お久しぶりでござりまする。(ト馴々しく挨拶する。)

お咲　どなた樣でござりましたか、お見それ申しましたが、相變りませず有難う存じます。

九郎　一昨年限りで來ませなんだから、コリヤ尤もでござりまする。

金太　上下なしの三人でおますから、成るたけ靜な座敷へ遣つて下さい。

お咲　今日は殊の外お泊りが多いので、お座敷がみんなふさがりましたから、どうかお合宿が願ひ度いものでござります。

政吉　又長くお湯治になりますれば、その內よろしい所が明き次第、お取替へ申し上げます。

金太　商ひながらの湯治故長うすると極つた事もおませんが、又早急に戻ると申す譯でもなし、モシ、合宿になりますなら、女子の方がようおます。

お咲　旦那、御常談ばかりおつしやいます。お藤お茶を持つておいで。

ト是にて奥より、おふぢ茶を持ち出來り、三人へ出す、政吉盥を出し。

政吉　おみあしをおすゝぎなさいまし。

三人　大きにお世話でござります。（ト三人足を洗ふ。）

お咲　お履物をよくまとめて下さんせ。

政吉　ヘイ〳〵。

ト三人のわらぢをまとめ乍ら、二重にある與兵衛の蝙蝠傘を取上げ。

モシ、此の蝙蝠傘は、あなた方のでござりますかな。

三太　イヤ、私共は蝙蝠は持ちませぬ。

政吉　左樣でござりますか。

ふぢ　それは今お着きなすつた、富岡の旦那のでござります。

ト是れにて政吉與兵衛の下足と一つにする。是へ三人目を付け、皆々ちよつと氣味合。

金太　今富岡の旦那といつたのは、慥か絹屋さんではおませんか。

ふぢ　あなたよう御存じでござりますな。

金太　今日其のお方と立場の茶店で、一緒に休んで居りましたので、よう存じて居ります。

三太　慥かお名前は小澤樣とおつしやつたが、なか／＼お物持の樣でござりますな。

九郎　毎年湯治においでゞござりますかえ。

お咲　ハイ、年に兩三度はきつとお出でゞござります、私共の上得意でござりまする。

三太　シテ、富岡で絹ばかりの、御商賣でござりまするか。

政吉　絹物は信州から越後の方へ大分出ますが、又東京から濱の方へ種紙をお出しなすつて、近年では上州でも一二を爭ふお內になりました。（ト是を聞き三人につたり思入。）

金太　成程、レコのありさうな。（トうつかり云ふ。）

お咲　エヽ。

金太　イエなに、愛想のよいお方でおます。

政吉　それはあなた方と同じ事で、商人衆は御如在がござりませぬ。

三太　どうぞ若い衆も如在なく、よい座敷を働いて下され。

政吉　畏りました、ちよつとお名前を記しまする。

金太　名前は晩でもよいではおませんか。

お咲　私共ではお座敷へ宿帳に出ません代り、見世ですぐ記しますから、只今ちよつとおつしやつて下

さいまし。

ト是にて九郎藏そしらぬこなし。

九郎　一昨年もさうであつたが、こつちの家は堅いからだ。熊谷の小松屋に深谷の近彦などゝ同じ事で宿へ着くと直ぐに店で名前を記すその代り、筆墨代は助かりまする。

金太　まアさうかいなア、左樣なら今與へ行つて、直ぐ書拔いて上げませう。

三太　それなら否やはあるまい。

お咲　どうぞお早くお出でなされて下さりませ。

九郎　それから晚には夜食の前に、ちよつと膳の上へ一本つけて下さい。

ふぢ　畏りました。

九郎　酒の代を上げませうか。

お咲　イエ、御一緒でよろしうござりまする。

ふぢ　サア、御案内いたしませう。

ト右の唄にて、ふぢ案内して三人奧へはひろ。お咲政吉見送つて、

政吉　おかみさん、あの手合を御存じでござりまするか。

お咲　どうも見た樣な人だから、來た時から考へては居るが、商人風ではあるものゝ、大阪詞の針屋さんに、跡の二人の物腰は。（ト政吉へ囁く。）
政吉　てつきりそれでござりませう。
お咲　わけてお客も立てこむし、
政吉　小澤の旦那もお一人故。
お咲　今夜は油斷が、（ト帳面を下へおくを、道具替りの知せ、）ならぬわえ。
ト兩人よろしく。追分節にて此の道具廻る。

（下座敷の場）　本舞臺眞中より上手一間肱掛窓、此の向ふ山の遠見、下手鼠壁、是へ掛棹を取附け、下手の椽廊下の出はひり、上手は鼠壁の張物にて見切り、總て溫泉宿下座敷の體。こゝに古びたる二枚折り屛風を立て、下手に以前のおせん混爐へ藥罐をかけ、火をおこして居る。やはり前の唄にて道具納まる。とおせん藥を茶碗へ移し、杯へ戴せ、屛風の側へ持ち行き

せん　モシお客樣、お藥が出來ましたわいな。
ト合方にて二枚折を明ける。内に浪之助毛の拔けし鬘、眉毛薄くなし癩病人、小紋の着附にて起上

り、蒲團の上へ居直り、

浪之　是は毎度お世話でござりまする。

せん　只今煎じ立でござりますから、まだお熱うござりまする。

浪之　永の病氣に毎日々々、モウ藥も飽き果てました。

せん　何ぞお口直しでもござりますかえ。

浪之　憚りながらその箱の內に、何ぞあるかも知れませぬ。

せん　はい〳〵。（ト有合ふ小箱の內を見て、）別にお菓子はござんせぬわいなア。

浪之　チヽ成程、昨夜あまり寢られぬ故、出して喰べてしまうたをさつぱりと忘れてしまうた。あゝ斯う物を忘れるも、矢ツ張り病のせゐか知らぬ。

せん　何ぞ見世にござりまするか、ちよつと行つて見て參りませう。

浪之　どうぞさうして下さいまし、其の內藥を飲んでおきませう。

せん　左樣なら御一人前、見つくろつて參りませう。

ト　おせん下手へはひる。浪之助藥を一口飲み。

浪之　あゝ、飲みにくい藥ぢやなア。

ト追分節になり、下手廊下より七藏、白地湯上り浴衣なり、手拭を持ち上草履をはき出來り。

七藏　浪之助さん、お目覺でござりまするか。

浪之　テヽ是はお隣り座敷の旦那、ようお出で下さいました。汚なくともこちらへおはひりなされませ。

七藏　まつぴら御免なされませ。（ト上寄りに住ひ、）御同然に長らくの間かうして湯治をして居りますがわけてお前樣は病人故、嘸ぞ毎日御退屈であらうと、云ひ暮して居りまする

浪之　イヤモウ、御覧の通り病氣故、チトお話しにと人樣に申しにくい體故、遠慮致して居りまするので猶々病が重るばかり、晝疲れて寢ますせゐか夜分はどうも寢兼ねますと、傍でお傳が本を讀み看病してくれるので、毎晩樂しんで居りまする。いつまでも是れなれば、いつそ死ぬ方が増しかと思ひまする。

七藏　イヤさう思ひなさるのは尤もだが、然し感心なのはおかみさん、かう申しては失禮だが、此の湯治場の座敷中で、一番下等なこつちの座敷、まア空氣抜きの肱掛窓から榛名山の見えるのが取得それも病が病故外の座敷と云ひにくいと、毎度話しに聞いて居りますが、此の面倒を夜も寢ずに親切に看病なさるのは、實に世間の引きずり女に話して聞かせてやり度い位、あれが誠に貞女の鑑、良いおかみさんをお持ちなさいました。

浪之　さうお褒めでは恐れ入りまする。まア何やかやとあれが厄介、女房とは申しながら、實に氣の毒でござりまする。

七藏　實に氣立といひ器量といひ、何處に一つ點の打ち所の無い、あゝいふおかみさんをお持ちなされたお前さんはお仕合せ、毎度お羨しく思ひまする。

ト此の時お種湯上り、白地浴衣を着て出て窺ひ居て、此時前へ出て、

お種　モシ七さん、大そうお傳さんをお褒めなさいますねえ。

七藏　チヽお種か、お前などもお傳さんの爪でも煎じて飲むがいゝ、足許へも追附かないぜ。

お種　何も他人の居る前で、そんなに云はないでもいゝではござんせぬか。

七藏　それでもあんまりお傳さんの、心立がいゝから褒めたのだ。

浪之　おゝ是れはお種樣でござりましたか、毎度お傳と申し暮して居りますが、なか／＼あなた樣もお物腰といゝ御樣子といひ、あれでは七藏樣のお氣に入るもコリャ尤もだと、常不斷お傳と申して居りまする、たとひ七藏樣がお褒めなされずとも、私が證人でござりまする。

お種　さうおつしやられては、お恥しうござりますが、内の旦那も浮氣者故、餘所で女中の噂をされると、私しや氣がもめてなりませぬわいな。

浪之　そりやお前様より御本妻が、どんなだか知れませぬが、これと申すも御生業が古着屋様と承れば市の崩れや集會で、定めてお附合もござりませうから、實にお察し申しまする。
七藏　シテお傳さんは、買物にでもおいでなさいましたか。
浪之　イヱ今日私の在所から、緣者と同道致しまして、親父が尋ねて參りまして、それを只今案内いたし、風呂場へ行つて居りまする。
七藏　そりやあお話し相手が出來て、何よりお樂しみな事でござりませう。
お種　道理で今湯殿でお目に掛つた三人連れのお客樣は、玉橋といふ苗字だと、外の方と話しておいでだが、あなたの親御さんでござんすかえ。
浪之　同じ上州利根郡下牧村の百姓にて、玉橋大助と申すものゝ私は悴でござりまする。
お種　シテお傳さんも、御近所の方でござりまするか。
浪之　ヘイ是も一つ村で、同姓九右衛門と申す農家へ養女になつて居りましたが、實の所はその以前さるお武家樣の落胤で、仔細あつて百姓の娘になつたと承りました。
七藏　良く譬にも云ふ事だが、袖振り合ふも他生の緣と此處に一つ不思議といふのは、私は東京の生れだが、此のお種は此方と同じ上州下牧村、名前は知らぬが百姓の娘だといふ事だ。

ト是をお種冠せ。

お傳 あゝモシノ＼、モウ其の後は云うて下さんすな、親の罰になる事故、どうぞ默つて居て下さんせ。

浪之 詳しくお聞き申さいでも、お産れが一つ村とは、不思議な御縁でござりまする。

七藏 湯治場といふものは諸國の者の集まり所だが、かうして座敷も隣り合せ、別段懇意にする人が、お兼と一つ村の衆とは、なつかしい事でござりまする。

ト下手より以前のおせん菓子盆を持ち出來り、

せん 先程お誂へのお菓子が、大きに遅なはりましてござりまする。

浪之 是れは大きにお世話であつた。

せん 御逗留のお客様へ内々お知らせ申しまするが、今晩三人連でお泊りの商人體のお客様が、どうも風體が分りませぬ故、お荷物やお懐中物を御用心なさいますやう、ちよつとお知らせ申しまする。

七藏 シテ、その三人のなり恰好は。

せん ハイお一人はでく／＼肥つた、先づ魚で申しますと、目ばるの様なお方様に、一人は鼻を踏みつぶした様な色の黒いお人、あとは片目へ雲の掛つた爺むさい方でござりますが、三人とも人相が、見る／＼太々しうございますから、直に知れますわいなア。

七藏　それは御親切によく知らせて下すつた。モシ、お互ひに油斷はなりませぬぜ。
せん　又御用がございましたら、お呼びなすつて下さいまし。（トおせん下手へはひろ。）
七藏　心安い宿のお陰には斯ういふ事のある時は、直ぐに知らせてくれるので、こゝらが德でございます。
お種　是に附けても一人旅は、氣味が惡くて出來ませぬなア。
浪之　慥あなたは二三日後に、何か紛失物があつたと承りましたが、何ぞお取られなさいましたか。
七藏　なアに是が守をなくしましたが、取られたのか落したのか、詰らない物でございますから、大方湯殿へ落したかも知れませぬ。
浪之　それは飛んだ事でございましたな。
ト米山甚句になり、下手廊下より、以前の大助、麥藏、八十八、いづれも白地の湯上り浴衣の揃ひにて我が着物を抱へて手拭を下げ、跡よりお傳やつしなりにて出て來り、
お傳　チヤお隣りのお客樣、よう入らつしやつて下さいました。
七藏　皆樣お上りでございましたか、モウお暇いたしませう。
浪之　內端ばかりでございますから、まアよろしいではございませぬか。

七藏　イヱ又、後程お目に掛ゝりまする。
お傳　折角おいでゞござりましたのに、却つて失禮でござりましたわいなア。
お種　いえ、どう致しまして、左樣ならお客樣、
七藏　お話しなさいまし。
　　ト米山にて、七藏お種下手へはひる。此の内お傳は三人の手拭を掛棹へ掛け、三人よろしく仕ひ、
浪之　大分長湯でござりましたが、お傳洗つて上げたかな。
お傳　よく流して上げました。
大助　イヤモウ据風呂ばかりへはひつて居るから、かういふ立派な温泉へ來ると、湯のこぼれるばかりでも、實に勿體なく思ふわえ。
麥藏　それに今日は殊の外道はかゞいつた故、大分草臥れて居た所だつた。
お傳　それはまアよろしうござりました。サアお茶をお上りなされませ。
　　ト煮花を拵へ、是を汲んで銘々へ出す、浪之助思入あつて、
浪之　シテ親父樣を始めお二人樣には、何御用あつて此の草津へお出でになりましたな。
大勢　サア親類の此方衆と、同道して來たその譯は、まアとつくりと聞いてくりやれ。（ト合方になり、）

今更何も改めて話すには及ばねど、先達てそち達二人がフト家出なし行方知れず、養子先は云ふに及ばず此の大助も共々に、諸所方々を尋ねたれど、かいくれ行方の知れぬ故、親類達と相談なし、先づ東京へ出府して尋ねて見ようと結着したを、

麥藏　此の草津の湯治場から令樣の御家來が御歸りなされて御話しには、しかとした事は知らぬが、沼田在の百姓で、夫婦連の病人が逗留して居たとの話に、

八十　雲を當なる尋ね物も立場々々で人力車や、熊谷馬車の別當に樣子を聞けど知れぬ故、廻り道でも高崎から左りへ切れて烏川の賴政樣へ願掛して、どうぞ此方衆夫婦の者の居所を尋ね當てる樣、

大助　お願ひ申したその利益か、今日此の湯治場で逢つたのは、外でも無いが養子先の九右衞門殿へ、こなた二人が置手紙をして出たきりでは、どうもわしが濟まぬ故、

麥藏　是れから連立ち在所へ戻り、わしらも共々詫事して、

八十　九右衞門殿へ取りなす故、

大助　是れから一緒に、

三人　歸つて下さい。

ト思入あつて言ふ。浪之助うつむき居る。お傳思入あつて、

お傳　親御樣を始めとして親類方が私共の、家出致せしその科をお叱りもなされずに、事を分けていて今のお詞、實に涙がこぼれる程勿體無うはござりまするが、一家中で何もかも知り拔いて貰うた浪之助さん、惡い病氣が發したとてそれを今更忌み嫌ひ、何かに附けて出て行けがしにされるを傍で見て居るつらさ、あんまり養父がそでない故道ならぬとは知りながら、無沙汰に家を出ましたわいなア。(ト涙ながらに言ふ。)

浪之　それといふのもお傳が貞節、どうぞ一度此の病を治し度いと諸所方々醫者を尋ねてあくる內、話しを聞けば東京に此の病を療治をなさるお方があると、聞いて嬉しく思ふ矢先、不順のせゐか風を引き歩行も出來ず、二三日逗留をするその內に、元より手薄の路用故據なく藤川村の、幸正寺へ便つて行き、座敷を借りて二人して無駄に月日を送りましたが、

お傳　御住持樣のおつしやるには、その病には草津の湯が必らず良い故、いつその事湯治をしたらよからうと、そのお詞の尾に附いて僅かな路用をお借り申し、此處へ參つて昨日で三週り程になりますれど、此處と申して驗もなく、コリヤモウいつそ近い內、東京へ參らうと相談いたして居ります所故、

浪之　折角あなたのお詞ながら、

お傳　再び家へは、

兩人　歸りませぬ。

大助　サアそりや尤もだ、尤もではあるけれど、又わしのいふ事もよう考へて見てくりやれ。浪之助は聟の事故、我身で我身の病を恥ぢ、是れなり家へ戻らずともそれでも濟まうがお傳殿は、小さい時から九右衞門殿の一方ならぬ養育受け、產みの親にもまさる恩、それを見捨て出る時は夫へ附くが操というて、義理ある親を振り捨ては却つて不孝になる道理。

麥藏　惡い事は言はぬ故、大助殿の詞を用ひ、いつそ二人共々に、

八十　在所へ戾つて親達へ、

大助　安心させたが、

三人　よいではないか。（ト三人にて勸める、浪之助思入あつて、）

浪之　親が安心する事なら歸らぬ事はなけれども、その兩親がわしの病を嫌ふ故に起つた事、然し是迄心配して異見をなすつて下さる故、お顏を立てぬも本意で無ければ、お傳は是れより宅へ戾つて再緣なし、玉橋の家名をついでくれるがよい。わしはかういふ業病故、所詮元の眞人間にはなられぬ骸と知れて居れば、本意ない事ではあるけれど、そちと別れて皆樣の、お顏を立てると仕よ

うわい。

ト是を聞きお傳涙を拭ひ、

お傳　お前の堅い料簡でさうおつしやるのは尤もなれど、たとひ親に不孝になるとも、是れが常の骸なら離縁を受けも仕ようけれど、是れぎり別れるその時は直ぐに世間の口の端に養父と共に私も嫌ひ、人でなしと云はれるのが、實に悔しう思ひます故、たとひ不孝になりませうとも、浪之助さんと御一緒に東京へ參りまして、よいお醫者にお願ひ申し、元の骸に致しませねば、女子の道が立ちませぬわいな。

ト愁ひのこなし、大助も思入あつて、

大助　すりや、此の業病の悴をば、

浪之　それ程までに思うてくりやるか。

お傳　サア家出なしても本復を、どうぞさせ度う存じます。

大助　エヽ、何にも云はぬ、忝いぞよ。

ト大助手を合せてお傳を拜む。麥藏、八十八も感心のこなしにて、

麥藏　毎月二七に檀那寺のお住持が說經で、村中の娘子供に貞女兩婦に見えずと法談をしなさるが、此

のお傳さんこそよい手本。

八十　さう思ひ詰めた上からは、歸れと云つても歸るまいから、九右衛門殿へはわし等がよい樣に取なして、いつそ此のまゝ東京へやつて上げたが、

兩人　よいではないか。

大助　サアお傳の爲めを思ふ故、歸つてくれと異見はすれど、たとひ親へ不孝になるとも浪之助の業病を治してやり度く思ふとは、その一言で此の親が、不便やら嬉しいやらで、淚の留途がありませぬわえ。

お傳　そんなら私の願を叶へて、東京へ行きよいお醫者へ、お掛けなされて下さりますとか。

大助　サアどうぞ不便と思ふなら、悴が骸の面倒見て、世話してやつて下されいの。

お傳　すりやあの、聞屆けて下さりますとか、エヽ有難うござりますわいな。

ト三人に禮を云ふ、浪之助思入、此の内大助は懷中より五圓札を出して包み、

大助　是は僅かの札なれど、五圓是に包んであれば、何の足しにもなるまいが、是を持つて行つてくりやれ。

お傳　何から何まで私共の、身の上をお案じなすつてお親切なお志し、お貰ひ申すでござりまする。

浪之　東京表へ落着きますれば、早速郵便を出しまする。

大助　どうぞよい返事をば、

三人　よこすを共々待ちまする。（ト此處へ下手より以前のおふぢ出來り、）

ふぢ　奥二階でござりまするが、よいお座敷があきましたから、あなた方入らつしやいまし。

大助　此處に一緒に居てもよいが、來たついで故三四日湯治をして行きますから、別な座敷へ行くと仕よう。

ふぢ　下座敷より二階の方が、お氣が晴れてようござりまする。

浪之　然しまだ時刻も早し、まア御用となされませ。

麥藏　イヤ是ぎり出立するではなし、逗留をして居る內は一ツ座敷も同じ事、ゆつくりと又話しに來ます。

八十　晩に一杯始めるから、二人で座敷へ來て下され。

お傳　有難う存じます。

ふぢ　左樣なら、御案內いたしませう。

大助　荷物を座敷へやつて下さい。

ふぢ　ハイ〳〵。

麥藏　二人の衆。

兩人　待つて居ますぞや。（ト米山甚句になり、おふち案内して三人下手へはひる。浪之助思入あつて、）

浪之　日がな一日此の窓から、山ばかり見てゐるも、どうも氣が引立たぬわえ。

お傳　春とは云へど山添で、時々ひや〳〵しますから、かいまきを掛けて上げませう。

浪之　まださう寒くも思はぬが、何だか顏がむしやくしやと何處ともなしにかゆみがあつて、氣になつてならぬわえ。

お傳　成るたけ爪を當てぬやうに、我慢をばしなさんせぬと、かきこはすとなりませぬわいなア。

ト此處へ七藏お種、袷の着付に替へて出來り。

七藏　お二人さん、先程はおやかましうござりました。

お傳　チヤよく入らつしやいました、まアこちらへお出でなされませ。

二人　眞平、御免下さいまし。（ト合方になり、七藏お兼上手へ住ふ。）

浪之　丁度只今在所の者が、二階へ參つた所故、まア御ゆつくりとお話しなされませ。

七藏　その在所から御出でなされた親御さんへの話しをば、お種と二人廊下にて、一部始終を聞きましし

お種　たが、お二人さんの胸の内、實にお察し申しまする。
先程ちよつとお話しには、お傳さんのお產れは、お屋敷だとおつしやいましたが、何れの御藩でございまする。

お傳　お話し申すもお恥しいが、親の恥になります事故、申しにくうございまする。

七藏　何の遠慮に及びませう、したが同じ上州の生れにてその土地へ片附いたとあれば、屋敷と云つて外に無いから、そりや沼田の御藩でございませうね。

お傳　ハイ、お察しの通り私は、沼田の御藩でございまする。

お種　なに、沼田の御藩とおつしやれば、そりやおなつかしうございまする。私も矢つ張り同藩にて育つた者でございまする。

お傳　そんならあなたも、同じ沼田の御藩中でございまするか。

お種　シテお名前は、何とおつしやりまする。

お傳　サア、その名はどうも今此處で。（ト云ひ兼ねるを、浪之助思入あつて、）

浪之　計らず斯うして一ッ宿で御懇意を結びし上は、たとひその身の恥になるとも是も他生の緣とやら、包まずお話し申すがよい。

お傳　それぢやというて、どうも私が。
七藏　晴れて悪い事なれば決して他言は致しませぬ。旅の徒然に打明けて、話して聞かして。
兩人　下さりませ。（ト合方きつぱりとなり、お傳餘儀なく、）
お傳　此の身の恥になる事故、つゝ包み隱して居りますが、何を隱さう私の母と申すは同藩中、室瀬郡右衛門樣へ御奉公に上り、勤めて居るその内に旦那樣の御手が附き、遂にお胤を宿せし故、素知らぬ體で宿へ下り、同村玉橋勘右衛門方へ緣付きましたその月から、七月にて產落し月足らずの私なれど、實の所は室瀬樣のお手が附いて丁度十月目、成人の後密々に母の話しに聞きましたが、惣領なれど家へ置かず、同家玉橋九右衛門方へ養女に參りし私故、必らず外へ此の事をおつしやつて下さりまするな。（ト此の内お種思入あつて。）
お種　思へば不思議な因緣話し、さうして見るとお傳さんは、私の爲めには腹違ひの妹でござんすぞえ。
お傳　なに、あなたの爲めに腹違ひの、妹とおつしやりまするは。（ト合方替つて、）
お種　サア私の妹に當るのは、お前を宿せしその前に、御本妻が御病死なされ、その後後妻をお迎へなされず、私の母が妾にて設けしその子は此のお種、それから永らく室瀬樣にお勤め申して居る

お傳　えゝそんならあなたは腹違ひの、姉さんでござんしたか。
內に、殿樣にはお若死、續いて母もなくなつて、もうそれからといふものはする事なす事左り前、此處の世話あすこの厄介、流れ〳〵て橫濱で當時は樂にせさんの、お世話になつて居りますが、お前の爲には腹違ひの私は姉に當るわいなア。(ト是を聞きお傳びつくりなし、)
お種　あいなア。
お傳　知らぬ事とて不思議な所で、
お種　名乘り合うたも深い緣。
お傳　おなつかしう存じますわいな。(トお傳お種の傍へ寄り、よろしくこなし。)
七藏　けふが日までもお互ひに、名乘り合はねばあかの他人、たゞ世辭のみでつきあひしが、
浪之　我身の上より打明けて、腹は違へど同胞の、名乘をせしも是も新聞、
七藏　在所の親御も尋ねて來るに、又兄弟が一つになるとは、こんな目出度い事はない。
お傳　此の後共にお見捨てなく、どうぞつきあうて下さりませ。
七藏　そりやこなたが云はずとも、私も廣くつきあひのふえるのを好む故、行末長く東京へ出て來なさるなら、是非尋ねて來て泊りなさるがいゝ。

浪之　東京へ參つても、是れぞと申す知るべもなく、實は當惑致せし所、是非御厄介になりまする。

お種　私共も歸りがけにちよつと東京の家へ寄つて、直ぐ濱へ歸りますから、都合によつたらあつちへも、夫婦の衆で來なさんせ。

お傳　是非にお尋ね申しまするが、何を申すも浪之助さんが外ならぬ病氣故、人樣の中へ出ますのがお氣の毒でなりませぬ。

七藏　その遠慮には及びませぬが、モシ氣の毒だと思ひなさるなら、東京よりも濱へ來れば、お種に女中と二人きり、二人や三人泊りなさる別間もあるからそこへ來て、逗留して居なさるがいゝ。

浪之　へエ左樣なら濱のお家も、やはりあなたのお宅でござりまするか。

七藏　濱へ商ひに行つて居る内は宿屋代りに泊つて居る、ほんの出張でござりまするが、ふだんは是と女ぎり留守居をして居りますのサ。

お種　それに又丁度良いのは濱へ來て逗留しながら、浪之助さんの此の病氣を亞米利加のヘボン樣に、診察を願つたら、必ず治るでござんせう。

お傳　そのヘボン樣といふお醫者は、たしか異人さんと申す事を、村で話に聽きましたが、私でもその御方の御療治が願はれませうか。

七藏 ヲヽ願はれるとも〳〵、定めて噂に聞いたであらうが、役者の澤村田之助が足を切つて治した醫者、高貴なお方は云ふに及ばず、どんな貧乏人でもお願ひ申せば直ぐに見て下さるが、そこが開化のお醫者樣だ。

浪之 さういふ事なら一日も早く、濱のお宅へ訪ねて行き、ヘボン樣へお願ひ申し、お藥を頂戴したいものだ。

お傳 そのお醫者へお願ひ申す、よい手づるを賴む人が、懇意な內に無いか知らん。

ト ぢつと思入、米山甚句になり、廊下の口より辨藏茶辨慶の袷、三尺帶、湯上りの體にて汗を拭きながら出來り、

辨藏 沼田のお客樣、今日は、始めてお目に掛りました。

お傳 是は濱のお客樣、今丁度お茶を入れました故、まァお話しなされませ。（ト辨藏思入あつて、）

辨藏 甚だ失禮ではござりますが、今涼みながら廊下傳ひ、こちらへ來ようと障子越しに、そのヘボン樣のお話しを聞きましたが、わしの親分吉田町の肴屋の淸五郎と申す者が、お心安くしますから濱へお出でなすつたら、ちよつと知らせて下されば、直ぐ連れて行つて逢はせて上げませう。

お傳 それは御親切に有難う存じます、今此のお方の話しに是非お願ひ申し度いと、實はその手づるを

ば尋ねて居つた所でござりまする。

浪之　シテお前樣のお內といふのは、濱の何町でござります。

辨藏　わしの家はありませぬが、今話した淸五郞の子分で野毛の辨藏といふ舟乘りでござりますが、去年の夏馬車道の麥湯の女に引つかゝつて、トヾの詰りが瘡を脊負ひ込み、仕事も出來なくなつたので、親分の云ひなさるには箱根や伊豆へ行くよりは、瘡には草津がいつちいゝから、湯治をしろと路用を貰ひ、三週りの餘も來て居ますが、モウ此の分ぢやあ近々に、濱へ歸らうと思ひますから、あつちへ來たら親分の所へ必ず尋ねておいでなせえ。わしが口を利いて上げませう。

七藏　それは親切によく云つてやつて下すつた、それでは此方は肴屋の子分の衆でありますかえ。

辨藏　わしの親分で褒めるぢやあないが、難澁な者や貧乏人だとばを曲げても肩を入れ、人別さへ慥かな者なら幾人でも泊めてやり、人の難儀を救ふが道樂、極く達引の強いので年が年中居候で苦勞ばかりして居るから、必ず尋ねておいでなら、隨分お世話をして上げます。

七藏　噂に聞いては居りますが、實に感心な親分だ、又その內お前さんにも濱でお目にかゝりませう。

辨藏　イヤとんだ話しのお邪魔をいたしました、又晩に來てゆつくりと、昨夜の續きの難船話しを讀切でやりませう。

お種　それはまア、樂しみな事でございすな。
浪之　そんなら濱のお客樣。
お傳　何分ともにその節は。
辨藏　是非尋ねておいでなせえ。(ト米山甚句にて辨藏下手へはひる。)
七藏　かうとん／＼拍子に物事が旨く行くのは、浪之助さんの病氣の治る是れ吉左右。
浪之　あなた方の御親切から、お醫者の世話までして下さる、此の悦びでも何程か、今日は本復いたしました。
お傳　是といふのも信心する、神佛の御引合せ、お禮は詞に盡されませぬ。
お種　時候も追々暖かになれば、いつその事お前さんと一緒に立つてはどうでござんすえ。
七藏　俺もさう思つた所、まづ高崎までぶら／＼と四人連れで出かけたら、東京行きの馬車に乘り、直ぐに濱へ連れて行かう。
お傳　そんならあなたと御一緒に、お連れなされて下さりますとか。
七藏　モウかう打明けたら親類故、何處までも世話をいたしませう。
お傳　御親切なそのお詞、こんな嬉しい事はございせぬ。

浪之　モシお二人樣、お禮は詞に盡されませぬ。
七藏　大いに長居をしたせゐか、少し湯ざめがして來た樣だ。
お種　ついでにモウ一風呂はひりなさんせ。
七藏　今日は是で四度目故、まだ二度位ははひつてもよからう。
浪之　そんなら直ぐに此の事を、そちより親父に話してくりやれ。
お傳　ハイ、さうしませうわいなア。
七藏　それではわしも、風呂場まで、
お傳　ドレ、御一緒に、（ト立ち上るを、木の頭、）まゐりませう。
ト氣味合、米山甚句にて、

ひやうし　幕

二幕目

横濱海岸根岸道の場
同　仙元下妾宅の場

〔役名〕＝佐藤七藏、玉橋浪之助、醫者桑原雷庵、車夫、漁師、旅人。玉橋お傳、圍ひ者お種、お針

婆お熊等。〕

〔横濱海岸根岸道の場〕 本舞臺上手に高足の岩組、此の上に古びたる藁葺の庚申堂、此の左右に女竹生ひ茂り、眞中に誂への岩組、此の後ろと上手岩組にて波打際の書割、裾通り小笹、土手の下手一面海原の片遠見、此の前に浪手摺、すつと下手に振よき松の立木、同じく釣枝、上に線香立の石、諸所に岩臺、捨石を出し、總て横濱根岸海邊の體、爰に漁師〇網を肩に掛け、△は手拭を持ち立懸り居る、下手に旅人□◎の二人、腰を屈め道を聞いて居る、此の模樣、浪の音濱唄にて幕明く。

旅□ 少々道をお聞き申し度うございますが、金澤へ行きますには、是れを參つてよろしうございますか。

漁△ 金澤へ行きなさるなら、あの庚申堂に附いて眞直ぐに行き、金澤道といふ榜示杭があるから、それから右へ曲んなせえ。

旅◎ それは有難うございます、まだ餘程ござりまするか。

漁〇 さうサ、まだ此處から三里餘もあるだらう。さうしてお前方は、東京かえ。

旅□ へイ、左樣でございます。

漁△ 東京は何處だね。

旅◎　東京は片端でございます。

漁○　片端といふ橋を聞いた事がねえが、どつちの方だえ。

旅□　イエ、實は其の東京の片端で、千住の者でございます。

漁△　千住ならまア東京も同じ事だが、どうもお前方は東京の人には、ちつと見掛けねえと思つた。

旅◎　さうして、何とお見立てなさいました。

漁○　東京かと聞いたのはお世辭だが、どう見立てゝも、在の百姓衆に違ひない。

旅□　農民とのお見立は、えらい者でございます。

漁△　どうだ見立はえらからう、先づおら達が醫者なら、ヘボン先生も同じ事だ。

旅◎　其の醫者に就いてお聞き申度い事がございますが、金澤に癩病の名醫があると聞きましたが、御存じでございますか。

漁○　それは慥か甲州から來た醫者ださうだが、癩病の療治ばかりで、外の事はしないさうだ。

漁△　其の替りどんなに體が崩れた者でも、一年向うで療治をすれば、きつと治るといふ事だ。

旅□　さうでございますか、それぢやア實際の話しに違ひない。

旅◎　實は其の噂を聞きましたから、私等も尋ねて、金澤へ行くのでございます。

漁○ハヽア、それぢやァお前方は、癩病やみかえ。

旅□なに私等は癩病やみぢやァござりませぬが、身寄の者に筋があるから、何卒名醫に掛け度いと千住在から二人して、

旅◎遊山半分横濱から聞糺しに行きますのだが、其の醫者殿の名は何と云ひまするな。

漁△さうサ、聞いた樣な聞かねえ樣な、又見た樣な見ねえ樣な、おつな名であつたつけ。

漁○ヲヽさうだ〳〵、其の見えねえので思ひ出した、慥か松毛内庵とか云ツたツけ。

旅□ヘエヽ、それぢやァ癩病醫者で、松毛内庵樣と申すのでござりますな。

旅◎是れは忘れる氣遣ひなしだ。

漁△何でもそんな名であつたが、當時金澤で名高いから、

漁○癩病醫者と云つて聞きなさい、直ぐに知れるといふことだ。

旅□よい人に道を聞いて、安心して行かれます。

旅◎御親切樣に、有難うござります。

漁△まア早く、金澤へ行つて尋ねなさい。

漁○日が永いからブラ〳〵行つても、晩迄には行かれる。

旅□　左様なら、是でお別れ申しまする。

旅◎　大きに有難うござります。（ト旅人兩人上手へはひる。）

漁△　とんだ者に引つ掛つて、つまらなく暇を費やした。

漁○　それも此方が網を擔いで居たから、あんな肴に引つ掛つたのだ。

漁△　あれが何で魚だ。

漁○　ハテ千住在の者といふから、矢張りいゝに違えねえ。

漁△　何をいふのだ、サア俺を擔いだ替りに、此の網を擔いで行つてくれ。

漁○　ぼらア厭だよ。

漁△　いなでも應でも、擔いで行け。

ト無理に肩へ掛けるを振り落す、捨ゼリフにて又△網を取つて兩人爭ひ乍ら櫂を忘れて下手へはひる。浪の音濱唄にて、花道より玉橋お傳、達摩返し、洗髪、好みの拵へ、駒下駄履き、雇婆お熊兩人合乘の人力車に乘り出來り、花道にてお傳後ろを見る事よろしく、是に構はず車を舞臺へ曳いて來り

車一　モシお上さん、骨を折つて遣りますから、一ぱい飲ましておくんなさい。

お傳　いやな事をいふ車屋さんだねえ、わたしや始めてこんな事を聞くよ。

お熊　ほんにきざな事をいふ車屋だ、おい金澤迄行つたらば、お前方が言はなくつても一杯飲まして上げるから、極めた所迄早くお遣りな。

車一　ようござります、やれといふならどんなにでも早く遣りますが、ナウ松。

車二　さうさ、飲ましてやるとばかりおやア、張り合がねえが、さうして何程下さいます。

お熊　そりやア何程遣らうとも、此方の胸にある事さ。

車一　胸にあるか腹にあるか、下ッ腹に毛のねえお婆さん、もがいて向うへ行つてから、二人に一朱くんなすつても、酒手と言やア仕方がねえ。

車二　それだからかうして途中へ引出し、ぶう〳〵酒手をねだるのが、私等の規則でごぜえます。

お傳　私達は車屋さんの規則は知らないが、酒手を上げる事ぐらゐは聞かないでも知つて居るから、しつこく云はないで、早くお遣りな。

車一　しつッこく云ひ度くもありませんが、默つて居りやア極めた外に何程おくんなさるか分りません。

車二　とても下さる思召しなら、此處で酒手をおくんなせえ。

ト是にてお熊むつとして、

お熊　おつな事を云ふ人力だ、今初めて乘りやアしめえし、途中で酒手をねだられるやうな、そんな間

拔けとは少し違ふよ。

車一　エヽ、それぢやアお前さん方は間拔けでねえから、酒手を出さねえと云ひなさるのか。

お熊　何も出さねえとは云はないよ、金澤へ行つたら遣るといふのよ、譯の分らねえ人力だ。

車二　どうで私等は分りませんのさ、又譯が分りやア、何のつけに牛馬の眞似をするものか。

お傳　人通りが無いから良いけれど、外聞の惡い、こんな事を云はれると乘つて居ても心持が惡いね。

お熊　ほんたうに風の惡い人力だ、こんな車へ初めて乘つた。

車一　風が惡いと云ひなさるが、宿車なら知らぬ事、立ん坊の安車は酒手でも貰はにやア、何で急いでやるものか。

車二　後押を附けなさるくらゐだから物も言えねえ程もがいて來たのだ、默つて酒手をおくんなせえ。

お熊　いくら愚圖々々ねだつても、途中で酒手を遣るものかね。

車一　こゝで酒手をくんなさらなけりやア、氣の毒だがおりてくんねえ。

車二　こんな人の惡い客は、此方でお斷りだ。

お熊　人が惡いとは、おめえ方の事だ。いけッ太え事を云ふ車屋だ。

車一　何を私等が太え事を云ひました。

車二 酒手をねだつて太えと云はれちやア、

兩人 人力が曳けるものか。（ト梶をおろす。）

お傳 曳けずば止すとも勝手におしな、女だと思つて馬鹿にして、おりろといふなら此處で下りようぢやないか。

お熊 ア、下りなさいまし、此の車ばかり車ぢやアない、此の先きに幾らもあります、馬鹿々々しい、人を見損つた若い衆だ。

ト お傳とお熊兩人捨ゼリフにて車より下りる。

車一 此先きに六十を越したヨボ／＼爺と、九つになる餓鬼が後押をして居るから、それを安く附けて乘んなせえ。

車二 今日中と云ひてえが、今夜中には金澤迄、どうやらかうやら行かれませう、そんなら酒手は入りませんぜ。

お熊 乘らうと乘るまいと、大きなお世話だ、生意氣な事を云ひなさんな。

車一 それぢやア何も云ひませんから、

車二 車代を早くおくんなさい。（ト此内お熊小さな蟇口から錢を出して、）

お熊　サア途中で下りても仕方がない、金澤迄極めた錢を遣るから、氣の毒だと思つて取つておきな。

ト出すを、車の一受取つて、

車一　途中でおりたのはお前さんの勝手だ、極めた錢をくれるのに、恩に掛けるには及ばねえ。

車二　折角此處迄もがいて來たから、酒手はどの道貰はにやアならねえ。

お熊　ふざけなさんな、途中で下りて酒手を遣る奴があるものか。

車一　それぢやア金澤迄曳いて行つて、酒手をしつかり貰ひませう。

車二　此處迄來りやア返りは無し、どうで金澤迄空車で曳いて行くのだ。

車一　酒手をくれざア、

車二　二人とも乘んなせえ。

お傳　わたしやモウ此の車は厭だよ。

お熊　お止しなさいましとも、誰がこんな車に乘るものか。

車一　いやなら酒手をおくんなせえ。

お熊　こゝで遣るやうな毫倸はしないよ。

車二　此處でくれざア金澤迄乘んなせえ。

お熊　いやだ。
車一　いやなら酒手をおくんなせえな。
お熊　いやだよ。
車二　それぢやア早く、
兩人　乘つて貰はう。（ト口々に云つて引張る故、お傳仕方が無いといふこなしにて、）
お傳　歩く方が勝手だから、そんなに勸めないで、是を持つて默つて行きな。
ト半圓札一枚を遣る、車の一受取つて見て、
車一　こりやア五十錢下すつた。
車二　二分なら默つて歸るとしよう。
お熊　そんなにお遣んなさると、癖になります。
車一　ヘン、餘計な胡麻を摺りやアがらア。
車二　いやな摺古木だ。
お熊　どうしたと。
お傳　アレサ、おからかひでないよ。

兩人　大きに有難うございます。

ト兩人車を曳き、捨ゼリフにて惡口を云ひ乍ら花道へはひる。後兩人いま〳〵しきこなしにて、

お熊　モシお傳さん、どうせ遲くなりついで、此處で一服附けますから、まア是へお掛けなさいまし。

お傳　アヽ、それも宜からうねえ。

ト兩人岩臺へ腰を掛けろ、お熊袂より燐寸を出し、煙草を附け乍ら、

今日は飛んだ車に乘つて、詰らない日に逢つたねえ。

お熊　全體此頃の車屋は、女と見るとねだり掛け、誠に風が惡くなりましたよ。

お傳　此の間も何處かで娘を乘せた車屋が、淋しい所へ引込んで、なぐさんだとか云ふ事だが、女はうつかり往來で、知らぬ車には乘れないねえ。

お熊　今の二人の奴なぞは、見るからいやな奴であつたが、今日でこり〳〵しましたよ。

お傳　それはさうと浪さんの、乘つてる車はどうしたらうね。

お熊　浪さんは病人でも男だから大丈夫です。それに醫者は下手でも世才の長けた桑原雷庵さんが一緒だから、案じるには及ばないわね。

お傳　それでもあんまり、遲いではありませんか。

お熊　今の車が馬鹿に早いのに、浪さんの乘つた車が法外に遲いから、四五町は遲れましたらう。

お傳　それにしても、モウ見えさうなものだねえ。（ト向うを見て、案じるこなし）

お熊　コレサそんなに苦勞にしなさらないでも、此處を通るに違ひありませんよ。

お傳　人の亭主だと思つて、大そう落ち附いておいでだね。

お熊　可愛さうに、私しやそんな不人情ではありませんよ。

ト捨ゼリフにて煙草を呑み乍ら、始終向うへ思入あつて、

お傳　さつきから餘程になるが、又道で間違ひでもありましたのかねえ。

お熊　なに、間違ひはありやアしないが、いか程待つても浪さんの車は、此處へは來ますまいよ。

お傳　こゝへ車が來ないと云ふは。

お熊　けふ金澤の癩病醫者へ療治に行くと連れ出して、雷庵が途中から、山手へ車を引込んで、實は浪之助さんをまいたのだ。

お傳　エヽ。（トびつくりして、お熊の袖を捕へ、）何で浪さんを、まいたのだえ。

お熊　傍に居ては邪魔になるから、雷庵さんと云ひ合せ、後へ遲れて脇道へ引込ませたは此方の計略、邪魔を拂つてこつそりと、お前を爰へ連れ出したのだ。

ト お傳合點の行かぬこなしにて、

お傳 そりや何の用があつて、妾をお前が。

お熊 イヤ、連れ出したは、私では無いよ。

ト此内庚申堂より、佐藤七藏、着流し駒下駄にて出掛り居て、

七藏 其の頼み手は、おれだ。（ト平舞臺へおりろ、お傳びつくりして、）

お傳 ヤ、お前は七藏さん、いつ東京からござんしたえ。

七藏 昨夜から來て野毛へ行かずに、おぬしを連れ出す工風を取り、首尾よく爰まで連れ出したのだ。

お傳 何でお前が妾をば、こんな所へ連れ出したのだえ。

七藏 何でとはお傳さん、あんまり察しが惡いぢやァねえか。

ト鳴物無し禪の勤めになり、岩臺へ腰を掛け、

いつぞや草津の湯治場で、出逢つた時からぞつこん惚れたが、亭主のある身に仕方なく、時節があらうと胸を押へ、心で思つて居る内に、ふとした事からお互ひに素性を名乘ればおれが今、世話をして居るアノお種と腹替りの姉妹、不思議な縁とおれもお種も妹を一人拾つた氣で、亭主の療治をするならば、ヘボン先生に掛るがいゝと勸めて濱へ遣らせたも、どうかお前をおれの手に

入れてえと思ふからだ、今迄月に十日と來ねえ野毛の内へ、此頃は足を近く遣つて來るが、お種が堅い女だから片時傍を放れぬ故、言ひ出す事もほんのたまさか、そこで今日は親切ごかしに、今金澤で名の高い癩病醫者をだしに使ひ、首尾よく内を連れ出したは往來稀な此の根岸で、お前をおれが口說き落し、日頃の思ひを晴らす氣で醫者の雷庵お針のお熊、三人寄つて諺に云ふ文珠の智慧を揮つたのだ。（トお熊こなしあつて、）

お熊 モシお傳さん、新造ッ子ぢやアあるめえし、そんなに恥かしがる事はないわね、是程迄に旦那さんがお前に惚れて居なさるから、應と云つて七藏さんの言ふ事をお聞きなさいな、さうさへすればいつ迄も氣兼もせずに濱に居られ、月々五圓の小遣を下さるといふ旨い話し、みんなお前の爲めだから、後押附きの人力で急がせたのも又こゝで、酒手をねだらせおろしたも、みんな私の口車で、梶を取つた二人乘り、後の車の浪さんと乘り替へておしまひなさいよ。

ト云へどもお傳ぢつと俯向き居る。

七藏 得心して抱いて寐りやア、今お熊が云ふ通り、五圓宛の小遣は月毎に贈つてやり、それで足らずば足しても遣らうし、又着てえ物があるならば商ひ物で内にあるお召糸織古渡りでも、好きな物を着るがいゝ、亭主を裾にそでねえと思ふは古風な野暮仕立、當時は何でも襟に附き肩身を廣く

上綺羅で光つて居るのが流行るから、癩病やみで繼ぎだらけなどんつく布子を思ひ切り、唐繻子博多を締めてえ時、言ふ用を出して其の帶を、うんと云つて解きなせえな。

ト此時お傳いま〳〵しき思入あつて、又氣を替へ、

お傳　見る影も無い私をば、いつぞやから兎や斯うと云ひなさんしたは常談かと、實は思つて居りましたが、人迄頼んで是れ程に云うて下さんすお志し、わたしや嬉しうござんす故、お前の心に隨ふと云ひ度い事は山々だが、どうもそれでは世話になる姉さんへ濟まぬから、どうぞ堪忍して下さいまし。

トお傳愁ひのこなし。

七藏　お種がおれの女房なら、義理を立てるも尤もだが、彼れは月に何程と云ふ云はゞおれの奉公人、何濟まねえ事があるものか。

お傳　假令お上さんで無いにもせよ、お前さんにわたし達が斯うしてお世話になりますも、皆姉さんの縁がある故、其の姉さんがお世話になる旦那に枕を交しては女の道が立たぬから、是ればかりは七藏さん、何卒諦めて下さいまし。

七藏　姉に〳〵と體をよく女の道が立たぬと云ふが、赤の他人のあのお種に、何で義理が入るものか。

お傳 なに、姉さんが他人とはえ。

七藏 二人が實の姉妹で、ねえのは疾から知つて居る。

お傳 エヽ。(トぎつくりこなし、)それでは何ぞ證據でも。

七藏 云つて聞かせるから、びつくりしなさんなよ。(ト合方替つて、)沼田の家中で名の高い、室瀬郡右衞門が落し胤と云ふのはお前の拵へ事、草津の湯場で襖越しお種の素性を薄々聞き、守りを盜んで中にある臍の緒書で名前を知り、東京へ出る足代に落し胤の妹と僞り、産れが士族で人の好い、お種をすつかりだまし込み、此の間から濱へ來て野面で世話に成つて居るは太え奴だと其の時から、おれは目を附け知つて居るが、腹に似合ぬ勝れた器量に、欺されるのを幸ひと、今日迄おれが仕送つて、お前の世話をして來たも、賴みを聞いて貰はうばつかり、太え女と見込んだも、又見込まれたも因緣づく、然しお種に此事は決しておれが云はねえから、應と云つて抱かれて寐ねえ。

お傳 お世話になるお前故、わたしや默つて聞いて居るが、太い女と云はれるやうなそんな後ろ暗いお傳ぢやアありません、わたしの母は室瀬樣へ奉公に上つて居る内、旦那樣のお手が附き身重になつて三月目に、お妾で居たお幾樣のお目に掛つて悋氣が強く、よんどころ無くお暇が出て、內へ歸

ると其の月に今の父さんの玉橋へ縁が極つて嫁に行き、七月目で產んだがわたし、ヤレ御持參のお土產のと人の口がうるさいから、世間へは月足らずと云つて其折濟ましたも、まことはお手が附いた時、母が宿した落し胤、知らぬ先きは兎も角も、名乘つて見ればわたしは腹は替れどお種さんと胤は替らぬ實の同胞、如何にお前の云ふ事を聞かぬからと云つて、今の樣なきざな事をお云ひなさるな、立聞きしたの守をば盜んだなどゝは覺えの無い事、常談にもそんな事をもしも誰れぞに聞かれたら、どんな間違ひにならうも知れない、必ず云うて下さんすな。

ト落附いて云ふ故、お熊冠せて、

お熊　チイ〱お傳さん、好い加減にお云ひなさい、今迄お前に隱して居たが、わたしは室瀨のお屋敷に年久しく仲働きを勤めて居た故何も彼もあそこの事なら知つて居るよ、噓も大概に云ふがいゝまだ〱それよりびつくりする話を私が知つて居るのは、藤川村は私が在所、死んだ親仁の墓參りに故鄕へ歸つた其の時に、お前と浪之助さんが傳手を求めて、沼田在の幸正寺といふ寺の座敷を借りて居る內、空善といふ和尙さんを旨く欺して膳を据え、密夫と言ひ立て五十圓手切れの金を二人で取り、それを路用に出立して、病氣の爲めに草津で湯治、搜索方ぢやァないけれど、在所で殘らず聞いて來ました。（ト此內お傳思入あつて、）

お傳　連添ふ人が業病故、旅を抱へて草津で湯治、路用も乏しい私達が姉に逢つたは神の助け、それを御縁に濱へ來て厚いお世話に成るわたし、どういふお前は履き違ひか、そりや人違ひでござんせう。藤川村の幸正寺に座敷を借りて居たなどゝは夢にも私は知らぬこと、人をだまして手切をば取るくらゐずるい氣が私にあれば何で又、七藏さんへ氣兼をして姉の世話になりますものかね、大概積りにも知れたものではありませんか。

ト飽く迄落附いて居る故、お熊ぢれ込みし思入にて、

お熊　幾らお前がしらばツくれても、根こそげ知つてるお前の素性、圖太いにも程がある、こんな太い女には初めて掛り合つた。

お傳　何を私が太い事をしましたえ。

お熊　かうもしらが切れるものかねえ。

お傳　惡い事をした覺えがないから、それでお前に聞きますのさ。

お熊　ほんに顔に似合はない、強情な女だなア。

七藏　コレお傳、知らねえ事なら知らねえで、モウ是れから云ふめえから、口を酢くしてくどいて居るおれが頼みはどうしてくれる。

お傳　どうと云つて私の體を、お前に任す其の時は、幾度云つても同じことだが、義理ある姉へ濟まぬから、思ひ切つて下さいまし。

七藏　それぢやアどうでもいやだといふのか。

お傳　アイ、今迄お世話になつて居た故、愛想づかしは云ひ度くないが、親切ごかしに車へ乘せ、こんな所へ連れ出して、湯場で守りを盜んだの、夫婦馴合ひ間男で手切を取つたと二人して、明るい體を闇の地獄迄もしたやうに亭主持へ難癖をよくお附けなさいました、こんな恐ろしいお前さんの何で自由になりませう、お内へ歸つて此の事を姉さんに云ひますから、きつと覺えて居なさんせいなア。

トずつけり云ふ、是にて七藏モウ是迄といふ思入にて、

七藏　赤の他人を何處迄も同胞だと情を張り、おれが心に隨はにやア、仕方がねえから思ひきるが、路用に迫つて幸正寺の和尚を引掛け金を取り、どうで汚れた體のお傳に嫌はれたのが癪に觸らア。

ト思入あつて、懷中より匕首を出し、お傳とちよつと顏を見合せ、双方氣味合ひよろしく、合方きつげりとなり、

今日こそ應と云はなけりやア殺して思ひを晴らす氣で、隱して持つて來た短刀、よもや役には立

つめえと思ひの外に強情な、いけッ太え畜生だ。幾ら手前がぴんしやんと荒れても今日は乘つ伏せて一泡吹かせにやァおかねえぞ。お熊婆アが別當で野毛から欺して引出した、所は異人が馬驅けの本牧下の根岸道、一番愛で乘るか逸るか、今日こそ勝負を附ける氣だ。今更愚癡を云ふやうだが、長の旅路に懐の路用も月毛と見た故に、否應云はさぬ金轡を掛けて心の手綱をゆるさせ、一鞍乘る氣で是れ迄に、幾度鞭を當てたか知らねえ、それも得心せぬからは人の手飼にさせるは無念、持つて生れた癇癪に息の根止める所さへ、雨降り擧句の馬ざくれで、往來も絶えた此の海邊、骨は海水で晒してやるから、四足を縮めて往生しろ。(トきつと云ふ、お熊こなしあつて、)

お熊　お前があんまり強情だから、こんな事にもなるのだが、死ぬ程惚れた亭主でも、崩れかゝつた癩病では死ぬ迄お前の厄介者故、死んだと思つて七藏さんに、應と云つて往生おしな、旦那も死ぬ程惚れて居るから何殺したい事があるものかね、死んでもいやと云ふかも知らぬが、それぢやァあんまり命知らず、死ぬ程馬鹿げた事は無いから、殺されるより生きて芝居を見ようとも、死んで馬鹿を見ようともお前の返事が生死の境、よく考へて七藏さんに色よい返事を聞かせなさい。

(ト七藏と顏を見合せこなしある、此時お傳口惜しき思入にて、)

お傳　いくら命が大事でも、お前に體を任しては、姉と夫へ濟みませぬ、情が強いとお思ひだらうが上

州生れの玉橋お傳、今はしがない身分でも、根が侍の落し胤、義理と操を破つては、養父や實父の名の汚れ。斯う云出したら殺されても、わたしや自由にならぬ故、憎いと思はゞ七藏さん、爰で殺して下さいまし。

ト覺悟のこなし、七藏お熊持て餘せし思入にて、

七藏　さうぬかしやァいつその事。（ト切つて掛るをお熊留めて、）

お熊　まア殺すのは、モウ少しお待ちなさい。

七藏　エヽ癇に障つてならねえから、モウ助けちやァおかれねえ。（ト切り掛けるをお熊止めて、）

お熊　アレサ、危ない、お待ちなさいッたら、お待ちなさいよ。

ト捨ゼリフにて止めて居る、波の音バタ／＼になり、上手より桑原雷庵散髪羽織着流しの醫者にて、玉橋浪之助を、糸織やつしなりにて引立て出來る、お傳浪之助を見て、

お傳　ヤ、浪之助さんではござんせぬか。

浪之　ヲヽお傳、其處に居たか、こなた衆二人が乗つた車は、影も形も見えぬ故、先へ行つたと思つたに、まだ此處に居やつたか。（ト云ひ乍ら七藏を見て、）ヤ、あなたは内の七藏さん、いつたい是はどうした譯でござりまする。

雷庵　此の體裁は問はずとも、今に了解しようから、まア自若として居なさるがいゝ。

お傳　見ればお前は手袋洗足、雷庵さんとあつちから此處へ歸つてござんしたは、金澤迄行かぬのかえ。

浪之　サアお傳聞いてくれ、根岸通りを山手へ行き、車を途中で歸してしまひ、分らぬ道をあちこちと引廻されて金澤の、醫者の所へ行かずにしまつた、此方は先きへ行つた故、どうした事と案じて居たに、無事で居れば安心だが、此の業病が癒したさに、毒と知りつゝ車へ乘り醫者の所へ行きもせず、却つて體が勞れたわいの。

ト體を擦り居る、雷庵こなしあつて、

雷庵　定めて全身激勞して、病苦激しく堪え難からうが、元より連れて行かぬ積り、今日七藏君が足下の細君、此のお傳を口說き落し抱いて寢るのに邪魔になるから、お爲めごかしに金澤の癩病醫者へ連れて行くと、不肖が嘘言をついたのだ。

ト是を聞き、浪之助びつくりする、雷庵お熊に向ひ、

シテお傳は、七藏さんの云ふ事を聞きましたか。

お熊　さつきから二人して脅して見たり擦つて見たり、棚の達摩さんではないけれど、口で轉がしても見たりして、手を替へ品を替へて口說くけれど、よく／＼達摩の性だと見えて、どうしても寢な

いのさ。

雷庵　それは餘程重い尻と見えるわえ。（ト此内浪之助扨はといふ思入あつて、）

浪之　それでは今日金澤へ療治に連れて行くと云つたは、お傳を口說く手立であつたか、さうとは知らず草津から女房の緣で業病の穢い身體を厭はずに置いて下さるのみならず、時折お傳に小遣迄惠んで下さるお志し目の寄る所へ玉とやらで、雷庵先生お熊殿も、皆眞實な人達と、今日迄思ひ欺されたか、おりや口惜しい〳〵。

ト足摺りをして口惜しき思入、お傳此の體を見て、

お傳　ヲヽ尤もでござんす、妾も今迄此の樣な惡い心と夢にも知らず、お世話になつてをりましたが今日といふ今日目が醒めて、內へ歸るも厭でござんす。

浪之　ヲヽ誰が野毛へ歸るものか、お種殿には濟まぬけれど、落ち付く先きから手紙にて言譯すればこゝから直ぐに、其方を連れて何れへなりと、少しも早く立ち退きませう。

お傳　そんなら、共々。

浪之　お傳來い。

トお傳の手を取り行かうとする、七藏お傳を引戻す故、寄らうとする浪之助をお熊むごく突倒し、起

上るを雷庵引き附ける、是れを見てお傳駈け寄るを、お熊隔て、七藏短刀を差附けきつと見得、時の鐘、凄き合方になり、

七藏　獨り身ならぬ七藏が、亭主持のお傳に惚れ、あつちこつちと氣を配り、無駄な金を遣つた上に、圍つて置くお種にも、内證で口說いたが、斯うひらぶッ附けに言つたからは、出來なけりやァ今日限り、諦めの爲め女も野郎も、手荒い事をしにやァならねえ。

お熊　お前が應と云ひさへすれば、浪之助さんの癩病も、七藏さんがお金を出し、

雷庵　治すは不肖が周旋して、今度はまことに金澤の、名醫に掛けて療治をさせるが、

七藏　いやと云やァ此の野郎を、今見るめえで殺してしまふぞ。

ト白刃にて浪之助の額を叩く。

お傳　エヽ情ない七藏さん、親を置いて上州から、病を治す其の爲めに、連れ立つて出た亭主をば、叶はぬ戀の意趣返しに、殺す樣な邪險な人に假令死んでも此體を、わたしやお前に任せぬわいなァ。

七藏　さう決心しちやァ七藏の、所詮心に隨ふめえから、此世の思ひに飽きる程、なぶり殺しに殺してやらう。

ト此時知せなしに、灯入れの半月を引出し、兩窓を下す、皆々、なしあつて、

お熊　おや／＼、たうとう日が暮れてしまつた、晝から夜に入る迄無駄骨を折つた腹癒せに、思ひ入れ此奴をなぶつて置き、みじめを見せて遣らにやアならねえ。

雷庵　癩病やみで甚だしい臭氣を嗅ぐもどつとせぬが、醫者の役で仕方がない、生かすは下手だが殺すのは、至つて功者な桑原雷庵。ドレごろ／＼と息の根を、

お熊　二人でそろ／＼、

兩人　止めてやらう。

ト兩人して浪之助の手を取り酷くする、浪之助切なき思入、是をお傳見て居られぬといふこなしあつて、

お傳　サア七藏さん、早く爰で二人一緒に、どうぞ殺して下さんせいなア。

ト七藏に身を寄せる。

七藏　イヤ一思ひに殺したら、其方の勝手はよからうが、惚れて居るだけ未練があるから、まだ／＼急には殺さねえ。（ト此内お熊漁師が忘れし櫂を見附け、）

お熊　いゝ物があつた、業突張りを打ち殺せと、お月樣が教へてくれた、櫂で此奴の證をば、叩き嗆にしてやらう。（ト雷庵手拭の端へ石を包み、ブラ／＼下げて居て、）

雷庵　成程それはい、機械だ。僕も機械を發明したから一つ用ひて試して見よう。

ト　お熊櫂を持ち、浪之助を打ち立てる、雷庵は石にて擲る。浪之助兩人を留め乍ら苦しき思入、お傳たまり兼ね、

お傳　こりやモウ、どうも。

ト引き附け居る、七藏を振拂ひ、止めに行かうとする故、

七藏　エヽ、ぢつとして居やアがれ。

ト又引捕えるを振放す、合方早めて立廻りの内、雷庵振つて居た手拭の石七藏の手へ當り、七藏の手痛むこなし、お傳附け入り短刀をひつたくり七藏に切つて掛る、七藏慌て庚申堂へ逃げ込み扉を締める、此の内浪之助櫂に縋り放さぬ故、お熊雷庵モウ宜いといふ思入にて、浪之助の手を取り岩の上より下手の海へ打ち込む。波の音激しく、波の花パツト立つ、お傳びつくりして此方へ來て、

お傳　ヤ、こりや浪之助殿を、二人して。

雷庵　波の深みへ水葬禮、施主の二人へ禮を云へ。

お傳　揃ひも揃ひし人非人め、叶はぬ迄も夫の敵、覺悟しや。

お熊　生ぎゝな事を云ひなさんな。

ト短刀を取りにかゝる、雷庵櫂にて打つてかゝる、お傳兩人を相手に立廻りよろしくあつて、お熊を一肩切り岩へ上り掛けた儘、三人絡んできつと思入、岩の上にて兩人を切り倒す、お熊雷庵落入りながら海へ落ちろ、お傳平舞臺へ下り、ホツト思入、此時庚申堂より七藏扉を半開きにして覗く、お傳是を見てきつとなり、堂の内へ駈上り、切つてはひろ、横手の羽目を破つて七藏逃げて出て岩より飛下り、どうとなり、お傳も破れより出て短刀を振上げきつと見得、誂への早き合方へ鈴を入れし鳴物になり、七藏櫂を持ち兩人立廻りよろしくあつて、七藏短刀を捥ぎ取り、お傳へ切つて掛る故、岩の上へ登るを、七藏帶の端を捕へ引戻す、帶は解けて七藏どうとなる。此間にお傳海へ飛込み波の花パツト立つ、七藏起上り帶を持ちし儘岩の上より海を見込んできつと思入、本釣鐘、合方きつばりとなり、

七藏　惡事にかけては男も及ばぬ、奸智にたけた玉橋お傳、殺す心もなかつたが、脅しの爲めの短刀が害となつて二人三人、命を捨てさせ肝腎の女も海へざんぶりと、覺悟を極めて飛び込めば、おれの念もさつぱりと月と一時に晴れてしまつた。たいしてふめぬ此の帶も殘しておけば思ひの種、賃錢云はずに負けてやらう。（ト海へ打ち込みこなしあつて、）あつたら物を、惜しい事をした。

ト短刀を鞘へ納め、邊りへ思入あつて、皆々の履物を海へ打込み、着物の塵を拂ひ乍ら、向うを見て

ひつくりなし、
や、向うから來る靴音は、樋にこゝらを廻る警官、見咎められちやア面倒だ。此處へ來ぬ内山手へ廻つて。ドレ、脇道から歸らうか。

ト波の音、合方早めて、上手へツカ／＼とはひる、跡ドロ／＼になり、知せに附き此の道具居所替りになる。

（横濱仙元下妾宅之場）　本舞臺眞中岩臺のみ殘り、ドロ／＼にて差金の蝶を上へ引上げる、岩臺に長平の火鉢となり、總て野毛山下妾宅の體、直ぐに上手の二階より お傳障子を明け、階子段へ足を踏み出しホツト思入。

お傳　そんなら今のは、夢であつたか。（ト合方になり、）浪之助さんを金澤へ、療治に遣つた其の後でちよつと樣子を聞き度いと、案じ乍ら轉寢したが、芯の勞れで恐ろしい怖いめに逢つた所を、夢に見たのでびつくりしたが、ア、是れに附けても浪之助さんの、體に何ぞありはせぬか。案じられることぢやなア。

ト流行唄になり、正面茶立口よりお種、女房の拵へにて出て、

お種　何處へ行つたと思つたが、又轉寢かえ。

お傳　ハイ、怖い夢を見ましたわいなア。（ト下手へ下り、ホツと思入。）

お種　嬉しいのか悲しいのか私には分らないが、どんな夢をお前見たのだえ。

お傳　姉さん聞いて下さんせ、雷庵さんのお世話にて、今日金澤で癩病の、療治をなさるお醫者の所へ浪之助さんを一週間、療治をお頼み申しましたが、治り難ないあの業病、片時胸に忘られず取越し苦勞をしますので、怖い夢を見ましたわいなア。

ト汗を拭き乍ら言ふ、お種不便だといふこなしあつて、

お種　長い間の看病勞れでちよつと眠つても夢を見るのは、尤もでござんすが、雷庵さんは内の旦那のお心安いお醫者故、必ず案じる事はないから、氣を丈夫に持つておいでな。

お傳　イヱ案じるわけではござんせぬが、惡い夢を見ました故胸騷ぎがしてなりませぬから、ちよつと金澤迄行つて來たうござります。

お種　夢見が惡く案じられるなら、遣らないでは無いけれど、モウ今からでは遲からうし、お前一人金澤へ遣るのも何だか氣がゝりだねえ。

お傳　どうで行くには車故、お前が不斷乘り附けの喜八さんを頼みましたら、暮れぬ内に行かれませう

どうぞ遣つて下さいまし。

お種　そりやア行かれもしやうけれど、車で行つても淋しい故、女一人で今から行かすと、明日早く起きてお出でな。

お傳　さう云つて下さんすを私や悪うは思ひませぬが、夢見の悪い其の上に胸騒ぎがしてなりませぬ故、どうで今夜は寝られもせず、内で案じて居るよりは少しも早く行き度うござんす。姉さん後生でございますから、是非遣つて下さいまし。

お種　それ程に迄お云ひのを無理に止めて浪さんに、どんな事でもあつた時は。（ト思入あつて、）それでは今から行つてお出でな。

お傳　そんなら姉さん、遣つて下さいますか。

お種　お前の心を察して見ると、強ひて行くなと云はれぬ故、暮れぬ内に支度をして、少しも早く行つておいで。

お傳　別に支度もござんせぬが、此間下さんした、あの半纏を着て行きませう。

お種　そんなら早く着ておいで。

お傳　有難うござんす。（トそわ／＼せし思入にて、二階へ上る。後にお種こなしあつて、）

お種　腹違ひとは云ひ乍ら胤は一つのあの妹、不思議な縁で草津から内へ引取り世話をするも、人の厭がる業病を、亭主と思へば親切に世話をするのは感心故、永く置いて遣り度いがさうもならぬはいつぞやから、七藏さんがお傳に惚れ、附けつ廻しつしなさるのが私の目にも掛る故、長い内には口舌の種、いつそ金澤へ行つた方が却つて苦勞が休まれば、ドレ小遣を持たして遣りませう。

ト　お種立上り、小簞笥の引出しより札を出す。爰へ上手二階よりお傳半纏を着て出來り、

お傳　それでは今から金澤へ、私や行つて參りまする、もし東京から旦那のお出であつたら、宜しく云うて下さんせ。（ト此内お種札を出し紙に包み、）

お種　お傳、あんまり少いのだけれど、是をお前に上げるから、路用の足しに持つておいで。

ト出す、お傳氣の毒だといふ思入にて、

お傳　有難うはござんすが、少し爰に持つてをりますから、御心配には及びませぬ。

お種　そりやア少々はあらうけれど、近い所でも旅だから、少しも餘計に持つておいで。

お傳　お世話になる其の上に、此樣なお心遣ひを掛けましては、お氣の毒でござんすなア。

お種　アレサ何だねえ、同胞の中に其の樣な、遠慮をせずと遲くなるから、是れを持つて早くお出で。

お傳　それ程に迄おつしやる故、濟まぬけれど此金を、お貰ひ申して參りまする。何とお禮を云つてよ

いか。エヽ有難うござんすわいなア。

ト札を持ち涙乍ら禮を云ふ、お種も愁ひのこなしあつて氣を替へ、

お種　そんな事を云つて居る内、段々行くのが遅くなるから、早くお出で。

トこなしあつて云ふ。お傳氣を替へ、

お傳　ドレ、暮れぬ内に參りませう。（ト門口へ行く。）

お種　もし喜八さんが居なんだら、アノ内へお頼み。

お傳　ハイ、さうしますわいなア。

お種　それぢやア氣を附けておいでよ。

お傳　有難うござんす、そんなら行つて參ります。

ト端唄になり門口を締めて行きかゝる。爰へ花道より以前のお熊糸を持ち出來り、花道にて行き逢ひ。

お熊　お傳さん、何處へお出でだえ。

トお傳ぎつくり思入あつて、

お傳　ヲヤお熊さん、今お歸りか、私しやちよつと其處まで。（ト行掛ける袂を捕へ。）

お熊　まアお傳さんお待ちな、何處へお出でか知らないが、此間から頼んでおいた七藏さんの一件を、應と云つて言ふ事を、どうぞ聞いて上げておくれな。

お傳　此間から其の話しを度々私にしなさるが、亭主のある身でそんな事が、何でお前出來るものかね、モウ其の事は二度と云つておくれでないよ。

お熊　二度と再び云ふなとお云ひだが、お前だつて亭主の外に一人や二人拵へたつて何も疵の附く體でもありますまい、さうさへすれば七藏さんから、私にお藏も何がしか立つことだから、言ふ事を聞いてお上げなさいな。

お傳　私を惡婆か何ぞの樣に鎌を掛けてお云ひだが、そんな後ろ闇い事の無い、白几帳面の淸淨な體難癖附けておくんなさるな。

お熊　さう愛想盡かしを云ひなさりやア、モウ、其の事は言はないが、其の替りお前の素性を云ひますよ。

お傳　別に言はれる事は無いから、何とでもお云ひな。

お熊　いゝかえ、きつと云ふよ。（ト憎々しげに云ふ。）

お傳　アイ、何にも言はれる事はありませんよ。

ト端唄になり、お傳所詮是れ迄と云ふ思入あつて、互ひに振り返り〳〵、捨ゼリフにて花道へはひる、お熊見送つていま〳〵しいといふこなしあつて、

お熊　ヤイお傳、見やァがれ、二度と再び歸られねえやうにして遣るぞ、あんな太え女はありやァしねえ。（ト舞臺へ來り、門口を明け、）ハイ只今。

お種　お婆さん、何處へ行つてお出でだ。

お熊　あなたのお袷を縫ひ掛けましたら、少し糸が足りませんから山形屋迄行つて買つて來ました。

お種　さうかえ、買はないでも田舍から貰つたのが、まだ内にあつたよ。

お熊　おや〳〵、さうでございましたか、いけない事をしましたね。

お種　なに、どうで入るから無駄にはなりはしないわね。

お熊　ほんに、お聞き申せばようございましたッけ。さうしてお傳さんは、何處へ行きましたえ。

お種　お傳は今迄轉寢をして居たが、金澤へ行つた浪之助の夢見が惡いと氣を揉んで、見に行き度いと云ふから、モウ遲いしあした早くお出でと云ふのに、行き風が立つたと見えて、是非遣つてくれろと云つて、今金澤へ立つて行つたよ、彼れも病人で苦勞をするから、可愛さうでならないよ。

ト お熊思入あつて、

お熊　お種さん、いゝ加減に眉毛へ唾を附けておいでなさいよ。
お種　そりやァ何故だえ。
お熊　あのお傳さんは、お前さんの妹ではございませんもの。
お種　なに、お傳が妹で無いとわえ。(ト合點の行かぬこなし、合方きつぱりとなり)
お熊　此間からお前さんに委しいお話しを仕ようと思ひましたが、あの子のお袋は新造ッ子の時分から浮氣者で、破落漢にくッつき、身重に成つて同村の玉橋勘右衛門の所へ片附き、月足らずと護摩かして七月目に産んだのが彼のお傳でございますのさ、それを室瀬様のお手が附き落し胤だなぞと云ふのは、何を證據に云ひましたか、太え奴ではございませんか、まだ其の上にお世話になるお前さんの目を忍んで、内の旦那の七藏さんへ、此間からぢやらくらして、どうか授けた様子故、金澤へ行つたらばそれを幸ひ追ひ出して、モウ内へお寄せなさいますな、うつかり永くお置きなすつたら、終ひにはどんな事を仕出すか、飛んだ目にお逢ひなさいますよ。
ト焚附けて云ふ、此内お種思入あつて、
お種　それではいつぞや湯治場で、私の守りが無くなつたも、人を疑ふではなけれども、若しやお傳が盜みでもしたのではあるまいか。

お熊　それはさうかも知れません、噂に聞けば藤川村の幸正寺に居る内に、和尚様へ膳を据え浪之助と言合せ馴合間男で金を取り、それで草津へ行つたとやら、あんな柔和な顔をして居ても、なかなか油断のならない悪婆でございますよ。

お種　さうとは知らず腹替りの、實の妹と思つた故、無けなしの物を分けて遣り、世話をしたのが腹が立つ、又二つには七藏さんが不斷に似合はずかれこれと二人の世話をしなさんしたも、お傳と譯がある故か、今の今迄かういふ事と夢にも知らず欺されたが、今々思へば口惜しい、私や悔しい悔しいわいな。

ト口惜しき思入、お熊しめたといふこなしあつて氣を替へ、

お熊　人のいゝお前さんだけ、お腹の立つのは尤もでございます、私もかうしてお内に居れば、矢張り悔しうございます。

お種　人のいやがる癩病の、世話をした上お傳にもよく貸して遣つたが腹が立つ。お熊どん、悔しいねえ。

お熊　アヽ御尤もでございます〳〵。

ト泣き伏す、お熊脊中を擦り乍ら、

ト態と悔しき思入、一中節模樣の唄になり、花道より以前の七藏、羽織着流し、駒下駄を履き蝙蝠傘を突き、後より以前の電庵附いて出來り、花道にて、

七藏　それぢやァ此間云つた通り、浪之助を金澤の癩病醫者へ連れて行つたか。

雷庵　お頼み通り、今日車で一週間預けましたから、お傳さんを此の間に、口說いて思ひをお晴らしなされませ。

七藏　それは大きに骨折であつた、首尾よく行つたら雷庵さん、何をお前に禮をしようね。

雷庵　左樣さ、いつち調法な物と申しては、長袖の身で品行を害しますから、コウお願ひ申しませう。羽織が垢で光りますから、何ぞ一枚頂戴しませう。

七藏　そりやァ何より易い事だ。

雷庵　どうかなるたけ上等を。

七藏　それでも醫者は、下等だ。

雷庵　これは怪しからぬ。（ト兩人舞臺へ來り、門口を明ける、お熊見て、）

お熊　是は旦那、入らつしやいまし。

七藏　婆さん、此間は御苦勞であつた。

　　ト上手へ通り、よろしく仕ふ。

お熊　どう致しまして。（ト座蒲團を敷くことあつて、）

雷庵　今朝は失敬でござつた。（ト下手へ仕ふ。）

お熊　チヤ先生、旦那と御一緒でございますか。

雷庵　只今坂にて御面謁仕つた故、御同道致しました。

お熊　さうでございましたか。

　　ト七藏へ湯呑にて茶を出し、雷庵にも出す。此内お種俯伏し居る。

七藏　コレお種、おれが來たのに物も言はず、何を考へて居るのだ。（ト合點の行かぬこなし。）

雷庵　お種の君には御不加減と見受けますが、どうぞなされましたかな。

お種　アイ、さつきから血の道で、心持が惡うござんす。

雷庵　成程、至極御尤も、御血色の容體と申し、左もあるべう心得ます、然らばちよつと診察仕りませう。

お種　なに、それには及びません。

お熊　按摩はいゝが、雷庵さんの藥は飲み度くありませんね。

雷庵　さう廉に言はぬものだ、是でも今に拜命を得て、百圓も給を賜はる存意だ。
お熊　慾は怖いねえ。
兩人　ハヽヽヽ。（ト兩人笑ふ、七藏こなしあつて、）
お藏　お種、お傳は何處へ行つた。
お種　何處へ行つたか、お傳の番はしませんよ。（トツンとして居る故、七藏むつとして、）
七藏　コレおつな事を手前云ふな、知らなけりやァ知らねえでいゝに、番をしねえとは、何の云草だ。
お種　お前さん、何も怒りなさる事はありません。アヽ何でございますね、折角態々東京から當て込んでお出でだのに、お傳が内に居ないので、それで腹をお立ちなのかえ、お氣の毒でござんすな。
七藏　來た時から、おつな素振、（ト扨はと云ふこなし、）此奴ァお傳と譯でもあると、お前思つて居るのだな。
お種　アイ尾敷育ちの愚鈍故、やう／＼今日氣が附きました。
七藏　ハヽア、是は誰かゞしやくりやァがつたな。
　　トお熊へ思入、雷庵こなしあつて、
雷庵　旦那とお傳さんと左樣な不體裁はござるまいが、金澤へ送つて行つた病人から用があるが、お傳

さんは化者かなア。

お熊　浪さんの身を苦勞にして、金澤へ行きなすつたから、言傳なら氣を揉むには及びません。

雷庵　それぢやア後から金澤へ　こいつは、羽織にならぬか知らん。

お熊　なに、羽織にならぬとは。

雷庵　何サ、此の着物を羽織に直す積りだが、膝が抜けて居るから難かしからう。

お熊　何を先生辻褄の、合はぬ事を云ひなさる。

七藏　ドレ、俺も今夜は歸らうか。（ト煙管をしまふこなし、）

お態　何故旦那、お歸んなさる。

七藏　お種が腹を立つて居るから、居た所がをかしくねえ。

お熊　それと云ふのも、お前さん故でございまさあねえ。

七藏　何がおれ故だ。

お熊　お傳さんに氣があるからさ。

七藏　なに、おらア少しも氣はねえが、雷庵さんが勸めるから。

雷庵　アヽ、モシ〳〵、左樣な事をおつしやると、按摩の御用が上つたりだ、御常談は述べ給ふべから

ず。

お種　雷庵さん、羽織とかにはならないから、覺えておいでよ。

雷庵　イヤ、是は悪い役廻りだ。

七藏　老人は仕方がねえ。

雷庵　それはあんまり憫然だ。

お熊　旦那、まアそんな事をおつしやらずと、早くお酒になさいまし。

七藏　何ぞお熊言つて來てくれ。

お熊　お肴は後にして、まア有り合せで上げませう。（トお熊奥へはひろ、お種矢張り鬱いで居る故、）

七藏　コレお種、いつ迄そんなに腹を立つて居るのだ。

お種　私や悔しくつてなりませんから

七藏　何がそんなに悔しいのだ。

お種　あのお傳に欺されたのが。

七藏　それをお前は、今知つたか。

お種　マア、そんなら疾からお前さんは。

七藏　知つて居るが、云はずに居たわ。

雷庵　旦那も深い思召しがござりましたのさ。

お種　ソレ御覽なさい、矢張り惚れておいでのくせに。

七藏　いやな所へ氣を廻すが、それはお前の勘違ひだ。

雷庵　外に勘の附け所がございませう。

お種　それでも何だか私にはエ

ト爰へ奥よりお熊、蝶足の膳へ香の物、浸し物など載せて燗徳利を添へ、持つて出で來り、

お熊　ハイ、お燗が附きました。（ト出す。）

お種　アヽびつくりした、靜かにお云ひな。（ト七藏へこなしあつて、）さうして、深い譯といふのわえ。

七藏　ドレ、一杯遣つて、

ト膳を取り上げる、お種德利を手に取り、熱いといふこなしにて、耳を手で押へるを、木の頭。

ゆつくり話さう。

トお種酌をして七藏酒を飲む、お熊はおれが仲直りをさせたといふこなし、雷庵感心の思入、此の模様端唄にて、

ひやうし　幕

三幕目

吉田新田人足宿の場
品川浦御臺場脇の場

〔役名——人足宿肴屋清五郎、田川吉太郎、玉橋浪之助、船頭野毛の辨藏、藪醫雷庵、船頭築地の紋次、丁稚長松、石炭人足。浪之助女房お傳、雇女およく、金貸勘次等。〕

（吉田新田人足宿の場）——本舞臺平舞臺、上手に四尺程の二階家、丸太梯子、正面上手押入、續いて障子、いつもの所門口、さゝらこ羽目、土塀、總て石炭宿の體よろしく、爰に○△□◎の石炭人足散髪鬘筒袖の拵へにて、大皿へ蟹のゆでたのを入れ、筒茶碗にて酒盛をして居る、下手に雇婆およく、箱火鉢の鐵瓶にて酒の燗をして居る、野毛山しげさの唄にて幕明く。

人○　コレ權右衞門、いつ迄茶碗を控へて居るのだ、早く廻さねえのか。

人□　今熱いのが來た所で、グツト飲んで廻すから、そんなに急かずと落ち附いて居ろ。

人△　イヤ熱いのぬるいのと、文句を附けて、さう駈けつけられてたまるものか。

人◎ さうだ〳〵、御臺場宛出しッこで、一升買つた酒盃だ、割に當るやうに飲まにやァならねえ。
○ おい婆さん、モウ燗が附いたらう。
よく 附いたか附かないか、飲んで見よう。
□ えゝ、そこで彈けられてなるものか。
○ サア〳〵、早くこつちへ出しねえ。
△ 西洋風で、置注ぎがよからう。（ト皆々茶碗を空へ、酒を注ぐ事。）
よく せめて酒屋の遣ひ賃に、蟹を一ぱい貰つて行くよ。
◎ 當ると惡い、よせばいゝ。
よく 喰べ物に當つて死ねば、私や本望だと思つて居ます。
○ イヤ喰ひ意地の張つた婆アさんだ。
□ 然し年寄と云ふやつは、喰ふより外に樂みはねえものだ。
△ 其のくせ色氣もあるやうだが、構ひ手のねえので、諦らめて居るのだ。
よく モウ十年も若けりやあ、ラシヤメンにでもなつて男を迷はせ、雇なんぞに出るものか。
○ ラシヤメンと云へば、二階に居る夫婦連れの上州者、亭主が癩病で煩つて居るを別嬪の女房が貞

女を盡し、よく看病するさうだが、何と感心なことではないか。

□ 亭主がなけりやァあのくらゐの器量を持つた別嬪故、月に十圓の圍ひ者からラシャメンにでもなつた日にやァ、榮耀な眞似が出來るであらう。

◎ あの船頭の辨藏が草津の湯場で夫婦者に、出逢つた縁でこつちの内へ、口入れをして置いたさうだが、人のいやがる病人を見捨てぬ女房が頼もしい。

二 其の心立てのいゝのを見込み、こつちの親分があの夫婦を、二階に置いてやるといふが、始終は何でも辨藏が女房にでもするやうだ。

よく それに引かへこつちの内の親分ぐらゐ、物堅い氣前の方はありません。

□ 何でも物の頭になるにやァ、女に心を動かさず、堅い所がなけりやァならねえ。

よく 何ぞ奢つて貰はうと思つて、大層に胡摩を摺んなさるね。

○ お前ぢやァあるめえし。

ト皆々酒盛よろしくある、上手屋體の二階より、お傳結び髮やつしなりにて出て、

お傳 これは皆さん、お揃ひで、どんたくでございますか。

○ ムヽ、お傳さん、今日は日曜の休日で、石炭擔ぎもひまだから御臺場つゝ出しッこで、今一杯始め

た所だ。

□ ヱヽ錢の事は云つてくれるな、お傳さんが來たからア、刺身ぐらゐはおれが奢る。

△ 手前がさういふ氣になれば、おれも五百突き出すから、お傳さんに飲ませてくれろ。

◎ こつちの内は魚屋だが、人入れ稼業が忙がしいので、今ぢやア濱の人足宿。

よく みんなが奢ると云ひますから、お傳さん御馳走におなりな。

お傳 有難うございますが、夫の病氣で清正樣へ願酒をして居りますから、御酒のお相手は出來ませぬ。

○ それぢやア酒を斷つて居るのか。

□ 亭主の爲めとは、是れも感心。

◎ さういふ事なら、せめての事に、

△ どうか酌でもして下せえ。

お傳 お酌ぐらゐは致しませう。

○ イヤ皺だらけの婆アの酌では、いくら飲んでも旨くねえ。

□ 此の水々したお傳さんの、酌では酒が旨く飲める。

よく さんざ私を追遣ひ、旨くないもねえもんだ。

◎　こいつア婆アさんに怒られて、

へ　使ひを頼むに都合が惡い。

お傳　ほんに私が爰へ來たので、お氣の毒な事をしましたねえ。

皆々　サア／＼、酌を頼む／＼。

ト皆々酒盛よろしくある。中山節、唄になり、花道より勘次、散髪鬘、羽織着流し、金貸の拵へにて出來り、直ぐ舞臺門口へ來て、内を覗き格子を明け、

勘次　お傳さん、そこに居たか、今日は旁々の約束故、今日は間違ひはあるまいね。

お傳　あなたは太田町の勘次さん。

○　又催促に、

皆々　出掛けて來たのか。

勘次　こゝへ足も運び度くねえが、借方の方で利息の足の運びがさつぱり附かぬから、よんどころなく出掛けて來たのだ。

お傳　おつしやる通り先頃から度々お足をお運ばせ申し、誠にお氣の毒樣でございますが、何を申すも夫の病氣、東京へさへ參りますれば、金子を借りて參いまする親類もございますれど、女子一人

の看病故、片時傍を放れませず、介抱して居りますので、逐一返濟も段々と延び／＼になりましたが、金子の無心を東京の親類へ手紙にて申遣はして置きましたれば、一兩日の其内には、必ず屆くでございませうから、どうかそれ迄勘次さん、お待ちなされて下さいまし。

勘次　イヤ／＼そんな曖昧の言譯なぞを聞いては居られぬ、片時も傍を放れられぬと尤もらしく云ひなすつても、亭主の病氣を餘所にして面白さうに酒の座で、遊び狂つて居るではないか。又東京の親類がどんな裕福か知らないが、此の世智辛い世の中に、手紙で無心を云つて遣つたぐらゐで金を屆けてよこすなどゝそんな親切な者があるものか、理屈に合はぬ言譯を、そんならさうと聞いては居られぬ、元利揃へてたつた今、金を返してくんなせえ。

トやかましく云ふ、皆々は酒を飲み乍らむつとして、

○　オイ／＼勘次さん、お傳さんが面白さうに、酒を飲んで居ると云ひなさるが、そりやアお前の當て推量だ。

□　此のお傳さんは亭主の病氣で、淸正樣へ願酒をしてゐるから、酒は一滴も飲みやアしねえ。

△　爰に居たのはおらッちが今日骨休みの酒盛最中、階下へ來たのを幸ひと、酌をして貰つたのだ。

◎　いくら返さうと思つても無い袖は振れねえ道理、又利の高い烏金を滿足に返してたまるものかっ

勘次　モシ〳〵、お言葉の中でございますが、何で滿足には返されませぬ。

○　そりやア云はねえでも知れた事、一圓貸して日に百宛、利をふんだくる烏貸し。

□　五圓も借りて十日溜めりやア、五十錢の利を喰ふから、忽ち二圓や三圓の金が子を生む高利貸し。

△　三月も溜めりやア利ばかりで、元金ぐらゐはとつくに上り、後は儲けの金貸生業

◎　まともに取れりやア旨いものだが、取れねえ所でもつたものだ、罪亡しだと諦めろ。

勘次　イヤ、そんな不當な事を云ふ人足手合が附いて居ては、成程金を返さぬ筈だ、そつちが無暗な事を云へば、こつちも理道にしては居られぬ、金が出來ずは貸の抵當に着て居る着物を引つ剝いでも、利息の損を埋めにやアならねえ。

○　何だ、お傳さんの着物を剝ぐ。

□　そいつは惡い、剝がれるなら剝いで見ろ。

△　追剝同樣の事をすりやア、

◎　其の分にしちやアおかねえぞ。

勘次　オヽ、剝がなくつてどうするものか。（ト立掛るを、人足皆々支へて止め、勘次を突き倒す。）ウヌ、手向ひをしやアがつたな。

○ オヽ、亂暴するから、

皆々 叩きしめるのだ。

ト立掛るを勘次びつくりして、門口へ逃げ出し、

勘次 エヽ貸した金も取らねえで、叩きしめられてたまるものか。ウヌ、どうするか覺えて居ろ。

ト迯散に花道へ逃げてはひる。

よくたうとう逃げて行つてしまつた。(トお傳案じるこなしにて、)

お傳 御酒機嫌にて皆さんが、追ひ返しては下されたれど、無理で通らぬ世の中故、若し願はれでも致しますと、此の身ばかりか此方のお内の親分に迄御迷惑を、掛けませねばならぬと思ひますと、是も苦勞でござりまする。

ト此處へ奥より清五郎單物に半纏を着て出來り、

清五 イヤ、其の心配にやァ及ばねえ。

お傳 お前は親方、そんなら樣子を。

清五 始終の樣子は聞いて居たが、かうして夫婦を引取つて家へ置いてやるからは、假令どんな事があらうと、おれが引受け濟ましてやるから、必ずともに案じないがいゝ。

よく親分さんがお受合なされば、お傳さんもお案じでないよ。

○ 流石は親分、大きな料簡。

□ 誠に感心、

皆々 致しました。

清五 イヤさう云はれると面目ねえが、生れ付いての世話好きに、困ると人に云はれると見捨てる事の出來ねえ氣性で、年中人を家へ置き、餘分な苦勞をして居るが感心なのはお傳さんだ、お前の前ぢや云ひ憎いが、人のいやがる連合ひの浪之助さんのあの煩ひ、夫婦の中とは言ひ乍ら癩病病の看がくを汚ないとも思はずに、よく面倒を見てやんなさると、實に感心して居ます。

○ そりやア親分の云ふ通り、是が大概の女なら、人に勝れた器量を持ち、かうして居るのは馬鹿馬鹿しいと、心の變るが慾の世の中。

□ 癩病病みと來た日にやア、先づ十人が九人迄、亭主を捨て身を脫れ、旦那を取つて榮耀をして慾に迷ふが習ひだのに、

△ それをしないで何處が何處迄、貞女を立て旅の空、世に便り無い亭主の世話を、するといふのは見上げたものだ。

◎さうしていつたいお傳さんは、あの浪之助さんと、どう云ふ譯で夫婦に成つて家出をしたか、此處で話してお聞かせなせえ。

よく 決してしやべりはしませんから、話して聞かしておくんなさい。

お傳 サア困る話しを一通り、お聞きなされて下さいまし。(ト合方になり、)此間も親分に委しくお話しを申しましたが、私は上州沼田の藩中、さる重役の落し胤にて、表向きの親と申すは下牧村の勘右衛門と申す百姓でござりますが、都合に依つて一家中の九右衛門の家へ養女に參り、成人の後是も一家の大助の悴浪之助を聟に貰ひ受けましたが、何の因果かあの樣な惡い病が發しまして、養父に疎まれ朝夕に、出て行けがしにされますのを、女房の身として見て居られず、一旦夫婦となりました此身が世話を致しませねば、女子の道が立ちませぬ故、養父へ不孝に當りますれど夫に附き添ひ家出なし、草津で湯治をさせましたら、治るであらうと三週り程、入湯させて見ましたが、是ぞと申す驗も無く、人の敎へに横濱のヘボン樣と申すお醫者は、假令如何なる難病でも治る名醫と聞きまして、夫へ勸めてやう〳〵と幼い折に別れました姉を便つて此地へ參り、永の旅中の物入に、遂には路用も遣ひ果し、姉にさへ見放され夫婦諸共此方樣の御厄介になります、身の不仕合せを子分の衆、不便と思つて下さりませ。

○　イヤ、それで樣子がすつぱり知れました。
□　一合取つても侍の、家に生れた女は格別。
△　親類緣者親に迄、見放されたる夫故、
◎　何處が何處迄見捨てぬとは、貞女兩夫にまみえぬ料簡。
よく　誠に感心致しました。（ト清五郎此內煙草を呑み居て、）
清五　何は兎もあれ差し當る日濟の借の濟方を、算段しにやァならねえが、全くこつちの親類へ無心の手紙を出したのか。
お傳　ハイ二三日後に東京へ郵便を出しましたが、何を申すも片便り、未だに返事が參りませぬ。
清五　使ひを遣つて分かるなら、誰ぞ見立つてやらうから、町名番地を云ふがいゝ。
お傳　イエ私が參りませんでは、調ひ兼ねる無心故、是から直ぐに鐵道で參りましたら明日の朝か遲くも明日の夕方迄に、金子を借りて戾りますから、どうぞ其の內浪之助のお世話をお賴み申します。
清五　そりやモウ出來る事ならば、一晩ぐらゐはおれが引受け、どうでも世話をするが、今から行くより明日の朝七時の汽車へ乘つて行けば、其の日の內に用も辨じ、泊らず歸つて來られやう。
○　オイお傳さん、親分のおつしやる通り、今夜行かずと明日の朝、七時に乘つてお出でなせえ。

お傳　イエ向うが夜分でござりませねば、おちく／＼と話が出來ませぬ。
　　　ト清五郎不審の思入あつて、
清五　夜がいゝとは、どういふ無心か。
お傳　エヽ。
清五　イヤサ、さういふ事なら浪之助さんへ、よく斷つて行くがいゝ。
お傳　左樣致すでござりませう。
清五　そんなら早く二階へ行き、
お傳　ドレ、斷つて參りませう。（ト中山節になり、お傳二階へはひろ。皆々後を見送りて、）
○　モシ親分、口ではあゝ云ふものゝ、あの病人に愛想が盡き、
□　置去りにする氣にでもなつて、逃げ支度ぢやァあるまいか。
△　四人の内で誰か一人、送ると云つて附いて行き、
◎　道を氣を附け逃がさぬやう、連れて歸るとしませうか。
清五　イヤ下等へ乘つても行戻り六十錢はお定まり、二人連れでは一圓あまり餘計な入費を遣はせるも苦しい中では氣の毒だ、それより野毛の辨藏が東京へ行く次手があるから、舟を賴んで鐵道だけ、

どうぞ助けて遣りたいものだ。

よく　成程こりやアいゝ考へ、それぢやァ野毛へ行つて來ませう。

清五　まさか亭主を置去りに、逃げる心もあるまいわえ。

○　それでも油斷が、

皆々　出來ませぬ。

清五　ハテ、逃げたらそれ迄さ（トのびをする、道具替りの知せ、）おれの不運さ。

トよろしくこなし、此の模樣しげさの唄にて道具廻る。

（二階の場）――本舞臺一面平舞臺、上の方晝心に長家の二階、二間のあひだ半窓、障子建切りあり、下通り鼠壁、正面同じく鼠壁、下の方晝心に一間のあひだ半窓障子、立切りあり、其の脇二階の上り口、丸太にて、總て世話場の二階の體。上寄りに浪之助、毟鬘癩病病みの拵へにて、木綿蒲團の上に住ひ、後ろに二枚折の屛風を立て、枕許に藥土瓶などよろしく並べあり、下手にお傳住ひ、此の見得、合方にて道具納まる。

浪之　改めて私に用とは、何ぞ變る事でもあつてか、早う聞かしてくれいなう。

お傳　ほかの事でもござりませぬが、今夜一晩不承でも、わたしにお暇を下さんせ。

浪之　なに、今夜一晩暇をくれとは。

お傳　お前の耳へ入れましては餘計な苦勞を掛けるのも、善くない事と思ひまして、何にも云はずに居りましたが、實は此中お醫者樣の藥禮に差支へ、日濟貸しの勘次さんから、三圓借りて遣ひましたが、元金は扨置いて利息さへも遣られぬ故、やかましく云つて催促され、こつちの内の親分迄迷惑をするくらゐ故、是から東京へ行きお金の都合をした上で、遲くも明日の暮方迄にはきつと歸つて來ますから、お困りだらうが少しの内、辛抱して下さんせ、なにかの事は親方やおよくどんに頼んである故、待つて居て下さんせいなあ。

浪之　又愚癡を云ふやうだが、人に疎まれ嫌はるゝ病が發し二年越し、此身ばかりかこなたに迄いかい苦勞をさせまする。さうして、金を借りようといふ、何ぞ見當てがあつての事か。

お傳　サア他に見當てもござんせぬが、富岡の與兵衛さんが東京へ出て、神田邊に旅籠を取つて居なさんすと聞きました故、それへ便つて頼んだら、いつぞや草津で五圓といふお金を惠んで下さんした、お情深いお人故譯を話して泣き附いたら、十圓ぐらゐは貸してくれませうと思ひますから、それを見當てに行く積りでござんす。

浪之　イヤ〳〵それはよくない事、これがこつちで其の以前仕置いた事でもある人なら、向うも以前の恩返しに貸してくれまいものでもないが、向うの情けで五圓といふ金を惠んでくれた上、又候十圓無心をしては、甘い詞に附け込んで、押が強いと云はるゝとも貸してくれやう筈がない、無心の叶はぬ其の時は、入費を遣つて東京まで尋ねて行くだけ損が立つ、コリヤ諦めたがよからうわえ。

お傳　それはさうでもござんせうが、行かずに居れば利の高い、お金を返す事も出來ずこつちの內の親方へ御迷惑を掛けねばならぬ故、たとひ向うで斷られ、お金の工面が出來ぬ迄も、行つて見度うござんす故私に暇を下さんせ。

浪之　ア丶いつそおれが病死したなら、こなたもこんな苦勞はしまいに、餘人と違ひ富岡の與兵衛殿では、モシひよつと。

お傳　エ丶、

浪之　イヤ私に愛想が盡きたなら、遠慮は無いから得心づくで、餘人へ其の身を任せてくりやれ。

お傳　ほんにお前も疑ひ深い、何で私に其の樣な移り心がござんせう、お前の病氣を治した上、是れ見よがしに手に手を取り、立派に故鄕へ歸らねば、見捨てられたる人達へ私や恨みが返されぬわい

なア。

浪之　それ程迄に此のわしを、何にも云はぬ忝ない。（ト手を合せる。）

お傳　アヽモシ、女房に禮は入りませぬわいなア。

トおよく階子口より、薬瓶と書附を持ち出來り、

よく　お傳さん、お賴みの水藥だと、雷庵さんから此のやうな水藥が屆きました。

浪之　なに、水藥が屆きしとは。

お傳　戸塚在に癩病の妙藥があると聞きましたから、此間雷庵さんに私が賴んでおいた故、屆けてくれたと見えますする。

よく　直ぐに代を貰つて來いと云ひ附かり、使が下に待つて居ます。（ト書附を出す。）

お傳　漢家と違ひ西洋藥は、みんな現金故、直ぐに代を上げませう。

浪之　とは云へ高價な藥では、今差當つて其の金が。

お傳　イエ、そんなに高い藥ではござんせぬ、爰に三十錢としてあれば、丁度鐵道へ乘る三十錢、是を使に持たせてやつて下さんせ。

よく　ハイ〳〵畏りました。（トおよく階子口へはひる。）

浪之　さうして薬の用ひ様は、どうして飲むのか此方は知らぬが。

お傳　此の書附けに書いてあるは、瓶に墨にて印しがあれば、是を三度にあした中に、度を過さぬやう用ひろと、委しく書いてあります。

浪之　そんなら早速一分だけ、飲んで利目を試して見よう。

お傳　それでは一分飲むとさしやんせ、明日の朝と夕方に、後を二分飲みなさんせ。

ト有合ふ茶碗へ薬を入れて出す、浪之助押頂き飲む。

どんな薬でござんす。

浪之　思ひの外に飲みよい薬で、どうやら胸が清々した。

お傳　それはよろしうござりました、どれ暮れぬ内に行きませう。（ト立ち掛かり行く思入。）

浪之　コレお傳、鐵道へ乘る三十錢を薬代に拂つては、こなたは歩いて行かずばなるまい。

お傳　エヽ。（ト思入あつて氣を替へ、）いえ、そのくらゐな事は親分に、お借り申して行きまする。

浪之　とは云へ借のある上に、又も無心を云ひ出すとは、

お傳　厚かましいと云はれても、夫故なら是非もない。

浪之　どうぞ此儘見捨てぬやう。

お傳　見捨てる程なら此の樣に、私は苦勞はしませぬわいなア。

ト兩人よろしくこなし、此所へ二階口より野毛の辨藏、好みの鬘、舟唄にて出て來り、

辨藏　イヤ、其の鐵道へ乘らずとも、おれの船へ乘せてやらう。

浪之　ヤ、こなたは野毛の辨藏殿。

お傳　そんなら樣子を、聞かしやんして。（ト辨藏よろしく住ふ、合方になり）

辨藏　今下へ來て淸五郎殿に話しを聞けば東京に居る、親類とやらへ泊りがけに、こなたは無心に行くさうだが、丁度おらも築地下迄商賣用で出掛けるから一緒に乘つて行きなせえ、三十錢でも無駄な錢を、こんな中ぢやァかばひなせえ。

浪之　それは何よりよい都合、女一人を手放して、遣りともないと思ふ矢先き御親切なる辨藏殿が、行つてくれゝばこなたも安心、何分お賴み申しまする。

お傳　不思議な御緣で草津からお馴染になり此の土地でも、お世話になつた辨藏さん、又もお世話になると云ふは、お氣の毒な事でござります。

辨藏　ハテ人の世話は人がせねば、互ひの難儀は救はれぬもの、船頭稼業をしてをれば、難を救ふはお互ひだ、少しも早く出掛けなせえ。

浪之　そんならお傳、行つて來てくれ。
お傳　今の藥を枕許へ置いて行く故あすの朝、忘れずに飲んで下さんせ。
浪之　忘れず飲むから案じやるな。
辨藏　それぢやァ直に行くとしませう。
お傳　どうぞお金を借り受けて、首尾よく歸つて來たいもの。
浪之　假令都合が出來ずとも、必ず歸つて來てくりやれ。
お傳　そりやァ歸らずには居られません。
浪之　とは云ふものゝ、若しや是れが。
お傳　エヽ。
辨藏　ハテ、案じずと待つて居なせえ。
　　ト唄になり、辨藏につたり思入あつて、お傳を急き立て階子口へはひる。
浪之　約束通り無心の金を借りて戻ればよけれども、無理な無心の才覺故斷られでもする時は、途方に暮れて氣が變り、見捨てる心にならねばよいが、それに附けても此間國へ手紙を出したれど、何の返事もよこさぬは、やつぱり養父諸共に、實の親父も立腹なし、此の身に愛想を盡かして居る

か、ア、賴み少ない身の上ぢやなア。(ト藥瓶へ思入あつて、)それはさうと此の藥を、一分飲むと痞へし胸が開きしは、世にも希代な水藥、少しも餘計に飲んだなら、効力が早く知れるであらう、ドレもう一分飲んでおかう。(ト瓶の藥を茶碗へ明け、飲まうとする事あつて、)煎藥と事かはり、水藥は飲み好いわえ。(ト合方になり、)それに附けてもあのお傳、沼田の藩中室瀬殿の胤とは知らなんだが、草津の湯場にて腹替りの姉に計らず廻り合ひ、それが緣にて先き頃迄、厄介人になつて居たを、雇ひのお熊が證人となり姉と言ひしは僞りだと、私もお傳も追出され、急に居所に當惑したが、地獄にも知る人とやら、いつぞや草津で出逢つたる辨藏殿の親切で、爰の家へ賴んでくれ、かうして世話になつては居れど、思ひ廻せば現在の親兄弟さへ愛想を盡かし、見限る程の癩病病み、お傳の姉も愛想を盡かし、お針のお熊を惡者にして、姉で無いと追出せしか、それに引きかへ此の家淸五郎殿は、他人乍ら親切にして下さるとは、世は樣々なものではある。(ト胸へ差込むこなし)アイタヽヽ、今迄何とも無かりしが、俄かに胸が苦しくなり、かうして居るさへ息苦しい、コリヤたゞ事ではあるまいわえ。水を一口飲んで見ようか。

ト胸を押へ苦しみ乍ら、ゐざり出る、此の時二階口より人足△出來り、

△浪之助さん、どうさつしやつた〳〵。

浪之　オヽ好い所へ五郎八殿、水を一杯飲ませて下さい。

△　アイ〳〵、それはやすいことだが、差し込みでも來たのか。

浪之　今方雷庵殿から水藥が屆いた故、それを飲んでしまつたら、五體が痺れて此の苦しみ。

△　それぢやア若しや其の藥が、怪しいものではなかつたか。

浪之　早く水を飲ませて下さい。

ト水を飲ませる、浪之助飲まうとして手先震へ、茶碗を落して枕許の水藥の瓶を毀す事よろしくあつて、

△　ヤ、水藥がみんなこぼれてしまひました。

浪之　アヽ、どうぞ苦痛を助けて下さい。

△　かういふ事と知つたなら、お傳さんを止めたもの、傍へ寄るのも氣のねえ仕事だ。

浪之　アヽ苦しい、堪え難いわえ。

トよろしく悶き血を吐き、どうと成る故、五郎八びつくりして、

△　コリヤ大變だ。（ト尻餅を突き、ワナ〳〵震へ乍ら階子口へ來て、下へ向ひ、）みんな來てくれ、大變だ大變だ。（ト呼び立てると、四人上り來て、）

○　あわたゞしい、何事だ。

◎　何ぞ變る事でもあるのか。

△　浪之助さんが血を吐いて、あの通りぶつ倒れた。

○　何だ、血を吐いた。（ト傍へ行き見て、）こいつァ毒でも飲んだ樣子、こつちもさつき蟹を喰つたが。

□　こんな按配に、當りやアしねえか。

◎　何だかをかしな氣持になつた。何しろ親分を呼ばう。

皆々　親分々々、來てくんなせえ。（ト呼び立てる、階子口より淸五郎出て、）

淸五　騷々しい靜かにしろ、浪之助殿がどうした。

△　今方二階へ雷庵殿から、屆いた藥を一口飲み、浪之助さんが血を吐いて七轉八倒の此の苦しみ。

○　何でも毒に、

皆々　違ひありません。

淸五　イヤ、めつたな事は云はねえものだ、全く毒か毒でねえか、樣子を聞かにやァ分からぬ事だ。

ト淸五郎浪之助の傍へ行き、抱き起して、

コレ浪さん、しつかりしなせえ、今方何んだか太田町の雷庵の所から、使が來て屆いたものがあ

るやうだが、譯を話して聞かせなせえ。

ト浪之助はつきりとなり、清五郎の顔を見て、

浪之　まア親分聞いて下さい、今方お傳に頼まれて調へたと癩病の妙藥が雷庵から屆いた故、片時も早く治さうと、一分飲んで居る所へ、辨藏殿が迎ひに來て、お傳を伴ひ行きました、後で俄にこの苦しみ、今々思へばお傳めが雷庵を語らつて、私を毒にて殺す氣で、飲ませ居つたに違ひない、私や口惜しいわえ。

清五　そりやアこつちの僻みといふもの、彼の貞節なお傳殿が何でそんな事をしませうぞ、藥違ひと云ふ事も世間に多くある事故、めつたな事は云はぬもの、唯險難なは桑原雷庵按摩上りでも醫者で、漢家を止めて西洋の療治もやう〳〵空覺え、買藥をして護摩かす故、漢家と違つて西洋の藥はききめが激しいから、上手で無いと遣り損ひ、たび〳〵見違ひがあるとの事、なか〳〵當時の御政事では毒藥などを賣買するは、嚴しく禁じてある事故、配劑しよう筈がない、飲んだ殘りがあるならば、試して疑念を晴らさせよう。

浪之　其の飲みさしの水藥も、今誤つて瓶をこはし、こぼしてしまひましてござります。

清五　そんならこぼしてしまつたか、そいつア惜しい事をした。まア何にしろ捨てはおかれぬ。コレ仁

太郎、おれがさう云つたといつて、石川さんを呼んで來てくれ。

○ハイ〳〵、それぢやァお醫者樣へ行つて來ます。

清五　餘計な事を云はないで、急病人があるといつて、お家から直ぐに連れて來てくれ。

○畏りました。（ト下へおりろ、此内浪之助段々毒にて苦しむ。）

浪之　この苦しみではモウ所詮治る譯にはなりませぬ、死んで行く身は厭はぬが、後へ御難儀掛けるのが、心殘りで死に切れませぬ。

清五　イヤ其の心配には及ばぬ事、かうして世話をするからは、元よりこなたの葬ひは内から出して菩提所へ、葬る覺悟で居ますから、言ひ置く事でもあるならば、私に話して置きなせえ。

浪之　其のお言葉に甘へまして、たつた一言云ひ度い事が。

清五　サア、云つて聞かせなせえ。

浪之　そのお頼みは。（ト云はうとして舌の硬ばるこなし、）ムヽウ。（ト血を吐き苦しむ。）

清五　コレ浪さん、しつかりしなせえ、浪さん〳〵。

ト云ひ乍ら浪之助口の利かれぬこなし、トゞばつたり落入る、清五郎此の體を見て、

いとゞ見悄い癩病も、紫色に腫上り、俄に變の替りしは。

三人　此奴は毒に、（ト大きく云ふを押へて、）

清五　ア、めつたな事は云はねえものだ。（ト此時二階口よりおよく出來り、）

よく　親分、幸ひな事がござります。

清五　なに、幸ひとはどんなことだ。

よく　上州の下牧村から、浪之助さんとお傳さんを、尋ねて人が參りました。

清五　下牧村とは不斷から、話に聞いた二人の在所。さうして、どんな人が來た。

よく　ハイ、玉橋勘右衞門に、大助と申しました。

清五　ムヽ、そりやアかねて話に聞いた二人の故郷の親達だが、先頃手紙を出した故、それで國から尋ねて來たか。

□　こつちは何んだか。

皆々　旨い都合に。

清五　イヤもう一足早かつたら、お傳も内に居たらうし、浪之助さんも生きて居て、よつ程都合がよかつたに、今となつちやア後の祭りだ。

よく　草鞋を脫いで居りますが、二階へ連れて來ませうか。

清五　今下へ行つて逢はうから、茶を出して待たせておきな。
らく　ハイ〳〵、畏りました。（ト下へおりる。）
清五　こんな事とは知らねえで、はる〴〵尋ねて來た親達、此の次第を聞かせたなら、嘸歎くことであらう。
三人　氣の毒な事でござりまする。
清五　ドレ親達に、（ト立上るを、道具替りの知せ、）逢つて遣らうか。
ト此の模樣、しげさの唄にて、道具廻る。
（品川浦御臺場脇の場）――本舞臺後ろ一面品川の宿場を見たる灯入りの遠見、舞臺前波板、一面に波布を敷き詰め、上手に御臺場の石垣を見せ、眞中に丸物の漁船へ以前のお傳乘り、下手に辨藏艪を押して居る、此の見得品川の騷ぎの唄にて道具留る。
お傳　モシ辨藏さんえ、大層騷いで居ますのは、ありやア何處でござります。
辨藏　ありやア品川の松岡の二階だが、こゝ迄來りやア東京へ着いたも同じ事だ、彼の騷ぎを聞き乍らまア一服やつて行かう。（ト船をもやひ、こつちへ來て、煙草を呑むことある。）

お傳　羽根田沖とやらを通つた時には、私や難船でもするかと思ひました。

辨藏　さつきの風ぢやアいつもより、よつぽどおれも骨が折れたが、御臺場内へはひつてしまやア、疊の上も同然だ、お前も一服やるがいゝ。ヲイお傳さん、どうしたのだ、船に醉つたか。

お傳　上州産れに高波の海の船へ乗りつけず、怖い〳〵と思つたので、さつきから癪が起り胸が痛んでならないが、生憎何も藥は無し、こんな困つたことはない。

辨藏　何だ、癪が起つたとか。

お傳　ハイ、差し込んでなりませぬ。（ト胸を押へて居る。辨藏思ひ入あつて、）

辨藏　癪が差し込むなら、藥はねえが、おれの力で押へてやらう。

お傳　お世話になつて濟みませんが、少しの間押へて下さい。

辨藏　濟むも濟まねえもいるものか。（トお傳の傍へ來て、胸先を押へ乍ら、）どうだ、この位で好いかえ。

お傳　アイ、強い程ようござんす。（ト此以前より上方唄の合方にて、）

辨藏　成程、こりやア強い癪だ。（ト矢張り癪を押へ居る、お傳こなしあつて、）

お傳　思ひ出すのは上方唄、あの越の戸の文句にも、癪に嬉しき男の力と唄の文句も身に當る、ほんに男の力でなくては、私の癪は納まりませんよ。

ト是を辨藏嬉しき思入にて、

辨藏　おいらは不意氣な生れ故、唄なんぞは知らねえが、癪に嬉しき男の力と謳ふ文句があると聞いては、心嬉しく押へにやアならぬ。

お傳　なに、癪を押へるのが嬉しいとはえ。

辨藏　嬉しくなくてどうするものか。(トぢつとなるを、お傳振拂つてきつとなり、)

お傳　辨藏さん、常談して下さんすな。

辨藏　イヤ、常談ぢやアねえ、眞底からおらアおぬしに惚れて居るのだ。

お傳　エ、(トびつくりする。合方きつぱりとなり、)

辨藏　改め云ふにも及ばねえが、去年草津の湯治場で、一つ宿屋へ泊つた時、粹な女と思つたのがそもそもおれの病み附きで、亭主の病氣を癒すなら、横濱へ來て亞米利加のヘボンさんに掛るがいゝと、親切ごかしに勸めたも、どうかしたなら手なづけて惚れた思ひを晴らしてえと、時節を待つて居る内に、佐藤とやらいふ古着屋が濱へ來る時寢所の宿屋替りに圍つておくお種とおぬしが同胞と、知つて一緒に横濱へ來たのはこつちのいゝ都合、野毛山下と聞いた故其の妾宅を突き留めて、門を通つて時折りに顏を見るのを樂しんで、居た甲斐あつて纏れが出來、途方に暮れるを肴

屋へ口入してやつたのも、何處かで思ひを晴らす氣で、待ちに待つたる今日の首尾、生業用で東京へ行くと云つたは嘘の皮、おぬしを沖へ連れ出して言ふ事を聞いて貰はう爲めだ、いやでもあらうがお傳さん、應と云つて抱かれて寢ねえな。（トよろしくこなしある、お傳扨はといふ思入あつて、）

お傳　又今夜のも夢かは知らぬが、夢なら早く覺めればいゝ。

辨藏　なに、今夜も夢とは。（ト是より合方替つて、お傳惡婆のこなし、）

お傳　未だ野毛下に居た時分、看病疲れに居眠る内、丁度こんな夢を見たが人は替れど又今夜、お前にこんなに口說かれるとは、私も餘つぽど因果者さ。

辨藏　そつちは因果と思ふだらうが、こつちはおぬしに二年越し憧れて居れば是れが幸ひ、夢であらうが現であらうが、此の儘覺めて詰るものか、是非とも返事を聞かしてくりやれ。

お傳　其の返事なら辨藏さん、いやと云ふより外はないから、まァお斷り申しませう。

辨藏　それぢやあ是程慕つても、言ふ事はきかれねえと云ふのか。

お傳　私のやうなお多福を、それ程思つておくれのは、嬉しいやうでござんすが、病みほうけても浪之助と云ふ亭主を持つた私故、間夫をする氣は少しも無い、お氣の毒だが辨藏さん、是ればかりは堪忍しておくれ。

辨藏　ムヽ、いやだと言やァ仕方がねえ、おれも爰迄連れ出して、そんならさうかと指をくはへ、引込む譯にやァならぬから、ふんじばつても晴らさにやならねえ。（ト立掛るをお傳見て、）

お傳　無法な事をしなさんせずと、後生ですから辨藏さん、どうぞ諦めて下さんせいなァ。

辨藏　こゝ迄お前を連れ出して、諦める奴があるものか。

お傳　そこを、どうぞ。

辨藏　エヽ面倒な、サァぢつとして居やァがれ。

ト波の音になり、お傳を押し轉がさうとする、お傳煙管を持ちし儘あたりの物を投げ附け、思はず辨藏の横腹へ當てる、辨藏痛き思入あつてお傳を押へ附ける、お傳其の手に喰附く。

辨藏　アイタヽヽヽ。何をしやァがる。

ト飛び退く所をお傳起上る、辨藏過まつて海へ落ちる、お傳びつくりして、

お傳　思ひがけなく辨藏が、横腹を打つて海へ落ち、危ふい手籠めは脱れたが、船の樣子を知らぬ私、何處へ流れて行く事か、こりやどうしたら、（ト立上るを木の頭、）よからうぞいなァ。

ト此の模樣、佃の合方にて、道具廻る。

（沖中の場）━本舞臺一面海原の遠見。御臺場の石垣より土手を見たる張物、總て前の道具の沖を見たる體。一面に波布を敷き詰め、爰に丸物の釣舟の中に、田川吉太郎、魚籃を上げて居る、船頭紋次釣棹を片附けて居る、波の音にて道具納まる。

田川　コレ紋次、こんな事は珍らしいぢやねえか。

紋次　左樣さ。此の頃にねえ凪だから、モウちつと釣りませうと、今迄遣つては居りましたが、汐にならねえ中、モウ上るとしませう。

田川　日一杯に上がる氣であつたが、汐が惡いので據なく、暮れる迄釣つて居たが、思つたよりは釣れなんだ。

紋次　今日のお人合せに、今度は喰ふ日を御案内しませう。

田川　お前の勸めは當てにならねえ。

紋次　イヤ、實に今日は閉口でございます。（ト此時上手にて）

お傳　助け舟いなう〳〵。

田川　あの聲は女の樣だが、どうしたのだらう。

紋次　アレ〳〵、こつちへ流れて來ます〳〵。（ト上手より、以前の舟のお傳流れ來て）

お傳　モシ、どうぞ助けて下さいまし、お願ひでござります。
田川　見れば女一人のやうだが、船頭は居ねえのか。
紋次　今頃沖に女一人で、助けてくれとは變なわけだ。旦那構はねえでおきませう。
お傳　アヽモシ、怪しい者ではござりませぬから、どうぞ助けて下さりませ。
ト手を合せ拜むを、田川見て、
田川　手を合して賴んで居るが、どう云ふ譯だか可愛さうだ、樣子を聞いて見よう。
紋次　女だと思ひなすつて、豪勢肩をお入れなさるね。
ト云ひ乍ら舟を傍へ漕ぎ附ける、田川よく〱見て、
田川　何にしても困るだらう、此の舟へ乘せて何處の者だか聞いて見よう。
紋次　それぢやァ女中、こつちへ乘んなせえ。
お傳　エヽ有難うございます。
田川　ソレ、是れへしつかり摑まんなせえ。
お傳　ハイ、よろしうござります。
ト釣棹の先へしつかり摑まる、是にて紋次やう〱舟を漕ぎ寄せる、是れにてお傳と田川双方より釣

棹を手繰り寄せて、ト〻お傳田川の舟へ飛移ろ、此の途端お傳の乘りし舟は上手へ流れてはひる。

紋次　ム丶丶丶。（ト心緩みしこなしにて氣絕するを、紋次見て、）

コリヤ、女が目をまはした。

ト舟をもやつて居る、此の內風の凪ぎたる心にて鳴物靜かになり、舟は小ゆれになる。田川立上り舟の艫より手桶を持つて來り、お傳の顏へ水を吹つ掛け介抱し乍ら、

田川　コレ女中、心を慥かに持ちなせえ。

紋次　女やアい〱〱。

兩人　女やアイ〱〱。（ト呼び生ける、是にてお傳心附き、）

お傳　ハイ、モウ大丈夫でござります、どうぞお助け下さりませ。

田川　たゞ助けてくれぢやア分からねえが、どう云ふ譯で船頭が海へ落ちて困るのだか、譯を話して聞かせなせえ。（ト品川の合方になり、）

お傳　私事は横濱から東京迄參ります者、懇意に致す船頭が鐵道へ乘つて行くより、風がいゝ故東京へ便船をして行くがいゝと云つてくれます詞に任せ、女子の事故樣子も知れず船で途中へ參りますと、無禮な事を言ひ掛け、既に手籠めになります所を、其の船頭が横腹を打ち、其の儘海へ落ち

し故女一人で途方に暮れ、流されまする其の内に、あなた方に助けられ心の緩みに氣絶せしを、重ね〴〵の御介抱、何とお禮を申しませうやら、御恩は一生忘れませぬ。

田川　それで様子があらまし分かり、此方も少しは安心したが、此の沖中に女一人波に漂ひ居ると云ふは、どうした譯か白波の怪しい者ではあるまいかと、命は助けて遣つたものゝ、實は胡亂に思つて居ました。

紋次　かう見た所が年恰好、女盛りの別嬪故、定めてそんな譯であらうが、さうして此方は東京の何處へ行かうと出て來たのだ。

お傳　ハイ、神田迄用達しに參ります者でござります。

田川　神田へ行くなら丁度いゝ、こつちも築地へ歸る船だ、一緒に乘つて行きなせえ。

お傳　そんならあなたは東京の、築地のお方でござりまするか。

田川　イヤ築地の者ではないけれど、鱚が喰うと勸められ、晝から沖へ出掛けたが、思つたよりは釣れぬ故、明るい内に歸るのも間が惡く、日の暮れる迄釣つて居たが、どうしても不漁だから、愚癡をこぼして歸る所サ。

紋次　此方が勸めてお連れ申し、二疋三疋ぢやァ巾が利かず、小さくなつてをりましたが、鱚の代りに

別嬪が釣れた所で船頭も、そろ〳〵天窓を持ち上げて來ました。

お傳　私のやうな御厄介者が、乘り込みましては旦那さんが、猶お腹立ちでござりませう。

田川　イヤ、どういふ身持か知らぬけれど、お前の樣な別嬪が、餌も下ろさず釣れて來りやア、雜魚一疋釣れねえでも、心嬉しく內へ歸るが、どうして〳〵こちとらの手際で釣れる魚でねえから、刎ね附けられるは知れたことだ。

お傳　其の釣上手な口前では、どんな魚も貴方には、釣られて苦勞を致しませうわいなア。

紋次　どうだえ、姉さん其の氣なら、旦那に釣られる氣は無いかえ。

お傳　釣つて下さる心なら、私や命は入りませぬよ。

田川　あんまり樣子がよ過ぎるから、こいつア魚に欺されさうだ。

ト波の音になり、船の前の切穴より以前の辨藏、濡れ衣裳にてもがき上り、舟の小緣へ手を掛ける、お傳を見て、

辨藏　ウヌ、よくもおれを嫌やアがつたな。（ト田川是を見て、）

田川　そんなら是れが今の話の、

お傳　私に戀慕を仕掛けた奴。

紋次　さう聞く上は。

ト紋次櫂を取つて、辨藏を拂ひのける、是れにて辨藏切穴へはひる、此の時ドロ〳〵のやうな波の音になり、お傳上手に居る、床の邊より人魂出て合引にて前通りを早ぶさにて通り日覆へ引上げる、お傳是れを見上げて、

お傳　アレエ――。（ト田川へ縋るを、木の頭。）

田川　びつくりすらア、ありやア人魂だ。

ト同じく上を見上げる、爰へ舟の下手の切穴より辨藏半身出て、艪先へ摑まる、紋次是れを知らず艪が重いといふこなしにて押す、此の仕組よろしく、波の音品川の騷ぎ唄にて、

ひやうし　幕

四幕目

上州富岡小澤店の場

同高崎街道畷手の場

〔役名――小澤屋隱居伊右衞門、田川吉太郎、養子與兵衞、番頭幸七、手代、丁稚鶴松、甥佐太郎、

百姓六兵衛、魚屋清五郎、護摩の蠅。女房お絹、娘お糸、玉橋お傳、下女お作等。

（上州富岡小澤店の場）——本舞臺四間通し常足の二重、鐵網の蹴込み、瓦庇。上の方土藏の張物、此の前に駒寄せ、上棲觀音開きの藏の入口を見せ、下手いつもの所門口、此の外正面三尺の誂へ、此の下手一面鐵の忍び返しのある生澁塗りの板塀、箱の用水桶、二重正面に更紗の暖簾口、上の方一間の鏡戸棚、下手一面反物を積み入れし二段の棚、此の下見世箪笥の書割よろしく、前口へ小澤と印せし紺暖簾を掛け、總て上州富岡小澤店先の體。二重上手に番頭、帳場格子の内に帳合をして居る、下手に前垂掛けの手代絹の反物を積上げ、符帳を讀み上げて居る、眞中よき所に忰佐太郎剃立蠹着流しにて、帳合の邪魔をして居る見得、繻子の袴の唄にて幕明く。

手〇　モシ〳〵佐太郎さん、貴方がそこにおいでなさると、帳合ひの邪魔になります。

手□　番頭さんに御用があるなら、帳合をしまつてから、後でゆつくりおつしやりませ。

佐太　イヤ其の帳合ひの邪魔になるのが、此方の附け目と云ふものだ、帳合ひがしたけりやア、伯父や與兵衛さんに內證で、おれに小遣を貸してくれ。

番頭　これはしたり佐太郎さん、どうしたものでござります、其の貸せ〳〵も是れ迄に幾度だか知れませぬから、今日ばかりはお斷りでござります。

佐太　エヽそんな因業な事を云はねえで、今日限り無心を言はぬから、ちつとばかり貸してくれ。

手〇　今日ぎり／＼とおつしやるのは、耳へたこの入る程聞きあきました。

手□　番頭さんばかりお虐めなさらずと、奥の大旦那にお頼みなすつてお歸りなさい。

佐太　ハテ伯父に頼むくらゐなら、貴樣達に頼みはせぬ、たつた一人の甥だから、おれをこつちの娘と女合せ聟にすれば重縁だに、與兵衞といふ聟を取り、おれは此家の厄介人、小遣ひとても月にたつた五十錢と極つて居れば、女郎は勿論藝者を一晩、買つて遊ぶ事も出來ぬから、たまには氣晴しでも仕ようと思ふから、それで番頭を口說くのだ。

番頭　御隱居樣がお前さんを此家の聟になされませぬは、お目が高いと申すもの、御辛抱さへなされますれば、假令御養子になされずとも、暖簾を分けて別居させ、立派なお見世の旦那樣に、なられるお身ではござりませぬか、無くてならない金子なら、お貸し申さぬ事もないが、藝者や女郎をお買ひなさる金子はお貸し申されませぬから、其のお頼みは聞かれませぬ。

佐太　そんな分らねえ奴があるものか。ドレお絹にでも頼んで見ようか。（ト暖簾口へはひる。）

番頭　とんだ邪魔がはひつたので、勘定を分からなくした。もう一偏讀み上げてくれ。

兩人　ヘイ／＼、畏りました。（ト反物の符帳を見乍ら、）

手〇　三圓六十五錢口三疋。
手□　同じく九十六錢口六疋。
ト讀上げろ、番頭算盤を置き乍ら、帳面を引合して居る、矢張り右の鳴物にて花道より、丁稚岡持を下げ出來り、後より六兵衞白髮鬘、半纏着流しやつしなりの田舍親父にて、娘お作身持の拵へにて連れ立つて出て來り、花道にて、
六兵　モシ〳〵、そこへおいでなさるは、小澤の小僧さんぢやアござりませぬか。
丁稚　アイ伯父さん、何ぞ用かえ。
六兵　貴方のお店の甥御さんは、お内においでなさいませうな。
丁稚　あの馬鹿旦那はお錢が無いから、いつでも内に居りますよ。
お作　鶴松どん、後生だからおいらと云はずに佐太郎さんを、お見世へそつと呼び出して、みんなの前で逢はせておくれ。
丁稚　お前はお作どん、何しに來たのだ。
六兵　甥御さんにお掛合があつて、娘を連れて出て來ました。
丁稚　何を懷ろへ入れて居るか、大さう脹らませて居るではないか。

お作　そんなら今の事を賴んだぞえ。
丁稚　アイ〳〵、合點だ。
　　ト三人舞臺へ來る、丁稚下手の土藏の間の露地口へはひる、六兵衞門口を明けて、
六兵　ハイ、御免下さいまし。
番頭　誰かと思つたら先々月暇を出したお作どんの親御、當人を連れてござつたは、取り落し物でもござつてかな。
六兵　イエ取落しではござりませぬ、お預かり物を取り落さぬ内、お返し申しに參りました。
番頭　預かり物とは何であつたか、
手〇　わざ〳〵返しに出て來たとは、
手□　成程、田舍者は正直だ。
六兵　どういふ譯か先々月、娘お作にお暇が出まして、急に引取れとおつしやります故、宿へ連れて歸りましたが、段々樣子を聞きますと、お預かり物がござります故、たゞ此儘には引取られませぬ。
番頭　預かり物がある故に、

手〇　引取られぬとは、どういふ譯か、

手□　何んだかさつぱり分からない。

六兵　サア其の譯と申しますは、御覽の如く娘はほてれん、木魚講でございます。

三人　何だ、木魚講だ。（トびつくりする、お作恥かしさうに前へ出て、）

お作　番頭さんの前でございますが、モウ七月になりまして産れさうでございますから、いくら隱しても隱しきれず、父さんに打ち明けまして、お掛合ひに參りました。

手〇　誰がこんなに脹らましたか。

手□　番頭さんの業でもあるまい。

番頭　エヽ、何で私が知るものか。

ト爰へ暖簾口より、以前の佐太郎丁稚に引張られて出來り、

佐太　おれに逢ひ度いとは、どんな人だ。

丁稚　何だか知らないが、いゝ女でございます。

佐太　何だ、好い女だ。（トあたりを見廻す、お作佐太郎を見付けて、）

お作　モシ、佐太郎さん。（ト傍へ寄る。）

佐太 ヤ、手前は。（ト逃げ掛けるを引捕へて、）

お作 父さん、孕ましたのは、此の人だア。

六兵 そんなら是れが甥御さんか、成程こりやア好い男だ。

丁稚 イヨウおさんどんの色男様。

佐太 エヽ、引込んで居ろ。

丁稚 お前さんの眼ぢやアあるまいし。（ト暖簾口より丁稚逃げてはひる。）

番頭 そんならいよ／＼お前さんが、

手〇 お作どんを、

手□ 孕ませたのか。

佐太 イヤ／＼、誰がそんな者に手を出す奴があるものか、おれは知らねえ、覺えが無い。

お作 エヽ知らぬとは胴慾な、然も去年の十月二十日、恵比壽講の晩、酒に醉はしッておいらの寢所へのめずり込み、やアだといふのに無理やりに、こッ恥かしい事をしやあがつたが、其のおどもりが此の通り脹れ出したに違えねえ、それを今になりしらばツくれちやア、おらア悔しくつてこてへられねえ。

ト縋つて泣き入る。

六兵　ヲヽ尤もだ、口惜しからう、大事の〳〵一人娘を慰み物にさつしやれて、嫁入りも出來ぬ體にして、知らぬと云つて逃げようとて其の分に濟まされませうか、手當が出來ずば元の通りに脹れた腹を直して下せえ、どうして下さる〳〵。

ト叩き立てゝ云ふ、爰へ奥より娘お糸、振袖娘にて出來り、六兵衞を留めて、

お糸　まア〳〵待つて下さりませ、樣子は殘らず聞きましたが、此の店先で兎やかういつては、内の暖簾に拘はる故、裏へ廻つて臺所でお話しをして下さりませ、私に捌きは出來ませぬが、お姉えさんと相談して、惡い樣にはしませぬわいなア。

お作　イエ〳〵、裏へ廻る内に、逃げられては駄目なことだ。

六兵　話しの附かぬ其の内は、相手をめつたに逃がさぬ〳〵。

佐太　エヽ、見つともねえ、放せと云ふに。

お作　イエ〳〵、めつたに放さぬ〳〵。

お糸　コレ〳〵、みんなも見て居ずと、扱うて上げぬかい。

番頭　イエ〳〵色戀ばかりは別のもの故、

手〇 側から口は出されませぬ。
手□ 當人同志でお掛合ひなさい。
六兵 サア〳〵手當をして下さい。
佐太 エヽ、そんな事を知るものか。
ト逃げに掛るを遣るまいと爭ふ、爰へ奥より伊右衛門、羽織着流し隱居の拵へにて出來り、
伊右 エヽ騷々しい、靜かにせぬか。
お糸 や、あなたは父さん。
番頭 そんなら樣子を、
〇□ 御隱居樣にも。
六兵 これは大旦那樣、おやかましうござりまする。
ト皆々下に居る、佐太郎逃げようとするを、お作捕へて居る故困る思入、伊右衛門此體を見てよろしく住ひ、合方になり、
伊右 ヤイ佐太郎、是れへ出居れ。おのれの樣なやくざな奴はおれの子ならば上へ願ひ、懲役場へ入れてしまへど、緣に繋がる伯父甥の義理ある中故内へ置き、何の役にも立たぬ奴を面倒を見て遣つ

て居れば、よい事にして遊び歩き、商法の道を覺えようとはしをらいで、聟殿始め店の者に迄金を借りては野良を乾き、放蕩をして歩くのみか、かやうな猥らな事をして暖簾へ疵を附けるなどとは、不孝と云はうか白癡と云はうか、あきれ返つたおのれの所行、聟の手前も面目無い、何れへなりと出て行きやれ。

お糸　其のお腹立ちはお道理乍ら、どうぞ御勘辨下さりませ。

伊右　エヽ、誰が詫びても料簡ならぬ。サアきり〳〵と出てうせう。

トきつと云ふ。佐太郎前へ出て、

佐太　私だつて氣に入つた嫁でも持たせておくんなされば、こんな澤庵臭い下女などを孕ませる氣はござりませぬが、月に二歩の小遣ひでは女郎買にも行かれませぬから、饑い時の不味物なしと、腹塞げをした積り、向うの腹が脹れまして是れでは勝手が違ひました、今日から心を改めますからせめて爰に居るお糸坊でも、嫁に持たせておくんなさい、それで辛抱致します。

伊右　エヽ、默れ〳〵、默り居らぬか、おのれのやうな無頼者に可愛い娘が遣られるものか、癡言言はずと出てうせう。

番頭　御隱居樣がかうおつしやつては、所詮お詫は叶ひませぬ。

手〇　サア〱早く、佐太郎さん。
手□　何れへなりとおいでなさい。
六兵　假令甥が追ひ出されても、こなたのお内が掛り合ひ。
お作　元々通りになる迄は、おらア宿へは引取らねえ。
佐太　親父の話に聞いて居るが、自分も若い時分には、下女や乳母を孕まして手切れを取られた事もあるに、さりとはそでねえ伯父さんだ、勘當される替りにやア是から世間を觸れ歩き、伯父御の若い時分の事を、思入れ饒舌つて遣らにやアならねえ。
伊右　ウヌ、そんな事をぬかしをつて。（ト煙管を持ち、立掛るを、お糸留めて、）
お糸　まア〱、待つて下さりませ。
伊右　エヽ、留めずとそこを退いて居ろ。
ト　お糸を掻き退け、佐太郎へ立掛る、此の時奥より聟の與兵衞、羽織着流しにて出代り舅を留めて、
與兵　舅御樣、まア〱お待ち下さりませ。
伊右　聟殿、必ず留めさつしやるな。
與兵　ハテ、何事も私が悪い樣には致しませぬ、先づ〱お待ち下さりませ。（トよろしく留めて、合方

になり、)コレ作太郎、どうしたものだ、我が不始末を詫びもせず親にも勝る伯父に向ひ、言葉を返すはよくない事ぢや、何故神妙に蟄して居ぬのぢや。番頭も番頭ぢや、傍に居乍ら御隱居へ何故執りなしてお詫びをせぬ、默つて居るは不忠でござるぞ。(ト双方へこなし、)さてお作の親の六兵衞殿、樣子は奧で聞きましたが、左樣な譯なら夜るでも來て何故こつそりと話さつしやらぬ、尤も先頃姙娠の樣子と知れど相手は知らず、店の者でも惡戲して左樣な體に致せしかと、事無い内に何となく暇を出して下げましたが、相手がそれと知れて見れば、何れ出產の入用や手當は此方でしませうから、今日の所は此の儘に、當人を連れて歸つて下さい。

六兵　イヤモウ旦那樣の樣に、事を分けておつしやつて下さりますれば、お世話になつた娘の御主人、お言葉を立て此の儘に、娘を連れて引取りませう。

お作　其の替りには五圓の所を十圓出して下さいまし、身持になつちやァ五人前も喰はにやァ腹が塞がりませぬ。

與兵　產れた子供も私が計らひ、よしなに始末を附けようから、安心をして歸るがよい。

六兵　ヤレ〳〵、それで落ち附きました、そんなら娘、早く歸らう。

お作　おらァ何だか蟲がかぶつて、產れさうになつて來た、

佐太　エヽ、こゝで産んでたまるものか。
六兵　コリヤ何としよう、仕方がない。背負つて遣るから人力の、ある所迄一緒に行きやれ。
お作　背負つては押ッ潰れる、俥を呼んで來て下せえ。
六兵　エヽ、千手觀音に背負さるのだ。
お作　それぢやァ何だかこッ恥かしい。
與兵　そんなら早く歸らつしやい。
六兵　是は皆さん、おやかましうござりました。
　　ト六部三重、きんの入りし鳴物になり、六兵衞、お作を後ろ向きに脊負ひ、花道へはひる、番頭前へ出て、
番頭　お作親子が居ります故、お詫びもせずに居りましたが、二人が歸つて見ますれば、切つても切れぬ甥御さま。
手○　私共も佐太郎さんへ、異見を致すでござりませうから、
手□　今度の事は御隱居樣、御勘辨を下さりますやう、
番頭　一統お願ひ、

三人　申しまする。
伊右　聟殿始め店の者がそれ程迄に詫びるなら、今日の所は許して遣る、以後をきつと愼み居らう。
お糸　お詫びが叶うた上からは、是から心を改めて、猥らな事は出來ませぬぞ。
佐太　是れといふのも鶴松めが、おれを欺して連れ出したからだ。ウヌ、どうするか見やァがれ。
ト暖簾口へはひる。
お糸　お詫びが濟むと、モウ直ぐに。
三人　あれだから困ります。
ト番頭等口な揃へて云ふ。お糸先きに番頭手代等奥へはひろ。伊右衛門思入あつて、
伊右　死んだ弟の忰故餘儀無く内へ引取つて、厄介人にはして置くが、あの通りの無頼者、奉公人の手前といひ、若いに似合はず遂に是迄、亂暴な事をせぬこなた、其の聟殿の手前へ對し面目無うてなりませぬわえ。
與兵　イエ、其の御心配の休まるやう、又私から佐太郎殿に篤と異見を加へますれば、先づ何事も私にお任せなされて下さりませ。
伊右　此方が優しい心故、舅ばかりか娘迄堅い聟をば持ち當て、こんな仕合せな事は無い。

與兵　イヱ私もあの樣な器量ばかりか氣質のいゝ女房を持て、此の樣な仕合せな事はござりませぬ。

伊右　イヤあの樣な不束者故、さう云はれては面目ない。

與兵　何は兎もあれ佐太郎殿に、お詫びをさせておかねばならぬ。

ト立上らうとする、奥より女房お絹人柄の好き大家の女房の拵へにて出來り、

お絹　イヱ、そのお詫びの名代に、私が參りました。

伊右　イヤ構はずと、捨てゝおきやれ。

お絹　決して構ひは致しませぬが、只今奥へ參りまして、伯父樣や旦那樣へどうぞお詫びをしてくれと佐太郎殿が賴みます故、餘儀無く是れへ名代に、お詫びに出ましてござりまする。

與兵　惡い所は私がきつと異見を致しますれば、許してお遣り下さりませ。

伊右　斯うして內中睦じく庇ひ合ふ其の中へ、何であんなやくざが交るか。

お絹　それも世にいふ五本の指、

與兵　切つても切れぬ血筋の緣、

伊右　イヤ、困つた奴めもあるものぢやわえ。

ト誂への稽古唄になり、花道より前幕のお傳、着流し草履にて、鳶合羽を引掛け、蝙蝠傘を突いて出

來り、花道へ止り、舞臺へこなし、

お傳　故郷と云へど上州も、廣い國故富岡の、小澤と云ふ名は聞いては居れど、尋ねて來たは今日が初めて、成程立派ないゝ見世附き。ドレ、お尋ね申して見ませうか。（ト舞臺へ來て、門口から内を覗き、腰を屈め。）ハイ、御免遊ばしませ。（ト此の聲を聞き、與兵衞奧へ向ひ。）

與兵　コレ幸七、お客があるぞよ。（ト呼ぶ、奧より以前の番頭出來り、）

與兵　ヘイ〳〵、お客樣でござりまするか。（ト門口を明け、こなし。）何處からお出でなさいました。

ト是にてお傳叮嚀に、

お傳　私は沼田在の下牧村から參りましたが、旦那樣はいらつしやいまするか。

番頭　ハイ、主人は宅でござりますが、何御用でござりますか。

お傳　お宅においで遊ばすなら、お目にかゝり度うござります。（ト番頭こつちへ來て、）

番頭　モシ旦那、二十五六の若い女が、あなたに逢ひ度いと申しまして、參りましてござります。

與兵　シテ何れから參つた。

番頭　沼田在の下牧村から參りましたと申します。

與兵　沼田在の下牧村に近附きは無い筈だが、門違ひではあるまいか、よく聞いて見るがいゝ。

番頭　ヘイ〳〵、畏りました。（ト此の内門口からお傳恥かしさうに顏を出し、）

お傳　旦那樣、私でござりまする。（ト辭儀をする。）

與兵　どなたか知らぬが、御用なら內へおはひりなされませ。

お傳　それへ出ますも失禮故、憚り乍ら門口へ、ちよつとお出で下さりませ。

與吉　何も私は門口へ、呼び出される用は無いから、遠慮せずと是れへござれ。

お傳　それへ出ましても、よろしうござりますか。

番頭　ヲヽ、よいからずつとはひりなさい。

お傳　左樣ならば、どなたさまも、御免遊ばしませ。

　　ト合方きつぱりとなり、お傳皆々に辭儀をし、淑かに下手へはひろ。伊右衛門お絹見てこなし、

番頭　サア、煙草でもお上りなされませ。（ト番頭捨ゼリフよろしくあつて、）

お傳　旦那樣、お久し振りでござりまする。

與兵　どなたであつたかこつちでは、遂お見忘れ申しました。（トお傳思入あつて。）

お傳　月日の經つは夢のやうで、お別れ申して最早二年、其の後お便りがござりませぬ故、どう遊ばしたかと存じましたが、御機嫌の好いお顏を拜し、誠にお嬉しう存じまする。

トお傳俯向き、恥かしさうに云ふ。

與兵　さうしてお前は、何處で私に近附きになられたのだ。

お傳　貴方はお忘れ遊ばしたか、一昨年草津の湯治場で、思はぬお惠み受けました、下牧村の傳でござります。（ト與兵衞思ひ出して、）

與兵　おゝ、さう云はれゝば覺えある、去年草津の湯治場で、お目に掛つたお傳どの。

番頭　思はぬお惠み受けたといふは。（ト案じるこなし、與兵衞こなしあつて、）

與兵　そりやァかう云ふ譯だ、去年草津の湯治場で、一つ宿屋に泊り合せ、難儀を見兼ねてあの女に惠んで上げた事があれば、それで斯樣に云ふのであらう。

番頭　左樣な事なら好いけれど、向うがあんまりなれ〳〵しい故、イヱあんまりお美しい故、好いお女中だと思ひました。（トお傳、伊右衞門に向ひ、）

お傳　憚乍ら貴方樣は、御親父樣でござりまするか。

伊右　如何にも私は、伊右衞門といふ、與兵衞の舅でござりまする。

お傳　こつちにおいで遊ばすのは、御新造樣でござりまするか。

お絹　ハイ、不束乍ら與兵衞の女房、お絹と申しまするわいなア。（トお傳手を突き、）

お傳　お初にお目に掛りまする、御覽の通り在所者故、こんなお店へ上りますもお恥かしうございますが、不思議な御緣で旦那樣と、一つ宿屋へ泊り合せ、申し上ぐるも憚りあれど、是から妹と思召され、お目掛けられて下さりませ。

ト是を聞き與兵衞氣になるこなしにて、

與兵　モシ〳〵お傳どの、僅かな恩義を厚く思ひ、わざ〳〵禮にお出でなされ、是から妹同樣とはどうやら味な禮の云ひやう、それではあんまり叮嚀過ぎ、私が迷惑しまするぞ。

お傳　御迷惑と存じます故、お門へお出で下さりませと、申し上げましてござりまする。

與兵　何も私は門口で、此方と話す事は無い。

お傳　なに、無いとは旦那樣、そりやお情なうござりまする。（トぢつと思入）

與兵　情ないとは、そりや何が。

お傳　御親父樣や御新造樣が、爰においで遊ばす故、あなたは左樣におつしやりますが、爰で申して惡い事なら、何も申さず歸りますから、お優しいお言葉を、一言お掛け下さりませ。

與兵　何もこなたに優しい言葉を、私が掛ける譯が無い。

お傳　譯の無い事を私が沼田在から富岡迄、女の身にてはる〴〵と、上り難い此のお店へ恥を忍んで參

りませう、お情ない事おつしやりますなア。（ト俯向き、手拭にて涙を拭ふ。）

與兵　まだ〳〵、其の様な事を云ふか。

ト與兵衞きつとなるを、伊右衞門留めて、

伊右　先づ〳〵、聟殿待たつしやれ、そなたは知らぬ様子ぢやが、どうやら譯が有りさう故、先づ一通り女中の云ふ事、聞いた上にしたがよい。幸七様子を聞いて見やれ。

番頭　畏りましてござります。コレ女中どういふ譯でお前は爰へ、そんな事を云つて來なすつたのか譯をそこで云ひなさい。

お傳　イエ〳〵、其の譯は申されませぬ。

番頭　何故其の譯が云はれませぬ。

お傳　申しますれば旦那様の、お恥になります事故に。

與兵　私の恥になるといふは、如何なる事か知らねども、此方に覺えの無い事なれば、何なりと云つたがよい。（ト腹の立つ思入。）

お傳　左様なれば旦那様、申しましてもよろしうござりまするか。

與兵　大事ないとも。

番頭　サア〳〵、早く云はつしやい。

ト誂への合方になり、お傳態と云ひにくさうに思入あつて、

お傳　譯をお話し申上げねば、申掛けでも致すやうに定めて思召しませう、それが悲しうござります故是にて申上げまする。昨年草津の湯治場で、不思議な御縁で一つ宿屋へ泊りましてござりまするが、其の夜計らず護摩の灰に路用の金を盗まれまして、途方に暮れて居りましたを、旦那様がお聞き遊ばし、見ず知らずの私共へ五圓下さいました故、何といふお慈悲深い有難いお方様と、夫は悪い病にてお禮も申し兼ねますれば、夫の代りに私が、お禮に上りました時、在所者の私をおとらへなされて兎や斯うと、御常談をおつしやりますれど、夫のある身にお斷りを強ひて申しましたれど、今宵の頼みを聞いたなら悪い様にはせまいからと、お情深いお言葉に道ならぬとは存じましたが、五圓といふ路用をばお惠みなされて下さりました御恩がある故、お言葉に隨ひましてござりまする。お二人様の其の前で、斯様な事を申しますのは、お恥かしうござりますが、其の夜受けたるお情が、身にしみ〴〵と忘られず、疾うよりお尋ね申さうと、存じてはをりましたが、旦那様のお恥故けふ迄こらへて居りました。あんまりお恥かしうござります。

ト云ひにくさうになまめいて云ふ。此の時與兵衛手を握り、口惜しき思入、伊右衛門お糸顔見合せ、

もしやといふこなし、爰へ奥より以前の佐太郎出て、後ろで聞いて居て、此の時前へ出て、

佐太　成程人といふ者は、見掛けによらぬと世間でいふが、今といふ今思ひ當つた、伯父御を始め親類でも堅い〳〵と評判の、こなたの聟が人の女房を、無理に口説いて間男するとは、東京ならば直ぐに新聞。いやはや、あきれたものだわえ。

ト與兵衛たまり兼れし思入にて、お傳の傍へ寄り、

與兵　コレお傳どの、こなた衆夫婦の難儀を見兼ねて金子を惠んだ覺えはあれど、主ある女に不義を云ひ掛け、猥らな事をした覺えは無い。言ひ掛けを致すのだな、舅の手前女房の手前、店の者へも面目ない。（ト口惜しき思入）

お傳　言ひ掛けするとは情ない、五圓お惠み下さいましたを、恩に掛けて私に否と云はさぬ思召し、嘘僞りで無い證據は然も此の末ともに困る事でもあつたなら、いつでもよいから尋ねて來いと矢立の筆で鼻紙へ町所番地迄、自身に書いて下さいましたを、肌身放さずあなたと思ひ、大事に持つて居りまする。あれをお忘れなさいましたか。

與兵　チヽ忘れはせぬ、御恩になつたあなたの方へ寢るにも足は向けぬから、教へてくれと頼む故、うつかり書いて渡した書附、それを證據に云ひ掛り、ゆすりに來るとは恐ろしい、顏に似合はぬ心

ぢやなァ。

お傳　たとひ一夜のお情でも、明け暮れ戀しく思ふあなたへ、何でゆすりに參りませう。今更知らぬとおつしやいますは、夫のある身を御存じにて、宿屋の下女か何ぞのやうに五圓のお金で私を慰みになさいましたか、さういふあなたのお心とも知らぬ女子の淺はかに、此身をお任せ申しましたが、私や悔しうございます〳〵。

ト　お傳身を震はして顏へ手拭を當てゝ泣く、與兵衛悔しき思入。

與兵　エヽさう云へばかういふと、こりやモウ捨てゝは置かれぬわえ。

ト　きつとなつて立ち掛るを、伊右衛門留めて、

伊右　これ〳〵聟どの待たつしやい、私の手前を濟まぬと思ひ、こなたは腹を立たつしやるが、假令聟でも此の家を渡したからはこなたは主人、いはゞ遊山の旅先にて、どんな保養をさつしやらうとそこが男の働き故、別に咎めはせぬけれど、亭主のあるのを知りながらこなたが一つ寢したのが誤まり、世間の人の口の端に掛らぬやうにしたがよい。

與兵　致し方もございませぬが、全く覺えの無い事故。

伊右　ハテ、何を云ふにも水掛論、五圓の金を惠んだが、不覺と思つて諦めさつしやい。

與兵　エヽ、さうおつしやるだけ私は、浮かれたやうで面目なうござりまする。

ト與兵衛男泣きに泣き、悔しき思入、伊右衛門お傳に向ひ、

伊右　コレ女中、さうして此方此の内へ、何用あつてござつたのぢや。

お傳　參りましたは旦那樣が、只今申した書附をお渡しなされて其の時に、一夜たりとも斯うやつて枕交した上からはいはゞ女房も同じ事、困る時でもあつたなら何時でも來いとおつしやいました、其のお言葉に甘へまして上りにくい此の店へ參りましたも此頃は、夫が九死一生にて、藥の代にも差支へ、難澁致して居ります故、お恥かしくも御合力をお願ひ申しに上りました。

お絹　さうして旦那がお渡しなされし、其の書附をお前さんには、そこに御所持でござりまするか。

お傳　ハイ起請代りとおつしやつた、書附故に大事にして、守へ入れて居りまする。(ト脊負守りの内より書附を出し、)疑はしくば御新造樣、御覽なされて下さりませ。(トお絹へ渡す、お絹開き見て、

お絹　成程女中の云ふ通り、是りや覺えある旦那の御手蹟。

お傳　何と、僞りではござりますまい。

お絹　ムヽ、(トお絹誠と思ひしこなし、佐太郎其の書附を引奪りて、)

佐太　上州甘木郡富岡本町三番地小澤與兵衛。サア〳〵皆さん、御覽じませ、是は今日の色事新聞、所

は上州甘木郡富岡本町三番地。

ト讀み賣りの心にて、繰返し〳〵あちこちと見せて歩く事あつて

番頭　そんならあれを旦那には、書いてお渡しなされましたか。

　是れでは目串が拔けぬわえ。

與兵　成程あれは私が手で書いてやつたに違ひないが、それを證據にされようとは夢にも知らぬ此の與兵衞、返す〳〵もあの折に、難儀を見兼ねて路用の金を惠んでやつたが我が誤り、其の金故に我が方へ寢ても足を向けぬから所を書いてくれろと云ふは、奇特な事と書いて遣つたが、あの書附を取つたのは、かゝる巧みを仕よう爲めか、思へば太い奴ぢやなア。

お傳　其の書附は貴方の方から起請替りに下すつたを、御親父樣や御新造樣へ濟まぬ故かは存じませぬが、こつちからお願ひ申したなどゝは、そりや御卑怯でございます。

與兵　卑怯とは何が卑怯、こなたが達つて賴む故、書いて遣つたあの書附。

お傳　まだ〳〵あなたは其のやうな、形の無い事おつしやりますか。

與兵　チヽこつちに覺えは無い事故、言はなくつてどうするものだ。

お傳　さういふ情無いお心と、知らずに枕交したが、口惜しうござりまする。

ト　お傳齒ぎしりして口惜しがり、トゞハツト泣伏す、是にてお絹腹の立つ思入れ

お絹　モシ旦那樣、エヽお前樣はなア。(ト誂への合方になり。)如何に旅寢の戲れでも、外に女子もござりませうに、何處の者か身許も知れぬ、ぬしある者と枕を交し、そんなお約束をなさるとは、常のお氣にもお似合ひなされぬ後前見ずのなされ方、そりやモウ足らはぬ私故外にどの樣なお樂しみが出來ませうとも、悋氣などは決して致さぬ心なれど、是ればかりは御異見を申しませねばなりませぬ、是が女郎か藝者なら、世間にまゝある事故に、さのみ恥でもござりませぬが、主ある者と此の樣な事をなされて、モシひよつと、表沙汰に成つた時はあなたの恥でござります、情ない事をなされましたなア。(トお絹泣く、與兵衞術無き思入。)

與兵　イヤそなたの恨みも尤もだが、此の身に覺えある事なら致し方は無けれども、神掛けて此の與兵衞、全く覺えの無い事故、そなたの疑ひ晴らしてくりやれ。

お絹　そんならあなたは眞以て、お覺えはござりませぬか。

與兵　夫婦になつて十何年そなたに苦勞を掛けぬ與兵衞、戀は思案の外といへど、主ある女に手を出す樣な、無分別を何でしようぞ。

佐太　お前は知らぬと云ふけれど、向うに證據があるからは、たゞ知らぬでは通るまい。

與兵　證據といふは所書、出る所へ出て其の書附が、何で證據になるものか。
お傳　後の證據に私へ下さいました其の書附、そりや證據にはなりませぬか。
與兵　何の證據になるものか、もうよい加減に歸るがよい。コレ幸七、早く表へ出してしまへ。
番頭　へイ／＼畏りました。いつ迄居ても無駄だから、早く內へ歸りなさい。
佐太　慰まれたがお前の損、仕方がないと諦めて、愚癡をこぼさず、
番頭　歸りなさい。（トお傳俯向き居て、）
お傳　イヱ私は歸られませぬ。
番頭　なに、歸られぬとは。（ト合方替つて、）
お傳　末々迄も困る時は貢いでやるとおつしやいました、其のお言葉に絆されて、此の身をお任せ申しましたも、重き病に難儀致す夫の爲めと存じましたが、今更知らぬとおつしやれば、二つ並べた枕の外は證人の無い閨の內、御大家故に私が云ひ掛けでも致す樣に思召すでござりませうから、もう何にも申しませず、夫の眼をば掠めまして、身を穢しました言譯に、自害致して死にまする。
與兵　ヲヽ死なで叶はぬ事ならば、決して留めは致さぬが、爰ではこつちの迷惑故、外で自害をして貰はう。

お傳　イエ〳〵外へは參りませぬ。お欺しなされた旦那のお内で、自害を致して死にまする、御親父樣や御新造樣にはお氣の毒ではござりまするが、お許しなされて下さりませ。

ト思入あつて、懷中より短刀を出す。

佐太　ヤア、こりや短刀を持つて居るか。(トびつくりする。)

お傳　まさかの時は死にまする、覺悟で用意致して參りました。

番頭　まア〳〵、そんな短氣をせずと、お待ちなされませ。

トお傳涙を拂ひ短刀を抜き掛ける、伊右衞門こなしあつて、

伊右　女中、暫く待たつしやれ。

お傳　ハツ、待てとお止めなされましたは。

伊右　草津の湯場から馴染とて、與兵衞を尋ねてござつたこなた、夫が病氣で難儀とあれば私が合力しませうから、死ぬのは思ひ止まつて下され。

お傳　引くに引かれぬ言葉の綾から、死ぬる心になりましたが、實は夫が病氣故、死に度いことはござりませぬ。

伊右　それぢやあ待つて下さるか。

お傳　ハイ。

伊右　シテそなたが賴む合力は、幾ら程あればいゝのだ。

お傳　ゆすり衒りでござりませねば、如何程なりとあなた樣が遣つてもいゝと思召すだけ、お惠みなされて下さりませ。

伊右　イヤ高を云はぬが感心だ。卽刻合力致しませう。（ト伊右衞門帳場の内より札を出して此方へ來て、）コレお傳殿とやら、どういふ譯か知りませぬが、こなたは抱き寐をされたといひこつちは覺えが無いといひ、謂はゞ無證據水掛論、假令こつちの名前書がこなたに渡してあるにもせよ、それが證にはなりませぬが、自筆で書いた所書きを、買つた積りで五十圓手切れの印しに進ぜるから、嘘か誠か知らねども、亭主が九死一生で困るとあれば此の金で、よく手當をしてやらつしやれ。其の替りには此の後とも、無心は愚か店先へ立寄ることもなりませぬぞ。（ト件の札包を差し出す故、）

與兵　イエ〳〵何で五十圓、お遣りなさるには及びませぬ、出る所へ出て私が言ひ開きをして見せます。

伊右　ハテ、表沙汰にもする時は、こなたの明りは立つにもせよ、此の富岡は云ふに及ばず、高崎切つての噂となり、どういふ事でか東京の諸新聞へも出る時は、取引先へもぱつとして、商法向きの

邪魔にもなれば、腹も立たうが五十兩の、手切れで綺麗に濟ますがよい。

番頭　おつしやる通り商法向きの邪魔となつては五十圓の、手切れぐらゐにやァかへられませぬ。

與兵　とは云へみす〳〵、其の金を。

お絹　まア何事も親父樣へ、任せてお置きなされませ。

佐太　是れから見れば十圓でも、下女の手切れは安いものだ。

トよろしく慰める、與兵衞無念のこなし、お傳札を見てしめたといふ思入。

お傳　左樣なら其のお金を、私に下さりまするか。

伊右　手切れに渡す五十圓、數改めて受取らつしやい。

お傳　あなた樣から私が是れをお貰ひ申しましては、濟まぬ譯でござります、旦那樣が私をお欺しなされた其の上に、ゆすり衒りの惡名附け、實に悔しうござります故、爰で死なうと存じましたが、あなた樣が此の樣に事を分けてのお扱ひに、何事申さず五十圓、お貰ひ申して歸りまする。

伊右　得心ならば其の金を、早く持つて歸らつしやい。

お傳　ハイ、お暇致すでござりまする。

ト金を取上げ、改め見て帶の間へ入れ、與兵衞に向ひ、惡婆のこなしにて、

左樣なればこそ御親父樣、厚いあなたの思召し御恩は生涯忘れませぬ。御新造樣へも御苦勞を、お掛け申して濟みませぬが、お許しなされて下さりませ。（ト叮嚀に辭儀をなし、氣を替て、）モシ旦那、そんなに怖い顏をなされずと、いつか一緒に寢たやうに、笑ひ顏を見せておくんなさいな。

與兵　何と。（ト息込むを、お絹モシと留める、お傳又氣を替へて、）

お傳　番頭さんにもお若い衆にも、失禮を申しました、定めてゆすり衒りの樣に思召すでございませうが、旦那樣に私は深いお約束がございまして、お貰ひ申す五十圓、決してゆすりぢやございませぬ。

ト番頭何をといふ思入、お傳又與兵衞に向ひて、

まだそんな怖い顏をお前さんはなさるのか、人目が無けりやア猫撫聲で優しい事もおつしやるだらうに、ほんに男といふ者は、手前勝手なものだねえ。

與兵　何を。（ト又立ち掛るを、伊右衞門留める、お傳手を下げ、）

お傳　大きに、おやかましうございりました。

ト辭儀をして門口へ出、思入あつてわざと叮嚀に辭儀をする。是を誂への唄になり、お傳花道へ行き思入あつて足早に花道へはひる。佐太郎前へ出て、

佐太　イヤ、下女のお作を孕ませて五圓か十圓取られるのでさへ、伯父が達て出て行けと小言を云はれた間も無く、今度は聟の與兵衛さんが、人の女房を抱寝して五十圓とはあきれたものだ、是れでは伯父御も聟殿を、お拂ひ箱にせずばなるまい、ドレ〳〵こつちは奥へ行つて、自分の天窓の蠅でも追はうか。

ト佐太郎は暖簾口へはひる。與兵衛思入あつて、

與兵　ムヽ、さうぢや。(ト身支度して立上るを、お絹留めて、)

お絹　モシ旦那様、コリヤ血相してお前さん、どこへお出でゞござります。

與兵　商賣用で高崎迄行かねばならぬを忘れて居た故、今からちよつと行つて來るのぢや。

伊右　イヤ高崎へ行くといふのは、今の女の後追つ駈け、意趣返しをする心であらう。

與兵　エヽ。(トぎつくりこなし。)

お絹　但しやつぱり未練が殘り、後をお慕ひなされまするか。

與兵　エヽ、あいつに何で、未練なぞが。

伊右　何さま常から物堅い、其方にみだらな事は無い故、短慮な事をさつしやるな。

番頭　たゞ何事も此の店の、暖簾に免じて旦那様、御勘辨なされませ。

與兵　サア暖簾が大事と思ふ故、ぢつと怺へて居つたるも、人の情を徒となす畜生女を此の儘に、打ち捨て置くは私の腹が納まりませぬ。

伊右　こなたの云ふのも尤も乍ら、自筆で住所姓名記した、端書乍らも書附を、渡して置いたがこつちの誤まり、表沙汰にもなる時は水掛論とは云ひ乍ら、相手は眉目能き女故、一旦こつちに疑ひ掛り、お上の御詮議受けねばならぬ、そこを案じて五十圓、挨拶金を出したのもやつぱり此方が稼いだ金、私に遠慮は入らぬから、惡い犬に喰ひ附かれたと、諦らめて料簡さつしやい。

お絹　あんな奴めはこつちから、手出しをするを幸ひに、又どの樣な言ひ掛りを、申しませうも知れませぬ。

與兵　サアそれ故にわざと見のがし歸して遣りしも、途中にて恨みを返して遣らう爲め、假令御離縁受けませうとも、是ればかりは堪忍ならぬ。（ト門口の方へ行かうとする）

伊右　ハテまア、下にゝ（ト袖を捕へるを木の頭）居さつしやれといふに。

ト此の模樣、與兵衛を無理に下に据える、合方にて道具廻る。

（上州高崎街道畷手の場）――本舞臺一面の平舞臺、後ろ奥深に在體の遠見、上の方に屋根のある石の

六地藏、前に線香立の石、左右に幟など宜しく、下の方一面の藪疊み、諸所に松の立木、同じく釣枝總て高崎街道畷手の模様よろしく、爰に序幕の護摩の灰○△□◎の四人思ひ〳〵の拵へにて捨石に腰を掛け居る、此の道具驛路入りの合方にて、道具納まる。

○　コウ木鼠、今ちらりと立場で見掛けたあの女は、去年の秋草津の湯場に逗留して居た、癩病病みの亭主のある、お傳とやらに違えねえ。

□　其の癩病の亭主に引替へ、粋な男と二人連れは何でもあいつは色男、亭主を捨てゝ隨徳寺、どんな野の末山の奥でも、厭はず夫婦にならうといふ駈落者と見て取つた。

△　何れこつちへ二人連れで遣つて來るに違えねえから、小影に隱れて樣子を窺ひ、そんな筋ならゆすり掛け、四の五の云つたらこちと等が、寄つて掛つて野郎を打つちめ。

◎　女は四人で小道へ引つ擔いで行つて念佛講、路用の金でも持つて居たら、殘らずこつちへ卷き上げて、旨え酒でも飮むとしよう。（ト護摩の灰の○上手を見て、）

○　アレ〳〵、向うへ遣つて來るから、早く小陰へ忍んで待たう。

三人　それがいゝ〳〵。

ト四人は下手の藪疊の蔭へはひる。右の合方にて上手より前幕の田川吉太郎、旅なりにて以前のお傳

と連れ立つて出來り、吉太郎邊りを見廻し、

田川　コレお傳、何で慌て立場を飛び出し、おぬしは道を急ぐのだ。

お傳　お前は氣が附かぬが奧に休んで居た客は、いつか私が話しをした浪之助さんと極く懇意な、露木濱次郎さ、顏を合はすと面目ない故、向うが知らぬ其の内と、それで立場を出掛けたのさ。

田川　道理で豪勢急いだと思つた、然しモウ此處まで來りやア、逢ひツこねえから大丈夫だ。

お傳　まア、向うへ行つて一息つかうよ。（ト舞臺へ來り、捨石へ腰を掛け、）

田川　フム、さうか、いつかおぬしの話しには、愛知へ行つて居ると云つたが、こつちの方へ廻つて來たのは、伊香保で湯治をした上で、東京へ行く積りだらう。

お傳　あの人も愛知では、おつゥ遣つて居たさうだが、どうしても東京が懷かしいと見えるねえ。

田川　そりやアそれに違えねえ、然し此處なら誰も差合ひ無しだ、一服遣つて話すとしよう。

お傳　此處だといつて地藏樣が、後ろに立つて聞いて居るから、滅多な事は云へないよ。

田川　違えねえ、地藏馬鹿にした話だ。

ト燐寸を出し煙草を吸附け合ひ、呑み居てこなし、

田川　さうしてお前は富岡の、小澤の首尾はどうだつた。

お傳　やう〳〵のことで五十圓、旦那に逢つて借りて來たのさ。

田川　そいつァ何しろ有難え、路用が出來れば心丈夫だ、日光から鹿島を廻り銚子の方を見て歸らう。

お傳　イヱちつと此の金は内で引け道があるから、そんな遊山が出來ればいゝが。

ト兩人邊へ思入あつて、

田川　月日の經つのは早いもので、おれが故鄕の愛知を出てから、先づ東京で商ひを始め、二三度すつたが神田へ來てから、する事なす事拍子がよく、かなりな暮しになつた故、今日は淺草明日は王子と遊山に出掛けた其の時分、凪が續いて此の頃は御臺場廻りの釣がいゝと、云はれて出掛けた其の晩に、思ひがけねえおぬしといふ獲物をしたのが緣の端。

お傳　私しもあの日に辨藏の旣に手籠めに逢ふ所を、却つてそれが幸ひに助けられたる船の内、互ひの心逢初めに築地へ上つた其の晩に、濡れた着物を干す內と、損料蒲團を借りるのを忘れて其の伝一つ夜具、二つ枕に三つ蒲團嬉しい夢を結んだが、

田川　それからこつちに居流れて、亭主の病死も聞き捨てに、たうとうおれと腐れ緣。

お傳　果ては互ひの身の結ばり、以前の緣と小澤へ賴り、やうやく出來た五十圓。

田川　是れを路用に押し廻さうかえ。

ト兩人よろしく思入、お傳懷ろより以前の札を出し、

お傳　モシ吉さん、是を半分預かつておくれ。

ト田川手に取り、合點の行かぬ思入にて、

田川　半分おれに預けたのは、他人行儀にする心か。

お傳　アレサ、さう云ふ譯ぢやァないが、私の住所は此處から僅か二里に足らない所だから、お前と二人旅から旅へ押し廻せば、いつ逢はれるか知れぬ親、是れが別れにならうも知れねば、苦勞を掛けた恩返し、土産に少しの金でも置き、又餘所乍ら妹に後の事を頼み度いから、是から沼田の宿へ行つて渡して行くのを待つて居ておくれ、少しの内でも別れるから、お前が惡く思はぬ樣に、札を半分預けておくのさ。

田川　成程それもよからうが、もうとつぷりと日が暮れたから、女一人で物騷だ、おれが道まで送つてやらう。

お傳　イヱ、村の口迄車が利くから、私一人でも大丈夫、案じずと待つておいで。

田川　それぢやァ早く行つて來やれ。

お傳　ドレ、急いで逢つて來よう。

ト兩人立上る、爰へ後ろより以前の護摩の灰四人、縫包みを持ち窺ひ出て、

四人　野郎め、覺悟しろ。

田川　エヽ、何をしやアがる。

ト是より早き禪の勤めになり、皆々ごつちやの立廻り、爰へ上手より三幕目の魚屋清五郎、旅なりにて、小田原提灯を下げ出來り、此の中へはひり提灯を打落され、びつくりして飛び退く、是より忍び三重、誂への鳴物になり清五郎、お傳、田川、四人の護摩の灰をかせに世話ダンマリの立廻り宜しくあつて、トヾお傳田川花道へ脱れて行く、清五郎是れを透かし見て、

清五　どうやら、今のは。

お傳　エ。

トびつくりして下に居る、清五郎は護摩の灰△を引附け、見事に返す。双方見合つて、木の頭。

ひやうし　幕

五幕目

下牧村勘右衛門内の場

〔役名〕──玉橋勘右衛門、百姓大助、百姓九子六、同太五八、玉橋お傳、お傳妹おむら、大助娘お梅

等。〕

（勘右衛門内の場）——本舞臺三間の常足の藁屋、竹緣、正面押入、鼠壁、上手落間、柴垣丸太の渡りいつもの所竹の簀戸、外植込み、榎の大樹、後ろ在體の遠見、生垣折廻し、すべて下牧村お傳實家の體、臼挽唄にて幕明く。と大助娘おうめ、銀杏返しの髮、小娘の拵へにて、おむらやつしなり、在所娘の拵へにて、前に鏡立、傍に櫛道具の箱を置き、おうめの髮を結ひ上げし體、下手にて百姓九子六、太五八、股引藁草履やつしなりにて、二重へ上り煙草をのみ居る。

九子　コレおうめばう、大そう髮が綺麗に出來た。

太五　また學校の試驗かな。

うめ　いえ〳〵試驗ぢやァありません、お寺參りに行きますので、それで結つて貰ひました。

九子　死んだ此子のお袋は、忘れもせぬ二月だつたが、

太五　お寺參りに行くといふのは、古い佛の年囘か。

むら　いえお寺參りに行くといふのは、私の姉の聟になつた此の子の兄さん浪之助さんの、明日が百ケ日でござんすゆゑ。

九子　大助どんの二番息子、浪之助どんはどういふ譯か、人の厭がる癩病で段々體が腐れ出し、お傳ど

んと横濱へ療治に行つたといふ事だが、
太五　たうとう藥の利目もなく四月死んだといふ事は、大助どんの話しで聞いたが、四十九日も直き立つて、百ヶ日になりますか。
むら　月日の立つは早いもので、亡くなつたといふ知せのあつたも、昨日今日のやうでありましたが、ツイ百ヶ日になりましたわえ。
うめ　此の間兄さんから郵便で來たその手紙に、病ひが治つて歸る時東京土產に新聞を買つて行つてやるとあつた故、今日か明日かと指折つて每日待つた甲斐もなく、こちのをぢさんと父さんが横濱へ行つて兄さんを、尋ねた其日に死なしやんして、土產に待つた新聞の替りに紙の戒名を、持つて歸らしやんしたわいなあ。
九子　大助どのからあらましの話しはわしも聞きましたが、七日の法事をしまふ迄、二人とも逗留して居たさうだが、
太五　その折船で東京へ、用達に行つたお傳どのは、それきり歸つて來ぬさうだが、其後便りがありましたかな。
むら　聞けば其折品川へ來ると俄に風が出て、波を打込み船が覆り、乘せて行つた船頭はやう〳〵岸へ

泳ぎついたとかいふ話し、それ故大方姉さんは死んだであらうと諸所方々の占で見て貰うたが、死にはせぬ達者で居るといふ事ゆゑ、それを力に便りをば、毎日待つてをりますわいなア。

九子　開化の人は占やおみくじは當にならぬといふが、こつちの心を籠めて聞けば、辻占でさへ當るもの。

太五　ましてや尊い神佛のお告のみくじに死なぬとあれば、必ず達者に逢ひない。

むら　とはいふものゝ郵便で、自由の便りの出來るのに、今に何の便りもないのは、死なしやんしたかと思はれます。

九子　イヤ〳〵おみくじがよいとあれば、必ずそんな事はありますまい。今に便りがあらうから、マア氣を長く待たつしやい。

太五　それはさうと濱で死んだ、浪之助殿の戒名は、何といふ戒名だな。

うめ　アノ兄さんの戒名は、コレ爰にありますが。（ト佛檀より紙片を出して）草露秋還信士と申します。

九子　是れが秋還信士とか、いろはの外は、（ト兩人是を見て、）知らぬゆゑ、さつぱりわしらにやァ讀めませぬ。

太五　おうめ坊は大學とかを讀むさうだから、それで是れが讀めるのだ。

むら　此子の參る學校の、教師は元が儒者とやらで、よく四書五經を敎へます。
九子　此間も學校の本をちよつと見ましたが、何だか四角な字ばかりで、とんとお經を見るやうだ。
太五　お經といへば、大助どんの所へ顏を出して行くとしよう。
うめ　けふ百ヶ日の逮夜ゆゑ、内でお萩が出來ましたから、歸りにをぢさん達上つて行つて下さんせ。
九子　それは何より有難い、酒の匂ひはかぐのもいやだが、
太五　餅と聞いては目のないわしら、馳走になつて行きませう。
むら　モウお歸りでござんすかえ。
九子　勘右衛門殿が歸つたら、
太五　遊びにござれと言つて下され。
むら　ハイ、歸りましたらさう申しませう。
九子　ドレ、牡丹餅の、
兩人　馳走にならうか。（臼挽唄になり、兩人花道へはひる。おうめ本を持ち）
うめ　どれ、私も内へ歸りませう。
むら　今夜は内へ風呂がたつたから、一ト風呂はひつていつたがよい。

うめ　お寺參りに明日行くゆゑ、一ト風呂入つて行きたいが、内へ歸るが遲くなるから、

むら　私が歸りに送つて上げるから、遲くなつても大事ない。

うめ　それでは入つて行きませうわいナ。

むら　そんならさうしなさんせ。

　ト時の鐘、合方、花道より勘右衞門、木綿やつしなり、羽織着流し、親仁なりにて出來り、

勘右　明日は娘お傳の連合浪之助の百ケ日ゆゑ寺參りをして來たが、其の亡骸は横濱の東福寺へ葬つたれば、ほんのこつちは戒名ばかり、先祖の墓へ埋めぬゆゑ、嘸大助は本意なからう、是に付けてもお傳めは、品川沖で船が返り死んだか生きたか行方知れず、どこのおみくじも吉ゆゑに達者で居るとは思つて居るが、なぜ夢にでも知らしてくれぬ、アヽ親に苦勞をさせるやつぢや。（ト思入あつて舞臺へ來り）おむら、今歸つた。

むら　ヲヽとつさん、お歸りなさいましたか。

うめ　をぢさん、こんちは。（ト辭儀をする。）

勘右　おうめ坊遊びに來たか。

うめ　あしたお寺參りに行きますので、髮を結つて貰ひに來ました。

勘右　そんなら髮を結ひに來たか、ドレ〳〵髷が大きくなつたので、大そう背が延びたやうだ、何でも竹の子と子供の延びるは、昨日に今日と大きくなるもの。

むら　產れ立ちから色白で、田舍に稀な器量よし、十五六になつたらば、嘸よい娘になりませう。

勘右　ヲヽ向ふの甚太や隣りの作藏、若い者が多いから、大助殿も娘の番をするのに、田畑の鳥を追ふよりも、よッぽど苦勞なことであらう。

むら　髮を結つてやつたゆゑ湯へ入れて歸さうと、留めておいたが大事な娘、歸りの遲くならぬやう、風呂の下を焚きつけよう。

勘右　ヲヽさうぢや〳〵、甚太が所へ約束したから、早く風呂をわかしてくれ。

むら　モウなまぬるになつてゐるゆゑ、一焚き焚いたらわきませう。

うめ　姉さん、わたしも行きませうわいなア。

むら　ヲヽ、麁朶でも折つて下さんせ。

うめ　アイ〳〵。

むら　ドレ、風呂の下を焚きませうか。（ト臼挽唄にて兩人上手の後ろへはひる。）

勘右　秋の日の釣瓶落し、まだ入相になるまいと思ふ内に暗くなつた、今宵は浪之助どのゝ百ケ日の逮

夜故、お灯りを上げて佛前へ、香でも手向けてやりませう。（ト是より床の浄るりになる）

〽軒破れし賤ケ伏屋のしめり勝ち、露に曇りし鐘の音に、秋の哀れを知る人の手向けに香をくゆらせて、袖に涙の古行燈、灯影も暗き身の上に、お傳は親の家ながら、人目を厭ひしよんぼりと道の小蔭に佇みて、

ト此内時の鐘、勘右衛門火打箱で火を打ち、佛檀へ灯りを上げ、附木で行燈へ灯し佛檀へ香をたき、拜みゐる、花道より前幕のお傳出來り、花道にて、

お傳　正月を待つ子供の時分は、月日の立つのが遲かつたが、昨日今日の早い事、浪之助さんと内を出たのはをとゝしの暮であつたが、今年で丁度三年越し、久しぶりで歸つて見ると、あそこや爰の様子が替り知らぬ所へ來たやうな。是れに付けてもとつさんが嘸年とつてお姿が、お替りなされた事であらう。

〽門の戸もるゝ灯のかげを、よすがにお傳は立寄つて、

ト舞臺へ來て、門口より、内を覗き思入あつて、

久しく便りをしないゆゑ、産れた家でも閾が高く、たゞ此儘でははひり憎い、ちよつと妹に逢ひたいものだ。

〽言ふ聲聞いてふり返り。（トお傳門口にて思入、勘右衛門振返り、）

勘右　そこへ來たのは、誰ぢや。

お傳　ハイ、私でござります。

勘右　たゞ私では分らぬ、用なら内へはひらつしやれ。

お傳　ハイ、どうもはひり憎うござります。

勘右　ヤ、さういふ聲はお傳ぢやないか。

お傳　とゝさん、私でござりまする。

勘右　思ひがけない、どうして來た。

お傳　疾からお眼にかゝりたく、幾瀬の思ひでやう〱と、お尋ね申して參りました。

勘右　久しく便りないゆゑに、死にでもしたかと思つたが、よく達者で居てくれた。

〽言ひつゝ邊り見廻して、かたへの行燈吹き消せば、

ト勘右衛門思入あつて、行燈を吹消す、お傳合點の行かぬ思入にて、

お傳　ヤ、コリヤ何故に灯をば。

勘右　夫の爲とは言ひ乍ら、親を捨て家出した不孝者のそなたゆゑ、養女にやつた九右衛門殿や大助殿

に義理あれば、表向きでは逢ひ憎い、直に此儘歸さにやならぬけれど、親子の愛で逢ひたいから人目を厭うて行燈の、灯りを消せば遠慮はない、サア〳〵内へ早うはひれ〳〵。

〽小聲でいへばかほどまで我身を思つて下さるかと、流石お傳も打ちしをれ、

ト勘右衛門門口へ來て、外を窺ひ内へはひれといふ、お傳宜しく思入あつて、

お傳 御免なされて下さりませ。

〽かすかに殘る佛檀の灯影を便り、座に附きて、

ト お傳二重へ上り、下手へ住ふ、合方になり、

家を出まして三年故嘸父さんの俤がお變りなさつた事であらうと、お案じ申して參りましたが以前にさのみお變りなく、誠に嬉しうござりまする。

勘右 イヤ〳〵餘程變つて居るであらう、我身ではわからぬ、さのみ變つた心はないが、そなたこそ在所を出てから三年越し、とはいふものゝ丸二年には未だならぬが、旅から旅を歩いたので、餘程苦勞をしたと見え、大分影にやつれが見える、さうして今迄どこに居たのだ。

お傳 お話し申せば長い事、をとゝしの暮在所を出て間もなく雪が降りつゞき、肌へを通す寒風に浪之助さんが風を引き、餘儀なく逗留しましたが、旅籠の代がかさむ故知邊の人の口入れで、藤川村

の幸正寺に泊つて居る内暮も立ち、年は越してもまだ冬に積りし雪も去年の儘、寒さも強く歩行もならず、せめて二月になる迄と足を止めてをりましたが、功者な醫者が其邊にござります故療治を頼み、ツイうか／＼と月日も立ち、三月の末草津へ行き、暫く湯治をしましたが、さのみ驗もござりませねば、どうしたものかと思ふ所へ、同じ宿屋で朝夕に顔を見合す横濱の夫婦づれの其人から、あの病氣の療治をする上手な醫者が横濱にあるといふ事聞いた故、どうかお世話を下されとその人達を頼みまして、草津を立つて横濱に、逗留致してをりました。

勘右　おゝ、さうか／＼、先達て來た郵便に、横濱にゐる事は聞いたが、所書が記してないので、居所が知れなんだが、今迄どこに居やつたぞ。

お傳　草津で逢つた其人の家が野毛山下故に、暫くそこに居りまして、療治も手厚く致しましたが、日に増し病ひが重りまして惣身くづれ膿汁の出るのがいかにも氣の毒ゆゑ、そこを立退きさる人の世話で又もや吉田町の、肴屋といふ人足宿へ逗留いたして居りましたが、其日に困り東京の知邊に無心を申さうと、相談づくでまゐる折、幸ひ懇意な船頭が東京へ行くついでがあつて、便船頼んで參りし途中、品川沖で疾風に逢ひ、既に命を捨てる所人に救はれ助かりましたが、再び歸る事ならず、父さんの目にやつれしと見えます程に三月越し、いかい苦勞をいたしました。

〽物思ひげにさしうつむく、お傳がそぶり心得ず、

ト お傳うつむきちつと思入、勘右衞門思入あつて、

勘右 それでは其時出たきりで、横濱へは歸らぬか。

お傳 さ、歸りたうても横濱へ歸られませぬ譯あつて、徒に月日を送りましたが、重る病ひの浪之助殿寢た間も胸に忘れぬ故、夢に逢ふのを樂しみに、辛い浮世を送りました。

勘右 それではそちは、何にも知らぬか。

お傳 なに、知らぬかとおつしやりまするは。

勘右 その寢た間も忘れぬ浪之助は、もう此世には居らぬわえ。

お傳 エヽ。(トハツとびつくりして、)そりやほんとの事でござりまするか。

勘右 嘘ぢやない、證據を見せう。

〽と立上り佛檀の灯りかき立てかたへより、緣も薄き白紙へ書きし戒名取出し、

ト 勘右衞門佛檀より灯りをかき立て、紙の戒名を持ち來り、

コレ、是れが夫浪之助どのぢや。(ト見せる、お傳びつくりして、すかし見て、)

お傳 そんなら私が東京へ、金の都合に出たあとで、果敢ない最期をなされしか、エヽ情ない事ぢやな

ア。

〽はッとばかりに泣き伏せば、死せし悲しみ聞き乍ら、親の手前に打ちおどろき、戒名取りて佛檀の暗き灯影にすかし見て、

「草露秋還信士、明治九年四月廿五日、俗名玉橋浪之助」（ト思入あつて）わたしや夢にも知らなんだが、どうして死んだ事を、おまへは知つてござんすぞ。

勘右　サア知つてゐるのは、先達つて、浪之助から來た郵便、長の病氣に二人とも便るものなく横濱で、難儀をして居るとの事故、相談して見たけれど九右衛門殿は親を捨て家出をした憎いやつ、あいら二人の身の上は死なうと生きようと構はぬと、相談相手にならぬゆゑ、大助殿と話し合ひ、少しの金を用意して、わざ／＼二人が横濱へ行つた其日に果敢ない最期、一足違ひで死目に逢はねばせめて東京へ行つたそなたに逢はうと思ひ、けふかあすかと初七日迄歸るを待つて居たけれど、際限のない事故に、むだな旅籠を拂ふより、一ト先づ國へ歸らうと此の戒名を土産にして、故郷へ歸つた其後もけふ百ヶ日の逮夜迄便りのないは死にでもしたかと、そなたの身の上案じれど、大助殿は癩病の悴を捨て出て行つたを、影で恨んでをるとやら、をとゝし在所を出た時は人の厭がる癩病を見捨てぬお傳は感心なと、世間の人に褒められて、おれも嬉しく思つたが、けふ此頃は

病人の亭主を捨て逃げたのは男があつての事であらう、云はうやうない薄情ものと、後ろ指をさされるので、肩身が狹うなつたわいの。

〽始終を語る勘右衛門、老の常とてよしあしとも涙先立ちむせ入れど、お傳は背をなでさすり、

ト勘右衛門よろしく思入にていふ、おでん勘右衛門の脊中をさすり、

お傳　成ほどあれきり歸らぬ故、病みほうけたる亭主をば、捨て行つたと人の口に云ひまするのは是非なけれど、現在實の親に迄、もしやさうかと疑はれるが、わたしや悔しうござんすわいなア。

トおでん泣くを見て、

勘右　それ程泣いて悔しがる、そちが何でけふ迄も便りをせぬのぢや、サア仔細があるなら、云うて聞かしや。

〽問ひかけられて言譯も、とやせんかくと胸の内、思案定めて涙をぬぐひ、

ト此内おでん何と言はうといふ思入あつて、わざと泣く。

お傳　深い仔細のある事は、今もお話し申す通り、金の都合に横濱から東京へ出る其時に、世話になつた肴屋の子分の野毛の辨藏とて荷物を積んで往きかひする、其船頭に勸められ上乘りをして出

た所、御臺場手前で日が暮れて品川沖へ掛つた時、かねて企みし辨藏がわたしを捕へて無理くどき、得心せねばくゝり上げ思ひを晴らすといふ故に、死んでも此身は汚さじと、透を窺ひ振拂ひ海へ飛び込み半町ばかり流れし所へ折よくも、木更津船に引上げられ危ふい命を助かつたれど、上總へ連れて行かれし後其船頭に又くどかれ、言ふ事聞かねば腹を立ち、一と間の内へ押籠められ出る事ならぬうき艱難、三度の食もろく／＼に食べねばついに身もやつれ、此まゝ居たら遠からず死ぬであらうと思ふゆゑ、貧に迫つて夫の爲娼妓になりし心にて、憎しと思ふ船頭に此身を任してやう／＼と其場を逃げるも氣のつかぬ、常陸の方から上州へ廻つて參りは參りましたが、せめて門からよそ乍らお目に掛つて參りませうと、不孝の罪も顧ずお尋ね申してござりまする。三月此方横濱へ便りをせぬは此譯ゆゑ、人の厭がる癩病も夫婦となれば末始終、放れぬ心で出ましたからは、何しに中途で見捨てませう、疑ひ晴らして下さりませ。

〽涙乍らに此の場をば言ひくろめんと現在の、親を欺く僞りも、斯うとは知らず門口に、始終を立聞く大助が、扨はさうかとうなづけば、勘右衛門も實にもと思ひ、

ト此内お傳よろしく思入あつて、誠しやかにいふ、此以前下手へ大助羽織をはおり、着流し、草履にて出來り、門口へ來て内の樣子を窺ひ、たゝずみゐる、勘右衛門誠と思ひ、

勘右　ム、それでは其折品川で、そちが命を助けたは木更津の悪者にて、一間の内へ押籠められ、得心せねば末始終責殺されると思つたゆゑ其身を任して抜け出したとは、よくマアそこへ心が付いて無事に歸つてくれたなう。

お傳　女子の操を立てまして、いふ事聞かずば今頃は殺されましたでござりませう。操を破りしばつかりに、今は世に亡き夫の追善供養が出來まする、思へば三年此方の憂き艱難を考へますと、實に夢かと存じまする。

〽又さめ〴〵とそら涙、噓も誠も大助が、貰ひ涙を押し拭ひ、

ト門口の大助宜しく思入あつて、

大助　イヤ勘右衛門どの、許さつしやれ。

〽云ふ聲聞いて打ちおどろき、（ト大助門口を明ける。）

勘右　ヤ、誰かと思へば、大助どの。

お傳　とつさん、おなつかしうござりまする。

大助　オヽ、お傳か、久々にて逢ひました、見れば佛檀の燈明ばかり、何で灯りを付けさつしやらぬ。

勘右　サア灯りを付けぬは浪之助を捨て行つたお傳が來たゆゑ、九右衛門殿やこなたを憚り、そこで灯

を消したのぢや。

大助　何の憚るに及ぶものか、あすは悴が百ケ日に墓掃除をして歸りがけ、ちよつとこちへ寄つて行かうと來かゝる門に女の聲、客でもあるかと佇んで思はずお傳が身の上ばなし、一部始終を聞きました。

勘右　そんならこなたも、聞かしやつたか。

大助　木更津船に連れて行かれ、とりことなりしお傳が難儀、是で日頃の疑ひがさつぱりわしも晴れました。

お傳　誠にお目に掛りますも、お恥かしうござります、嘸かし是迄父さんには、そでない者と私を思召したでござりませう。

大助　二人が行方を横濱へ勘右衛門どのと二人で、尋ねて行つた其日計らず悴が死に、名殘りも盡きせぬ親子の緣と東福寺といふ寺へ葬り、七日の日まで東京へ行つたそなたを待つてゐたが、歸つて來ぬは業病ゆゑ愛想が盡きて捨てた事と、仕方なく〳〵歸つて來たが、其後何の便りもないゆゑ實はけふ迄恨んで居た。

お傳　既に命を取られます程憂き目に逢ひしも御存じなければ、御恨みも御尤もで今更云つて返らねど

共白髪迄添はうといふ夫が今際の死目に逢はず、打叩かれしその果が憎しと思ふ船頭に、身をけがされし不仕合せ、いつそあの折品川で、死んだならこんな憂目は見ず、又お恨みも受けますまいに、何たる因果でござりませう。

大助　イヤ、どんな憂目に逢ふとても運よく其場を脱れたは此上もないそなたの仕合せ、人は命が元手ゆゑ、必らず愚癡を云はぬがよい。

〽兩袖顔に押當て誠しやかに泣伏せば、心を察し大助が、

お傳　お心とけて其樣に、おさとし下さるお志し、有難うござりまする。

勘右　浪之助どのを置去りに、お傳の行方が知れぬ故、嘸や恨んでござらうと面目なく思つて居たが、是でさつぱり事がわかり、夜が明けたやうになつたわい。

お傳　家出をしてからけふ迄の、委しい事をお話し申し、今迄暗き私が身も、是で明るくなりまして、こんな嬉しい事はござんせぬ。

大助　もはや誰にも遠慮はない、灯りを早く附けさつしやい。

〽悦ぶ折から納戸より、灯たづさへ妹お村、おうめも共に立出て、

ト奥より以前のお村、手燭蠟燭を灯し、お梅以前の本を持つて出來り、

むら　姉さん、よくお出で、

兩人　なされましたなア。

お傳　おゝ、おむら達者か、お梅ばうも來てゐたか。

うめ　お寺參りに明日行くので、髮を結つて貰ひに參りましたわいなア。

むら　納戸に風呂を焚いて居たゆゑ、お出での時は少しも知らず話し聲の聞えるので、村の衆でも來た事かと、此子がそつと見に行つて、知らしてくれたで嬉しさに、直ぐに出ようと思つたれど、お邪魔になつては惡いと思ひ、

うめ　のれんの蔭で姉さんと、最前からのお話しを、

むら　お聞き申してをりましたわいなア。

お傳　三年此方内を出て、妹そちにも苦勞を掛けたが、今の話しを聞いたとあつては、別に云はぬが餘儀ないわけ、姉が心の切なさを、妹推量してくりやれ。

むら　浪之助さんが亡い後は、おまへも是れから一人身ゆゑ、どこへも行かずに居て下さんせ、達者な樣でもとゝさんも、お年の上で一年增し、自然とお弱りなされし故、力になつて下さんせ。

〽力になつてと妹が、いふ尾に附いてお梅も共に、

むら　都と違ひ田舎では學問さへも舊習にて、私が學ぶ學校の教師が元は儒者ゆゑに、四書五經を教へます。此頃中論語を習ひますが、忘れた所を聞きたくも、父さん初め伯父さんも假名がなくては讀めぬといふゆゑ心細うてなりませぬ、是から姉さん内に居て、忘れた所はかう〳〵と、どうぞ教へて下さんせいなア。

お傳　私しとても本當に、學問したといふではなし、庄屋殿の娘御が師匠を取つて學ぶのを相手に行つて傍で聞き、自然とそらで覺えて居たが、久しく捨てゝしまうたゆゑ、今ではさつぱり忘れてしまうた、よくもそなた年端も行かぬに、四書五經を習ふとは、テモ感心なことぢやなア。

うめ　今日開化の世の中に、學びの道を知らぬのは萬物の靈たる人に、産れた甲斐がないと思ひまする。

お傳　いつの間にそのやうな、高慢な事をいふやうに、おうめそなたはなりやつたぞ。

大助　よい年をした親達が、まことに面目ないわけだ、我々などが育つ時分は百姓などは讀書はいらぬものゝやうに言つて、子供の内に名頭から國盡し迄習ふのが關の山にて大概は、いろはきりにて跡は習はず田畑の役に使ふゆゑ、十人よれば九人迄讀書き出來ぬ者ばかり。

勘右　そりやこなたの言ふ通り、このお村が育つ時分は、まだ〳〵世界が開けぬゆゑ都路きりで下けた故ちよつと一筆まゐらせ候の自分用が足らぬ所から、又此頃は目が覺めて仕事の片手間に夜な〳〵

手習ひを初めました。
むら　よい年をして子供らに笑はれるのが悔しいゆゑ、人目にかゝらぬ奥の間で、夜な〳〵手習ひするゆゑ、やう〳〵此頃新聞を、讀めるやうになりましたわいな。
大助　イヤモウ力づくにも叶はぬ事は、御布告が廻つて來ても、此のお村が内に居ねば、何の事やらさつぱりおれに讀めぬゆゑ、こんな困ることはない。
勘右　それでもそなたは、よく新聞の話しをさつしやるが、アノ拾ひ讀みでも讀めるかな。
大助　どうしておれに讀めるものか、戸長殿から借りて來て毎晩お梅によんで貰ひ、親孝行や主人に忠義人の教へになる事を、おれもよつぽど知つて來た。
勘右　わしもお村に讀んで貰ふが、此間の何とかいふ、新聞によい事がある。
むら　あれは東京に名の高い、曙新聞でござりまする。
勘右　あの曙新聞にある、親孝行はよい話しだ。
大助　そりや、どんな話しぢやな。
うめ　その新聞を學校へ、お返し申さうと存じまして、爰に持つて居りまする。
お傳　そこに持つてゐやるなら、

大助　ちやつと讀んで聞かしてくれ。

うめ　アイ〳〵。

〽前かき合せ、座をすゝめ、（ト誂への合方になり、おうめ思入あつて、）

「陸前の國青森縣下米村の農夫豐作の娘おむら十七年は、幼年の折母に別れ父の手鹽で成人なし、手習學問何藝も一を聞て萬を知る天性利發の生れにて、殊更親に孝心深く、父の豐作が病氣に晝は鋤鍬とり夜るは父の足腰をさすり、片時傍を放れずに話などして慰むる其孝行が縣廳へ聞えて上より御褒美賜はり、實に女子の鏡となるに、その近邊はおむらを見習ひ、不孝な者があらざるなり。」

〽詞淀まずすら〳〵と、お梅はかしこく讀み下し、

むら　是れに引かへ親を捨て夫を捨て家出なし、惡い所業をする者も、世間にいくらもござんすが、是は人ではござりませぬなア。

〽何心なく新聞に、準へておむらが戒めの詞は天より云はするかと、お傳は胸にひし〳〵と針を打たるゝ思ひにて、（ト此文句の内お傳術なき思入にて、）

お傳　成程こなたのいふ通り、新聞紙は早學問、人を知識に導いて此上もなけれど、そなたの樣に孝行

や忠義な者の美事のみを、褒める者は稀にして、盗賊姦夫の事柄を悦んで見るその中に、年端も行かぬに感心な、よい年をした此姉が、實に恥かしく思ふわいの。」

へお傳も元は百姓の常の娘にけなげなる、お梅が詞に身を恥ぢて誠の涙をこぼしける。

トお傳ぢつと思入あつて、脇を向いて涙を拭ふ、勘右衛門思ひ出せしこなしにて、

勘右　何は兎もあれ先達て家出した時九右衛門から、逃亡屆がしてあれば、歸つた趣を屆けにやならぬ。

大助　少しも早く戸長へ話し、そのお屆けをするがよい。

お傳　イエ、わたしが歸つたお屆けは、暫く待つて下さりませ。

勘右　なに、お屆けを待てといふのは。

お傳　一先づ是れより横濱へ歸りまして東福寺の、墓へ參つて亡き夫に身の言譯が仕たうござんす、又二つには逗留中厚い世話になりました清五郎殿へ禮も言ひたし、何やかや取片附け、たとひ錦は飾らずとも、明るい體になりまして、再び故鄕へ歸りますから、歸村いたせしお屆けは、其時になされて下さりませ。

勘右　三年ぶりで逢つたといひ、殊に明日は浪之助の丁度百ヶ日に當れば、今夜は留めて置きたいが、

大助　逃亡届がしてあれば、内證で留めては戸長へ濟ます。
大助　斯ういふ内も心遣ひ、他人の目つまにかゝらぬ内、
むら　今宵は此の儘お歸りなされても、
お傳　やがて歸村のお屆けなし、目出度く内へ歸りませう。
大助　まづそれまでは暫しでも、
お傳　お別れ申すかと存じますれば、
勘右　又と逢はれぬ樣に思はれ、
うめ　お名殘り惜しう、
むら　ございまする。
お傳　私も再び逢はれぬやうで。

〽跡云ひさして涙ぐむ、眞は泣き寄り親と子が、しめる袂の露時雨。

ト皆々別れを惜しむ思入。時の鐘。

大助　まだ八時か、大分夜が長うなつた。さうしてお傳は今ツから、何處まで行つて泊る積りぢや。
お傳　夜の更けぬ内沼田へ參り、今夜泊つて熊谷から、馬車で參りますれば東京へ、その日の内に參ら

れまする。
勘右　さうして、路用の手當はよいか。
お傳　横須賀までの路用の金は、用意いたして居りまする。（ト勘右衛門思入あつて、）
勘右　木更津船の惡者に、ゝゝゝとりことなつて居たものが。
お傳　エヽ。
勘右　どうして用意して居るな。（トお傳はツと思入。）
〽問はれてはツとさし支へしが。
お傳　サ、そりやあのかうでござりまする、絹屋の主人に途中で逢ひ、難儀な話を致しましたら、思はぬ惠みを受けまして、路用に困りは致しませぬ。
勘右　さういふ事なら、少しも早く。
大助　久しぶりで歸つたそなた、留めて置き度いものなれど、
勘右　お屆けせねば、世間の口、
大助　ア、殘り惜しい事だな。
お傳　左樣ならば御機嫌よろしう。お年寄られし父さんの、お世話を妹頼んだぞよ。

うめ　アイ。

〽お傳は再び歸らじと、心の覺悟に見返りて、名殘りを惜しみ立上れば。

ト　お傳よろしく思入あつて、下手へ行くを。

姉さん、ちよつと待つて下さい。

お傳　何ぞ、用かえ。

うめ　お前も習うた論語の内に、父母に仕ふるに幾く諫む、志しの從はざるを見て、又敬して違はず、勞して怨みず。此の後を忘れましたが、何とか云ふ語でござりましたな。

お傳　オヽ、父母在す時は遠く遊ばず。

うめ　父母在す時は遠く遊ばず。（ト　お傳の顏をぢつと見る。お傳思入あつて、）

お傳　年のいかぬに、感心な、

勘右　遠く遊ばぬいましめの、

むら　深い樣子は私らに、

大助　ちんぷんかんで分らぬが、

お傳　是が開化の子供ぢやなア。

〽遠く行くなと妹が異見は旅の花向けに、末は冥土の旅立の覺悟を死出の山ならで、罪の重荷に行き惱み、暫し小蔭に身を忍ぶ。

トお傳門口へ出ろ、皆々門口まで送ろ、お傳心を極めし思入、おむら名殘を惜しみ門口へ行かうとすろ、勘右衞門留めて門口をしめろ。是にてお傳心の引かれる思入にて、ツカ〳〵と跡へかへり、下手へはひろ。時の鐘。

大助　オヽ、うろ〳〵わしも長居した、ドレ、家へ歸りませうか。
勘右　もそつと話して行つてはどうだ。
大助　是から夜食にせねばならぬ。
むら　此の子を一ト風呂入れようと、今まで留めて置いたのに、
うめ　姉さん故に遲うなつた。
大助　イヤ内でも今日は立つたれば、歸つてゆつくりはひるがよい。
むら　そんならおうめばう。
うめ　あした一緒に行きませう。
大助　ドレ、内へ歸らうか。

〽娘を連れて大助は、心忙しく立歸る。
ト大助おうめの手を引き、時の鐘にて花道へはひる。跡、時の鐘、誂への合方、おむら邊りを片附け
佛壇の前にある紙包みを取上げて、

むら　モシ父さん、こんな包みがござりました。（ト勘右衛門取つて開き見て、）

勘右　ヤヽ、コリヤ五圓札で三枚ある。

むら　そんなら是は姉さんが、此處へ忘れて行かしやんしたか。

勘右　何やら書いてあるやうぢや。（ト紙包みを開き見る、おむら手燭へ灯をつけてさし出す。）「些少には候へども、御土産の印までに、御酒を呈上致し候。」

むら　スリヤ御土産でござんしたか。（ト勘右衛門思入、此の時下手よりお傳出て、門口より窺ふ。）

勘右　長らく難儀をしたといふのに、かゝる金をば持つて居るのは。

むら　どうやら合點が行きませぬ。

勘右　もしや道に缺けたる事でも。

むら　エヽ。

勘右　アヽ子は三界の、

ト勘右衞門盜み物では無いかと札を落す。お傳は苦勞を掛けて濟まぬといふ思入にて手を合せるを、木の頭。

首かせぢやなア。

ト歎息の思入、おむらもさうあらうと云ふこなし、お傳は勘右衞門を伏拜む。此の模様よろしく、合方、寺鐘にて、

ひやうし　幕

六幕目

天王橋麥湯店の場
藏前宿屋丸竹の場
築地河岸捕縛の場

〔役名――山口雪之助實は佐藤七藏、斑の虎藏、野毛の辨藏、大瀧三次郎、宿引ちやらの勇藏、探索方、研屋秀太郎、車夫、釣師、旅人、蜆賣。雪之助女房お松實は玉橋お傳、丸竹の女房お竹、麥湯娘お玉、同お花、下女おかう、同およれ等。〕

（天王橋麥湯店の場）――本舞臺上手天王橋、下手麥湯一間の出し屋臺、誂への麥湯の行燈を出し、一

式飾り附け、巾廣の床几二脚並べ、左右練塀、藪前の遠見、天王橋の袂にて、爰に麥湯娘お玉、お花の兩人、前垂、絞り浴衣、駒下駄にて立身、勇藏着流し、駒下駄にて床几へ腰を掛け居る、傍らに散髮、紺の筒袖、足袋洗足の馬丁一人立ち掛り居る見得。スチヤラカの合方、木魚入りの拍子木にて幕明く。

勇藏　コレ千里軒の小僧、何をまご〱して居るのだ。

馬丁　今廣小路から乘つて來た、馬車を何處へか無くしてしまつた。

お玉　ほんにお前は毎日こゝを通る、千里馬車の後ろに取つ附いて、幾度通るか知れないね。

お花　さうして馬車を無くしたとは、あんな大きなものをどうしたのだえ。

馬丁　お客を勸めに下へおり、稻荷壽司を喰つて居るうち、馬車は新橋へ行つてしまつた。

勇藏　早く追つ駈けて行きやアいゝに。

馬丁　追つ駈けて行かうと思つたけれど、どうせこつちへ歸るのだから、此の邊に待つて居る積りだ。

お玉　そんな事をして油を賣ると、内へ歸つて叱られるだらうよ。

馬丁　どうで歸りやア叱られるから、早く行つても遲くても同じことだ。

勇吉　早くと云へばお前のとこから、宇都宮へ早く出るさうだの。

馬丁　アイ毎朝きつと五時に出ますが、今朝なぞは日光へ參詣人が大層行つた。
お玉　ほんに日光を見ない内は、結構と云はれないと云ふから、どうかわたしもお客を勸めて、日光へ行つて見たいものだ。
お花　姉さんお前がお出でなら、一緒に連れて行つておくんなさいな。
お玉　西新井へさへ行けないのに、どうして日光へ行かれるものかね。
お花　千里軒の馬車で行つたら、行けない事もありますまい。
馬丁　お前方が行く時には、おらが馭者をして行かう。
お玉　お前の馭者ぢや險難だ。
勇藏　其の馭者よりは大丈夫内へ歸ると叱られるから、道を急いで行くがいゝ。
馬丁　もうちつと油を賣つて、新橋から馬車へ飛乘つて歸ります。(ト上手の橋へはひる。)
勇藏　なか〳〵口の達者な小僧だ。
お玉　あの時分から馬車屋に居て、馬丁仲間で揉まれたら、
お花　口ぎよう者になりませうね。
ト又右の合方なり上手の橋より、○□の旅人二人、紺の脚絆草鞋、尻端折り、着物を脊負ひ、菅笠を

持ち出來る、

勇藏　勇藏さん好いお客が來ましたよ。

勇藏　成程、是れは出來さうだ。

旅〇　何とまだ日が高いから、麥湯を一つ遣つて行かうか。

旅□　ヲヽそれがよい、姉さんの顏を見乍ら、爰へ掛けるがようござる。

旅〇　お約束の麥湯がようござる。

お玉　ハイ／＼。（トお玉兩人に麥湯を出す、勇藏兩人の側へ行き）

勇藏　モシあなた方、お泊りぢやァござりませぬか。

旅〇　私は馴染の定宿があるので、

旅□　千住へ行つて泊るのだ。

勇藏　是から千住へお出でなさいますと、小塚原で日が暮れます。此の頃あそこに病犬があつて、やたらに喰ひ附きますので、暮れると人通りがござりませぬ。

旅〇　私やァ犬が大嫌ひだが、

旅□　そりやァほんのことでござるか。

勇藏　なに。お前様方に嘘を申しませう。
旅○　それがほんなら千住は止して、廣小路へ行つて泊るべい。
勇藏　イヱ廣小路にも二三疋、病犬が居ります。ねえお玉さん。
お玉　たしか、居るさうでございますよ。
勇藏　喰ひ附かれてはいけませぬから、私共へお泊りなさいまし。
旅□　さうして貴樣の所は何處だ。
勇藏　ハイ此の先の片町で、何方樣も御存じの、丸竹でございます。
旅○　おゝ、さう云へば行きに見た二階の壁に丸竹の、づな〳〵印しのある家か。
勇藏　お左樣さまにござります、近頃開店を致しましたから、引札代りにお客樣を、極く大事に致しまする。
旅□　觀音樣へゆつくりとお參り申し度いと思ふから、それぢやァ貴樣の所へ泊らう。
勇藏　それは有難うござります。（ト旅人○天保錢を三枚出して、）
旅○　茶代は是れに置きますぜ。
お玉　是れは有難う存じます。

勇藏　こゝらには病犬が居ませぬから、御ゆつくりお休みなされませ。
旅□　イヤ病犬は居まいが、泊ると極つたら、
旅○　少しも早く宿に附いて、湯へはひるが樂しみぢや。
お花　まア、よろしいではござりませぬか。
旅○　ちつとも早く、案內を賴みます。
勇藏　左樣なら御一緒に參りませう。

ト矢張り右の合方にて、勇藏附いて三人共下手へはひる。お玉お花後を見て、

お花　今の衆は近在だねえ。
お玉　何でも栃木か粕壁あたり、度々こつちへ來る人だらう。
お花　生利な人達より、田舍者の方がよッぽどいゝねえ。

ト茶碗を片附けて居る。花道より田川、着流し散切、駒下駄、後より斑の虎藏、頰冠り紺の筒袖、二尺半股引、人力車夫の拵へにて、一人乘りを引き出來り、花道にて、

虎藏　モシ親方、御都合迄參りませう。
田川　ツイ近所だから、車はいらねえ。

虎藏　そんな事を云はねえで、乘つておくんなせえな。（ト云ひ乍ら手拭を取り、顏を見合せて、）

田川　ヤ、さういふは、虎公か。

虎藏　お前に逢ふのも面目ねえが、すつかり種をすつてしまつて、人力車まで成りさがつたのだ。

田川　イヤ、大概な事をするより、其の方がよつぽどいゝ。

虎藏　此の間からお前に逢ひ度く、はう〲搜して歩いたところだ。

田川　何ぞおれに、用でもあるのか。

虎藏　急に話してえ事があるが、まさか立つても話しも出來ねえ。

田川　それぢやア向うの麥湯へ來ねえ。

ト右の唄にて、兩人舞臺へ來て、床几へ腰を掛ける。

お玉　是れは入らつしやいまし、今日は大層お珍らしうございます。

虎藏　コリヤ、二人共別嬪だなう。

田川　藏前きつて評判の麥湯だ。

お玉　イエモウ、私の樣な者でも、皆さんが御贔屓になすつて下さいますので、誠に店が賑かでござります。

お花　モシあなた、お湯は何を上げませう。

田川　甘いのはいかねえから、櫻湯を一杯くんねえ。

お花　ハイ／＼、姉さん櫻を上げて下さいましよ。

お玉　アイ／＼。

トお玉湯呑へ櫻湯を拵へ、盆に乘せて出し、捨ゼリフよろしく、兩人湯を呑み乍ら、

虎藏　久しくお前に逢はなんだが、何處へ行つて居なさつたのだ。

田川　上州の方へ行つて居たが、何處へ行つても東京ぐらゐ遊びいゝ所はないから、此の間こつちへ歸つて來て、また何處といふ居所も極らず、方々遊んで歩いて居るのだ。

虎藏　さうしてお傳さんは、一緒かえ。

田川　腐れ緣で一緒だが、あいつにおれも引つ掛つてから、する事成す事鴫に行つて、すつかりすつてしまつたから、何か一算段しにやァいかねえ。

虎藏　都合の惡い話しを聞いて、云ひ出すのも氣が利かねえが、いつか兎で三十圓お前に貸した金があるが、ありやア忘れはしめえな。

田川　忘れもしねえが兎ぢやア、おれも大損をして借もあいやア貸しもあるが、何を云ふにも生業をお

差留めになつた上、一役に付いて一圓の稅が出るので上つたり、あの時の事はみんな水だ。

虎藏　お前は女を引つ掛けて仕途つて貰ふ金だから、水にしようと火にしようと勝手にしなさるがいゝが、おらの金はさうはいかねえ。

田川　おれだつて女から仕途つて貰ふなぞと、そんな働きはありやァしねえ、腕で稼いだ金だけれど、謂はゞ博奕も同じ事、五圓で買つた柿更紗が、其の場で直ぐに五十圓の高値で賣れる兎の遣取り、たゞ取る樣な金だから、停止になりやァそれ迄と、思ひきつてしまつたのだ。

虎藏　そりやァお前は女から仕途つて貰ひなさるから思ひ切つてもしまふだらうが、此方はあぶねえ橋を渡つて、命掛けの仕事の金だ、貸したものは水にやァされねえ。

ト此の內お玉お花囁き合ひ、惡い奴が來たといふ思入にて、下手へはひろ。

田川　兎市の遣取りで、三十圓お前に借りたが、命掛けの金といふのは、

虎藏　ありやァたゞの金ぢやァねえ。

田川　たゞの金でねえといふのは。

虎藏　女に掛けちやァ素早いが、外の事はぼんやりだな。

田川　なに、ぼんやりとは。

虎藏　お前はおれを何と思ふ。

田川　米の相場や兎の賣買、取拔き鬮取反物賭け、碁石の取遣りは以前で云やア白無垢鐵火、かれこれ師と思つて居た。

虎藏　お前は其の氣で附き合つて居たらうが、おらアお前の仲間の氣だ。

田川　なに、仲間の氣とは。（ト虎藏あたりを見て、お玉お花の兩人居ぬ故）

虎藏　大きな聲ぢやア云えねえが、おらア實は盜人だ。

田川　エヽ。（トびつくりこなし、誂への合方になり、虎藏思入あつて、）

虎藏　何もそんなに飛上りびつくりするにやア及ばねえ、十二の年から盛り場で袂錢を取習ひ、一年增しに功を積み赤い着物も二度迄着て、腰に鎖の論語から八級生徒の竊盜も教師は十年終身の喰詰者の強盜に、泥坊學校卒業なし滿期で出てから地理學の山坂越えて旅稼ぎ、是迄おれが勉強した積る惡事を讀み上げて、試驗を受けたら甲乙の乙と下らぬ今度は三犯、十年苦役をしにやアならねえ、そこですつぱり心を改め、車を拵へて自前稼ぎに曲つた道を脇に見て、唯眞直ぐに梶棒を握つて堅氣になる氣だから、三十圓の兎の貸し、耳を揃へて返してくんねえ。

田川　そりやア借りたに違えねえから、返さねえとは云はねえが、おれも此の頃間が惡く小遣錢にも困

る仕儀、然し今日三文無くツても、一夜の中に出來るが金、都合次第で返すから、もうちつと待つてくんねえ。
虎藏　こつちも忙しい體だから、もうちつとぢやア限りがねえ、二三日内に幾日迄と日を切つたらば待つてやらう。
田川　金の出所は知らねえが是れが堅氣の借りぢやア無し、兎市の借貸は盆の上も同じ事、幾日と日限は切られねえ。
虎藏　それぢやアおれの貸した金は、盆の上の遣取りと、思つて金は返さぬ氣か。
田川　返さねえとはいふぢやアねえが、印紙を貼つて借りねえ金、日限切つちやア返されねえ。
虎藏　さういふお前が料簡なら、取る所で取るから覺悟しねえ。
ト虎藏むつとしてずつと立つて車を持ち出し、行きかゝるを田川留めて、
田川　コレ虎藏、何處へ行くのだ。
虎藏　何處へ行かうとおれが勝手、お前に貸した三十圓はありやア不正な金だから、明日にもおれが御用になり、其の筋へ出てお調べを喰つた時にやア同類で、お前を呼ぶから待つて居ねえ。
田川　そりやアあの金が不正な金故。

虎藏　それを遣やァ云はずと同類、然しおれの云ひ取り樣で、抱いて行かうと行くめえと、胸三寸にある事だ。

田川　兎市の崩れから、一座で遊んだ事もあるに、そんなきざを云はねえで、明日迄待つてくんなせえな。

虎藏　話し合で待てと云ふなら、そりやァあしたがあさつてでも、待たねえとは云はねえが、おれをお前が甘く見て餘り安くしなさるから、此方も遂にやァ小癪に障り、きざな事も云ふ氣になるのだ惡黨がつた事を云つても、未だ年功を積まねえから、甘く見られても仕方がねえが、巾着切からゆすり衒り、竊盜強盜盜人ぢやァ世間に其の名も高島屋の、伯父御に傳授を受けたおれだ、少しは其の氣を受けて居るから、あたまごなしに籠められちやァ、是から十年苦役をするとも默つて聞いちやあ居られねえ。

田川　こつちは常談半分に云つた事が氣に障り、大きにおれが惡かつた。何にしろお前も是から堅氣になるのは何よりだ。どんな辛い算段しても、まるで出來ざァ半分でも明日中に返さうから、機嫌を直して待つてくんねえ。

虎藏　そりやァお前がさう云やァ、元より兄弟同樣に遊び仲間のおれだから、なに待たねえと云ふもの

か。

田川　それぢやア器用に待つてくれるか。

虎藏　明日の晩迄待たうから、都合が出來たら橋本町の、八幡屋といふ泊り宿迄持つて來てくんねえ。

田川　ムヽ都合次第で夜に入つても、持つて行くから待つてくんねえ。

虎藏　それぢやア内に待つて居よう。

田川　イヤ詰らぬ言葉の間違ひから、裾ッ屑も云へば云へると。

虎藏　小癪に障つてきざを云つたが、

田川　當つて碎ける夏氷、

虎藏　解けてしまやア水と水、

田川　明日笑つて、

虎藏　一ぺえ飲まう。（トスチャラカの唄にて、虎藏上手の橋の上へはひる。）

田川　兎市で出逢つた時器用に錢を遣ふので、話しが合つて崩れから、一座で行つた事もあつたが、稼ぎ人とは知らなんだ、何にしろ不正な金を借りて置くのは氣掛りだから、早く返してしまひてえものだ。

ト下手より、お玉お花出來り、

お玉　お連れさんは、お歸りなさいましたか。

田川　アイ、たつた今歸りました。

お玉　此の隣りの西洋床で、お客が寄つて芝居の評判をしてゐたので、つい面白さに此の子も私も、お客樣にお構ひ申さず。

お花　濟まぬ事を致しました。

田川　ちつと込み入つた話があつて、却つて居ねえ方がよかつた。　ト　お花櫻湯を汲み來り、

お花　モ一ツお湯をお上りなされませ。

田川　モシ姉さん、今し方此處を二十五六の年増と、四十ばかりの男は通らなかつたか。

お玉　イエ、心附きませなんだ。

お花　姉さん、さつきのぢやアありませんか。

お玉　ありやアお前四十からだわね。

田川　それぢやア未だ來ねえか知らぬ。

ト湯を呑み居る、三人娘が連れ立ちの唄になり、花道より辨藏、三尺帶やつしなり　竹笠を持ち出來

り花道にて、

辨藏　成程いつ來ても淺草ぐらゐ賑かな所はねえ、尋ねるお傳が知れりやアいゝが、いつか品川で口說き落し日頃の思ひを晴らさうと思つた巧みも反對に、こつちが海に突き落され颶風になか〳〵泳ぎ切れず、餘程水を飮んだので、あれから此方へ體が惡く、久しくぶら〳〵して居たが、此の頃聞けばあのお傳が、新富町に居るといふから、出合ふ事もあらうかと尋ねて來たが何處に居るか雲を摑むやうな尋ねものだ。（ト舞臺へ來て、）さつき喰つた蕎麥のせゐか、咽喉がめつぽう乾いてならねえ、麥湯を一ぺえ飮んで行かう。（ト床几へ腰を掛ける。）

お玉　是はいらつしやい、お湯は何をお上げ申しませう。

辨藏　何でもいゝから、早くくんねえ。

お玉　ハイ〳〵。（トお花盆へ湯を乘せて出す、辨藏是を取り、田川を見、思入あつて、）

辨藏　イヤ、こりやアとんだ所でお目に掛ります。モシ、お久し振りでございますね。

ト田川合點の行かぬこなし。

田川　さういふお前の顏、おらアさつぱり知らねえが、久し振りとは誰だね。

辨藏　夜目で忘れなすつたか、久しい後に品川で、私やアお目に掛りましたね。

田川　エヽ。

辨藏　然も其の日は朝凪で、沖に並んで居た釣師が、皆散り／＼に歸つた後、お前の釣りに掛つたは鯔なら二歳か三歳物、油ののつた中年増大した獲物をしなすつたねえ。

田川　イヤ、釣師などゝは面目ねえが、御臺場越して其の先きは淺いか深いか白鱚が、釣れると聞いて乘り出したも根が素人の附燒刄、うか／＼する内とつぷり暮れ、やつとの事で御臺場へ舟を乘り附け歸つたが、それぢやァあの晩舟緣へ手を掛けたはお前であつたか。

辨藏　其の時お前が助けた女に因緣あつて泳ぎ附いたを、櫓で拂はれて横腹を打ち、既に土左衞門となる所、危ふい命を助かつたが、それから此方へ體が惡く、久しく舟へも出なんだが、此の頃やうやく丈夫になり、あれぎり知れねえ女の居所を、新富町と知れた故、わざ／＼濱から出て來たが、今日淺草へ行つたといふので、觀音樣へ參り乍らぶら／＼尋ねて來ましたが、お傳さんと一緒かえ。

田川　なに、お傳といふのは。（ト素知らぬふりにて云ふ。）

辨藏　そんなにしらを切らねえで、私に逢はしてくんなせえな。

田川　そりやァ折角のお賴みだが、お傳はあの晩助けたきり、おらァ居所も知りやァしねえ。

辨藏　なに、知らねえ事があるものか、今ぢやあ夫婦の樣になり、新富町に居る事を聞いて濱から出て來たのだ、大方今日も合乘りで此方へ出掛けて來なすつたのだらう。

田川　誰に聞いたか知らねえが、そりやア話しの間違ひだ、おらァお傳の居所は知らねえ。

辨藏　それぢやァどうでも、知らねえのか。

田川　エヽしつこい、知らねえと云つたら知らねえ。（トぢれて云ふ、辨藏思入あつて、）

辨藏　さう知らねえと云ひなさりやァ、強ひて聞くのも無駄だから、モウお前には聞きますめえ。

田川　おれに聞くより淺草へ、來たと云ふなら一筋道、藏前通りを搜して見ねえ。

辨藏　御親切は忝けねえ、何れ何處でか突き當て、其の時お禮に行きませう。

田川　お前の勝手に來るならば、留めやあしねえ、勝手に來ねえ。

辨藏　ヲヽ來るなと云つても、行かにやァならねえ。

田川　ムヽ、當てにせずに待つて居よう。

トスチャラカの唄になり、田川思入あつて、下手へはひる、辨藏見送り、

辨藏　品川浦で助けてから、お傳を内へ連れて行き、女房にしたといふ噂。別に遺恨もねえけれど惚れた女を取られたので、小胸の惡いあの野郎、何處でかしめて遣りてえものだ。何にしろ情夫だと

云ふ彼奴がこゝに居たからは、お傳も居るに違えねえ。どうか居所を突當て、今日存分に言ひてえものだ。(トスチヤラカの鳴物になり、辨藏天王橋へはひる、後をお花片附けて、)

お花　おやまア、いやな、お錢も置かずに。

お玉　先のお方に貰つたから、そんな事をお云ひでないよ。

ト鳴物になり、お玉お花後を片附けて居る。上手橋よりお傳、駒下駄蝙蝠傘を持ち出來り、橋の上にて、

お傳　こゝの麥湯で、福井町へ廻つた、七さんの來るのを待合はさう。(ト床几へ腰を掛け、)姉さん、葛湯を一つおくんなさいな。

お玉　是はいらつしやいまし、只今拵へて上げます。

ト捨ゼリフよろしくある、下手より以前の田川出來り、

田川　お傳、今來たか。

お傳　チヤ吉さん、何處へお前おいでなのだえ。

田川　さつき内へ歸つたところ、生糸の事で七藏と淺草へ行つたといふから、ちつと此方もちん／＼で淺草へ出て來たら、飛んだ者に出ッくはした。

お傳　誰に逢つたのだえ。
田川　いつか品川でおれの船へ泳ぎ附いた、辨藏がお前を捜しに此處へ來た。
お傳　チヤ彼奴が私を捜して來たかえ、大方無心を云ふ氣だらう。
田川　辨藏よりおれがお前に、逢ひ度く思つて居たところだ。
お傳　そりやア何ぞいゝ話かえ。
田川　極く惡い話しだ。
お傳　惡い話しなら、聞き度く無いねえ。
田川　聞き度く無くつても、云はにやアならねえ。
お玉　モウ一つお湯を上げませうか。
田川　モウ櫻湯は澤山だ。ちつと込み合ふ話しがあるから、（ト紙入れから二十錢札を出し、）姉さん、是はお茶代だよ。（トお玉に渡す。）
お玉　有難うございます、御ゆるりとお話しなさいまし。（トお玉お花の兩人下手へはひる。）
お傳　さうして、私へ話しとはえ。
田川　大きな聲ぢやア云はれねえが、いつか話して聞かしたが虎に借りた三十圓、兎市の借だからどう

でもいゝと思つて居たに、今も爰で出ッくはし、堅氣になるからあの金を返してくれと催促されたが、まるで出來ずば半分でも返してやらにやァならねえ譯は、今日迄さつぱり知らなんだが、彼奴は旅の稼ぎ人で、借りた金は不正な金だし

お傳　いつか逢つた事があつたが、いやな眼附きな其の上に錢放れが綺麗だから、そんな奴だと思つて居たよ。

田川　脅しで云ふとは知つて居たが、借りた金は不正な金故、御用になれば同類でおれを抱いて連れて行くと、いゝきざな事を云やァがるから、早く返してしまひてえものだ。

お傳　そんな事を云ふ者に、必ずさうした試しは無い、返さずと打捨つてお置きな。

田川　お前はそんな事を云ふが御用になつた曉に、云ふめえとも云はれねえから、半分返してきてえのだ。

お傳　そりやァまるでも半分でも、都合が出來るなら返してお遣りな。

田川　おれに都合が出來るなら、お前に話しはしやァしねえ。

お傳　それぢやァ私に其の金を、都合をしろと云ひなさるのかえ。

田川　知つての通り居酒屋から、麴屋を始めてすつてしまひ、今日此の頃は一圓の金の都合も出來ねえ

體、それ故お前に頼むのだ又頼まれなくつても、十や十五は貸してくれてもいゝぢやァねえか。

お傳　誰も惡いとは云やあしねえよ。

田川　年中ブラ〳〵遊んで居るが、綺麗な體の吉太郎、あんな奴に抱き込まれて赤い仕着は着たくねえ、お前もおれと末始終添ひ遂げる氣があるならば、どうか都合をしてくんねえ。助けたおれが今日の頼み、今では堅氣な虎藏だが惡事に沖を越した樣子、飛んだ灘へ乘り出して乘切る事の出來ねえ大難、お前が梶を取つてくれりやァ波風無しに納まるが、應と云つちやァくれめえか。

お傳　成程いつぞや品川で、危ふい命を救はれた大恩のあるお前の難儀、高の知れた借貸なれど、そんなに苦勞にしなさるならどうか都合しませうから、あすの晩迄待つておくれ。

田川　それぢやァ都合をしてくれるか。

お傳　十のものなら七つ迄多分出來ようと思ふから、必ず苦勞におしで無いよ。

田川　大きななりだが小さな根性、抱き込まれると云はれたので、何だかいやな心持だ。さうして金の算段は。

お傳　昨夜話した七藏が今日三百圓都合して持つて來る約束だから、手に入つたらば今夜にも、お前に金を渡すから、こゝら近所に居ておくれ。

田川　さういふ事なら宵の内、觀音樣でも素見して十二時過ぎに廻つて來よう、さうしてお前は。

お傳　多分私の居所は。

田川　何處に居るのだ。

お傳　モシ。(ト囁く。)

田川　それぢやァ後に二階の戸へ、外から石を打ッつけるから。

お傳　其の時私が合圖をするよ。

田川　さう極つたら宵の内、一廻り素見かして來よう。

お傳　廓へ行つちやアいやですよ。

田川　そんな浮いた事ぢやァねえ。

ト端唄にて田川思入あつて、下手へはひる。お傳見送りて、

お傳　見掛けは人が惡さうだが、彼の虎公に脅かされ、早く金を返し度いとは、今の人には珍らしい、よッ程うぶな吉太郎さん、其のおとなしい心に惚れ、種々樣々な苦勞をするも、二人で樂しく暮し度い故、どうぞ今度七藏さんの金が首尾よく行けばいゝが。

ト　お傳じつと思入、此の内上手の橋より辨藏出來り、お傳を見て思入あつて、

辨藏　お傳さん、よく酷い目に逢はしたね。
お傳　ヤ、お前は辨藏さんか。
辨藏　辨藏さんかもねえもんだ、お前のお蔭ですんでの事、おらァ命を捨てるところだ。
ト辨藏床几へ腰を掛ける、お傳思入あつて、
お傳　そりやァこつちで云ふ事だ、あの時人に助けられずば、私や命を捨てるとこだよ。
辨藏　お前は舟で助けられたが、おらァ波で泳ぎ切れず、やつとの事で御臺場へ流れ着いて助かつたがあれからこつちへ體が惡く、いつかお前に出逢つたら恨を云はうと思つて居たが、今更云つても仕方がねえ、もう何んにも云はねえから、お傳さん、小遣を貸してくんねえな。
お傳　何もお前に小遣を、貸す謂れが無い。
辨藏　あんまりねえ事もあるめえぜ、野毛山下の妾宅を出てから二人居所に困り、草津で逢つた縁に依り頼むと云ふからおれが親分、吉田町の魚屋へ永々逗留して居たは誰が蔭だと思つて居る、みんなおれがお蔭だぞ、逗留中に借込んだ損料錢も日濟の尻も、置いたが不肖と親分が、みんな返してしまつたが、默つておれが見ても居られず、先達てから二朱一分四五兩二人が穴を埋めた、聞けば此の頃新富町に居ると云ふから尋ねて來たのだ、思はずこゝで出逢つたは、そつちの不運こ

つちの仕合せ。サア、四五兩おれに貸してくんねえ。

お傳　それは見ろから情深い野毛山の辨藏さんだから、淸五郎さんの所へ四五兩入れたか知らないが、いつか濱へ行つた時不義理になつた言譯を親分さんにしましたら、達引强い御氣性に都合が出來たら返すがよいと、おつしやる詞に歸つて來て、都合次第にそつくりとお立替をお返し申し、御恩送りをする心、一旦お世話になつたれど既に命を取られる程、憂き目に逢つた辨藏さん、お氣の毒だが其の金は、お前に私や返されないよ。

辨藏　貸すと云ふのは此方の愛嬌、口入をした身の不肖に、四兩何がし入つた金、それを返して貰ひてえ。

お傳　さうしてお前が返したと云ふ、何ぞ證據がありますかえ。

辨藏　そりやァ親分子分だから、別に請取は取らねえが、四五兩入れたに違えねえ。

お傳　何とお前が云ひなすつても、親分さんの請取が、無ければ金は返されない。

辨藏　證據が無けりやァ返されねえとは、お前はおれが言ひ掛りでも、すると思つて居るのだな。

お傳　思ひもしないが、證據が無いから。

辨藏　おれが入れたか入れないか、濱で證據を見せるから、おれと一緒に歩びなせえ。

お傳　お前と一緒は懲り〳〵だ、それに今日は大事な用で、待合はせる人があるから、お氣の毒だが行かれないよ。

辨藏　行くのがいやなら立て替へた、おれに金を爰で返すか。

お傳　イエ〳〵それは上げられない。

辨藏　それぢやア濱へ一緒に行くか。

お傳　サアそれは。

辨藏　金を返すか。

お傳　サア。

辨藏　マア愚圖々々せずと、歩びなせえな。

ト　お傳の手を取り、引立てる。お傳七藏が來ると邪魔だといふ思入にて、氣を替へて、

お傳　さう色氣無く云はないで、話し合ひにしておくれな。

辨藏　なに、話し合ひにしてくれとは。

お傳　實の事はお前にも濱でお世話になつたから、其の貸借りは別として、お禮をせねばならぬ故。

ト　此の内紙入から二歩札を出して、紙に包み出して、

是れは少しばかりだが、一杯上つておくれ、其の内私が都合して親分さんへもお世話になつたお禮に濱へ行きますから、四五日の内待つておくれな。(ト辨藏、札包を受取つて、)

辨藏　お前が砕けてさう言やア、どうで四五日東京に、遊んで居るから待つてやらう。

お傳　そりやア何より嬉しうござんす。

辨藏　然し都合の出來ねえ時は、

お傳　出來ない時は辨藏さん、お前の自由にならうから、それで不承しておくれな。

トなまめきしこなしにて云ふ。

辨藏　お前がさういふ心なら、不承しないでどうするものか。

お傳　何にしろ明日にも、新富町へ尋ねておいでな。

辨藏　ヲヽ、番地も聞いておいたから。

お傳　そんなら、辨藏さん。

辨藏　きつと尋ねて行きますぜ。

トホク〳〵になり、辨藏上手へはひる、爰へお玉お花出來り、

お玉　モシ、今お歸りの肥つたお方は、濱のお方でござりまするか。

お傳　東京通ひの船頭だから、野暮に大きな聲の人さ。
お玉　誰にか彼のお方は似て居ますね。
お花　姉さん、團右衞門に似て居りますよ。
お玉　ほんに、團右衞門にそつくりだね。
　　ト捨ぜりふにて湯を持つて來り、又端唄になり、橋の上より佐藤七藏、薩摩縞、駒下駄、蝙蝠傘を持ち、出來り、
七藏　天王橋際に、お傳が待つて居ると云つたが、橋向うの麥湯か知らん。
お傳　七さん、此處でありますよ。
七藏　ヲヽ、そこに居たか。（ト床几へ腰を掛ける。）
お傳　大層長うござりましたね。
七藏　生憎向うに客があつて、待つて居たので遲くなつたのだ。嘸ぞ待ち遠であつたらう。
お傳　よつぽどお待ち申しましたから、今日お世話をする生糸と帶地で、しつかり儲かりましたらば、待ち賃をお貰ひ申しませう。
七藏　代物を見ねえではしつかりした事は分からないが、生糸が一箇に帶地が三十本、二百圓ぢやァ安

い物故、其の代物の捌口を、今行つて掛合つて來たのだ。

お傳　お前さんにお目に掛つたら、持主の田中甚三郎へ、ちよつとさう申して參りませう。

七藏　一緒に行つては惡いかえ。

お傳　向うの都合もありますから、一人で行つてまゐりませう。

七藏　それぢやア御苦勞乍ら、行つて來てくんねえ。(トお傳立ち掛り、思入あつて、)

お傳　くどくお聞き申すやうだが、お金は持つて來ておくんなすつたね。

七藏　ヲヽ、二百圓爰へ持つて來た。

お傳　其の趣を向うへ話し、早く取引をしてしまはう。

七藏　さうして先の家は、何處だね。

お傳　ハイ、三筋町でござります。

七藏　三筋町ぢやア造作ねえ。爰で返事を待つて居よう。

お玉　何方へかお出でなさいますかえ。

お傳　ちよつとそこ迄行つて參ります。(ト端唄になり、お傳下手へはひる。)

七藏　姉さん、今日は大層賑かだね。

お玉　觀音樣に講中の、大施餓鬼がござりますので、それで賑かでござります。

七藏　東京中で淺草ぐらゐ賑かな所は無いが、たゞ疵なは車の埃りだ。

お玉　實に是には困ります。

お花　姉さん、車屋さんが聞いて居ますよ。

お玉　なに、私が困ると云つたのは、人力車ぢや無い、馬車の事さ。

七藏　成程二疋立の馬車などで、あをり立てられてはたまるまい。（ト時の鐘になり、）

お玉　モウ今の間に暗くなつた、私は灯りを附けるから、爰へ水をまいておくれ。

お花　アイ〳〵。（トお玉灯りの支度をする、お花手桶を持ち下手へはひる。七藏思入あつて、）

七藏　草津以來馴染になつた上州生れのあのお傳、器量も好けりやァ智慧も勝れ、男も及ばぬ萬事の掛引、今日もおれに世話をする生糸と帶地の取引で、こゝ迄一緒に出て來たが、お傳は五分か一割の禮を取る氣の慾心だが此方は疾うから惚れ込んで、何處でか思ひを晴らさうと商法兼ねて心は色氣、飛んだ話家の冒頭だが誰しも迷ふは色と慾、此奴が去れば死ぬばかりだ。

ト思入、下手よりお傳歸り來り、

お傳　ハイ、只今歸りました。

七藏　三筋町迄は四五丁あるに、大層お前は早かつたい

お傳　新堀端へ出ると向うの主人に逢ひましたが、生憎只今脫れられぬ急な用が出來て、聖天町迄行かねばならぬ、折角お出でなすつたに、誠にお氣の毒なれど、先の用事の模樣にて、遲くなるかも知れませぬから、明日の朝のお取引に致し度いと申しまして、自由がましうございますが、此の先に丸竹と云ふ旅籠屋がございますが、そこへお泊り下さいますまいか、左樣致せば明朝早くお取引きを致しますと、斯樣に主人が申しましたが、お泊りになつては下さりますまいか。

ト七藏笑壺に入りし思入にて、

七藏　さういふ向うが都合なら、泊るまいものでもないが、然し二百圓持つて居るから、私一人は不用心、お前が一緒に泊るなら。（トお傳も笑壺に入りし思入にて、）

お傳　そりやアおつしやる迄も無い、私が居りませんではお取引になりませんから、あなたさへよろしくば、私も泊ります。

七藏　こつちはお前と一緒なら、日頃の思ひを。

お傳　ヱ。

七藏　イヱサ、日頃懇意のお傳さん、久し振りで一杯飲まう。

お傳　横濱以來でございます。

七藏　然し、旅籠は向うだらうね。

お傳　旅籠ばかりか御馳走を申してくれと、頼まれました。

七藏　向う持ちと極つたら、鱈腹今夜は飲みやせう。

お傳　女と男の二人連れは、宿屋の規則が嚴しいから、夫婦の積りに致しませう。

七藏　お傳さんと夫婦とは、一晩でも嬉しいねえ。

お傳　私も嬉しうございます。(ト此の時お玉、お花下手より出來り、)

お玉　ちよつと御樣子を承りましたが、お樂しみの筋でございますね。

お花　旦那、玉子湯でも上げませうか。

七藏　なに、色ぢやァなし無駄な事だ。

お玉　あんまりさうでもございますまい。

お傳　それぢやァ情夫と見えますかえ。

お花　誰が見てもさう見えます。

お傳　七さん、嬉しいぢやァありませんか。(トお傳七藏の背中を叩く。)

七藏　何だかおらア逆上せて來た。
お傳　早く宿屋へ行きませうよ。(トお傳紙入より小札を出して、)姉さん、爰へ置きますよ。
お玉　是れは有難うございます。
七藏　あゝ茶代はおれが置かうもの。
お傳　なに、それには及びません。
七藏　それでは是れも向う持ちか。
お傳　大きにおやかましう。(ト端唄になり、お傳、七藏連れ立つて下手へはひる。)
お花　姉さん、今の女は何だらうね。
お玉　眞目面な物の云ひやうだが、たゞ者ではない樣子、旦那取りでもする女か。
お花　但しはちよつといらつしやいか。
お玉　そんな惡口をお云ひでないよ。(ト此の時茶釜吹きこぼれる。)
お花　アレ、茶釜が煮立つたよ。(トお花蓋を切る。)
お玉　チヤ、お神樂は。(トお玉手拭にて天窓を拂ふを道具替りの知せ、恐れるねえ。
トお花汲んで來たる水を撒く、此の模樣スチヤラカポク〳〵の合方にて、よろしく道具廻る。

（丸竹の場）――本舞臺丸竹の表二階、下手に降り二階屋を見せ清元の出語り臺、總て藏前の旅籠屋丸竹表二階の體、爰に以前の旅人二人〇□着流しにて立ち掛り居る、傍に勇藏、下女およね前垂掛けにて、下に居る見得にて道具納まる。

勇藏　あなたがたには、どちらへ入らつしやいます。
旅〇　まだ寢るのに早いから、是れからブラ〳〵吉原を、
旅□　一廻りして來ます。
勇藏　吉原へ入らつしやいますなら、御案内を致しませう。
旅〇　なに、年中かうして東京へ、生業用で來て居るし、
旅□　山の手の人達より、餘つ程此方の道は明るいから、
旅〇　案内は入りませぬ。
よね　夜道は知れ惡うございますから、お連れなすつた方がよろしうございます。
旅〇　他と違つて吉原は、來る度毎に行きますから。
旅□　富士下から行く新道さへ、私はよく知つて居ます。
勇藏　そりやァ御存じでもございませうが、案内を致しますのは私共がかすり故、是非お供を致しませ

う。

旅〇　イヤ／＼それには決して及ばぬ、お前方を連れて行けば、歸りにちよつと一杯とか。

旅□　さも無ければ蕎麥屋へでもはひらねばならぬから、案内は入りませぬ。

よね　左樣なら、よろしうございますか。

旅〇　蕎麥にでもなるならば、

旅□　此方で案内したいものだ。

勇藏　御常談をおつしやいますな。

旅〇　ドレ、ひやかして來ますべいか。（ト旅人兩人階子口へはひる。）

勇藏　今時の百はわる賢こく、案内を賴む者がさつぱり無い、それといふのも並旅籠で茶代は一錢も置かず、夜食をしこたま喰ひ込んで、素見に出る玉だから、連れて行かねえのも尤もだ。

よね　それでも家の賑やかしに、無いよりはましでござんす。

勇藏　然しこんな客ばかりでは、旅籠屋は上つたりだ。（ト此の時階子口にて、）

かう　サアお客樣、此方へ入らつしやいまし。

ト端唄になり、下女おかう手燭を持ちて先へ立ち、後より七藏とお傳附いて出來り。

七藏　奧座敷より表座敷の方が、往來が見えて陽氣でいゝ。
お傳　こゝでゆつくり飲みませうね。
かう　およねどん、手を貸しておくれ。
よね　アイ〳〵。
勇藏　お湯上りでは、お暑うござりませう。
　　ト團扇にてあふぐ、捨ぜりフよろしくある、階子口よりおかう、およね、臺の物を持ち、徳利丼など持ち出來り、燭臺を立てることあつて、
かう　サア旦那、召上りませ。
勇藏　チトお相手を致しませう。
七藏　若い衆、お前は行けるかえ。
勇藏　行けます〳〵、いけることは馬ぐらゐでござります。
七藏　内のがあんまり飲まねえから、相手が無くて困つたところだ。
勇藏　それは何より有難うござります、早速頂戴致しませう。（ト酒を飲むことあつて、）ときに、未だお隣の淨瑠璃は始まらねえか。

よね　もう今に始まりませう。
七藏　淨瑠璃といふのは義太夫かえ。
かう　イエ、濱町の家元でございます。
七藏　そいつァ早く始まればいゝ。
お傳　語り物は何ですえ。
よね　慥か明烏でございます。
七藏　太夫は延壽太夫か。
勇藏　ハイ、三味線は梅吉でございます。
七藏　そりやァ何より聞きものだ。
お傳　早く始まればようございますねえ。
ト合方になり、階子口より丸竹の女房お竹、硯箱と宿帳を持ち出來り。
お竹　今晩はようお泊り下さいました。
七藏　お上さんでございますか、大きにお世話になりまする。
お竹　取込んで居りますので、ろく〳〵お構ひ申しませぬ、あなた方は今日はどちらへお出でございりま

した。

お傳　濱見物に參りましたが、昨夜神奈川へ泊りまして、今日大師河原へお參り申し、ブラ〳〵此方へ參りました。

お竹　今日はお暑うございませんで、御道中はよろしうございましたらう。

トお傳懐中より紙包を出し、

お傳　是はお上さん、お內へお茶代、又是は若い衆や女中衆へ上げて下さんせ。

お竹　是はめい〳〵に有難うございます、みんなお禮を申しや。

勇藏　御酒を頂戴致した上、御祝儀とは。

三人　有難うございます。（トみな〳〵辭儀をなし、お竹宿帳を出し、）

お竹　貴下方でございますから、どうでも宜しうございますが、旅人宿の規則故、ちよつとお名前をおつしやつて下さいまし。

お傳　それぢやアそこへ附けて下さいまし。武州大里郡熊谷新宿平民山口專之助、同人妻松。

お竹　へイ、宜しうございます。（ト宿帳へ記すことあつて、）明日はお早うございますか。

七藏　イヤ、急がぬ旅でございますから、早くなくつてもようございます。

お竹　ハイ、畏りました。
お傳　お見世でお忙がしうございませうから、お構ひなくお出でなされませ。
お竹　左樣なら、御ゆるりとなされませ。
ト合方にてお竹階子口へはひる。
勇藏　先づ邪魔は拂つたから、もう一つ頂戴鏡立て。
七藏　洒落なしに飮んでくんねえ。（ト此の時階子の下で、）
お竹　勇藏どん／＼、お客樣だよ。
勇藏　エヽ、來ずともよいのに。
かう　そんな事を云ふ者があるものかえ。
お傳　お前方も忙がしからう、用があつたら手を叩くから、構はずとお出でよ。
かう　有難うございます。
お竹　勇藏どん／＼。（ト勇藏ぐつと飮んで、）
勇藏　エヽ忙しない、胸につかえる。旦那、眞平御免下さいまし。（ト立ち掛る。）
七藏　ヲイ／＼お前下へ行くなら、燗酒は熱いから、直しを冷してよこして下せえ。

勇藏　へイ〳〵、畏りました、只今直ぐに持つて出まして。お相手を致します。

七藏　直しさへ來れば、お前は爰へ來ずとよい。

勇藏　ホイ、摺り損なつた。（ト合方になり、勇藏皆々階子口へ下りる。）

七藏　をかしくもない事を笑つたり、惡く座敷を持たれるは、

お傳　よッ程受け難うござんすねえ。

ト階子口より、おかう、およれ、硝子の徳利を持つて出來り、

かう　モシお客樣、隣りの淨瑠璃が始まります。

お傳　おや、もう淨瑠璃が始まるかえ。

七藏　そりやアモウ一本飲めるわえ。

よね　丁度只今外のお座敷へ出ます、直しが冷してありましたから、此方へ先きへ持つて參りました。

七藏　そいつア豪氣に氣が利いて居る。

かう　御酒をお上りになりましたら、お休みなさいませうから、お床を取つて參りませう。

七藏　床も取つてくれるがよし、今夜は風が涼しいから、表の方を締めてくんな。

よね　畏りました。（ト知らせに附き、下手二階の伊豫簾上ると、清元連中居並び、淨瑠璃になる。）

〽白雪の積るも戀にたくらべて、解けぬ思ひを浦里がどうした縁で彼の人に逢うた初手から可愛さが、身にしみ〴〵と惚れぬいて、明けて悔しき鬢の髪、撫で上げ〳〵、

ト此の内下女兩人にて床を敷く、お傳酌なして居る。

七藏 思ひがけねえ淨瑠璃で、こいつァ酒が旨く飲める、サア〳〵お前方は早くお出でよ。

兩人 有難うござります。

かう 左樣なら、御ゆるりと、

兩人 なされませ。

〽そなたも共にと云ひ度いが、愛しそなたを手に掛けて、どうなるものぞ存へて、我が亡き後で一遍の、回向を賴むさらばやと、

ト下女兩人階子口へはひる。七藏とお傳は猪口の遣取りの仕組よろしくあり、

お傳 濱町の家元は、好い音〆でありますねえ。

七藏 それに新内模樣だから、ぞつとする程仇ッぽい。

お傳 是では浮氣になりますよ。

七藏 あの淨瑠璃でお傳さん、お前と浮氣がして見度いよ。

お傳　私などゝ浮氣をしても、嬉しくはありますまい。

七藏　無い事があるものか、おらァ何より嬉しいよ。

お傳　又七藏さんの氣休めばかり、そんな事を云はないで、モ一つお上りなさいまし。

七藏　空腹へ飲んだせゐか、大層おらァ醉ッた。

お傳　どうで今夜泊るのだから、そんな事を云はないで、大きなものでお遣んなさいよ。

トコップへ酒を入れて出す。

七藏　どうして是れで飲めるものか。

〽あんまり酷いなさけなや、今宵離れてこなさんの、たつしやで居さんす其の身なら、又逢ふ事のあらうかと、樂む事もあるべきに、

そんなにおれに強ひずとも、お前一つ飲んでくれ。

お傳　飲むのは私や飲みますが、醉ふと猥らになりますから。

七藏　それが此方の望むところだ。

お傳　そりやァ本たうでござんすかえ。

七藏　嘘のなんのと三年後、草津の湯場で出逢つた時、お前にぞつこん惚れ込んだが、おれもお種とい

ふ者があればお前も浪之助といふ亭主があつて、うつかり手出しが出來ねえから親切づくで横濱へ療治をすゝめて二人を引出し、お種に世話をさせたのも其の仕送りは皆おれだ、此の種廻しに雷庵とお熊を頼んで口說かせたが、體よく脫れて返事をせず、とゞの仕舞が愛想盡かしでお種の所を出てしまひ、所詮無駄だと二人が云ふので、すつぱりお前を思ひ切り、濱へそれ切り行かなんだが、貞女を立てた癩病の亭主が死んで獨身と聞いて又もや煩惱の、商法づくとは云ひ乍ら話しが出來たら何がしかお前も益にならうと思ひ、出來ねえ金を二百圓、他から借りて持つて來た是をば緣に應と云つておれの世話に成る氣なら、何處ぞ近所の新道へ小粋な家を拵へて、こつそり圍つておく心、それ故今夜云ふなりに、此の旅籠屋へ泊つたも、深い所存があつての事、幸ひさつき宿帳へ假にも夫婦と記したは、こんな嬉しい事はねえ。

へ豫て二人が取交す、起請誓紙はみんな徒、

お傳 それ程迄に私を深く思つて下さりますのは、實に嬉しうございますから、お前さんのお心に隨ふ氣では居るけれど、圍ひ者ではお種さんが好い手本でございますから、此の身をお任せ申しにくい。

七藏 お種だつて橫濱で月に五圓は表向き、行く度每に二圓三圓極りの外に小遣をお種に遣つて來た七藏、一錢一厘勘定づくで、算盤を取る商人だが、市中と違つて濱商ひ、勘定高くねえ積りだ。

お傳　お前さんの氣前のよいのは、それは承つて居りますが、お種さんのやうにあきが來て、捨てられると悔しいから、女房に持つておくんなさるなら、お心に隨ひませう。

七藏　そりやァお前が承知なら、直ぐに女房に仕ようけれど、然し今の女房を去らねば内へ入れられねえ、其の內近所の新道へ小粋な家を借りようから、其所へ這入つて居てくんねえ。

お傳　いよ〳〵それと極つたら小粋な家でも一軒を、借りるのは無駄だから、其の內下宿をして居ませう。

七藏　イヤ、世帶持ちは違つたものだ。

お傳　亭主と思へばもう直ぐに、世帶の爲めを思ひます。

七藏　さう極つたら內祝言、爰で固めの杯をしよう。（トお傳に猪口を渡し、七藏酌をする。）

お傳　三々九度でありますねえ。

〽どうで死なんす覺悟なら、三途の川も是れ此の樣に、二人手を取り諸共に、

トよろしく惡身のある事。

七藏　なに、構ふものか。未だ階下で起きて居るから、もつと飮んでお待ちなさいよ。

お傳　それだつて若い者ぢやアなし、出逢にでも來たと言はれちやア外聞が惡い。

七藏　是が藝者か娘でも連れて來たなら濟まねえが、假にも夫婦と宿帳へ、名前を附けりやア遠慮はねえ。

〽殺して置いて行かんせと、男の膝に縋り附き、身を顫はして泣き居たる、

ト七藏立上り、醉つた思入にて、ヒヨロ〳〵としてお傳に見せる心にて、懷中より胴卷を落す、お傳取上げて、

お傳　こりや、今の札ぢやアないか。

七藏　そりやア約束の二百圓だが、半圓札で邪魔でいけねえ。

お傳　宿屋は別に締り無く、諸國の人の入込むところ、無用心だから胴へ附けて置きなさい。

七藏　是が旅なら旅籠屋の、亭主へしつかり預けるが。

お傳　なに、それよりやア胴へ附けて、持つて居る方が大丈夫だよ。

七藏　どうで今夜は寢られねえから、自身で番をするとしよう。

ト取つて懷へ入れる、お傳思入あつて、

お傳　私は手水に行き乍ら、下の樣子を見て來るから、お前は先へ蚊帳へ這入り、寢轉んでおいでなさ

いよ。

〽屏風の内の時次郎、直ぐに表へ突き出し、門の戸はたと締めにけり。

トお傳階子口へはひろ、七藏後を見送り、

七藏　どうした因果かあのお傳に草津の湯場で逢つた時から、ぞつこん惚れて手に入れ度く、お種の所へ引取つて、つまらぬ金を遣つたが其の藪酒手が元手となり、此の間からおれを呼び出し、生糸と帶地の賣物があるといふのを幸ひに、相談したも代物より、お傳をおれが手に入れ度く、今日淺草へ連れ立つて、來るさへおれには嬉しいのに、夫婦の積りで此の家へ差しで泊るは結ぶの縁、三年此の方忘られず、思ひに思つた其の念が、今夜はどうか晴れさうに、こんなに酒を飲まにやアよかつた。(ト蚊に取附かれし思入あつて、)一人になつたら大層蚊が出た。それにおれが酒臭えから、ブン〳〵云つてたまらねえ。どれ蚊帳へはひつて寢て待たう。

〽折ふし降り來る雪吹雪、内には亭主が浦里を、庭の古木に括り附け、

ト七藏思入あつて鞄を持ち、蚊帳の内へはひろ、階子の口よりお傳出て來て、蚊帳へ思入あつて、

お傳　七さん、お休みなすつたかえ。

七藏　あんまり蚊が多いから、中へはひつた、お前も早くはひんねえ。

お傳　今夜爰へ泊る事を家へ知らして遣りたいから、ちよつと其の事を書く間寝ずに待つて居て下さいまし。

七藏　明日でもいゝぢやァねえか。

お傳　イヱ今夜郵便箱へ入れておくと、明日朝早く屆きますから。

七藏　さう云ふ事なら、早く書いてしまひねえ。

お傳　矢立を貸しておくんなさいよ。

〽浦里後を打ち眺め、別れとなれば今更に涙に暮れて居たりしが、

ト此の内蚊帳の傍にある矢立を取つて、中を見詰め、杯洗の水を猪口にて墨壺へ入れ、半紙の鼻紙へ一筆書いて蚊帳の中を窺ふ事あつて、

飲めぬ酒を飲んだせゐか、何だか胸がドキ〳〵と、筆を持つ手が顫へてならぬ。

〽昨日の花は今日の夢、今は我が身につまされて、義理と云ふ字は是非も無や、

トよき時分蚊帳の中より七藏手を出し。お傳の裾を引張る故、お傳振り振ふ、此時懐ろより紙に包みし剃刀を落しびつくりして坐る。

今寝ますよ。

ト　お傳思入ある、時の鐘になり此の見得、よろしく道具廻る。

(裏二階の場)━━本舞臺三間の二階家、一面に雨戸を締切り、下手一間の黒塀に忍び返しを附け、其の後ろ植込み、總て丸竹裏二階の體、新内の合方、夜更けの體にて道具納まる。

〽好いた男にわしや命でも、何の惜しかろ露の身の、消えば恨みも無きものを。

ト田川花道より出て來て、花道にて、

田川　晝の群集に引替へて、往來稀な此の藏前、確か片町のこの邊であらう。ヲヽ向うに丸竹の印しが見える、首尾よく合圖で呼び出し度いものだなア。

ト　誂への合方にて舞臺へ來て邊りを見廻し、礫を上手の二階へ打ち、窺ひ居る、是れを聞き附け二階の雨戸を明け、お傳顏を出し、田川と顏を見合せ、

お傳か。

お傳　モシ。(ト抑へる。)

〽逢ひ度い見たいとしやくり上げ、

ト田川前後を窺ふ、お傳簪へ手紙を結び附け、下へ投げる。新内の合方にて、田川軒下より出て、件

の簪を取上げ手紙をひろげ、朧月夜に透して見て、

田川「今晩は謁ひ兼候間、明日新富町にて御待合せ被下度候、」エヽ、折角當てにして來たものを、仕方がねえ。（ト下手へ行き掛けるを、以前の辨藏出て來て立ちふさがり、）

辨藏 言ひ分のある野郎め、待て。

田川 手前は船頭の辨藏だな。

辨藏 われにやアいつかの遺恨があるぞ。

田川 しやれた事をぬかしやアがるな。

辨藏 どうしたと。

トスチヤラカポク／＼の木魚入り早き合方になり、兩人摑み合ひの立廻りになる、此の時大瀧三次郎、羽織着流し、丸竹の印しある弓張提灯を持ち出て來て、是を見て留めに這入り、

三次 おれの家の前で喧嘩をされちやア、掛り合ひで迷惑だ。まア待ちなせえ／＼。

ト提灯を叩き落され乍ら中へはひり、いろ／＼留める、辨藏は三次郎の胸倉を取る、此の間に田川は脱れて下手へ走りはひる。三次郎辨藏に締上げられる途端に紙入を落す。

エヽ、おれだ／＼、仲裁人だ／＼。（ト此の聲に辨藏透し見て、）

辨藏　エヽ間拔野郞め。（ト横面を張り倒し、右の合方にて逸散に花道へはひる。）

三次　アイタヽヽ。（ト此の物音に大戸の內より、女房お竹、ぶら提灯を提げて出來り）

お竹　家の前で間違をされては困ります、どうか餘所へ行つて下さりませ。

三次　アイタヽヽ。

お竹　ヤ、お前は旦那、今の間違はあなたかえ。

三次　おれぢやァねえ、喧嘩の仲裁にはひつて相手は逃げてしまつて、殘つた奴が丸太のやうな力でおれを張倒して、何處かへ行つてしまつた、疵でも附きはせぬか、見てくれ。アイタ〳〵。

ト　お竹提灯で見て、

お竹　アイ〳〵、疵は附きはしませんが、少し瘤のやうになりました。

三次　瘤だけ儲けものだ。（トお竹邊りを見て紙入を拾ひ取り、）

お竹　こりや、お前のぢやァござんせぬか。

三次　今の騷ぎで落したのだ。

お竹　未だ爰に書附が落ちてゐる。（ト三次郞受取つて提灯にて開き見て、）

三次　なに「今晚調ひ兼候間新富町にて御待合せ被下度候。」何だおれんぢやァねえ。エヽ油掃除に、

取つて置け。(ト懷ろへ入れる。)

お竹　瘧にならぬやう、藥でも附けて上げませう。

三次　さうしてくれ。

ト兩人大戸の潜りへはひる。合方にて道具廻る。

(元の二階座敷)――本舞臺元の二階座敷に戻る。と清元の合方にて、お傳蚊帳の中より出て、あたりを窺ひ髮を直し、たゞみある着附を直し、帶を結びなどして、蚊帳の中へこなしある。

〽狂氣の如く心も亂れ、涙の雨に雪解けて。

七藏　モウ飲めぬ〳〵。

〽前後正體無かりけり。

ト蚊帳を四方へ上げ、七藏寢入り居る、お傳寢息を窺ふことあつて、

お傳　モシお湯でも上げませうかえ。モシ〳〵、よく寢入つたさうな。

ト凄き合方になり、行燈へ風呂敷を冠せ、

〽男は豫て用意の一腰、口に啣へて身を固め、忍び〳〵て屋根傳ひ、見るに浦里嬉しやと、

悲しさ怖さ危さに、可愛と一聲明けがらす、後の浮名や殘るらん。

ト此の内剃刀を出し窺ふことあつて、七藏の傍へ寄り、剃刀にて胸を差通し、胴卷の札を取り懷ろへ入れ、血を拭き、邊りを片附け蚊帳を元の如く下ろし、眞中へ出て團扇にてあふぎ居る、此の内お竹障子口より出來り、お傳を見て、

お竹　あなた大層お早くお起きになりましたなア。

お傳　是れはお上さん、私は觀音樣へ朝參りに行き度いと存じまして、早く起きましたが、モウ夜が明けませうね。

お竹　なにモウ、明かるくなりまする。御信心な事でござります。

お傳　モシ、直に行つて參りますが、内の人が昨夜お酒を飲み過ぎましたので、夜更かしをしましたから、もつと寢かして置いて下さりませ。寢るだけ寢かしませんと、起きてから難かしい事を云つて困ります。

お竹　エヽ宜しうございます。然しお早うお歸りなされませ。

お傳　直ぐに行つて參ります。

ト お竹と入れ替り、お傳は二階の上り口へ來て蚊帳の中へちよつとこなしある、お竹是れを見て、

お竹　何ぞお忘れ物でもなさいましたか。
お傳　なアに。（ト舌を出し、思入。烏笛合方にて下手へはひる。）
お竹　これ〳〵、おかうや〳〵。
かう　ハイ〳〵。（ト二階の上り口より出來り）何ぞ御用でござりまするか。
お竹　夜が明けた故、雨戸を開けておくれ。
かう　ハイ〳〵。
ト　おかう正面の雨戸を殘らず明ける。お竹思はず足のベタ〳〵する故こなしあつて、
お竹　何だか妙な匂がするやうだ。
かう　左樣でござります。（ト兩人心附き。）
お竹　是れは血ではないか。
かう　猫でも鼠を取つたのでござりませう。
お竹　何だか氣味が惡いねえ、蚊帳を取つてお客樣を、お起しするがよい。
かう　モシ〳〵。
お竹　お客樣々々。モウお目覺でよろしうござります〳〵。（ト起せど返事無き故、）不氣味な事もあるも

の。コレ、旦那を呼んでおくれ。

かう　ハイ〳〵。（ト障子口へ來て、）モシ旦那さん〳〵、早く來て下さりませ。

ト以前の三次郎、勇藏、下女およれ上り來る。

お竹　モシ〳〵旦那、お客樣のお寢つて居られますあつちこつちに血がこぼれて居りますが、お客樣を起して見て下さりませ。

三次　なに、血がこぼれて居るから見てくれ。臆病な奴だ、モシお客樣、モウお目覺でよろしうござります。モシお客樣々々。

ト早き合方生け殺しある、三次郎は七藏が掛けて寢て居る蒲團をそつとまくり見て、咽喉を切られ血汐出て居る故びつくりして、

ヤア、血だ〳〵〳〵。

ト驚き指さしする故、お竹入れ替り見てびつくりこなし、

お竹　モシ、咽喉を切られて居ります〳〵。

勇藏　やア〳〵、大變だ〳〵。（トお竹此の時枕許の以前の書附を見て、取出し）

お竹　モシ、こんな書置がありました。

三次　ドレ〳〵。（ト取つて開き見て、）此の者儀三年跡私の姉を殺し、其の上私迄酷き目に相成り、只今姉の敵を取りし故、一度姉の墓詣りを致し候、決して逃げ隠れは致すまじく、此の趣き御屯へお屆け下され度候。川越生れまつ。」

お竹　そんなら今の、あの女は、

下女　親の敵であつたのか。

皆々　ヤア〳〵〳〵。（ト三次郎以前拾ひし書附を袂より出し、お竹と兩人にて見てこなし。）

三次　さつき拾ひし、此の書附と誠に同筆。

お竹　そんならもしや拵へ事では。

勇藏　屯へ屆けて參りませう。

三次　ちつとも早く。（ト二階の上り口へ勇藏はひる。）

お竹　こりやたゞ事ではござりませぬ。

三次　とんだ者に。（ト云ふを木の頭、）泊られたねえ。

ト烏笛、本釣鐘を打ち、此の道具よろしく廻る。

（築地河岸捕縛の場）――本舞臺下手晝心に、逢引橋掛りゐる、眞中煉瓦の藏、續いて黑塀青葉の植込み下手に晝心に新富町河岸の遠見、舞臺前に石垣を少し見せ、築地河岸の體、浪の音にて道具納まる。

ト〇□の釣師二人、魚籠を傍へ置き、釣竿をおろし屈み居る、

釣〇　今日は大潮のせゐか、鱚がさつぱり釣れねえなア。

釣□　朝ツから出掛けたが、こんなに魚に釣られては釣師は止めだ。

蜆賣　蜆やァ蜆やアノ〳〵。

ト波の音かすめて、呼び乍ら逢引橋より蜆笊を兩人して擔ぎ、筒袖散切にて出來り、

蜆一　伯父さん、蜆を買つてくんねえな。

釣〇　釣をして居るところへ來て、蜆を買つてくれとは、不緣起な小僧だ。

釣□　今に澤山魚を釣るから、入らねえよ。

蜆一　それぢやア安く負けておくから、放生會に逃がしてやつて、芝居でも見物して歸んなせえな。

釣〇　釣をして居る所へ來て放生會をしろ、後生氣な事を云はれては、

釣□　どうで釣はいけねえわい。

蜆一　モウ思ひ切つて、殺生は止しなせえ。

蜆二 おれの蜆を買つてくんねえ。
釣○ テヽ買つてやらうが、二人のがみんなでいくらだ。
蜆一 六錢だ。
釣○ エヽ、二錢にして置け。
蜆一 いやだ〳〵。
釣○ それぢやア三錢よ。
蜆一 三錢なら負けておけ。
釣○ ソラ、三錢よ。（ト三錢渡す、蜆賣受取つて、）
蜆一 それ、金太の分だぞ。
蜆二 有難う。（ト受取る。）
釣○ 釣を止して今から向う正面へ詰め掛け、更け芝居を見るとしようか。
釣□ 小僧大川へ行つたら、逃がしてやれ。
蜆一 アイヨ、金太外へ又賣らうなア。
釣○ どうしたと。

蜆二　なに、大川へ逃がしてやるよ。
釣〇　少しも早く立見としようか。
蜆一　金太行かう、蜆やア〳〵。
ト波の音になり、釣師二人逢引橋を渡つてはひる。蜆屋は上手へはひる。合方になり逢引橋より研屋秀太郎、双子やつし町人のなり、脇差を持ち出來る。後よりお傳追駈け出て、
お傳　秀さん〳〵、ちよつと待つておくれな。
秀太　ヲヽ、誰だと思つたらお傳さん、何でござりますえ。
お傳　何さ、今お前の家へ行つたら、お上さんばかりで向う河岸へ行つたといふから、お前を尋ねて來た所さ。
秀太　私は今築地の田中屋四郎兵衛さんが、誂へ物の註文を、聞きに行くのですが、何の用でござります。
お傳　外でもないが餘所から剃刀を借りて、襟を剃つて居たら、肱に何だか障つたので氣になつて持つた手を放して、剃刀を鏡の上へ落して歯をこぼしたのさ。私の物ならいゝけれども、借り物だから刃を附けて、研直して貰ひ度いのさ。

秀太　サ、お前の頼みだから、直ぐにして上げ度いが、先のが立て込んで居るので、二三日間がありますがようございますか。
お傳　アレサ秀さん、さうでもあらうが私のお願ひだから、代は幾らでも出すから、歯のこぼれたところを直して研いでおくれな。
秀太　エヽようござります。そんなら直して上げませう。家へ出しておいておくんなさい。
お傳　有難うござんす、丁度爰へ持つて來ましたよ。
秀太　ドレお見せなさい。成程大層歯がこぼれた。此の剃刀は艶も無く、大層油が乘つて居る。
お傳　エヽ。
秀太　サ、油を賣らずに精出しませう。
お傳　いつ出來ますえ。
秀太　晩方迄に研いでおきますよ。
お傳　それでは取りに參りますよ。
秀太　きつと直しておきます。(ト秀太郎上手へはひる。)
お傳　家では話しが仕にくいから、河岸に待つて居るといふに、何を吉さんして居るのか、早く來てお

くれならいゝに。（ト合方になり、お傳思入あつて、）今更云つても仕方が無いが、半圓札で二百圓持つて居ると云つた故、金がほしさに刺殺したが、二百圓はさて置いて、十錢札で十一圓嵩のあつたは郵便の葉書が疊んであつた故、何の足しにもならないけれど、無いよりましと持つて來たが、約束をした吉さんは、何をして居るのだらう。

ト邊りへ思入ある、此の時橋の上にて、

田川　お傳、待遠だつたらう。

お傳　何をしておいでだか、大層お前遲かつたねえ。

田川　將棊の勝負を見て居たので、それでつい遲くなつた。

お傳　ほんにお前もいゝ氣だねえ。

田川　さうして昨夜はどうだつた。

お傳　思つた通りに行かなんだよ。

田川　それぢやア金が出來なかつたか。

お傳　サア、酒に醉はして借りようと勝手な事を云ふを受け、思入れ酒を飮ましたが、一筋繩では行かぬ七藏、持つてる金で板縛りに一ツ蚊帳へ一緒に寢て、やう〳〵の事で十圓借りたが、せめて半

金十五圓と思つた通りに行かないので、吉さんお前に氣の毒だが、是れで間に合はしておいておくれな。

田川　他の者ならいゝけれど、あいつの金故一日も早く返してしまひてえのだ。都合が出來りやア三十圓、そつくり綺麗に返さうし、出來ずば半分持つて行くと昨日約束したからは、口をつぼめて十圓の金を持つちやア行きにくい。

お傳　お前が言譯がしにくければ、わたしが行つて虎公に、何とか云つて此の金で、今日の所を濟まして來よう。

田川　そりやアお前の口前で行つたら承知もしようけれど、あんまりおれが意氣地がねえ、もう五圓都合して、十五圓にして持つて行かう。

お傳　成程お前の氣性では、口をつぼめて虎公に、言譯は仕にくからうから、どうか私が算段して後ち迄に上げるから、まア此の金を取つておいておくれよ。（ト懷ろより紙包の札を出す。）

田川　イヤ十圓でも手にあると、直ぐに相場をしてえのが、持つて生れたおれが病ひ、それでたうとう神田の家も、叩き賣つてしまつたのだ。まア此の金はお前の方へ、置いた方が大丈夫だ。

お傳　さういふ事なら後迄、私が預かつておきませう。

ト懷ろへ入れる、お傳の袖に血の附いて居るを田川見て、

田川　お傳、お前の袖に、血が附いて居るぜ。

お傳　ホンに。

田川　どうしてそんなものが附いて居るのか。

お傳　こりやア昨夜旅籠屋で猫に嚙まれた鼠が、私の袖へ飛附いたが、其の時袖へ附いたのだらう。

田川　外のものと違つて、血の附いて居るのは、何だか不氣味なものだから、早く洗つてしまふがいゝ。

ト　お傳思入あつて、

お傳　此の血は洗へば落ちるけれど、身に染み込んだ惡事ばかりは、

田川　エヽ。

お傳　イヤサ、惡緣契り深しとやらで、お前とかうして一緒になり、女房になつた曉は假令どんな事があらうと、別れる心はあるまいねえ。

田川　そりやア浪之助を捨てた格で、お前はおれに愛想が盡き、何處か外にいゝ人が出來て川岸を替へる氣か。

お傳　そんな浮いた事ではない、たとひどんな金持が女房にしようと云つたとて、命の親のお前を捨て

不實な事をするやうなお傳で無いのは上州で、若い者に取卷かれ、お前が打たれた其の時に、共に死ぬ氣で上へ乘り、所の者を留めたのは、お前の爲めを思ふからだよ。

田川　其奴ア何にしろ有難え。それぢやアおらア今の內、蠣殼町へ行つて來よう。

お傳　金も無いのにお出でゞないよ。

田川　愛知の者が來て居るから、都合がよけりやア金を取り、耳を揃へて返す氣だ。

お傳　さういふ事なら行つてもいゝが、會所が引けたら外へ行かずと、

田川　ヲヽ、直に家へ歸つて來る。（ト下手へ行き掛ける）

お傳　アヽモシ、吉さん。

田川　何ぞ用か。

お傳　きつと歸つて來ておくれよ。

田川　エヽ、歸ると云ふに。（ト田川橋を渡りはひる。後を見送りて）

お傳　袖へ此の血の附いて居るのを、さつぱり今迄知らなんだが、吉さんだからいゝけれど他の人に見られたら、後日の證據になるところ、アヽこんなに苦勞をするといふのも、あの吉さんが神田に居てそれ相當にして居たを、私と夫婦になつてから、終に世帶を疊んでしまひ、人の所に居る程

にしたのが如何にも氣の毒故、どうか其の恩返しに假令此の身はどうならうとも、資本を拵へてもう一遍、何ぞ見世でも出させなければ、浮世の義理が濟まぬ故、肚胸な事をしたけれど道に缺けた事なれば、遲かれ早かれ私も亦、共に命を捨てねばならぬ。ア丶惡い事は出來ないものだ。ドレ血を洗つて穢れた體を、湯にはひつて清めよう。

ト下手へ行き掛ける、此の以前より宿屋の下女を見知り人に先へ立て、三次郎、探索方二人、羽織袴半靴にて出て來て、上手にて此の樣子を窺ひ居て、此の時下女おかう見定めて、間違ひ無いと探索方にこなしある、此の時探索方〇思入あつて、お傳を呼び留める。

探〇　あゝモシ／＼、お傳さんとはお前かえ。

お傳　ハイ。

探〇　名を呼んだら返事をしなすつたから、お前に違えねえ。

お傳　ハイ、何の用でござります。

探〇　お前ならちつと聞き度いことがある、一緒に來てくんなせえ。

お傳　そりやァ何處へ行きますのだえ。

探〇　ハテ、五大區の分署へ行けば、譯の分ることだ。

ト此の時お傳前へ出て、

お傳　何で屯へ行くのでございますえ。

三次　昨夜殘した書附と同筆故に。

探○　ハテまア、默つて。（ト押へる）

此の以前探索方□車夫を迎ひに行き、此の時車夫を連れて出て來て、

探□　サア、車へ乘つて行きなせえ。

お傳　私や車へ乘るのはいやですから、歩いて行く方がようございます。

探□　歩いちやァ埒が明かねえ、乘んなせえ〳〵。

お傳　なに、いやだから、歩くのが勝手でようございます。

ト捨ゼリフを云ひ乍ら、下手の橋の所へ來り、橋の欄干へ足を掛けるを留めて、

探□　何をしなさるのだ。

お傳　なに、足へ泥が附いたから、落さうと思つて。

探○　サア〳〵、乘んなせえ〳〵。

お傳　エヽ、逆上せ返るよ。

ト云ふを構はず手を引張り、上手へ來り、

探□　ハテまア、乘つて行きなせえな。

ト手を持ちし儘探索○車に乘つて居住ゐ、車の上へ手を持ち引上げるを木の頭。車夫兩人にて引き下手へ來る、探索方□は警護をして、三次郎おかう兩人附いて行く。波の音にて。

ひやうし　幕

七幕目

東京府裁判所吟味の場
お傳落着の場

〔役名――民尾諭、糺直道、田川吉太郎、白邊白明、百姓勘右衛門、大瀧三次郎、健三、丹作、深井惠、見査二人、田淵八十八、剃刀研小宮秀太郎、茶屋亭主茂助、獄丁四人。玉橋お傳。〕

（東京府裁判所吟味の場）――本舞臺通し中足、蹴込の石垣、瓦屋根、上下一間入口、二段の上り段の石段、此の内縦に腰掛數脚並べあり、此の角に石の大七厘を置きて大藥罐を掛け、用箪笥、帳箱、鰻の丼、辨當、菓子箱並べあり、外通り硝子窓あり、白ペンキ板羽目、此の内見ゆる事、思ひ〱の

なりにて腰掛に控へゐる。下の入口の石段に、百姓勘右衛門羽織着附にて、お傳の父の拵へ、田淵八十八も羽織着附、百姓の拵へにて、兩人腰を掛け居る。平舞臺に茶屋の亭主茶助茶屋男紺の着附前垂にて、大瀧三次郎縞の着附駒下駄なりにてゐる。總て東京府裁判所の體。鳴物ラッパ稽古の音聞える體にて幕明く。

茂助　丸竹さんも、今日はお傳一件の引合でござりますね。

三次　イヤモウ、去年の秋から二年越し、お傳一件の引合で度々裁判へ呼ばれ、お前方にまで馴染になる程、あいつのお蔭で度々出るが、何といふ太い奴だか知れませぬ。

茂助　おつしやる通り呼び出して、調べの度毎申し口が變り、あのゝものゝと云拔けて誠の事を云はぬので、お掛り様もその度毎にお手數が掛り、引合の者を呼び出す事になりますとは、お氣の毒な事でござります。

三次　イヤ愚痴をこぼしても追付かぬが、飛んだ奴に泊られて、アノ一件から此方は、わしが家は上つたり、馴染の客人まで脇へ泊り、ふりの客も噂を聞いて、氣味惡がつて泊らね故、雇人を抱へて二年越しの食込みで、こんな馬鹿げたことはない。

茂助　昔と違つて近頃では、變つたことがありますと、直ぐに新聞へ出まして、東京は勿論國々へまで

良いも惡いも知れますから、間違ひがあつては往生さ。

三次　それもあつた事なれば出されても仕方がないが、世間の人は尾に尾を付け、ヤレあすこの二階は化物が出たの人魂がころげ出たのと、馬鹿げた噂をされるので、自然と泊る客もなく、此の成行では旅籠屋をやめませねばならぬしぎ、何の恨みで此のわしに、こんな難儀をさせることか、あんないま〳〵しい奴はない。

茂助　噂を聞けばあのお傳は、上州沼田の生れにて、さる士族の落し胤だと申す事でございますが、全く左樣でございますかね。

三次　あいつの云ふ事は當になりませぬ、わしの家へ泊つた時武州熊谷の平民、山口專之助に同人妻まつと、こんな名を宿帳へ書かせ、誠は上州下牧村でお傳といふが本名にて、どんな奴の娘か知らぬが、どうでろくでなし、いづれ上州のならず者の子なら、親も食へるやつではあるまい。

茂助　瓦解此の方世も變り、今はないさうでございますが、上州には長脇差と云つて惡黨が多く居た國故、女までがあんな恐ろしい奴が出來ると見えます。

三次　何にしろ引合の者が、横濱からも出て來る筈だが、まだいつもの顏は見えぬやうだ。

茂助　まだ時間も早うございます、今にみんな見えられませう。

三次　わしも民事の腰掛に用事のある人が居る故、今の内行つて來ますから、モシ呼込みになつたなら
ば、向うまで知らせて下され。

茂助　まだ／＼間がございます、ゆつくり行つてお出でなさい。

三次　必ず呼んで下さいよ、遲刻の罰金は眞平だ。

茂助　畏りました。

三次　ドレ行つて來ませうか。

ト右鳴物にて三次郎茂助は憚を借りることあつて、駒下駄を茂助に預け、上手へ三次郎はひる。茂助は件の駒下駄をさげ、下手の勘右衞門、八十八のうつ伏し居る體を見て、

茂助　お前さん方は御在方の樣子だが、お國はどちらでございます。

勘右　ヘイ私は上州利根郡下牧村から、出て參りましてございます。

茂助　それではやつぱり、お傳一件でお引合でございますか。

勘右　面目ないがそのお傳の、實の親父でございます。

茂助　エヽ。（ト合方になり、）

勘右　成程今まで此處にございつた宿屋の主人といふ人が、恨まつしやるも尤も至極、惡い奴めに目ざゝ

れて、泊られたばつかりに二年越し引合といひ家業もすさび、旅籠屋を餘儀なく止めねばならぬ樣になつたと、それを聞いて猶以て氣の毒でたまらぬ故、心で詫びて居ましたが、それと名乘るに名乘られず、惡い娘を持ちし故親まで惡名を受けるといふは、情ない事でござれども、上州者はろくでなしと、良いも惡いも一樣に云はれましたが、嘆かはしい事でござります。

八十　そりやモウ昔は上州に長脇差も多く居て、亂暴して歩きましたが、替る世界に御政治が屆き、博徒はみんな堅氣になり、商法を立つて暮らして居る故、亂暴人は一人もござらぬ。娘は若氣のあやまりで、料簡違ひの惡事を働き、人に難儀を掛けましても親御は村の評判の、正直正路の人でござる。

茂助　さうして今度お前さん方は、お呼び出しでお出でなすつたか。

勘右　お呼出しではござりませぬ、此の一件に付き先達て、熊谷裁判所へわしを始め養父九右衞門、又浪之助の親大助殿がお呼出しでお調べ受け、委細を書面に認めて、差上げましてござりますが、今日わしが來ましたは未だにお傳が白狀致さず、強情を張ると申す事故對面願ひを致しまして、お傳に逢うて異見を加へ、早く罪に服させ、御上へ御苦勞かけず、又あれ故に引合で多くの御人の難儀なさるを、どうかお助け申し度く、態々國から出かけて參りました。

茂助　それは、——遠方の所をよくお出でなさいました。是れは内幕の話しだが此の控へ所の茶屋などは、お傳さんの様な女がある故、引合の衆も多くあつて、茶代は元より菓子辨當、何やかや餘計に賣れて、儲けがありますが故實の所は悦んで居りますが、まさか引合のお人の前で褒められもしませんから、今の様に申しましたが、氣に掛けて下さいますな。女でさへも上州にはお前の娘のお傳さんの様な者がありますから、男は猶更ら氣性が勝れ、東京の者は叶ひませぬ。（ト追從を云ふ。）

勘右　イヤ此方が蔭で悦ばつしやるは、ほんの些細な錢まうけ、それに引かへ引合の衆は用暇を費す上に入費を遣ひ、どの位迷惑するか知れませぬ。それといふも娘故、嘸や恨んで居るであらうと、わしや氣の毒でたまりませぬ。

八十　年中此處で商ひをしてござる故、どうしたならば逢はれるか、

勘右　どうしてお上へ願ひましたらば、よろしうござりませうか。

八十　どうぞ教へて下さりませ。

茂助　それは書面へ事柄を詳しく認めて、御訴所へ出るのが近道故　私が委しく教へませう。

勘右　定めし書面の書方も極つて居るでござりませう。ならう事ならお前さんが、認めて下さりませ。

茂助　サ紙や墨は此處にあるが、書面は私には書けませぬ。

勘右　シテ又どなたぞ代筆を、なさるお方がござりまするか。

茂助　それでは今民事の腰掛へ行きますから、代筆するお人を私が頼んで來て上げませう。

兩人　何分お頼み申します。

茂助　ドレ、呼んで來て上げませうか。

トラッパ入り鳴物にて、茂助は上手へはひる。あと勘右衛門、八十八見送りて、

八十　イヤモシ勘右衛門殿、此處へ來る時餘所ながらお傳殿の話しを聞けば、お傳殿は市ヶ谷の囚獄所に居て、今日も此處へ呼び出され、お構ひ内の假檻倉に來て居るといふ事ぢや。

勘右　お掛り樣へ御願ひ申し、お許し受けてお傳めに逢はれる事になつたれば、異見を加へ白狀させてせめてお上へ御手數の掛らぬやうに計らふのが、惡い子を持つ親の役、少しも早く願書を上げ、お許し受けて娘に逢ひ、異見を仕度いものだ。

八十　何の因果でこなたの樣に、正直正路な人の子に、あんな娘が出來ましたか。

勘右　親は惡くは生付けぬが、成人するに從つて直なる道を踏み迷ひ、直なる道を行かずして、終には途中で日を暮らし、

八十　暗き身となるその果は、

勘右　懲役なればよけれども、首と胴との、

八十　エ、

勘右　つらい別れに。

トとんと石段へ腰をかけるを、道具替りの知せにて、此道具廻る。

（裁判所入口の場）――本舞臺上手畫心に三間裁判所の入口、中足二重塗家にて、正面後へ諸役所、局詰所、塗家植込みを見たる中遠見、下手植込の內、廊下の横を見せ、好みの通りラツパの鳴物にて道具廻る。

獄一　けふは又上州の、お傳のお調べでござりまする。

獄二　あんな強情な女はござりませぬな。

丹作　見かけは優しい顏だのに、少しは物も學んだか、決して齟齬した事を云はず、猫撫で聲でお掛りへ段取をよく云立てる、樣子はとんと役者の樣だ。

健三　聞けば以前は橫濱に浪之助と居る時分、その日に困つて大道で、上州祭文をやつたとやら、せりふ廻しも祭文の大方節でやつたのだらう。

獄二　成程是はおつしやる通り、祭文語りといふ風が、どこかお傳にござります。
獄一　上州者は素人でも、みんなあれをやりますから、お傳も上手でござりませう。
丹作　何にしろ去年から數度のお調べ受けたれど、そのお答へが皆噓で少しも形の無い事を、誠しやかに拵へて、段取をよく云ひ立てるので、一時は傍に聽いて居る見査も誠と思ふくらゐ、それ故お傳が云ひ立てた引合の者を呼び出して、調べて見ると皆僞り。
健三　元より證據の無い事故、サア〳〵と詰められると、誠は斯樣々々の事とまた云立がすつかり變り、噓も誠に聞えるやうに淚をこぼして口說き立て、ホロリと淚を催させる新狂言の筋書は、なか〳〵芝居の作者などは、お傳には及ばぬ事だな。
獄一　先達てから氣打にて持病が重つたと云立てたも、切なさゝうに箯輿に乘り、足が震へてあるけぬなどゝ、
獄二　肩へすがつて步くのも、是も一つの手立にて、お調べ濟めば歸りにはすた〳〵步いて歸ります。
丹作　產神がらでもあるまいが、昔からして悪黨は上州產れの者が多い。女でさへもお傳のやうに上を恐れぬ奴がある、去年からして種々樣々と、手を替へてお調べなされても、一つも誠の事を云はぬ。

健二　以前であつたら是までに、箱に掛けられ石を抱かされ、手ひどい責に逢ふ所を、今開明の世の中に拷問といふ事はなく、たゞ調べにて責めるのを有難いとも思はずに、去年の秋から二年越し、御苦勞掛ける憎い奴。

丹作　然し追々證據が出れば、いくらあいつが欺かしても、以前と違ひ證據裁判。

健三　たとひその身に白狀せずとも、殺した證據が慥にあれば、御所刑になる今の御規則。

丹作　モウ遠からず、アノお傳も、

健三　科が極つて口書にならう。（ト兩人上手を見て、）

獄二　噂をすれば影とやら、

獄三　お傳が箯輿に乘つて來た。

ト說經もやうの合方になり、上手假檻倉の道、植物の間より、巡査のなり兩天の棒をかい込み、好みのなり、シヤツポを冠りたる獄丁三、四、淺黃の着附、脊中に丸に懲印を附け、同じ股引散切にて、箯輿をになひ、此の內にお傳、達摩返しのかつら、結城縞の着附、黑ちりめんの半纏、腰繩にて出て來る。

お傳　檻倉にゐてのぼせたから、少しこゝへおろしておくれ。

獄皆　アイ〳〵。（ト箯輿を下ろす。）

お傳　青空を見て晴々した、少し息をつかしておくれ。（ト獄丁兩人健三、丹作に向ひ、）

獄三　モシ、檻倉に居てのぼせたから、

獄四　息をつかしてくれと云ひますが、

兩人　宜しうござりますか。

丹作　まだお調べに間があるから、

健三　呼び込むまでは大事ない。

三四　それぢやア宜しうござります。（トお傳兩人に會釋して、）

お傳　これはどなたも、有難うござります。暫く息をつきます内、お目こぼしを願ひます。

丹作　此の間から病氣故、久しく呼び出しが無かつたが、どうだ少しはいゝ方か。

お傳　身に覺えもない事をお疑ひを受けたので、女の狹い心故どうなる事かと案じられ、病は日に増し重ります。

健三　惡いといふが顏色は、此の間よりよツ程いゝぜ。

お傳　うはべはさのみに見えませぬが、芯から出ました病故、どんなに切なうござりませう。

ト胸を押へ思入れ、健三丹作の兩人は、何を云ふかといふこなし。

丹作　成程、こりやア、

健三　切なさうだ。

トせゝら笑ふ、ウルユールの合方になり、花道より以前の勘右衛門、八十八出來り、花道にて見廻して、

勘右　何とまア見事な事ではないか、俺ア國の縣廳を立派だと思つて居たが、東京は東京だけ、實にびつくりするやうだ

八十　かうして中へはひつても、勝手の知れぬ田舍者、とんだ所へ行當つても、權威で叱るお方もなくよく云ひさとして下さりますは、有難い事ではある。

勘右　此のお慈悲深いお上へ對し、御苦勞掛けては濟まぬから、少しも早くお傳に逢ひ、とつくり異見をしたいものだ。

八十　アレ／＼向ふにお傳殿が、箯輿に乘つて居ります。

勘右　それでは煩らつてゝも居るか知らん。（ト兩人舞臺へ來て、お傳を見て、）そこに居るはお傳ぢやないか。

お傳　ヤ、思ひがけない、お前は父さん。

八十　お傳殿、久しぶりで逢ひました。

お傳　よく尋ねて來て下さつた。

丹作　それぢやあ二人は、在所の衆か。

健三　一人はお傳の親父殿か。

勘右　ハイ、私はお傳の親の勘右衞門と申すもの、娘に逢ひ度く、お願ひ申しに參りました者でござります。

丹作　親御とあれば丁度幸ひ、早く白狀するやうに、よく異見をしてやんなせえ。

健三　罪に服さぬばかりで、お上のお手數、引合一同どんなに難儀か知れやァしねえ。

勘右　その噂を私も承りました故、濟まぬ事と存じまして、出府いたしましてござりまする。

丹作　さう云ふ事で出て來たなら、暫しは大目に見ようから。

健三　早く白狀するやうに、そこで異見をしてやんなせえ。

勘右　致しまするでござります。

獄二　それぢやァわし等は、

獄一 暫しの内、

丹作 猶豫してやるがいゝ。

ト健三、丹作思入あつて受付の内へはひる。獄丁一、二は下手へはひる。懲役人の獄丁三、四は箯輿の後ろへ後ろ向きになる。

八十 見れば後ろ鉢巻をして、箯輿に乗つて居るからは、こなた獄屋で煩らつてか。

ト雲上なる合方になり、

お傳 身に覺えのない疑ひうけ、囚獄所へ入れられたのが、實に悔しくつてならぬ故、氣で氣を病んで一年越し、私や煩らつて居ります。

勘右 常の子ならば煩つて、居ると聞いては案じられるが、そなたばかりはいつその事、死んでくれたら良からうに。

お傳 そりや何故でござります。

勘右 何故とはそちが犯した罪科故、現在生みの此の親に、いつそ死んだら良からうにと、云はれる程の不孝者めが。

お傳 親を捨て家出した故、不孝者には違ひなけれど、それとても皆夫の爲め死んだがよいと云はれる

程、私や不孝は致しませぬ。

勘右　不孝をせぬとはコリヤお傳、そちやどの口で云つたぞ。親に恥を與へるといふ不孝者めが。（トきつと叱り、合方になり、勘右衛門詰寄り、）去年在所へ再び歸り、逃亡なせしを熊谷の裁判所へ自首なして、御免を蒙り暗い身も明るくなつて、東京へ今一度立歸り家業を勵んで金拵へ、錦を飾つて立歸りますと僞つて、送籍持つて行つたぎり何の便りも無い故に、憎い奴だと口には云へど、何處にどうして居るかと、明暮胸に忘られず案じ暮らして居る所へ、思ひ掛なく裁判所から、九右衛門勘右衛門大助に、至急に出ろとお差紙、出て見ればそちが素性を詳しくお尋ね、又々九右衛門や大助も共々調べを受けたのは、どういふ事と聞いてびつくり、人を殺して金を取り、捕縛になつて御詮議中、それ故身許を調べると、お役人がおつしやつたので、忽ち村の噂となり、是れでは大方浪之助も毒でも飮まして殺したと、口々に云はれるので實に俺は村の衆に、顏向けがならぬ故、いつその事死なうと思ひ、棟へ繩を掛けたれど、そちと違つて孝行なお村が路頭に迷ふであらうと、それが不便でならぬ故、一日々々と日を送り、ツイその儘に死におくれ、こちらの樣子を段々聞けば、跡方もなき僞り云つて、お上へ永々御手數かけ、又引合の人々へ難儀をかける人でなし、何故お捕へになつたら、罪に服して御所刑受けぬ。人を殺して脫れんとは、さ

りとてはおのれが根性、人樣の物微塵一本盗んだ事なき親にまで、惡名附ける人殺し、云はう樣なき不孝者めが。（ト此の内始終お傳うつむきこなしあるべし）

八十　コリヤ勘右衛門ばかりでなく、親類縁者のかし等まで、世間の衆へ面目ない。今も今とてお腰掛で樣子を聞けば人殺しの、罪は脱れぬ證據があるに、殺さぬなどゝ云張つて、お上へ御手數掛けるよし。

勘右　人を殺せばその罪で、殺されるのは天下の掟、たとひ如何やうに云張るとも慥かな證據がある上に所詮脱れぬから、包み隱さず白狀なし、御上の御仕置受けるがよい。さもない時は此の親が世間へ顏が合はされぬ。

お傳　それではとつさんお前まで、私が人を殺したと疑うてゞござりますか。

勘右　おゝ知れた事、藏前で七藏とやらいふ人を、殺して金を取つた事誰知らぬ者はない。

お傳　それが思はぬ此の身の濡衣、元より殺した覺えも無ければ、金を盗んだ覺えもなし、それを私がしたやうに無理な御詮議なさる故、何年立つても人殺しの私や罪には落ちませぬ。

勘右　まだ〳〵そんな事を云つて、親までそちは欺くか。

お傳　お上なり父さんなり、なんで私が欺きませう。

八十　シテ藏前で殺された、七藏とやらいふ人は、誰が手にかけ殺したのだ。
お傳　誰も殺しは致しませぬ、我と我手に死にました。
勘右　とは又どういふ譯あつて。
お傳　サアその七藏といふ人が、無體に私に戀慕なし、手籠にしようとした故に、振拂つて逃げましたを、引戻して取つて押へ、云ふ事聞かねばモウ是まで、此の儘生かして置かぬから覺悟しろと懷に、隱して居たる剃刀で私を殺さうとした故に、女乍らも一生懸命、力を極め振拂ふはずみに持つて居た短刀で、我手に咽喉を突切つてはかなく其場で死んだ七藏、それを私が殺したと疑ひ掛つて獄屋の苦しみ、明暮それが悔しさに、終には病氣で此の病ひ歩く事さへ叶はぬものを、幾度となく呼び出して、無體な詮議なさるのは、無理な事だと思ひましたが、現在實の親にさへ疑はれるものお上にて、御氣の附いたは御尤も、如何なる因果で覺えのない此の身の明り立たぬ事か、誠を照す世の中に、神も佛も無い事かと、思へば悔しうござりまする。（トお傳顏に袖を當て泣く、是にて親は誠かと思入ある、お傳は胸のさし込む思入にて）アイタヽヽヽ。
八十　コレお傳殿、どうさつしやつた。
お傳　此の間から疳にとぢられ、幾度となくさし込む故、私や死ぬかも知れませぬ。此の惡名が拔けぬ

內、どうぞ死に度くござりませぬ。（ト態と悔しさうに泣く、八十八介抱して、）

八十　宿にとおられ居る所へ、氣を揉むのは何より毒。サアノヽ心を落着けさつしやれ。

お傳　有難うござりまする。

勘右　それではそちはどうあつても、その身に覺えないといふのか。

お傳　血を分けた父さんに、何で僞り申しませう。

勘右　いよノヽ覺えの無い事なら、いつか明りが立つであらう。

八十　さうなる時は國許へ、肩身が廣う歸られます。

お傳　永々御苦勞掛けましたが、モウ疑ひも半月か遲くも一月立つ內には、此身の明りが立ちませう。

八十　さういふ事なら逗留して、安否を聞いて歸りませう。

勘右　是れがまことであるならば、こんな嬉しい事はない。（ト嬉しき思入。）

お傳　御年の上の父さんに、孝行もせず御苦勞かけ、こんな濟まない事はない、是れも親子の因緣づくと、どうぞ堪忍して下さりませ。（トお傳殊勝に手を突き詫びる。合方止まる。）

勘右　そちがさういふ心なら、何の詫に及ばうぞ。

八十　是でわし等も安心しました。（ト此の時ラツパ鳴る、以前の受附より健三、丹作出來り、）

丹作　さつきから餘程の間、おいら達が猶豫して、娘に逢はしてやつたのも、見るから知れた田舍堅氣正直さうな人達故。

健三　最早お呼出しの時刻だから、此方衆二人は腰掛で、お呼出しを待つがいゝわ。

勘右　お前樣方のお情で、逢はれぬ娘に逢ひまして、まことに有難うござります。

八十　もそつと此處に私共が、居りましては惡うございますか。

丹作　此處はお前方の居る所でないから、

健三　早く腰掛へ行きなせえ。

勘右　左樣なら私共はお腰掛へ、

八十　參りませう。（ト兩人是非なく下手へ來る。）

勘右　そんなら娘。

お傳　とつさん。

勘右　ドレ、吉左右を待ちませうか。（ト合方ラツパになり、勘右衞門八十八振返り、花道へはひる。）

お傳　エヽとつさんも年取つて、餘計な苦勞をしなさるせゐか、大層弱りなさんしたなア。

ト此時後にて、

呼び　上州下牧村玉橋傳、

丹作　サア、モウ呼び込みだ。

健三　假白洲へ廻らぬか、

お傳　アイ、アイタヽヽヽ。（ト胸を押へ下に居る、）どうも歩く事が出來ませぬ。

ト兩人横着な奴といふこなし。

丹作　それぢやあ篗輿を願つてやるから、

健三　暫く此處にひかへて居ろ。

お傳　有難うござります。

ト神妙に辭儀をなし居る、丹作、健三受附の内へはひる。お傳是を見送り、そつと立上り、兩手を開き、あくびをなし乍ら伸びをする。此のとたんに下手より獄丁一、二出て來る。お傳是に氣が附きあわてゝ下に居るを、木のかしら。獄丁一、二は篗輿を直し、後ろの懲役人も立掛り、ラツパを吹き立てる鳴物にて道具廻る。

（裁判所内の場）――本舞臺四間中足の二重、ペンキ塗、蹴込み、正面櫛形四尺の出はひりに、ガラス

障子、二タ所共繪絹の日除け、腰通りに下げてあり、此外白ペンキ、板羽目、此の前に二間の間欄埒あり、同じく白ペンキ塗り、上下張物、白ペンキ、板羽目、上下共ガラス窓あり、同じく繪絹の日除掛けある事、此の前に椅子置きあり、以前の丹作、健三控へ居る、ずつと下手に床几一脚直しある。二重には萠黄色の敷物敷きつめあり、此の眞中にテーブル二つ、青き唐織物を掛け、上に硯箱載せあり、此處に紅直道撫でつけかづら、洋服半靴の拵へ、厚紙の袋に書物を入れて持ち、椅子に掛り居る。白邊白明同じ拵へにて書物を袋へ入れ、椅子へ掛り居る。ずつと上手角柱へ、ガス點る金物の仕掛あり、すべて假白洲の體、道具納まる。

直道　群馬縣下牧村玉橋でんは、呼出しおいたか。

健三　最早御出頭と存じまして、控へさせおきましてござりまする。

直道　然らば是にて調べをなさん。

白明　ソレ、傳を是へ呼出せ。

丹作　ハツ、傳事は此程より不快にてありし所、追々病重りて歩行なり難き由を申しまするが、駕輿の儘召連れませうや、如何取計らひませう。

直道　病氣の由は聞及びしが、彼は歩行はならぬと申すか。

丹作　ハッ、左様にござりまする。

直道　歩行が成らぬと申すなら、駕輿の儘にて苦しうない。

白明　然し吟味の此の席へ。

直道　許し難き事なれど、病氣とあれば非常の事。

白明　然らばその儘、召連れまゐれ。

二人　ハッ。（健三上手へ向ひ、）

健三　それに控へし玉橋傳、重體故にお許しあれば駕輿の儘にて是へ出よ。（ト上手の内にて）

お傳　ハイ。

ト お傳駕輿へ乘り、是な獄丁一、二附き、懲役人是れをかつぎ出來り、眞中へ下し、お傳わざと病氣の體、直道見て、

直道　コリヤ傳、先年より病氣なりしが、今日歩行がならぬとは、餘程重態に見えるな。

ト 眞中櫻埒へ立掛り、こなしあつて、

お傳　ハイ人殺しの御疑ひを受けまして、深く痛心いたしまして、次第々々に病重り、遂に歩行もなり兼ねます故、かゝるお席へ駕輿の儘にて失禮お許し下さりませ。

直道　コリヤ、傳。

お傳　ハイ。

直道　其方先日の申し立に、去年八月二十六日、淺草片町旅人宿、大瀧三次郎方へ止宿の夜、佐藤七藏酒興の上艶言を以て其方に迫り、隨はざるを憤り強姦なさんと押伏せて、隱し持ちし短刀を胸許へさし附け、隨はざれば差殺すと彼が申し脅し、且其方の咽喉を突き強姦なさんと致せしを、悔悟なせしか七藏が、最早我も是までと咽喉を突切り相果てしと、再應其方申し立てしが、いよいよそれに相違ないな。

お傳　お掛り樣の仰せの如く、七藏へ私が口入を致しました其品物の持主が、餘儀なき事で他出せし故、又々翌日出直して、參りませうと申しますれば、暑さの時分に出直して、あした來るのが大儀故幸ひ此處の丸竹へ泊るなら取引せうが、出直す事なら止めに仕ようと申します故、よんどころなく泊りましてござりまするが、早くも酒を申しつけ、暑さ凌ぎと私へ無理に勸めて夜を更し、醉つた振にて種々樣々いやらしい事を申しまするを、程よく受けて居ります內、泊り合せし合宿も晝の疲れに高いびき、時分はよしと七藏がしひて口說きまする故、一人身なれど其樣なみだらな事は知りませぬと、斷りましたを憤り、かゝる事も兼ねての企みか、隱し持ちし短刀を拔き私の

胸許へさし附けて、云ふ事を聞いて抱れて寢るか、いやと云へば一突と血相變へて申します故、一生懸命私が押へし其手を振拂ふはずみに持ちし短刀で、われと我手に咽喉を切り、強姦なさんと致せしを訴へられると思つたか、最早やわれも是までなりと咽喉をかき切りその儘に、相果てましてござりまする。

直道　其の事柄は先達て、其方申し立てし故、とくと承知いたし居る。

白明　申立ての趣きでは七藏事は其方へ、金子を餌に戀慕を仕かけ、得心なさぬを憤り刃物を以て脅せし上、強姦なさんと致せしは、重々の不屆きなり。なぜその趣きを訴へぬぞ。

お傳　後より左樣存じましたが、たゞ其折は女故血汐に恐れ前後を忘れ、取るものも取あへず、立退きましてござりまする。

直道　血汐に恐れ前後を忘れ、立退きしとは心得ず、左程うろたへし者が、何故巳次郎方へ一通の書置を殘せしぞ。

お傳　エ。

直道　殊に手跡も速かに、震へし所あらざるは、膽の据りしことなるぞ。なか／＼血汐に恐るゝやうな其方にてはよもあるまじ。

お傳　ムウ。

白明　今其方が申すには戀情に迫り七藏が、脅しに持ちし短刀の手許狂ひて咽喉を切り、我手に死せし上からは、コレ七藏が誤りなり、その趣きを訴へて檢視を受けなば其方に、疑ひは掛るまじきに、何故姉の敵故打ちしと一通を殘せしぞ。

直道　前條そちが申し口とは、大いに詞が齟齬いたすぞ。

お傳　その儀は先日明細に申し上げましてござりまする。全く七藏は我姉種を殺害いたしました當の敵にござります故、いつぞは恨みを晴らさんと附きまとひましてござりますが、かよわき女の細腕に打取る事の成り難く、よき折あらばと存ぜし折から、我を脅しに突附けしその短刀の手が狂ひ咽喉を突切り命を捨てしは、御願を掛けし神佛の御助け故に手を下さず、本望遂げし嬉しさに、一筆跡へ書殘し、立退きましてござりまする。

直道　今日そちが申すを事實と致さば、七藏が所持なし居りし短刀が、丸竹方に無ければならぬが、死骸の傍にあらざるは、如何致せし事なるか、其方それを存ぜざるか。

お傳　その短刀は沼田藩の室瀬が家の寶ものにて父の記念に、姉の所持いたし居りましたを、七藏が盗み取り隱し持つて居りましたが、その短刀でわれと我手に咽喉を切つて死にましたは、取りも直

さず我姉が殺しましたも同じ事、惡い事は出來ません。かゝる由縁の短刀故、父の記念と私が持歸りましてござります。

直道 シテその短刀は、いづれへ置きしぞ。

お傳 その短刀は私が同居いたし居りまする、二階の棚へ上げて置きましたが。

直道 今其方が敵といふ姉種が横濱にて、七歳に殺害されしを、その隣家に住居なる、須藤東四郎なる者が手紙を以て其方へ竊に告げしと、先達て調べの節に申したな。

お傳 その一通は先達て、差上げ置きましてござりまする。(ト直道思入あつて、)

直道 コリヤ傳、其方は衆に勝れてなか／＼利發者なれど、男子に及ばぬ女子の淺はか、夫の諺に申す如く、三筋足らざる猿利口、左樣な事で萬民の邪正を糺す裁判官を、欺かれうとそちは思ふか。さりとは愚かな者なるぞ。左樣な僞り申さずと、有體に申せ。何程そちが奸智をふるひ、僞りを以て云逃るゝとも、道ならざるは立たざるぞ。そも／＼昨年八月より上の手數は云ふに及ばず、引合の者一同が呼出しに逢ふ度毎に、各々其日の家業を休み、何程難儀致すか知れぬ。最早やそちが惡事の罪狀、追々確證出でたる上は、所詮叶はぬ事なるぞ。

お傳 スリヤ此程より私が申立をばあなた方は、僞りだとおつしやりまするか。

直道　如何にもそちが申立ては、跡方もなき、

二人　僞りなるぞ。

お傳　とは又、何故。

白明　さればそちが申す事、一つとして確證なきぞ。

お傳　エヽ。（トぎつくり、西洋樂笛入りの合方になり、）

直道　昨年よりの申條僞りなる事明白なるは、沼田の舊藩家令職なる室瀨何某が落し胤と申す故、探索なせしに左樣の事はあらざる由に、書面に致して出せし上は、室瀨方に幼年より永年奉公致したる熊といへる老婆より、草津の湯治場で室瀨が娘種が守りを盜み取り、同胞なりと僞る事、判然とわかりたり。さすれば姉の敵にあらず、金子を奪ひ取らん爲め、色を以て七藏を殺害なせしに疑ひなし。

白明　又七藏が害せしといふ、室瀨種は横濱にて、病の爲めに尋常に死去せし事は、差配人並びに醫員が證書にて、變死ならざる事分り、其折竊に告越せし、隣家須藤東四郎は、其砌り旅行中にて、一向關係なき事なり。

直道　まだその上に浪之助を毒を以て七藏が、害せしなどと申す事は更に跡方なき事にて、そちが飮ま

せし毒藥に、めんけんなして死したる由、然も其頃兩人に家を貸したる人宿清五郎が申し立にて
毒に觸れて浪之助が、死去せし事慥かなるぞ。

白明　かゝる確證ある上は、去年以來其方が、申し立ては事毎に皆僞りであらうがな。

お傳　サア、それは。

直道　但しその方にも確證あらば、一々是れにて申し立てよ。

お傳　サア、それは。

白明　僞りに相違あるまい。

お傳　サア。

直道　申し開きがあるか。

お傳　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

直道　返答あらば、

二人　とく〳〵申せ。（トきつと云ふ、お傳當惑の思入、柵埒の下に居て、胸を押へ。）

お傳　アイタヽヽ。（ト左右に控へし兩人是れを見て、）

丹作　コリヤ傳、

健三　如何いたした。

お傳　あまり嚴しい御詮議で、又さし込んで參りました。暫くお待ち下さりませ。（ト胸を押へ涙ぐみ、）義理ある姉へ孝行こなしあつて。）今更云うて返らねど、親を捨て家出した、天の罰を蒙つてか、義理ある姉へ孝行に敵を討つたも僞りと、お掛り樣が思ふ故、アレも嘘是も嘘と、まことの事を申してもお取上けの無いといふは、あまりと云へばお情ない、如何に落目になればとて、誰一人誠だと云つてくれての無いといふは、思へば〳〵悔しい、悔しいわいなア。

ト身を震はしてこなし、直道、白明顏見合せうなづいて、兩人は正面ガラス障子の内へはひろ。跡仕掛物新發明のガラス障子の音する。是れを見て健三、丹作はお傳の左右へ立寄り、屈みて邊りへ思入、

（但し此の障子鳴物は、三代目寶田山左衞門新發明なり。）

丹作　コレお傳、今お掛り樣が御用があつて、お席をお立ちなされたは、丁度幸ひな折柄だ、お前に云つて聞かせる事がある。去年の秋から二年越し上手に嘘をつくけれど、所詮おめえの云條は立たぬと云ふは、モウそれ〳〵へお手が廻つて委しいお調べ、種はすつかり上つて居るから、强情云ふは無駄なことだ。永く御上へ御苦勞掛けず、又引合の人達も、助けてやるがお前の爲めだ。

健三　是が以前の奉行所なら毎日お前を箱に掛け、石を抱せて身皮が破れる程拷問して云はせずには置かねえが、御維新から此方は、一年増しに御法が變り、死罪も終身懲役と、なるたけ命を取らぬやうと、開明の世の有難さ、如何に痛い目をしないといつて、出る度毎に口が變り、引合を多くするのは、お前の體へ段々に罪に罪を重ねるばかりだ。

丹作　察する所おめえの氣では、白狀せねばいつまでも、罪に落ちねえつもりだらうが、そりやア今も相棠が言つた石を抱して云はせる時分、たゞ和らかに問ふばかりで、拷問しねえ替りには、いくらお前が僞つてもきつとした證據があれば、白狀せずとも御所刑になる證據裁判。

健三　證據が上つて人殺しとお認めが附いた上は、脫れる事は出來ねえから、包み隱さず申上げ、永くお上へ御苦勞かけず、又引合の人達の、辨當代や車賃をお前がすければ、そこは女の一德だ、思ひがけなく寬典の、御慈悲があるまいものでもねえ。

丹作　お前も生れが上州だけ、膽が据つていゝ肚胸、とても事に叶はぬと先が見えたら少しも早く、

健三　其身の悪事を申し上げ、引合に付く人達を、早く助けてあと〳〵へ、お傳といふ名を殘しねえ。

丹作　男まさりのお前だから、未練な者だと云はれぬやう、

健三　包み隱さずお掛りへ、

丹作　きれいに云つて、

二人　しまひなせえ。

ト兩人よろしく、此の以前より下手の床几を健三引出し、是に三人腰をかけ、こなしあつて欺しすかす、お傳胸を押へうつ向き、

お傳　お二人とも御親切に昔と違ふ御所刑を、よく諭して下さいました。此の身に覺えのある事ならお前方の詞に付き、お掛り樣へ申し上げますが、元より覺えのない事故引合に附く人達には、長年掛つて氣の毒だが、是から先へ何年たつても、知らぬ事は云はれない。

トすつぱり云ふ。兩人床几にて顏を見合せ、呆れし思入。

丹作　それぢやア是れ程譯を云つても、

健三　お前は白狀しねえ氣か。

お傳　いくら云へと云ひなすつても、覺えがなければ云はれませぬ。

丹作　見掛けはやさしい女だが、

健三　上州者は、

二人　强情だなあ。

ト兩人呆れし思入、合方きつぱりとなり、正面より以前の直道、白明出來り、椅子に掛り、

直道　コリヤ傳、苦痛はよいか。

お傳　ハイ、少しはよろしうござりまする。

直道　よろしくば答へをせよ。（ト胸を押へ、正面へこなしあつて、）

お傳　答へをせよとおつしやりましても、何のお答へでござりましたか、さつぱりと忘れました。

トとぼけるこなし。

丹作　さつき是れにてお調べありし、室瀨何某が落し胤、姉と僞るお種が死去、親の記念と申せし短刀。

健三　又佐藤七藏が姉の敵ならざる事、一々確證あつてのお調べ、そのお答へを致すのだ。

お傳　病の爲めに記憶惡しく、何事も忘れますれば、篤と證據を考へまして、後して申し上げませう。

直道　然らば篤と考へて、その證據を申し上げよ。

お傳　ハッ、畏りましてござりまする。

直道　又改めて其方に尋ね問ふは七藏を、殺害せしは其方が、かねて所持なす短刀で、咽のくさりを切つたであらうな。

お傳　病の爲めに私は物忘れを致しますが、お掛り樣も御不快にてお物忘れをなされまするか。七藏事

は短刀で我手に咽喉を切つたる事、數度申し上げましたが、あなたはお忘れなされましたか。

　　ト柵垺へぢつと寄掛り、なじる如くにこなしある。

直道　ヲヽ短刀持つて切つたる事、數度其方申せども、僞り故に取らざるぞ。

白明　又剃刀を以て殺害せしは、慥かな證據あつての事だぞ。

お傳　その證據とおつしやりますは。

白明　大瀧三次郎、小宮秀太郎、兩人を呼び出せ。

健三　ハツ。（ト上手へ行き立掛り、）淺草片町大瀧三次郎、新富町三丁目小宮秀太郎。（ト此時上手にて、）

兩人　ハア。（ト大瀧三次郎、剃刀研小宮秀太郎出來り、柵垺の前にて辭儀する。健三世話をやきて並よく柵垺へ立たせる。）

白明　コリヤ三次郎、昨年其方宅に於て七藏死骸檢査の折、醫員水野良齋が剃刀を以て殺害せしに相違あらざる趣きの、檢察書を差出せしが、其方も立合ひ存じ居らうな。

三次　ヘイよく存じて居りまする。御立合なされましたは警視病院のお醫者にて、水野良齋樣と申す方、とくと疵所を御覧なされ、正しく薄き刃物にて切つたる疵と認むれば、女の事故剃刀に相違ないとおつしやいました。

お傳　それはお醫者のお目違ひ、あの夜七藏は私を手籠めになさんと脅しの爲め、隱し持ちたる短刀にて突かうとせしを止めるはずみ、我手に切つたる咽喉のくさり。

三次　イヤ〳〵それはこなたが嘘だ。斯ういふ事があるはしか、蚤にせゝられあの晩は夜通し寢ずにしまつたが、短刀を持つて爭へば物音が下へ聞える筈、何の音も致さねば酒に醉つたをぐつさりと。咽喉のくさりを剃刀で、切つたに違ひござりませぬ。

お傳　何を聞いたか二階と下、知りもしないで證據立、入らざる口を利きなさんな。

三次　ヲヽ利かなくつてどうするものだ。おのれ故に生業が出來ぬ様になつたから、一日も早く罪に落し、命を取らねば腹がいぬわえ。

お傳　いくらお前が悔しがつても、こつちに殺した覺えが無ければお氣の毒だが此の首は、百年立つても落ちやあしないよ。

三次　えゝ、お上がなければ知らぬ事、お手が廻つてお調べがかう嚴重になるからは、百年はおろか一年も、もうその首は持たねえぞ。

健三　コリヤ〳〵控へろ〳〵。われ達が論をする所ぢやねえわえ。

三次　ハツ。（ト三次郎を引退け、下手の腰掛へ腰をかけさせる。白明思入あつて、）

白明　コリお傳、檢視の砌り立會ひし醫員がしかと剃刀で、切つたる疵と認めしとの事、其方所持なじ居たらうな。
お傳　イヱ、其折剃刀は、所持は致しませぬ。
直道　イヤ所持せぬとは申させぬぞ。先頃鹿倉多七郎がその日其方に剃刀を、貸したると申せしぞ。
お傳　あゝそれ〳〵、成程其日は顏を剃るので、ちよつと借りましてござりまするが、直ぐに返しましてござりまする。
直道　直ぐに返せしと申せども、翌日是なる秀太郎へ研を賴みし剃刀に、鹿倉と彫附けあるが、いづれより持參せしぞ。
お傳　サア、それは。
直道　前夜七藏を殺し、骨へ切りかけこぼれし刃を、直しくれと賴みしならん。
お傳　イヽヱ秀太郎へ剃刀を、賴みし覺えはござりません。（ト小宮秀太郎お傳の傍へ來て、）
秀太　チイ〳〵〳〵、これさお傳さん、常談を云つちやあいけないよ、何ない事があるものか、幾らでも代を出すから、こぼれた刃を直してくれと、お前私に賴んだらう。
お傳　いゝえ〳〵私は賴みはしないよ。お前も病氣か知らないが、物忘れをする人だねえ。

秀太　ナニ物忘れをするものかね。剃刀の刃に何となく油が乘つて居るのを見て、私が其時咎めたら、
お前びつくりしなすつたらう。

お傳　何の遺恨でお前は私に、そんな云ひがけをしなさるのだ。

秀太　エヽ誰が云ひがけをするものか、お前が頼んだぢやないか。

お傳　そりや何處で。

秀太　それ、築地の逢引橋で。

お傳　イヽエ、知らない。

秀太　それ、八月二十六日の朝、河岸端で。

お傳　イヽエ、知らない。

秀太　いゝ、しらを切るが、頼んだよ。

お傳　知らないよ。

秀太　頼んだよ。（ト兩人たゝみかけて爭ふ、健三見て）

健三　ヤイ、兩人控へろ。（ト大きく叱りつける。）

秀太　ヘイ――。

健三　こちらへ下れ。（ト健三秀太郎の手を取り、下手床几へ掛けさせる。）
直道　秀太郎爭ふには及ばぬぞ。其方が僞りならぬは、上の目で見て居るぞ。
秀太　有難うございます。
三次　誠に呆れ返りました。
直道　コリャ傳、其方存ぜぬと申せども、既に剃刀の持主鹿倉多七郎、又研師小宮秀太郎、斯く證據人に立つ者あるに、存ぜぬといふは、其方にも證據に立つ者あるか。
お傳　サア、それは。
直道　證據人はないか。
お傳　サア。（ト詰る、直道きつとなつて）
直道　コレ傳、よく承れ、先達てより其方が申立つる條件は皆僞りと存ぜし故、既に熊谷裁判所にて、國許穿鑿致せし所、全く下牧村の農玉橋勘右衛門が實子にして、同家九右衛門が養女となり、大助が悴浪之助を聟に取りしに疑ひなく、舊沼田藩にて家令たる室瀨が落胤などゝいふは、是全く其方が僞りにて、父勘右衛門同家の者より素性書をさし出せしぞ。
白明　室瀨が落胤などゝいふは、全く違法の策にして、僞りなる事判然たれども、但し落胤なりと申す

には、何ぞ慥な證據あるか。

お傳　何も證據はござりませぬ。

直道　然らば僞りと是を見做すぞ。

お傳　ハッ。

直道　又其方が姉と僞る種は全く病死なる事、醫師差配人の届書にて、變死ならざる事慥なり。七藏が竊に殺害なし種が變死の趣きを書狀を以て告越したる隣家須藤東次郎は、其砌りは旅行中にて更に關係なき事なれば、他に賴んで書かせたる僞證なる事判明、且つ七藏を殺害なし所持の金圓を盜み取り、其賊名を隱さん爲め、敵討と名を附けしは、汝が策に疑ひなし。

白明　是にも外に證據あらば、一々是にて申達せよ。證據なければ前條は、皆僞りと見做すぞ。

お傳　只今申し上げます通り、病氣によつて何事も、物忘れ致しますれば、僞りなりとおつしやつても致し方がござりませぬ。

直道　短刀を以て七藏が自殺せしと申せども、其方宿所へ持歸りしその短刀のあらざれば、是れとても證にならざるぞ。

お傳　證にならぬとおつしやれば、是れも致し方がござりませぬ。

白明　其方存ぜざると申せども、剃刀を以て殺害せしは、檢視に立合ふ醫員の證書、又是なる三次郎秀太郎の申立、斯く確證のある上は、存ぜざるとは申させぬぞ。

お傳　申させぬとはお掛り樣、そりや情なうござります。存ぜぬ事は何處までも、申し上げねばなりませぬ。

直道　何やう其方申し張るとも室瀨が落胤種が横死、又浪之助が毒殺、須藤が手紙、七藏謀殺の一件數ケ條の內一つとして實事なければ、其方が申立は立たざるぞ。前條詰問致せし內申開きの廉あらば、只今是にて返答致せ。

お傳　サア、それは。

白明　申開きはあらざるか。

お傳　サア。

直道　證據を申すか。

お傳　サア。

白明　罪に伏すか。

お傳　サア。

二人　サア。

三人　サア〳〵〳〵。

直道　申開きはあらざるか。（ト双方よりきつと云ふ、お傳胸を押へてぢつと下に居る。）

お傳　アイタ、アイタヽヽ、女子の心狭く左様に仰せられますと、怖うて〳〵なりませぬ。體が震へて胸へさし込み、何のお答へも出來ませぬ、アイタヽヽ。

ト胸を押へ苦しむ思入、丹作健三立掛り介抱する。直道白明憎い奴といふ思入、三次郎こらへ兼ね、

三次　ヱヽ人を殺す料簡で、體が震へて云はれぬとは、よくもあんな事が云はれたものだ。

直道　コリヤ傳。證據がなければ其方が、申條は一つも立たぬ。皆僞りと見做すぞよ。

お傳　どうとも勝手になされませ。（トふて〳〵しく、世話にこなし）

三次　てもふて〳〵しい。

二人　女だなア。（ト此の時局の大時計の三時鳴る。）

直道　最早三時の時計を打てば、裁判も是れまでなり。

白明　病氣とある故今日は、此のまゝに下げ遣はす。明日出て返答致せ。

お傳　畏りましてござりまする。（ト辭儀をする。）

丹作　最早三時の引けなれば、
健三　お前方は少しも早く、
三次
秀太　引取りまするでござりまする。(ト辭儀して下の床几を立上る。)
お傳　ドレ私も一緒に引取りませう。(ト立上りツカ〳〵と上手へ歩み行くを、)
直道　コリヤ、傳待て。
お傳　ハツ。(ト振返る、直道思入あつて、)
直道　其方快いか。
お傳　ムヽ。(トハツとして下に居て、)アイタヽヽヽ。(ト上手にて空々しく胸を押へ、下に居る。)
白明　テモ巧みなる。
お傳　エヽ。(ト直道、白明顔を見合せるを、木の頭。)
直道　事ぢやなア。

ト　お傳はにつたり思入。皆々引張りよろしく、時の太鼓にて

ひやうし　幕

幕引附けると、通い神樂にて引返す。

（本吟味所の場）――本舞臺五間通し高二重、ペンキ塗りの蹴込み、此の前一面に高き棚埒、二重の正面一面ガラス障子立てあり、唐扉上下にあり、是れへ唐花の絨氈を敷き詰め、眞中に紋唐草の萌黄の羅紗を掛けてある臺二つ並べ置き、上下はペンキ塗りの高き板塀、もつとも上に唐模様の開き戸あり、すべて本吟味所の體、ラツパ入りの鳴物にて幕明く。と此處に以前の健三、丹作、外に見査二人、洋服なりにて立掛り居る。

丹作 明くれば今年で三年越し、明治十年の八月から、永々御上へ御苦勞掛けた下牧村の高橋でんも、今日證據裁判で、人殺しの御處刑極り、一件殘らず落着だ。

健三 田川吉太郎を初めとして、旅籠屋の大瀧研師の小宮、又は新富町の鹿倉樣が永い間の引合も、今日みんな御免になるので、腰掛へ來て悅んで居たが、吉太郎ばかりは女房故一人案じて居たやうだつた。

見一 上州産れと云ひながら、なか／＼膽の据つた女、よくも是まであの樣に、形のない事を云張つて、其身は宰瀨の落胤で、佐藤七藏を殺したは、姉の敵を打つたのだなぞと。

見二 噓で固めた事を云うて、出る度毎に虚病をつかひ、あのゝものゝと云抜けたが、出る引合の人達から追々慥な證據が上り、

丹作　全く金を取らうばかりに、色仕掛で七藏を、殺した事と極つたので今日御所刑になるのだが、太い奴だが女だけ、今檻倉で話すを聞けば、大方今日は懲役だらう、まさか終身でもあるめえが、十年位になる積りだ。

健三　まだ／＼あいつは此の外に、どんな惡事があるか知れぬっ たゞ一廉で御所刑になるのは當時の有難さだ。

見一　昔であつたら石を抱され、あらひざらひ白狀した擧句が江戸中引廻し。

見二　果は千住で板附に親の顏より我首へ、泥を塗られて晒されるのだが、そんな御仕置のないのは仕合せ。

丹作　是まで度々の調べ中、よく空涙をこぼしたが、

健三　今日申渡しを聞せたら、眞の涙が出るだらう。

ト此の時上手硝子の扉の開く音する。是れにて見査一、二、上手へ控へる。二重の開きより民尾諭洋服半靴にて宣告書を持ち出て、上の見臺の前へおく。下の硝子戸音して此の内より、深井惠洋服半靴の拵へにて出て、下の見臺の前へ、椅子に腰をかけ、下手の丹作、健三等四人辭儀をする。

丹作　高橋傳儀、今日御所刑に相成る由、

健三　數月の御職勞、お察し申しまする。

諭　一昨年八月以來數度詰問致せしかど、なか／＼奸智に長けたる者にて、其時々種々に虚談を申し、一として實を申さず遂に白狀致さねども、佐藤七藏を害せし事は現狀確證を得たる故、即ち證據裁判にて、今日所刑仕る。

惠　然らば是にて宣告書を、傍聽致すでござる。

諭　ソレ、高橋傳を呼び出せ。

二人　ハツ。（ト見査二人上の板戸の内へはひる。）

丹作　高橋傳、出ませい。

ト上手へこなし、是にて上の板戸の開く音して、お傳つむぎ縞茶のふくさ帶にて、本繩に掛り自分持にて出て來る。是を見査二人左右より手を取り、正面椽の前へ立たせ左右へ控へる。諭書物を開き、

諭　申渡し、群馬縣上野國利根郡、下牧村四十四番地平民九右衛門養女高橋傳。

お傳　ハツ。

諭　其方儀佐藤七藏の死は自死にて己の所爲にあらざる旨申立つると雖も、第一七藏を殺害なし云々

の書置、及び當初警視令署、並に明治十年八月十日糺問判事に於ての口供。第二醫員の診斷書、第三小室筆太郎の申述、第四旅籠店大瀧三次郎等の申述、第五鹿倉佐七郎の申述、此の衆證に依れば、自殺に非ざる事明白なりとす。然して室瀨某の落胤或は異母の姉の復讐なりと云ひ、又は姉在世の景況及び須藤東四郎等を證據人と云ふも、何等認むべき徵憑なし、是れ畢竟するに名を復讐に托し自ら賊名を匿さん爲めに出る遁辭なるものとす。此の申立を覩れば徒に艶情を以て七藏を欺き、賊を計るも遂に能はざるより豫め殺意を起し、剃刀を以て殺害し、財を得しものと認定す。

見査　下れ。(ト手を取て引立てるを、振拂ひ)

お傳　それぢやあ私は、斬罪でござりまするか。

丹作　お受けしたら下れ〳〵。

お傳　まだ私は御役人樣へ、申上げ度い事がござります。

健三　申す事があるなら、下つて申せ。

皆々　下れ〳〵。

ト見査二人もがくお傳を無理に引立て〳〵、上手の以前の開きの内へ押しやりはひろ。諭跡を見送り、

諭　強悪なれども流石は女、此の期に及び又候や。

惠　如何なる事を申す心か。

諭　さて／＼未練な、

兩人　奴でござる。（ト兩人笑ふな、道具替りの知せ、）

健三　田川吉太郎、大瀧三次郎。（ト上手へ呼び立てる。ラッパの音にて、此の仕組よろしく道具廻る。）

（獄牢口の場）——本舞臺上下植込、眞中下寄り獄牢口、塗家を見せ、敷石、腰さいの打違ひ小さき羽目、下まで續き、上は煉瓦造り、塗家に窓ある張物、松の釣枝、好みの道具、ラッパの音にて納まる。と此處に以前の勘右衛門、八十八屈み居る。獄丁洋服靴にて立掛り居る、調練の鳴物にて、

獄一　コレ、お前方はさつきから、

獄二　何を待つて居なさるのだ。

八十　今日お呼出しになりました、お傳を待つて居りまする。

獄一　さう云へばお前方は、去年の暮に逢ひに來た、

獄二　お傳の親御に身寄の衆。

勘右　ハイ左樣にござりまする。惡い娘を持ちまして、名乘りまするも親の身で、面目なうござりまする。

獄一　永らくの間掛つたが、今日は一件殘らず落着。

獄二　申渡しが濟みさへすれば、直ぐに此處へ歸つて來ます。

勘右　なんの御所刑になりましたか、御存じはござりませぬか。

獄一　かうして中には居るけれど、

獄二　お上の事は知れませぬ。

八十　どうか終身懲役にでも、なつてくれゝば嬉しいが、

勘右　少しく早く娘に逢ひ、今日の樣子を聞き度いものだ。

獄一　もうお白洲から來ようから、

獄二　此處に待つてゐて、聞いて行きなせえ。

ト獄丁二人下手へはひる。下獄口の戸明いて、以前のお傳、本繩小手をゆるめ、獄丁二人繩を取り引立て出來り、羽目板の外へ突倒し、兩人は元の獄口へはひる。お傳うつぶせになる、勘右衞門見て、

勘右　お傳か。

お傳　お前はとゝさん。（ト顔を見て、うつ向く。）
八十　お傳殿、待つて居ました〳〵。
勘右　シテ、申渡しは、
兩人　どうであつたな。
　　ト　お傳顏を上げ、勘右衞門の手を取り、ぢつとなり涙ぐみ、
お傳　再ひ娑婆へ出る心で、お前の異見も用ひなんだが、今日證據裁判にて、斬罪の刑を受けました。
勘右　エヽ、それではそちは斬罪か、ハア――。
　　トがつかりなせしこなし、どうと下にゐて涙を落す。八十八分らぬこなしにて。
八十　モシ、斬罪とは、何の事でござります。
獄三　ヲヽ、斬罪の刑といふは、
獄四　以前で云へば、打首だ。
八十　そりやァ恐しい事だなア。（ト是もどうとなる、お傳下にゐてぢつと思入、誂への合方になり。）
お傳　今更返らぬ事ながら、惡い事は出來ませぬもの。金がほしさに科もない、七藏殿を殺したも、露顯をすれば斬罪の御所刑受けねばならぬ故、姉の敵と僞つて助かる心で居りましたも、追々お上

へ證據が上り我が惡計とお認め附き、今日證據裁判にて斬罪の刑受けたるは、是れまで永々御上を僞り御苦勞掛けしと二つには、三年此方多くの人に難儀を掛けし其報いで、天の御罰を蒙るお傳、コリヤ斯う無うてはなりませぬ。思へば人の邪正を糺すお上を欺き脱れようと、思ひましたは女の淺はか、濟まぬ事を致しました。そればかりか大恩ある、親が世間へ顏向けのならぬやうに致せし不孝、嘸や憎うござりませうが、是も前世の因緣と、どうぞ許して下さりませ。

ト手を合せ愁ひのこなし。

勘右　それではそちは御所刑受け、惡い事を致せしと、惡心發起なしたるか。

お傳　今日といふ今日惡い事の、ならぬ道理を知りました。

勘右　三年跡に其心が附いたなら、こんな事にもなるまいが、實の所今日までも親に面皮をかゝせたる憎い奴だと思つて居たが、かう改心をして見ると、親子といへば面ざしも、似たその首を切られるを、親の身として嬉しからうか、推量してくれいやい。（ト勘右衞門手拭を顏へ當て泣く。）

八十　尤もだ〳〵。

お傳　父さん、お前にさう云はれると、早く切られて死に度うござんす。

トお傳も泣く、此の時上手より田川吉太郎、縞の着流し、平ぐけ、草履にて出來り、

田川　おでん、此處に居たか。
お傳　ヲヽ吉さんか、よく逢ひに來ておくれだね。
田川　俺も逢ひ度く、申渡しを聞くとそのまゝ、飛んで來たのだ。
お傳　さうしてお前の、御所刑は。
田川　お上の御慈悲で俺を始め、世話になつた鹿倉さんから、引合一同お構ひなしだ。
お傳　それぢやァお前は科もなく、構ひなしになつたのか。
田川　是といふのも最初から、俺をかばつてくれたから、兇狀着ぬもお前のおかげだ。
勘右　扨はお前は噂に聞いた、
田川　お目に掛るも面目ないが、お傳が亭主の吉太郎。
勘右　かういふ事でないならば、聟よ舅と云はうもの。
田川　云ふに云はれぬ、はかない緣。
勘右　とは云へ斯うして名乘り合ひ、
八十　お傳殿は嬉しうござらう。（トお傳は吉太郎へ愁ひのこなし）
お傳　所詮此の世で逢はれぬと思つた在所の父さんと、吉さんお前に逢へたので、是で心殘りはない。

田川　云ひ置く事でもあるならば、親より遠慮の無いが夫婦、俺に何でもいふがいゝ。
お傳　別に云ひ置く事は無けれど、私の樣な惡婆でも、一旦夫婦になつたからは、思ひ出した事があつたら、念佛でも唱へておくれ。外の人の千遍よりお前に一遍云はれるのが、私や嬉しう思ひまする。
田川　そりや云ふにやア及ばねえ。俺が此の世にある內は、墓場へ花は絶やしやあしねえ。
お傳　お前にさうして弔はれゝば、心殘さず死にまする。（トお傳泣き乍らうつ向く、吉太郎起し。）
田川　コレお傳。
お傳　吉さん。
田川　是が顏の見納めなるか。
　　　ト兩人手を取り交し、別れを惜しむ思入、勘右衞門是れを見て愁ひのこなし。
勘右　見るも不便な事だなア。
八十　ハア。（ト聲を上げて泣く。）
獄三　サア、時刻が延びては、お上へ恐れ。
獄四　何時まで言つても、名殘りは盡きぬ。サア〳〵早く、

二人　立つしやい。
諭　コリヤ見査、暫らく。
兩人　はッ。（ト誂への合方になり、上手より以前の諭出來り）
諭　コリヤ傳、最前そちに宣告書を讀み聞かせしその時に、申し上げ度き事ありと、云ひしは如何なる事なるぞ。
お傳　最早此期に及びましては、何も申上げる事はござりませぬ。
諭　しかと左樣か。
お傳　只今申し上げ度いは、是まで我身の罪を隱し、永々御苦勞掛けました、お詫びを申し上げまする。
ト手を突き詫びる。
諭　如何なる惡逆無道の者も、性は必ず善にして、今日死刑の時に至り、その本善に立返りしは、惡逆中の譽なるぞ。
お傳　有難うござります。（ト諭襟に掛けし時計を見て）
諭　最早正午に程近し、是より直ぐに、
兩人　囚獄所へ。（トお傳立上り、こなし）

お傳　罪科も深き三途の川越して、劍の山の身をやさかれん。
勘右　そんなら是が、
八十　此世の別れ。
お傳

ト　お傳眞中上手に、諭下手に、吉太郎、勘右衞門、八十八獄丁と入替る、此時本鐵砲の音するを、木の頭。

諭　十二時なるか。

ト　諭時計の龍頭を卷く。双方引張り、賑かに、調練の鳴物にて、

幕

高橋お傳（終り）

（附錄）主なる興行年表

有馬の猫

年時	座名	名題 ＼ 役割	小野川	雷電	お巻	お仲	重左衛門	伊場	操の前	おしが
明治十三年五月	猿若座	有松染相撲浴衣（ありまつぞめすまふのゆかた）	片岡我童	坂東家橘	岩井半四郎	片岡我當	片岡我童	中村宗十郎	岩井紫若	岩井松之助
明治二十三年二月	千歳座	櫓競芝雨國（やぐらくらべしばとりやうごく）	澤村訥子	市川照藏	澤村田之助	市川鬼丸	澤村訥子	市川鬼丸	澤村染之助	澤村由次郎
明治三十年一月	眞砂座	櫓競芝雨國（やぐらくらべしばとりやうごく）	尾上幸藏	大谷馬十	市村家橘	市川鬼丸	尾上幸藏	市村家橘	瀬川路之助	坂東左門

膝栗毛

年時	座名	名題 ＼ 役割	彌次郎兵衛	喜多八	おつん	紀の作	おくろ	瞽女

文久三年八月	市村座	竹比春虎渓三笑	市川團藏	市川小團次	市村家橘	澤村訥升	片岡十藏	尾上菊次郎
明治十九年二月	市村座	膝栗毛道中日記	中村芝翫	片岡我童	中村福助	關三十郎	中村鶴藏	河原崎國太郎

秩父重保身替り

年時	座名	名題╲役割	實盛	重能	榛澤	菅谷	有國
明治十二年十月	新富座	二張弓千種重藤	市川團十郎	中村宗十郎	市川小團次	岩井小紫	市川團右衛門
明治十三年二月	歌舞伎座	弓始春重藤	市川團十郎	市川八百藏	市川猿藏	市川女寅	片岡市藏

柱建の曾我

年時	座名	名題╲役割	祐經	朝比奈	梶原
明治二十三年三月	相座	一﨟職狩場棟上	中村芝翫	市川左團次	尾上菊五郎
明治四十五年一月	歌舞伎座	奴凧會我礎	片岡仁左衛門	市川猿之助	市川段四郎

『柿泥坊』『湯場の對面』『高橋お傳』等には再演なし。

大正十五年十一月二十三日印刷
大正十五年十一月二十六日發行

「默阿彌全集第二十四卷」

非賣品

補修　河竹糸女

校訂
編纂者　河竹繁俊

發行者　東京市日本橋區通四丁目五番地　和田利彦

印刷者　東京市小石川區諏訪町五十六番地　堀江關武

印刷所　東京市小石川區諏訪町五十六番地　常磐印刷所

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地　春陽堂



